

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡

主要地方道前橋長瀬線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



矢場三ツ橋Ⅱ遺跡

主要地方道前橋長瀬線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一二年

群馬県藤岡土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

2012

群馬県藤岡土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡

主要地方道前橋長瀨線地方特定道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県藤岡土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

県道13号前橋長瀬線は、群馬県前橋市から高崎市、藤岡市を經由して埼玉県長瀬町にいたる主要地方道です。前橋長瀬線の現道は、県庁所在地である前橋市街地の石倉町を起点として、群馬県南部の田園地帯をとおり、烏川や神流川を渡って埼玉県境に至ります。

群馬県では高規格道路を中心とした高速交通ネットワークを最大限に生かした道路整備を行い、中山間地域と都市間の地域連携の強化を図るなどとした、群馬県広域道路網基本計画により道路建設事業が推進されています。

前橋長瀬線は主要地方道路として交通量が大変に多く、各地で交通渋滞を招いていました。これを解消するため前橋市六供町からバイパスが整備され、県南部の藤岡市街地でも前橋長瀬線のバイパスが整備されています。

バイパスは、これまでに国道17号線から上信越自動車道藤岡インターチェンジ、国道254線までの区間で4車線の道路整備を行い、昭和62年度に供用が開始されました。平成12年度からバイパスの二期工事が開始され、平成20年度から平成24年度はさらに国道254線以南の藤岡市南部の地域でバイパスの建設が進められています。

前橋長瀬線のバイパスが通過する藤岡市南部は、古墳文化の中心地の一角であり、その後に古代の緑野郡として発展した場所です。また中世には高山御厨が置かれ、関東管領上杉氏が居城とした平井城などが所在する歴史的な地域でもあります。道路建設が進められる事業予定地は、群馬県教育委員会による試掘調査や調整の結果、工事に先立って埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることになりました。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡は、バイパス建設に伴って平成22年度に発掘調査を行い、古墳時代から平安時代にいたる竪穴住居が多数検出されました。また鎌倉時代から室町時代の溝からは中国陶磁器の白磁碗が出土し、県内では貴重な資料となりました。平成23年度には整理事業を実施し発掘調査で得られた遺跡の記録を、埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行いたします。

発掘調査から調査報告書の刊行にいたるまで、群馬県県土整備局、西部県民局藤岡土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、藤岡市教育委員会文化財保護課をはじめ関係各位の皆様には多大なご高配とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表しますとともに、本調査報告書が群馬県の歴史理解を深め、豊かな社会と未来を指向するための一助として広く活用されることを願い、序といたします。

平成24年3月





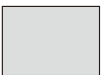
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 栄 一

例言

1. 本書は、平成21年度主要地方道前橋長瀨線単独地方特定道路整備事業により実施した矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査を平成23年度地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財の整理委託によってまとめた埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 矢場三ツ橋Ⅱ遺跡は、群馬県藤岡市矢場121、122、191、192、194、195-1、196-1、197-1、198-1、198-4、203、204-1、205-1番地に所在する。
3. 事業主体は、群馬県西部県民局藤岡土木事務所である。
4. 調査主体は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 調査期間は、平成22年4月1日～平成22年8月31日である。調査面積は、4330㎡である。
6. 調査体制は、発掘調査担当が友廣哲也上席専門員、矢口裕之専門員(総括)である。委託は、遺跡掘削工事が有限会社毛野考古学研究所、地上測量が株式会社測研である。
7. 整理事業の期間と体制は以下のとおりである。
整理期間は平成23年7月1日～平成24年3月31日である。整理担当は神谷佳明上席専門員である。
8. 本書作成の担当者は以下のとおりである。
本文執筆は矢口裕之専門員(総括)である。デジタル編集は齋田智彦主任調査研究員、遺構写真は友廣哲也上席専門員、矢口裕之専門員(総括)、遺物写真は佐藤元彦補佐(総括)である。
遺物観察、観察表執筆は縄文～弥生時代の土器が橋本淳主任調査研究員、石製品が岩崎泰一上席専門員、古墳～平安時代の土器や鉄製品が神谷佳明上席専門員、中世以降の土器、陶磁器が大西雅広上席専門員、保存処理が関邦一補佐である。
9. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、藤岡市教育委員会文化財保護課のご指導とご助言を得た。また、発掘調査及び整理事業では藤岡市教育委員会の古郡正志、丸山治雄、軽部達也、針谷友規の各氏から、出土した中世遺物について高崎市教育委員会の清水豊、秋本太郎の各氏からご助言をいただいた。
10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡例

1. 本書で使用した方位は、総て国家座標(座標第Ⅸ系)を用いた。調査区は、X=24780～24640、Y=-70313～-70227の範囲に収まり、真北方位角は+0° 27' 42"である。
2. 遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
3. 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。
4. 本書で使用した図のトーンは以下のことを表している。

遺物	釉		スス		黒色		漆		粘土		摩滅	
	燻		断面									
遺構	灰		焼土		粘土		被熱		カクラン			

5. 遺構や遺物の記述にあたっては以下の点に留意して記述した。

本書で使用する用語は、原則として文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査のてびき』同成社発行に準拠して使用するが、群馬県内で従前から使用されてきた「竪穴住居」（竪穴建物）や「周溝」（壁際溝）はこれを使用する。また、遺跡で記載された堆積物の層名称については、ステノが1667年に使用したstrataの訳語である「地層」（土層）を使用する。時代区分の名称は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発行『第3収蔵庫収蔵展示室展示解説・時代が変わる 道具も変わる』に準拠して使用した。

竪穴住居の位置は遺構が含まれる座標と座標北を記載した。遺構平面図に表した座標点は二段で略記し、X軸・Y軸の座標値の下3桁を示した。主軸方位は掘立柱建物の場合は桁行の方向を竪穴住居の場合はカマドのある壁の直交方向、カマドを伴わない竪穴住居は北側の住居辺の方向を求めた。

遺構が重複する場合は検出平面の切り合いに基づく新旧関係を判断し、必要に応じて断面で層序関係を確認して発掘した。発掘資料をもとに出土遺物の新旧を検証手段として遺構の新旧関係を記述した。遺構の形状は、正方形、長方形、隅が丸い方形(正方形の角が丸いもの)、隅が丸い長方形(長方形の角が丸いもの)に分類して記述した。

遺構の規模は、遺構検出面の大きさを計測し、推定により復原したものは計測値に+を付して記載した。なお、カマドが存在する竪穴住居の面積は、住居外のカマド部分は含まれない。面積は床面の面積をプランメーターで計測した。方位は遺構の壁などの走向を座標北から東西への傾きとして計測した。床面の状況は凹凸の有無、硬化した面の有無などを記述した。

遺構の埋土は、層序や層相を記述し、比較的土壌化の進んだ堆積物はシルト質土などの用語を、土壌化が弱く堆積物の特徴を残す地層についてはウェントワースの方法により層相を記載した。遺構内のカマドは位置や規模を記載し、遺構の保存状態を記述した。遺構内に見られる周溝、柱穴、貯蔵穴は位置や規模、残存状態について記述した。柱穴の規模は長径・短径・深さを記載した。

遺構から出土した遺物は、遺構内の遺物の出土状態と特徴的な遺物について記述した。遺構の時代は、出土した遺物や遺構の層序関係から推定した。遺物の器種名の杯や椀は「木偏」を使用した。

カマドから出土した甕などの土器は、出土状態によってその性格を推定した。これは甕の表面や中にカマド構築材の粘土質堆積物が含まれるものをカマド構築材。形を留め埋土で満たされたものをカマド上部から移動して埋没したもの、完形の土器が内部に埋土を含まず、つぶされたものは堆積した時点で中空を保つ土器であったと推定した。磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示した。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。

6. 報告書で使用する火山砕屑物の鍵層は、通常はテフラ名を使用し、地層の記載では略称も使用した。略称の標記は次のとおりである。As-B（浅間Bテフラ）、As-D（浅間Dテフラ）、As-YP（浅間板鼻黄色テフラ）なお、テフラの命名や年代に関しては矢口(2011)「関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新統に関わる諸問題」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要29号を参照されたい。
7. 報告書で使用した地形図は、国土地理院発行1/25000「藤岡」図幅(平成5年4月1日発行)や藤岡市発行の1/2500都市計画区域図などであり、図の使用に際しては使用許可を得て出典を明示している。
8. 遺構の推定年代は、出土遺物の相対年代によって推定されたものについて「○世紀第○四半期」の範囲で示し、例えば、8世紀第3四半期とみられる場合には、「8 C III」、8世紀第3～第4四半期であれば「8世紀後半」と表記した。

目次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と事業の経過

- 1. 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2. 発掘調査及び整理作業の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- 3. 発掘調査と整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第2章 遺跡の地理的、歴史的環境

- 1. 遺跡の自然環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- 2. 発掘地の層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 3. 遺跡の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第3章 調査された遺構と遺物

- 1. 調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 2. 竪穴住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 3. 掘立柱建物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
- 4. 溝・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 172
- 5. 井戸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 181
- 6. 土坑・ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 185
- 7. 遺構以外で出土した遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 193

第4章 調査成果のまとめ

- 1. 矢場扇状地の形成と遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
- 2. 古墳時代から平安時代の集落・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 199
- 3. 中世の遺構群について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 206

文献・・ 206

遺物観察表・・ 208

写真図版

報告書抄録

付図1 矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の遺構全体図

付図2 矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の中世遺構及び古墳時代～中世の土坑・ピット遺構全体図

挿図目次

第1図	県道13号前橋長湊線と藤岡バイパスの路線図	1	第64図	27号竪穴住居(1)	82
第2図	矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の位置と範囲	3	第65図	27号竪穴住居(2)	83
第3図	藤岡市南部の等高線図	6	第66図	27号竪穴住居の出土遺物	84
第4図	藤岡市南部の地質図	8	第67図	28号竪穴住居(1)	85
第5図	発掘地の基本層序	10	第68図	28号竪穴住居(2)	86
第6図	矢場扇状地に分布する矢場層の層序対比	11	第69図	28号竪穴住居の出土遺物(1)	87
第7図	藤岡台地南部の遺跡	12・13	第70図	28号竪穴住居の出土遺物(2)	88
第8図	矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の遺構全体図	18	第71図	28号竪穴住居の出土遺物(3)	89
第9図	1号竪穴住居と出土遺物	19	第72図	30号竪穴住居と出土遺物	91
第10図	2号竪穴住居(1)	20	第73図	30号竪穴住居の出土遺物	92
第11図	2号竪穴住居(2)	21	第74図	31号竪穴住居	93
第12図	2号竪穴住居の出土遺物	22	第75図	31号竪穴住居と出土遺物	94
第13図	3号竪穴住居	24	第76図	31号竪穴住居の出土遺物	95
第14図	3号竪穴住居の出土遺物	25	第77図	32号竪穴住居と出土遺物	96
第15図	4・18号竪穴住居	26	第78図	33号竪穴住居と出土遺物	97
第16図	4号竪穴住居	27	第79図	34・64号竪穴住居(1)	99
第17図	4号竪穴住居の出土遺物(1)	28	第80図	34・64号竪穴住居(2)	100
第18図	4号竪穴住居の出土遺物(2)	29	第81図	34・64号竪穴住居(3)	101
第19図	18号竪穴住居の出土遺物	30	第82図	34・64号竪穴住居の出土遺物	102
第20図	5・6号竪穴住居(1)	31	第83図	64号竪穴住居の出土遺物	103
第21図	5・6号竪穴住居(2)	32	第84図	35号竪穴住居と出土遺物	104
第22図	5・6号竪穴住居(3)	33	第85図	36号竪穴住居	105
第23図	5・6号竪穴住居の出土遺物	34	第86図	37号竪穴住居	106
第24図	6号竪穴住居の出土遺物	35	第87図	37号竪穴住居の出土遺物	107
第25図	7・19号竪穴住居	37	第88図	38号竪穴住居	108
第26図	7号竪穴住居と出土遺物	38	第89図	38号竪穴住居と出土遺物	109
第27図	7・19号竪穴住居の出土遺物	39	第90図	38号竪穴住居の出土遺物	110
第28図	8・9号竪穴住居(1)	40	第91図	39号竪穴住居	112
第29図	8・9号竪穴住居(2)	41	第92図	39号竪穴住居と出土遺物	113
第30図	9号竪穴住居と8号竪穴住居の出土遺物	42	第93図	40号竪穴住居と出土遺物	114
第31図	9号竪穴住居の出土遺物	43	第94図	40号竪穴住居	115
第32図	11・16号竪穴住居	45	第95図	41号竪穴住居(1)	116
第33図	11・16号竪穴住居と11号竪穴住居の出土遺物	46	第96図	41号竪穴住居(2)	117
第34図	11・16号竪穴住居の出土遺物	47	第97図	41号竪穴住居の出土遺物(1)	118
第35図	12号竪穴住居(1)	48	第98図	41号竪穴住居の出土遺物(2)	119
第36図	12号竪穴住居(2)	49	第99図	42号竪穴住居	121
第37図	12号竪穴住居の出土遺物	50	第100図	42号竪穴住居の出土遺物	122
第38図	13・14・17号竪穴住居	52	第101図	43号竪穴住居	123
第39図	13・14・17号竪穴住居の出土遺物	53	第102図	43号竪穴住居の出土遺物	124
第40図	15号竪穴住居(1)	54	第103図	44号竪穴住居	125
第41図	15号竪穴住居(2)	55	第104図	44号竪穴住居と出土遺物	126
第42図	15号竪穴住居の出土遺物	56	第105図	44号竪穴住居の出土遺物	127
第43図	20号竪穴住居	59	第106図	45・55・57・60・67号竪穴住居(1)	129
第44図	20号竪穴住居と出土遺物	60	第107図	45・55・57・60・67号竪穴住居(2)	130
第45図	20号竪穴住居の出土遺物	61	第108図	45号竪穴住居と45・55号竪穴住居の出土遺物	131
第46図	21・29・70号竪穴住居	62	第109図	55・57・60・67号竪穴住居の出土遺物	132
第47図	21・29・70号竪穴住居の出土遺物	63	第110図	67号竪穴住居の出土遺物	133
第48図	22号竪穴住居(1)	64	第111図	46号竪穴住居(1)	134
第49図	22号竪穴住居(2)	65	第112図	46号竪穴住居(2)	135
第50図	22号竪穴住居の出土遺物(1)	66	第113図	46号竪穴住居の出土遺物	136
第51図	22号竪穴住居の出土遺物(2)	67	第114図	47号竪穴住居	137
第52図	23号竪穴住居(1)	68	第115図	47号竪穴住居の出土遺物	138
第53図	23号竪穴住居(2)	69	第116図	48・69号竪穴住居	139
第54図	23号竪穴住居(3)	70	第117図	48号竪穴住居と出土遺物	140
第55図	23号竪穴住居と出土遺物	71	第118図	48号竪穴住居の出土遺物	141
第56図	23号竪穴住居の出土遺物	72	第119図	50・63号竪穴住居(1)	142
第57図	24号竪穴住居	74	第120図	50・63号竪穴住居(2)	143
第58図	24号竪穴住居の出土遺物	75	第121図	50・63号竪穴住居と50号竪穴住居の出土遺物	144
第59図	25号竪穴住居	76	第122図	50号竪穴住居の出土遺物	145
第60図	25号竪穴住居と出土遺物	77	第123図	63号竪穴住居の出土遺物	146
第61図	25号竪穴住居の出土遺物	78	第124図	51号竪穴住居と出土遺物	147
第62図	26号竪穴住居	79	第125図	52・65号竪穴住居と65号竪穴住居の出土遺物(1)	149
第63図	26号竪穴住居と出土遺物	80	第126図	52・65号竪穴住居と65号竪穴住居の出土遺物(2)	150

第127図	52・65号竪穴住居の出土遺物	151
第128図	54号竪穴住居と出土遺物	152
第129図	56号竪穴住居	153
第130図	59号竪穴住居	155
第131図	59号竪穴住居と出土遺物	156
第132図	61・68号竪穴住居	158
第133図	61号竪穴住居と出土遺物	159
第134図	68号竪穴住居の出土遺物	160
第135図	62号竪穴住居と出土遺物	161
第136図	66号竪穴住居	163
第137図	66号竪穴住居の出土遺物	164
第138図	71号竪穴住居と出土遺物	167
第139図	1号掘立柱建物	169
第140図	2号掘立柱建物	170
第141図	3号掘立柱建物	171
第142図	1号溝と出土遺物	173
第143図	2・3号溝	174
第144図	4・6号溝と4号溝の出土遺物	175

第145図	5号溝と出土遺物	176
第146図	7・8号溝と7号溝の出土遺物	178
第147図	9～12号溝と9号溝の出土遺物	180
第148図	1・2号井戸と1号井戸の出土遺物	182
第149図	3・4号井戸と出土遺物	183
第150図	5・6号井戸と5号井戸の出土遺物	184
第151図	1～8号土坑	186
第152図	9～14・16・17号土坑と12・13号土坑の出土遺物	188
第153図	21・27・36・39・43・45・46・47・56号土坑	190
第154図	49・50・52・53・54・58・60号土坑、72号ピットと53号土坑と72号ピットの出土遺物	194
第155図	遺構外から出土した遺物(1)	195
第156図	遺構外から出土した遺物(2)	196
第157図	竪穴住居の年代	200
第158図	竪穴住居の重複関係	202
第159図	竪穴住居の年代別分布と6世紀の分布	203
第160図	7～10世紀の竪穴住居の分布	204
第161図	竪穴住居の年代と面積	205

表目次

第1表	遺構名、遺構番号の対照	5
第2表	矢場三ツ橋Ⅱ遺跡周辺の遺跡	14
第3表	15号竪穴住居で検出されたピットの計測値	53
第4表	23号竪穴住居で検出されたピットの計測値	73
第5表	27号竪穴住居で検出されたピットの計測値	81

第6表	34号竪穴住居で検出されたピットの計測値	98
第7表	2号掘立柱建物で検出されたピットの計測値	168
第8表	図や写真を掲載しなかった遺物の数量(1)	197
第9表	図や写真を掲載しなかった遺物の数量(2)	198

写真目次

PL. 1	1	上空から見た矢場三ツ橋Ⅱ遺跡(東から)
	2	調査地の遺構全景(北部、南・上から)
PL. 2	1	調査地の遺構全景(中央部、北・上から)
	2	調査地の遺構全景(南部、東・上から)
PL. 3	1	上空から見た矢場三ツ橋Ⅱ遺跡(南・真上から)
	2	調査地の地層断面(地表付近)
	3	調査地の地層断面
	4	調査地の地層断面(試掘溝最下部)
PL. 4	1	発掘前の調査地
	2	重機による表土の掘削
	3	通行路に安全フェンスを設置
	4	発掘調査の作業
	5	遺構測定の作業
	6	道路建設が進む調査地
	7	上空から見た矢場三ツ橋Ⅱ遺跡(北・上から)
PL. 5	1	1号竪穴住居の全景(北から)
	2	1号竪穴住居の地層断面A(南から)
	3	1号竪穴住居遺物の出土状況(東から)
	4	1号竪穴住居掘方の全景(東から)
	5	2号竪穴住居の全景(南から)
	6	2号竪穴住居1号カマドの全景(南から)
	7	2号竪穴住居2号カマド遺物の出土状況(南から)
	8	2号竪穴住居2号カマドの全景(南から)
PL. 6	1	2号竪穴住居掘方の全景(南から)
	2	2号竪穴住居1号カマド掘方の全景(東から)
	3	2号竪穴住居の北壁掘方の全景(東から)
	4	2号竪穴住居2号カマド掘方から出土した遺物(東から)
	5	3号竪穴住居の全景(南から)
	6	3号竪穴住居鉄製品の出土状況(北から)
	7	3号竪穴住居掘方の全景(南から)
	8	3号竪穴住居の地層断面A(南から・北側壁面)
PL. 7	1	4号竪穴住居の全景(西から)
	2	4号竪穴住居カマドの全景(西から)

	3	4号竪穴住居掘方の全景(西から)
	4	4号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
	5	5号竪穴住居の全景(西から)
	6	5号竪穴住居カマドの全景(北から)
	7	5号竪穴住居掘方の全景(西から)
	8	5号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)
PL. 8	1	6号竪穴住居の全景(西から)
	2	6号竪穴住居カマドの全景(西から)
	3	6号竪穴住居カマドの全景(東から)
	4	6号竪穴住居掘方の全景(西から)
	5	7号竪穴住居の全景(西から)
	6	7号竪穴住居カマドの全景(西から)
	7	7号竪穴住居掘方の全景(西から)
	8	7号竪穴住居カマド掘方の地層断面F(西から)
PL. 9	1	8号竪穴住居の全景(西から)
	2	8号竪穴住居カマドの地層断面G(南から)
	3	8号竪穴住居掘方の全景(西から)
	4	8号竪穴住居カマド掘方の地層断面G(南から)
	5	9号竪穴住居の全景(西から)
	6	9号竪穴住居カマドの全景(西から)
	7	9号竪穴住居カマドの全景(南から)
	8	9号竪穴住居掘方の全景(西から)
PL. 10	1	11号竪穴住居の全景(西から)
	2	11号竪穴住居埋土の礫の出土状況(北から)
	3	11号竪穴住居の地層断面C(北から・東側壁面)
	4	11号竪穴住居掘方の全景(南から)
	5	12号竪穴住居の全景(西から)
	6	12号竪穴住居カマドの全景(西から)
	7	12号竪穴住居カマドの全景(北から)
	8	12号竪穴住居掘方の全景(西から)
PL. 11	1	13号竪穴住居の全景(西から)
	2	13号竪穴住居の地層断面A(西から・東側壁面)
	3	14号竪穴住居の全景(南から)

	4	14号竪穴住居の地層断面A (西から・東側壁面)	7	31号竪穴住居の全景(南西から)	
	5	15号竪穴住居の全景(西から)	8	31号竪穴住居カマドの全景(南西から)	
P L. 12	1	15号竪穴住居の地層断面A (南から)	P L. 21	1	31号竪穴住居貯蔵穴の全景(南東から)
	2	15号竪穴住居の地層断面B (西から)	2	31号竪穴住居掘方の全景(南西から)	
	3	15号竪穴住居遺物の出土状況(西から)	3	32号竪穴住居の全景(南から)	
	4	15号竪穴住居遺物の出土状況(北から)	4	32号竪穴住居の地層断面A (西から)	
	5	15号竪穴住居ピット5・6 遺物の出土状況(北から)	5	32号竪穴住居掘方の全景(南から)	
	6	15号竪穴住居掘方、1号掘立柱建物の全景(西から)	6	33号竪穴住居の全景(南から)	
	7	16号竪穴住居の全景と地層断面C (西から・東側壁面)	7	33号竪穴住居の地層断面(東から・西側壁面)	
	8	16号・11号竪穴住居の地層断面C (西から・東側壁面)	8	33号竪穴住居掘方の全景(南から)	
P L. 13	1	17号竪穴住居の全景(西から)	P L. 22	1	34号竪穴住居の全景(東から)
	2	17号竪穴住居の地層断面A (西から・東側壁面)	2	34号竪穴住居カマドの全景(南西から)	
	3	18号竪穴住居の全景(西から)	3	34号竪穴住居カマドの全景(南から)	
	4	18号竪穴住居の地層断面C (東から)	4	34号竪穴住居掘方の全景(東から)	
	5	19号竪穴住居の全景(南から)	5	35号竪穴住居の全景(北から)	
	6	19号竪穴住居の地層断面C (南から)	6	35号竪穴住居カマドの全景(北から)	
	7	20号竪穴住居カマド遺物の出土状況(西から)	7	35号竪穴住居掘方の全景(北から)	
	8	20号竪穴住居カマド遺物の出土状況(南から)	8	35号竪穴住居掘方と36号竪穴住居の全景(北から)	
P L. 14	1	20号竪穴住居の全景(西から)	P L. 23	1	36号竪穴住居の全景(北から)
	2	20号竪穴住居石材出土状況全景(東から)	2	36号竪穴住居掘方の全景(北から)	
	3	20号竪穴住居カマド全景(東から)	3	37号竪穴住居の全景(西から)	
	4	20号竪穴住居掘方の全景(西から)	4	37号竪穴住居の地層断面A (西から)	
	5	20号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	5	37号竪穴住居貯蔵穴の地層断面と遺物(北から)	
P L. 15	1	21号・29号竪穴住居の全景(南から)	6	37号竪穴住居掘方の全景(西から)	
	2	21号竪穴住居カマド全景(西から)	7	38号竪穴住居、56号竪穴住居カマドの全景(西から)	
	3	22号竪穴住居の全景(西から)	8	38号竪穴住居カマドの全景(西から)	
	4	22号竪穴住居の全景(北から)	P L. 24	1	38号竪穴住居カマドの全景(北から)
	5	22号竪穴住居の地層断面A (西から)	2	38号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)	
	6	22号竪穴住居カマドの全景(西から)	3	38号竪穴住居掘方の全景(西から)	
	7	22号竪穴住居カマドの地層断面G (南から)	4	38号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	
	8	22号竪穴住居掘方の全景(西から)	5	39号竪穴住居の全景(西から)	
P L. 16	1	23号竪穴住居の全景(西から)	6	39号竪穴住居カマドの全景(東から)	
	2	23号竪穴住居の地層断面B (南から)	7	39号竪穴住居カマドの地層断面G (西から)	
	3	23号竪穴住居1号カマドの全景(西から)	8	39号竪穴住居掘方の全景(西から)	
	4	23号竪穴住居2号カマド周辺の状況(西から)	P L. 25	1	40号竪穴住居の全景(西から)
	5	23号竪穴住居遺物の出土状況(北から)	2	40号竪穴住居カマドの全景(北から)	
	6	23号竪穴住居遺物の出土状況(北から)	3	41号竪穴住居カマドの地層断面H (西から)	
	7	23号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)	4	41号竪穴住居カマドの全景(西から)	
	8	22号・23号・27号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)	5	41号竪穴住居の全景(西から)	
P L. 17	1	24号竪穴住居の全景(西から)	P L. 26	1	41号竪穴住居貯蔵穴の全景(北から)
	2	24号竪穴住居ピット1 (貯蔵穴)の全景(南から)	2	41号竪穴住居掘方の全景(西から)	
	3	24号竪穴住居掘方の全景(西から)	3	41号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	
	4	24号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)	4	42号竪穴住居の全景(北から)	
	5	25号竪穴住居の全景(西から)	5	42号竪穴住居掘方の全景(北から)	
	6	25号竪穴住居カマドの全景(西から)	6	42号竪穴住居カマドの地層断面C (西から)	
	7	25号竪穴住居カマドの全景(北から)	7	43号竪穴住居の全景(北から)	
	8	25号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	8	43号竪穴住居カマドの全景(北から)	
P L. 18	1	25号竪穴住居掘方の全景(西から)	P L. 27	1	43号竪穴住居カマドの全景(西から)
	2	26号竪穴住居の全景(南から)	2	43号竪穴住居掘方の全景(北から)	
	3	26号竪穴住居1号カマドの全景(西から)	3	44号竪穴住居の全景(西から)	
	4	26号竪穴住居掘方の全景(南から)	4	44号竪穴住居カマドの全景(東から)	
	5	26号竪穴住居2号カマド掘方の全景(南から)	5	44号竪穴住居貯蔵穴の全景(東から)	
	6	27号竪穴住居の全景(南から)	6	44号竪穴住居掘方の全景(西から)	
	7	27号竪穴住居カマド掘方の全景(南から)	7	45号竪穴住居の全景(東から)	
	8	27号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)	8	45号竪穴住居カマドの全景(東から)	
P L. 19	1	28号竪穴住居の全景(南西から)	P L. 28	1	45号竪穴住居貯蔵穴の全景(北から)
	2	28号竪穴住居の地層断面A (南西から)	2	45号竪穴住居掘方の全景(東から)	
	3	28号竪穴住居カマドの全景(南西から)	3	46号竪穴住居の全景(西から)	
	4	28号竪穴住居貯蔵穴上部の全景(北西から)	4	46号竪穴住居カマドの全景(西から)	
	5	28号竪穴住居貯蔵穴の全景(南西から)	5	46号竪穴住居カマドの全景(東から)	
P L. 20	1	28号竪穴住居遺物の出土状況(西から)	6	46号竪穴住居掘方の全景(西から)	
	2	28号竪穴住居貯蔵穴周辺遺物の出土状況(南から)	7	47号竪穴住居の全景(東から)	
	3	28号竪穴住居遺物の出土状況(南から)	8	47号竪穴住居掘方の全景(東から)	
	4	28号竪穴住居掘方の全景(南西から)	P L. 29	1	48号竪穴住居の全景(南から)
	5	30号竪穴住居の全景(北から)	2	48号竪穴住居掘方の全景(南から)	
	6	30号竪穴住居カマドの全景(西から)	3	50号竪穴住居の全景(北から)	

	4	50号竪穴住居カマドの全景(東から)	2	2号溝の全景(東から)
	5	50号竪穴住居貯蔵穴の全景(南から)	3	3号溝の全景(東から)
	6	50号竪穴住居掘方の全景(西から)	4	1号・2号・3号溝と周辺の遺構群(調査地中央部・南・真上から)
	7	51号竪穴住居の全景(西から)		
	8	51号竪穴住居の地層断面A(西から)	P L. 39	1 3号溝の地層断面A(西から・東側壁面)
P L. 30	1	51号竪穴住居カマドの全景(西から)	2	3号溝の全景(東から)
	2	51号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)	3	4号溝の地層断面(南から)
	3	52号竪穴住居の全景(北から)	4	4号溝の全景(南から)
	4	52号竪穴住居カマドの検出状況(東から)	5	5号溝の地層断面A(南から)
	5	54号竪穴住居の全景(東から)	6	5号溝の地層断面C(東から・西側壁面)
	6	55号竪穴住居の床面東部(西から)	7	5号溝の全景(南から)
	7	55号竪穴住居の地層断面A(北から)	P L. 40	1 5号溝の全景(南から)
	8	55号竪穴住居遺物の出土状況(東から)	2	5号溝の全景(北から)
P L. 31	1	57号・60号竪穴住居の全景(南から)	3	5号溝及び出土遺物(白磁碗)と3号溝の全景(南から)
	2	57号竪穴住居の地層断面A(北から)	4	5号溝B断面及び遺物(白磁碗)の検出状況(南から)
	3	59号竪穴住居の全景(南から)	5	5号溝遺物(白磁碗)の出土状況(南から)
	4	59号竪穴住居カマドの全景(南から)	6	6号溝の全景(西から)
	5	59号竪穴住居カマドの全景(東から)	7	7号溝の地層断面A(西から・東側壁面)
	6	59号竪穴住居掘方の全景(南から)	P L. 41	1 7号・8号溝の全景(西から)
	7	61号竪穴住居の全景(東から)	2	7号・8号溝の全景(南から)
	8	61号竪穴住居カマドの全景(東から)	3	9号溝の全景(東から)
P L. 32	1	61号竪穴住居カマドの全景(西から)	4	12号溝の全景(南から)
	2	61号竪穴住居遺物の出土状況(南から)	5	調査地の溝群と周辺の地割り
	3	61号竪穴住居掘方の全景(東から)	P L. 42	1 1号・2号・3号・5号・6号井戸の全景
	4	61号竪穴住居カマド掘方の全景(東から)	2	1号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)
	5	62号竪穴住居、8号・10号・11号溝の全景(西から)	3	1号井戸遺物(3)の出土状況(南から)
	6	62号竪穴住居の地層断面A(西から)	4	1号井戸の全景(掘り下げ段階、南から)
	7	63号竪穴住居の全景(南から)	5	1号井戸の全景(断ち割り、南から)
	8	63号竪穴住居1号土坑の全景(南から)	P L. 43	1 2号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)
P L. 33	1	63号竪穴住居遺物の出土状況(東から)	2	2号井戸の全景(掘り下げ段階、西から)
	2	63号竪穴住居遺物の出土状況(東から)	3	2号井戸の測量風景(断ち割り、南から)
	3	63号竪穴住居遺物の出土状況(東から)	4	2号井戸の全景(断ち割り、南から)
	4	63号竪穴住居掘方の全景(西から)	5	3号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)
	5	64号竪穴住居の全景(西から)	6	3号井戸の全景(断ち割り、北から)
	6	64号竪穴住居カマドの全景(西から)	7	4号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)
	7	64号竪穴住居カマドの全景(南から)	8	4号井戸の全景(掘り下げ段階、南から)
	8	64号竪穴住居の礎の出土状況(北から)	P L. 44	1 4号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)
P L. 34	1	64号竪穴住居掘方の全景(東から)	2	4号井戸の全景(断ち割り、南から)
	2	64号竪穴住居カマド掘方の全景(南から)	3	5号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)
	3	65号竪穴住居の全景(東から)	4	5号井戸の全景(断ち割り、南から)
	4	65号竪穴住居カマドの全景(西から)	5	6号井戸の地層断面(掘り下げ段階、西から)
	5	65号竪穴住居カマドの全景(南から)	6	6号井戸の全景(掘り下げ段階、西から)
	6	65号竪穴住居カマドの全景(東から)	7	6号井戸の全景(断ち割り、南から)
	7	66号竪穴住居、16号土坑の全景(西から)	P L. 45	1 1号土坑の全景(東から)
	8	66号竪穴住居の地層断面A(西から)	2	2号土坑の全景(南から)
P L. 35	1	66号竪穴住居カマドの全景(西から)	3	3号土坑の全景(南から)
	2	66号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)	4	4号土坑の全景(東から)
	3	67号竪穴住居の全景(西から)	5	5号土坑の全景(南から)
	4	68号竪穴住居の全景(南から)	6	6号土坑の全景(西から)
	5	69号竪穴住居の検出状況(東から・西側壁面)	7	7号土坑の全景(南から)
	6	70号竪穴住居の全景(南から)	8	9号土坑の全景(南西から)
	7	70号竪穴住居掘方の全景(南から)	P L. 46	1 10号土坑の全景(南西から)
	8	71号竪穴住居の全景(南から)	2	11号土坑の全景(北西から)
P L. 36	1	71号竪穴住居カマドの全景(北から)	3	12号土坑の全景(北西から)
	2	71号竪穴住居掘方の全景(南から)	4	13号土坑の全景(南から)
	3	71号竪穴住居の地層断面A(西から・東側壁面)	5	14号土坑の全景(東から)
	4	71号竪穴住居カマド掘方の全景(東から)	6	21号土坑の全景(北西から)
	5	2号掘立柱建物の全景(東から)	7	39号土坑の全景(南から)
	6	3号掘立柱建物の全景(東から)	8	43号土坑の全景(西から)
	7	1号溝の地層断面A(南から・北側壁面)	P L. 47	1 45号土坑の全景(北から)
	8	1号溝の地層断面B(南から・北側壁面)	2	46号土坑の全景(南から)
P L. 37	1	1号溝と周辺の遺構群(北・真上から)	3	47号土坑の全景(西から)
	2	1号溝の全景(調査地北部・南から)	4	50号土坑の全景(北東から)
	3	1号溝の全景(調査地北部・南・真上から)	5	53号土坑の全景(南から)
	4	1号溝、8号土坑の全景(調査地中央部・南から)	6	54号土坑の全景(北東から)
P L. 38	1	2号溝の地層断面A(東から)	7	60号土坑の全景(南から)

P L . 47	8	72号ピット遺物出土状況(北東から)	P L . 60	32・33・34・37・38・64号竪穴住居の出土遺物
P L . 48		1・2号竪穴住居の出土遺物	P L . 61	38・39・40号竪穴住居の出土遺物
P L . 49		2・3・4号竪穴住居の出土遺物	P L . 62	41号竪穴住居の出土遺物
P L . 50		4・5・6・7・18号竪穴住居の出土遺物	P L . 63	41・42・43・44号竪穴住居の出土遺物
P L . 51		7・8・9・11号竪穴住居の出土遺物	P L . 64	44・45・55・67号竪穴住居の出土遺物
P L . 52		11・12・15号竪穴住居の出土遺物	P L . 65	46・48・50号竪穴住居の出土遺物
P L . 53		16・17・20号竪穴住居の出土遺物	P L . 66	50・63・65号竪穴住居の出土遺物
P L . 54		20・21・22・23号竪穴住居の出土遺物	P L . 67	52・65号竪穴住居の出土遺物
P L . 55		23・24・25号竪穴住居の出土遺物	P L . 68	54・59・61・66・68号竪穴住居の出土遺物
P L . 56		25・26・27・28号竪穴住居の出土遺物	P L . 69	66号竪穴住居、1・4・5・7号溝、1・4・5号井戸、 72号ピットの出土遺物
P L . 57		28号竪穴住居の出土遺物	P L . 70	遺構外から出土した遺物
P L . 58		28・30号竪穴住居の出土遺物		
P L . 59		30・31号竪穴住居の出土遺物		

第1章 調査に至る経緯と事業の経過

1. 調査に至る経緯

群馬県の県庁所在地である前橋市を起点とする県道13号前橋長湫線は、高崎市や藤岡市を經由して埼玉県境に至り、埼玉県道13号線として埼玉県秩父郡長湫町に到達する主要地方道路である。

前橋長湫線の現道は、前橋市街地の石倉町を起点として高崎市東部を貫き、烏川を渡って藤岡市街地にいたる。その後は藤岡市街地から旧多野郡鬼石町を経て神流川を渡り埼玉県境まで達している。

群馬県は高規格道路を中心とした高速交通ネットワークを最大限に生かした道路整備を行い、周辺の中山間地域と都市間の地域連携の強化を図ることを目的とした群馬県広域道路網基本計画により道路建設事業が推進されている。

前橋長湫線は主要地方道路として交通量が大変に多く、西部県民局によれば藤岡市南部の前橋長湫線の日

の交通量は1.2万台であるという。このような交通状況から前橋長湫線は各地で交通渋滞を招いてしまい、これを解消するため県南部の藤岡市街地では前橋長湫線のバイパスが整備されている(第1図)。

バイパスは、昭和62年度までに国道17号線から上信越自動車道藤岡I.C、国道254線までの区間を4車線化して供用を開始した。また、平成12年度からはバイパスの二期工事が開始され、平成20年度から24年度は国道254線以南の藤岡市矢場から上大塚の地域でバイパスの建設が進められている。その道路建設事業内容は、延長1.15km、道路幅は25mに及ぶ。

平成19年度からバイパス建設に伴う用地買収が進み、群馬県県土整備局はこの事業を群馬県教育委員会文化財保護課(以下、文化財保護課と略す)に照会し、道路建設と埋蔵文化財保護の調整が図られることとなった。以下に矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査にいたる調整の経過を記述する。



第1図 県道13号前橋長湫線と藤岡バイパスの路線図(2500分の1地形図「藤岡」図幅(平成5年4月1日発行)を使用)

第1章 調査に至る経緯と事業の経過

平成21年9月2日に藤岡土木事務所と藤岡市教育委員会の協議が同教育委員会文化財保護課で行われ、事業地域の埋蔵文化財包蔵地の分布や取り扱いについて話し合われた。

群馬県教育委員会は、平成21年12月28日付文財第706-129号により同文化財保護課が実施した当該地域の試掘調査結果を藤岡土木事務所及び藤岡市教育委員会に通知し、事業地内に遺跡が存在することが明らかになった。

これを受けて藤岡市教育委員会は、文化財保護法第95条に基づいて平成22年2月12日付藤教文発第557号により事業地周辺の埋蔵文化財包蔵地の把握について(変更・報告)、群馬県教育委員会宛に報告した。

文化財保護課は、藤岡市教育委員会からの報告を受け、平成22年2月19日付文財第730-35号により埋蔵文化財包蔵地の決定(変更)について藤岡市教育委員会に通知した。こうして当該事業地はあらたに埋蔵文化財包蔵地として登録され周知された。

群馬県知事(藤岡土木事務所)は、文化財保護法第94条1に基づいて平成22年3月10日付藤土第32201-1号により藤岡市91、98包蔵地(矢場三ツ橋Ⅱ遺跡を含む)の発掘について、群馬県教育委員会教育長宛に通知し、藤岡市教育委員会教育長宛てに進達を依頼した。藤岡市教育委員会教育長は、同通知を平成22年3月11日付藤教文収第648号により道路改築事業に対する経過と意見を添付して群馬県教育委員会教育長宛に進達した。

群馬県教育委員会教育長は、文化財保護法第94条4に基づいて平成22年3月23日付文財第722-68号により当該事業地の発掘調査の必要について群馬県知事宛に報告した。

この間に藤岡土木事務所、文化財保護課、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は、矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査事業の調整を行い、平成22年3月31日付けで藤岡土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結した。

また、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は平成22年4月1日付群埋第37-2号により文化財保護法第92条1により群馬県教育委員会教育長宛に発掘の届出を行い、藤岡市教育委員会教育長宛て進達を依頼した。群馬県教育委員会教育長は、文化財保護法第92条2によ

り平成22年4月1日付文財第702-12号で埋蔵文化財の発掘調査について通知し、同日から発掘調査事業が開始された。

2. 発掘調査及び整理作業の方法

(1)埋蔵文化財包蔵地と発掘調査地の位置

文化財保護法第95条では「国及び地方公共団体は、周知の埋蔵文化財包蔵地について、資料の整備その他その周知の徹底を図るために必要な措置の実施に努めなければならない。」としている。ここでいう埋蔵文化財包蔵地とは、地下に埋蔵されている文化財を包蔵する範囲を呼び、遺跡はおおよそ埋蔵文化財包蔵地に相当する。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡は、群馬県藤岡市に所在することから藤岡市教育委員会により登録、管理され、藤岡市教育委員会と群馬県教育委員会によって資料の整備やその周知が行われている。

遺跡の範囲は、群馬文化財情報システムWEB版にて公開され、遺跡概要を検索することができる。群馬文化財情報システムWEB版に掲載された遺跡情報は以下の通りである。

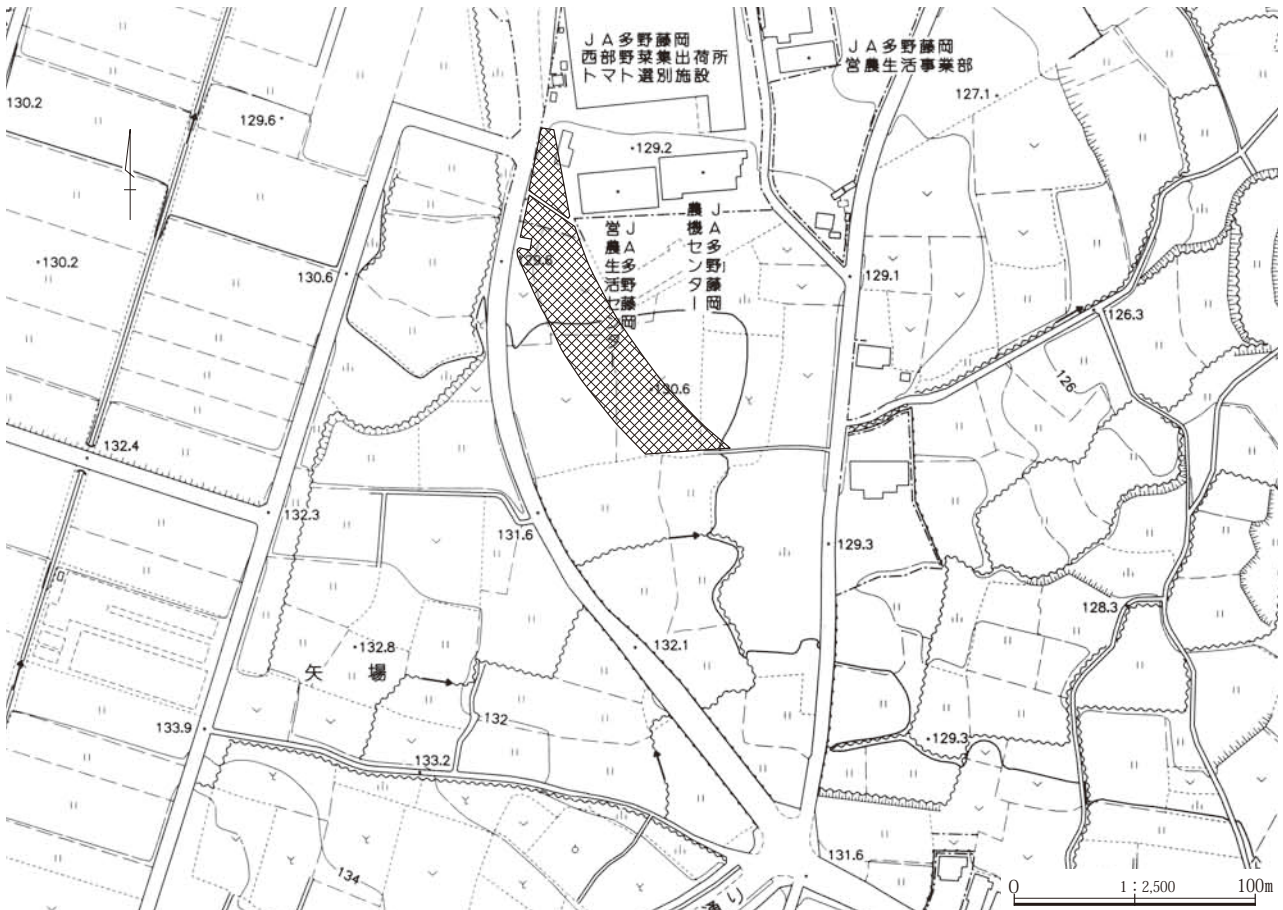
矢場三ツ橋Ⅱ遺跡は、藤岡市91包蔵地の範囲内にあたり藤岡市矢場字道上198-1番地外に所在し、市町村遺跡番号は包91である。遺跡は古墳、奈良、平安時代とされ、現況は水田、畑地、道路である。

発掘調査地は、作業の工程上において作業の行いやすさや廃土などの工程を勘案して発掘現場で調査区を区分して行われることが多い。矢場三ツ橋Ⅱ遺跡も同様に三カ所の場所に分割して発掘調査を実施し、交通路などを確保しながら調査を行った。しかし、調査は前橋長湍線の道路幅に限られるため、幅は25m全長が150mの調査範囲となった。このため調査区やグリッドを設定せずに発掘調査を実施した(第2図)。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の調査地の国家座標IX系(世界測地系)のX軸とY軸は、X=24780~24645、Y=-70313~-70227の範囲に収まり、真北方位角は+0°27'42"である。

(2)発掘調査の記録方法

発掘はバックホウにより表土の掘削を実施し、遺構面の検出作業は発掘作業員による人力の掘削により行われた。



第2図 矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の位置と範囲(藤岡市都市計画区域図 24、25 (平成15年10月修正)を使用)

遺構面で確認された遺構の輪郭確定や遺構の分布や重複、埋土の観察などから調査工程を決定し、遺構には必要に応じて埋土などの地層観察用畦を設定してから、人力による掘削をおこなった。なお、バックホウによる掘削及び掘削土の運搬は委託で行われ、遺構などの人力掘削は、遺跡掘削工事の請負契約による委託で実施した。

発掘された遺構は、地層断面図、遺構断面図、遺構平面図を必要に応じて作成した。竪穴住居や掘立柱建物などの遺構は、原則として20分の1遺構平面図で記録し、土坑や溝などの遺構は40分の1遺構平面図を作成した。

なお調査地の測量作業は大部分を測量会社に業務委託し、地質断面図や遺構断面図は、調査担当者の指導で発掘作業員が測量した。

遺構の掘り下げで観察された埋土の断面は、調査担当者が観察し地質断面図に層位や層相記載や土壌の観察所見を記録した。

発掘調査で検出した遺構は、調査担当者が形状や遺物出土の状況の撮影を行い、測量された遺構平面図や地層断面図に観察された所見などを記録した。遺構や遺物、

埋土などの地層断面は、一眼レフのデジタルカメラと中判カメラを使用してデジタルデータ及び銀塩写真で写真撮影を行い記録した。

(3) 整理作業の方法

遺構平面図や地層断面図は、遺構種ごとに整理し、書類用の紙袋に入れて収納した。業務委託して得られた測量データは、紙に印刷されて納品され、元になった電子データはCD-ROMなどのメディアで納品され保管した。

発掘現場で撮影された写真データはRAWデータで記録され、HDやDVD-ROMなどのメディアに保管した。写真データは、そのファイル名を調査区、遺構略号、遺構番号、撮影方向、撮影内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行い、パソコンで整理・検索可能なデータにした。

次に、遺物の整理について述べる。出土した土器や陶磁器は遺構や包含層などを対象に破片の接合を行った。接合の作業は遺構平面図に記録された遺物の出土位置、出土状態の写真、遺構の地質断面図を参考にしながら進めた。

第1章 調査に至る経緯と事業の経過

発掘調査報告書に掲載する土器は、接合の作業を終え復元されたものを中心に、各遺構の埋没当初に堆積したのものや、遺構の時代を決定する根拠となる遺物を抽出して選択した。なお、報告書に掲載しない遺物は、遺構や出土位置、種別、器種などを観察した後に遺物収納箱に整理して収納した。

発掘調査報告書に掲載する出土物は、デジタルカメラを使用して写真撮影を行った後に遺物実測図を作成した。土器や石製品の遺物実測図は等倍で作成し、完形の土器は三次元計測システムを使用して実測図を作成した。

作成した遺物実測図はトレースしたものを電子化し、土器の拓本は作成した拓本の原画をスキャナーで電子化した。

土器や石製品の観察記録は、表にまとめて観察表を作成した。土器の口径、底径、高さは実測図から読み取り、土器の胎土の観察は含まれる岩片などを中心に記載した。また土器の特徴は文様や整形技法の特徴を記載した。

3. 発掘調査と整理作業の経過

(1) 発掘調査の経過

平成22年度の発掘調査は4月上旬に調査の準備が進められ、発掘調査地で測量や調査区の設定を行った。

4月15日 バックホウによる表土の掘削が始まる。調査地の表土は、委託者の要望によって耕作土とその下位の土壌に分けて掘削・運搬作業を開始した。

4月19日 1号溝の遺構輪郭を決定して発掘作業員による遺構掘削を開始した。

4月21日 遺構面を検出する作業を開始し、1号・2号・3号竪穴住居の掘削を開始した。

5月10日 バックホウによる表土の掘削・運搬作業が終了した。

5月13日 5号～9号竪穴住居の掘削が進む。藤岡市教育委員会文化財保護課軽部係長が見学に来跡した。

5月28日 5号溝埋土から中国陶磁器の白磁碗が出土した。

6月1日 高所作業車を使用して地上22mから調査地の遺構全景を撮影した。

6月3日 調査地中央部の発掘を終了し、調査地の一部の埋め戻し作業を開始した。

6月7日 埋め戻した場所に碎石を搬入して、JA農産物

直売所入口の通路を復元した。

6月10日 調査地北部の表土掘削を開始する。

6月21日 23号～40号竪穴住居の掘削が進む。発掘調査も佳境にはいる。

6月24日 高所作業車で調査地の遺構全景を撮影した。

7月2日 梅雨による集中豪雨で調査地が冠水し、発掘作業を終日にわたり中断する。水中ポンプによる排水を開始し7月9日まで継続する。

7月22日 東京新聞から5号溝から出土した白磁碗について取材があり、翌日の7月23日の東京新聞朝刊に記事が掲載された。

7月31日 調査地南部の遺構全景をラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。

8月2日 井戸の発掘調査がはじまる。

8月10日 発掘調査の記録作業が終了し、調査地の埋め戻し・整地作業がはじまる。

8月19日 発掘現場の撤収作業が完了する。

(2) 整理事業の経過

藤岡土木事務所、文化財保護課、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は、平成22年度に矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の整理事業の調整を行い、平成23年6月30日付けで藤岡土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は、矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約を締結した。

平成23年度の整理事業は平成23年7月1日より開始し、遺物整理や土器の接合作業、復元作業を行い、遺構図面の編集、トレース作業、遺物写真の撮影と編集を行った。同年10月以降は実測図作成、報告書レイアウト作成と編集、遺構写真や遺物写真の補正、本文執筆を行い報告書の組版作業を開始し、発掘調査報告書を刊行した。

(3) 整理事業において変更した遺構番号

発掘調査において調査地で付けられた遺構の名称及び遺構番号は整理事業の過程で必要に応じて削除や変更を行った。調査地で記録された資料は、整理事業の過程で遺構内容や出土物の解析を行い、調査内容が整理・検討される。その結果、発掘調査で認識された遺構の認定に誤りが認められた場合は遺構名称の変更や欠番化が行われる。

以下に遺構の名称や番号の付け替えに対する対照表を示す(第1表)。

第1表 遺構名、遺構番号の対照

変更後の遺構名	変更前
2号竪穴住居	10号竪穴住居
欠番	49号竪穴住居
欠番	53号竪穴住居
欠番	58号竪穴住居
1号井戸	15号土坑
欠番	18号土坑
2号井戸	19号土坑
3号井戸	20号土坑
欠番	22号土坑
欠番	23号土坑
欠番	24号土坑
欠番	25号土坑
欠番	26号土坑
4号井戸	28号土坑
5号井戸	29号土坑
6号井戸	30号土坑

変更後の遺構名	変更前
欠番	31号土坑
欠番	32号土坑
欠番	33号土坑
欠番	34号土坑
欠番	35号土坑
欠番	37号土坑
欠番	38号土坑
欠番	40号土坑
欠番	41号土坑
欠番	42号土坑
欠番	44号土坑
欠番	48号土坑
欠番	51号土坑
欠番	55号土坑
欠番	59号土坑

第2章 遺跡の地理的、歴史的環境

1. 遺跡の自然環境

(1) 地形・地質の概要と研究史

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡が位置する群馬県藤岡市の南部は、関東山地の北東縁にあたり、山地から丘陵、台地にいたる地形環境を有する。ここでは遺跡の自然環境として地形や地質を中心に述べる。

関東山地北東部は、三波川帯を構成する結晶片岩や緑色岩、ジュラ紀の混成岩相付加体からなる秩父帯北帯から構成され、標高が1286mの西御荷鉾山などがみられる。

三波川帯は、三波川結晶片岩と御荷鉾緑色岩類で構成される変成帯で、その原岩は後期ジュラ紀～白亜紀最前期の付加体コンプレックスからなる。変成年代は白亜紀と考えられている。

関東山地北東縁は、新第三系の牛伏層や小幡層(17～15.5Ma：Maは百万年前)から構成される関東山地周縁の多野丘陵と原市層や板鼻層(14.5～9Ma)から構成される庚申山の独立丘陵からなる。また、関東山地縁は、三波川帯に新第三系が牛伏山断層で接しており、東西数十キロメートルに渡って構造帯を形成している。これは、関東山地北縁の下仁田地域で下仁田構造帯と呼ばれており、牛伏山断層と大北野-岩山線は中央構造線に相当すると考えられる。

庚申山の丘陵部の北斜面には、チャートや砂岩、結晶片岩の礫から構成される堆積物が見られ、中期更新世の浅見山礫層に対比される堆積物であるとされている(磯貝1995)。

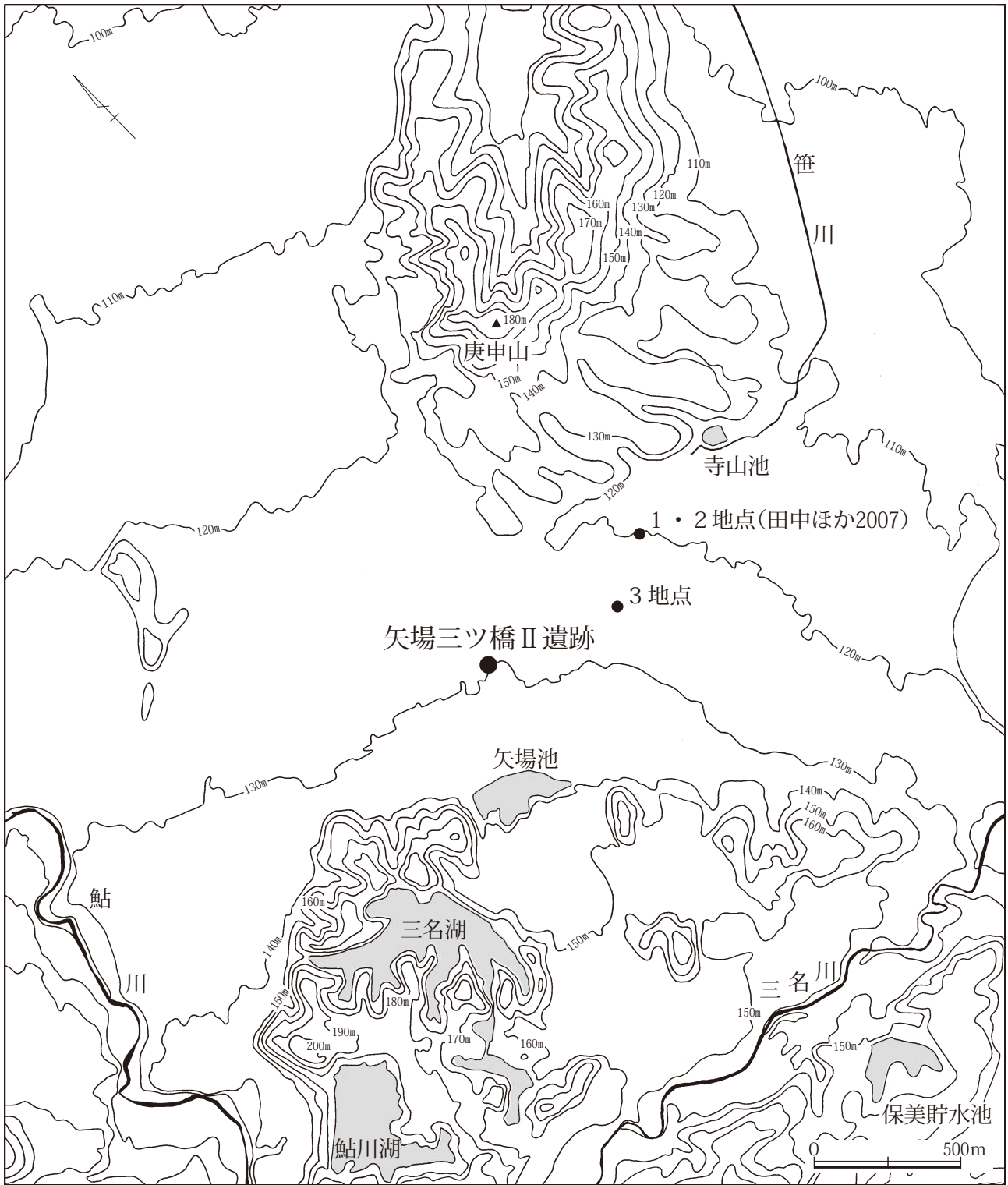
矢場三ツ橋Ⅱ遺跡が位置する台地は、標高が140～80mを呈し(第3図)、鮎川や神流川によって形成された扇状地上に広がる。新井(1962)や関東ローム研究グループ(1965)は、これを藤岡台地と呼んだ。

新井(1962)は、藤岡台地を神流川と鮎川により形成された開析扇状地と考え、台地を構成する扇状地性砂礫層の上位に粘土層を認め、これを藤岡粘土層と呼んだ。

また藤岡粘土層は上部ローム層に覆われることを明らかにし、上部ローム層相当層の粘土層を上部粘土層、上部ローム層よりも下位の粘土層を下部粘土層に区分した。藤岡台地の地形面は、藤岡面(F面)として利根川の低位段丘面(N1面)に対比し、藤岡粘土層の成因は前橋台地南部に分布する泥石流堆積物による烏川などの停滞水域の堆積物と考えた。

杉原(1988)は、藤岡台地とその周辺の段丘地形の地形面区分を行い、この地域の地形面を藤岡Ⅰ面から藤岡Ⅳ面に区分した。

藤岡Ⅰ面は、鮎川左岸の関東山地縁に見られる標高180mほどの段丘面であり、段丘礫層と粘土層を覆う上



第3図 藤岡市南部の等高線図

部ローム層を認め、上部ローム層には浅間板鼻褐色テフラが挟在している。また、上部ローム層の下位にはクラック帯を伴う粘土層を認めた杉原(1988)は、これらの地形面構成層は離水期を4～5万年前に、粘土層の堆積期は5～10万年前の上部更新統と考えた。

また藤岡Ⅰ面は、新井(1962)の鍋川の高位段丘面であ

る多胡面に対比されたと考えたが、多胡面は関東ローム研究グループ(1965)により南関東の武蔵野面に対比されている。

藤岡Ⅱ面は、鮎川左岸の丘陵にみられる鮎川の段丘面で標高は110～150mを呈する。段丘礫層と粘土層が認められ、これらの堆積物には始良Tnテフラや浅間板鼻褐

色テフラなどが認められるとし、段丘の離水期も始良Tnテフラ降下期と考えた。

藤岡Ⅲ面は、鮎川と神流川に挟まれた藤岡台地を構成する地形面で、新井(1962)の藤岡面に相当する。台地の標高は山地との境界で150m、南端部では75mに達する。

藤岡Ⅲ面は、庚申山付近を境にして下位面と上位面に区分される。藤岡Ⅲ面の上位面を構成する段丘礫層は、5m前後でボーリング資料では10mに達するという。藤岡Ⅲ面を構成する堆積物には浅間板鼻褐色テフラを認め、これらの層序は新井(1962)に示された地質柱状図と矛盾しない。杉原(1988)は、上位面の離水期は浅間板鼻褐色テフラをのせることから1.5～2.0万年前とし、下位面の離水期は1万年前とした。

下栗須伊勢塚遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団2010、以下事業団と略す)は、2007年に当事業団によって発掘調査された遺跡で藤岡Ⅲ面の北東部に位置している。遺跡の最下位層であるXII～X層は藤岡粘土層B(竹本・久保1995)に相当し、IX層上位は浅間室田テフラを含む上部ローム層が見られる。

藤岡Ⅳ面は、藤岡台地の北方に沖積地との境界に見られ、2～3段に細分される。地形面を構成する堆積物は粘土や砂、泥炭質粘土の互層からなり、浅間火山起源の完新世テフラを挟在する。

谷地遺跡(事業団2006)F地点は、2004年に当事業団によって発掘調査された遺跡で藤岡Ⅳ面に位置している。谷地遺跡のⅧ層は藤岡Ⅳ面を構成する砂礫層からなり、Ⅷ層上位からは縄文時代後期の遺物が出土し、Ⅷ層から出土した炭化物の放射性炭素年代は3750calB.P、3870calB.P、5650calB.Pの較正年代を示している。

古環境研究所(1993)は、藤岡台地周辺の地形面を区分し、河岸段丘を黒熊面、緑埜面、藤岡面、本動堂面、岡之郷面に区分した。

竹本・久保(1995)は藤岡台地のテフラを明らかにし、浅間板鼻黄色テフラから上位を藤岡粘土A、始良Tnテフラとその下位の榛名八崎テフラ相当の暗色帯下位の粘土層を藤岡粘土Bと呼んだ。

藤岡市教育委員会(1995)は藤岡北山B遺跡の発掘調査で藤岡台地周辺の標準的な上部ローム層及びテフラの層序を明らかにし、中部～上部ローム層をX層からVI層に区分してテフラの放射性炭素年代を明らかにした。

須貝(2000)は鑄川流域の河岸段丘をQ 1～Q 4面の4面に区分し、Q 3面を離水期a～dの4期に細分し、Q 3 a面は2.1～2.5万年前、Q 3 b面は1.7～2.1万年前、Q 3 c面は1.3～1.7万年前、Q 3 d面は1.3万年前以降とした。この地形面区分ではQ 3 b面が従来の藤岡面に相当する。

竹本(2008)は、鑄川流域の河岸段丘をI～V面の5面に区分し、河岸段丘の成因別の分類を行った。従来の低位段丘面に相当する後期更新世の河岸段丘はIV面～V面に相当し、IV面の離水期は7～2.5万年前の幅を持つが、IV面が従来の藤岡面に相当するとした。また、藤岡粘土の層位は、下部ローム層に相当する5～5.5万年前、上部ローム相当層の2.0万年前後、浅間板鼻黄色テフラ上位の1.2万年前の3層準としている。

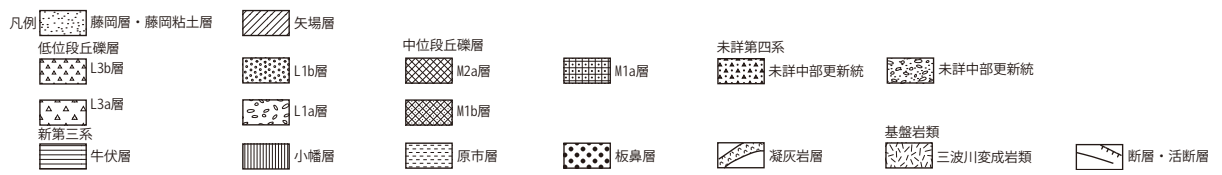
杉山ほか(2009)は神流川と鮎川流域の段丘面を細分し、テフラと層序関係を明らかにして、関東山地北東縁丘陵における活断層の活動期について考察した。鮎川流域及び神流川左岸の河岸段丘は、中段段丘のM 1 a面、M 1 b面、M 2 a面。低位段丘のL 1 a面、L 1 b面、L 2 面、L 3 a面、L 3 b面、L 4 面に区分した。また矢場三ツ橋Ⅱ遺跡周辺に小扇状地面を認めfⅡ面を区分した。またL 3 a～L 4 面は従来の藤岡面に相当する。杉山ほか(2009)を元にした藤岡台地南部の地質図を第4図に示す。

(2) 藤岡台地と矢場扇状地

藤岡台地は神流川と鮎川によって形成された合流扇状地からなり、藤岡扇状地と呼ばれる(群馬県1993)。藤岡台地の離水面は複雑で研究史に示したとおり諸説の解釈がある。これは、平坦な台地上での露頭条件の悪さや扇状地堆積物の被覆層が半水成堆積物であり、明瞭な地形面ごとの離水期が不確実であることなどの理由が求められる。

台地を構成する扇状地堆積物は、結晶片岩やチャート、砂岩など関東山地を構成する岩石からなる砂礫層が主で、粘土やシルト層を地域的に挟在する特徴がある。

藤岡粘土層は、扇状地を構成する堆積物の一部として、その層位や分布について報告されている。しかし、海成粘土や湖成堆積物のように台地総ての地域に一樣に見られるものでなく、その分布は新井(1962)が示したように藤岡台地北部に卓越しているが、扇状地全体では断片的であるように思える。



第4図 藤岡市南部の地質図

藤岡扇状地の中央部に位置する独立丘陵の庚申山の南部には、関東山地とその周縁部を構成する多野丘陵との間に小規模な扇状地群が見られる。かつて関東山地から平野に流れていた三名川が丘陵を越えて形成した扇状地であると考えられ、澤口(2000)はこれを矢場扇状地と呼んだ。

田中ほか(2007)は、矢場扇状地に湿地性の堆積物を認め、後期更新世後半のテフラを検出し、当地の最終氷期から後氷期の花粉化石群集を明らかにした。杉山ほか(2009)は庚申山南部の地形に尾根や河谷の屈曲を認め、神川断層に沿うリニアメントを矢場扇状地と庚申山の境界に認めている。

矢場扇状地は、矢場の集落が立地する丘陵縁の標高140mを扇頂にして、扇端は笹川と前橋長瀬線の現道が交わる標高110m付近である。扇状地の東西は約1.5km、頂部から端部に及ぶ扇状地の大きさは1.6kmほどである。扇状地には幅が40mから80mほどの開析谷が形成され、谷の長さは約500m～800m程である。谷と谷の間は、幅が50mから100m前後の微高地が馬の背状に見られ、扇状地に見られる谷と微高地は掌状の分布を呈している。

2. 発掘地の層序

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡にみられる地層は、矢場扇状地を被覆した黒色土及び扇状地に堆積した更新世から完新世の碎屑性堆積物からなる。発掘地の模式的な層序を柱状図として示し(第5図)、層相や特徴について述べる。

発掘地の地表面を覆う表層土は、碎石や埋め土、畑の耕作土などである。

1層は暗灰色砂から構成される土壌で層厚は20cm程度である。本層には粒径が1mmの発泡の悪い灰色軽石が多く含まれる。軽石を含む土壌はその層相から浅間Bテフラを起源とするものである。

2層は暗灰色の礫がまじる砂から構成される火山灰土で層厚は20cm程度である。本層には結晶片岩やチャートの垂円礫や土器片が多く含まれる。基質は上下の層に比べてやや明るく、灰色がかった火山灰質シルトである。

3層は暗灰色(一部は黒色細粒火山灰土)の礫まじり砂からなる土壌で、下位の礫層との境界は漸移帯が見られる。本層は発掘地内で薄く分布も限られているが黒みの強く細粒の土壌である。

4層は暗灰色の礫まじり砂層から砂礫層である。層厚は40cmで、調査地の北側では黄灰～黄褐色砂礫層に移り変わる。これらの堆積物は扇状地堆積物の最終面を形成した、チャンネルとポイントバーを構成する碎屑性堆積物で、河道のチャンネルを埋めた再堆積の礫と黒色土が4層の主体である。また、黒色土を含まない砂礫層は、ポイントバーを構成する礫質堆積物である。

5層は灰褐色礫まじり砂層からなる河川性堆積物で、砂互層や葉理構造が顕著である。4層の母材となった堆積物の一部であると考えられる。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査は、遺構検出面を2層中に見いだして進めた。これは2層中の黒色土から竪穴住居の一部を構成するカマドの痕跡が検出できたからである。また一部の検出面では3層もしくは4層の上面を検出面とした。なお、遺構と基本層序の関係は、調査地の壁際や表土及び遺構検出中に確認した。

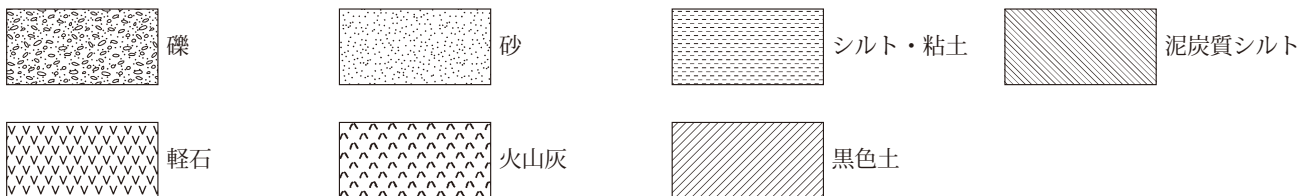
基本層序と遺構群の関係は、以下のとおりである。中世以降の遺構群である1号～5号溝、7号～11号溝及び1号～6号井戸は、1層ないし1層と2層の層理面から掘り込まれた遺構である。それ以外の竪穴住居と6号溝、12号溝は2層と3～4層の層理面から掘り込まれている。なお、掘立柱建物と一部の土坑に関しては、掘り込まれた層位の特定は困難である。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の表層を構成する地層は、1層から4層でこれらの地層は、地表面から深度が1mあまりの地層群である。これらは下位の水成堆積物を被覆した土壌であり、黒色土に区分した。黒色土と水成堆積物の漸移帯を構成する4層よりも下位の地層群を矢場層と呼ぶことにする。

矢場層は層厚540cmで、砂礫層とシルト～粘土層の互層及び火山灰層から構成される水成～半水成堆積物である。地表化から-2.3mには灰色軽石を含む粗粒テフラが見られた。また-4.9mには桃灰色粗粒火山灰互層と灰色軽石層からなるテフラが見られた。これらのテフラはいずれも複輝石安山岩質軽石テフラからなり浅間火山を起源とするテフラであると思われる。層相や鉱物組成の特徴から上位のテフラは浅間Dテフラに対比される可能性があり、下位のテフラは浅間板鼻黄色テフラに対比される。

田中ほか(2007)は、矢場扇状地の3カ所で水路の露頭

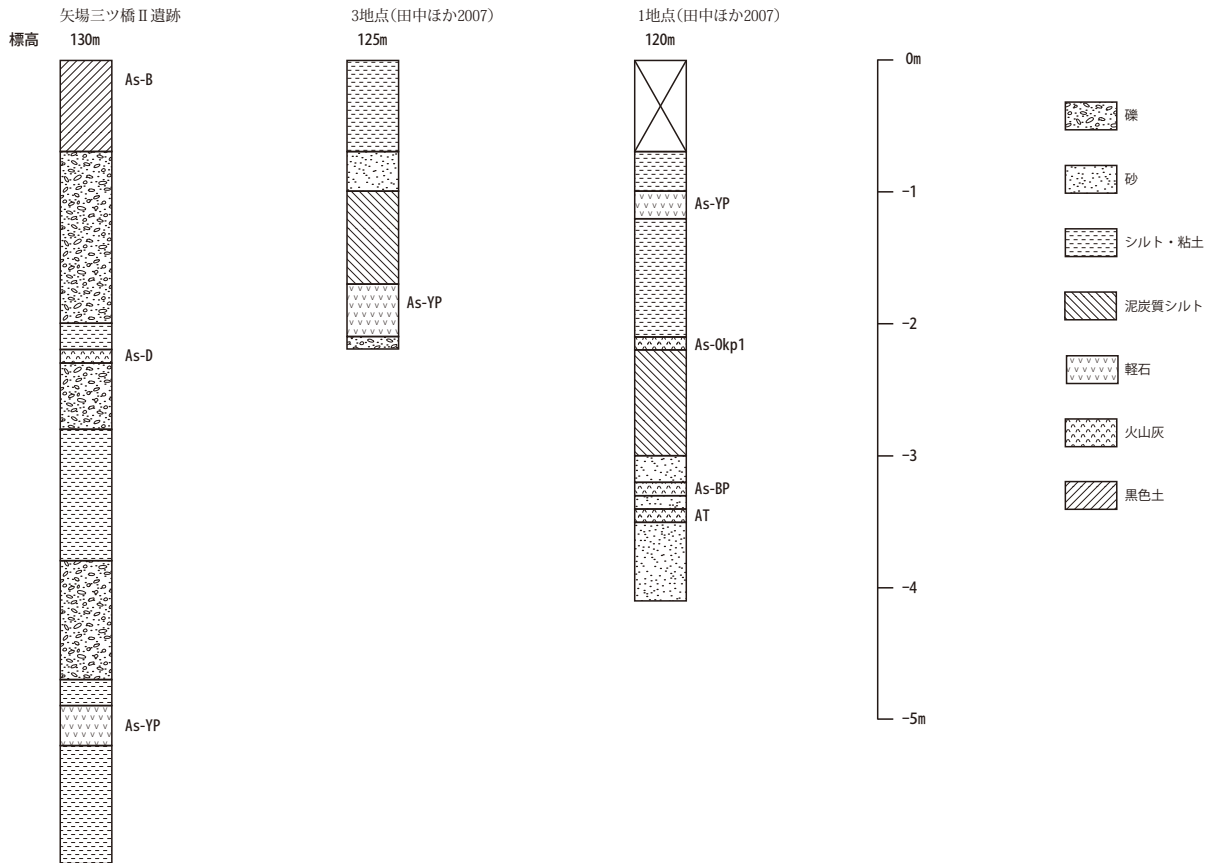
層序区分	層厚 (cm)	柱状図	層相	基本土層	テフラ	堆積相
黒色土	20		表土・耕作土・碎石	表土		
	20		暗灰色シルト質砂(土)層。径1mmの灰色軽石を含む。	1層	As-B	
	20		暗灰色礫混じり細粒～中粒砂(土)層。上下に比べて火山灰質で明るい灰色を呈する。	2層		
	10		黒～暗灰色礫混じり中粒砂(土)層。下位は礫層と漸移帯を呈する。	3層		
矢場層	40		暗灰色礫混じり中粒砂～礫層。礫層の基質は、粗粒～中粒砂。礫は径20～40mmの亜円礫。4層は遺跡の全域には分布せず、部分的に欠損している。	4層		離水
	30		灰～灰褐色礫混じり粗粒～極粗粒砂層。ラミナの発達する水成層である。	5層		氾濫
	20		黄灰色シルト質細粒～中粒砂層。上面は土壌化して腐植による暗灰色を呈する。			
	40		灰～青灰色シルト質中粒～粗粒砂層。径10mmの礫を含み、ラミナが見られる。			氾濫
	20		暗灰～黄灰色火山灰質シルトまじり細粒～極細粒砂層。下半部は土壌化している。			
	10		灰褐～暗灰色軽石まじり中粒～細粒砂層。径2～5mmの複輝石安山岩質灰色軽石を多く含む。		As-D	
	50		暗灰色極粗粒～粗粒砂層。径5～10mmの亜円礫を含む。上方に粗粒化する堆積構造が見られる。			氾濫
	100		黄灰色シルト質極細粒～細粒砂層。塊状無層理を呈する。			
	90		褐～青灰色砂礫層互層。径10～30mmの亜円礫～亜角礫からなる。			氾濫
	20		黄灰色火山灰質シルト～粘土層。塊状無層理を呈する。			
30		黄灰色軽石層。上位10cmは桃灰色粗粒火山灰互層からなる。軽石は径5～15mm。		As-YP		
90+		青灰色シルト～粘土層。中位に層厚10cmの青灰色砂礫層を挟む。				



第5図 発掘地の基本層序

観察及びボーリングによる地下地質に基づく層序を報告している(第6図)。それによれば矢場扇状地の堆積物は、地表下-1～2mに浅間板鼻黄色テフラ、-3.5mまでに始良Inテフラなどの上部ローム相当層のテフラを挟在している。これらのテフラを挟在する堆積物は、泥炭質シルトやシルト～粘土、砂層などの湿地性堆積物である。

田中ほか(2007)の堆積物の層序と矢場三ツ橋II遺跡で検出された矢場層の層序や層相と比較すると、扇状地東部では粗粒堆積物が少なく、また浅間板鼻黄色テフラの深さも地表から浅い。しかし、扇状地の三カ所での浅間板鼻黄色テフラの標高は120～125m前後にあるので、テフラは概ね平坦な地形に堆積していると考えられる。こ



第6図 矢場扇状地に分布する矢場層の層序対比

うした資料からは、矢場扇状地の扇頂から扇央にかけての礫層を主体とする堆積物は、完新世に形成されたと考えてよいだろう。扇状地の西縁に位置する矢場三ツ橋Ⅱ遺跡にみられる矢場層の主体は、最終氷期以降の晩氷期以降に形成されたものと考えられる。

3. 遺跡の歴史的環境

(1) 藤岡台地南部の遺跡分布

群馬文化財情報システムWEB版に掲載された藤岡台地の遺跡分布は、台地中央部を遺跡の空白部が占め、鮎川と神流川付近を境界にした同心円状の分布が見られる。

烏川を挟んだ高崎台地や前橋台地南部が台地上の微高地に遺跡の分布が密なのにくらべ、藤岡台地では川沿いの段丘面以外の台地中心部に遺跡の分布密度が低く、なおかつ広いといった特徴がある。これは、藤岡台地の西部に隣接する鐮川の段丘面上の遺跡の分布密度とは好対照である。

これらの台地や段丘面は、後期更新世及びその末期に形成されているが、その時代や成因は異なっている。また、それぞれの台地も起源の異なる水系や背景となる山

地や火山に違いを有している。この地域の遺跡分布の理解は歴史的な環境を基本にしながらも自然環境や地形発達史的な観点が欠かせないように思われる。

(2) 旧石器時代から縄文時代

藤岡台地南部周辺の旧石器時代の遺跡は、群馬県中央部の赤城山麓などに比べて少なく、遺跡は丘陵地や鮎川の段丘面に立地する(第7図)。

鮎川左岸の台地上にある旧石器時代の遺跡は、両面加工石器や搔器が出土した竹沼遺跡(群馬県藤岡市教育委員会1978、以下藤岡市教委と略す)やナイフ形石器が表面採取された緑埜島遺跡である。緑埜上郷遺跡(藤岡市教委1986)では始良Tnテフラ降灰層準のローム層からチャートの剥片が出土した。

藤岡台地の中央に位置する庚申山の丘陵北部には、藤岡北山遺跡、藤岡北山B遺跡(藤岡市教委1995)、山間遺跡が見られる。藤岡北山遺跡や藤岡北山B遺跡では始良Tnテフラ前後から上位の中部～上部ローム層で2層の文化層が検出されている。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡に近い、多野丘陵縁の台地に立地する矢場前原遺跡(藤岡市教委2006)からは浅間板鼻褐色テ



第7図 藤岡台地南部の遺跡(上段は25000分の1地形図「藤岡」図幅(平成5年4月1日発行)を、
下段は藤岡市都市計画区域図 24、25、30、31 (平成15年10月修正)を使用した)

上段：1. 竹沼遺跡 2. 緑埜島遺跡 3. 緑埜上郷遺跡 4. 藤岡北山遺跡 5. 藤岡北山B遺跡 6. 山間遺跡 7. 矢場前原遺跡 8. 打越遺跡 9. 南大谷遺跡 10. 平塚台遺跡 11. 東平井寺西遺跡 12. 富士井戸I遺跡 13. 倉谷戸遺跡 14. 道上I遺跡 15. 道上II遺跡 16. 道上D遺跡 17. 松ノ木田遺跡 18. 矢場田中遺跡 19. 倉谷戸B遺跡 20. 矢場三ツ橋遺跡 21. 三本木中道東遺跡 22. 森附I遺跡 23. 森附II遺跡 24. 富士井戸II遺跡 25. 富士井戸IIb遺跡 26. 土井山遺跡 27. 下日野金井窯址群 28. 竹沼窯址群 29. 東平井土井下遺跡 30. 東平井官正前遺跡 31. 白石大御堂遺跡 32. 猿川遺跡 33. 平井城 34. 金山城 35. 常岡城 36. 矢場三ツ橋II遺跡 37. 神田三本木古墳群 38. 小林古墳群 39. 白石古墳群 40. 緑埜古墳群 41. 東平井古墳群 42. 大平古墳群・金井古墳群 43. 南坂古墳群 44. 金山下古墳群

下段：①. 矢場三ツ橋II遺跡 ②. 道上I遺跡 ③. 道上II遺跡 ④. 道上D遺跡 ⑤. 松ノ木田遺跡D区 ⑥. 松ノ木田遺跡E区 ⑦. 松ノ木田遺跡A区 ⑧. 松ノ木田遺跡B区 ⑨. 松ノ木田遺跡C区 ⑩. 矢場田中遺跡A区 ⑪. 矢場田中遺跡B区 ⑫. 矢場田中遺跡D区 ⑬. 矢場田中遺跡C区 ⑭. 矢場田中遺跡E区 ⑮. 倉谷戸遺跡 ⑯. 倉谷戸B遺跡 ⑰. 三目川原I遺跡 ⑱. 三目川原II遺跡 ⑲. 東平井土井下遺跡 ⑳. 矢場三ツ橋遺跡 ㉑. 道者道遺跡 ㉒. 矢場境I遺跡 ㉓. 矢場境II遺跡

フラと始良Tnテフラの間の上部ローム層からナイフ形石器などの石器が出土した。また三名川と境川の中間にある丘陵に位置する打越遺跡(藤岡市教委1999)では始良Tnテフラ層準から剥片が出土した。

藤岡台地南部周辺の縄文時代の遺跡も周辺の地域にくらべて多くはない。遺跡は丘陵地や河岸段丘のほか藤岡台地にも立地する。

竹沼遺跡では古墳時代の竪穴住居から有茎尖頭器が、藤岡北山B遺跡では浅間板鼻黄色テフラ直下より縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した。多野丘陵の境川左岸の南斜面に立地する南大谷遺跡や平塚台遺跡(藤岡市教委1994b)では、縄文時代早期の沈線文系～条痕文系土器から前期及び中期初頭の五領ヶ台式土器までが出土した。

縄文時代前期の集落遺跡では、藤岡北山B遺跡で竪穴住居が7棟検出され、時期は縄文時代前期前半から後半にわたり、黒浜式や諸磯式土器が出土した。南大谷遺跡からは、縄文時代前期の竪穴住居が4棟検出され、時期は縄文時代前期後半で諸磯式土器が出土した。

縄文時代中期になると藤岡台地南部周辺でも竪穴住居を伴う集落遺跡が増加するが、周辺の地域にくらべて多くはない。藤岡北山B遺跡では縄文時代中期から後期の竪穴住居が9棟検出された。平塚台遺跡では、縄文時代中期の竪穴住居が7棟、土坑も147基が検出され、時期は縄文時代中期初頭から後半で五領ヶ台式、阿玉台式、加曾利E式土器が出土した。

鮎川右岸の段丘面上に立地する東平井寺西遺跡(藤岡市教委2001)では、縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落が発掘され、敷石をもつ竪穴住居を含む竪穴住居17棟、屋外炉・配石遺構8基、長径が45mの環状列石が検出されている。富士井戸I遺跡(藤岡市教委1994a)や竹沼遺跡では中期後半の竪穴住居が2棟検出され、加曾

利E式土器が出土した。

矢場扇状地では、扇端付近に位置する倉谷戸遺跡(藤岡市教委1999)で縄文時代中期後半の竪穴住居が2棟検出され、加曾利E式土器が出土した。

藤岡台地では縄文時代中期から後期にかけて標高の低い台地北部に遺跡が多く見られ、谷地遺跡などでは晩期初頭まで継続している。

(3) 弥生時代から古墳時代及び飛鳥時代

藤岡台地北部の低地に位置する沖II遺跡では弥生時代前期から中期の遺物包含層と再埋葬が発見されており、再埋葬から出土した資料は県指定重要文化財に指定された。竹沼遺跡では、弥生時代中期の土坑1基と古墳時代前期の竪穴住居2棟が検出され、吉ヶ谷系の古式土師器が出土した。また古墳時代中期の竪穴住居1棟、後期の竪穴住居は26棟が検出され、うち9棟は滑石製品の制作跡であると考えられている。また、当事業団が発掘した竹沼遺跡(事業団1997)では弥生時代後期の竪穴住居1棟、古墳時代後期の竪穴住居34棟が検出されている。

藤岡台地周辺の古墳群は、鮎川や神流川の段丘面上に列状の分布を呈するが、台地内には古墳群の分布が皆無である。これは、この時代の大規模な集落遺跡の分布も同様であると思われる、藤岡台地を構成する扇状地が当時の農地開発の途上地ないし、未開発の空闲地であったことを示唆する。

古墳時代以降の藤岡台地東部の神流川沿いには、南から三角縁神獣鏡を出土したと伝えられる古墳を含む古墳時代後期を中心とした神田三本木古墳群がみられる。また方形周溝墓が発掘された4世紀代の古墳を含む小林古墳群、5世紀築造の稲荷塚古墳を含む戸塚古墳群などが見られる。

古墳時代の藤岡台地北西部は、鮎川と鑄川を望む段丘上に5～6世紀代に白石稲荷山古墳や七興山古墳などの

第2章 遺跡の地理的、歴史的環境

第2表 矢場三ツ橋Ⅱ遺跡周辺の遺跡

市町村 遺跡番号	遺跡 略称	遺跡名称	調査面積 (㎡)	調査区	遺跡の時代							竪穴住居の棟数				文献			
					旧石器	縄文	弥生	古墳～飛鳥	奈良	平安	中世	近世	縄文	古墳～飛鳥	奈良		平安		
調160	E3	道上Ⅰ	860					○		○			0	10		1			
調159		道上Ⅱ	590			○		○	○				0	9					
調159	E3 c	道上Ⅲ						○								2			
調307	E21f	道上D	900					○	○	○			0	11	1		4		
調306	E21e	松ノ木田	12,596	A						○	○		0	0	2	1	3		
				B						○	○		0	1	0	3			
				C							○	○		0	1	0		3	
				D							○	○	○	○	0	4		15	25
				E							○	○	○	○	0	0		2	3
調304	E21b	矢場神明	44						○	○									
調303	E21c	倉谷戸B	770				○	○	○			0	3	3	8				
調305	E21 d	矢場田中	8,200	A				○		○	○		0	0	0	1			
				B				○	○	○		○	0	9	5	40			
				C				○	○	○			0	10	0	42			
				D				○	○	○			0	2	2	8			
				E				○	○	○	○	○	0	18	12	36			
調238	E15c	倉谷戸	3,000			○		○	○	○		2	3	6	6	4			
調293	E20	三本木中道東	1,623				○			○		0	2	0	3	5			
調147		東平井土井下	5,440						○	○		0	0	0	4	6			
調139		東平井官正前	4,500						○	○	○	0	0	0	5				
調298	E21a	矢場前原	22,000		○	○		○	○	○		0	186	9	21	7			
調150	F12a	森附Ⅰ	600				○		○			0	7	0	0	8			
調148	F12b	森附Ⅱ	1,800				○	○	○			0	10	3	2				
調144	F12c	富士井戸Ⅰ	1,200			○		○	○	○		1	1	4	1				
調239	F12d	富士井戸Ⅱ	750			○		○	○			0	9	2	1				
調138	F12e	官正前	500							○									
調149	F12f	藤岡平地区水田址	750						○			1	0	0	0				
	F21	東平井出口	140			○			○							9			
調155		藤岡平地区水田址	400						○										
調236		東平井天水	370						○										
調133		東平井中道A	5,700						○	○									
調235		東平井藤岡道A	1,200						○	○									
調232		傳鎌倉街道関連	370							○									
調230	F22	東平井遠東	1,500						○	○		0	0	2	1				
調231		鮎川下天水	1,000						○	○									
調233		藤岡平地区水田址	300						○										
調232		傳鎌倉街道関連	200							○									
調140	F14	官正前B	21,000						○	○		0	0	0	7	10			
調143		富士井戸ⅡB				○		○	○			0	9	2	1				
調151		土井山			○		○	○	○			1	1	0	14				
調146		三目川原Ⅰ						○	○			0	0	2	1				
調141		東平井土井下						○	○			0	0	1	1				
調153		矢場三ツ橋				○		○	○			0	1	0	5				
調157		六反田							○			0	0	0	1				
調145		猿川								○									
調154		三目川原Ⅱ																	
調137		道者道							○	○									
調158		矢場境Ⅰ							○	○									
調156		矢場境Ⅱ							○	○									
		藤岡平地区水田址							○										
合計			98,303									5	307	73	248				

文献

- 1.群馬県藤岡市教育委員会1987『E3道場遺跡』26P.
- 2.群馬県藤岡市教育委員会1992『年報7』.
- 3.群馬県藤岡市教育委員会2008『矢場神明遺跡・倉谷戸B遺跡・矢場田中遺跡・松ノ木田遺跡・道上D遺跡』350P.
- 4.群馬県藤岡市教育委員会1999『八王子遺跡・打越遺跡・倉谷戸遺跡・三本木清水Ⅱ遺跡・八王子下遺跡・赤坂遺跡』145P.
- 5.群馬県藤岡市教育委員会2004『東京電力中東京幹線一部増強に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』69P.
- 6.財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡』270P.
- 7.群馬県藤岡市教育委員会2006『矢場前原遺跡』426P.
- 8.群馬県藤岡市教育委員会1994『F12藤岡平地区遺跡群』288P.
- 9.群馬県藤岡市教育委員会1997『F21・F22藤岡平地区遺跡群』126P.
- 10.群馬県藤岡市教育委員会1995『F14藤岡平地区遺跡群Ⅱ』334P.

大型前方後円墳が築かれた白石古墳群がある。この地域は当時の上毛野国と呼ばれた地域の中心の一角であり、『日本書紀』の安閑紀に緑野屯倉が置かれたとされる伝承地でもある。

藤岡台地南部は鮎川右岸に立地する東平井古墳群がみられ、南北2kmの分布に及ぶ6世紀代の円墳群からなる。周辺には鮎川左岸の緑埜古墳群や南坂古墳群がみられる。

藤岡台地南部の古墳時代から飛鳥時代の集落遺跡は、6世紀後半から急増する。矢場三ツ橋Ⅱ遺跡周辺の遺跡でも同様の傾向がある(第2表)。矢場三ツ橋Ⅱ遺跡に隣接する道上Ⅰ遺跡、道上Ⅱ遺跡では古墳時代から平安時代の竪穴住居が19棟検出されている。

矢場扇状地内に立地する古墳時代後期の集落遺跡の竪穴住居は、道上D遺跡が11棟、松ノ木田遺跡で6棟、矢場田中遺跡で39棟、倉谷戸遺跡及び倉谷戸B遺跡で6棟、矢場三ツ橋遺跡で1棟である。矢場扇状地と丘陵の境界にある矢場前原遺跡では186棟、丘陵内の三本木中道東遺跡で2棟の竪穴住居が検出されている。

矢場扇状地西部の藤岡台地の平坦部では、森附Ⅰ遺跡と森附Ⅱ遺跡で17棟、富士井戸Ⅰ遺跡と富士井戸Ⅱ遺跡、富士井戸Ⅱb遺跡で19棟、土井山遺跡で1棟が検出されている。

矢場扇状地周辺の古墳時代後期から飛鳥時代(6世紀から7世紀)の集落遺跡で発掘された竪穴住居は、現時点で総計288棟であり調査面積あたりの竪穴住居棟数は2.9棟/1000㎡である。これを地形別に見ると丘陵から扇状地にかけての矢場前原遺跡は8.5棟/1000㎡、矢場扇状地の集落は2.2棟/1000㎡、扇状地西部の台地平坦部は0.8棟/1000㎡であり、地形による竪穴住居の検出密度の差が顕著である。

(4) 奈良時代から平安時代

飛鳥時代の7世紀後半には律令制の基礎が完成し、この頃に各国には郡制が導入され、地方には評が設けられたとされている。上野国は古代の東山道にあたり、国内には14郡が存在した。藤岡市付近は緑野郡に相当し、その範囲は概ね現在の藤岡市と奥多野を含む範囲と考えられている。

平安時代に編纂された『和名類聚抄』には、緑野郡に林原、小野、升茂、高足、佐味、大前、山高、尾張、保美、

土師、俘囚の11郷が記されている。古代の郷に比定される現在の大字地名は、佐味郷が三本木、神田、矢場。山高郷が高山、西平井、東平井、金井とされている(菅原ほか2000a)。

藤岡台地南部は、古墳時代6世紀後半に集落遺跡が出現し、以降に遺跡が増加している。この時期に集落遺跡が急増するのは佐味郷や山高郷に比定される郷の農地開発が進んだことに加え、周辺の産業開発も関係している。

緑野郡の西部は古代の窯業生産地であり、下日野・金井窯址群や竹沼窯址群は7世紀後半から9世紀後半にかけて大量の須恵器を生産した。同様に瓦もこの地で作られ8世紀中頃から9世紀中頃まで瓦生産が行われ、県央地域に供給されたと考えられている。

また下日野金井窯址群D地点では奈良時代の精錬炉が3基、鮎川右岸の稲荷屋敷遺跡では平安時代の精錬炉が3基検出されており、藤岡市西部は古代の製鉄関連の遺跡が多く見つかっている。このような遺跡分布のあり方は、古代緑野郡の鮎川流域が当時の上野国南部における一大産業集積地であったことを伺わせる。

矢場扇状地内に立地する奈良時代から平安時代の集落遺跡の竪穴住居は、道上D遺跡が5棟、松ノ木田遺跡で54棟、矢場田中遺跡で146棟、倉谷戸遺跡及び倉谷戸B遺跡で23棟、矢場三ツ橋遺跡で5棟である。矢場扇状地と丘陵の境界にある矢場前原遺跡では30棟の竪穴住居が検出されている。

矢場扇状地西部の藤岡台地の平坦部では、東平井土井下遺跡と東平井官正前遺跡で9棟、森附Ⅰ遺跡と森附Ⅱ遺跡で5棟、富士井戸Ⅰ遺跡と富士井戸Ⅱ遺跡、富士井戸Ⅱb遺跡で11棟、土井山遺跡で14棟が検出されている。

矢場扇状地周辺の奈良時代から平安時代(8世紀から10世紀)の集落遺跡で発掘された竪穴住居は、現時点で総計321棟であり調査面積あたりの竪穴住居棟数は3.3棟/1000㎡である。これを地形別に見ると丘陵から扇状地にかけての矢場前原遺跡は1.4棟/1000㎡、矢場扇状地の集落は6.2棟/1000㎡、扇状地西部の台地平坦部は1.3棟/1000㎡であり、地形による集落の竪穴住居の検出密度の差や古墳時代の密度との増減変化が顕著である。

(5) 中世以降

平安時代末の12世紀になると上野国各地では農地開発が活発になったとされている。また、この時期の開発は

天仁元年(1108年)の浅間火山の噴火による浅間Bテフラの降灰によって荒廃した農地の再開発であり、その担い手は中央政府や国府ではなく、在地の地方勢力が主体であったと考えられている。

天承元年(1131)には藤岡台地南部で伊勢神宮の荘園として高山御厨が成立している。建久3年(1192)の『神宮雑書』には高山御厨が永治2年(1142)に国役を免除され、伊勢神宮に布を納めていたと記されている。

また、藤岡市南部には高山御厨に関連がある伝承が各地に残されている。大字の神田は伊勢神宮へ上納する水田地で、本郷にある椿杜神社は祭神が豊受大神で、以前は神田の小字神明にあって神明社と呼ばれていた。矢場の御巡部(みくるべ)神社は、古く御括戸(みくりと)大明神と呼ばれており、御厨(みくりや)との関連性を窺わせる。などである(菅原ほか2000b)。

このように高山の地名が残る山高郷から佐味郷の範囲は、およそ当初の高山御厨の範囲に相当し、文和2年(1353)の長楽寺文書に登場する高山庄は、藤岡市の市域に相当すると考えられる。高山御厨も同様の範囲を指している可能性が高い。

高山御厨を含む藤岡台地南部を拠点とした在地の地方勢力は、高山氏と呼ばれる武士団である。高山氏は坂東平氏の流れをくむ秩父氏の支族であるといわれている。

おそらくは北埼玉に勢力を伸ばした畠山氏、丹党、児玉党などと同様に平安時代末に関東山地北東部に進出し、農地開発や窯業、製鉄などの産業にも関わりをもつ勢力で、高山御厨の成立に深く関与したことが容易に想像される。

高山氏は平良文を祖とする坂東平氏の流れである秩父氏から分かれたとされ、秩父重綱の三男である秩父三郎が高山を名乗り、高山三郎重遠が初代とされる。高山氏の次世代は、重遠の長男重久が高山氏を、次男重幸が小林氏を名乗ることから、後の高山庄にあたる藤岡市域の全域に勢力を拡大した可能性がある。

高山重久が登場した12世紀は、群馬県南部に多胡荘が仁平3年(1153)から立荘され、源義賢が進出した頃である。高山氏は秩父氏と同様に源義賢との連携が予想される。源義賢は久寿2年(1155)の大蔵合戦で源義朝に敗れ、秩父氏はその後に源義朝の配下に入るが、高山氏は治承・寿永の乱での横田河原の戦いで治承5年(1181)に源義賢

の子である木曾義仲に従い参戦している。

寿永3年(1184)には高山氏は源範頼に従い入京し、元暦元年(1184)に高山重遠が佐々木盛綱に従って備前国で平家と戦っている。高山氏はその後、鎌倉幕府の体制下で当地の地頭として定着し、13世紀後半には鎌倉將軍家の側近として活躍し、支族の小林氏などと伴に在地勢力としての地位を保った。

鮎川左岸に位置する白石大御堂遺跡(事業団1991)は、「浄土式庭園」である園地遺構やその後の墓域などが検出され、青磁片や手捏成形の在地系土器の皿なども出土している。園地遺構群は12世紀後半に造立され14世紀代まで継続した80m四方の規模を持つ寺院の一部であると考えられている。このような寺院造立の背景には、この地の地域開発に成功して在地領主となった高山氏との関わりが想定され、その政治的、文化的水準や経済基盤の大きさを物語る遺跡であると考えてよい。

14世紀代まで継続した寺院遺構は、15世紀後半には中世の墓域に転換する。このような土地利用の変化は15世紀から高山氏に替わって当地に入った関東管領の上杉氏の支配に関連があるのかも知れない。

藤岡市南部の鮎川右岸にある平井城は、永享10年(1438年)に関東管領の上杉憲実が入城し、山内上杉氏の居城として天文21年(1552年)の後北条氏に侵攻まで栄えた。城下町にあたる西平井の集落は15世紀から16世紀にかけて繁栄したと伝承されている。

藤岡台地北部の上栗須寺前遺跡群(事業団1996)では、中世の館群が検出され、土坑から銅製香炉や花瓶、青磁碗・小皿、白磁小皿・角杯などが出土した。館は14世紀後半に存在が推定される「栗須南殿」に比定され、土坑はこの時期の埋納遺構と考えられる。出土した遺物は14世紀後半の年代を示し、密教儀式の「密壇供」を模した埋納品と考えられる。

矢場扇状地の西に位置する猿川遺跡(藤岡市教委1995)では、中世の墓坑や土坑群が検出され、板碑や14世紀代の中国陶磁器の青白磁壺が出土した。これらは当時の威信財である陶磁器が出土したことから、地域の有力者に関連する遺構である可能性が高い。

第3章 調査された遺構と遺物

1. 調査の概要

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡で検出された主要な遺構は、竪穴住居67棟、掘立柱建物3棟、溝12条、井戸6基、土坑32基である(第8図)。調査地は全体で4330㎡であるため調査区は設定しなかった。検出された遺構群の位置の概要を把握するため、遺構の位置を示す名称は3号溝から北を北部、5号溝の東西を中央部、それ以南を南東部と呼称した。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した竪穴住居は古墳時代後期から平安時代のもので67棟である。竪穴住居の年代ごとの内訳は、6世紀が33棟、7世紀が13棟(古墳時代～飛鳥時代は46棟)、8世紀が5棟(可能性があるものを含め6棟)、9世紀が6棟、10世紀は9棟である。竪穴住居は貼り床の認定が難しく、硬化面などは認められない。床面の認定は埋土と掘方埋土の境界付近に遺物の出土状況や礫の層位などを参考に推定した。掘立柱建物はすべて中世に属し3棟である。溝12条の内訳は、古墳時代から中世以前が2条、古代～中世が4条、中世の溝が6条である。井戸は6基のすべてが中世に帰属し、土坑やピット33基は年代不詳の遺構がほとんどであるが、古墳時代から中世以前が11基、中世に属するものが7基である。これらの土坑の年代には可能性のあるものを含む。

発掘地で検出された遺構は主に自然埋没で堆積した埋土からなるが、人為的な埋没の可能性のある埋土については、それを記載した。

2. 竪穴住居

1号竪穴住居(第9図、PL.5-1～5-4・48、208頁)

位置 北部西寄り。

座標 X=24740～24744 Y=-70301～-70305

主軸方位 N67° E

重複 2号竪穴住居に切られるが、平面での境界は不明瞭である。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、隅の丸い歪んだ方

形を呈する。長径は3.34m、短径3.20m、床面までの深さ0.13m、掘方までの深さ0.36m、面積9.09㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂が水平に堆積している。

床面 暗灰色砂で床を構築している。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.10mで、全体に浅い凹み状を呈する。北側の壁際には長径1.10m、短径0.70m、深さが0.08mの楕円形を呈した土坑状の窪みを検出した。

カマド 床面で検出されなかった。焼土帯やカマド掘方の痕跡も認められない。東壁際の床面に残された土器の密集部(3・4・6)には少量の焼土ブロックが検出された。これらが破壊されたカマドの残骸である可能性がある。

柱穴 床面の精査では検出できず、掘方でピット1や2を検出したがその位置からは柱穴と考えにくい。

ピット1は長径0.28m、短径0.24m、深さ0.11m。

ピット2は長径0.50m、短径0.30m、深さ0.10m。

特徴 一辺が3mあまりの小規模な竪穴住居であり、床面に主柱となる柱穴が認められない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土からTK43に比定される須恵器杯身(1)や床面から小型甕(2)や甕(3・4・6)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

2号竪穴住居(第10・11・12図、PL.5-5～6-4・48・49、208頁)

位置 北部西寄り。

座標 X=24736～24741 Y=-70303～-70308

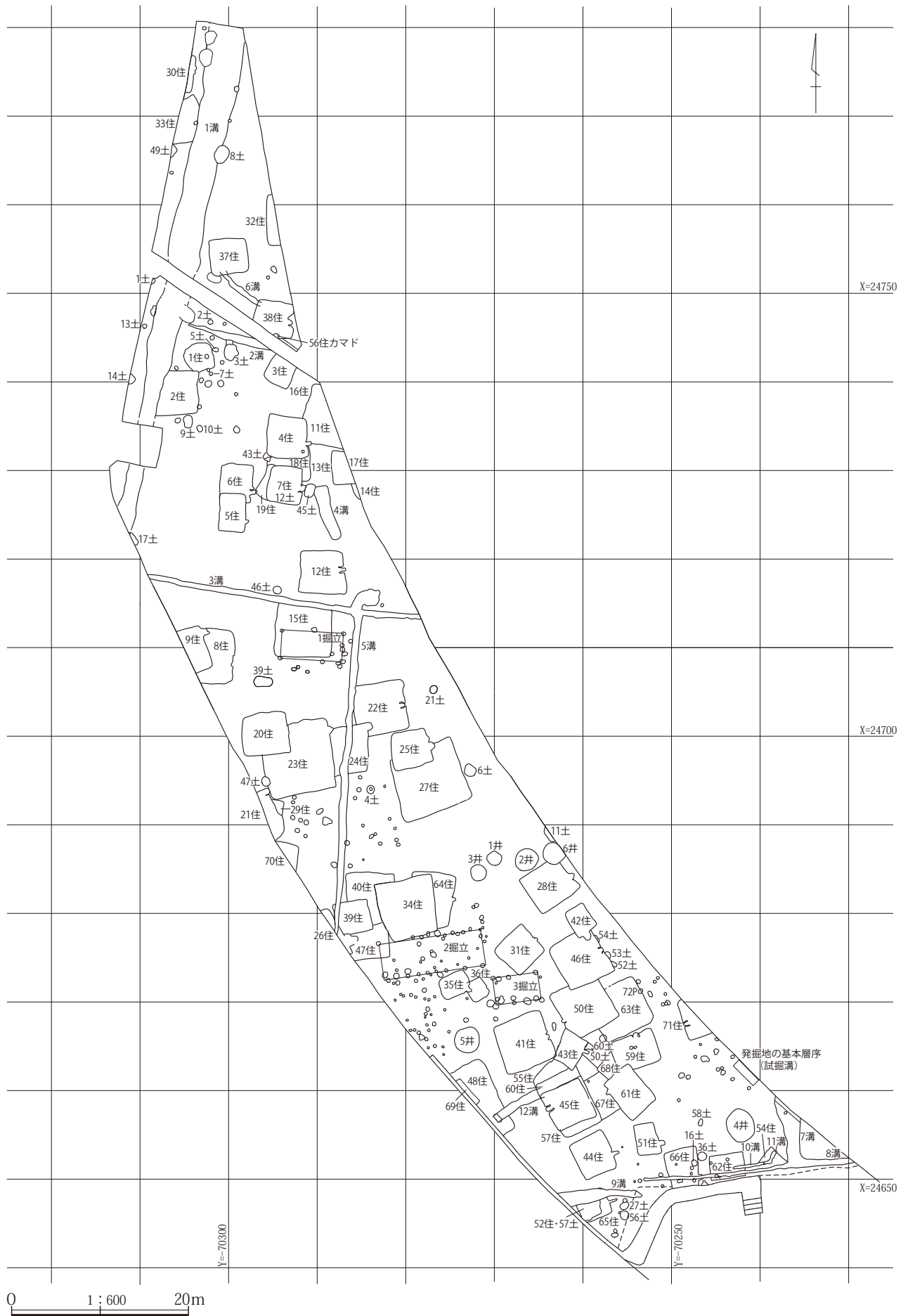
主軸方位 N1° E

重複 1号竪穴住居を切り、1号溝に切られる。

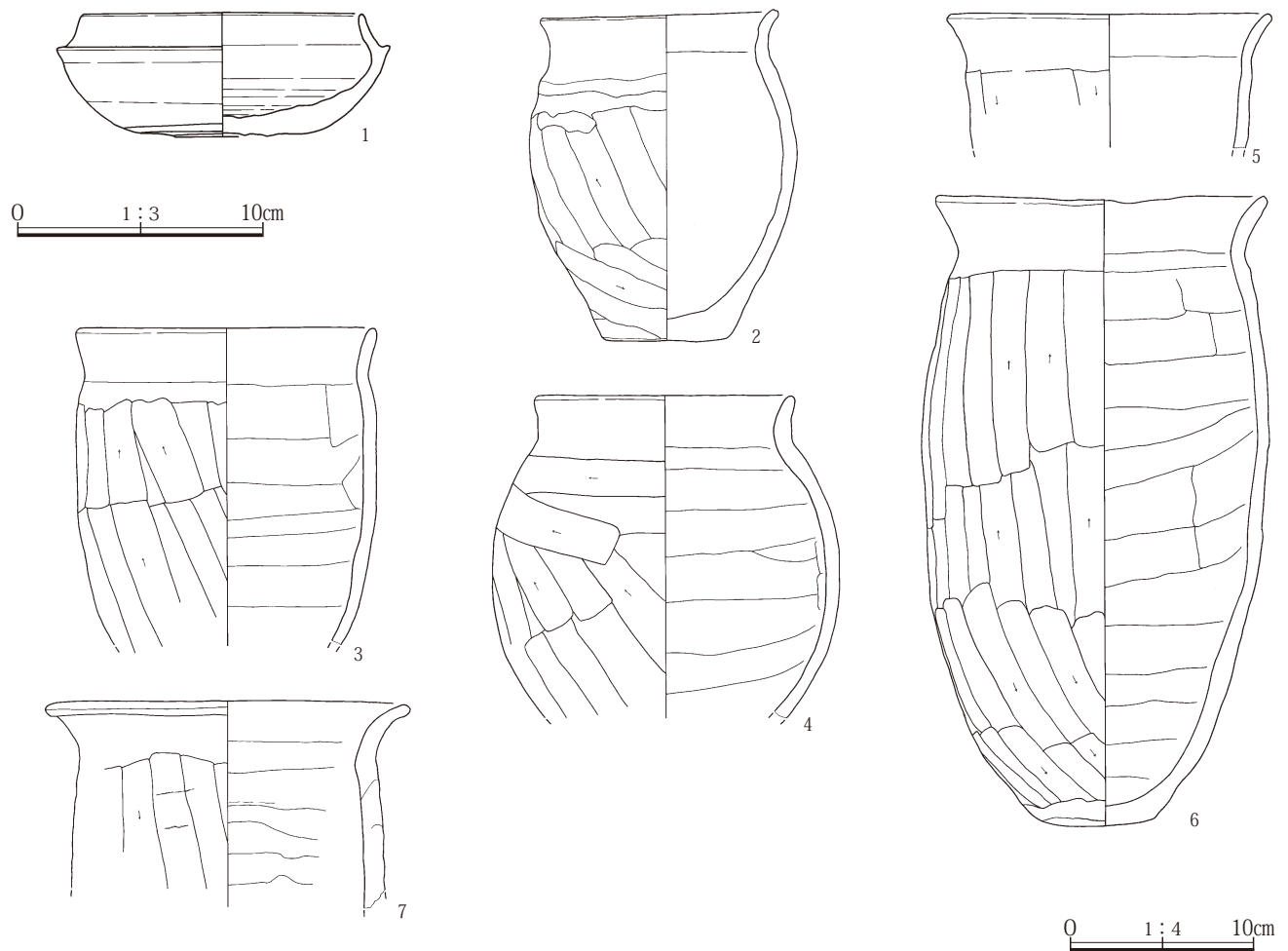
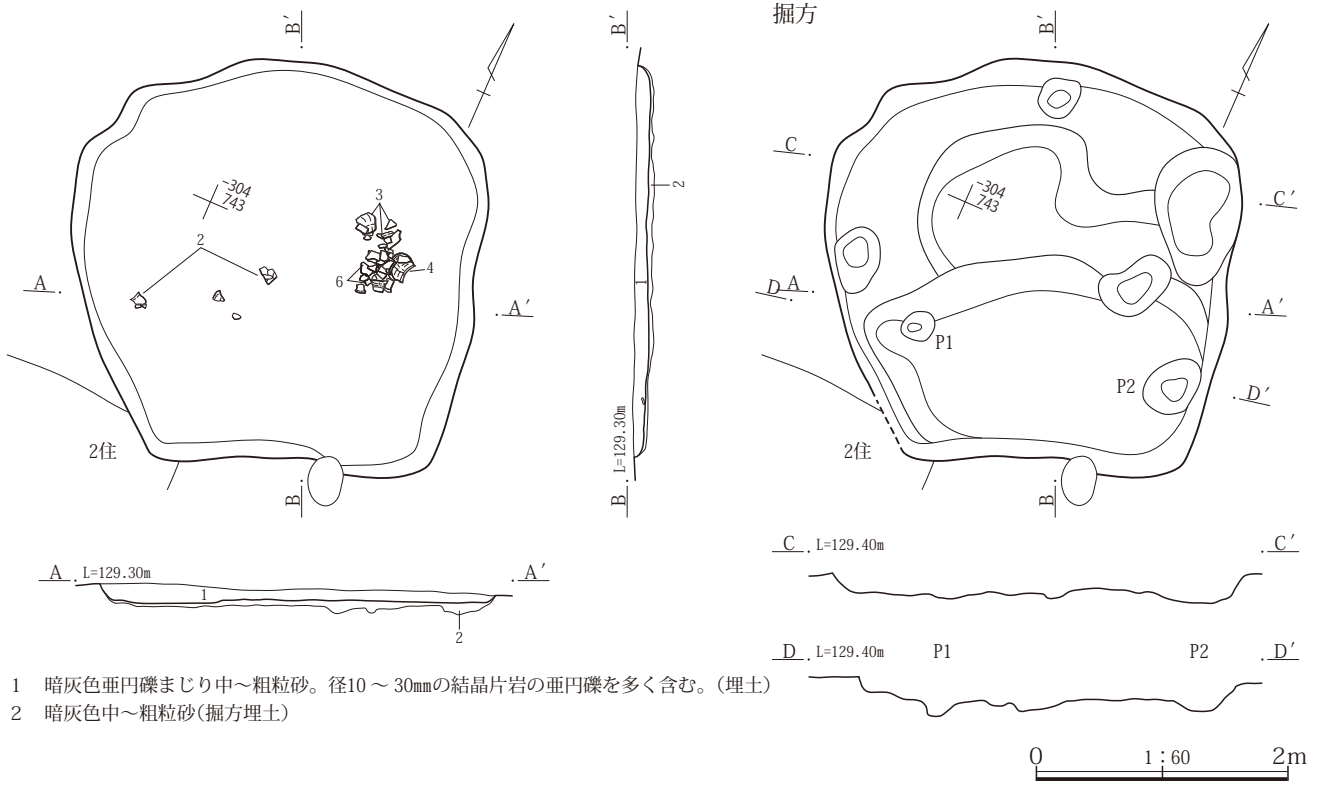
形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈するが北西側が1号溝で失われている。長径は5.08m、残存する最大の短径は4.62m+、床面までの深さ0.16m、掘方までの深さ0.22m、残存する面積は21.07㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり砂

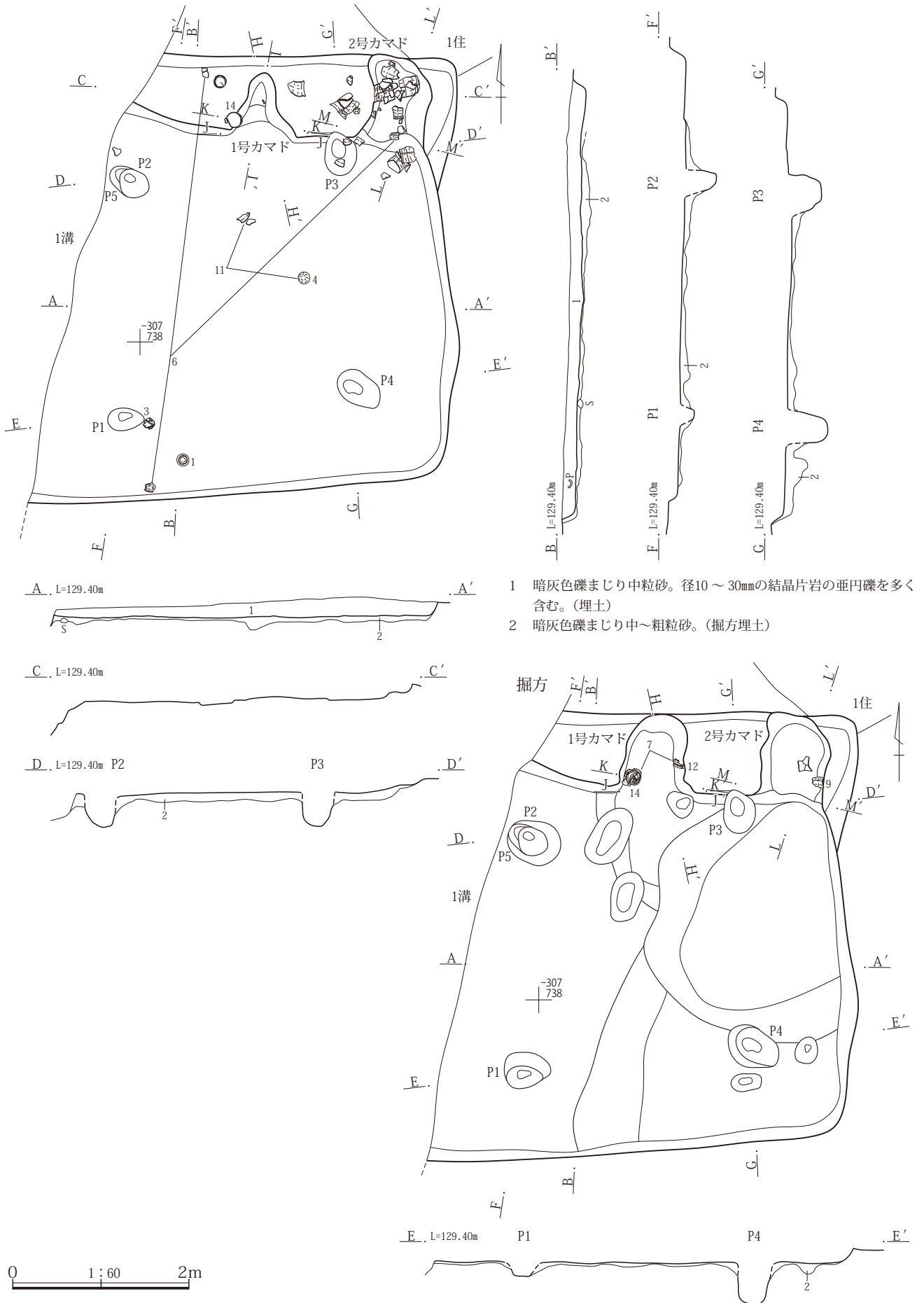
床面 床面は暗灰色礫まじり砂で構築している。カマド



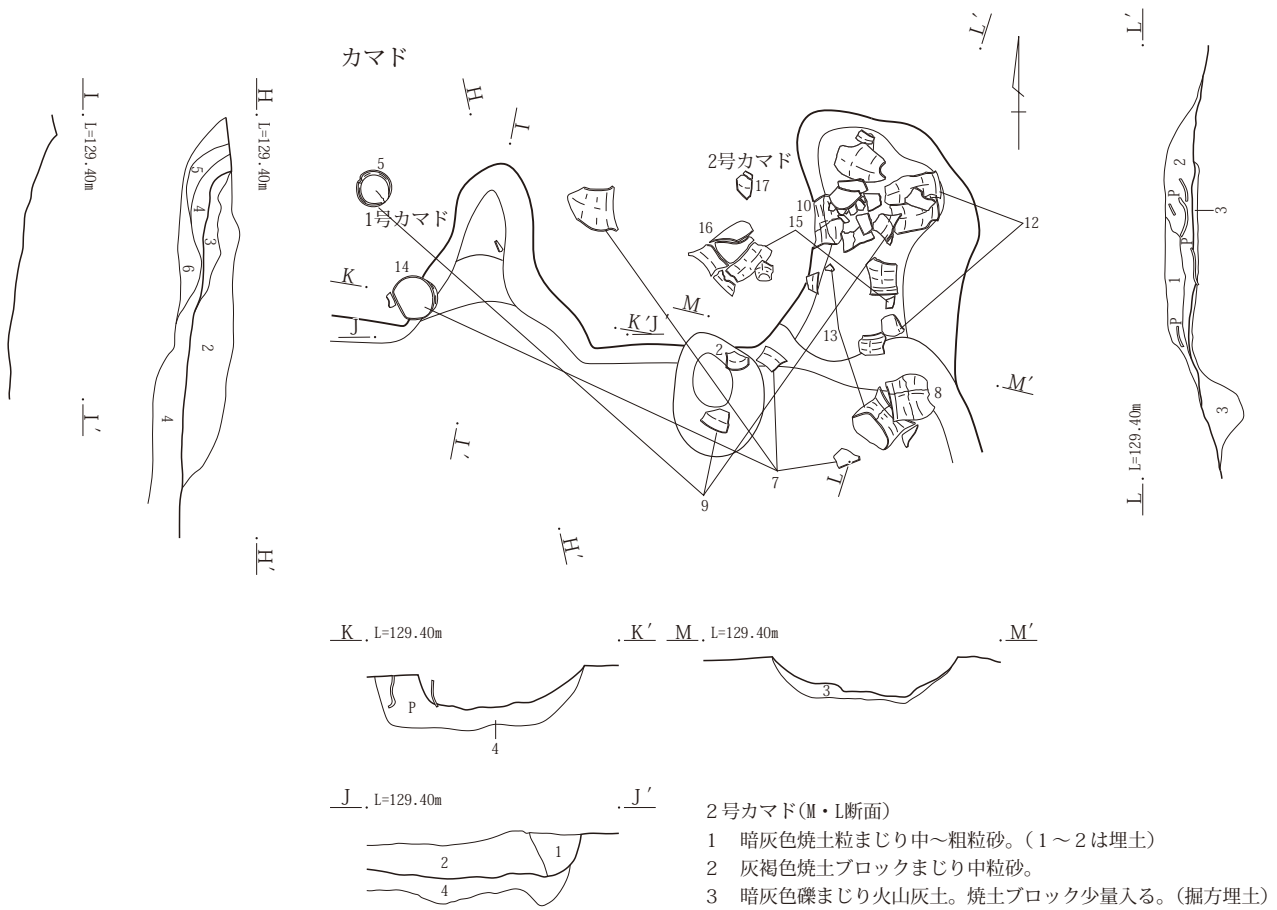
第8図 矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の遺構全体図



第9図 1号竪穴住居と出土遺物

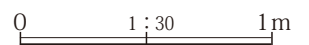
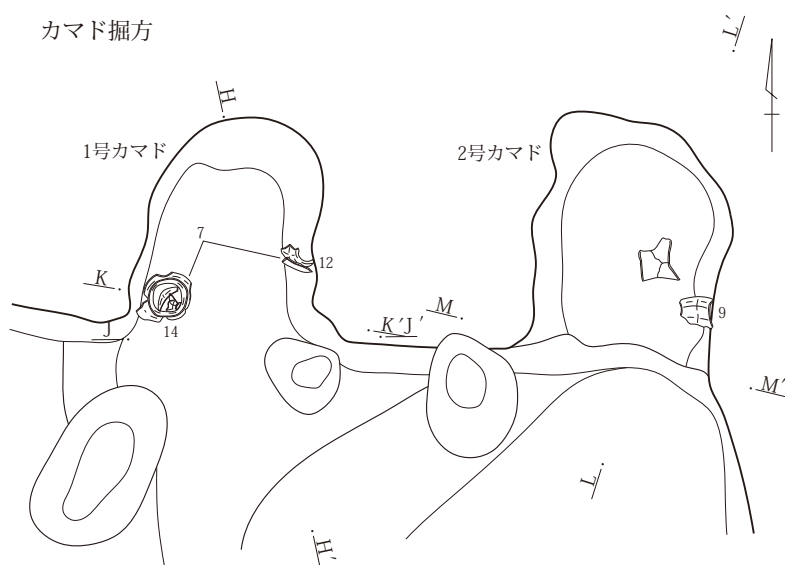


第10図 2号竪穴住居(1)

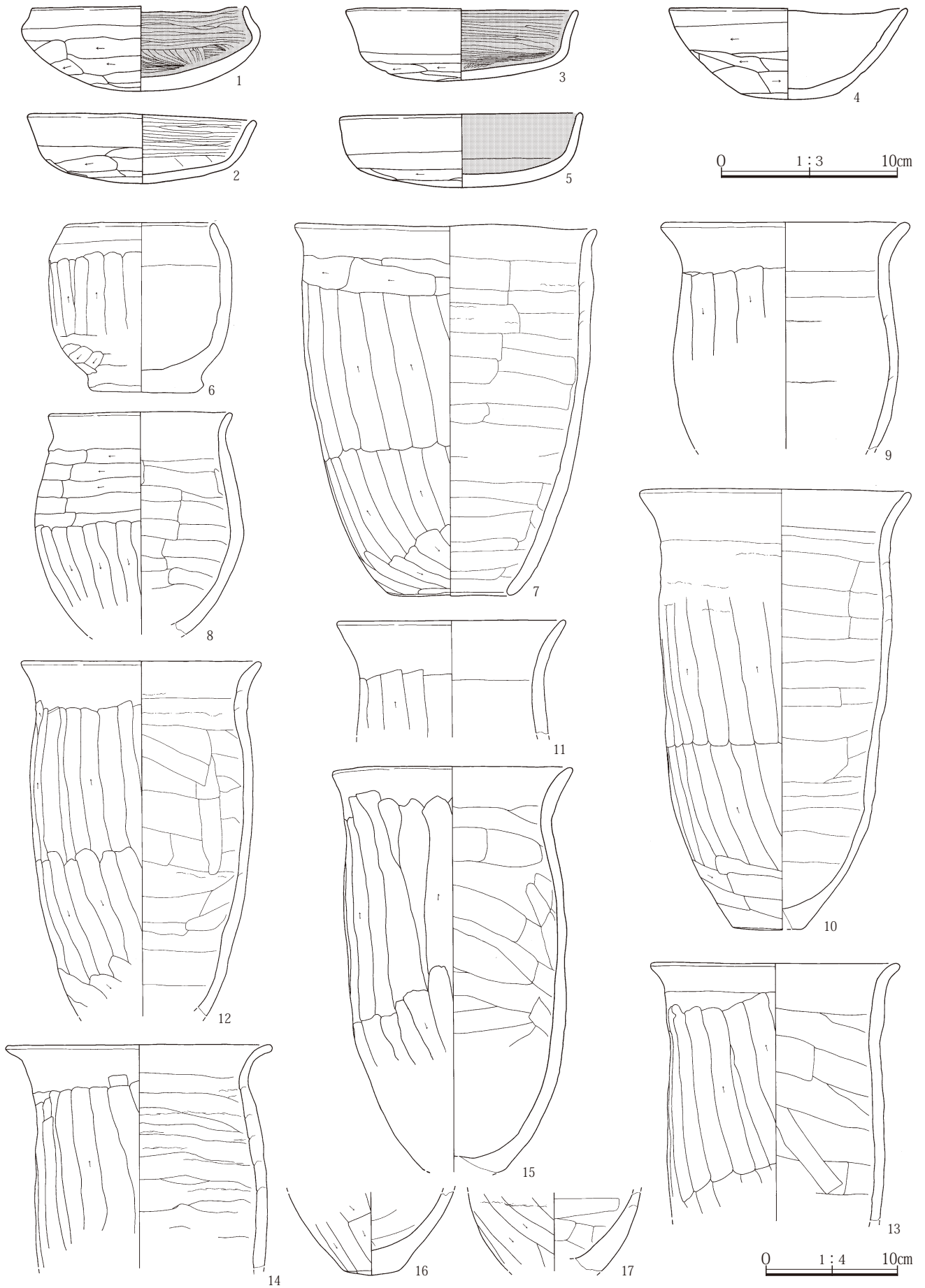


- 1号カマド(J・K・H断面)
- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。(1~3は埋土)
 - 2 灰褐色焼土粒まじり火山灰土。
 - 3 桃橙色灰色中粒砂(焼土帯)。
 - 4 灰褐色礫まじり砂(橙褐色焼土帯)。(4~6は掘方埋土)
 - 5 暗灰色礫まじり砂。
 - 6 黄灰色砂礫(4層を母材とする)。

カマド掘方



第11図 2号竪穴住居(2)



第12図 2号竪穴住居の出土遺物

から北側の壁際まで床面が高くなり、竪穴住居内を区画する方形の段状の構造を呈する。これは柵状の施設と考えられる。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.15mで、全体が浅い窪み状を呈する。カマドより北側は4層の砂礫層が段状に高くなり掘方は浅い。

カマド 北壁の中央及び北壁の東寄りに位置し、北壁中央を1号カマド、東側を2号カマドとした。2号竪穴住居は構築当初に1号カマドを使用し、後にカマドを廃棄して別の場所に2号カマドを再構築している。カマドの燃焼部は、北壁の手前に4層の砂礫層を浅く掘り込んで暗灰色礫まじり砂～シルト質土を貼って構築しており、煙道や両袖は失われている。1号カマド左袖には甕(14)が逆位で出土しており、これらはカマドの構築材と考えられる。

1号カマドの幅は0.76m+、長さ0.74m、焚口の幅0.70m。
2号カマドの幅は0.81m+、長さ0.98m、焚口の幅0.45m。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で柱穴のピット1～5を検出した。ピット1以外は断面形状がU字状を呈する。ピット5はピット2の建て替え前の柱穴である可能性がある。柱間はピット1・2及びピット3・4が2.72m、ピット2・3が2.40m、ピット1・4が2.64mである。

ピット1は長径0.42m、短径0.26m、深さ0.16m。

ピット2は長径0.35m、短径0.32m、深さ0.35m。

ピット3は長径0.50m、短径0.37m、深さ0.35m。

ピット4は長径0.55m、短径0.35m、深さ0.47m。

ピット5は直径0.31m、深さ0.19m。

遺物 床面からは杯(4)が、2号カマドの使用面からは甕(8・10・12・13)が出土した。これらの土器はカマドの廃絶時に使用面に置かれた可能性がある。また2号カマドの北西に位置する段状の床面からは甕(15)が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀前半。

3号竪穴住居(第13・14図、PL.6-5～6-8・49、208・209頁)

位置 北部東寄り。

座標 X=24739～24742 Y=-70292～-70295

主軸方位 N61° W

重複 なし。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈するが北

東側が調査区外にある。長径は3.16m、検出した最大の短径3.10m+、床面までの深さ0.07m、掘方までの深さ0.24m、検出した最大の面積は9.01㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり細粒火山灰土からなり、炭化物が多く含まれる。埋土は1層と2層の層理面から掘り込まれる。

床面 暗灰色の礫まじり砂で床面を構築している。床面から出土した遺物は、床から少し浮いて埋土中に高さが揃って出土した。

掘方 掘方と床面の間は0.04～0.16mで、全体に浅い穴状の窪みが分布し平坦である。

カマド 床面からは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 掘方の調査でピット1を検出したが単独に存在し、柱穴の可能性は極めて低い。

ピット1は長径0.62m、短径0.56m、深さ0.21m。

特徴 床面に近い埋土には直径10mmの炭化物や3mmの焼土粒が多く含まれている。しかし、面的な焼土の分布や炭化材などは認められず、竪穴住居の焼失を示す証拠は得られなかった。3号竪穴住居は一辺が3mあまりの小規模な竪穴住居であり、床面に主柱となる柱穴が認められない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から須恵器の椀(1・2)が、床から羽釜の破片(6)が出土した。埋土から鉄製の斧(9)が、北西壁際の床面からは鉄器(10～13)が出土し、合計7点の鉄製品が出土している。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

4号竪穴住居(第15～18図、PL.7-1～7-4・49・50、209・210頁)

位置 北部中央～東寄り。

座標 X=24731～24736 Y=-70290～-70295

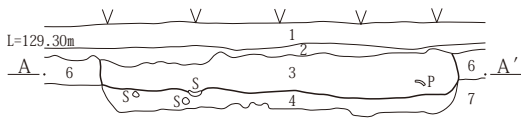
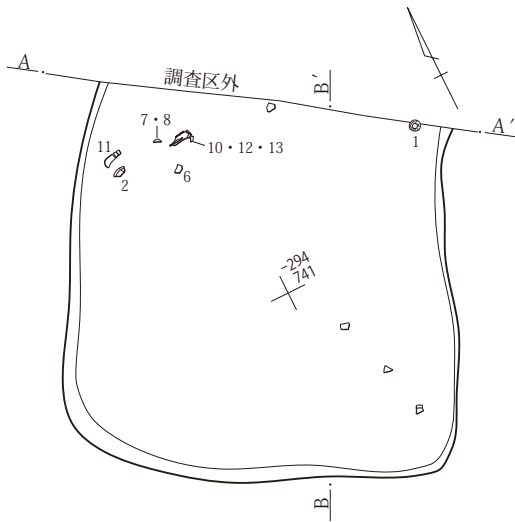
主軸方位 N85° E

重複 11号・18号竪穴住居や43号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する。長径は4.90m、短径4.70m、床面までの深さ0.15m、掘方までの深さ0.20m、面積21.62㎡である。

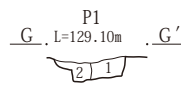
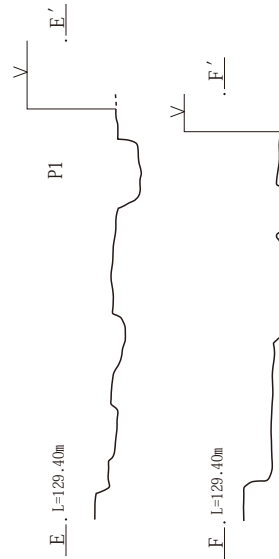
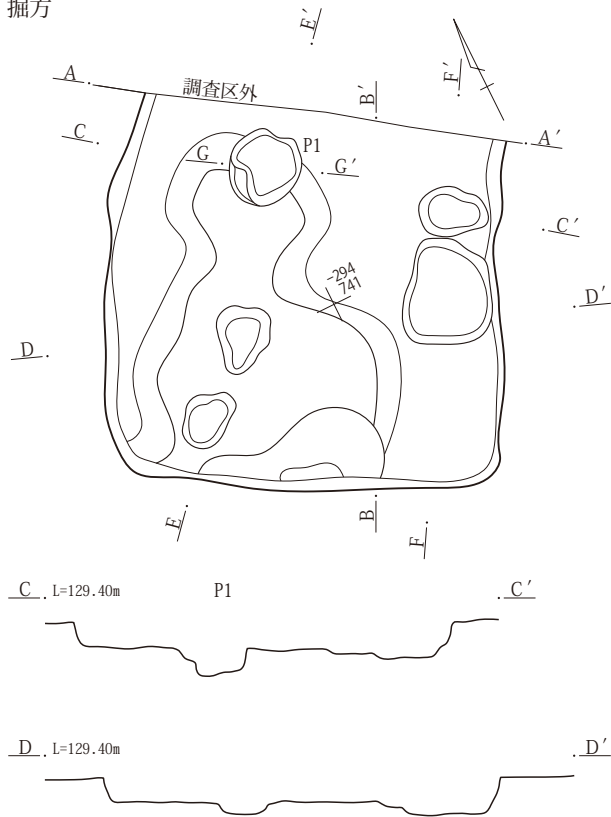
埋土 暗灰色礫まじり砂質火山灰土からなり炭化物を含む。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築している。



- 1 碎石(表土)
- 2 灰褐色As-Bまじりシルト質砂層(1層)
- 3 暗灰色礫まじり細粒火山灰土。粒径0.5～3mm橙色焼土ブロックを含む。径10mmの炭化材を含有。床より5cm上位に炭化物や炭が密集。(埋土)
- 4 暗灰色礫まじり中粒砂。径30～60mmの結晶片岩の亜円礫を含む。下底は凸凹している。(4～5は掘方埋土)
- 5 黄灰色礫まじり砂のブロック土
- 6 暗灰色礫まじり細～中粒砂層(2～3層)
- 7 黄灰色礫まじり中粒砂層(4層)

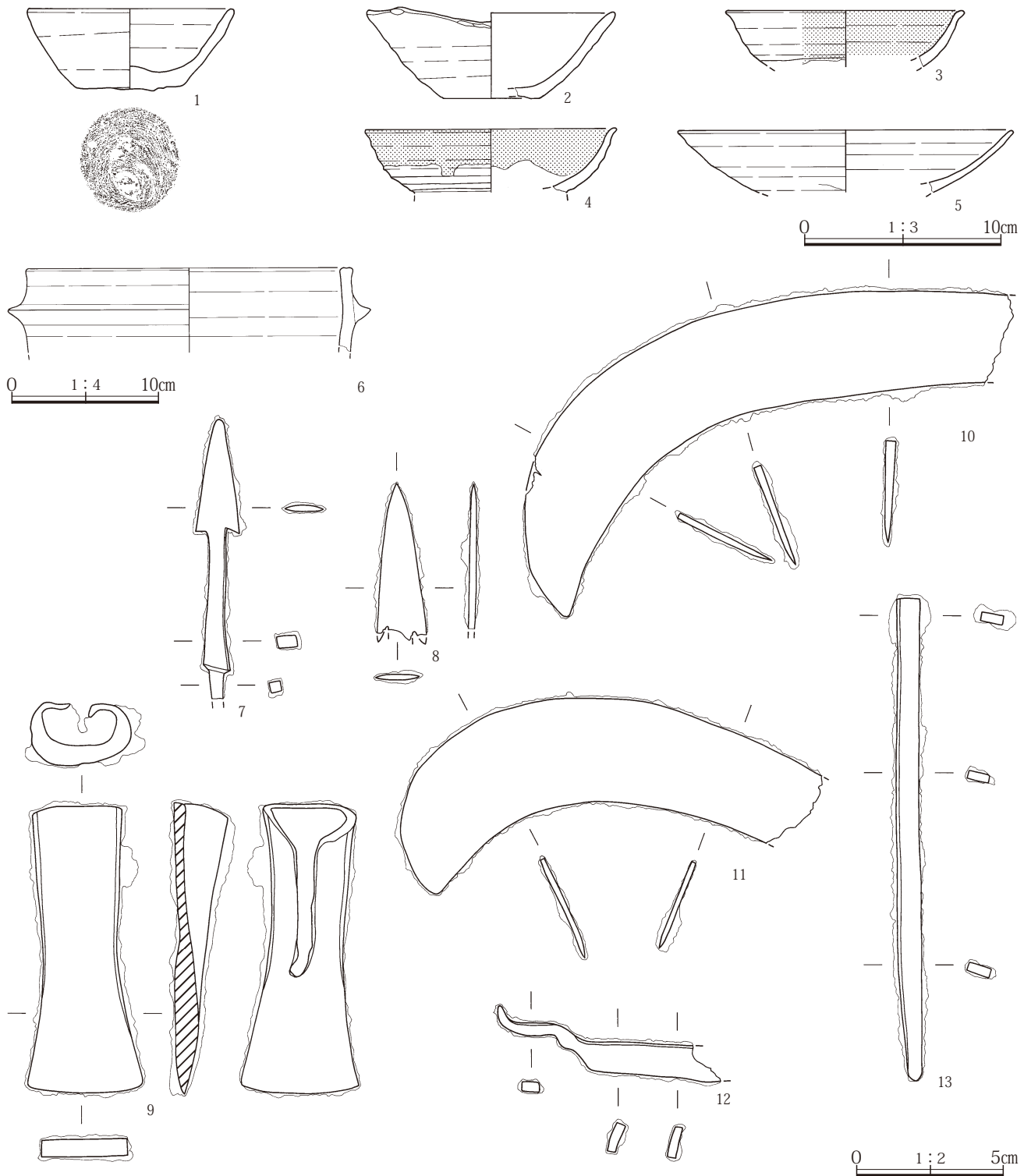
掘方



- 1 黄灰～暗灰色シルト質砂のブロック土。径10mm大の砂と暗灰色シルト質砂のブロックを含む。
- 2 黄灰色中粒砂のブロック土。



第13図 3号竪穴住居

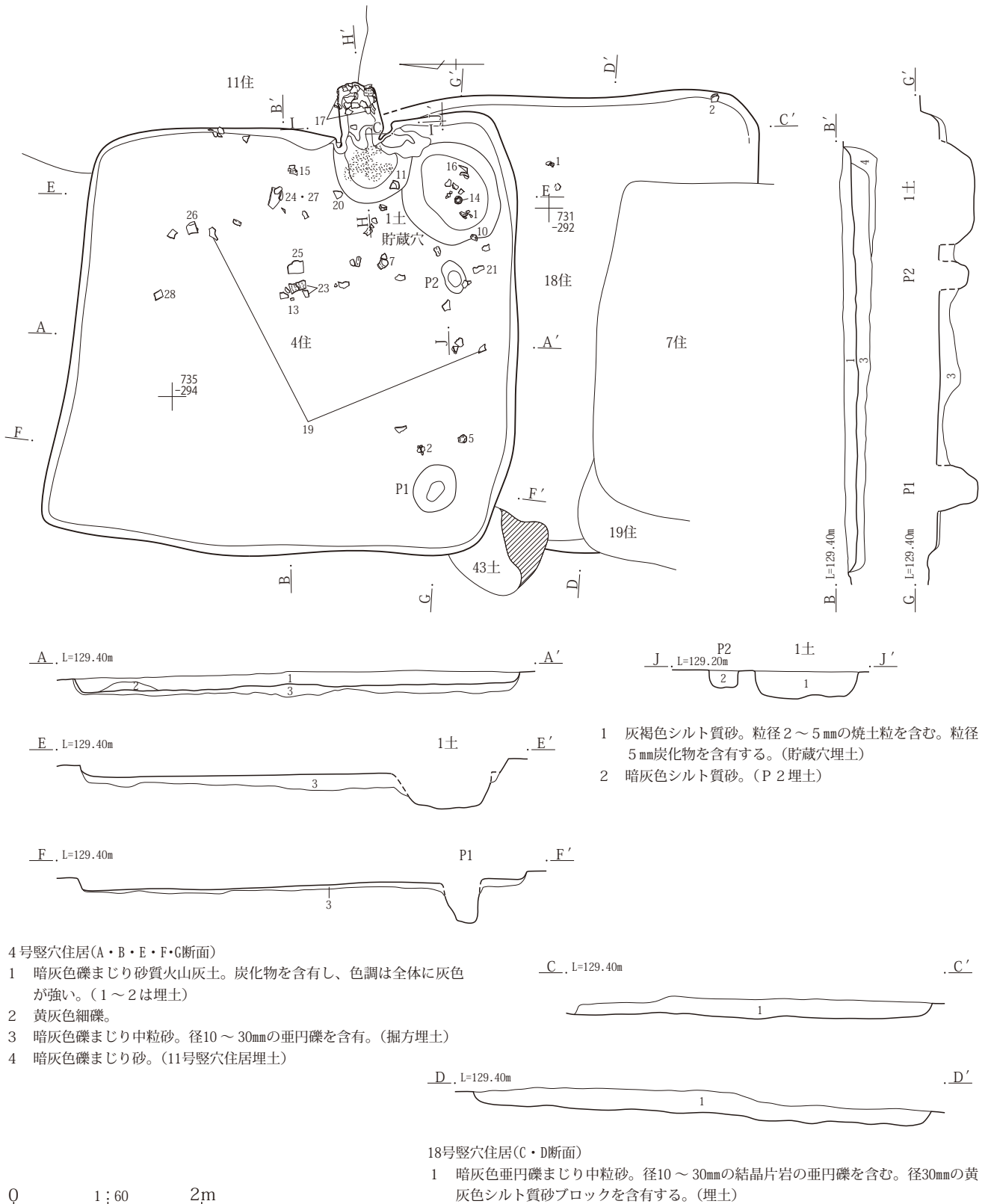


第14図 3号竪穴住居の出土遺物

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.15mで、西部は床面と同一であり、東部は緩く窪んで平坦な面を呈する。3号・4号土坑を床下から検出したが浅い窪み状を呈する。3号土坑の底からは甕(18)の破片が出土した。

カマド 南東隅の北側に位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥に、焚口は東壁付近の4層の礫層を掘り込んで灰

色シルトを貼って構築し、燃焼部の奥壁は土器を構築材に壁が作られている。焚口周辺には直径0.50m範囲に灰の薄層の分布が検出された。カマドの煙道は失われており、両袖は黄灰色粘土により構築し、長径0.29m大の結晶片岩の礫が立った状態で埋められている。これらはカマドの構築材として使用された可能性があり、結晶片岩

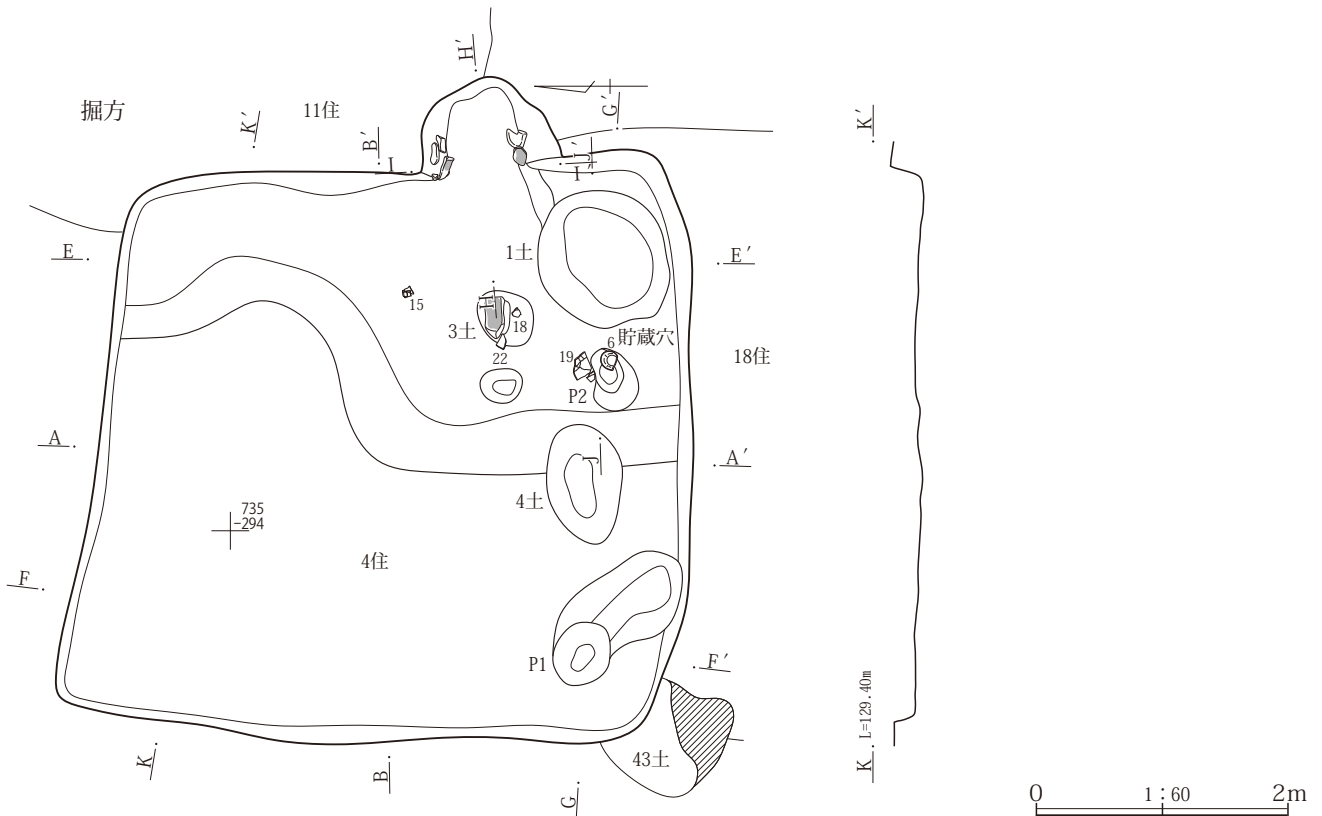


第15図 4・18号竪穴住居

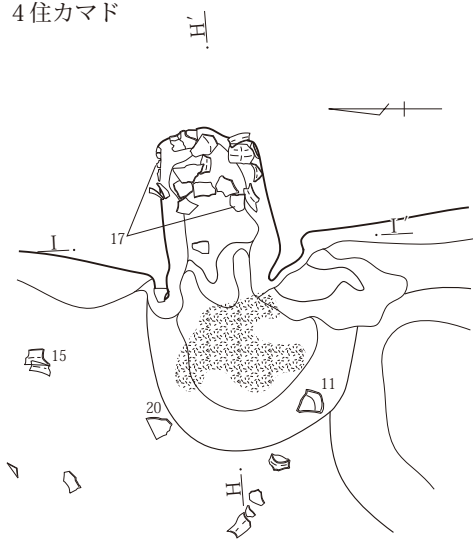
の垂円～垂角礫5点が出土した。燃烧部の壁面から出土した結晶片岩礫は2点で、表面に淡赤褐色を呈した被熱の痕跡が認められる。

カマドの幅は1.04m、長さ0.78m、焚口の幅0.28m。

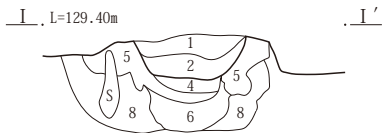
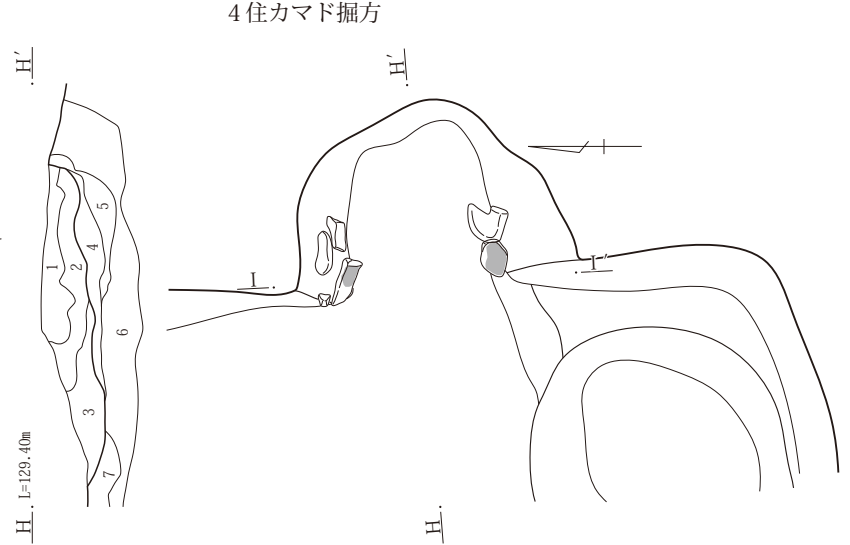
貯蔵穴 カマドの右に位置する土坑1である。床面の精査では見つからず、掘方の調査で検出した。長径は1.19m、短径1.03m、深さ0.38m。底部から0.22～0.28mに土師器杯(1)、台付甕(14)、甕(16)の破片が出土した。



4住カマド



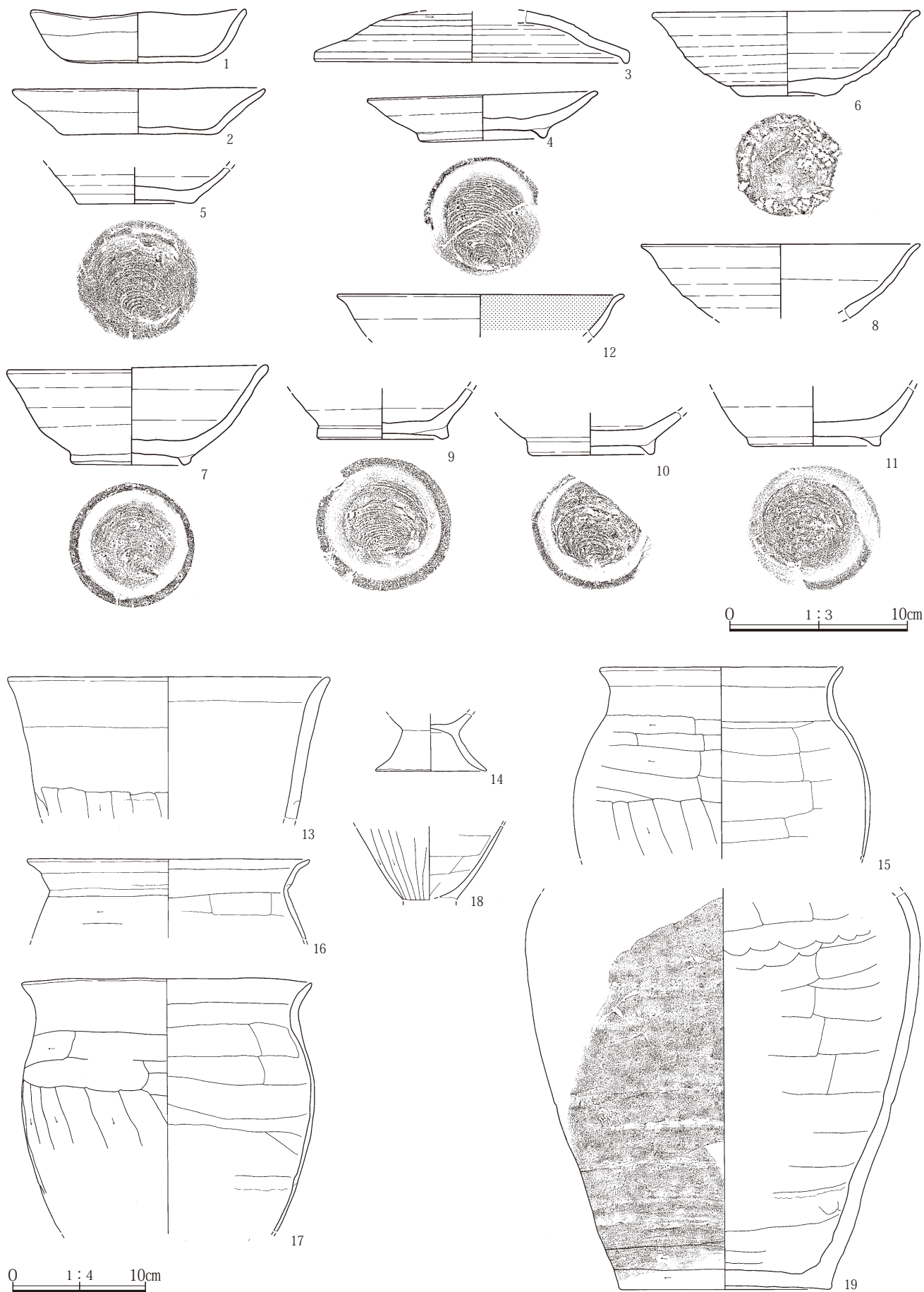
4住カマド掘方



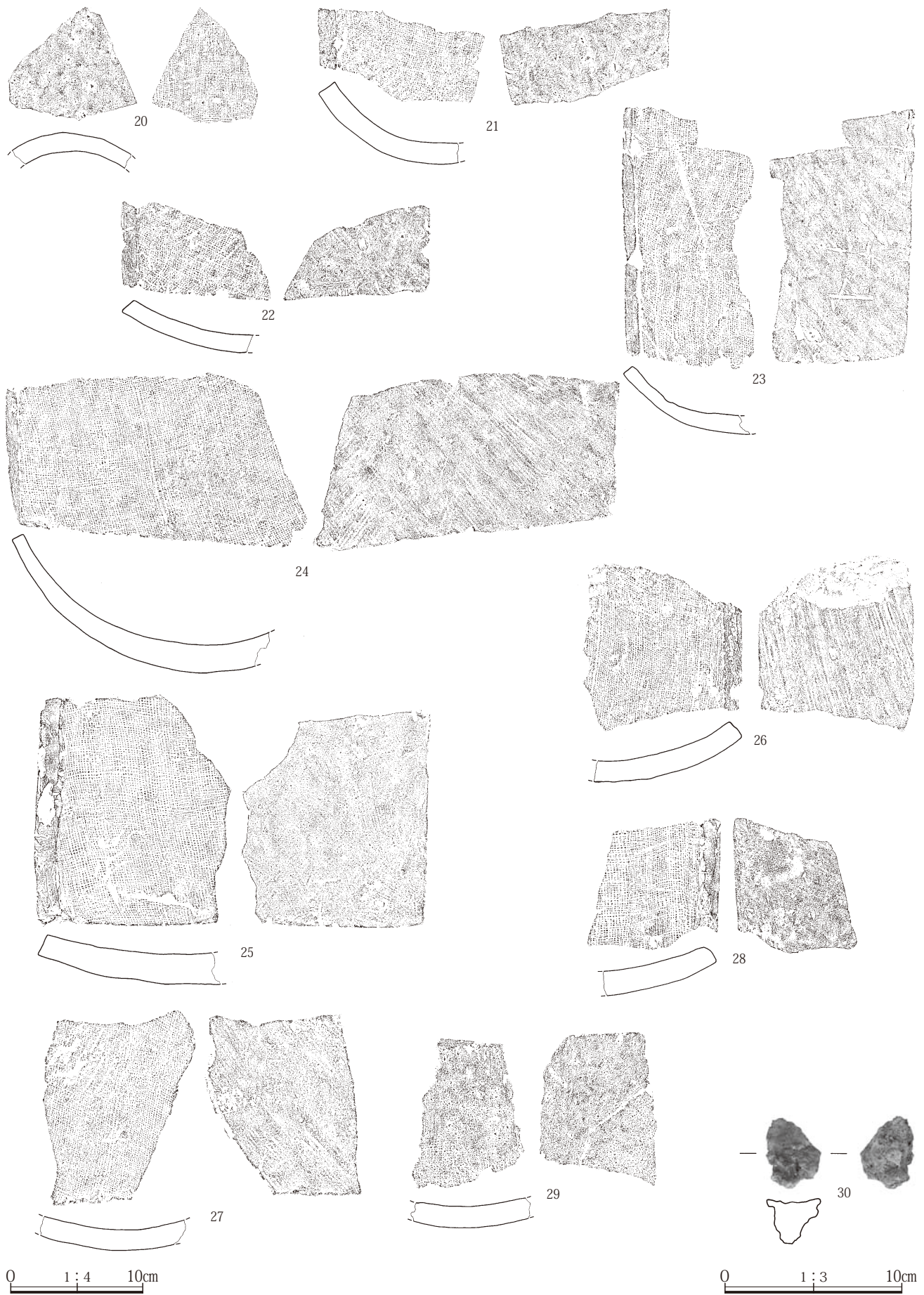
- 1 黄灰褐色礫まじりシルト質砂。径10mmのブロック土。(1~3は埋土)
- 2 暗灰色礫まじりシルト質砂。径10~20mmの礫まじり。
- 3 暗灰色焼土ブロックまじり砂。粒径3~5mm、最大径8mmの焼土塊を含む。
- 4 黄灰褐~橙灰色焼土帯~シルト質中粒砂。(4~8は掘方埋土)
- 5 灰褐~赤褐色焼土帯~シルトまじり砂(袖構築材)。
- 6 灰褐色シルトまじり砂。粒径2mmの赤色焼土ブロックを含有。
- 7 灰褐色シルト質砂。焼土ブロックまじり。
- 8 暗灰色焼土ブロックまじり砂。



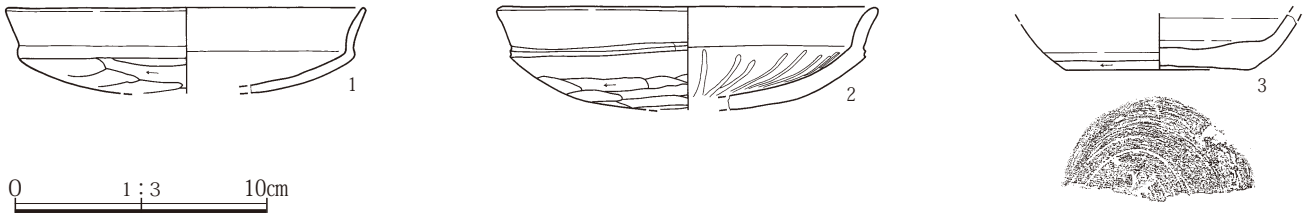
第16図 4号竪穴住居



第17図 4号竪穴住居の出土遺物(1)



第18図 4号竪穴住居の出土遺物(2)



第19図 18号竪穴住居の出土遺物

柱穴 掘方の調査で断面形状がU字形のピット1・2を検出した。ピット間の走行は竪穴住居南壁に平行であるが対になる北側の柱穴列は認められない。柱間はピット1・2が2.25mである。

ピット1は長径0.54m、短径0.45m、深さ0.44m。

ピット2は長径0.36m、短径0.23m、深さ0.30m。

特徴 一辺が5mに及ぶ竪穴住居であり、4本の支柱穴は存在したはずであるが検出できなかった。これは柱穴底が4層の砂礫層で止められ、遺構の輪郭が不明瞭であることから検出できなかった可能性がある。カマドの構築材は結晶片岩の礫を使用している。

遺物 床面から土師器の杯(2)や甑(13)、須恵器椀(5・6・10・11)、平瓦(21・24・25・27)が出土している。平瓦は10点が出土し、その分布はカマド北西の床面及び床面付近に多い。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

5号竪穴住居(第20～23図、PL.7-5～7-8・50、210頁)

位置 北部中央寄り。

座標 X=24723～24727 Y=-70298～-70301

主軸方位 N89° W

重複 断面観察で埋土は6号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する。長径は4.38m、短径3.02m、床面までの深さ0.13m、掘方までの深さ0.30m、面積13.00㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。カマド付近では焼土ブロックまじりの黄灰褐色シルト質砂や黒色礫まじりシルト質砂がカマド側から竪穴の中央に向かって成層する。

床面 床面は暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。竪穴住居の中央北側には直径1mほどの範囲に焼土ブロックを多く含む灰色シルトが薄く貼られている。

掘方 掘方と床面の間は0.05～0.22mで、カマド周辺は不定形の窪み状に掘られて低い。窪みの上部には黄灰

色シルトの薄層が検出されたことから、シルトを貼った可能性がある。

カマド 南東隅の北側に位置する。カマドの燃烧部と焚口は東壁の手前を4層の砂礫層を掘り込んで灰色シルトを貼って構築し、燃烧部の壁は結晶片岩の礫や平瓦(10)を構築材に作られている。カマドの煙道は失われており、両袖は灰色粘土により構築し、長径0.42m大の結晶片岩の礫が立った状態で埋められている。これらの礫はカマドの構築材として使用された可能性があり、垂円～垂角礫14点がカマド周辺の壁際に並べられた状況で検出されている。燃烧部の壁面から出土した礫や瓦は表面が淡い赤褐色を呈し、被熱の痕跡が認められる。

カマドの幅は0.46m+、長さ0.42m、焚口の幅0.42m。

柱穴 掘方の調査で断面形状がU字ないし浅い皿形のピット1・2・3を検出した。これらのピットは竪穴住居の柱穴となる可能性は極めて低い。

ピット1は長径0.44m、短径0.39m、深さ0.37m。

ピット2は長径0.43m、短径0.37m、深さ0.32m。

ピット3は長径0.48m、短径0.43m、深さ0.12m。

特徴 長辺が4mの竪穴住居であり、床面に支柱となる柱穴が認められない構造の竪穴住居と想定される。カマドの構築材には結晶片岩の礫を使用し、両袖に細長い結晶片岩の礫を使用する特徴がある。同じ9世紀代の4号、7号竪穴住居のカマドと共通している。

遺物 床面から土師器杯(1)や甕(8)、砥石(11)が出土した。

時代 平安時代9世紀第1四半期。

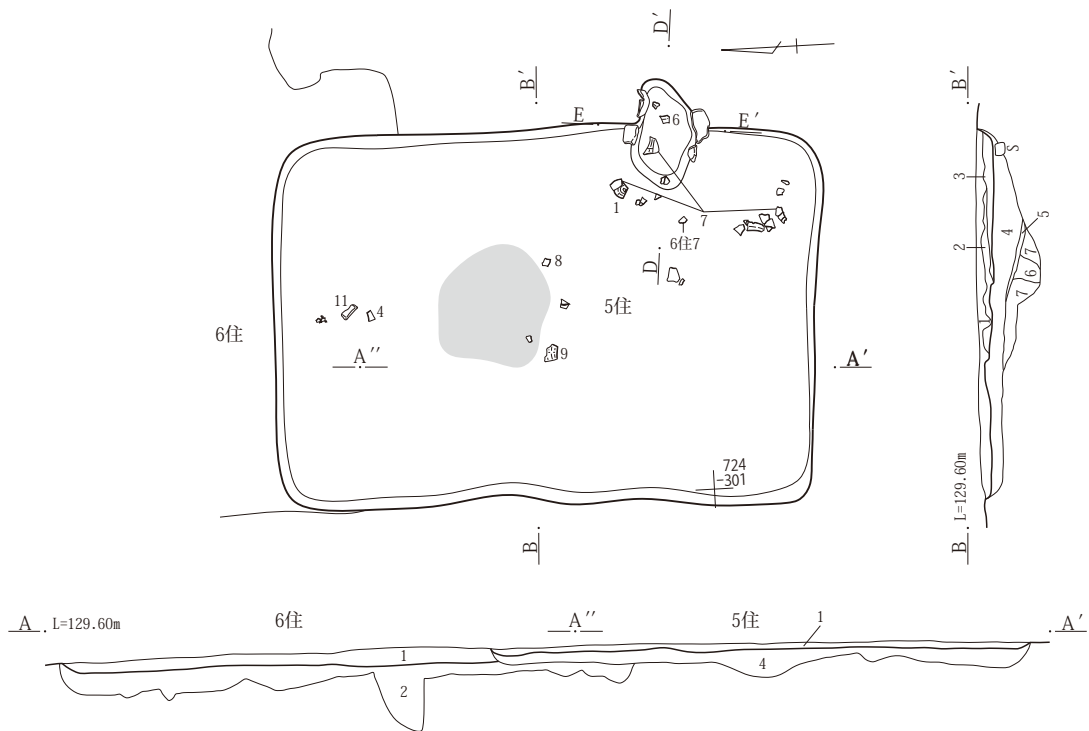
6号竪穴住居(第20～24図、PL.8-1～8-4・50、210・211頁)

位置 北部中央寄り。

座標 X=24726～24730 Y=-70297～-70300

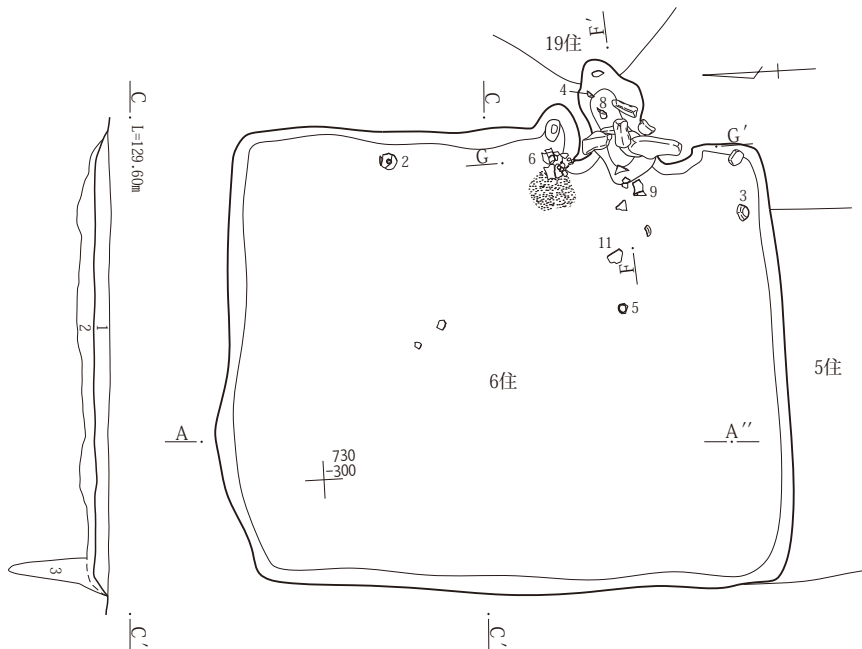
主軸方位 N87° W

重複 19号竪穴住居を切る。断面観察で埋土は5号竪穴住居の埋土に切られる。



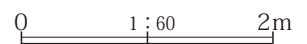
5号竪穴住居(A・B断面)

- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。(1～3は埋土)
- 2 焼土ブロックまじり黄灰褐色シルト質砂。下底と上位に粒径2～5mmの焼土粒を含む。
- 3 暗灰～黒色礫まじりシルト砂。径10mm大の垂円礫まじり。
- 4 暗灰色礫まじり中粒砂。径10～30mmの垂円礫を含む。(4～7は掘方埋土)
- 5 黄灰色シルトの薄層。(5～6は床下土坑埋土)
- 6 暗灰色細～中粒砂。
- 7 黄暗灰色砂質礫。



6号竪穴住居(A・C断面)

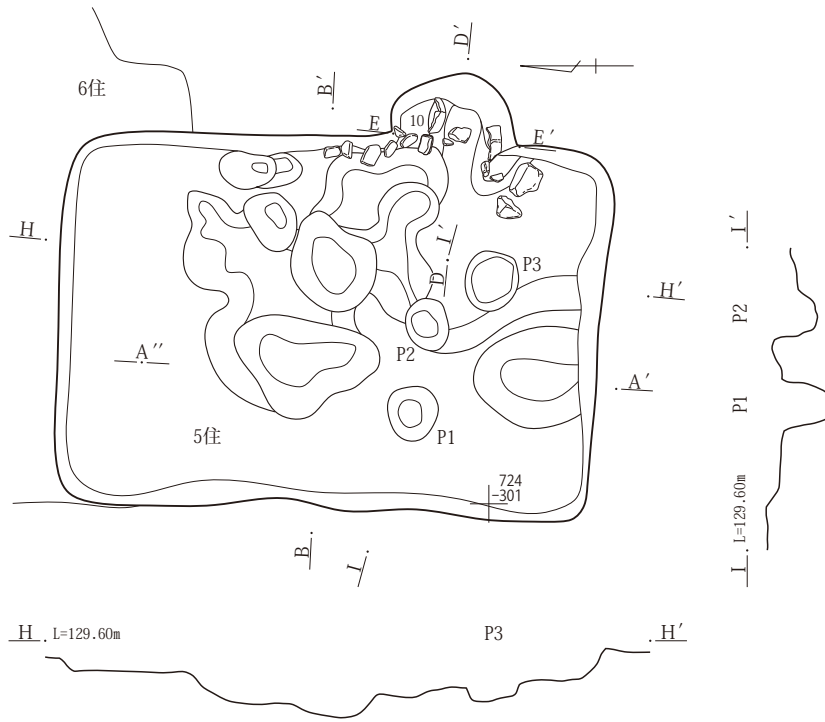
- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。径10～30mmの垂円礫を含む。(埋土)
- 2 暗灰色礫まじり中粒砂。やや暗い色調を呈し径10mm大の垂円礫を含む。(掘方埋土)
- 3 暗灰色中粒砂～粗粒砂。一部に極粗粒砂もみられる。
(竪穴住居の下から検出された地割れのオープンクラックを埋めた土壌)



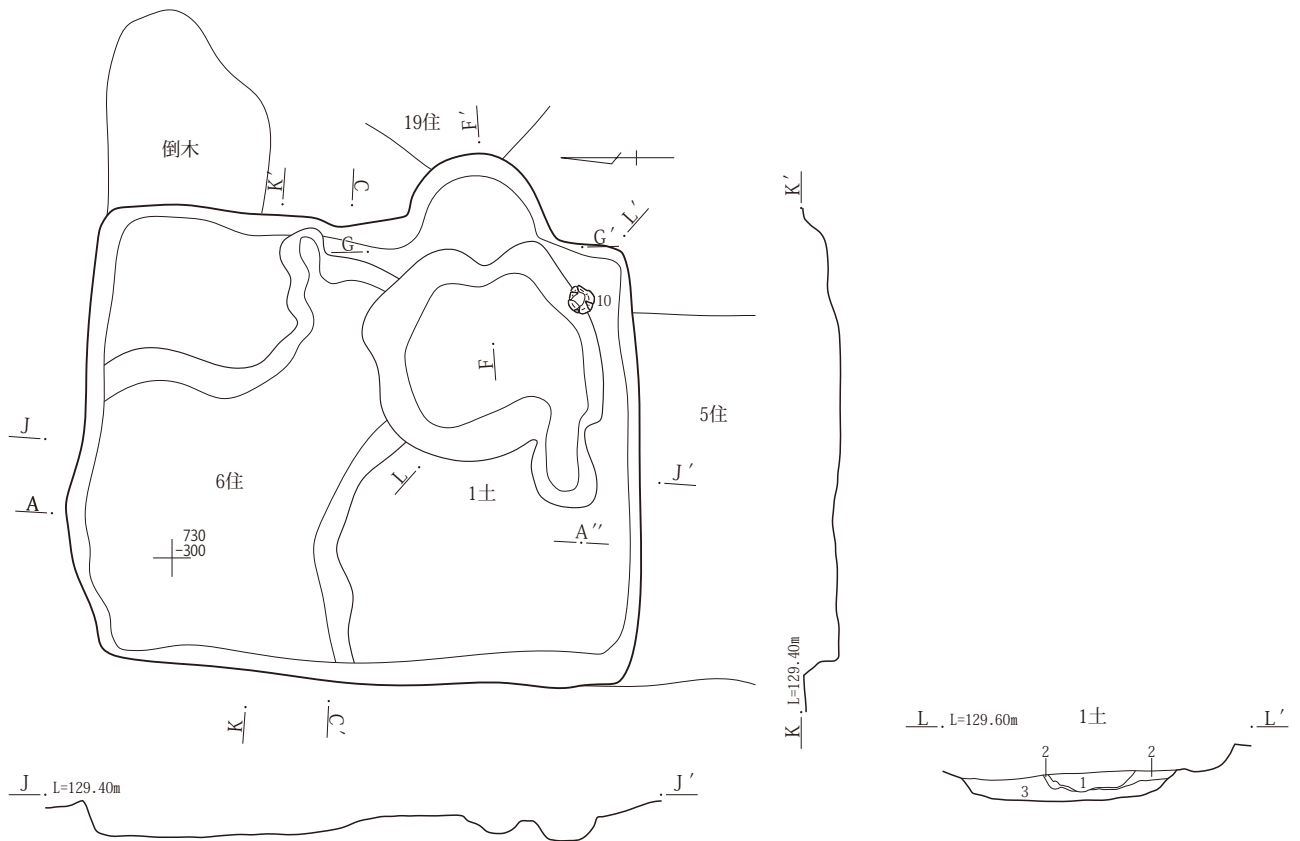
第20図 5・6号竪穴住居(1)

第3章 調査された遺構と遺物

掘方



掘方

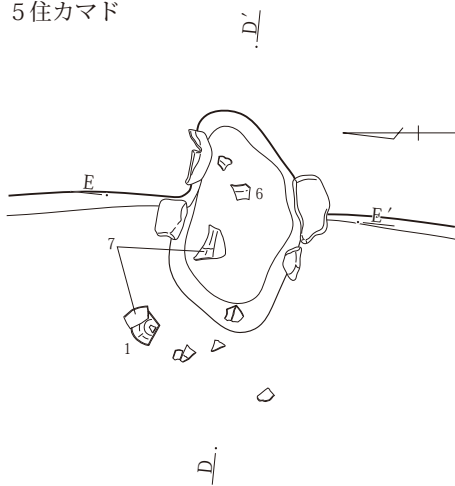


- 1 灰褐色シルト質中粒砂。(1～3は床下土坑埋土)
- 2 黄灰色シルト。
- 3 暗灰色細礫。基質はシルト質粗粒～極粗粒砂。

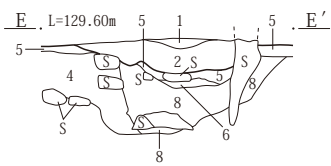
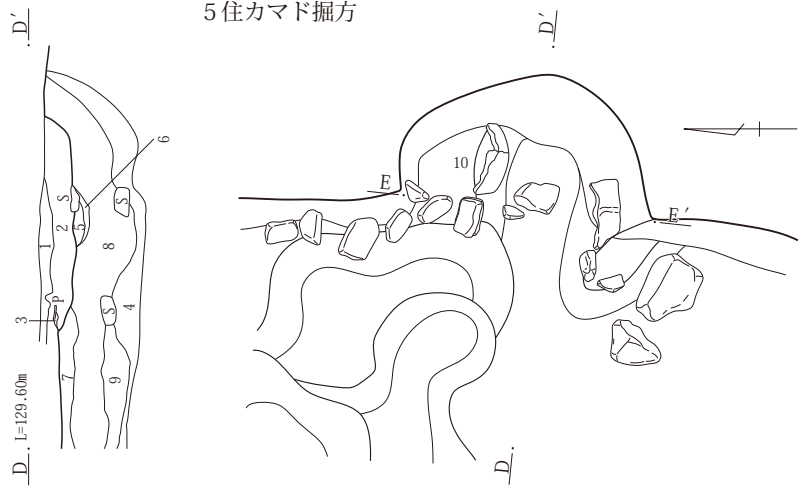


第21図 5・6号竪穴住居(2)

5住カマド



5住カマド掘方

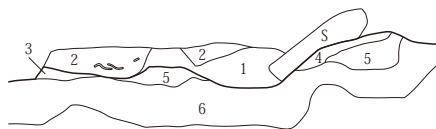
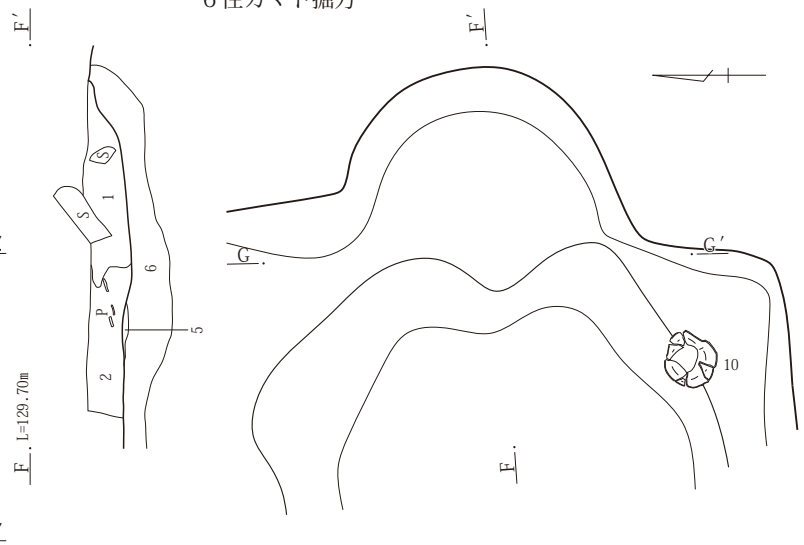


- 1 黄灰褐色焼土ブロックまじりシルト質砂。(1~3は埋土)
- 2 暗灰色焼土まじり。シルト質中粒砂。
- 3 暗青灰色灰層。
- 4 暗灰色礫まじり砂。(4~9は掘方埋土)
- 5 暗灰色焼土ブロックまじりシルト質砂。
- 6 灰色シルト。
- 7 焼土まじり灰褐色シルト。
- 8 暗灰色礫まじり中粒砂。
- 9 暗灰褐色礫まじり砂。

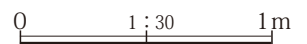
6住カマド



6住カマド掘方

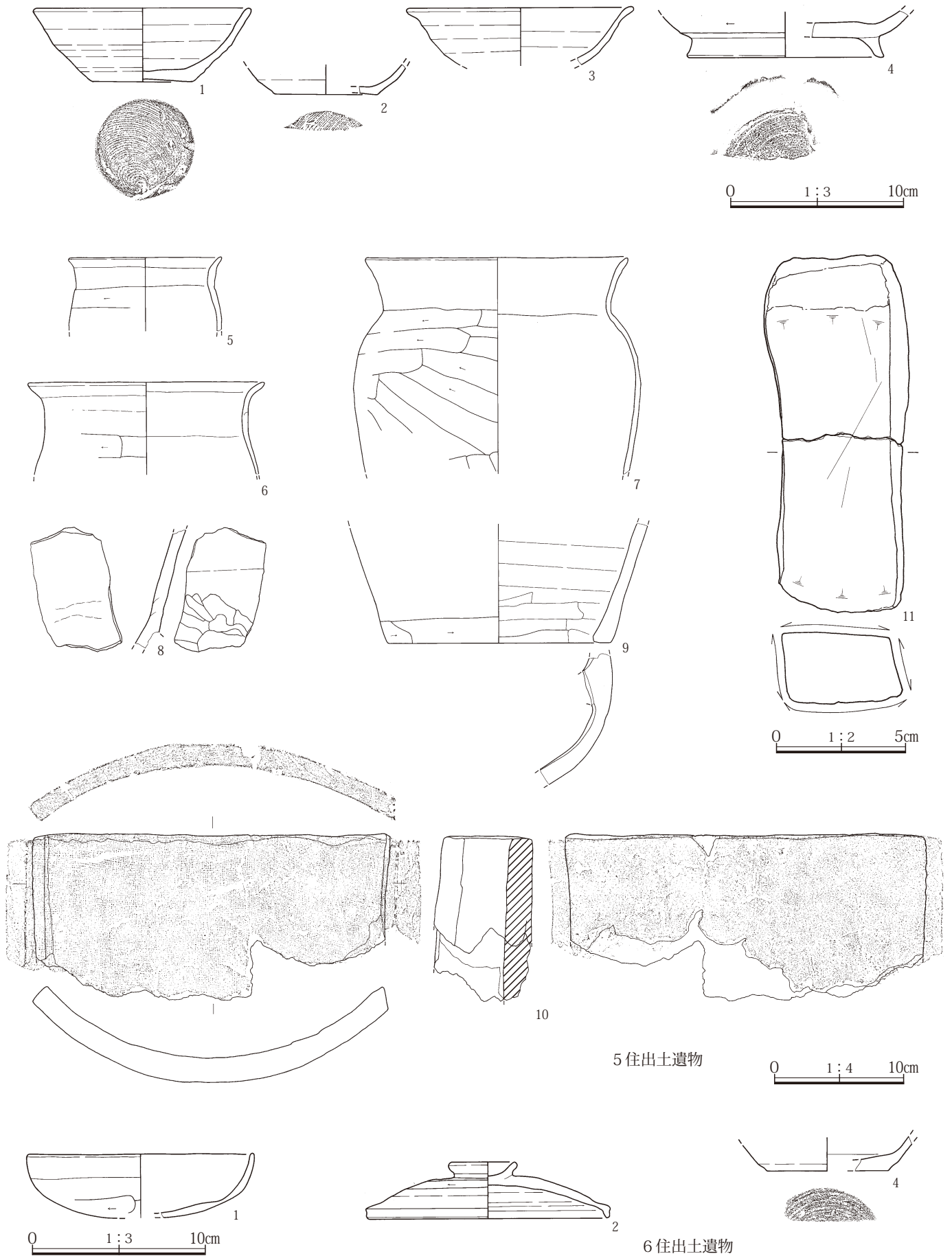


- 1 暗灰色礫まじりシルト質砂。径5~10mmの焼土ブロックを含む。(1~2は埋土)
- 2 赤褐色焼土ブロックを多く含むシルト質砂。シルト優勢で径10~15mmの焼土ブロックを含む。
- 3 黄灰色砂礫ブロック。(3~6は掘方埋土)
- 4 黄灰色シルト質粘土。塊状無層理を呈する。
- 5 黄灰色シルト質砂。径10mmの円礫まじり。
- 6 暗灰色円礫まじり中粒砂。

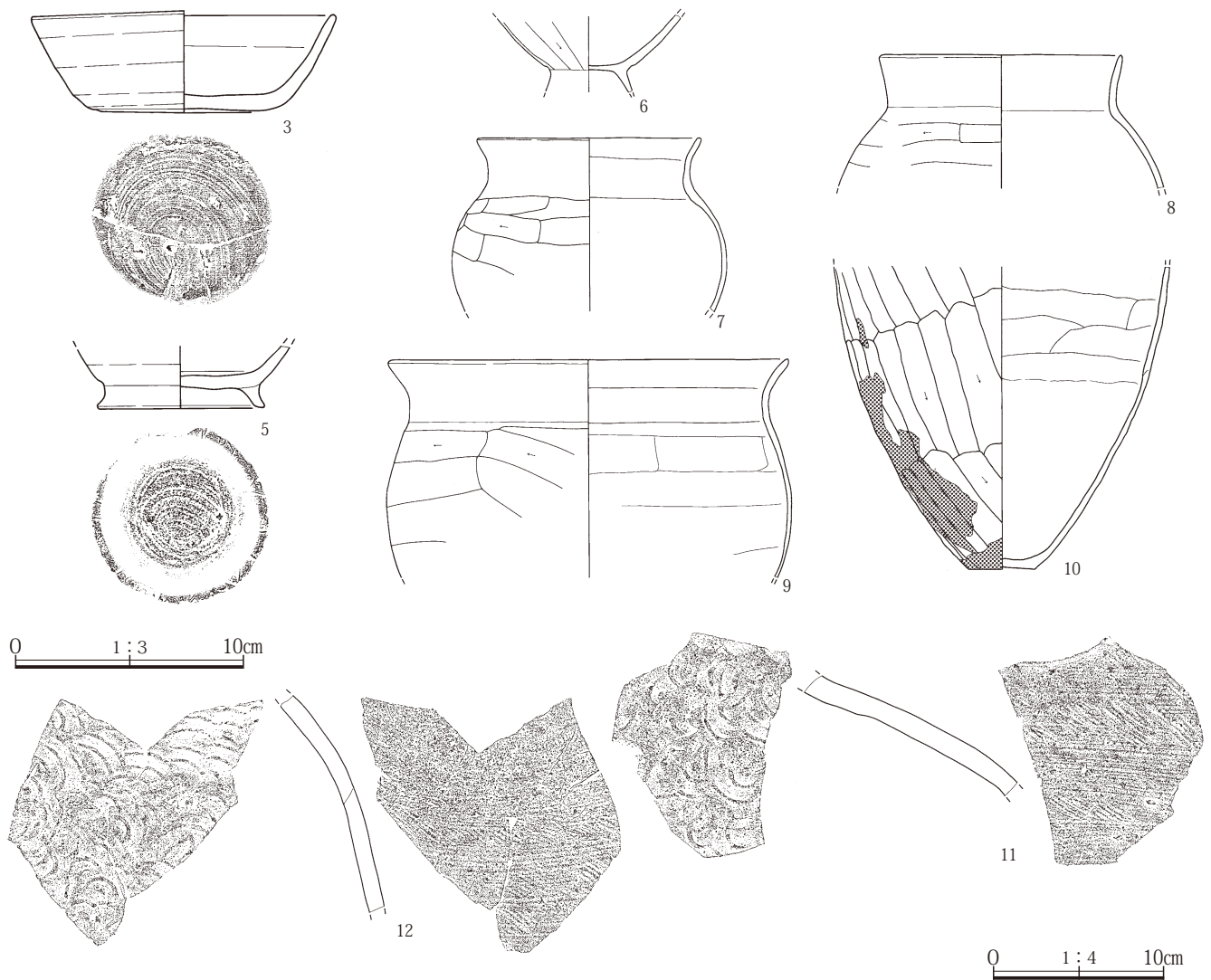


第22図 5・6号竪穴住居(3)

第3章 調査された遺構と遺物



第23図 5・6号竪穴住居の出土遺物



第24図 6号竪穴住居の出土遺物

形状と規模 北方向に長軸を有し、長方形を呈する。長径は4.32m、短径3.71m、床面までの深さ0.12m、掘方までの深さ0.29m、面積16.34㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.04～0.20mで、竪穴住居の中央部からカマド周辺が不定形ないし歪んだ円形の窪み状に深く掘り込まれている。カマドの前には長径1.82m、短径1.66m、深さ0.22mの歪んだ方形を呈する土坑1が位置する。土坑は暗灰色細礫で満たされ、上部は灰色シルトが貼られている。その他の不定形の窪みは暗灰色礫まじり砂で満たされているが、一部は黒色細粒火山灰土で腐植化が進んだ土壌がみられる。これらの窪みには竪穴住居とは時代の異なる遺構が含まれている可能性がある。

竪穴住居西壁には、深い溝状の窪みがみられ最大幅0.50m、平均幅0.30m、深さは0.65mに及ぶ。この溝状の窪みは掘方に存在し、埋土にはみられない。形状から地震によるオープンクラック(地割れの痕跡)である可能性が高く、竪穴住居の年代が9世紀第1四半期であることを考えると弘仁地震(818年)の痕跡の可能性はある。

カマド 南東隅の北側に位置する。カマドの燃烧部は東壁の手前から奥に、焚口は東壁の手前の4層の砂礫層を掘り込んで灰色シルトを貼って構築し、燃烧部の壁は結晶片岩の礫を構築材に作られている。カマドの煙道は失われており、両袖は灰色粘土により構築されているが破壊が著しく、左袖部の前面に位置する直径0.40mの灰色シルトブロックは、袖部の残骸の可能性はある。燃烧部は長径0.45mの結晶片岩の礫が倒れて折り重なった状態が認められる。カマドの構築材として使用された結晶片

岩の垂円～垂角礫は6点で、使用面上に折り重なるものが多い。このことはカマド破壊され礫が塊状に移動したものと考えられる。

カマドの幅は1.37m+、長さ0.98m、焚口の幅0.44m。

柱穴 掘方の調査で検出されなかった。

特徴 長辺が4mの竪穴住居であるが、床面に主柱となる柱穴が認められない構造の竪穴住居と想定される。カマドの構築材に結晶片岩の礫を使用し、袖に細長い結晶片岩の礫を使用した可能性が高い。

遺物 床から須恵器杯蓋(2)や杯(3)が出土した。また、掘方の土坑1縁からは土師器甕(10)が出土した。

時代 平安時代9世紀第1四半期。

7号竪穴住居(第25・26・27図、PL.8-5～8-8・50・51、211頁)

位置 北部中央寄り。

座標 X=24726～24730 Y=-70291～-70295

主軸方位 EW

重複 45号土坑にカマドの一部を切られる。18号・19号竪穴住居を切る。

形状と規模 北方向に長軸を有し、歪んだ正方形を呈する。長径は4.32m、短径4.07m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.50m、面積16.10㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、南壁際の基底には暗灰色垂円礫が堆積している。

床面 黄灰色シルトのブロックを含む暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.06～0.20mで平坦である。南側が段状にやや窪んでいる。

カマド 東壁中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁よりも奥に4層の砂礫層を掘り込んで黄灰色シルトを貼って構築している。燃焼部の奥壁の一部は長径0.26mの結晶片岩の礫が立てられている。また右袖奥のピット状の穴は結晶片岩の礫が立てられていたが、遺構検出の際に破損した。カマドの煙道は失われており、両袖は黄灰色焼土ブロックを含むシルト質砂により構築している。

カマドの幅は1.06m、長さ0.72m、焚口の幅0.36m。

柱穴 掘方の調査で検出されなかった。

特徴 一辺が4mの小型の竪穴住居であり、床面に主柱

となる柱穴が認められない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器杯(2)、甕(19・20・21)が出土した。南東隅壁際(G断面)では、床面の直上と埋土の須恵器椀(15)が接合しており、竪穴住居の床面に遺物が堆積する過程で壁際が堆積物で埋没していることを示す事例といえる。同様に土師器杯(3)は床から11cm上位であるが、接合した須恵器椀と同じ堆積時期の可能性がある。

時代 奈良時代8世紀第4四半期。

8号竪穴住居(第28・29・30図、PL.9-1～9-4・51、211・212頁)

位置 中央南西壁際。

座標 X=24705～24712 Y=-70299～-70305

主軸方位 N88° W

重複 断面観察で埋土は9号竪穴住居の埋土に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈するが竪穴住居の西側は調査区外にあり、北西部は9号竪穴住居により失われている。検出した最大の長径は6.88m+(掘方)、短径6.35m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.49m、残存する面積は19.21㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、カマド周辺の直径2.57mの範囲に黄灰色焼土ブロックまじりシルト質砂が堆積する。

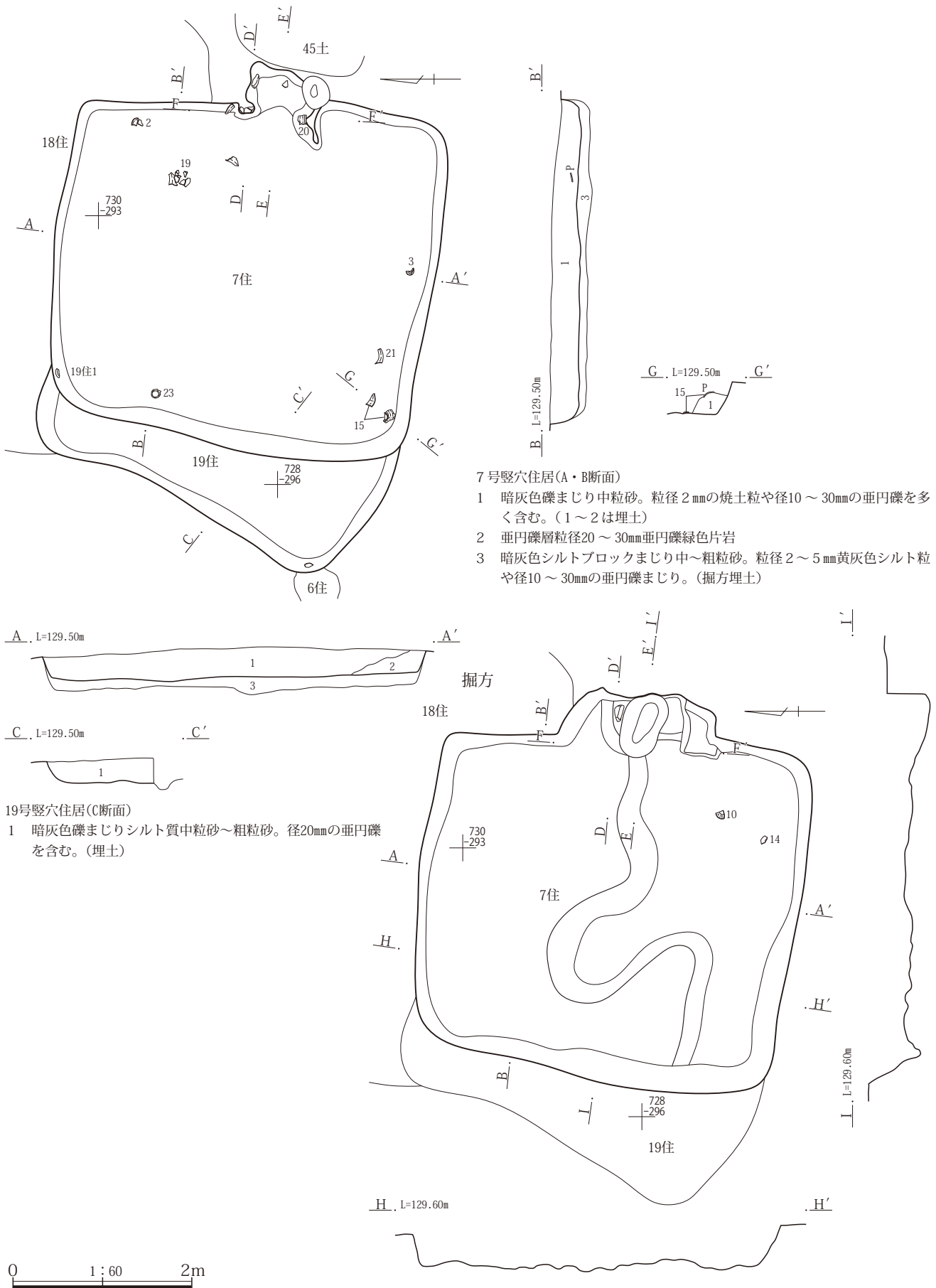
床面 暗灰色礫まじり粗粒砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.08～0.20mで、平坦であるがピットや不定形の窪みが認められる。

カマド 東壁中央南寄りに位置する。カマド燃焼部は大部分が失われている。カマド使用面の推定範囲を破線で示した。掘方の調査で焼土ブロックを多く含むカマド掘方の埋土と崩落したカマド上部のブロックの境界に使用面を推定した。カマドの燃焼部は東壁よりも手前に4層の砂礫層を掘り込んで黄灰色シルトを貼って構築された可能性がある。カマドの煙道及び燃焼部や両袖は失われており、これらは埋土で埋没していた。このことからカマドは竪穴住居の廃絶にともない破壊ないし破損して保存された可能性が高い。カマドの右手前の掘方に長径0.30mの結晶片岩の垂角礫が埋められていた。カマドの構築材として使用された可能性がある。

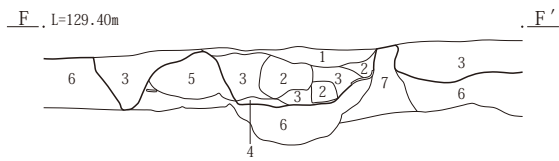
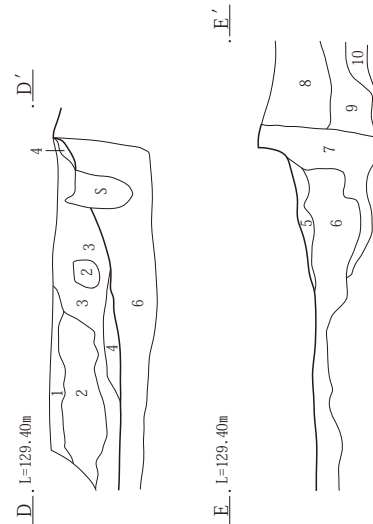
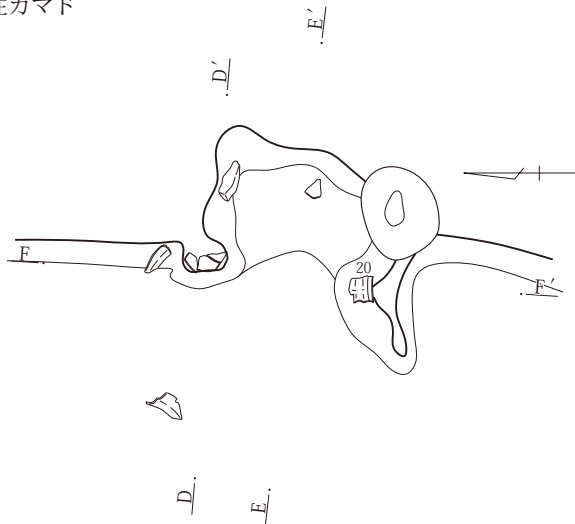
カマドの幅は1.51m+。

貯蔵穴 床面の精査では検出されず、掘方でカマドの南



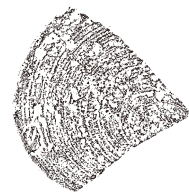
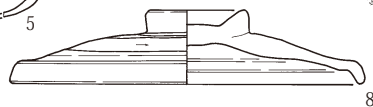
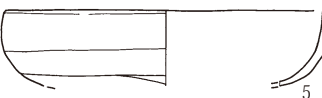
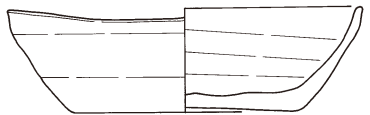
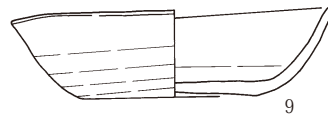
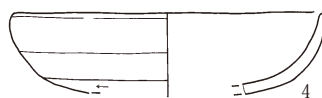
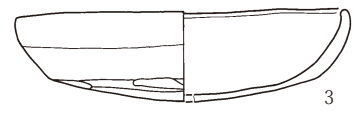
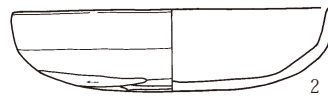
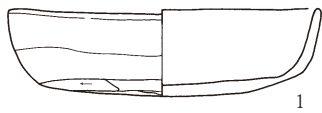
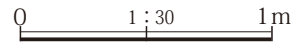
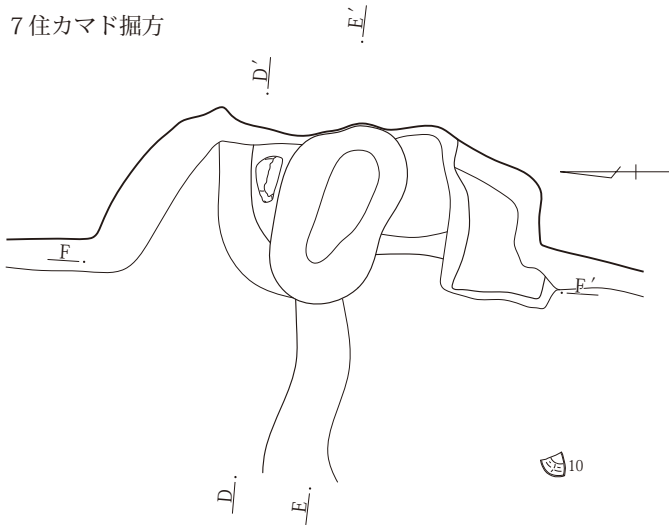
第25図 7・19号竪穴住居

7住カマド

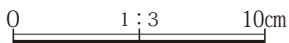


- 1 暗灰色砂質シルト。(1～4は埋土)
- 2 黄灰褐色焼土ブロックまじりシルト質細粒砂～極細粒砂。
- 3 暗灰色砂。
- 4 黄灰色シルト質砂。
- 5 黄灰色シルト質砂ブロック。(5～7は掘方埋土)
- 6 暗灰色焼土ブロックまじり中粒砂。粒径2mm大の焼土を含有する。
- 7 黄灰色焼土まじりシルト質砂。塊状を呈する。
- 8 暗灰色焼土ブロックまじり中粒砂。(8～10は45号土坑埋土)
- 9 黄灰色シルト質砂ブロック。
- 10 暗灰色シルト質砂。

7住カマド掘方

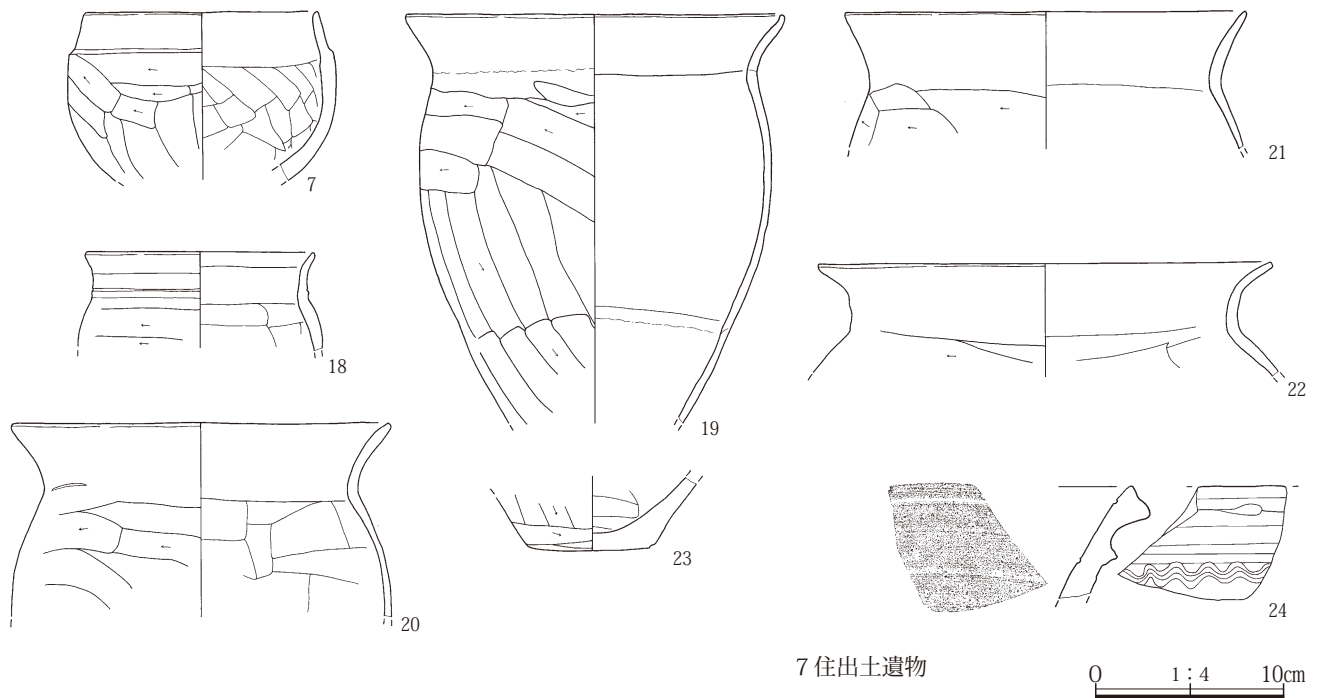
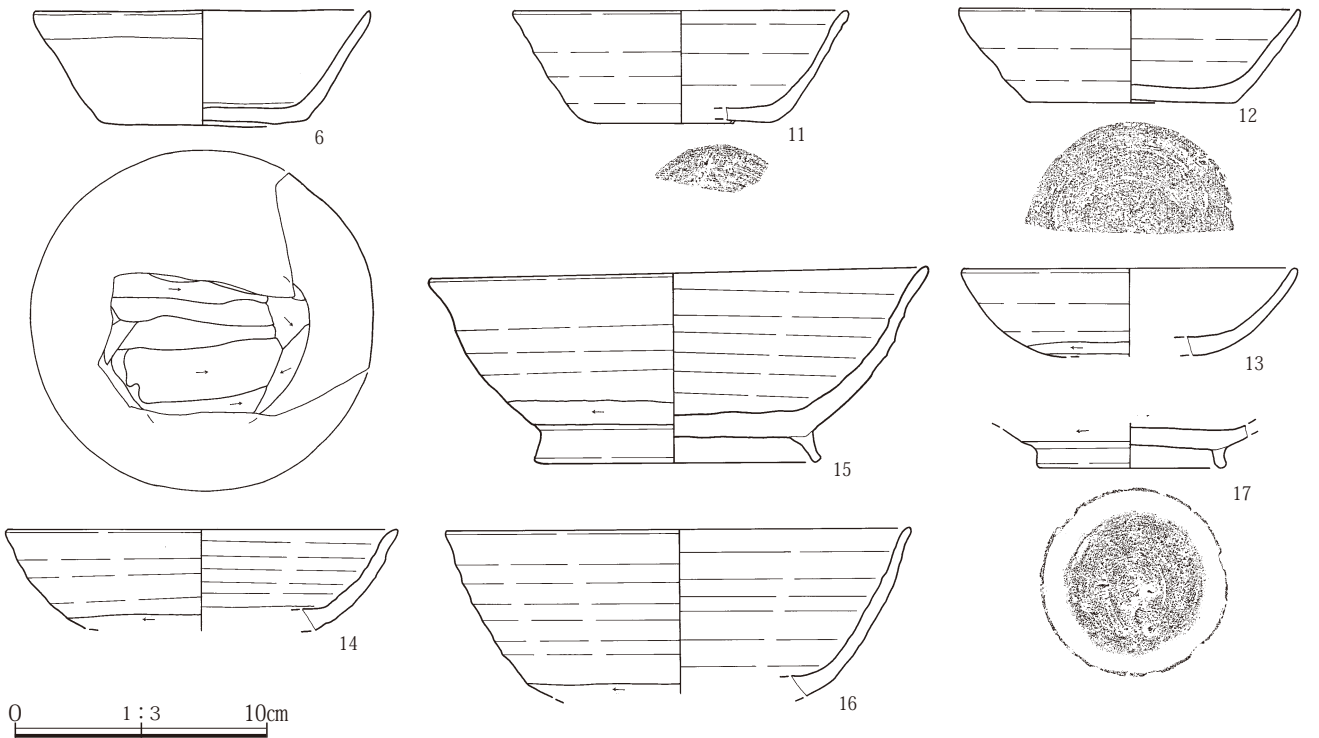


10

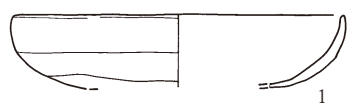


第26図 7号竪穴住居と出土遺物

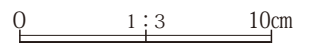
2. 竪穴住居



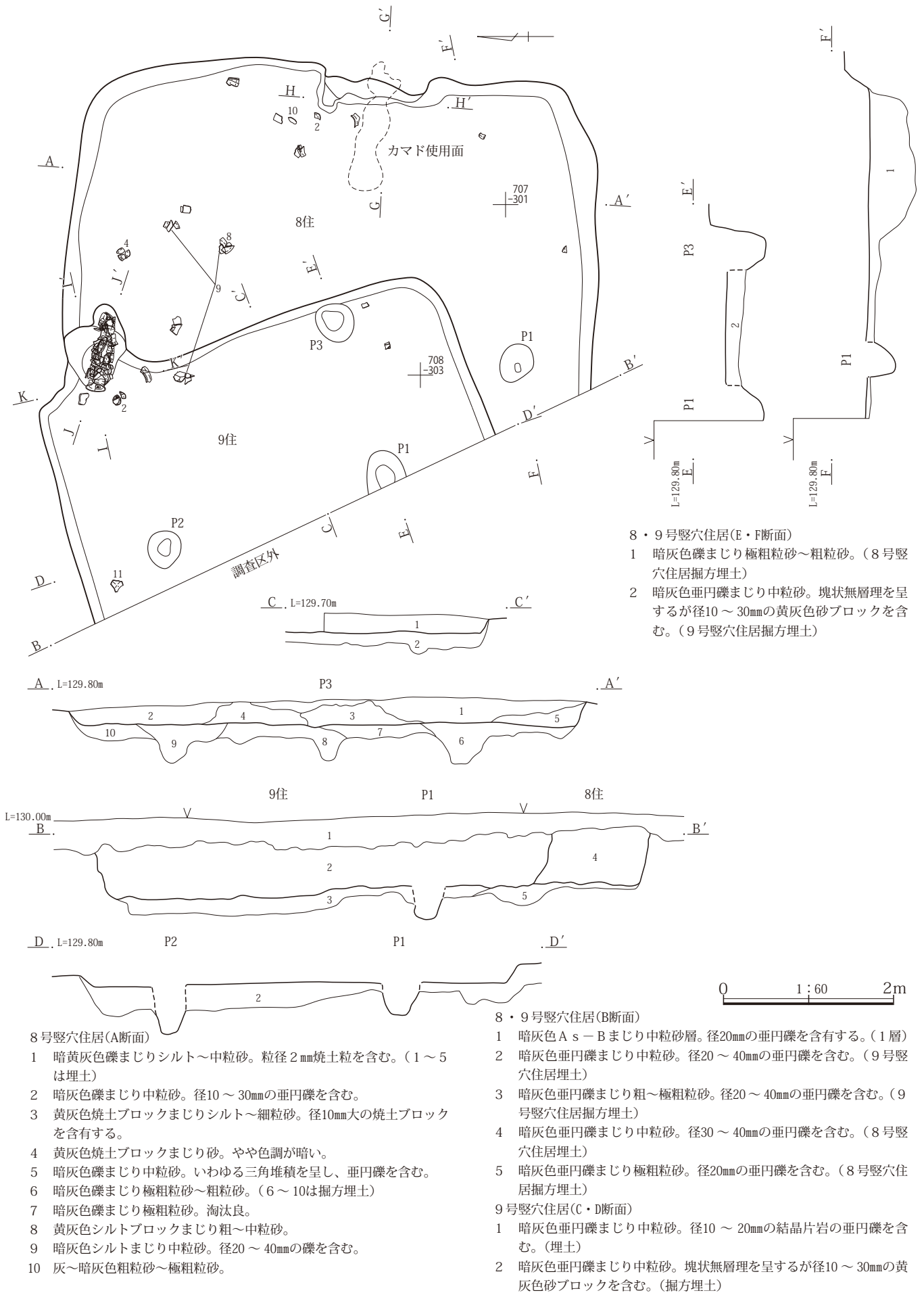
7住出土遺物



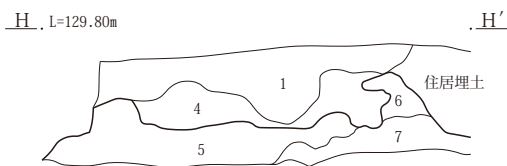
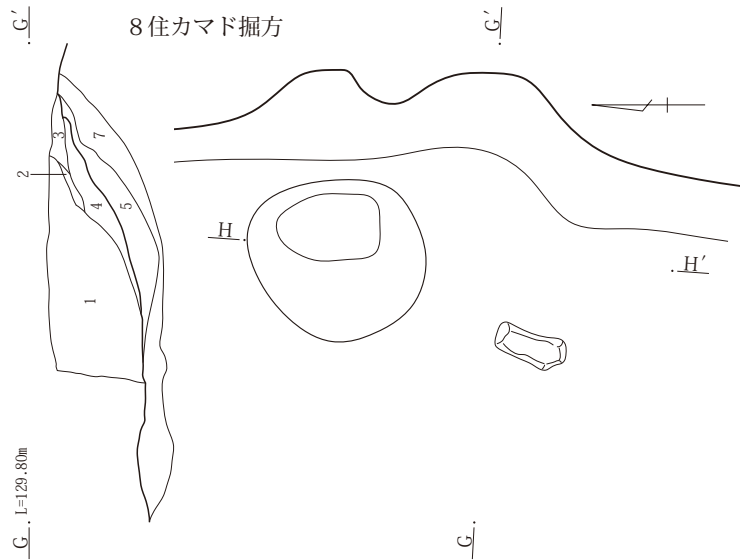
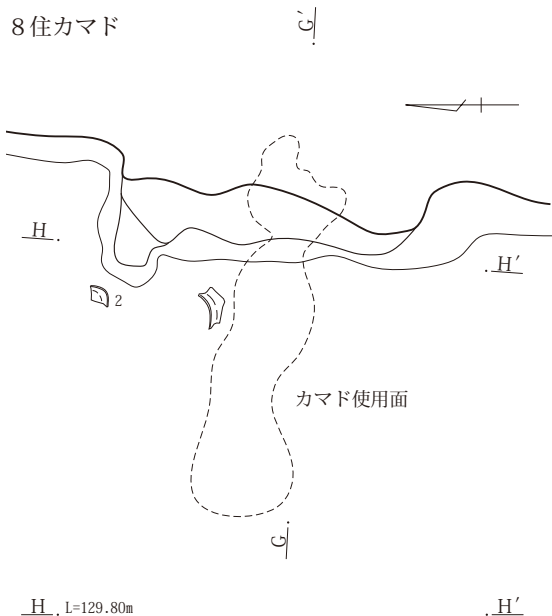
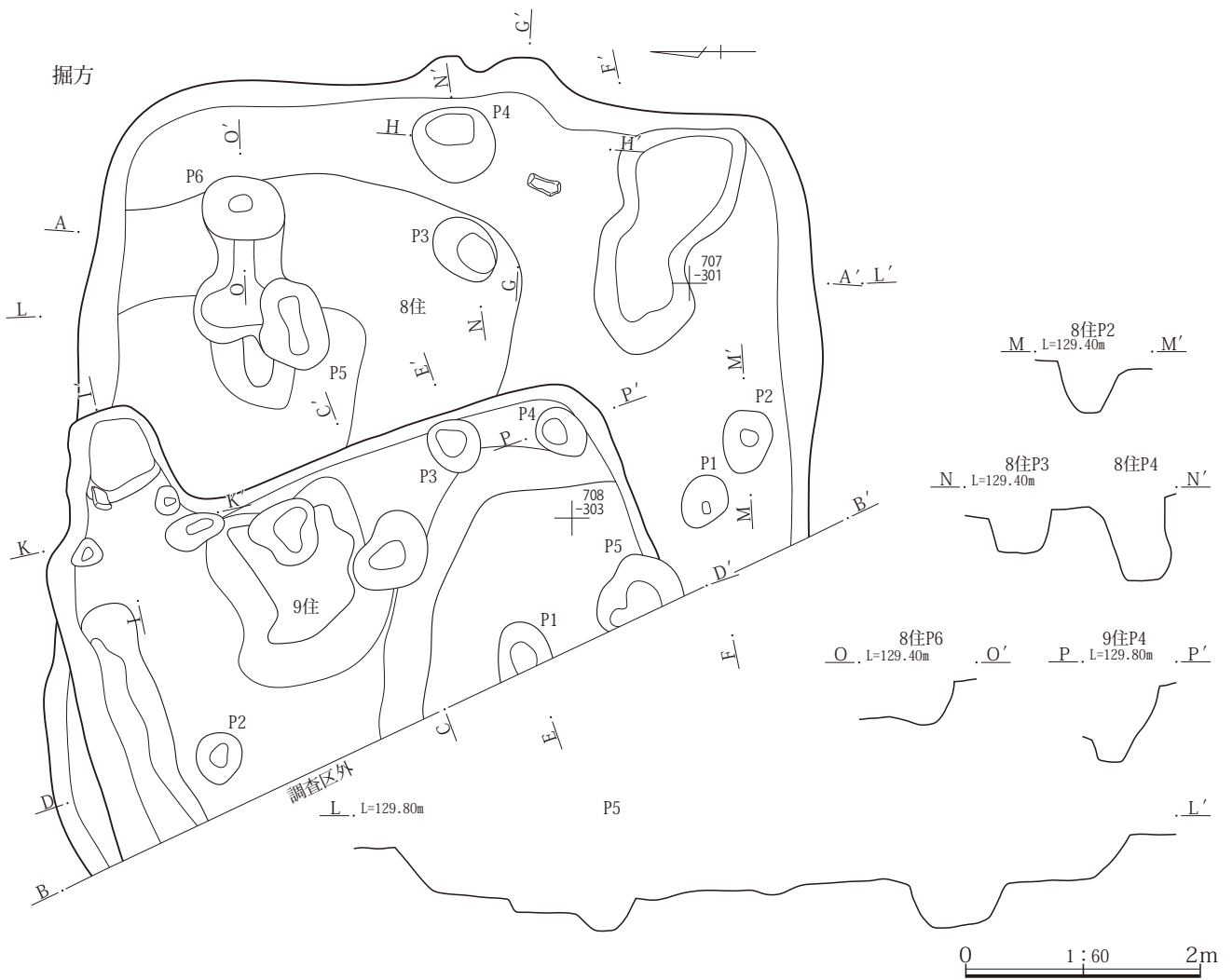
19住出土遺物



第27図 7・19号竪穴住居の出土遺物

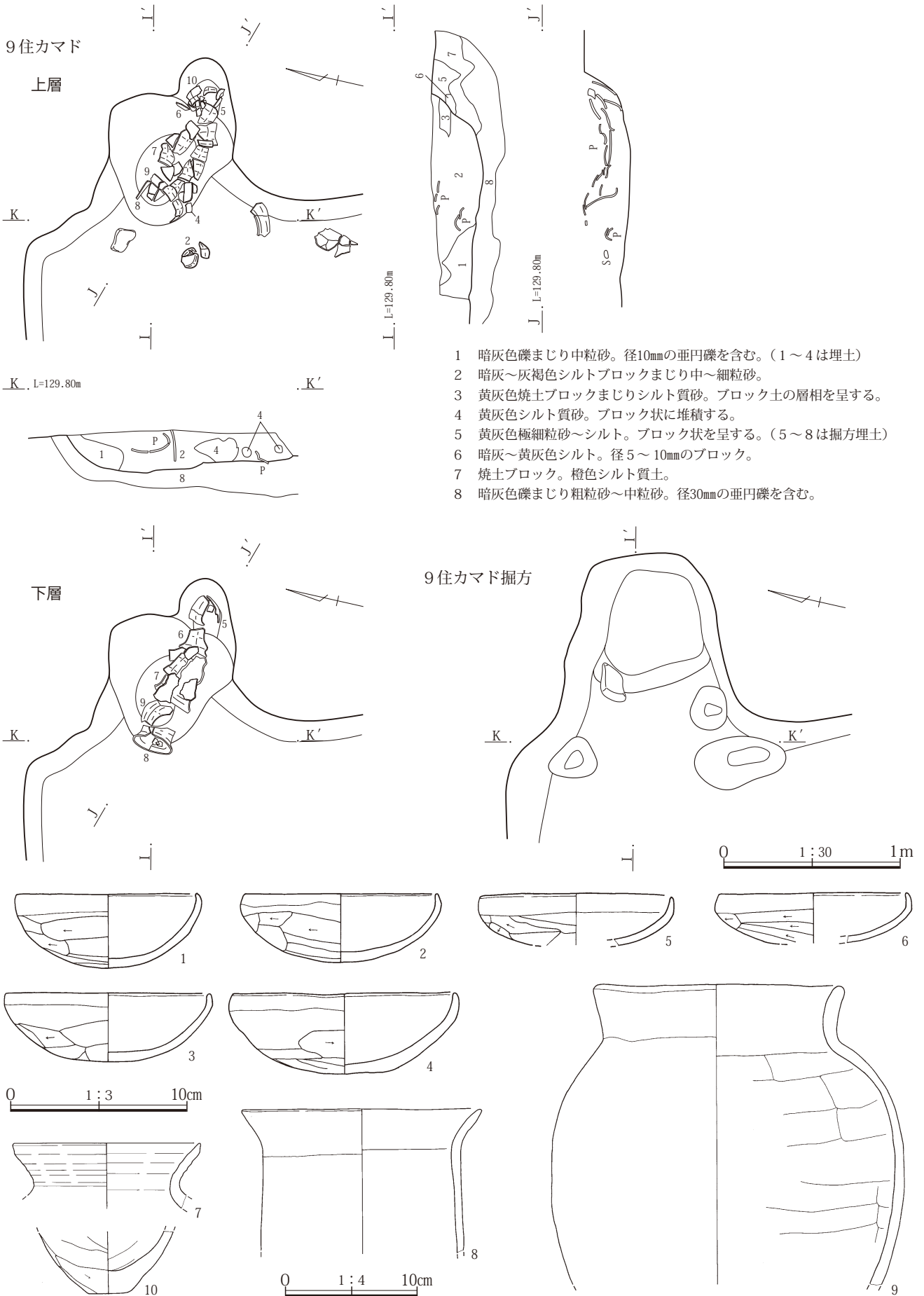


第28図 8・9号竪穴住居(1)



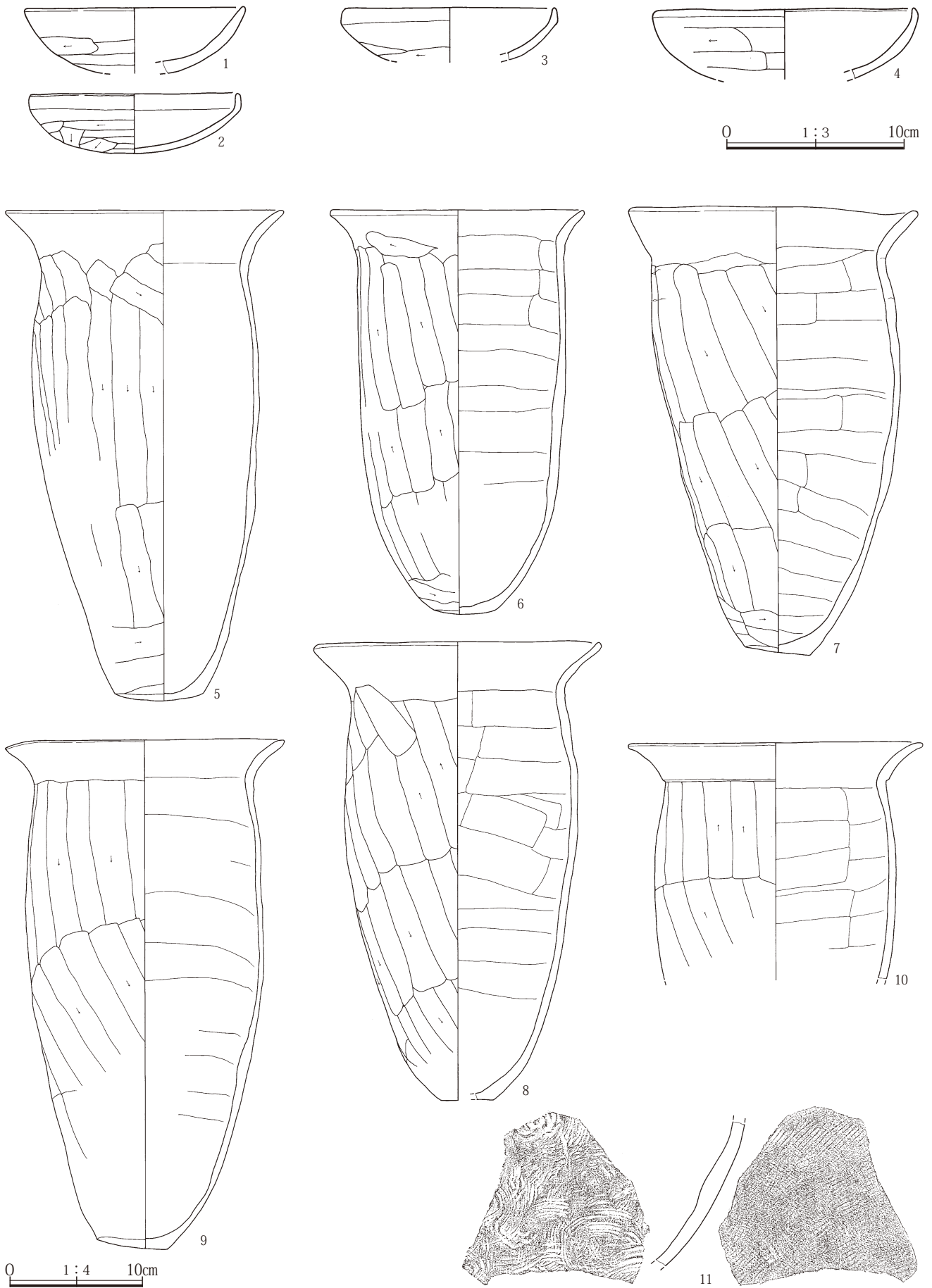
- 1 黄灰色焼土ブロックまじりシルト質細粒砂。径5～15mmの垂円礫や粒径5mmの橙色焼土粒を含む。(1～4は埋土)
- 2 黄灰色シルト～細粒砂。
- 3 黄橙色焼土ブロック多く含むシルト～砂。径2～5mm焼土粒からなる。
- 4 黄灰色焼土ブロックまじりシルト～極細粒砂。
- 5 黄橙色焼土ブロック多く含むシルト～砂。(5～7は掘方埋土)
- 6 黄橙色焼土ブロック多く含むシルト～砂。径5～10mm焼土ブロックからなる。
- 7 暗灰色礫まじり中粒砂。

第29図 8・9号竪穴住居(2)



第30図 9号竪穴住居と8号竪穴住居の出土遺物

2. 竪穴住居



第31図 9号竪穴住居の出土遺物

西に歪んだ浅い窪みを検出した。しかし、窪みからは遺物の出土もなく、形状も不定形であることから、これは貯蔵穴とは認定しなかった。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で断面形状がU字形のピット1～6を検出した。これらのピットは竪穴住居の柱穴となる可能性は低いが、ピット6と9号竪穴住居のピット2は柱間の走行が北壁に平行であり、竪穴住居北側の支柱列になる可能性がある。柱間はピット6・9号竪穴住居ピット2間が4.74mである。

ピット1は長径0.41m、短径0.40m、深さ0.33m。

ピット2は長径0.53m、短径0.42m、深さ0.41m。

ピット3は長径0.58m、短径0.46m、深さ0.35m。

ピット4は長径0.71m、短径0.65m、深さ0.67m。

ピット5は長径0.82m、短径0.58m、深さ0.28m。

ピット6は長径0.69m、短径0.56m、深さ0.37m。

遺物 床面付近から土師器杯(2・4)甕(8・10)が出土した。甕(9)は9号竪穴住居の床面から出土した遺物と接合し、9号竪穴住居の北東壁際は8号竪穴住居に含まれる可能性が高い。

時代 飛鳥時代7世紀第4四半期。

9号竪穴住居(第28～31図、PL.9-5～9-8・51、212頁)

位置 中央南西壁際。

座標 X=24707～24712 Y=-70301～-70305

主軸方位 N70° E

重複 断面観察で埋土は8号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、長方形を呈するが竪穴住居の南西側は調査区外にある。長径は5.15m、検出した最大の短径2.64m+、床面までの深さ0.18m、掘方までの深さ0.39m、検出された面積は12.83㎡+である。

埋土 南西壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、均質である。

床面 暗灰色礫まじり粗粒砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.12～0.19mで平坦である。

カマド 北東隅の東寄りに位置する。カマドの燃焼部は北東壁よりも奥に4層の砂礫層を掘り込んで黄灰色シルトを貼って構築している。カマドの煙道及び両袖は失わ

れており、埋土からはカマドの袖を構成したと思われる黄灰色シルトブロックを検出している。また掘方の調査でカマド燃焼部の手前に左右に直径0.20m、深さ0.12mの小ピットがみられた。これらは袖に埋設された石材の掘方である可能性がある。

燃焼部の使用面には甕(5～10)6個体が口縁部の方向を揃えて入れ子になった状態で折り重なるように出土している。中程に位置する甕(7)は完形で、あとの5個体は2/3以上の残存率を呈する破片である。これらは土器内部に埋土を含まず、またカマド構築材に使用された可能性を示す粘土質の埋土も認められない。これらの土器群は連結された状態で解体されたカマドの使用面に置かれた可能性が極めて高い。

カマドの幅は1.10m+、長さ0.92m、焚口の幅0.96m。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で断面形状がU字ないし筒形のピット1～5を検出した。ピット1・2・3は竪穴住居の柱穴となる可能性があるが、ピット3は北東壁際に位置する。またピット2は9号竪穴住居ピット6と支柱をなす柱穴の可能性はある。柱間はピット1・2が3.72m、ピット1・3が1.94mである。

ピット1は長径0.42m+、短径0.46m、深さ0.43m。

ピット2は長径0.44m、短径0.39m、深さ0.56m。

ピット3は長径0.48m、短径0.44m、深さ0.45m。

ピット4は長径0.49m、短径0.38m、深さ0.20m。

ピット5は長径0.79m、短径0.50m+、深さ0.23m。

遺物 床面から土師器杯(2)、須恵器甕(11)の破片が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀第4四半期。

11号竪穴住居(第32・33・34図、PL.10-1～10-4・51・52、212・213頁)

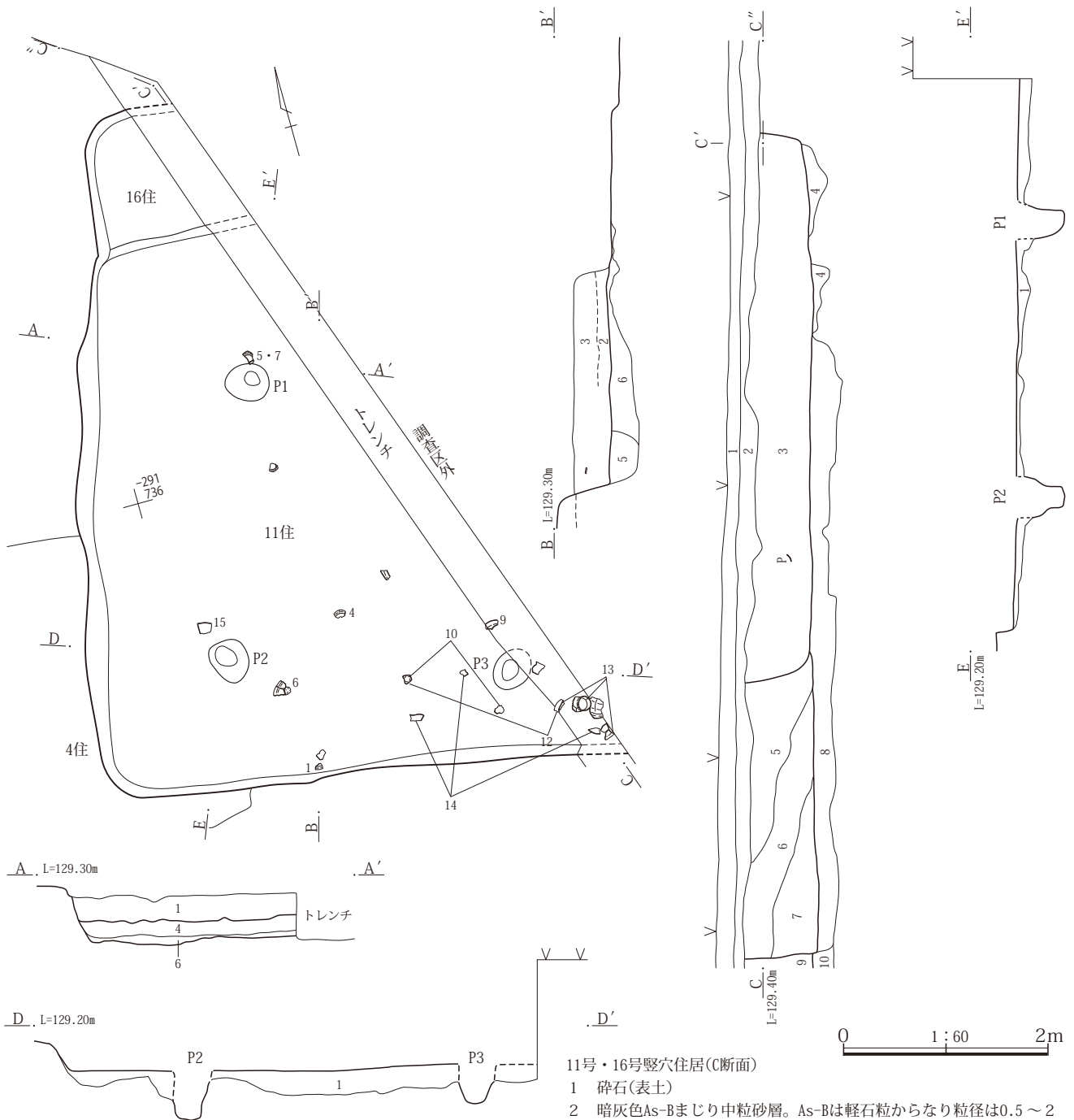
位置 北部北東壁際。

座標 X=24732～24738 Y=-70287～-70291

主軸方位 N76° W

重複 4号竪穴住居に切られる。断面観察で埋土は16号竪穴住居の埋土に切られる。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、長方形を呈するが竪穴住居の東側は調査区外にある。長径は5.64m、検出した最大の短径5.06m+、床面までの深さ0.23m、掘方までの深さ0.47m、検出した最大の面積は19.33㎡+で



11号・16号竪穴住居(A・B断面)

- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。径10～30mmの結晶片岩の亜円礫を含む。(16号竪穴住居埋土)
- 2 暗灰色礫まじりシルト質中粒砂。径10～20mmの亜円礫を含む。上位1cmに炭化物を含有する黄灰色シルトの薄層がみられる。(2～3は11号竪穴住居埋土)
- 3 暗灰色礫まじりシルト質中粒砂。下底部は暗黄灰色礫まじり粗粒砂～極粗粒砂。2との境界は不明瞭である。
- 4 暗灰色礫まじりシルト質中粒砂。(4～6は11号竪穴住居掘方埋土)
- 5 暗灰色礫まじり中粒砂。
- 6 暗褐色礫まじり中粒砂。

11号竪穴住居(D・E断面)

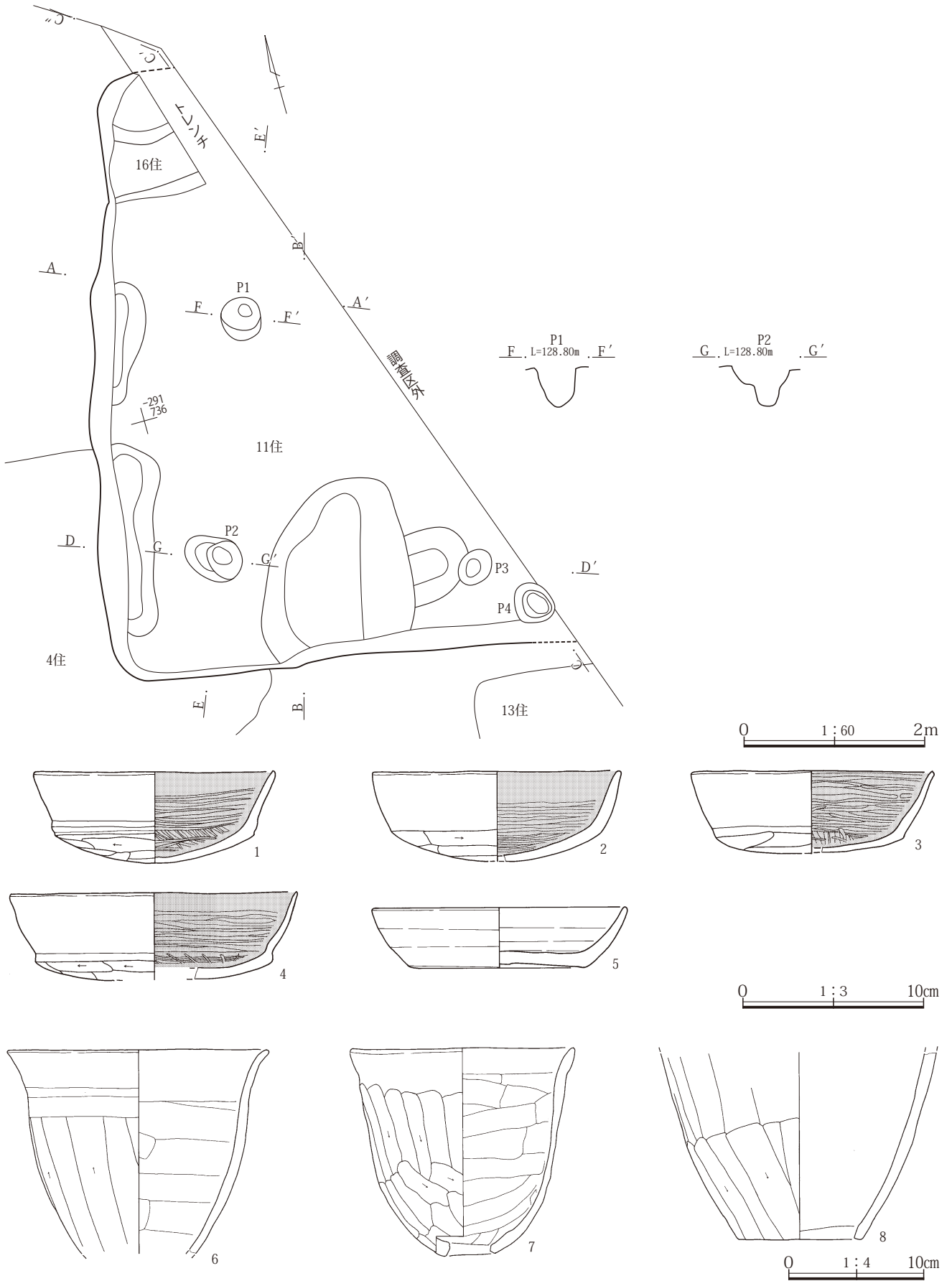
- 1 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径20～30mmの亜円礫からなり、黄灰色砂ブロックを含む。(11号竪穴住居掘方埋土)

11号・16号竪穴住居(C断面)

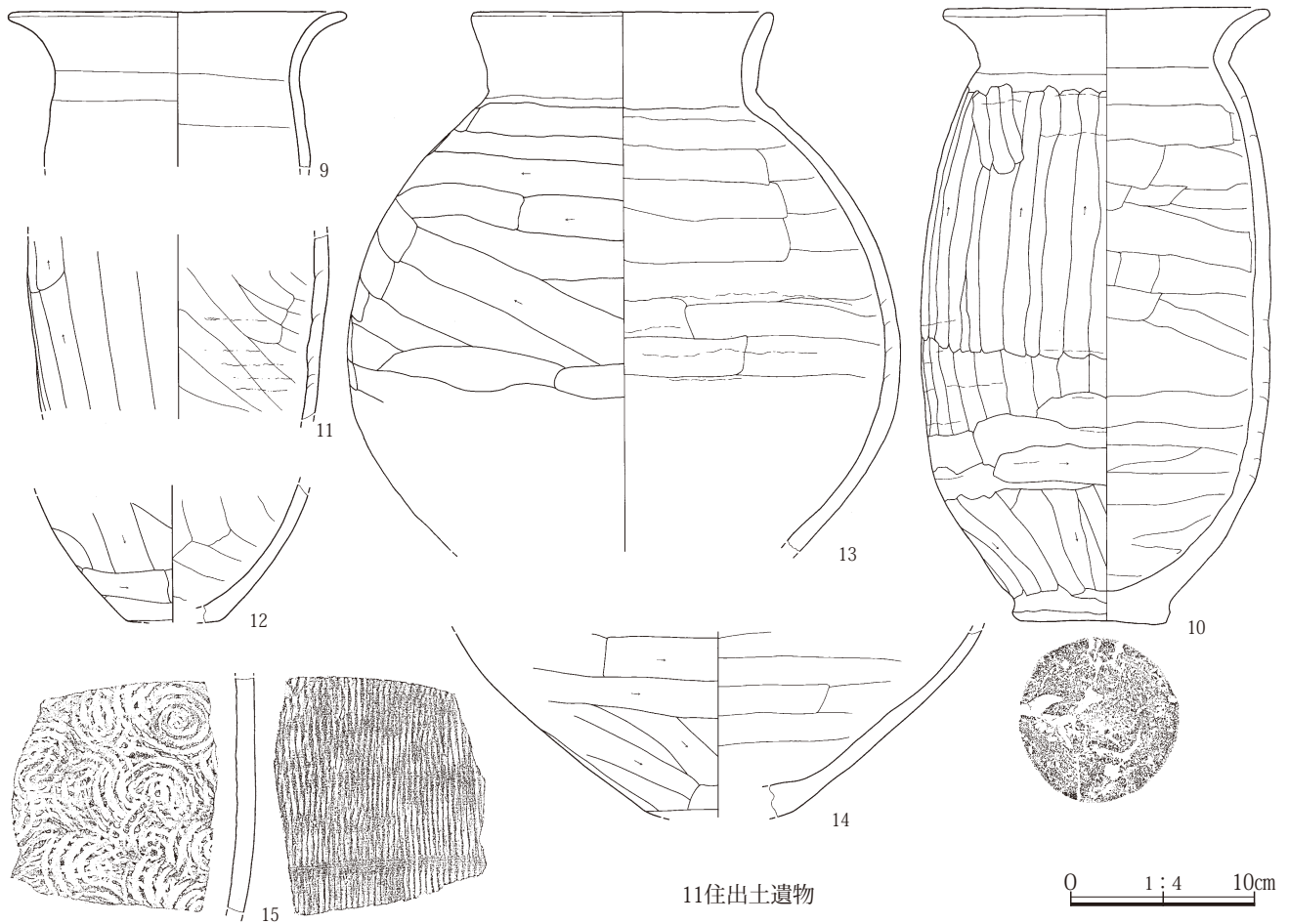
- 1 碎石(表土)
- 2 暗灰色As-Bまじり中粒砂層。As-Bは軽石粒からなり粒径は0.5～2mm。(1層)
- 3 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径50mmの亜円礫からなり、南東に多い。(16号竪穴住居埋土)
- 4 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径20～30mmの亜円礫からなり、南東に多い。(16号竪穴住居掘方埋土)
- 5 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径50mmの亜円礫からなり、下部に多い。(5～7は11号竪穴住居埋土)
- 6 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径20～30mmの亜円礫からなる。
- 7 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径50～100mmの亜円礫からなり、下部に多い。いわゆる三角堆積を呈する。
- 8 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径20～30mmの亜円礫からなり、黄灰色砂ブロックを含む。(11号竪穴住居掘方埋土)
- 9 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径20～30mmの亜円礫からなり、塊状を呈する。(13号竪穴住居埋土)
- 10 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。径20～30mmの亜円礫からなり、黄灰色砂ブロックを含む。(13号竪穴住居掘方埋土)

第32図 11・16号竪穴住居

掘方

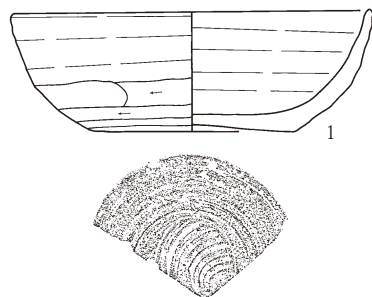


第33図 11・16号竪穴住居と11号竪穴住居の出土遺物



11住出土遺物

0 1:4 10cm



16住出土遺物

0 1:3 10cm

第34図 11・16号竪穴住居の出土遺物

ある。

埋土 北東壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂の互層からなる。南東壁際の基底は直径0.05～0.10mの礫で埋められており、壁際から竪穴の中央に向かって傾きながら成層する暗灰色土の互層からなる。礫層は竪穴の基底を部分的に埋めた特徴を示しており、分布も限定的であることから、竪穴住居の周囲にあった構築物の崩落や人為的な礫の投棄などが成因として考えられる。なおこの堆積物の下層

からは土師器甕(10・13・14)の破片が出土している。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており、ほぼ平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.14～0.24mで浅い窪み状の凹凸がみられるが平坦である。南壁中央は浅い不定形の窪みを呈する。

カマド 床面では検出されなかった。カマドは調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で断面形状がU字形のピット1～4を検出した。ピット1・2・3は竪穴住居の規模や位置から考えて支柱に相当する柱穴である。柱間はピット2・3が2.78m、ピット1・2が2.70mである。

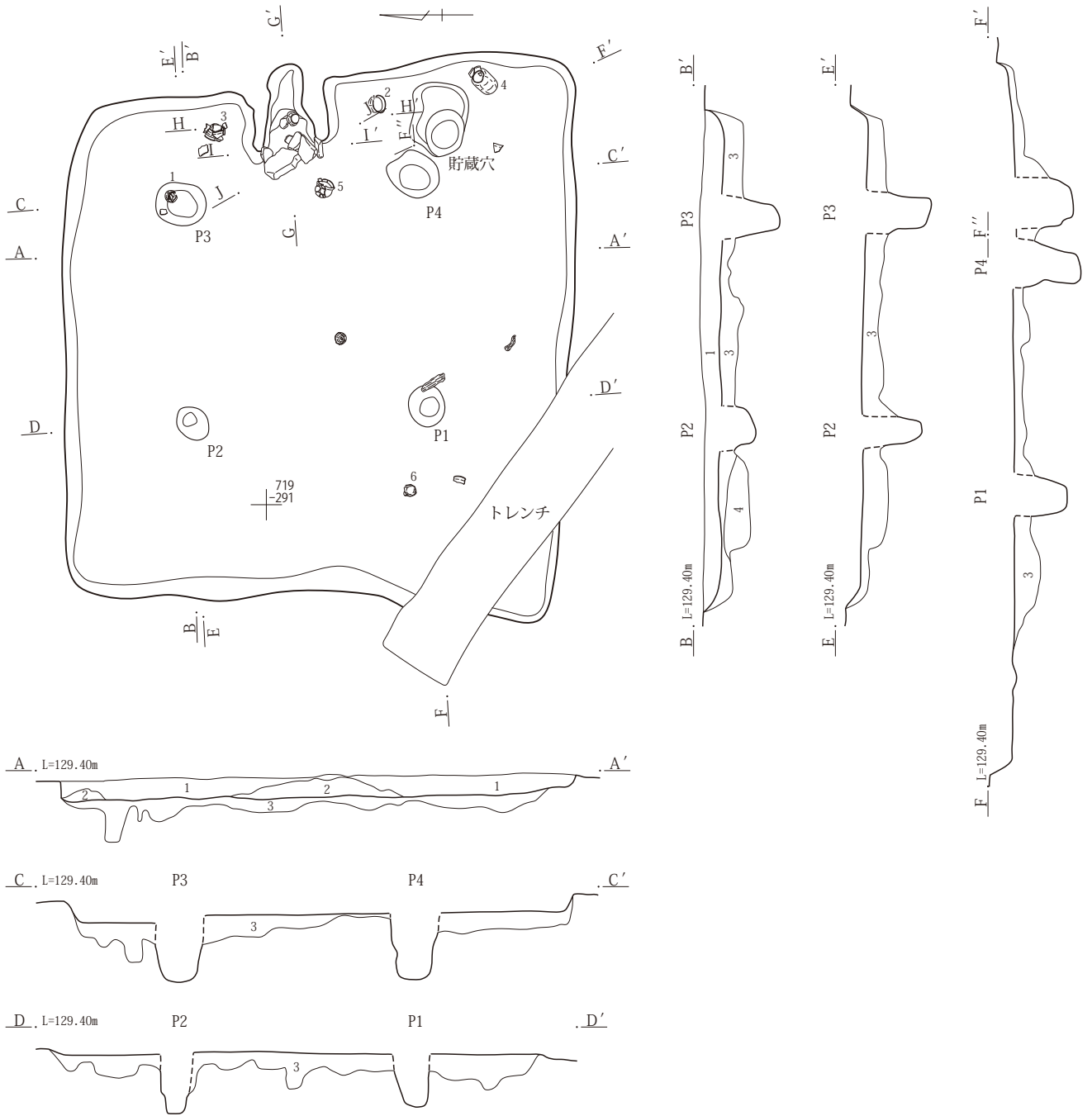
ピット1は長径0.45m、短径0.37m、深さ0.47m。

ピット2は長径0.43m、短径0.36m、深さ0.48m。

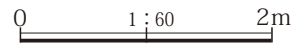
ピット3は長径0.44m、短径0.33m、深さ0.38m。

ピット4は長径0.48m、短径0.41m、深さ0.36m。

遺物 床から土師器杯(4)、床面付近から土師器有孔鉢(7)が出土した。北寄りに位置する床面の5cm上から須



- 1 暗灰色亜円礫まじり中粒砂。炭化物を含有する。(1～2は埋土)
- 2 暗灰褐色シルトブロックまじり中粒砂。径5～10mmの黄灰色シルトブロックを含む。
- 3 暗灰色円礫まじり中粒砂。径10～30mmの円礫を含む。(3～4は掘方埋土)
- 4 黄灰色円礫まじり中粒砂。



第35図 12号竪穴住居(1)

恵器杯(5)が出土したが、年代から16号竪穴住居の出土遺物と考えられる。

時代 古墳時代6世紀後半。

12号竪穴住居(第35・36・37図、PL.10-5～10-8・52、213頁)

位置 中央部北寄り。

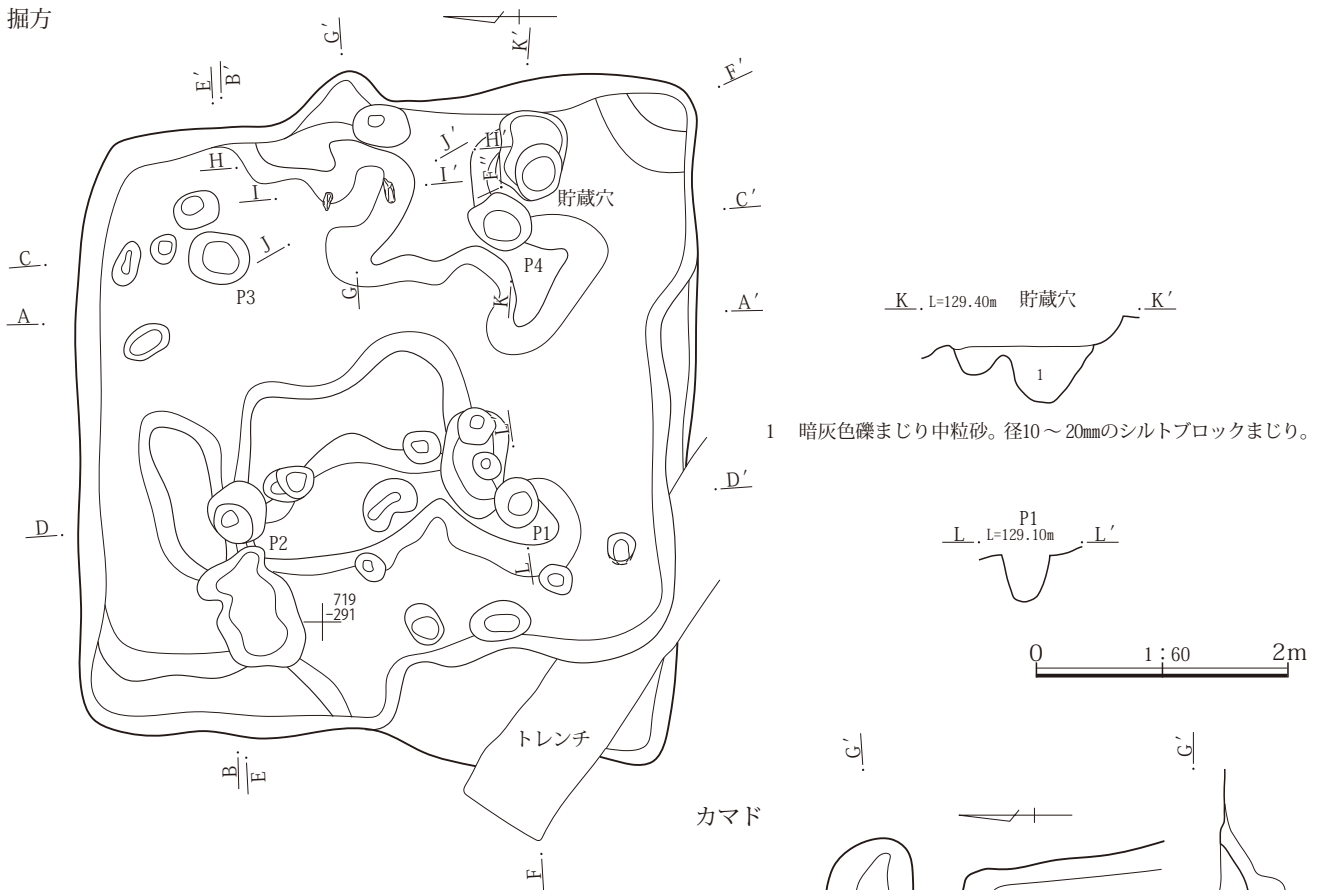
座標 X=24716～24720 Y=-70286～-70292

主軸方位 N84° E

重複 なし。

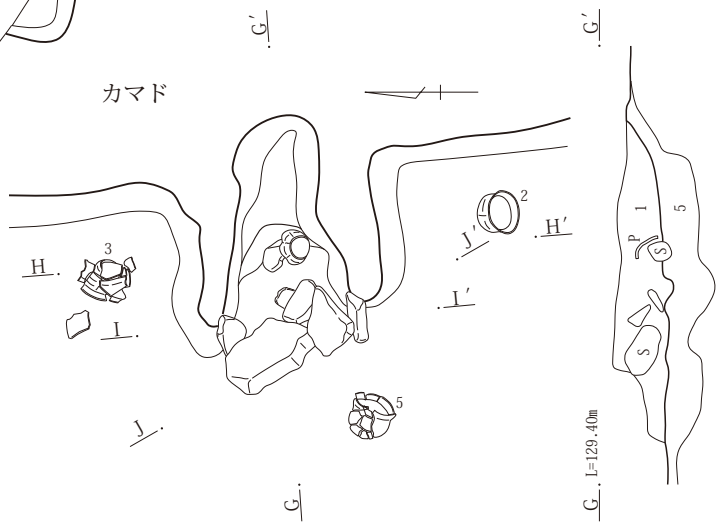
形状と規模 東西方向に長軸を有し、正方形に近い長方

掘方

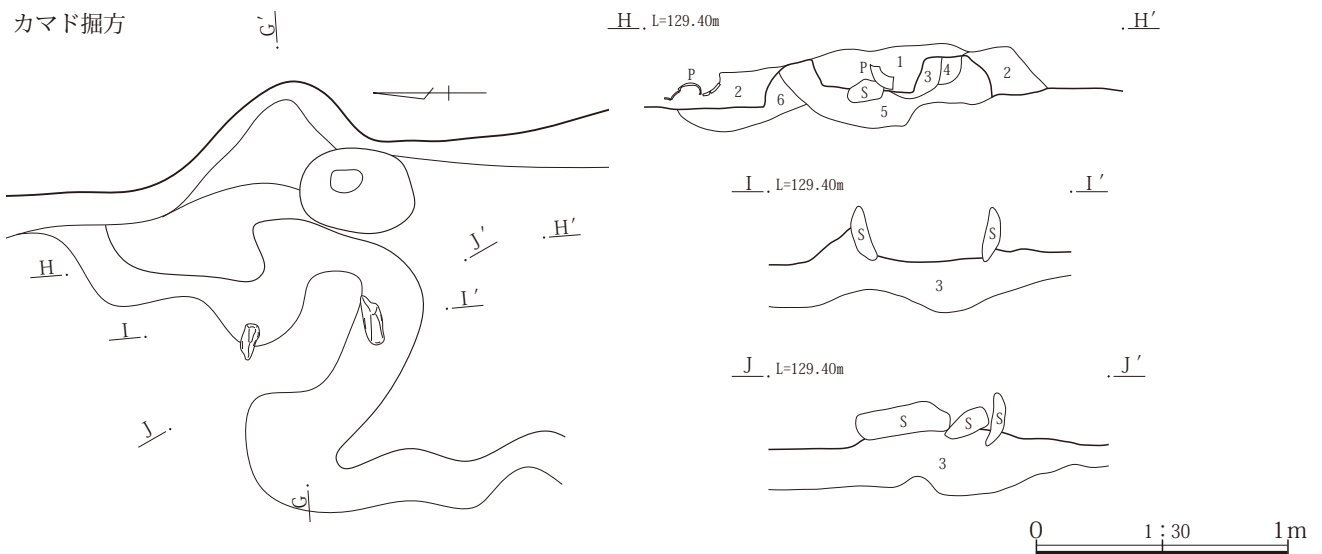


1 暗灰色礫まじり中粒砂。径10~20mmのシルトブロックまじり。

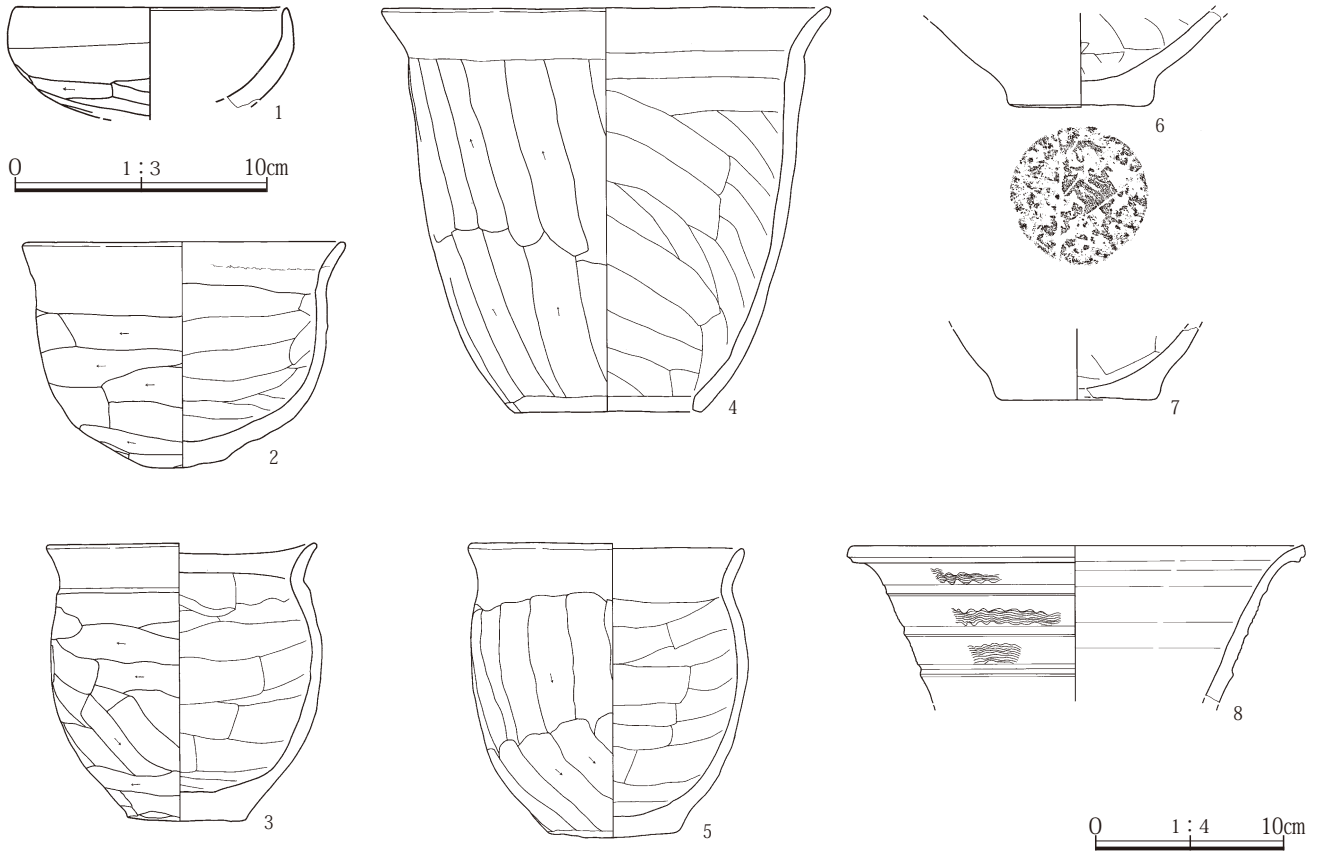
- 1 暗灰褐色焼土ブロックまじりシルト質砂。径2~5mmの橙色焼土粒を含む。(1~2は埋土)
- 2 暗灰色礫まじり砂。
- 3 焼土帯。橙灰色シルト質粘土。(3~6は掘方埋土)
- 4 暗灰色シルト質砂。
- 5 暗灰色礫まじり砂~シルト。
- 6 暗灰色シルトまじり中粒砂。



カマド掘方



第36図 12号竪穴住居(2)



第37図 12号竪穴住居の出土遺物

形を呈する。長径は5.50m、短径4.92m、床面までの深さ0.19m、掘方までの深さ0.44m、面積は24.33㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり炭化物を含む。カマド付近には黄灰褐色シルトブロックまじり砂がみられ、カマドの崩落土であると思われる。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており、ほぼ平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.04～0.30mで無数の窪み状の凹凸がみられる。カマド周辺と中央部の西寄りがやや深い。

カマド 東壁の中央北寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前に、煙道への口は東壁付近の4層の礫層を掘り込んで灰褐色シルトを貼って構築している。両袖は灰褐色シルトにより構築し、長径0.25m大の結晶片岩の礫が燃焼部の壁際に立った状態で、燃焼部の中央には長径0.15mの垂角礫が埋められている。前者は両袖の構築材、後者は燃焼部に置かれた支脚の土台の機能を有した構築材である可能性がある。これらの石材は総て結晶片岩の垂円～垂角礫である。カマドの使用面上には長径0.53m、短径0.23mの凝灰質砂岩が認められ、3つのブ

ロックに分かれている。凝灰質砂岩は表面が赤褐色ないし灰色を呈し、細かなひび割れなど被熱の痕跡が著しい。これらはカマド燃焼部の焚口天井架構材と考えられる。カマドの幅は0.94m、長さ0.88m、焚口の幅0.42m。

貯蔵穴 カマドの右に位置する。床面の精査では見つからず掘方の調査で認められた。長径0.74m、短径0.54m、深さ0.38m。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で断面形状がU字形のピット1～4を検出した。柱間はピット1・2が2.32m、ピット3・4が2.28m、ピット1・4が2.24m、ピット2・3が2.12mである。

ピット1は長径0.39m、短径0.34m、深さ0.50m。

ピット2は長径0.37m、短径0.29m、深さ0.58m。

ピット3は長径0.48m、短径0.41m、深さ0.62m。

ピット4は長径0.53m、短径0.42m、深さ0.63m。

特徴 カマドは部位ごとに石材を選んで構築材とした可能性がある。天井架構材となった凝灰質砂岩は、岩相から周辺地域に分布する新第三系富岡層群の小幡層ないし原市層の砂岩である可能性が高い。

遺物 貯蔵穴に近い床面から甑(4)が、カマドに近い床

面から完形の土師器鉢(2)、小型甕(3・5)が出土した。また、ピット3に近い床面から16cm上位から7世紀代の土師器杯(1)が出土している。

時代 飛鳥時代7世紀中頃。

13号竪穴住居(第38・39図、PL.11-1～11-2、213頁)

位置 北部北東壁際。

座標 X=24728～24732 Y=-70285～-70288

主軸方位 N87° E

重複 断面観察で埋土は14号・17号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、西部の一部が検出された竪穴住居であり、大部分は調査区外にある。長径は3.88m、検出された最大の短径は1.98m+、床面までの深さ0.30m、検出された最大の面積は4.89㎡+である。

埋土 北東壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、埋土の層厚は0.67mである。14号竪穴住居の埋土とよく似ており、断面観察で埋土の層序関係を確認した。

床面 17号竪穴住居の埋土である暗灰色礫まじり砂を床面とし、掘方はみられない。

カマド 床面及び断面で検出されなかった。カマドは調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 検出されなかった。

特徴 一辺が4mあまりの竪穴住居であり、床面に支柱となる柱穴が認められない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器杯(1)、甕(3)の破片が出土した。(3)は6世紀後半の17号竪穴住居に含まれる遺物の年代に近い。

時代 古墳時代6世紀後半。出土した遺物は6世紀中葉の年代を示すが、下位の17号竪穴住居が6世紀後半代の年代を示すため、6世紀後半と考えられる。

14号竪穴住居(第38・39図、PL.11-3～11-4、213頁)

位置 北部北東壁際。

座標 X=24726～24728 Y=-70285～-70286

主軸方位 不明

重複 断面観察で埋土は13号竪穴住居の埋土に切られる。17号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 南西隅の一部が検出された竪穴住居であ

り、大部分は調査区外にある。長径は1.98m+、短径は0.50m+で検出された最大値である。床面までの深さ0.18m、検出された最大の面積は0.70㎡+である。

埋土 北東壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、埋土の層厚は0.77mである。13号竪穴住居の埋土とよく似ており、断面観察で埋土の層序関係を確認した。

床面 17号竪穴住居の埋土である暗灰色礫まじり砂や4層の暗灰色礫まじり砂を床面とし、掘方はみられない。

カマドや柱穴 床面及び断面にはみられなかった。これらは調査区外に存在する可能性がある。

遺物 埋土から須恵器杯(1)が出土したが、10世紀後半代の年代を示し、混入した遺物である可能性がある。

時代 6世紀後半の竪穴住居との切り合い関係が認められることから、6世紀後半と推定される。

15号竪穴住居(第40・41・42図、PL.11-5～12-6・52、213・214頁)

位置 中央部北寄り。

座標 X=24708～24715 Y=-70288～-70294

主軸方位 N87° W

重複 3号溝に北壁を切られ、1号掘立柱建物のピット4に掘り込まれ、内区が重なる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、ほぼ正方形に近い。長径は6.50m、残存する最大の短径6.01m+、床面までの深さ0.25m、掘方までの深さ0.52m、残存する面積は36.33㎡で、一辺が6mを越える竪穴住居である。

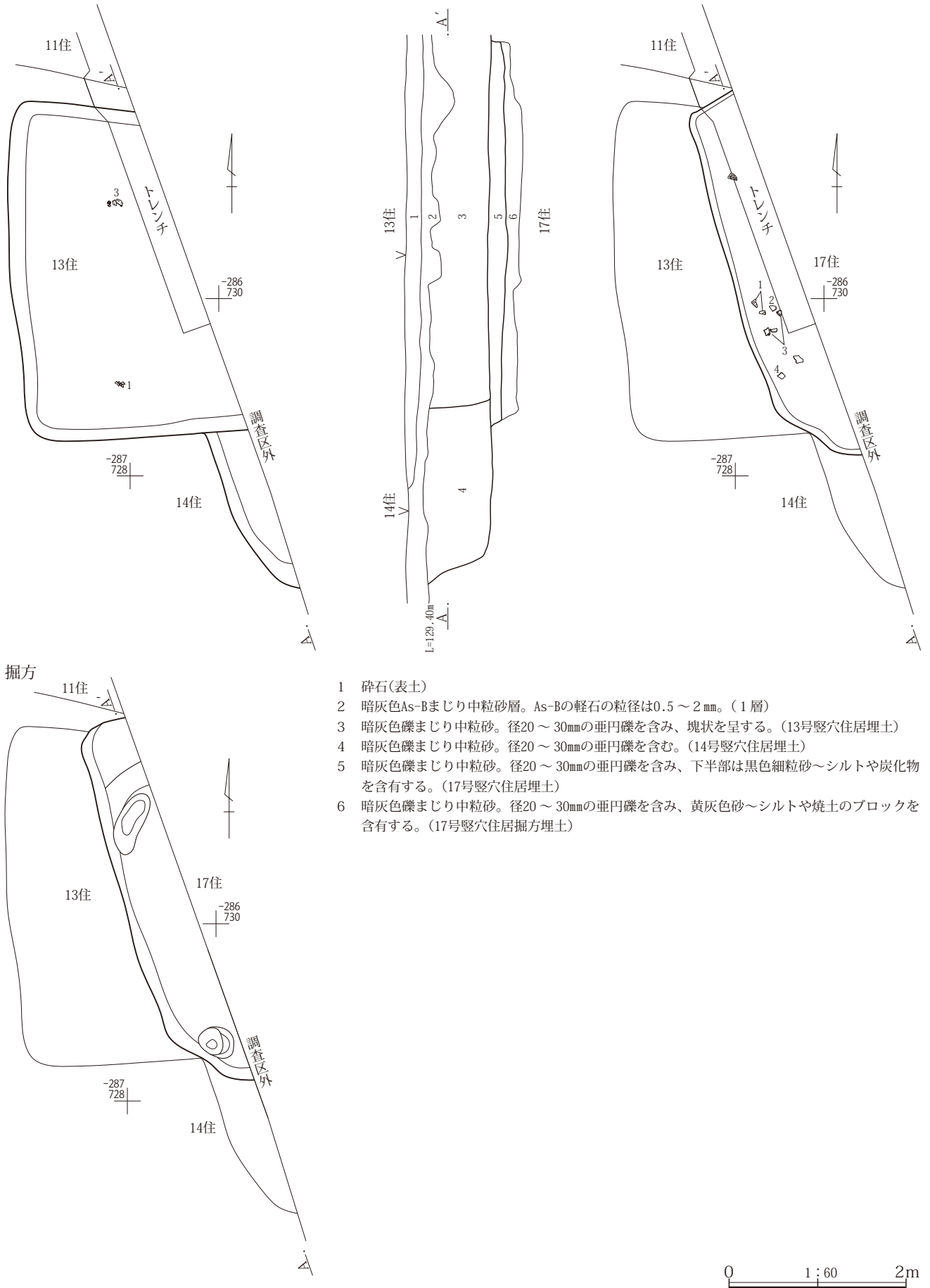
埋土 暗灰色礫まじり砂からなり西側の床面に黄灰色シルト質砂が堆積している。これはカマドの崩落土の可能性はある。

床面 黄灰色砂のブロックを含む暗灰色礫まじり砂で構築しており、平坦である。

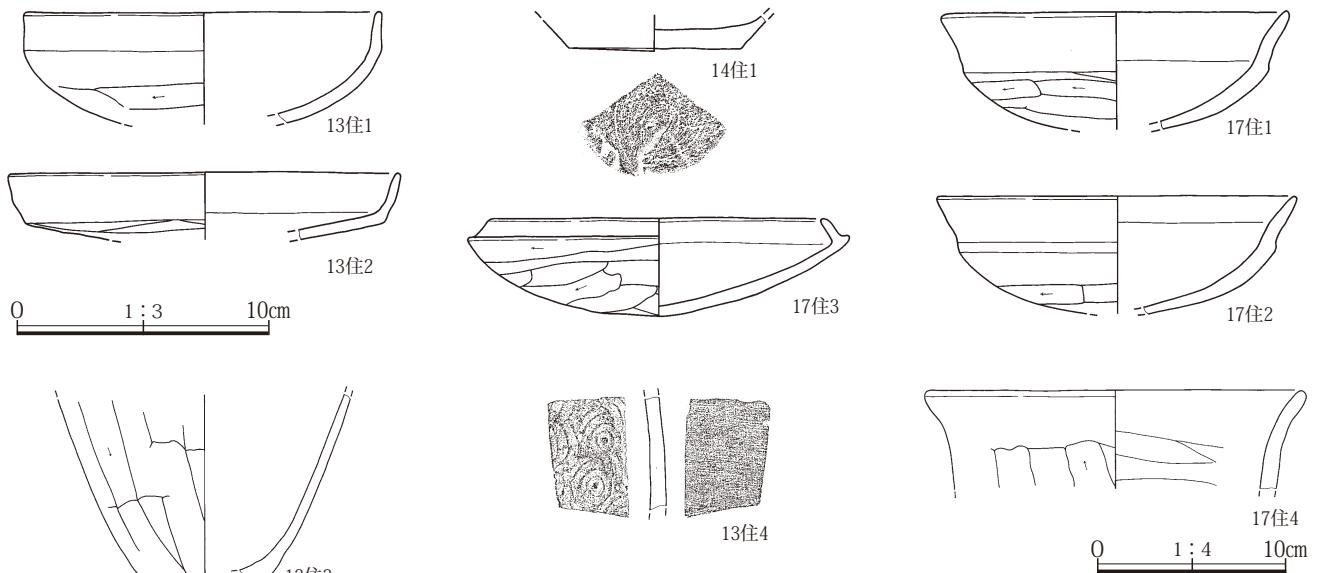
掘方 掘方と床面の間は0.05～0.24mで窪み状の凹凸やピットがみられ、中央部はやや浅い。

カマド 残存する3面の壁際からは検出されなかった。北壁及び床面の一部は3号溝により破壊されているので北壁付近に存在したカマドが破壊された可能性が高い。埋土中にはカマドが住居の北側にあったことを示す黄灰色シルト質砂の堆積が認められる。

貯蔵穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で3号



第38図 13・14・17号竪穴住居



第39図 13・14・17号竪穴住居の出土遺物

溝際からピット5・6として検出されたものが貯蔵穴の可能性が高い。主軸方位はN87° W、長径1.04m、短径0.46m、深さ0.56m。ピット5の底面8cm上から土師器碗(7)が出土し、床面の遺物と接合している。

柱穴 床面の精査で柱穴の位置を検出し、掘方の調査で完掘してピット1～4を柱穴と確認した。柱間はピット1・4が3.70m、ピット2・3が3.62m、ピット1・2が3.70m、ピット3・4が3.50mである。ピット1～20の計測値は第3表に示した。

ピット1は長径0.62m、短径0.60m、深さ0.62m。

ピット2は直径0.55m、深さ0.55m。

ピット3は長径0.52m、短径0.43m、深さ0.67m。

ピット4は長径0.68m、短径0.65m、深さ0.59m。

第3表 15号竪穴住居で検出されたピットの計測値

	単位(m)						
ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長径(直径)	0.62	(0.55)	0.52	0.68	0.47	0.54	0.46
短径	0.60		0.43	0.65	0.52	0.48	0.31
深さ	0.62	0.55	0.67	0.59	0.50	0.56	0.51
ピット	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長径(直径)	1.40	0.44	0.44	0.34	0.34	0.23	0.26
短径	0.86	0.35	0.31	0.20	0.22	0.20	0.20
深さ	0.29	0.10	0.14	0.35	0.31	0.19	0.19
ピット	P15	P16	P17	P18	P19	P20	
長径(直径)	0.38	0.29	0.26	0.32	0.32	0.36	
短径	0.20	0.27	0.24	0.24	0.27	0.26	
深さ	0.22	0.35	0.23	0.10	0.22	0.33	

遺物 床面から土師器高坏(8・9)、小型甕(13)の破片が出土し、床面付近から土師器杯(1・2・3・5)須恵器短頸壺(10)が出土した。南壁際の床面からは砥石(17)

が、床面付近から砥石(18)と石製紡錘車(19)が出土している。また、未使用の土製羽口(16)も出土している。

時代 古墳時代6世紀後半。

16号竪穴住居(第32・33・34図、PL.12-7～12-8・53、214頁)

位置 北部北東壁際。

座標 X=24735～24739 Y=-70288～-70290

主軸方位 不明

重複 断面観察で埋土は11号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 北西壁際のみ検出された竪穴住居で、南西部は11号竪穴住居埋土と一括で発掘して失われた。また竪穴住居の東側は調査区外にある。平面的に残存する最大の長径は東西1.50m+、短径は南北1.28m+であるが、北東壁の埋土断面で推定すると最大の長径は南北4.74m+、短径は東西2.78m+である。床面までの深さ0.14m、掘方までの深さ0.26m、検出された最大の面積は1.55㎡+である。

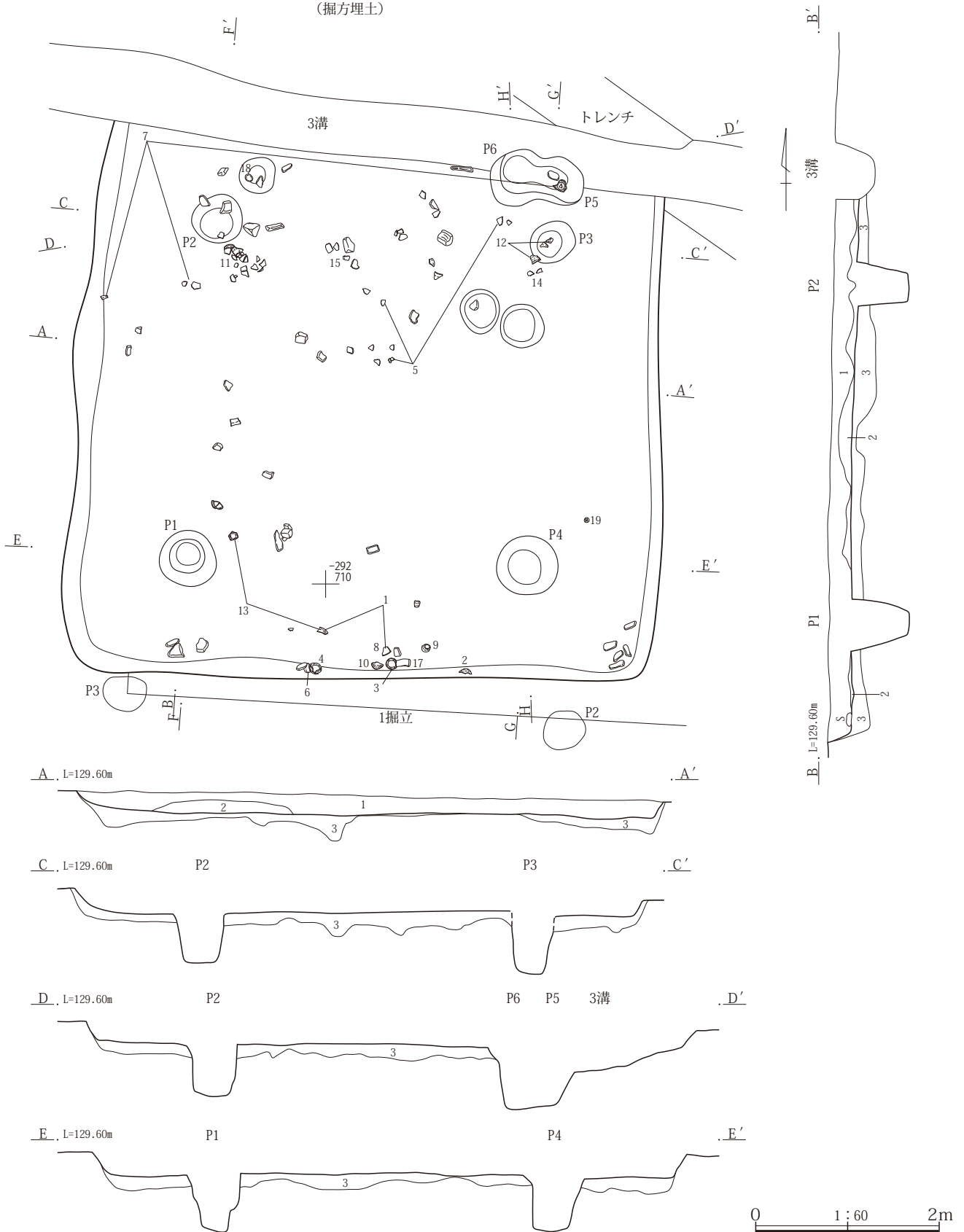
埋土 北東壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、埋土の層厚は0.63mである。11号竪穴住居の埋土とよく似ており、断面観察で埋土の層序関係を確認して分離した。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

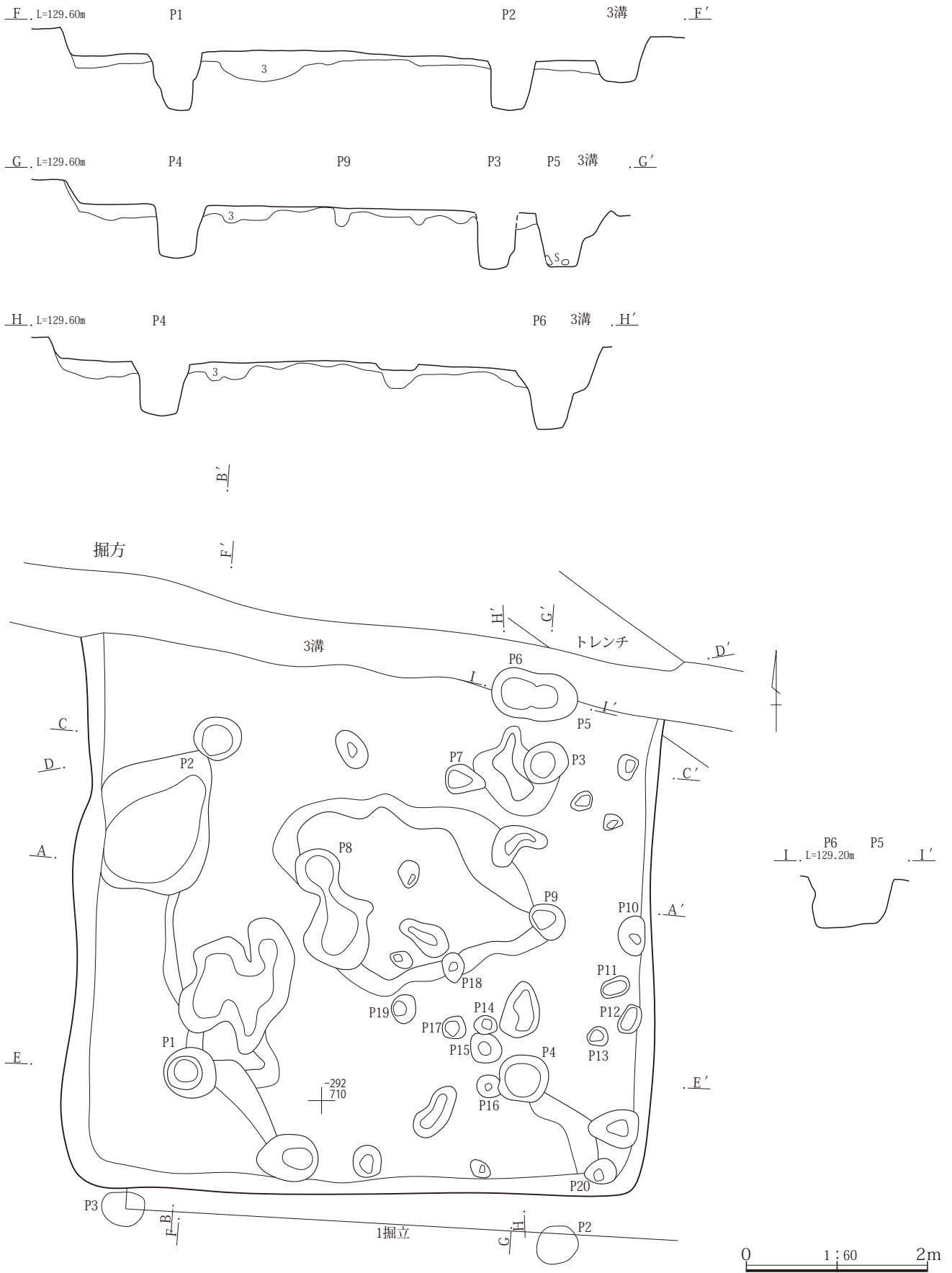
掘方 掘方と床面の間は0.13～0.26mで、一部に4層の巨礫が露出するが平坦である。

カマド 床面及び断面ではみられなかった。調査区外に存在する可能性がある。

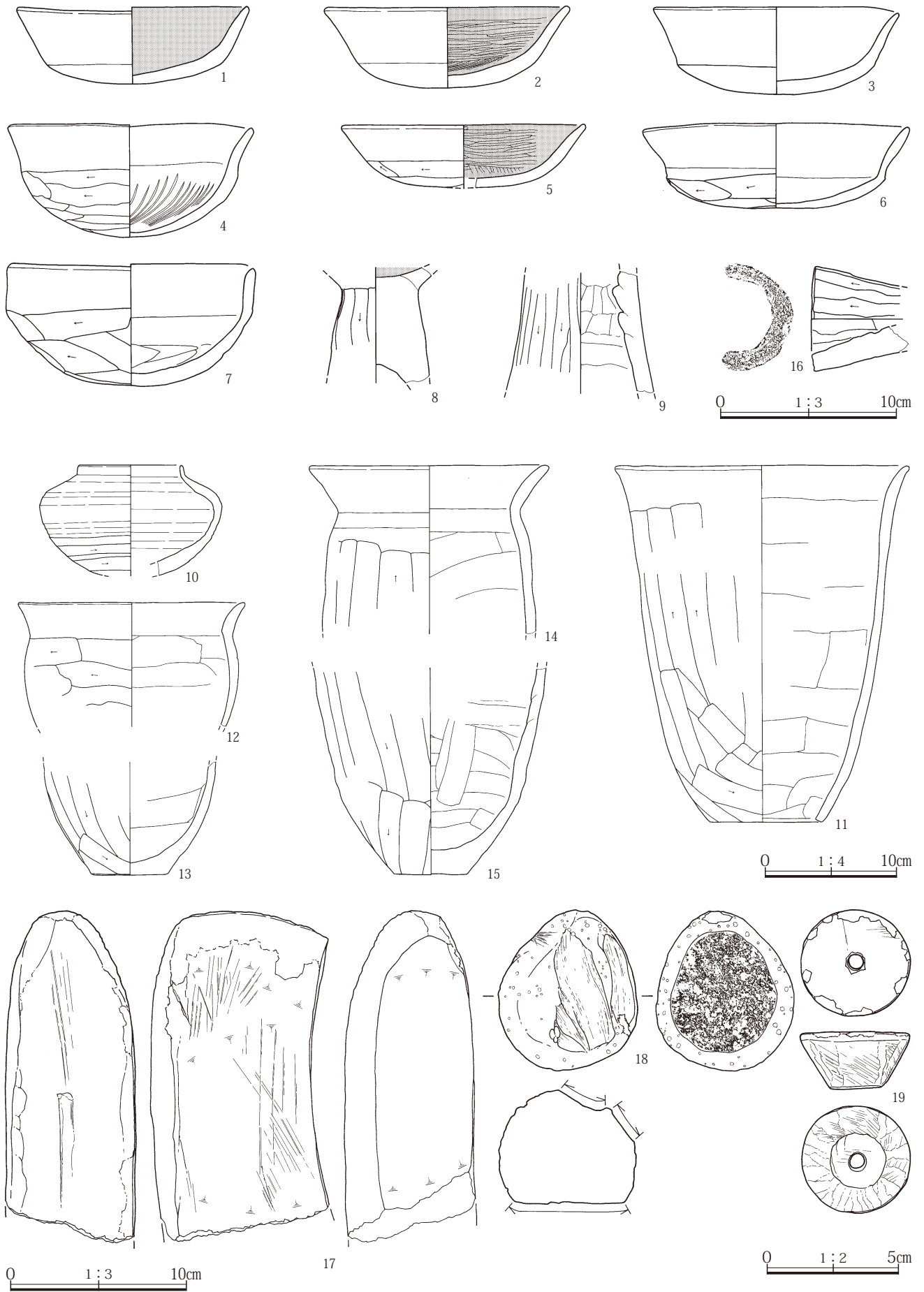
- 1 暗灰色礫まじり細～中粒砂。径10～40mm、最大径50mmの結晶片岩の垂円礫を多く含む。北東隅に礫が多い。粒径2～5mmの焼土粒は中央部に多い。径30mmの炭化物が中位にみられる。(1～2は埋土)
- 2 黄灰色中粒砂。基質はシルト質粘土で径10～20mmのブロック状を呈する。地層の上位は凸凹がある。
- 3 暗灰色礫まじり中粒砂。径10～30mmの垂円礫を含み、黄灰色中粒砂のブロックを多く含む。(掘方埋土)



第40図 15号竪穴住居(1)



第41図 15号竪穴住居(2)



第42図 15号竪穴住居の出土遺物

柱穴 一辺が5 mに及ぶ竪穴住居であり、主柱穴は存在したはずだが掘方の調査でも検出できなかった。これは主柱の柱穴底が4層の砂礫層で止められた可能性がある。

遺物 埋土から須恵器杯(1)が出土し、11号竪穴住居の須恵器杯(5) (第33図)も16号竪穴住居に帰属する可能性が極めて高い。

時代 奈良時代8世紀後半。

17号竪穴住居(第38・39図、PL.13-1～13-2・53、214頁)

位置 北部北東壁際。

座標 X=24728～24732 Y=-70285～-70287

主軸方位 不明

重複 断面観察で埋土は13号・14号竪穴住居の埋土に切られる。埋土や掘方埋土の違い及び断面観察で13号竪穴住居と別の竪穴住居と考えたが、13号竪穴住居が建て替えられた住居である可能性もある。

形状と規模 南西壁付近の床面が検出された竪穴住居であり、大部分は調査区外にある。長径は3.64m+、短径は0.71m+で検出された最大値である。床面までの深さ0.20m、掘方までの深さ0.32m、検出された最大の面積は2.80㎡+である。

埋土 北東壁際での断面観察では、暗灰色礫まじり砂からなり下半部は黒色細粒砂～シルト、炭化物を含有し、埋土の層厚は0.23mである。重複関係がある13号・14号竪穴住居の埋土とは異なる層相を呈する。

床面 3層の黄灰色シルトブロックまじり黒色土を浅く掘り込み、黄灰色砂～シルトのブロックや焼土ブロックを含む暗灰色礫まじり砂を貼って明瞭な床面を構築している。

掘方 掘方と床面の間は0.20mで3層の黄灰色砂～シルトのブロックが混じる漸移帯との境界はやや不明瞭である。

カマドや柱穴 床面や掘方及び断面にはみられなかった。これらは調査区外に存在する可能性がある。

遺物 床面から土師器杯(1・2・3)、甕(4)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

18号竪穴住居(第15・16・19図、PL.13-3・13-4・50、214頁)

位置 北側中央寄り。

座標 X=24728～24732 Y=-70290～-70295

主軸方位 不明

重複 4号・7号・19号竪穴住居に切られる。

形状と規模 東西に長軸を有し、方形を呈する。長径は4.88m、残存する最大の短径3.82m+、床面までの深さ0.16m、残存する面積6.38㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり黄灰色シルト質砂のブロックを含む。

床面 4層の黄灰色砂礫層を削って床面としており、掘方はなし。

カマド 床面では検出されなかった。重複のある竪穴住居によって失われた可能性が高い。

柱穴 床面では検出されなかった。

特徴 長辺が5 mに及ぶ竪穴住居であり、主柱穴は存在したはずだが掘方の調査でも検出できなかった。これは主柱の柱穴底が4層の砂礫層で止められた可能性がある。両側を竪穴住居によって失われた浅い竪穴遺構であるが、床面が平坦で明瞭なことから竪穴住居と認定した。

遺物 床面付近から土師器杯(1・2)が出土した。

時代 古墳時代6世紀中葉。

19号竪穴住居(第25・27図、PL.13-5～13-6、214頁)

位置 北側中央寄り。

座標 X=24726～24730 Y=-70294～-70296

主軸方位 不明

重複 6号・7号竪穴住居に切られる。18号竪穴住居を切る。

形状と規模 北東に長軸を有し方形を呈する。長径は3.90m、残存する最大の短径1.80m+、床面までの深さ0.23m、残存する面積3.31㎡+である。7号竪穴住居と同時代であり規模が同じなので、7号竪穴住居の建て替え前の建物である可能性がある。

埋土 暗灰色礫まじりシルト質砂。

床面 4層の黄灰色砂礫層を削って床面としており、掘方と同一面で貼り床等は認められない。

カマド 床面では検出されなかった。重複する7号竪穴住居によって失われた可能性がある。

柱穴 床面では検出されなかった。

特徴 重複する7号竪穴住居の掘方にも柱穴は認められないため、一辺が4 mの竪穴住居であり、床面に主柱と

なる柱穴が認められない構造の竪穴住居であると想定した。大部分を遺構の重複によって失われた竪穴遺構であるが、北と西壁際の壁面と床面が明瞭であり、北壁際の埋土から遺物が出土したことから竪穴住居と認定した。

遺物 7号竪穴住居との境界で19号竪穴住居埋土から土師器杯(1)が出土している。19号竪穴住居は6世紀中葉の18号竪穴住居を切り、8世紀第4四半期の7号竪穴住居と9世紀第1四半期の6号竪穴住居に切られるので出土した遺物と遺構の層序関係に矛盾はない。

時代 奈良時代8世紀後半(8世紀第4四半期より古い)。

20号竪穴住居(第43・44・45図、PL.13-7～14-5・53・54、214・215頁)

位置 中央部西寄り。

座標 X=24697～24702 Y=-70292～-70298

主軸方位 N81° E

重複 23号竪穴住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する。長径は5.38m、短径は4.86m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.51m、面積24.58㎡である。

埋土 暗灰色シルトブロックや礫まじり砂からなり、北壁や東壁の基底には暗灰～黄褐色シルト質砂が堆積している。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。竪穴住居の南東部は、23号竪穴住居の埋土を掘り込み、床面としており、掘方と同一面で貼り床が認められない。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.16mで、全体に平坦である。北西及び南西壁側は浅い窪み状に深くなる部分やピット状の窪みがある。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部と焚口は東壁の手前の23号竪穴住居埋土およびカマドを掘り込んで暗灰色シルト質砂を貼って構築している。カマドの煙道は失われており、両袖は灰色シルト質砂により構築し、袖の両側に最大長径0.30m大の結晶片岩の礫が立った状態で3点埋められている。これらは構築材として使用された垂円～垂角礫で掘方のものを含め5点である。燃焼部の使用面及び左袖外からは甕(12・14)が2点出土した。これらは出土位置から考えて両袖の構築材として使用されていた可能性があるが、カマドの崩落過

程で残されたにとしては保存状態が良く、土器内に構築材に使用した際に付着する灰色シルト質砂が認められない。このことから甕は、竪穴住居の廃絶時に使用されていた土器がカマドの崩落の際に残されたものと考えられる。20号竪穴住居北西部の床面からは被熱の痕跡が著しい結晶片岩の扁平な板状石材が出土した。これらはカマドを解体した後に床に置かれたカマド焚口の天井架構材の可能性もある。なお、調査では東壁からカマドを複数検出したが、これらは隣接する23号竪穴住居に帰属することが調査中に明らかとなり、整理作業で修正した。

カマドの幅は0.96m、長さ0.83m、焚口の幅0.51m。

柱穴 一辺が5mに及ぶ竪穴住居であり、主柱穴は存在したはずだが掘方の調査でも検出できなかった。これは主柱の柱穴底が4層の砂礫層で止められたため柱穴の輪郭が不明瞭である可能性がある。

遺物 床面から土師器杯(2)甕(13)、カマド使用面から杯(5)石製模造品(20)やカマド掘方から杯(3)が出土し、カマド焚口付近からは完形の円筒状土器(19)が出土した。床面付近からは杯(4)鉢(9)甕(16・17・18)が出土している。板状石材が出土した西側の床面付近からは、砥石(21)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

21号竪穴住居(第46・47図、PL.15-1～15-2・54、215頁)

位置 中央部南西壁際。

座標 X=24688～24694 Y=-70293～-70296

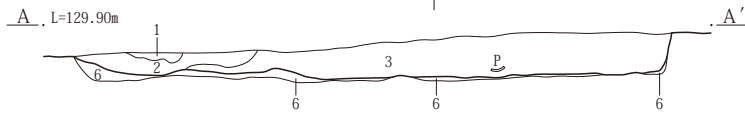
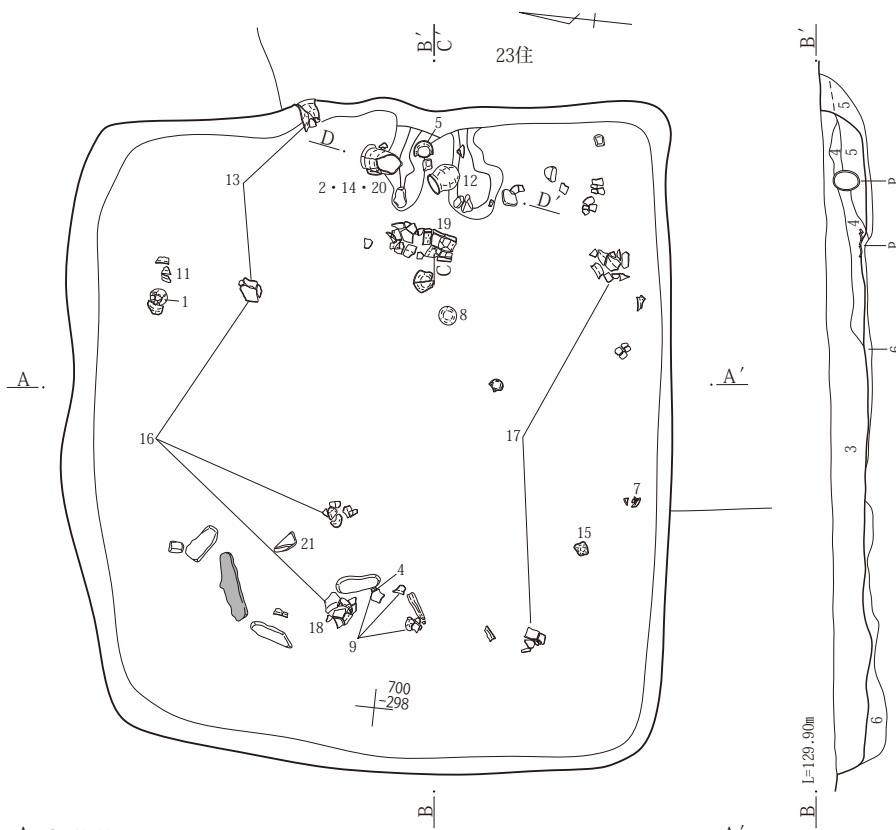
主軸方位 N60° E

重複 断面観察で埋土は70号竪穴住居の埋土に切られる。23号・29号竪穴住居を切る。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈するが南西部の大部分は調査区外にある。長径は5.58m、検出した最大の短径1.64m+、床面までの深さ0.36m、掘方までの深さ0.62m、検出された最大の面積24.58㎡である。

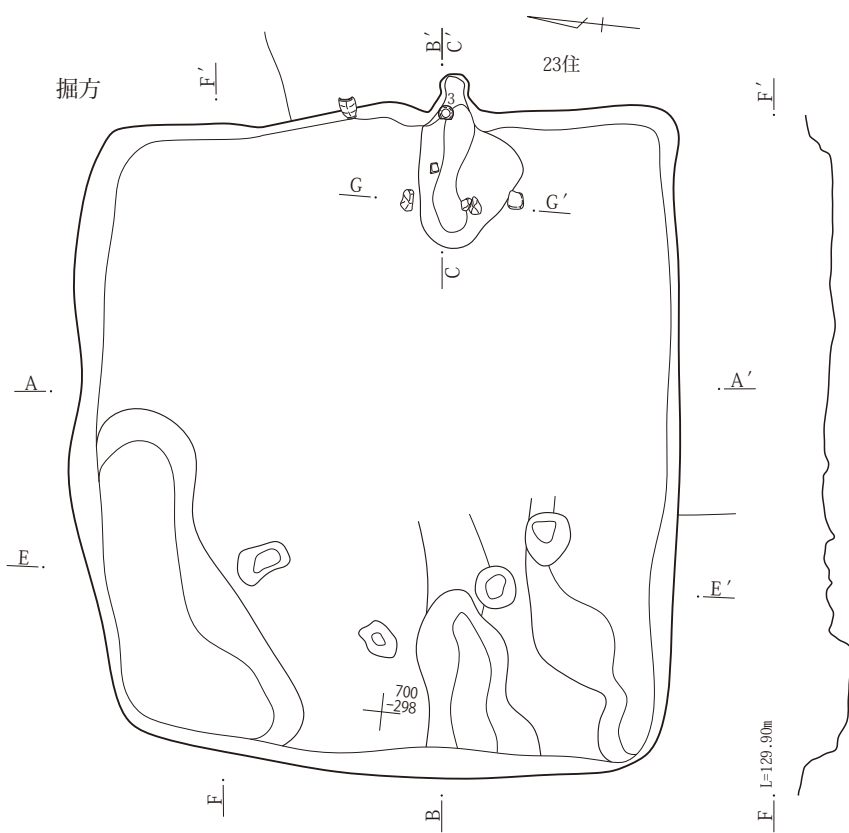
埋土 南西壁際の断面観察では、耕作土と2層の層理面から掘り込まれた黒褐色シルト～砂質土からなる。北西の基底は焼土のブロックを含む暗褐色土が堆積し、カマドに近い位置であることからその崩落土であると考えられる。

床面 掘方の調査において断面で床を確認した。床面は暗灰色シルト～砂質土を厚く貼って構築し平坦である。



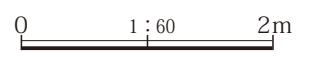
B. L=129.90m

- 1 黄灰色焼土まじりシルト質砂。(1～5は埋土)
- 2 暗褐色シルトブロックまじり中粒砂。
- 3 暗灰色シルトブロックまじり中粒砂～シルト。径30～200mmのブロックからなる。
- 4 暗灰色シルト質砂。
- 5 黄褐色焼土ブロックまじりシルト～砂。径10～30mmの焼土や径10mmの黄灰色シルトのブロックを多く含む。
- 6 黄灰～暗灰色礫まじり粗粒砂～中粒砂。(掘方埋土)



E. L=129.90m

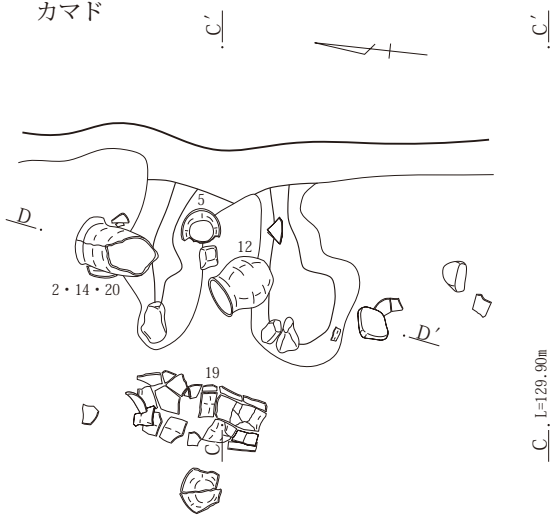
F. L=129.90m



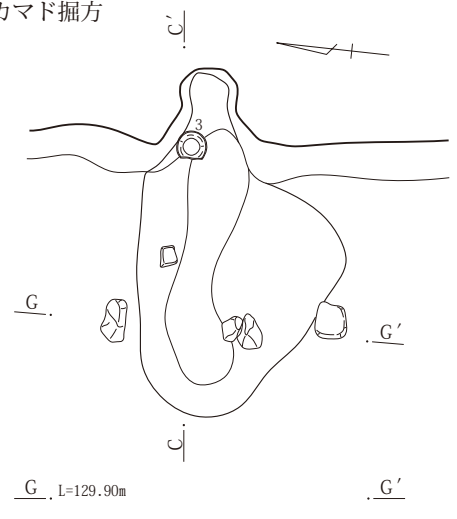
第43図 20号竪穴住居

第3章 調査された遺構と遺物

カマド



カマド掘方



D, L=129.90m

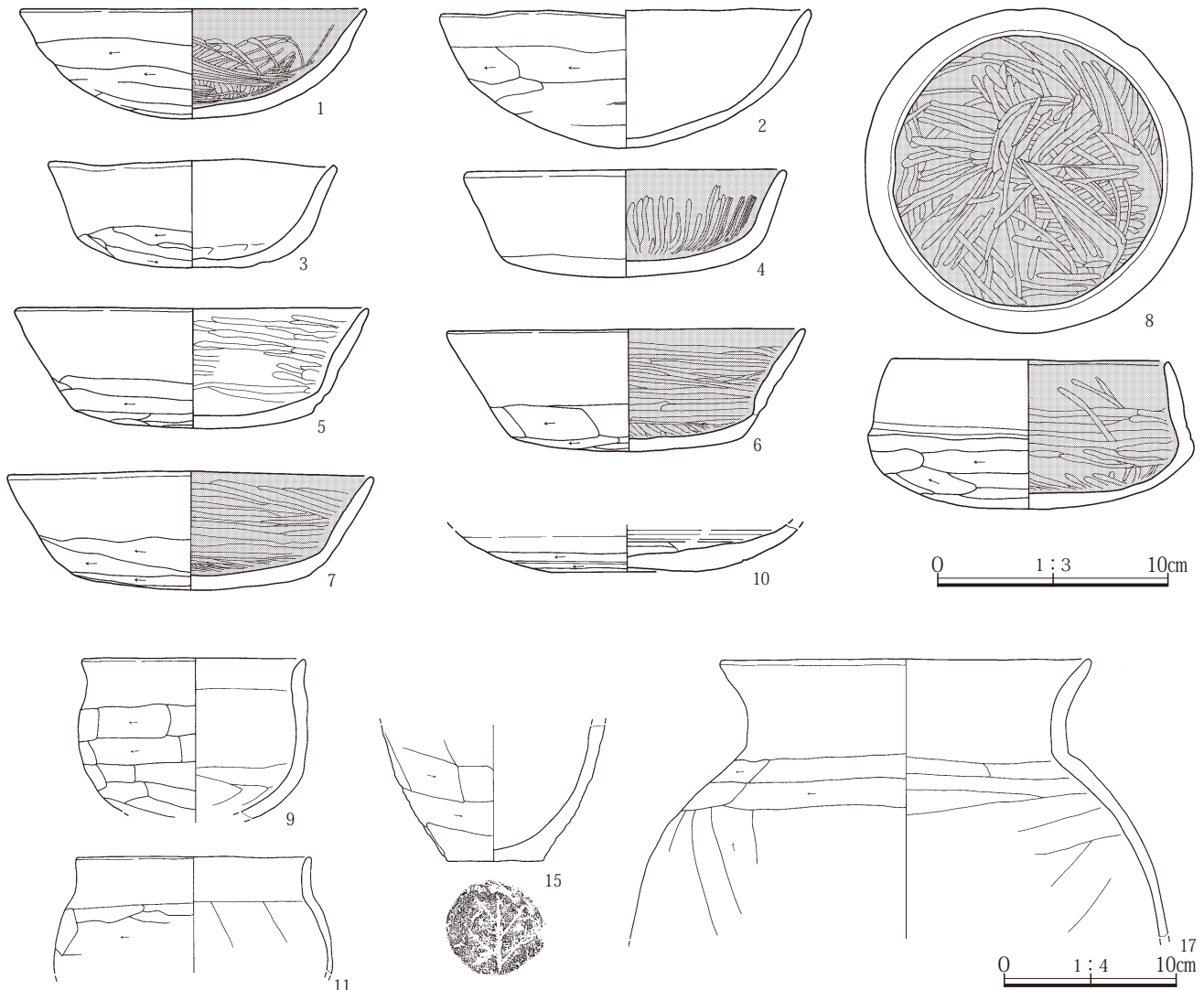


D'

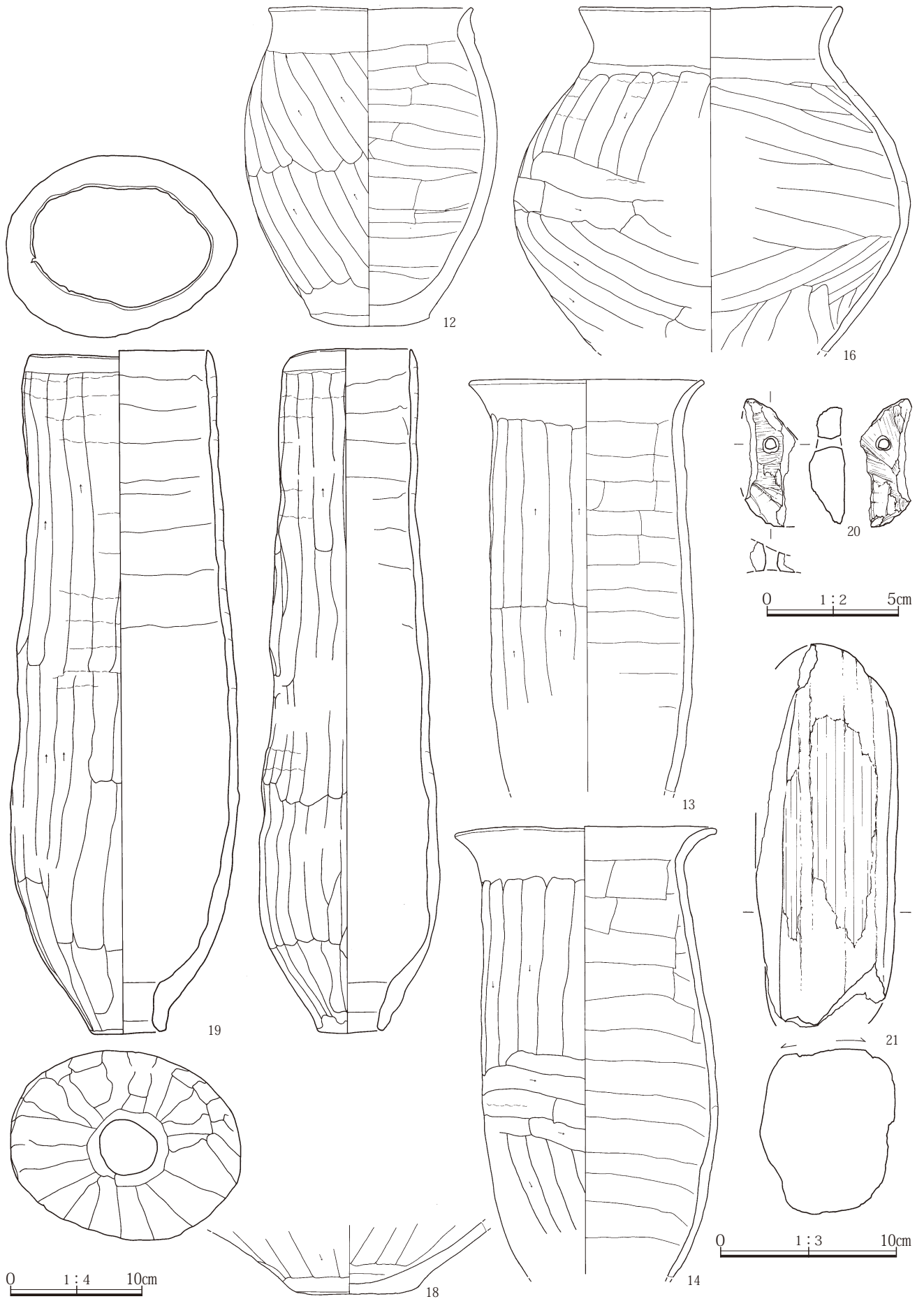
- 1 暗灰色礫まじり砂。(1~2は掘方埋土)
- 2 暗灰色シルト質細粒砂~中粒砂。
- 3 暗灰色礫まじり砂(23号竪穴住居埋土)



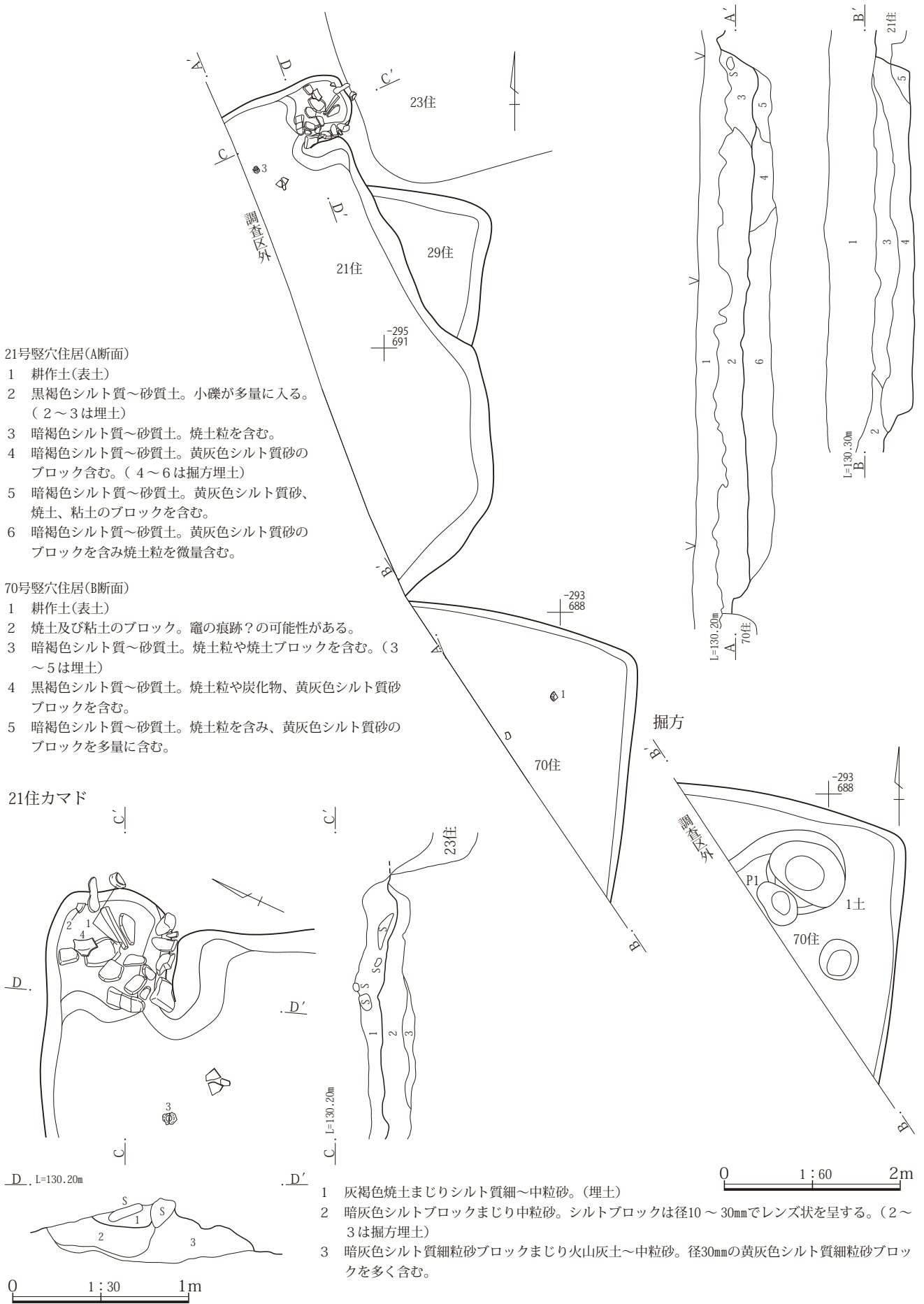
0 1:30 1m



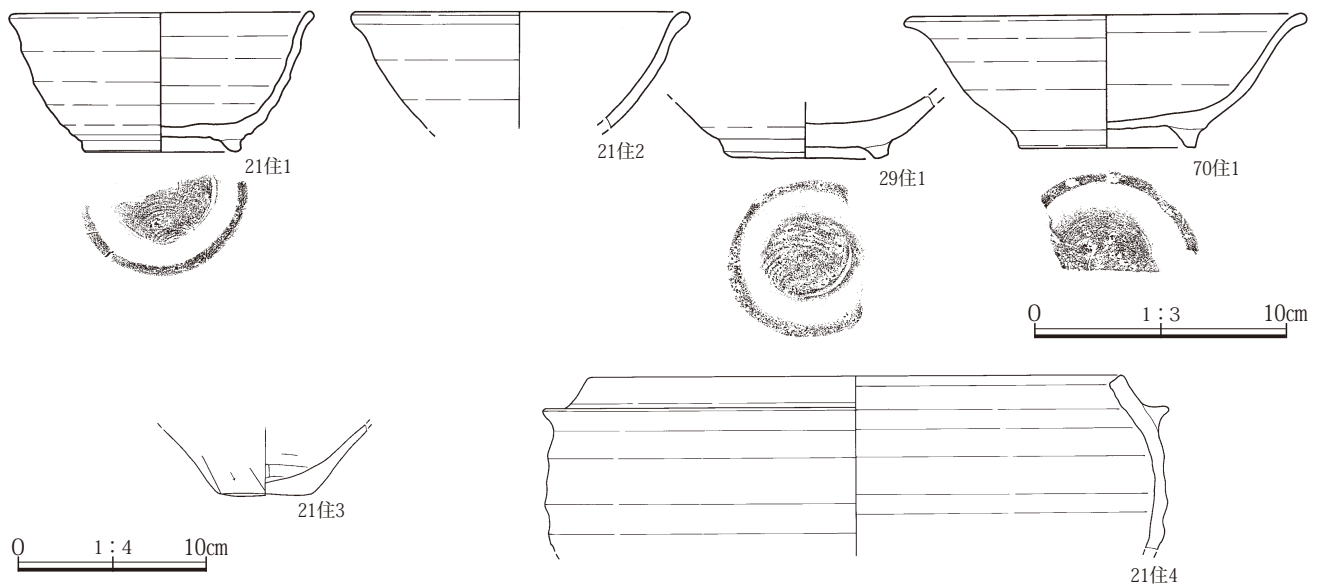
第44図 20号竪穴住居と出土遺物



第45図 20号竪穴住居の出土遺物



第46図 21・29・70号竪穴住居



第47図 21・29・70号竪穴住居の出土遺物

掘方 掘方と床面の間は0.12～0.35mで、全体に平坦である。

カマド 北東隅の東壁角に位置する。カマドの燃烧部は4層の黄灰色礫まじり砂を掘り込んで暗灰色シルト質火山灰土を貼って構築している。カマドの煙道は失われ、燃烧部の使用面の一部や袖部は破壊されている。燃烧部の右壁からは最大長径0.24m大の結晶片岩の礫が並んで立てられた状態で4点埋められている。燃烧部の中央にみられる結晶片岩の礫は、配列の雰囲気を残して右側に倒れた礫群のように観察される。これらは西壁と奥壁に埋められていた礫が移動した可能性が高い。燃烧部から出土した結晶片岩は燃烧部壁の構築材として使用された垂円～垂角礫であり、被熱の痕跡が認められる。

カマドの幅は1.02m、長さ0.80m、焚口の幅0.62m。

柱穴 検出した範囲に柱穴はみつからなかった。柱穴は調査区外に存在する可能性がある。

遺物 カマドの埋土から須恵器椀(1・2)羽釜(4)の破片が出土した。70号竪穴住居との重複関係は断面観察により得られたが出土遺物と矛盾する。

時代 平安時代10世紀第2四半期。

22号 竪穴住居(第48～51図、PL.15-3～15-8・54、215・216頁)

位置 調査区のほぼ中央。

座標 X=24699～24706 Y=-70279～-70285

主軸方位 N80° E

重複 5号溝や24号竪穴住居に切られる。

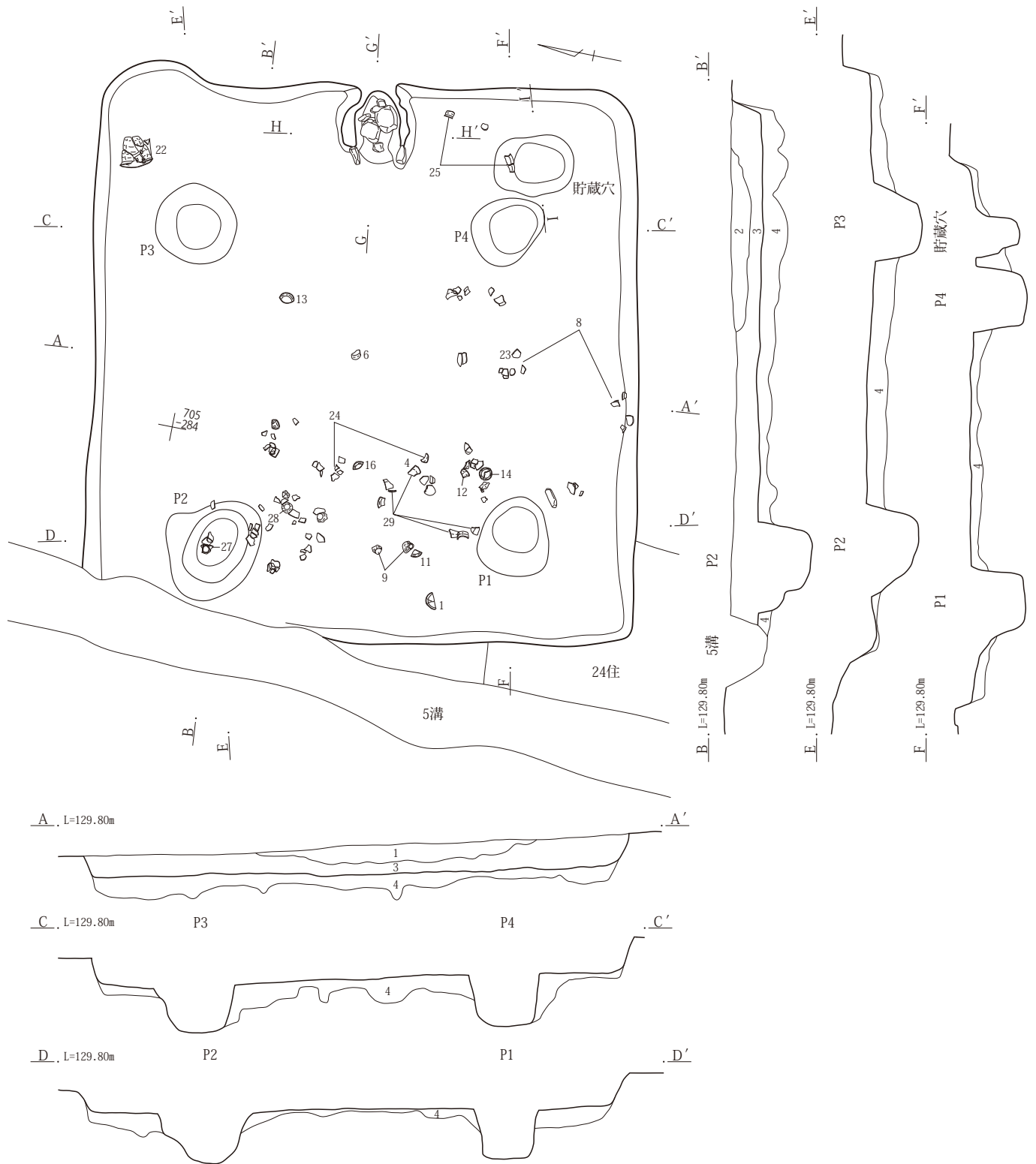
形状と規模 東北東方向に長軸を有し、ほぼ正方形に近い。長径は5.89m、短径5.85m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.68m、面積は33.72㎡の竪穴住居である。

埋土 暗灰色礫まじり砂が竪穴全体を埋め、カマドに近い北東部の上部には暗灰～黒色の炭化物を含む細粒火山灰土がみられる。

床面 暗灰色垂円礫まじり粗粒砂で構築しており、ほぼ平坦で締まりがある。

掘方 掘方と床面の間は0.06～0.26mである。浅い不定形の谷状窪みやピット状の窪みで、緩い凹凸がみられるが掘方の全体は平坦である。カマドの左手前には長径1.32m、短径0.96m、深さ0.31mの床下土坑1が検出された。また、北壁際には長径0.56m、短径0.42m、深さ0.33mのピット5や長径0.46m、短径0.36m、深さ0.31mのピット6が認められるが両ピットとも浅い窪み状のピットである。

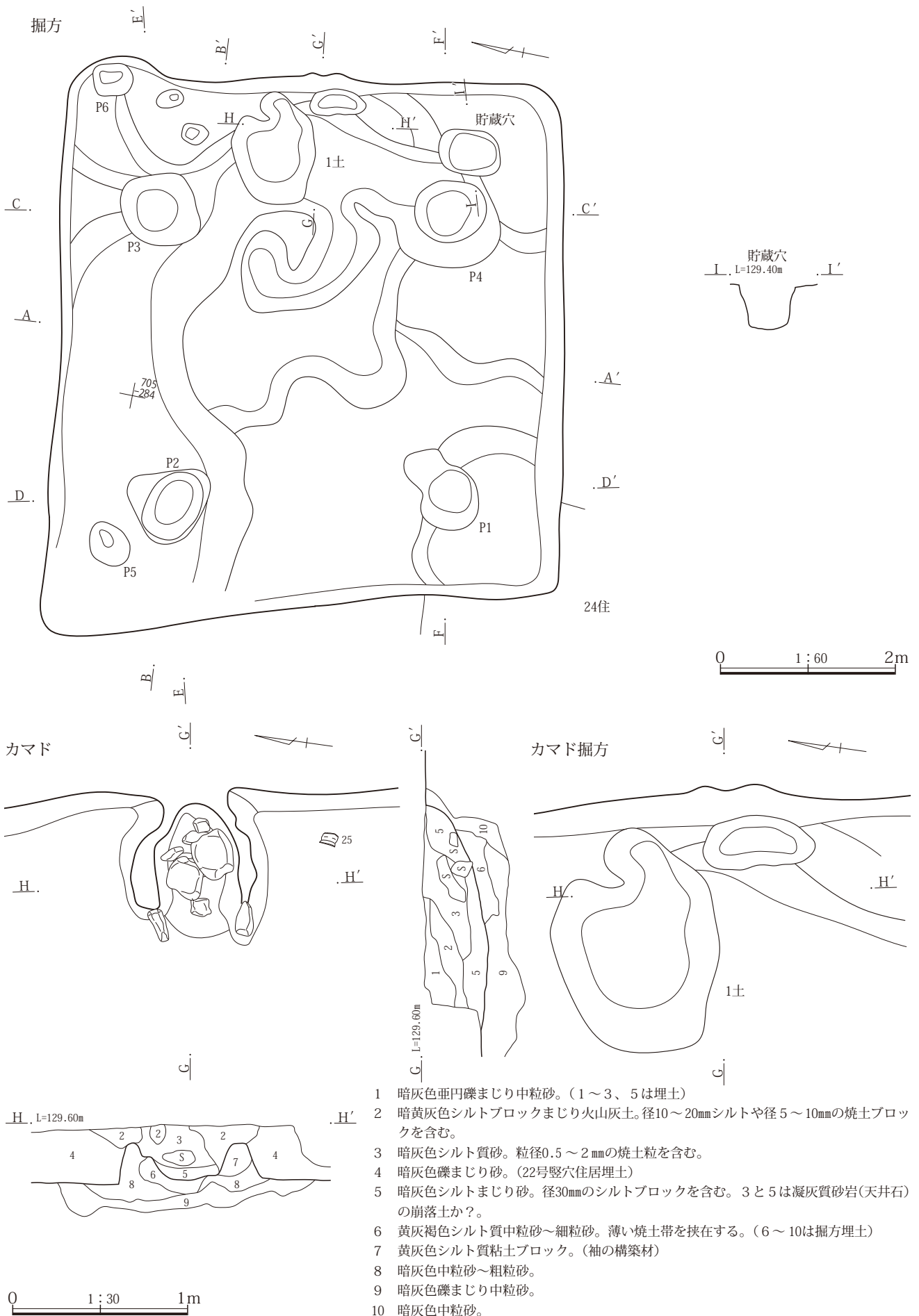
カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃烧部は東壁の左手前に4層の砂礫層を掘り込んで暗灰色シルトを貼って構築している。両袖は黄灰色シルト質粘土や黄灰色シルト質砂により構築し、長径0.21m大の凝灰質砂岩の垂角礫が両袖の張り出しに埋められている。燃烧部の埋土には長径0.30mの凝灰質砂岩の垂角礫がみられ燃烧部の使用面に接している。前者は両袖の構築材であり、後者は燃烧部の上部にあった天井架構材である可能性がある。



- 1 暗灰～暗黄灰色礫まじり中粒砂。径5～15mmの垂円礫を含む。(1～3は埋土)
- 2 暗灰～黒色炭化物を含有する細粒火山灰土。下底に層厚5cmの黒色土の薄層や径50～150mmの黄灰色シルトブロックが入る薄層が堆積する。
- 3 暗灰色礫まじり中粒砂。10～30mmの垂円礫を含む。
- 4 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。径5～40mmの結晶片岩の垂円礫を多く含む。(掘方埋土)

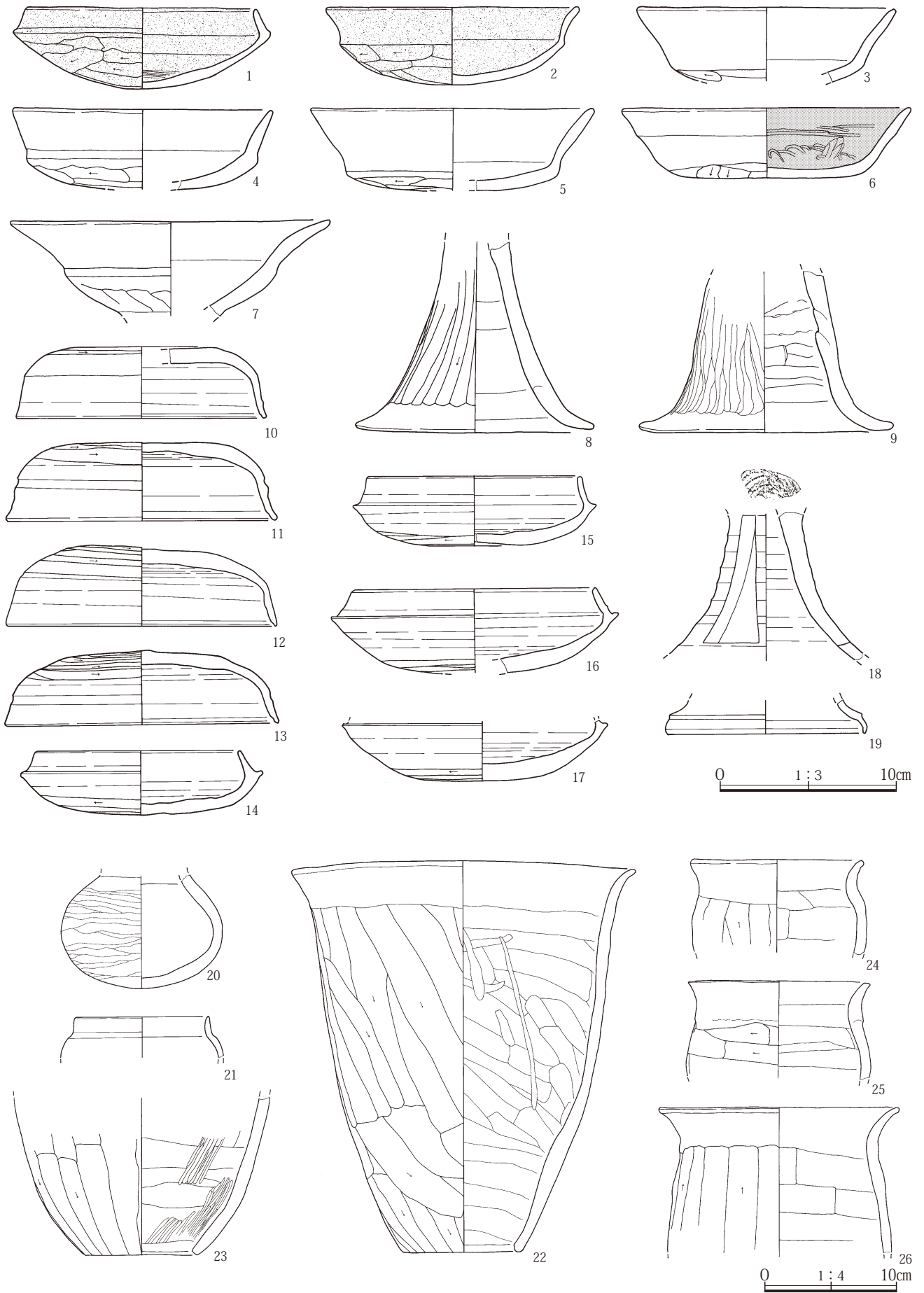
第48図 22号竪穴住居(1)

0 1:60 2m

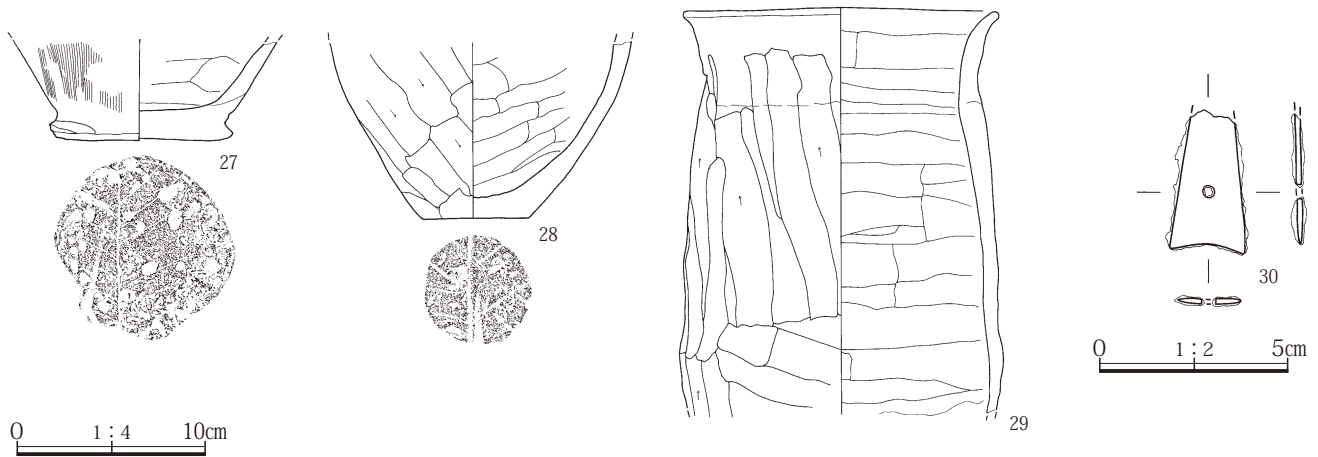


第49図 22号竪穴住居(2)

第3章 調査された遺構と遺物



第50図 22号竪穴住居の出土遺物(1)



第51図 22号竪穴住居の出土遺物(2)

る。これらの石材は総て新三系の堆積岩で、埋土から出土した凝灰質砂岩の礫には表面が赤褐色を呈し被熱の痕跡が認められるものがある。

カマドの幅は0.84m、長さ0.76m、焚口の幅0.27m。

貯蔵穴 カマドの右側に位置する。長径0.85m、短径0.64m、深さ0.52m。貯蔵穴の底面から48cm上から土師器甕(25)が出土し、カマド周辺の床面付近の遺物と接合した。

柱穴 床面で断面形状が円筒形のピット1～4を検出した。4本の柱穴に柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。柱間はピット2・3が3.40m、ピット1・4が3.22m、ピット3・4が3.34m、ピット1・2が3.20mである。ピット2の底から32cm上からは土師器甕(27)の破片が出土した。

ピット1は長径0.85m、短径0.72m、深さ0.54m。

ピット2は長径1.16m、短径0.88m、深さ0.54m。

ピット3は直径0.88m、深さ0.50m。

ピット4は長径0.80m、短径0.64m、深さ0.54m。

特徴 カマドから出土した凝灰質砂岩は軽石凝灰岩質で、岩相から周辺地域に分布する新第三系の原市層や板鼻層の凝灰岩である可能性が高い。

遺物 床面から土師器杯(1)高坏(8)甑(22)須恵器杯身(16)が出土し、床面付近からは土師器杯(6)小型甕(24・25)甕(28・29)須恵器杯蓋(11)が出土した。また埋土からは鉄鏃(30)が1点出土している。

時代 古墳時代6世紀中葉。

23号竪穴住居(第52～56図、PL.16-1～16-8・54・55、216・217頁)

位置 調査区の中央部西寄り。

座標 X=24692～24702 Y=-70287～-70296

主軸方位 N82° E

重複 20号・21号竪穴住居、47号土坑に切られる。24号竪穴住居を切る。

形状と規模 東北東方向に長軸を有し、ほぼ正方形に近い。長径は8.10m、短径8.00m、床面までの深さ0.46m、掘方までの深さ0.85m、面積は62.98㎡で、発掘地では最大の面積を有する大規模な竪穴住居である。

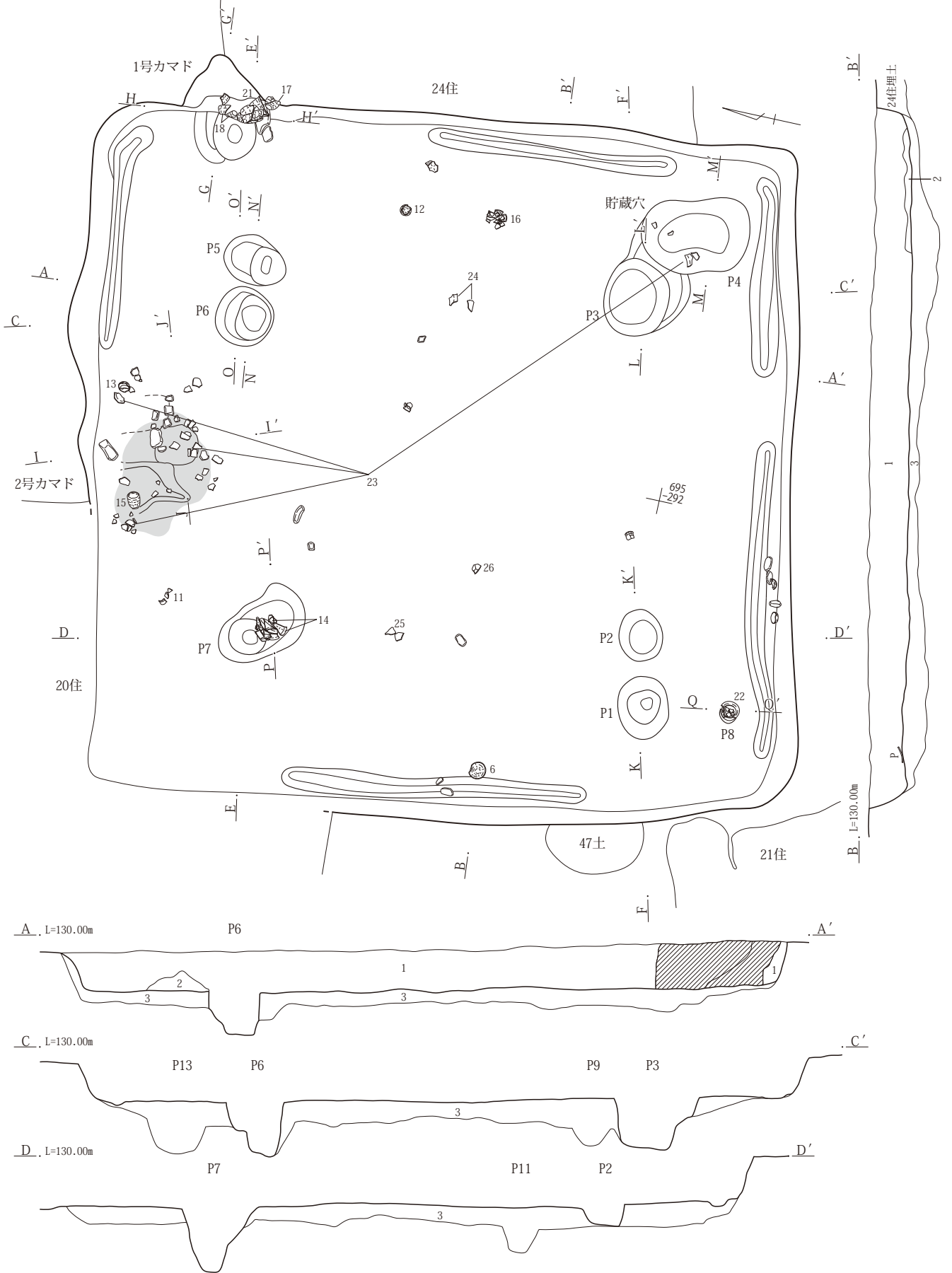
埋土 暗灰色礫まじり砂が均質に竪穴全体を埋め、基底の一部に黄灰色シルト質砂が検出される。埋土には成層構造がみられず、大規模な竪穴が砂質土によって短期間に埋まったとは考えにくい。埋土が土壌化によって成層状態が不明瞭であるか、埋土が竪穴をすり鉢状に埋めた厚い堆積物の基底部である、などの可能性などが考えられる。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築している。

掘方 掘方と床面の間は0.04～0.31mである。浅い不定形の段状の窪みで、緩い凹凸がみられるが掘方の全体は平坦で中央部が高い。

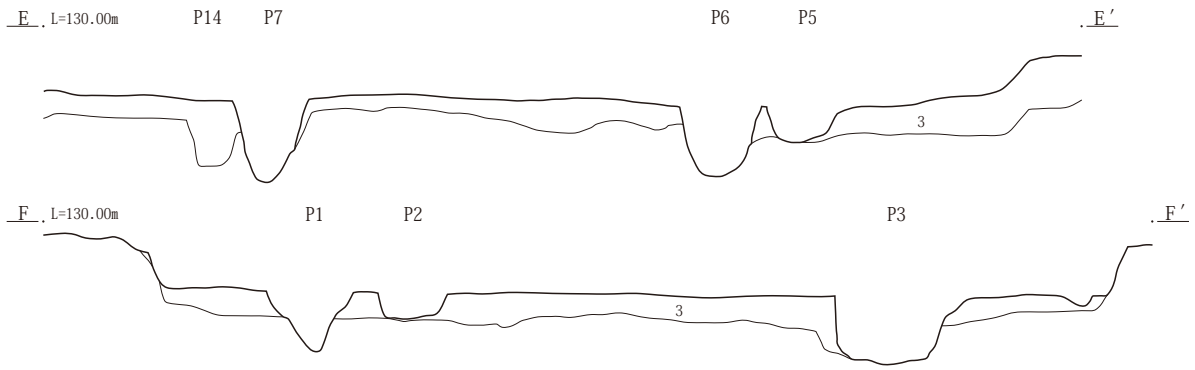
周溝 カマドや床の隅、南壁の中央東寄りの一部以外の壁際を周回する。最大の上幅は0.23m、最小の底幅0.08m、深さ約0.07mである。

カマド 東壁の北東隅に位置するカマドを1号カマド、北壁中央の南寄りに位置するカマドを2号カマドとした。なお2号カマドは20号竪穴住居のカマドにより削られており、カマドの西側を失っている。1号カマドの燃烧部は東壁の奥に4層の砂礫層を掘り込んで暗褐色シル

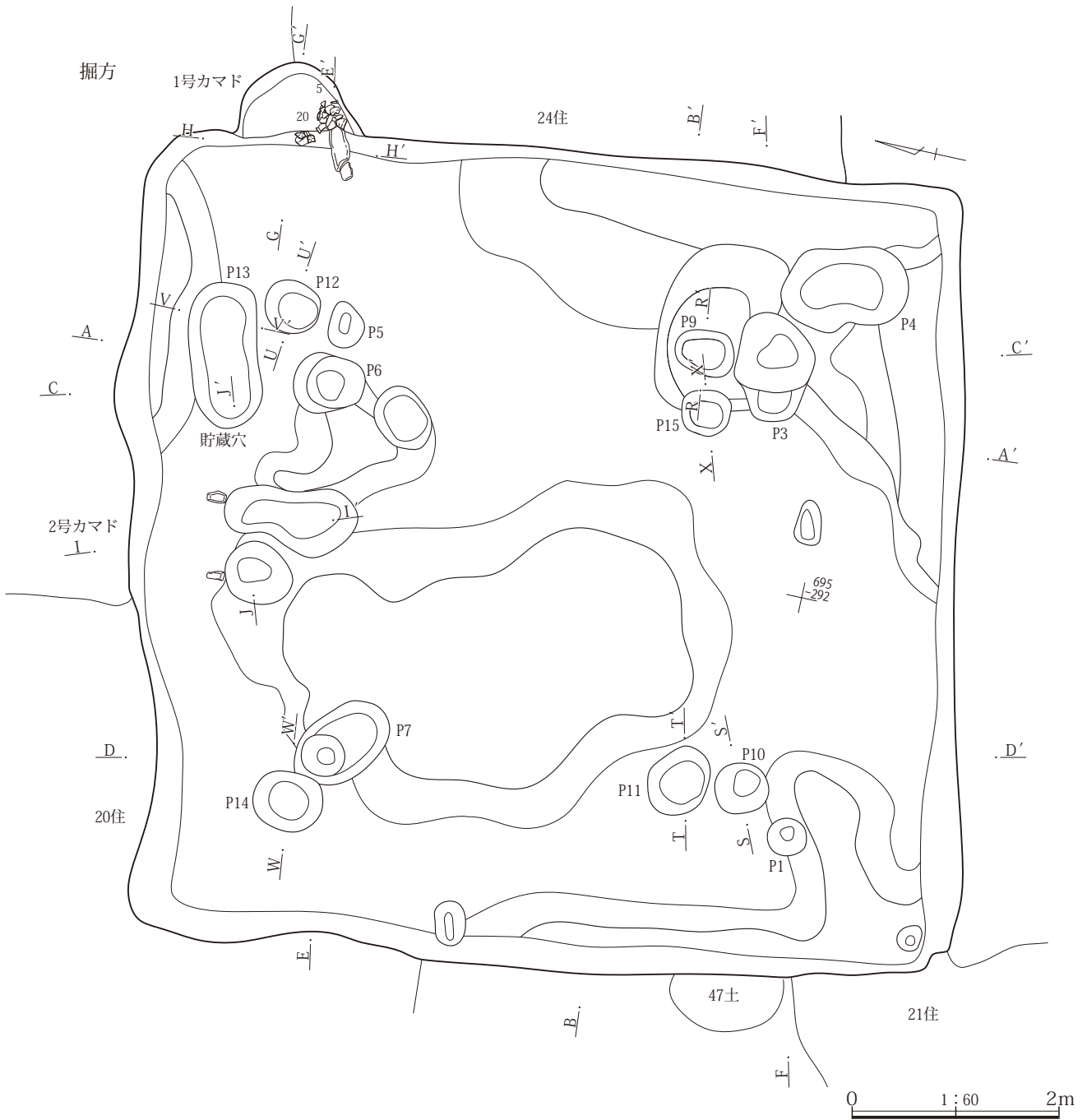


- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。径10～500mmの垂円礫を含み、塊状無層理である。(1～2は埋土)
- 2 黄灰色シルトまじり中～細粒砂。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。(掘方埋土)

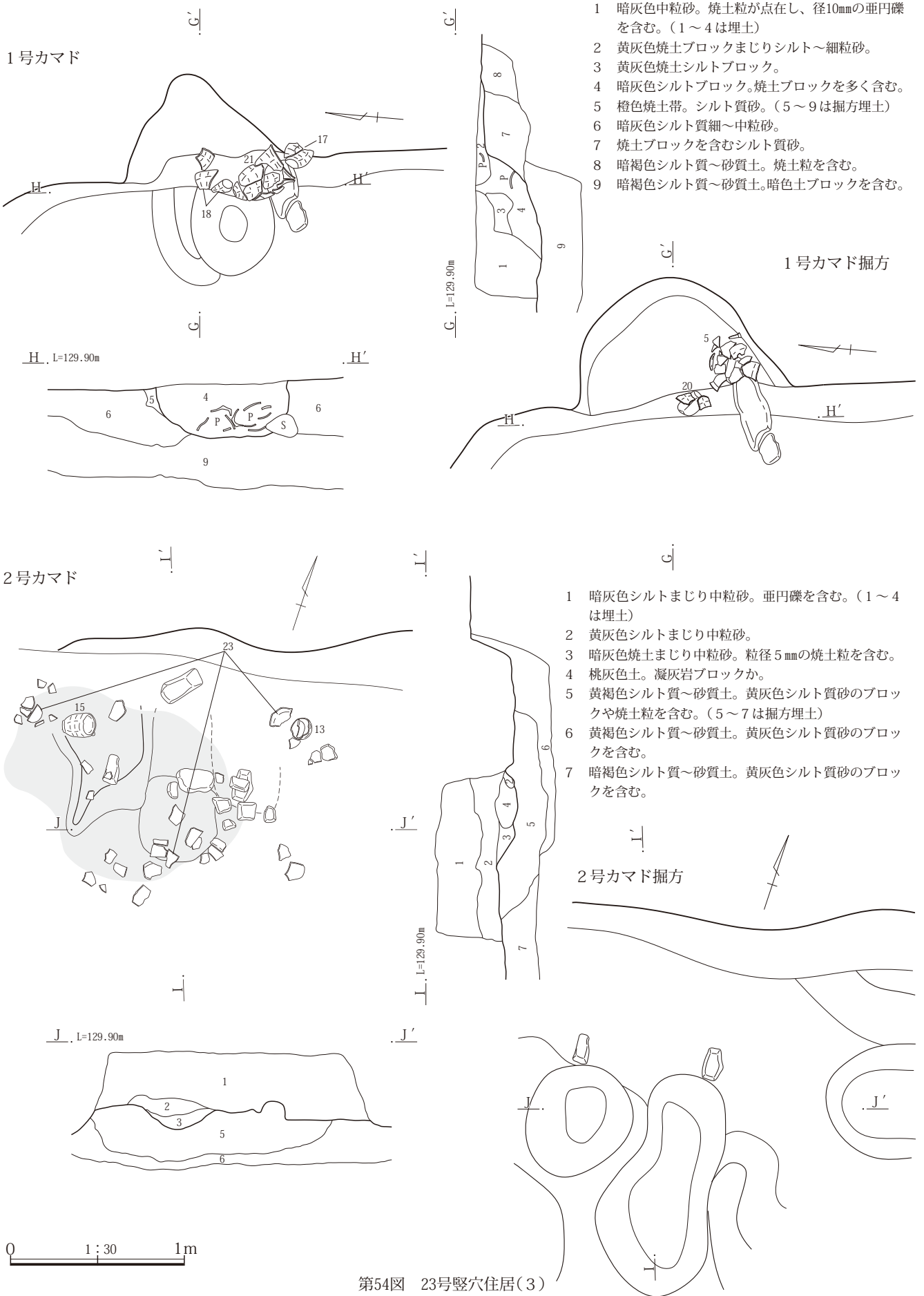
第52図 23号竪穴住居(1)



3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。(掘方埋土)

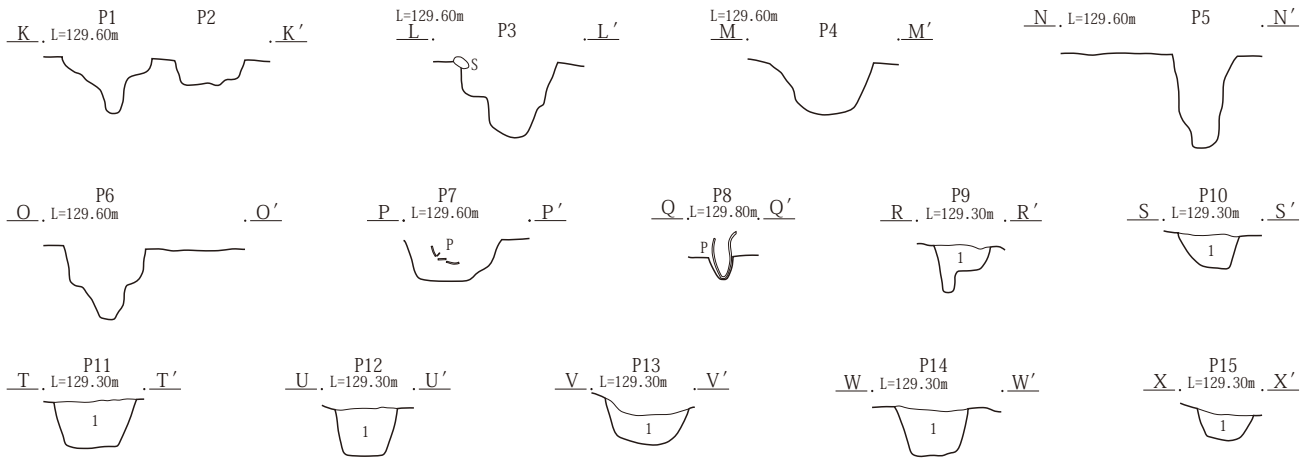


第53図 23号竪穴住居(2)



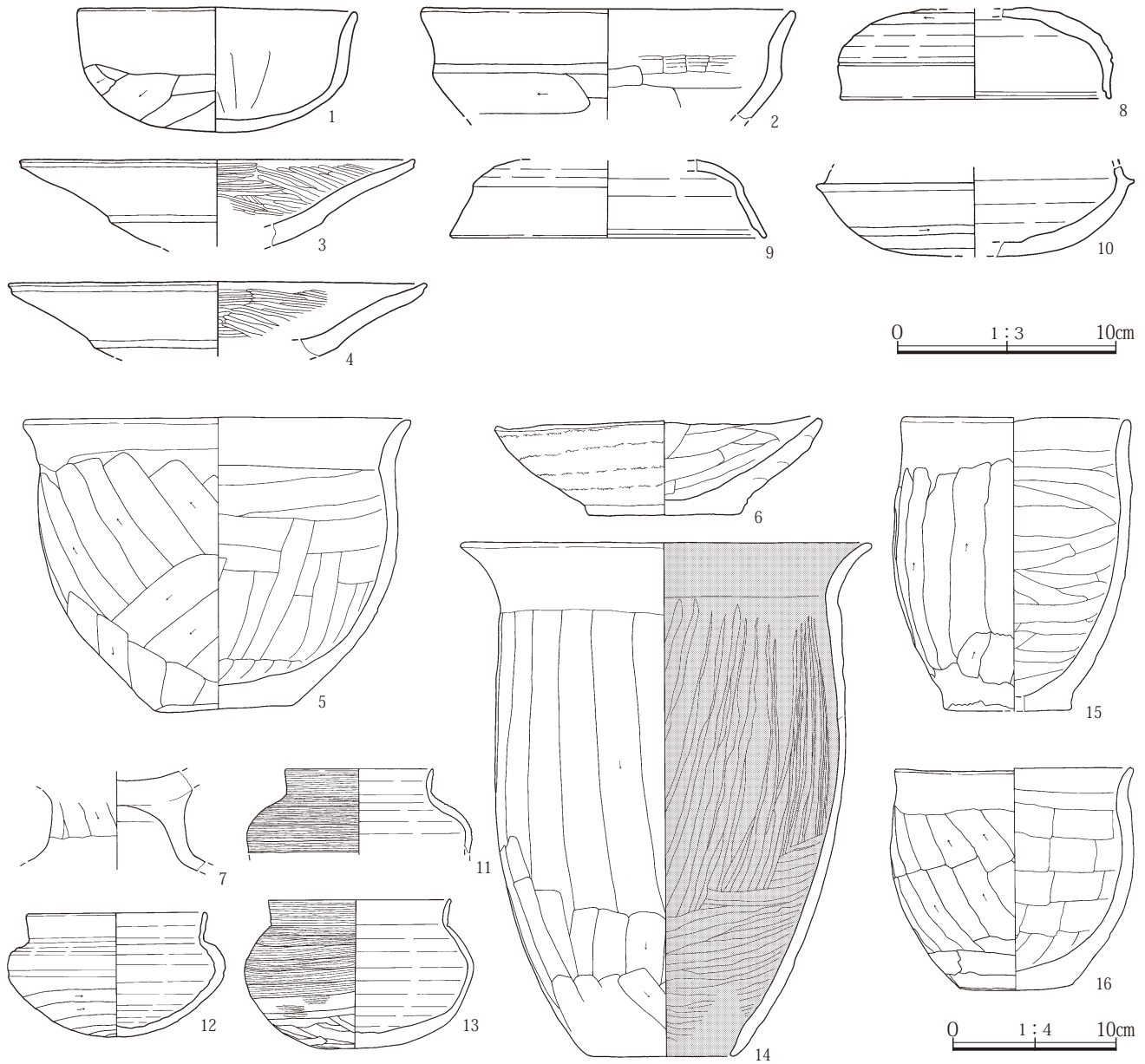
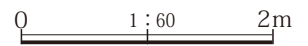
第54図 23号竪穴住居(3)

2. 竪穴住居

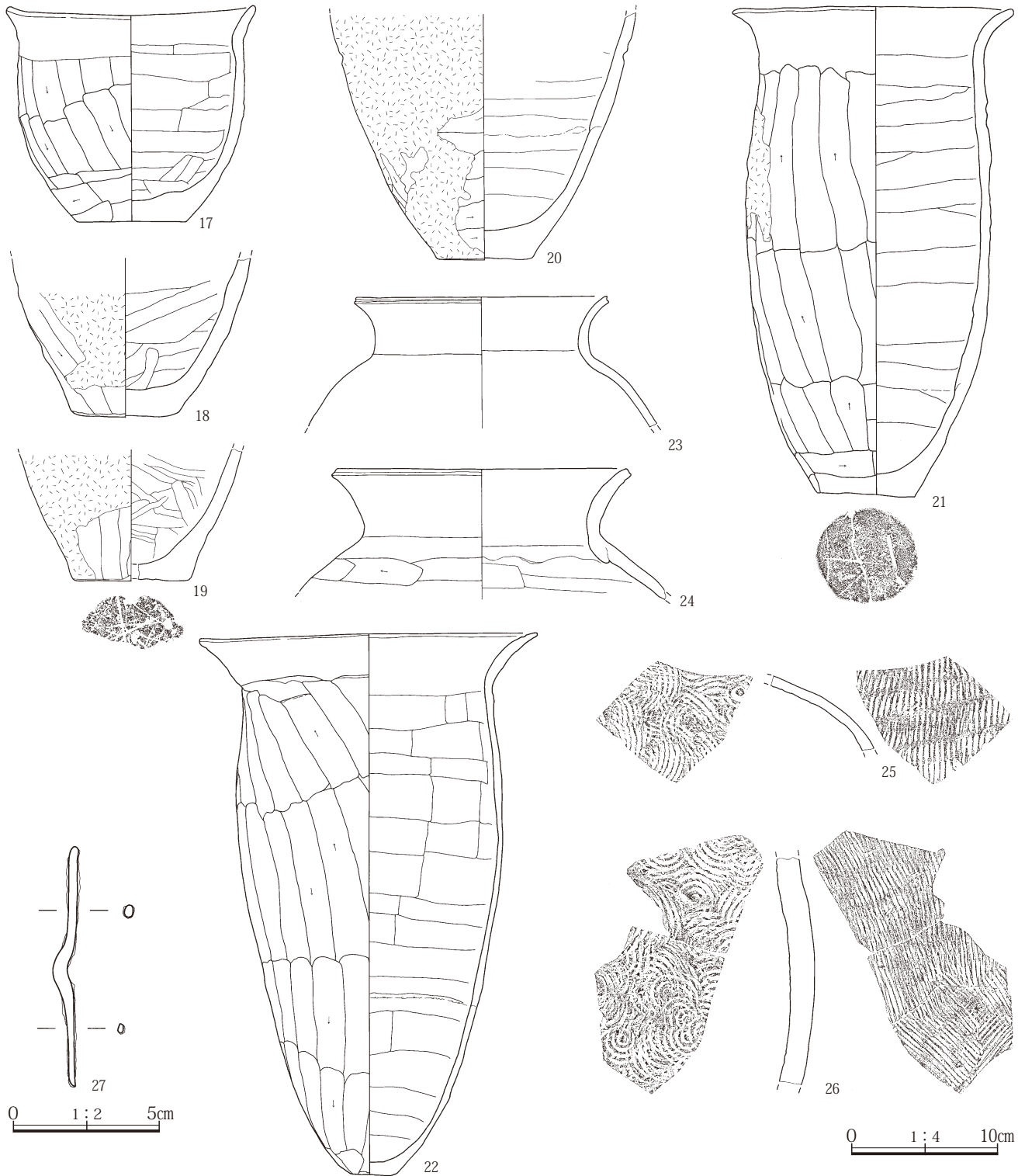


P9～P15

1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや細礫を含む。



第55図 23号竪穴住居と出土遺物



第56図 23号竪穴住居の出土遺物

ト質砂を貼って構築している。燃烧部の前半部は破壊されており失われている。両袖は黄灰色シルト質砂により構築している可能性があり、わずかに床面にブロックを残している。燃烧部の埋土には長径0.48mの凝灰質砂岩の垂角礫がみられ、床面に接している。また凝灰質砂岩の上に粘土が付着した甕(17・18・21)3個体が折り重な

るように出土した。前者は燃烧部の上部にあった天井架構材、後者は燃烧部壁の構築材である可能性がある。これらはカマドの燃烧部よりも右手の位置に存在しており、これはカマドの破壊に伴い偏って出土した可能性が高い。

1号カマドの幅は0.96m、長さ0.66m、焚口の幅0.76m。

2号カマドは、20号竪穴住居のカマドと誤認して調査したため、平面で形を検出することができなかった。残存した燃焼部は、断面により記録した。2号カマドは北壁の手前に4層の砂礫層を掘り込んで黄灰色シルト質砂を貼って構築している可能性が高い。燃焼部の左半部は23号竪穴住居に破壊されており失われている。両袖は黄灰色シルト質砂により構築している可能性が高く、埋土から燃焼部の前面にブロックが出土した。また甕(15)が燃焼部の左奥から出土した。これは燃焼部壁の構築材である可能性がある。

2号カマドの幅は1.18m、長さ0.60m+、焚口の幅0.40m。

貯蔵穴 貯蔵穴は床面で検出したピット4と掘方で検出したピット13である。前者は南東隅に、後者は北壁際の北東隅よりに位置する。ピット4は隅の丸い長方形を呈し長径1.26m、短径0.83m、深さ0.45m。貯蔵穴上の床面の高さから甕(23)が出土し、2号カマド周辺の遺物と接合した。ピット3は隅の丸い長方形を呈し長径1.46m、短径0.68m、深さ0.33m。ピット3の埋土は暗灰色礫まじり砂で、埋土と似ているが床下に埋められていた可能性がある。

埋設土器 竪穴住居の南西隅の床面にピット8が位置し、ピットには正位の完形の甕(22)が埋設されている。ピットの掘方と土器の輪郭は同一であり、ほぼ土器の形に埋め込まれている。貯蔵穴の機能をもつ埋設土器と考えられる。

柱穴 床面で断面形状が円筒ないしU字形のピット1・2・3・5・6・7を検出した。また掘方でピット9～12・14・15を検出したが、これらのピットは建て替え等により数回に渡って掘られた柱穴である。ピット1～15の計測値は第4表に示した。23号竪穴住居の廃絶時における4本の主柱に相当する柱穴は、ピット2・3・6・7である。柱間はピット2・7が4.46m、ピット3・6が4.32m、ピット2・3が3.86m、ピット6・7が3.60mである。ピット2の建て替え前の柱穴は床面で確認できたピット1で、ピット10・11もその可能性が高い。ピット3の建て替え前の柱穴はピット3の西側半分に残された部分であり、ピット9・15もその可能性が高い。ピット6の建て替え前の柱穴はピット5であり、ピット12もその可能性が高い。ピット7の建て替え前の柱穴はピッ

ト14である。なおピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット2は長径0.58m、短径0.49m、深さ0.22m。

ピット3は長径0.88m、短径0.73m、深さ0.58m。

ピット6は長径0.68m、短径0.66m、深さ0.61m。

ピット7は長径0.44m、短径0.40m、深さ0.71m。

第4表 23号竪穴住居で検出されたピットの計測値 単位(m)

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長径(直径)	0.71	0.58	0.88	1.24	0.74	0.68	0.44
短径	0.56	0.49	0.73	0.80	0.56	0.66	0.40
深さ	0.44	0.22	0.58	0.40	0.73	0.61	0.71
ピット	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長径(直径)	0.21	0.58	0.53	0.70	0.54	1.40	0.68
短径	0.20	0.44	0.48	0.56	0.50	0.66	0.58
深さ	0.18	0.38	0.21	0.36	0.38	0.34	0.38
ピット	P15						
長径(直径)	0.47						
短径	0.44						
深さ	0.22						

特徴 竪穴住居の床面、柱穴、カマド、貯蔵穴の所在が明瞭である。1・2号カマドから出土した凝灰質砂岩は、軽石凝灰岩質で、岩相から周辺地域に分布する新第三系の原市層や板鼻層の凝灰岩である可能性が高い。

遺物 床面から土師器鉢(6)、須恵器短頸壺(11)の破片が、1号カマド掘方からは土師器鉢(5)が、2号カマドからは須恵器短頸壺(13)が出土し、床面付近からは土師器小型甕(16)が出土した。また、埋土からは完形の不明鉄製品が出土している。

時代 古墳時代6世紀後半。

24号竪穴住居(第57・58図、PL.17-1～17-4・55、217・218頁)

位置 調査地の中央。

座標 X=24695～24701 Y=-70283～-70288

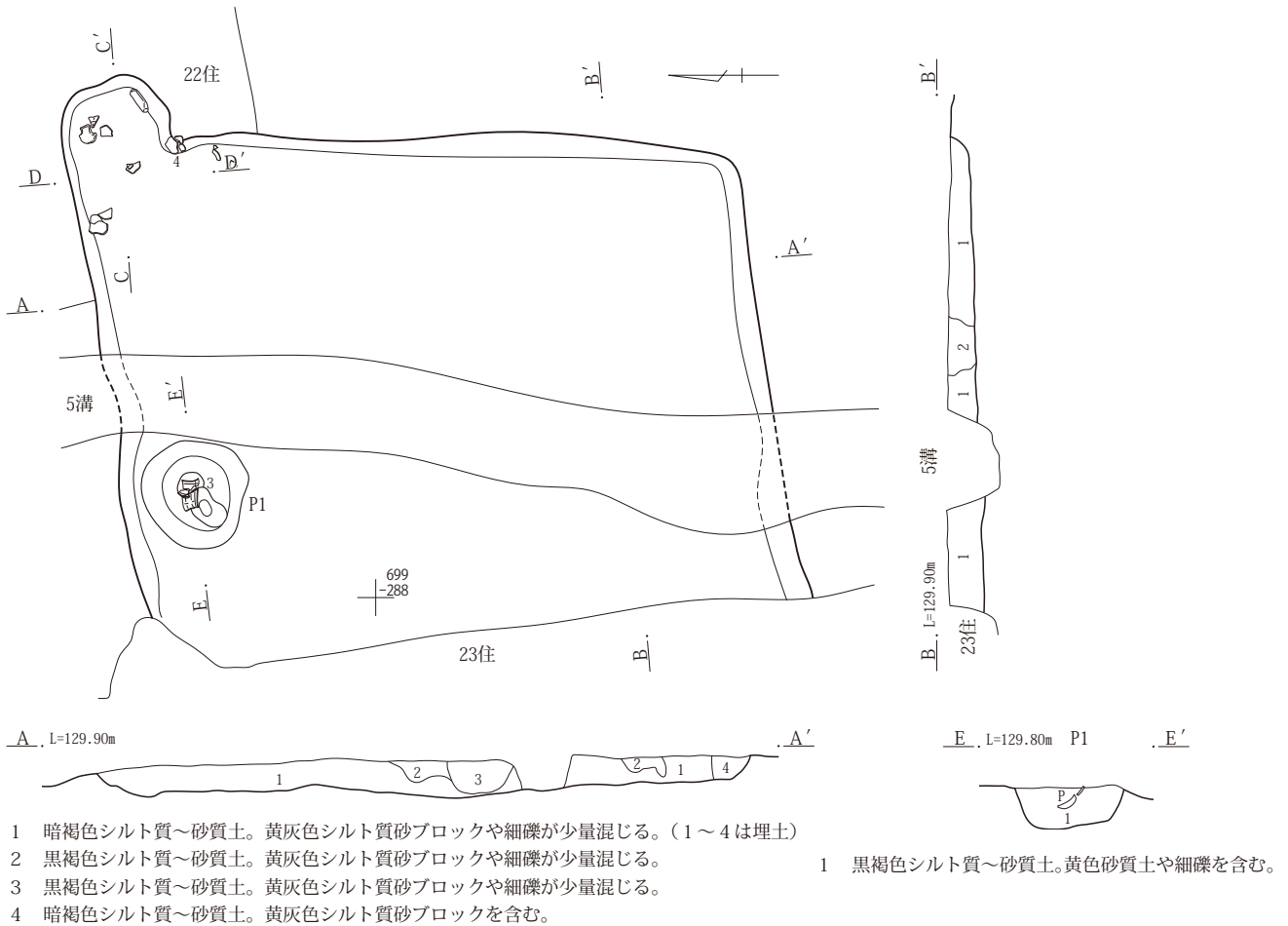
主軸方位 N89° W

重複 23号竪穴住居、5号溝に切られる。22号竪穴住居を切る。

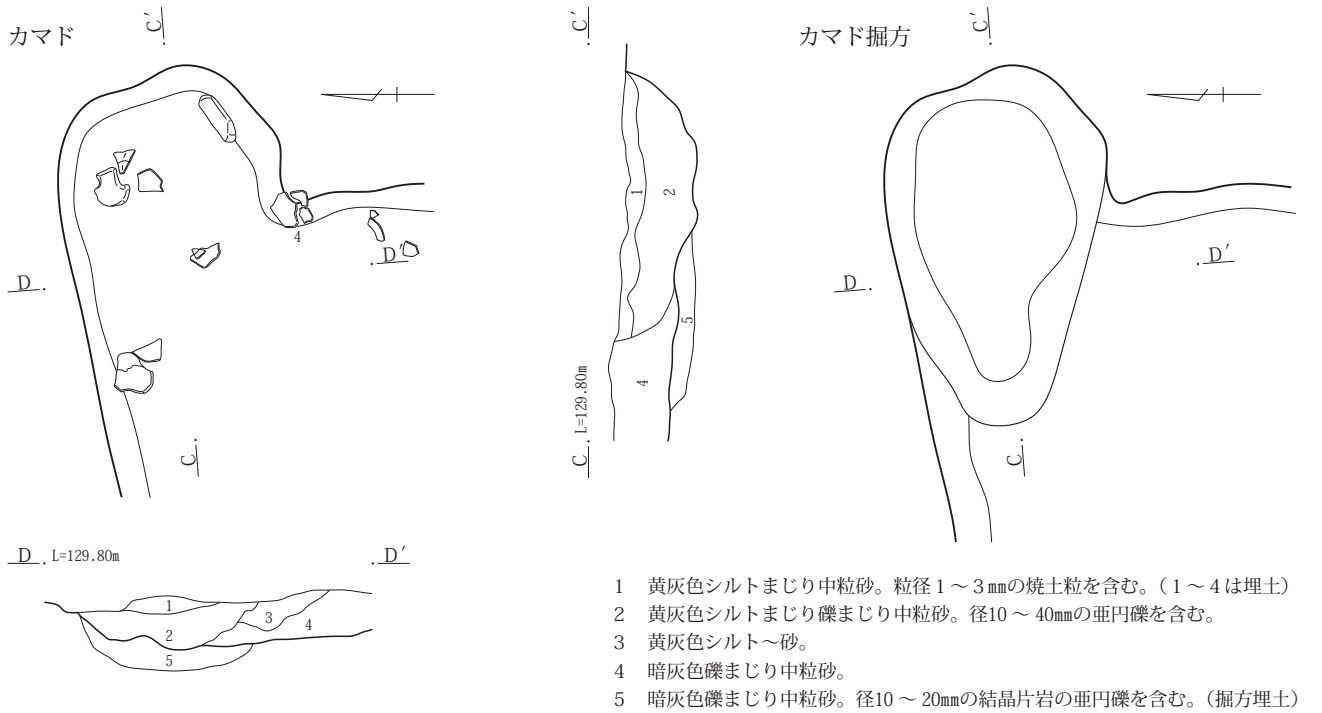
形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈するが竪穴住居の西側は23号竪穴住居により失われている。長径は5.42m、残存する最大の短径4.32m+、床面までの深さ0.19m、残存する面積は22.38㎡+である。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックがまじる。

床面 4層の黄灰色礫まじり粗粒砂を掘り込み、暗灰色

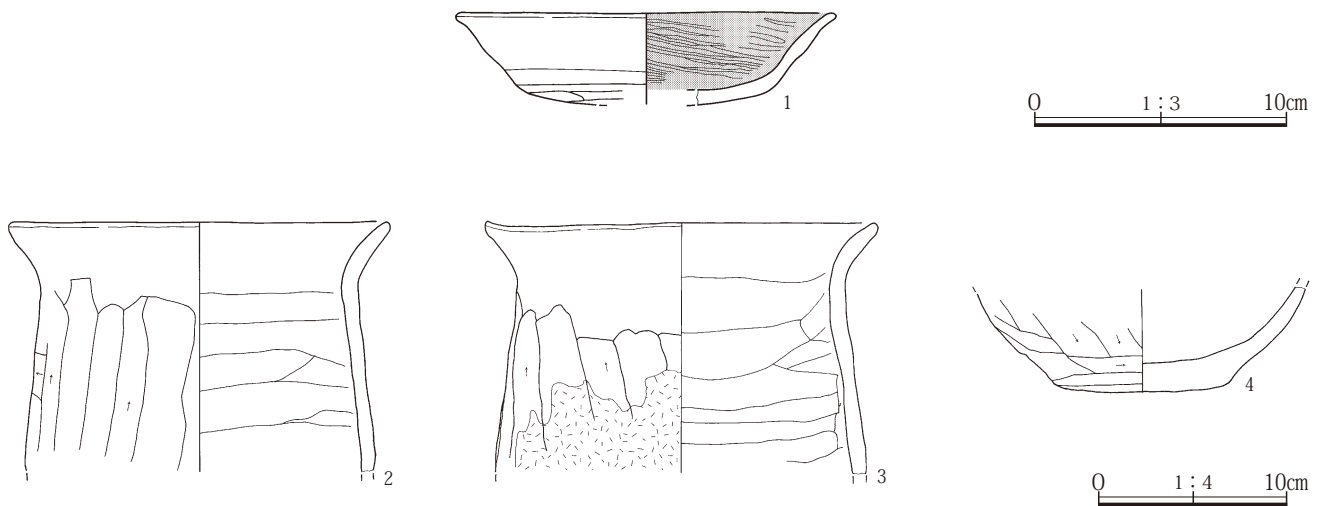


0 1:60 2m



0 1:30 1m

第57図 24号竪穴住居



第58図 24号竪穴住居の出土遺物

礫まじり粗粒砂の薄層で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面は同一面であり、貼り床等は認められない。

カマド 北東隅の東壁に位置する。カマド燃焼部は不明瞭で暗灰色礫まじり中粒砂のカマド掘方と崩落したカマド上部のブロックの境界に認められた焼土ブロックが多い面を使用面と推定した。カマドの燃焼部は竪穴住居の東壁の奥に22号竪穴住居埋土を掘り込んで構築している。カマドの煙道及び燃焼部や両袖は失われており、これらの残骸は土師器甕(4)の破片などと埋土に堆積している。このことからカマドは竪穴住居の廃絶時に破壊ないし破損して保存された可能性が高い。

カマドの幅は0.92m、長さ0.70m。

貯蔵穴 貯蔵穴は北壁際中央に位置するピット1である。ほぼ円形を呈し長径0.92m、短径0.86m、深さ0.34m。貯蔵穴底の23cm上からは土師器甕(3)が出土した。

柱穴 一辺が5mに及ぶ竪穴住居であり、支柱穴は存在したはずだが掘方の調査でも検出できなかった。これは支柱の柱穴底が4層の砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性がある。

遺物 埋土から土師器杯(1)や甕(2)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

25号竪穴住居(第59・60・61図、PL.17-5～18-1・55・56、218頁)

位置 中央部東寄り。

座標 X=24696～24700 Y=-70276～-70281

主軸方位 N75° E

重複 27号竪穴住居を切る。

形状と規模 東北東方向に長軸を有し、歪んだ正方形に近い長方形を呈する。長径は4.58m、短径4.24m、床面までの深さ0.22m、掘方までの深さ0.34m、面積18.56㎡である。

埋土 黒色細粒火山灰土のブロックを含む暗褐色シルト質土の互層で竪穴の中央に向かって成層している。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

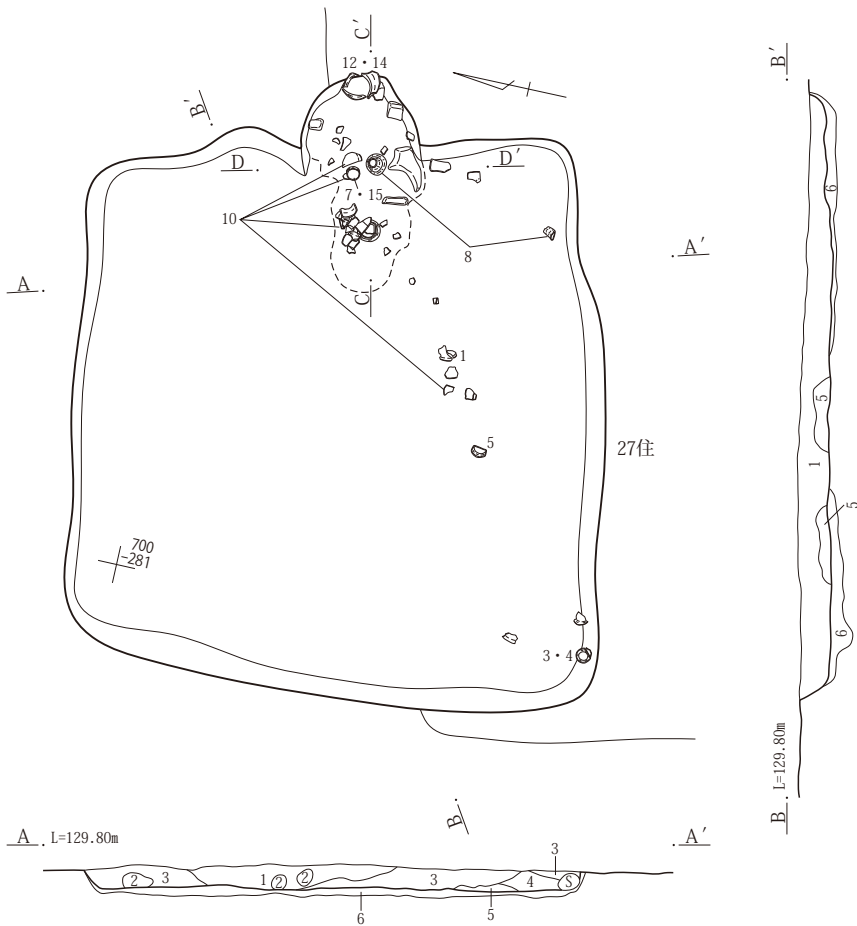
掘方 掘方と床面の間は0.02～0.10mで南西側に緩く傾斜しながら不定形の窪みによる凹地状を呈する。

カマド 東壁中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁よりも奥に4層の砂礫層や27号竪穴住居の埋土を掘り込んで暗灰色シルト質砂を貼って構築している。燃焼部の右壁は長径0.17mの凝灰質砂岩の礫が立った状態で、長径0.39mの凝灰質砂岩の礫が横に寝かせて埋められている。燃焼部の手前は甕の上半部(13)が逆さまに立った状態で埋められている。また燃焼部の中央は高坏(8)が埋められている。これらはカマドの構築材として使用された石材や転用された土器であり、高坏は支脚の基礎部分の可能性もある。カマドの煙道は失われており、両袖は暗灰色シルト質砂により構築していた可能性があるが、大部分が破壊されて失われている。

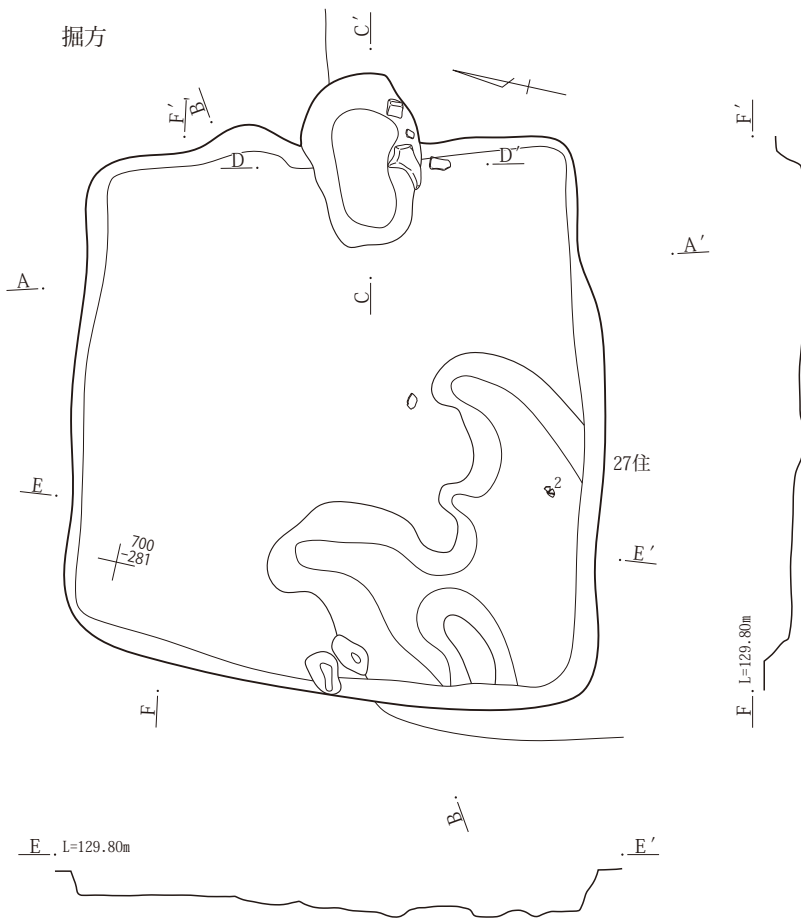
カマドの幅は0.60m+、長さ1.23m、焚口の幅0.38m。

柱穴 掘方の調査でもピットは検出されなかった。

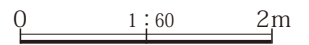
特徴 隣接する24号竪穴住居と規模や主軸方位が似ている。一辺が4mの竪穴住居であり、床面に支柱に相当する

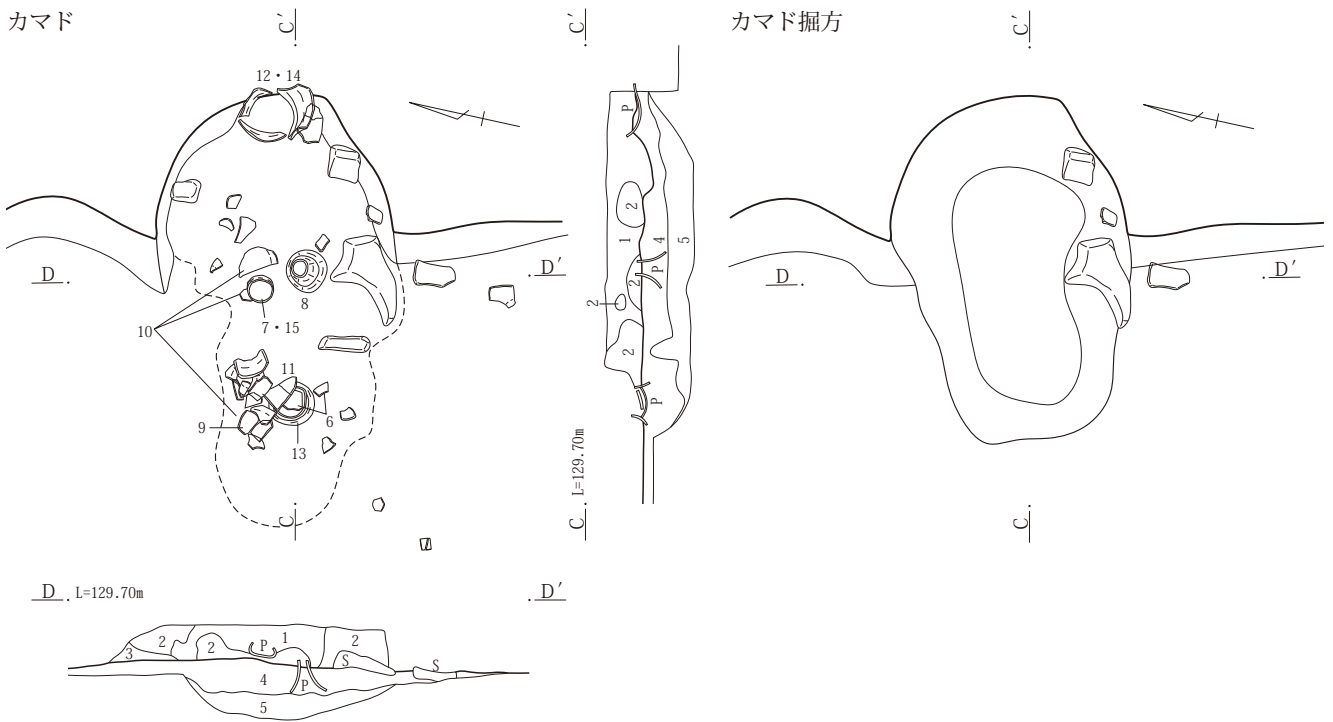


掘方



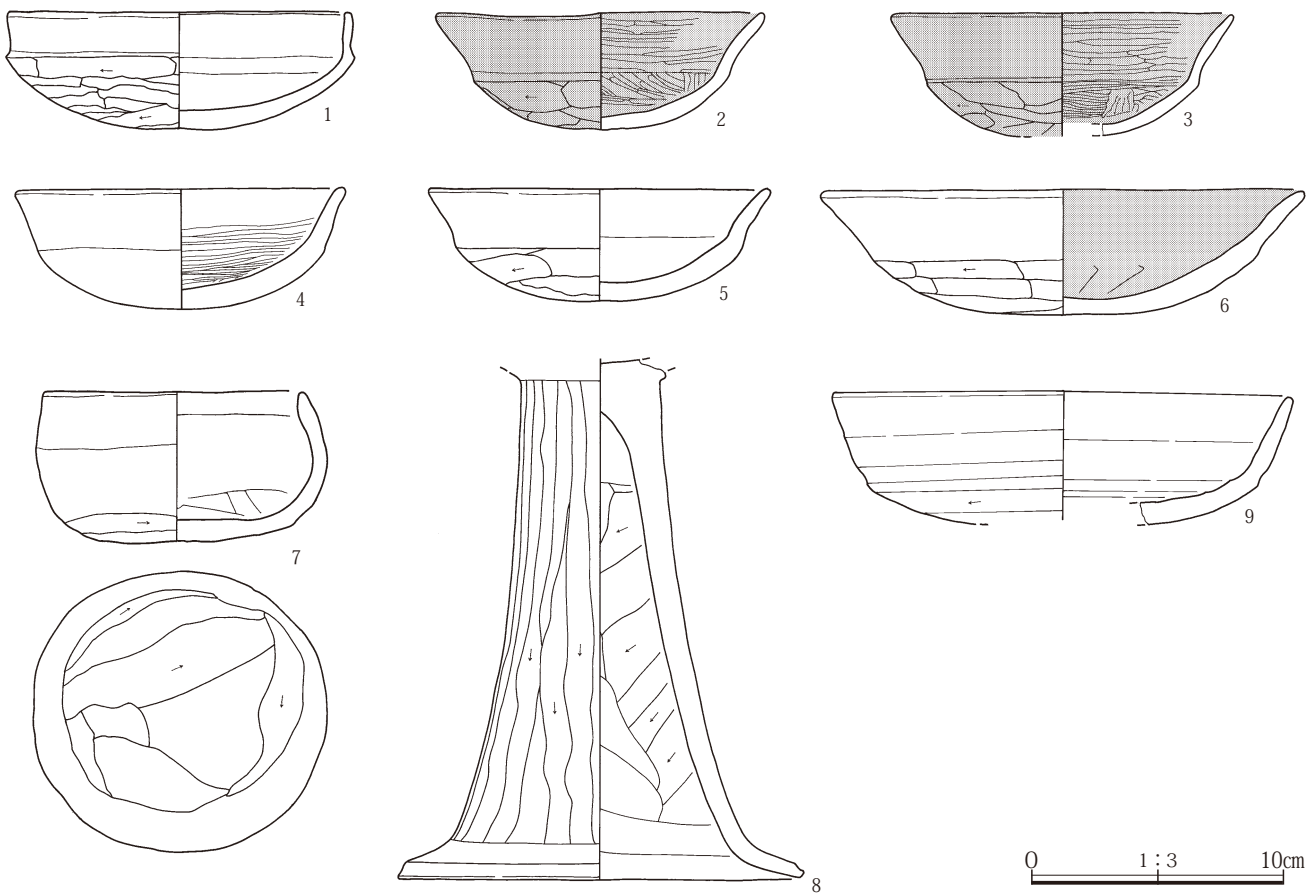
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。垂円礫まじり中～細粒砂優勢。径300mm大の黒色土ブロックを含む。(1～5は埋土)
- 2 黒色細粒火山灰土。ブロック状を呈す。
- 3 暗灰褐色シルト質～砂質土。礫まじり中粒砂優勢。
- 4 暗灰色シルト質～砂質土。礫まじり中粒砂優勢。黄灰色中粒砂や黒色土の薄層がみられる。
- 5 暗灰～黄灰色極粗～粗粒砂。ブロック状を呈する。
- 6 暗灰色礫まじりシルト質土。中～極粗粒砂優勢。(掘方埋土)



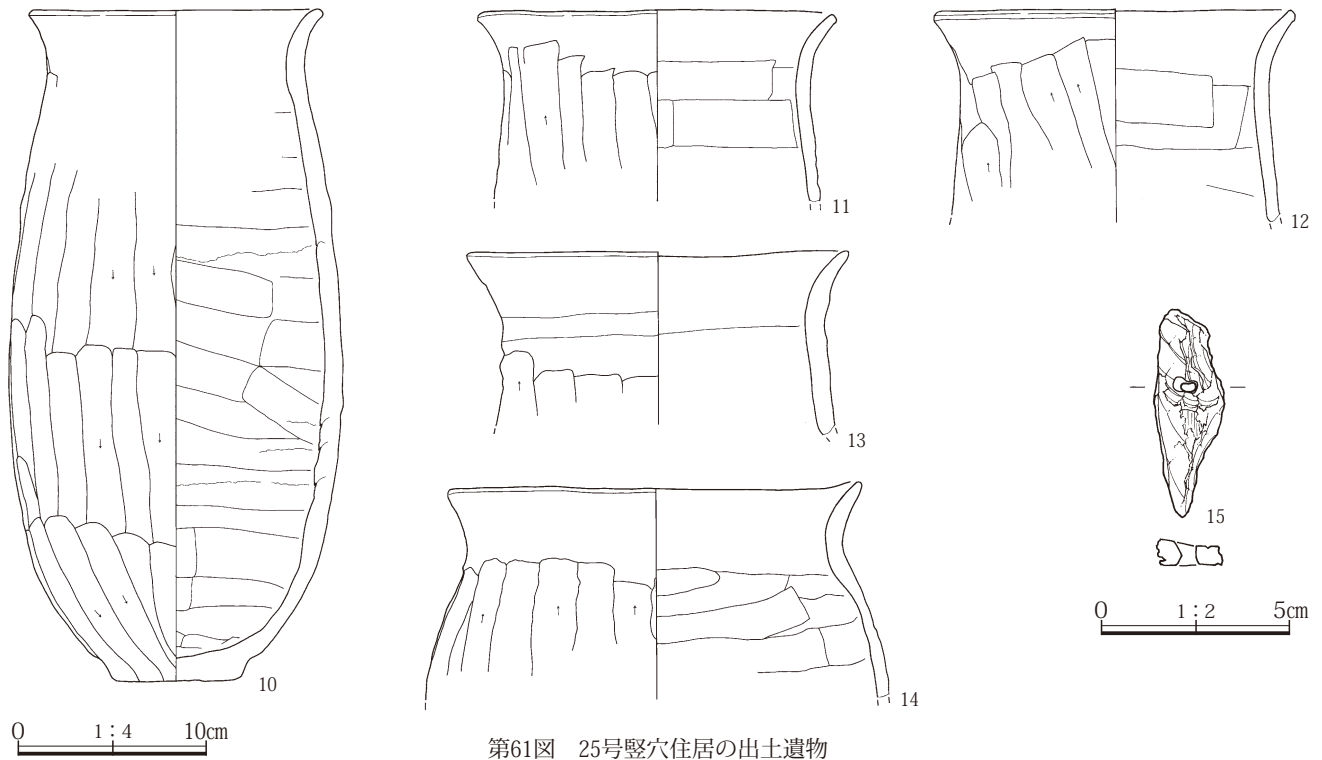


- 1 暗灰色シルトまじり細～中粒砂。粒径2mmの白色岩片や径5～10mmの垂円礫を含む。(1～3は埋土)
- 2 暗灰褐色焼土ブロックまじり中粒砂。粒径2～5mmの橙色焼土粒を含む。
- 3 暗灰色シルト質～砂質土。黒色火山灰土。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。(4～5は掘方埋土)
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒は少量含む。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。

0 1:30 1m



第60図 25号竪穴住居と出土遺物



第61図 25号竪穴住居の出土遺物

柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定した。

遺物 床面から土師器杯(1・3～6)や甕(11)の破片が出土し、床面付近からは土師器甕(12・13・14)の破片が出土した。また、カマドの使用面から土師器碗(7)甕(10)、滑石製石製品(15)が出土した。

時代 古墳時代6世紀中葉。

26号竪穴住居(第62・63図、PL.18-2～18-5・56、218頁)

位置 中央部南西壁際。

座標 X=24675～24680 Y=-70285～-70289

主軸方位 N60° E

重複 断面観察で埋土は5号溝の埋土に切られる。39号・47号竪穴住居を切る。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈するが南西部の大部分は調査区外にある。長径は5.88m、検出した最大の短径0.86m+、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.62m、検出された最大の面積5.20㎡である。

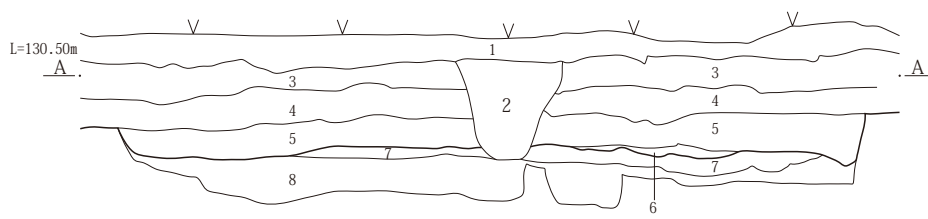
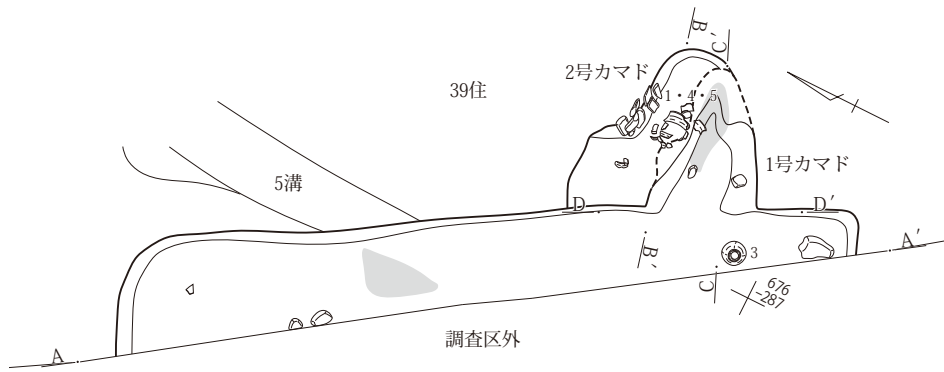
埋土 南西壁際の断面観察では、耕作土と2層相当の遺構埋土の層理面から掘り込まれた暗灰色の焼土、黄灰色シルト質砂、粘土ブロックを含む砂質土からなる。カマドに近い竪穴の基底には暗灰～黄灰色シルトブロックまじりの砂層が堆積している。

床面 床面は暗灰色シルトブロックまじり砂を厚く貼っ

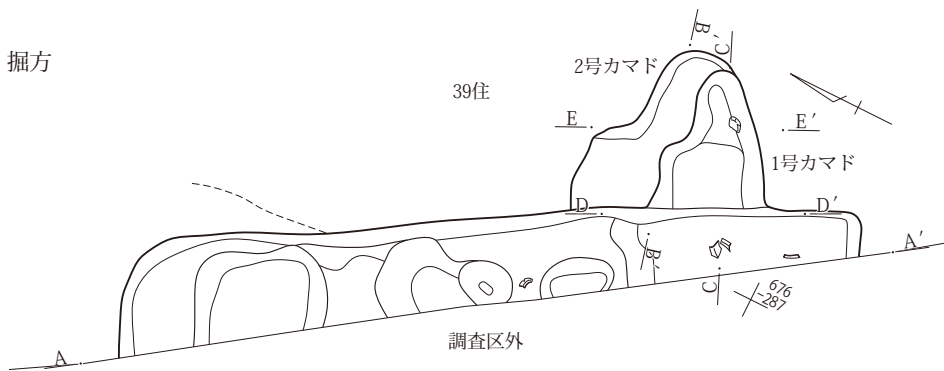
て構築し平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.08～0.39mでカマドの周囲は低く、北東壁際に長径1.05m大の土坑状の窪みが複数みられる。

カマド 南西隅の東壁北寄りに位置し、同じ場所に作り替えられている。竪穴住居が廃絶した時期のカマドを1号、作り替え前のカマドを2号カマドとした。1号カマドの燃烧部は47号竪穴住居の埋土を掘り込んで焼土ブロックを多く含む暗灰色シルト質砂を貼って構築している。カマドの煙道は失われ、袖部は破壊されているが燃烧部の壁際から長径0.10m大の結晶片岩の垂円礫が3点出土した。これらは燃烧部壁や袖部の構築材である可能性がある。2号カマドは、土師器杯(1)や甕(4・5)の破片や焼土のブロックを多く含む灰褐色砂で埋まっている。これらは2号カマドの燃烧部上部の構築物が移動したものであると思われる。2号カマドは燃烧部の使用面、煙道、袖が失われており、焼土ブロックを含む埋土の下限で使用面を推定し、掘方を検出した。燃烧部の右壁からは最大長径0.11m大の結晶片岩の礫が並んで立てられた状態で5点埋められている。これらは燃烧部壁の西壁に埋められていた礫であり、結晶片岩は燃烧部壁の構築材として使用された垂円～垂角礫で、被熱の痕跡が認められる。



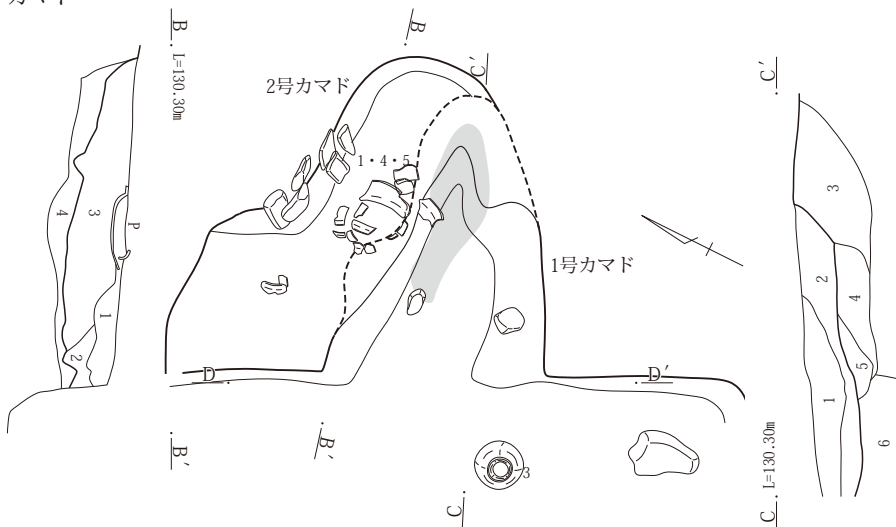
掘方



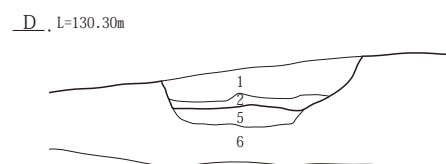
- 1 耕作土(表土)
- 2 暗灰色礫まじり細～中粒砂。As-Bまじりの砂がみられる。(5号溝埋土)
- 3 暗褐色シルト質～砂質シルト層。亜円礫まじりで土壌化が進む。(2層)
- 4 暗褐色シルト質砂。焼土粒を含む。(2層相当の遺構埋土か?)
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や黄灰色シルト質砂や粘土のブロックを含む。(5～6は埋土)
- 6 暗灰～黄灰色中粒砂。シルト～細粒砂ブロックを含む。
- 7 暗灰色礫まじり中～細粒砂。径20mmの亜円礫を含む。(7～8は掘方埋土)
- 8 暗灰色礫まじり中粒砂。シルトブロックを含む。



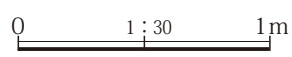
カマド



- 2号カマド(B断面)
- 1 暗灰色シルト質細粒砂。(1～3は埋土)
 - 2 暗灰色中粒砂。
 - 3 灰褐色中粒砂。橙色焼土ブロックを多く含む。
 - 4 暗灰色中粒砂。(掘方埋土)

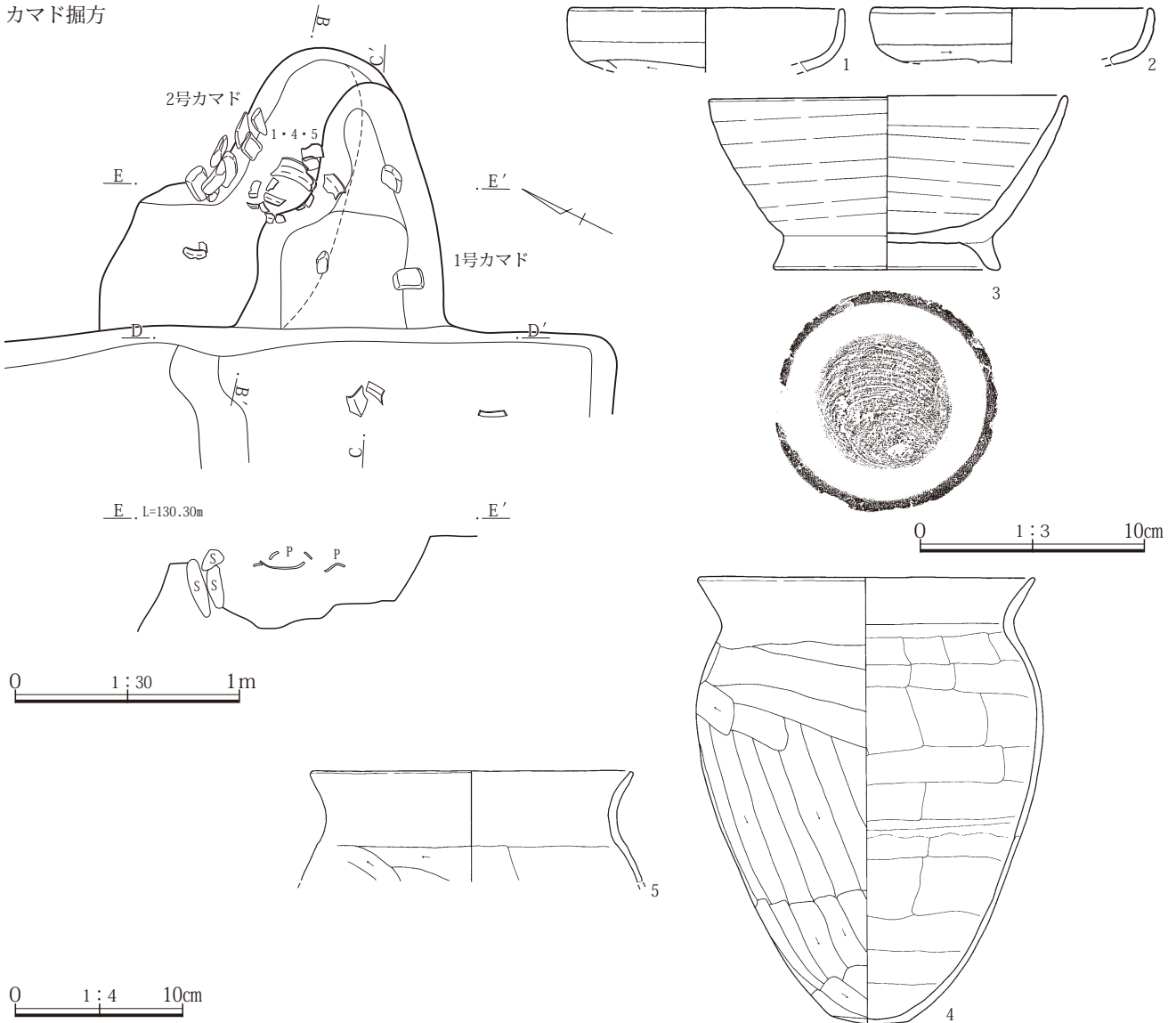


- 1号カマド(C・D断面)
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。粘土ブロックや焼土を含む。(1～2は埋土)
 - 2 暗褐色シルト質～砂質土。粒径5mm大の焼土粒や焼土ブロックを含む。
 - 3 暗褐色シルト質～砂質土。焼土ブロックを多量に含む。(3～6は掘方埋土)
 - 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。
 - 5 暗褐色シルト質～砂質土。粘土ブロックを含む。
 - 6 黄褐色シルト質～砂質土。焼土粒や黄灰色シルト質砂を含む。



第62図 26号竪穴住居

カマド掘方



第63図 26号竪穴住居と出土遺物

カマドの幅は0.98m、長さ0.11m、焚口の幅0.56m。

柱穴 検出した範囲に柱穴はみつからなかった。竪穴住居の大部分は調査区外にあるため柱穴も調査区外に存在するものと考えられる。

遺物 カマド手前の床面付近から須恵器椀(3)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第4四半期。

27号竪穴住居(第64・65・66図、PL.18-6～18-8・56、218・219頁)

位置 調査区の中央部東寄り。

座標 X=24690～24699 Y=-70272～-70281

主軸方位 N22° W

重複 25号竪穴住居に切られる。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形である。長径は8.24m、短径7.44m、床面までの深さ0.15m、掘方までの深さ0.51m、面積は58.52㎡で、発掘地では二番目に大規模な竪穴住居である。

埋土 暗灰色礫まじり砂が均質に竪穴全体を埋める。このような竪穴住居の埋土の層相は23号竪穴住居の埋土でも同様な傾向がある。

床面 暗灰色シルト質砂で構築している。隣接する25号竪穴住居に北壁の北西側付近の床面は失われている。

掘方 掘方と床面の間は0.04～0.20mである。浅い不定形の段状の窪みで、緩い凹凸がみられるが掘方の全体は平坦で中央部が高い。このような掘方の特徴は23号竪穴住居でも同様である。

周溝 カマドがある北壁、西壁、南壁の中央の一部以外

の壁際を周回する。最大の上幅は0.29m、最小の底幅0.09m、深さ約0.15mである。

カマド 北壁の中央南寄りに位置する。カマドの使用面より上部は25号竪穴住居より削られ、失われている。カマドは北壁の手前に4層の砂礫層を掘り込んで黄灰色シルト質砂を貼って構築している。掘方から長径0.18mの結晶片岩の亜角礫が2点立った状態で埋められており、そのほか結晶片岩の礫は3点出土した。これらは燃焼部壁の構築材である可能性がある。

貯蔵穴 掘方で検出したピット5で北壁際の北東隅に位置する。隅の丸い長方形を呈し長径0.92m、短径0.53m、深さ0.48m。貯蔵穴底から24cm上で土師器甕(15)の破片が出土した。

柱穴 床面でピット1を、掘方でピット2・3・4・6～15を検出した。これらは断面形状が円筒ないしU字形を呈する。これらのピットは建て替え等により数回に渡って掘られた柱穴である。ピット1～15の計測値を第5表に示す。23号竪穴住居の廃絶時における4本の主柱に相当する柱穴は、建物の規格との位置関係からピット1・3・4・6と推定される。柱間はピット3・4が4.50m、ピット1・6が4.40m、ピット1・3が4.38m、ピット4・6が3.78mである。ピット1の建て替え前の柱穴は掘方で確認できたピット2やピット14である可能性が高い。ピット4の建て替え前の柱穴はピット11である可能性が高い。ピット6の建て替え前の柱穴はピット9やピット7である可能性が高い。なおピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は直径0.58m、深さ0.56m。

ピット3は直径0.68m、深さ0.58m。

ピット4は長径0.82m、短径0.58m、深さ0.68m。

ピット6は長径0.76m、短径0.64m、深さ0.49m。

第5表 27号竪穴住居で検出されたピットの計測値

ピット	単位(m)						
長径(直径)	P1 (0.58)	P2 0.71	P3 (0.68)	P4 0.82	P5 0.90	P6 0.76	P7 0.42
短径		0.60		0.58	0.47	0.64	0.25
深さ	0.56	0.42	0.58	0.68	0.50	0.49	0.40
ピット	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
長径(直径)	0.40	0.62	0.58	0.54	0.31	0.34	0.54
短径	0.31	0.56	0.37	0.50	0.28	0.24	0.44
深さ	0.18	0.32	0.28	0.32	0.27	0.17	0.28
ピット	P15						
長径(直径)	0.38						
短径	0.26						
深さ	0.15						

特徴 大規模な竪穴住居である。

遺物 南側壁際付近の床面から土師器杯(4・5)、高坏(8)、小型甕(11)が出土し、その上位から杯(2・3)が出土している。床面付近から須恵器杯蓋(9)や土師器甕(14)の破片が出土した。また、埋土から土製品紡錘車(18)や滑石製石製品(19)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

28号竪穴住居(第67～71図、PL.19-1～20-4・56・57・58、219・220・221頁)

位置 中央部北東壁際。

座標 X=24680～24686 Y=-70260～-70267

主軸方位 N50° E

重複 6号井戸に切られる。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、長方形を呈する。長径は5.32m、短径4.75m、床面までの深さ0.21m、掘方までの深さ0.45m、面積24.35㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり中粒砂からなり均質である。

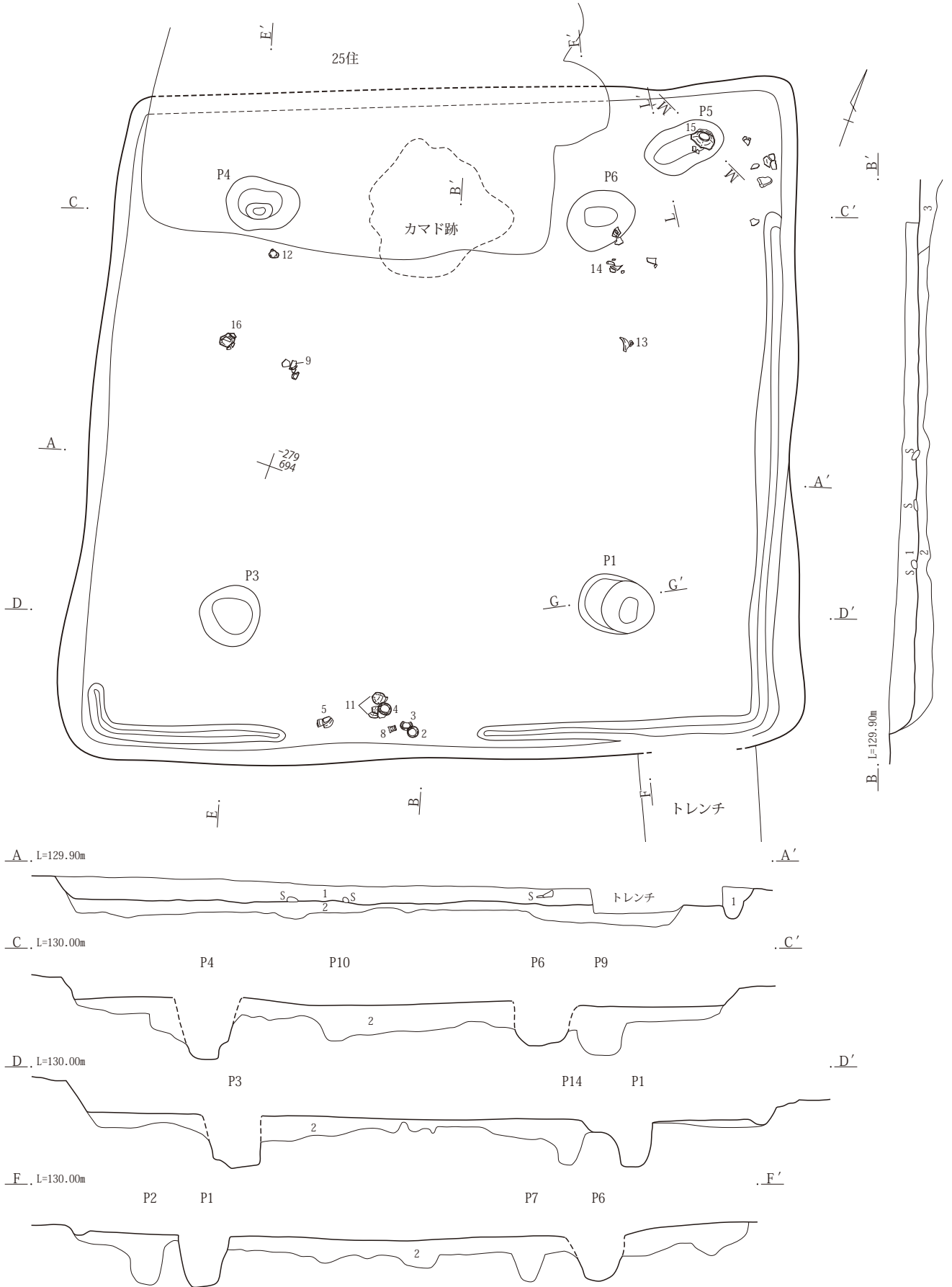
床面 暗灰～黄灰色礫まじり砂で構築、平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.03～0.17mで、全体に浅い窪みで凹凸しているが中央がやや高い。中央部の南東には歪んだ方形の床下土坑1があり、暗灰色シルトブロックまじり砂が成層している。これはシルトを多く含む土壌を南東側より層状に貼って構築した可能性がある。

カマド 北東壁中央の南寄りに位置する。カマドの燃焼部は北東壁よりも奥に4層の砂礫層を掘り込んで灰褐色シルト質砂を貼って構築している。燃焼部の右壁には土師器鉢(33)や甕(45・46・47)が折り重なった状態で出土し、燃焼部の使用面に接している。これはカマド手前から出土した鉢(35)と一緒に移動したカマドの崩落時にカマド上部からもたらされた遺物であると考えられる。また燃焼部の両袖下には長径0.27mの結晶片岩の亜角礫が2点立った状態で埋められている。これらはカマドの構築材として使用された結晶片岩である。カマドの煙道は失われており、両袖は灰褐色シルト質砂により構築していた可能性があるが、大部分が失われている。

カマドの幅は0.84m、長さ0.50m、焚口の幅0.60m。

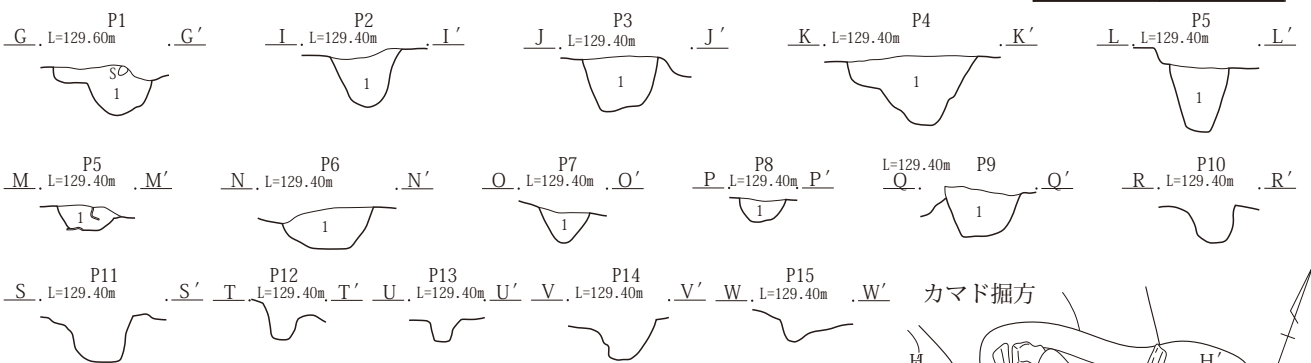
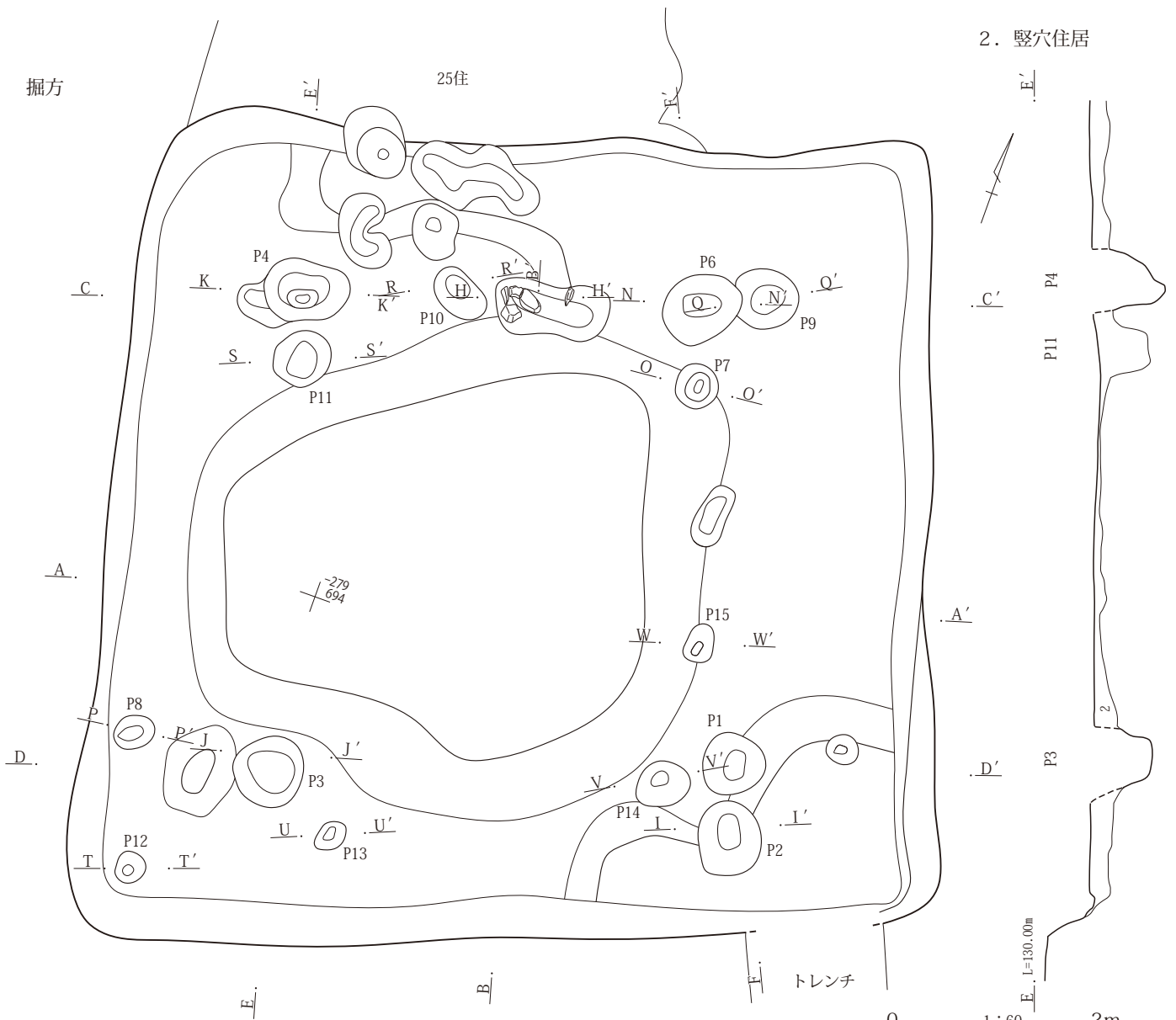
貯蔵穴 貯蔵穴は北東壁際東隅に位置する土坑1である。ほぼ円形を呈し長径0.89m、短径0.72m、深さ0.24m。貯蔵穴周囲の床面から貯蔵穴底部にかけてたくさんの遺



- 1 暗灰色礫まじり中～細粒砂。径10～30mmの垂円礫を含む。(埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂や含む。細礫を多量に含む。(2～3は掘方埋土)
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂や焼土粒を含む。カマド構築材の残骸であろう。

第64図 27号竪穴住居(1)

2. 竪穴住居

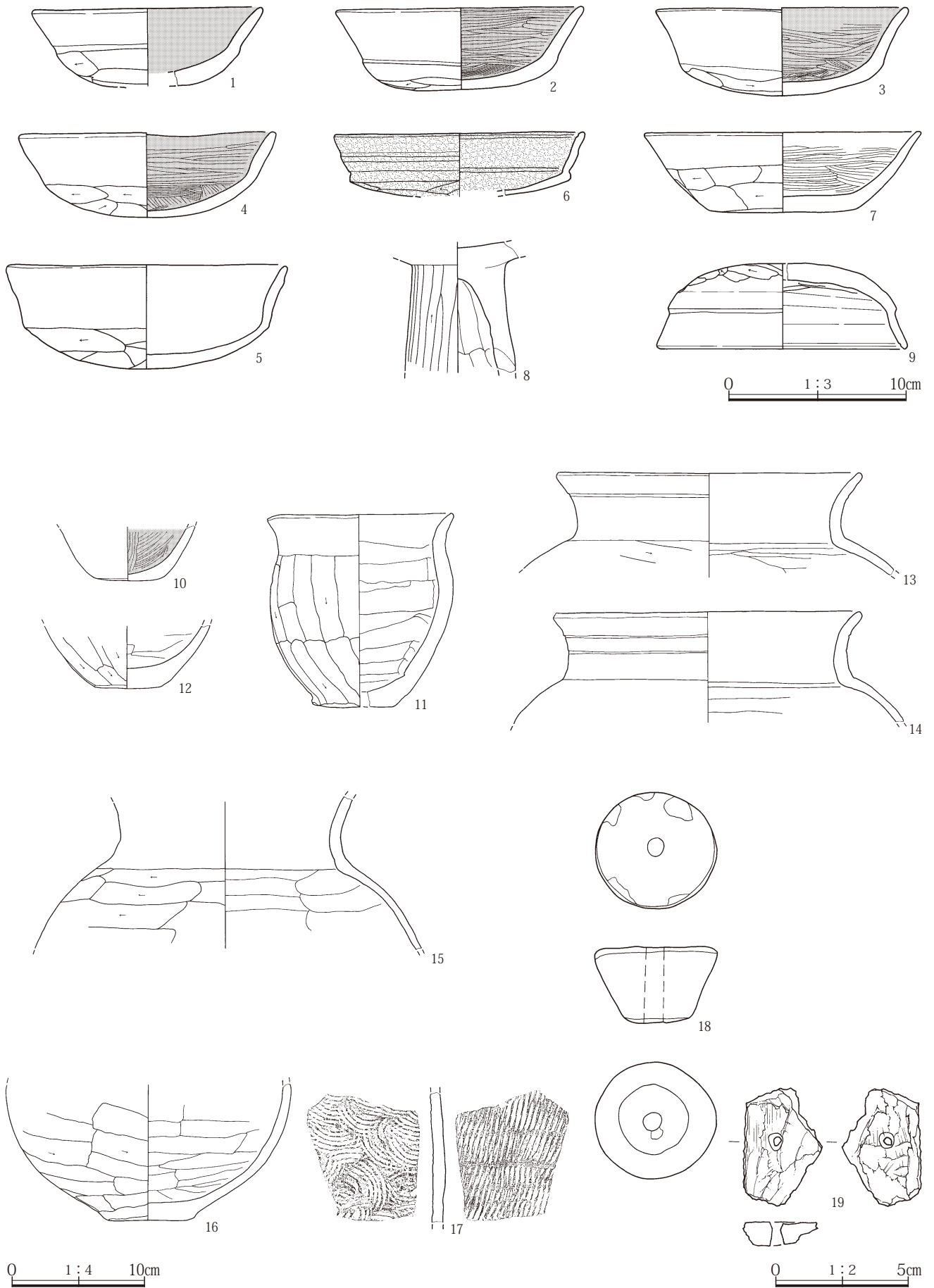


- P 1
1 黒褐色シルト質～砂質土。小礫を多量に含む。
- P 2
1 黄褐色シルト質～砂質土。黄色砂質土優勢で細礫まじり。
- P 3, P 4
1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を含まず、細礫まじり砂質土優勢。
- P 5
1 黄褐色シルト質～砂質土。黄色砂質土優勢で細礫まじり。
- P 6
1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を含まず、細礫まじり砂質土優勢。
- P 7～P 9
1 黄褐色シルト質～砂質土。黄色砂質土優勢で細礫まじり。

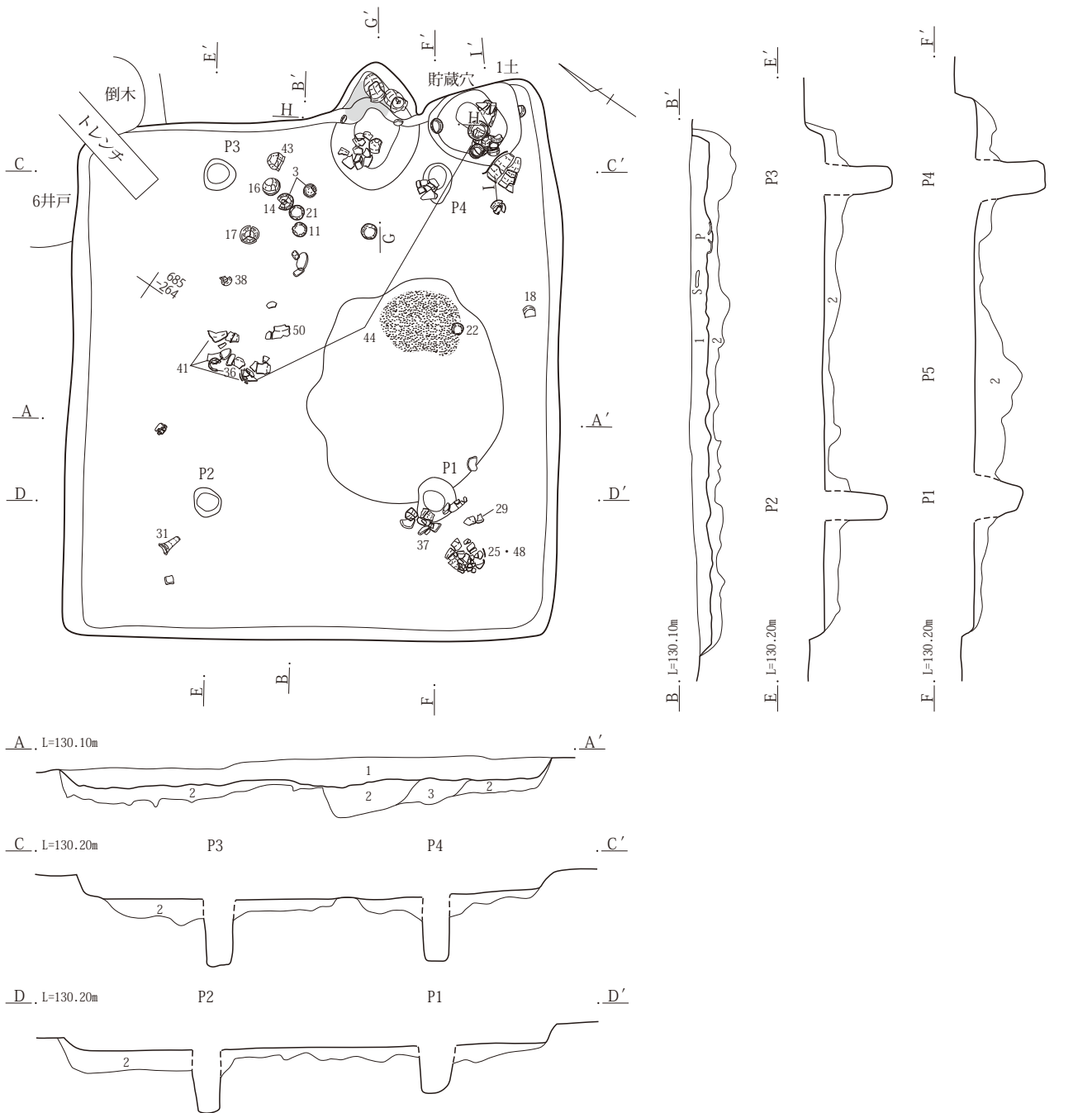
- 1 黄灰色シルト質砂～シルト。径10～20mmのプロック状を呈する。

第65図 27号竪穴住居(2)

第3章 調査された遺構と遺物



第66図 27号竪穴住居の出土遺物



- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。径20～40mmの垂円礫を含み塊状無層理を呈する。(埋土)
- 2 暗灰～黄灰色礫まじり中粒砂。径20mmの垂円礫や径5～10mmの黄灰中粒砂ブロックを含む。(2～3は掘方埋土)
- 3 暗灰色シルトブロックまじり中～粗粒砂。径10mmの黄灰中粒砂ブロックを含む。上位に粒径5～10mmの焼土粒を少量含む。

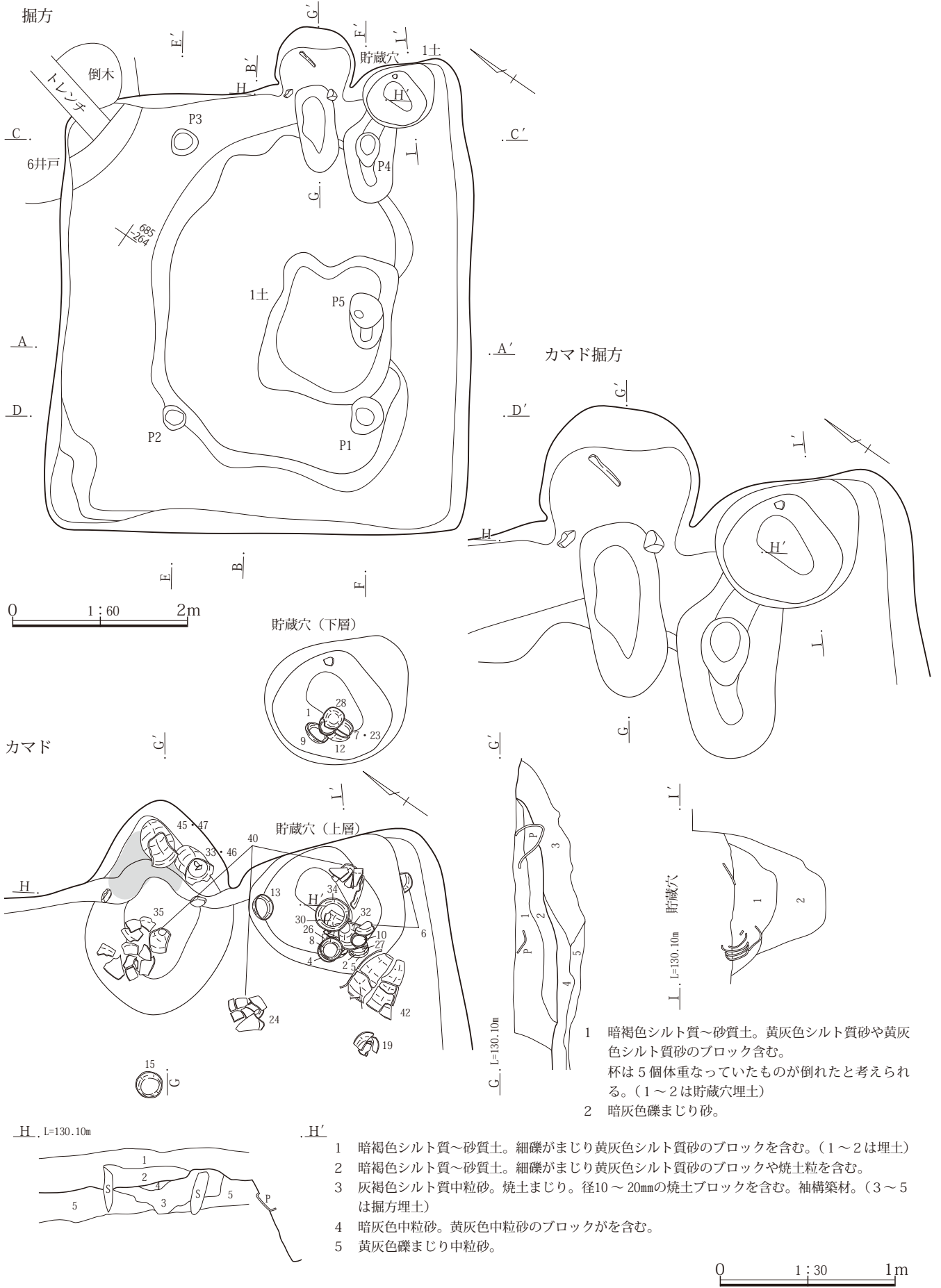
第67図 28号竪穴住居(1)

物が出土した。これらは土師器杯(1・2・4～7・9・10・12・13・23・26・27・28)や鉢(32・34)須恵器高坏(30)や土師器甕(40・42)などからなり貯蔵穴の南側に偏在して出土した。これは貯蔵穴の南側床面に置かれていた土器類が竪穴住居の埋没過程で順次貯蔵穴に崩落して堆積した可能性がある。また、貯蔵穴の下層の黒色土に対し、遺物を含有する埋土はカマドを構築した土壌に層相が似

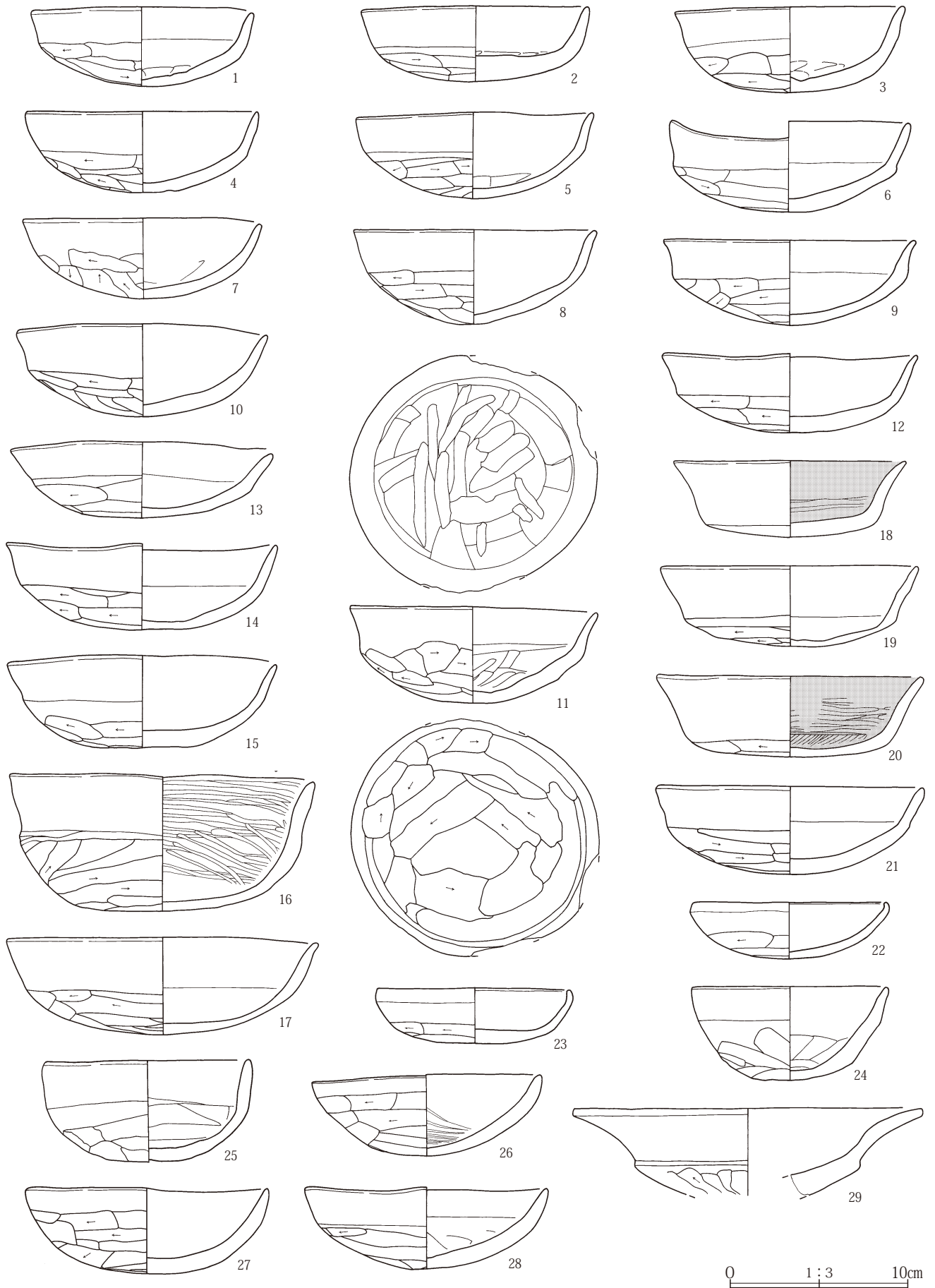
ることから、カマドの崩壊過程で遺物群が貯蔵穴に移動して埋没した可能性がある。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方でピット1～5を検出した。これらは断面形状が円筒形を呈する柱穴である。竪穴住居の廃絶時における4本の主柱に相当する柱穴は、ピット1～4と推定されるが、ピット5は浅い窪み状を呈するので床下土坑1の一部であると考えられ

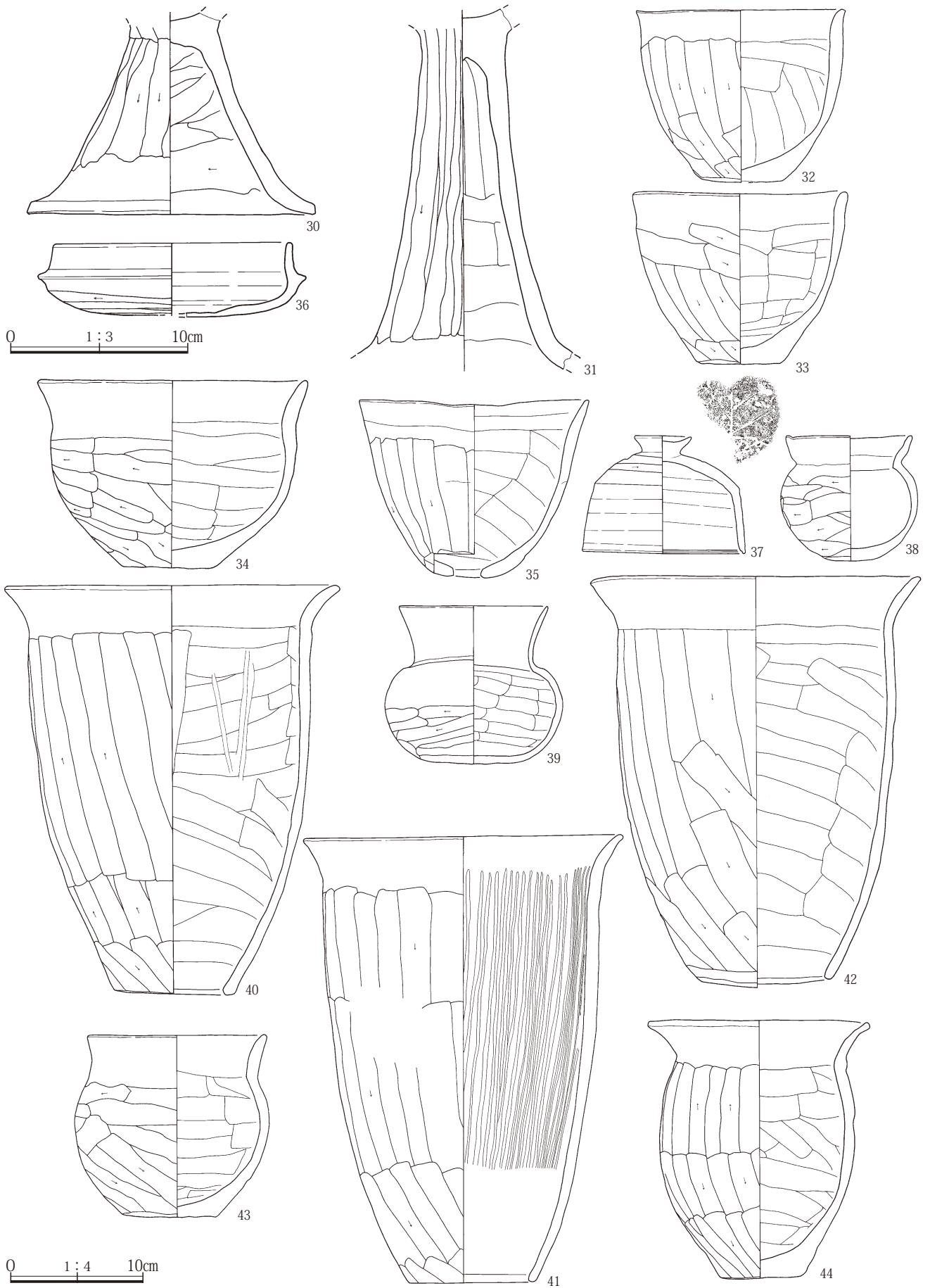
第3章 調査された遺構と遺物



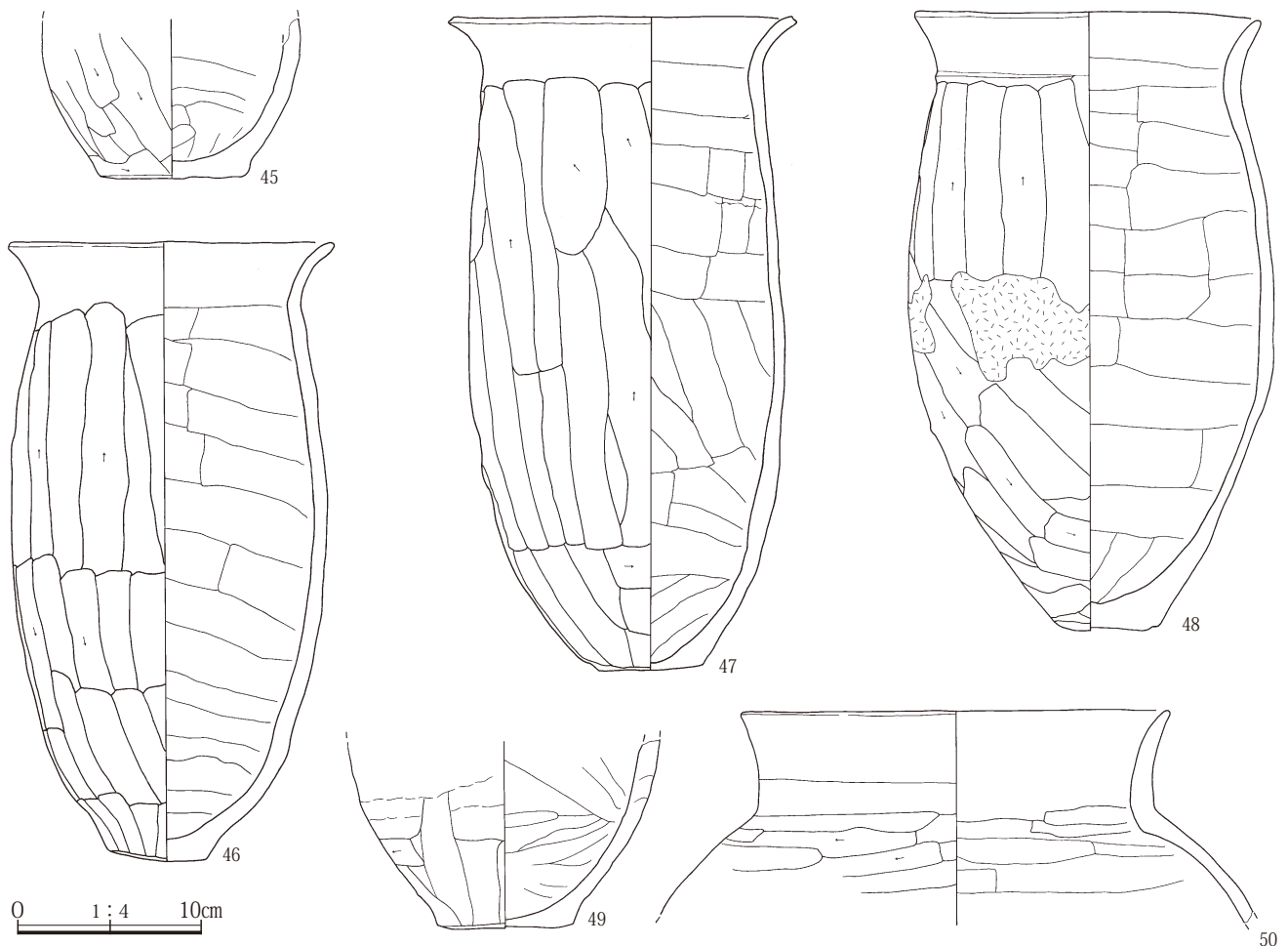
第68図 28号竪穴住居(2)



第69図 28号竪穴住居の出土遺物(1)



第70図 28号竪穴住居の出土遺物(2)



第71図 28号竪穴住居の出土遺物(3)

る。柱間はピット2・3が3.18m、ピット1・4が3.15m、ピット1・2が2.20m、ピット3・4が2.12mである。なおピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.44m、短径0.36m、深さ0.46m。

ピット2は長径0.30m、短径0.25m、深さ0.61m。

ピット3は長径0.32m、短径0.30m、深さ0.64m。

ピット4は長径0.40m、短径0.27m、深さ0.65m。

ピット5は長径0.41m、短径0.36m、深さ0.26m。

特徴 床面から多くの遺物が出土した住居で、遺物はカマドや貯蔵穴周辺に多くみられる。この規模の竪穴住居での食器や貯蔵具などの遺物量を知ることができる資料である。またピット1とピット4の柱間には床下土坑とピット5が検出され、床面の出土遺物が少ない特徴がある。

遺物 床面から土師器杯(3・11・14～17・21・22)、椀(24)、高坏(31)、小型壺(38)が出土し、床面付近からは土師器椀(25)、甑(42)、甕(48)や須恵器杯身(36)、壺

蓋(37)が出土している。

床面から出土した遺物群は、ピット1付近、カマドからピット3の間から住居の中央部の範囲及びカマドから貯蔵穴周辺の3カ所に分布している。

時代 遺物から推定される時代と年代は、古墳時代から飛鳥時代の6世紀後半～7世紀前半と幅を持つ。

29号竪穴住居(第46・47図、PL.15-1、221頁)

位置 中央南西寄り。

座標 X=24691～24692 Y=-70293～-70295

主軸方位 不明

重複 21号竪穴住居に切られる。

形状と規模 方形を呈し長径は1.50m+、短径1.46m+の残存する最大値を示す。掘方までの深さ0.11m、残存する面積1.44㎡+である。

埋土 21号竪穴住居の埋土と同じ黒褐色シルト質土である。

掘方 床面は失われており浅く平坦な掘方を呈する。

カマドや柱穴 検出されなかった。床面の大部分は21号竪穴住居により失われている。

特徴 竪穴住居の大部分が21号竪穴住居によって失われた浅い竪穴遺構である。北東壁際の壁面が明瞭であることから竪穴住居と認定した。

遺物 埋土から須恵器椀(1)の破片が出土した。10世紀第2四半期の21号竪穴住居に切られることから、遺物と遺構の層序関係は矛盾しない。

時代 遺物から平安時代10世紀前半と推定される。

30号竪穴住居(第72・73図、PL.20-5～20-6・58・59、221・222頁)

位置 北部西壁際。

座標 X=24772～24776 Y=-70303～-70304

主軸方位 N82° W

重複 なし。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、方形を呈するが竪穴住居の西側は大部分が調査区外にある。長径は4.25m、検出した最大の短径0.68m+、床面までの深さ0.28m、掘方までの深さ0.43m、検出された面積は2.76㎡+である。

埋土 西壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、竪穴の南部は1層に相当する浅間Bテフラがまじる暗灰色砂質土が竪穴を削り、埋めるように堆積している。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.10～0.23mで、浅い段状の窪みを呈する。

カマド 東壁中央の北寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前から奥に4層の砂礫層を掘り込んで灰褐色シルト質砂を貼って構築している。カマドの煙道及び両袖は失われている。燃焼部の使用面には土器片が出土し、燃焼部の左側床面には多くの土器が出土した。これらは床面から出土した土師器杯(2・3)、鉢(6)、甑(9・10)、小型甕(11)や床面付近から出土した土師器甕(12・13・15)であり、カマドの廃絶時にカマド上部にあった遺物の可能性がある。また燃焼部手前からは長径0.21mの結晶片岩礫が2点出土した。右の1点は掘方に接しているが、左の1点は前述の土器片と共に崩落したカマド構築材の可能性がある。

カマドの幅は0.96m、長さ0.58m。

柱穴 検出した範囲に柱穴はみつからなかった。柱穴は調査区外に存在する可能性がある。

遺物 埋土から土師器杯(4・5)や鉢(8)、甕(14)が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀前半。

31号竪穴住居(第74・75・76図、PL.20-7～21-2・59、222頁)

位置 南部東寄り。

座標 X=24673～24678 Y=-70264～-70269

主軸方位 N48° E

重複 3号掘立柱建物の内区と重なる。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する。長径は4.49m、短径4.25m、床面までの深さ0.17m、掘方までの深さ0.42m、面積18.12㎡である。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土が堆積しており均質である。

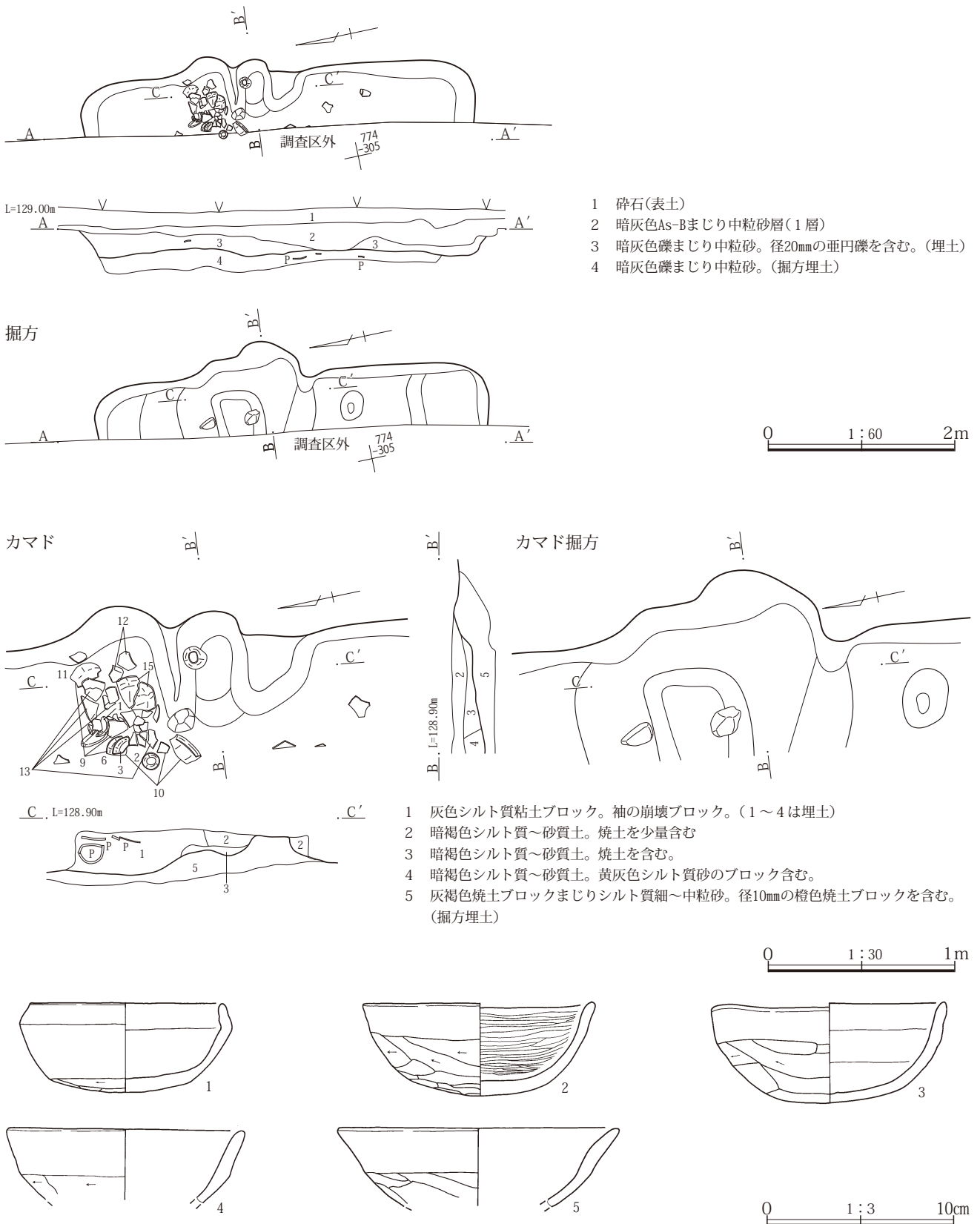
床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.10～0.22mで、全体に浅い窪みで凹凸を呈するが北側がやや高い。

カマド 北東壁中央の南寄りに位置する。カマドの燃焼部は北東壁よりも手前から奥に4層の砂礫層を掘り込んで灰褐色砂で構築している。煙道は失われているが燃焼部や両袖の残存状態は良好である。燃焼部はハの字形に開いて緩やかに手前に傾斜し、焼土化した使用面が残る。両袖は灰褐色シルトまじりの砂で構築され、燃焼部の壁際に長径0.26mの凝灰岩質砂岩の垂角礫が立った状態で埋められている。また燃焼部前面の焚口付近には長径0.59m、短径0.15mの板状の凝灰質砂岩が燃焼部の使用面に接して出土した。前者は両袖の構築材、後者はカマド焚口の天井架構材と考えられる。

カマドの幅は0.89m、長さ0.75m、焚口の幅0.70m。

貯蔵穴 貯蔵穴は北東壁際東隅に位置する土坑1である。竪穴の壁際に沿った隅の丸い方形を呈し、長径は0.90m、短径0.74m、深さ0.12m。床面から貯蔵穴にかけて多くの遺物が出土した。これらは床面及び床面付近から出土した土師器杯(1～5・7・10・11)や貯蔵穴上部の埋土から出土した土師器甑(17)や小型甕(18)からなる。これらの遺物は床から埋没中の貯蔵穴中央に偏在して出土した。これは貯蔵穴の南西側床面に置かれていた土器

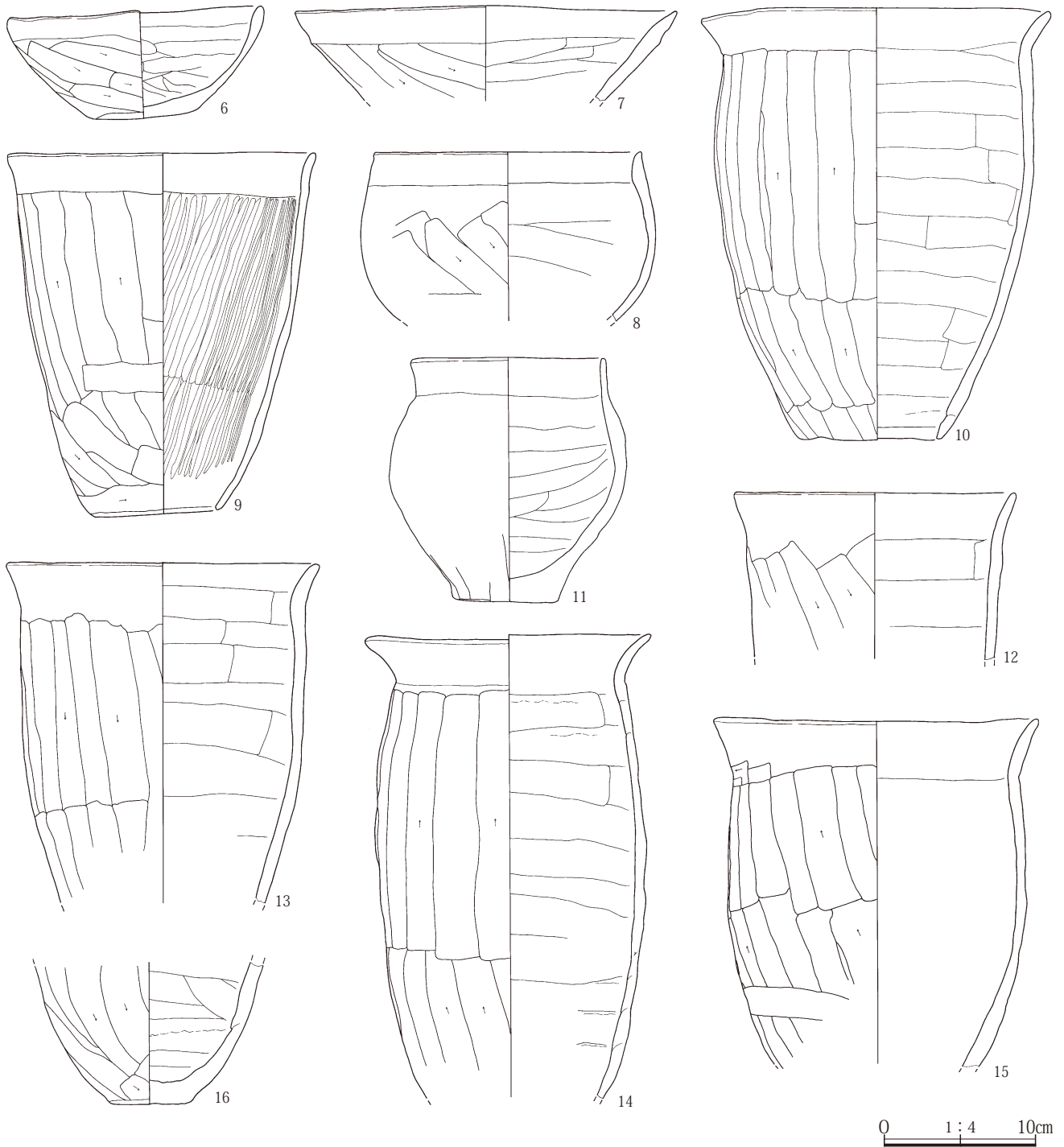


第72図 30号竪穴住居と出土遺物

類が竪穴住居の埋没過程で順次貯蔵穴に崩落して堆積した可能性が高い。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方で柱穴である

ピット1~4を検出した。柱間はピット2・3が2.15m、ピット1・4が2.10m、ピット1・2が2.05m、ピット3・4が2.00mである。これらは断面形状が円筒形を呈する



第73図 30号竪穴住居の出土遺物

柱穴である。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.36m、短径0.30m、深さ0.61m。

ピット2は長径0.50m、短径0.41m、深さ0.68m。

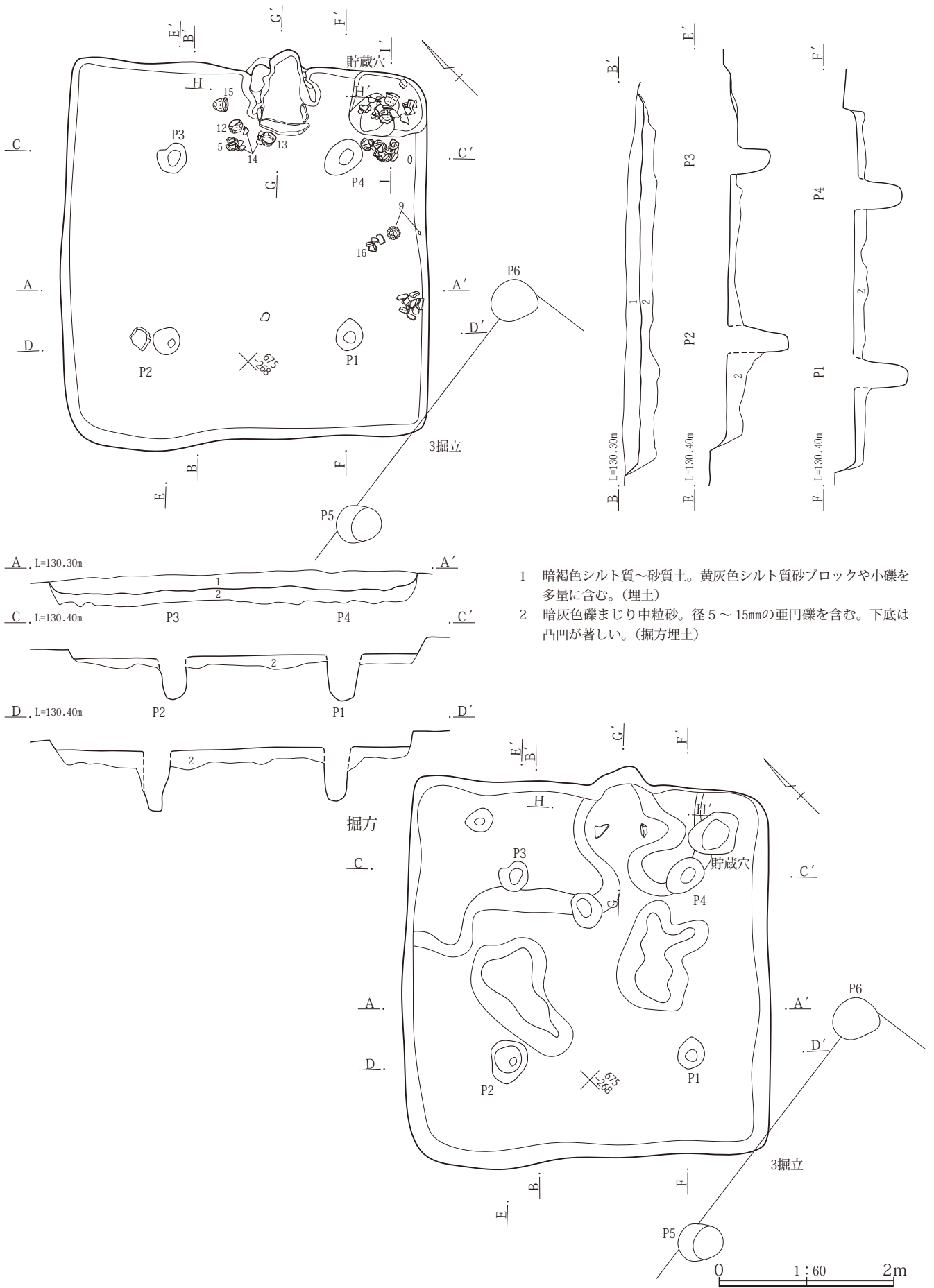
ピット3は直径0.34m、深さ0.47m。

ピット4は長径0.48m、短径0.34m、深さ0.52m。

特徴 床面から多くの遺物が出土した住居で、土器などの遺物はカマドや貯蔵穴周辺に多くみられる。南東壁際

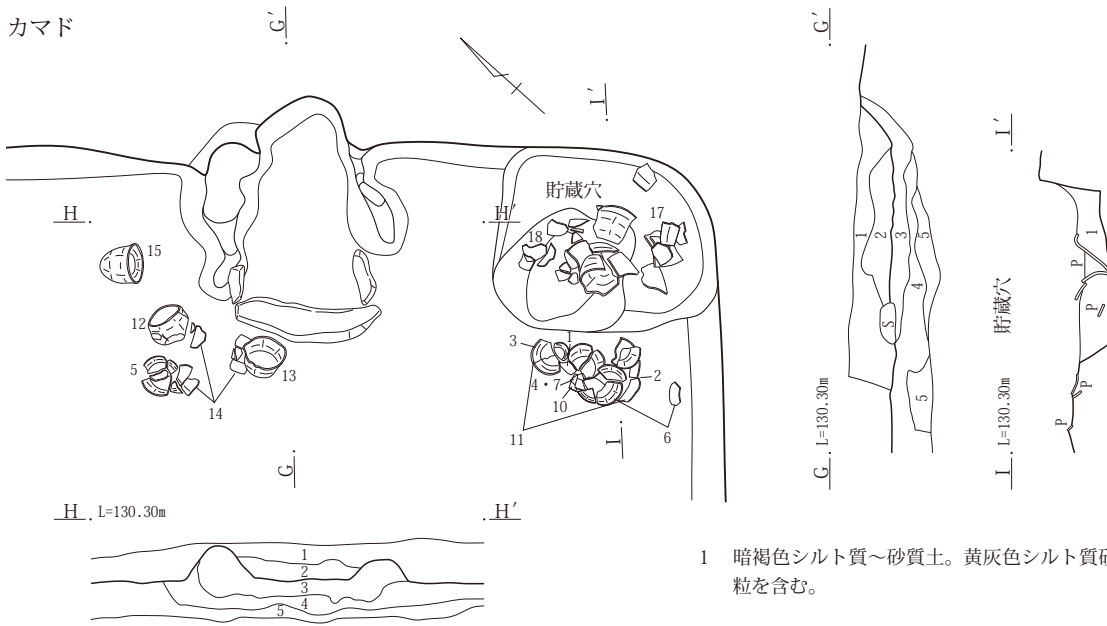
の床面には長径が0.12～0.16mの結晶片岩の扁平な垂円礫が5点出土した。これらの礫には加工痕が認められないがこも編み石として使用された可能性がある。

遺物 カマド左手前の床面及び床面付近から土師器杯(5)、鉢(12・13・14)、有孔鉢(15)が出土した。これらの遺物はカマド上部に置かれたものが移動した可能性がある。南東壁の床面付近からは土師器杯(9)や須恵器杯蓋(16)が出土し、杯蓋はTK209の時期に相当する可能性



第74図 31号竪穴住居

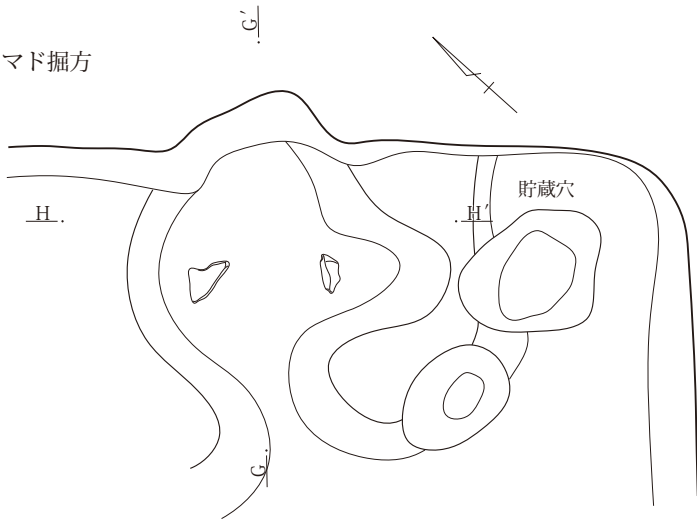
カマド



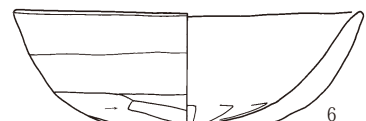
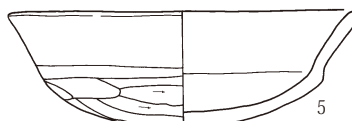
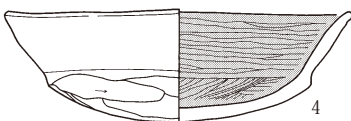
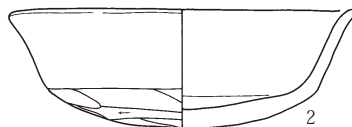
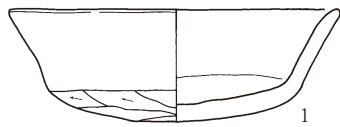
1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。焼土粒を含む。

- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土粒を含む。(1～2は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や粘土ブロックを含む。
- 3 灰褐色焼土まじり中粒砂。礫まじりで径10mmの焼土ブロックを含む。(3～5は掘方埋土)
- 4 暗灰色礫まじり粗粒砂。
- 5 黄灰～暗灰色中粒砂。径5～10mmの垂円礫を含む。

カマド掘方

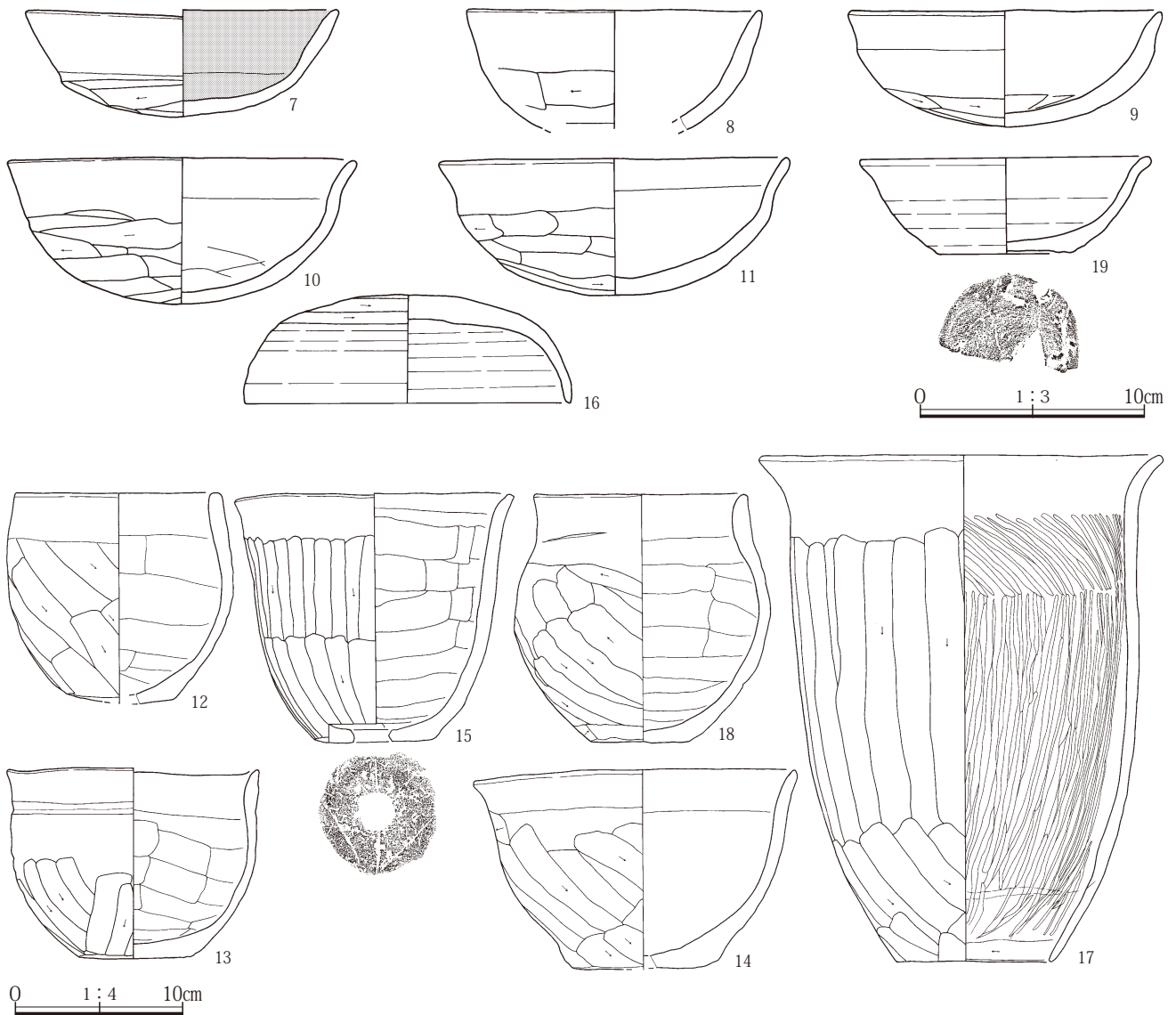


0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第75図 31号竪穴住居と出土遺物



第76図 31号竪穴住居の出土遺物

がある。

時代 古墳時代6世紀後半。

32号竪穴住居(第77図、PL.21-3～21-5・60、222頁)

位置 北部東壁際。

座標 X=24755～24761 Y=-70294～-70295

主軸方位 N89° E

重複 なし。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、方形を呈するが東側の大部分は調査区外にある。長径は5.80m、検出した最大の短径1.34m+、床面までの深さ0.28m、掘り方までの深さ0.40m、検出された最大の面積6.22㎡である。

埋土 東壁際の断面観察では、表土と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、均質である。

床面 床面は暗灰色砂まじりシルト質土を貼って構築し平坦である。

掘り方 掘り方と床面の間は0.03～0.10mで、中央部が浅く窪むが全体に平坦である。

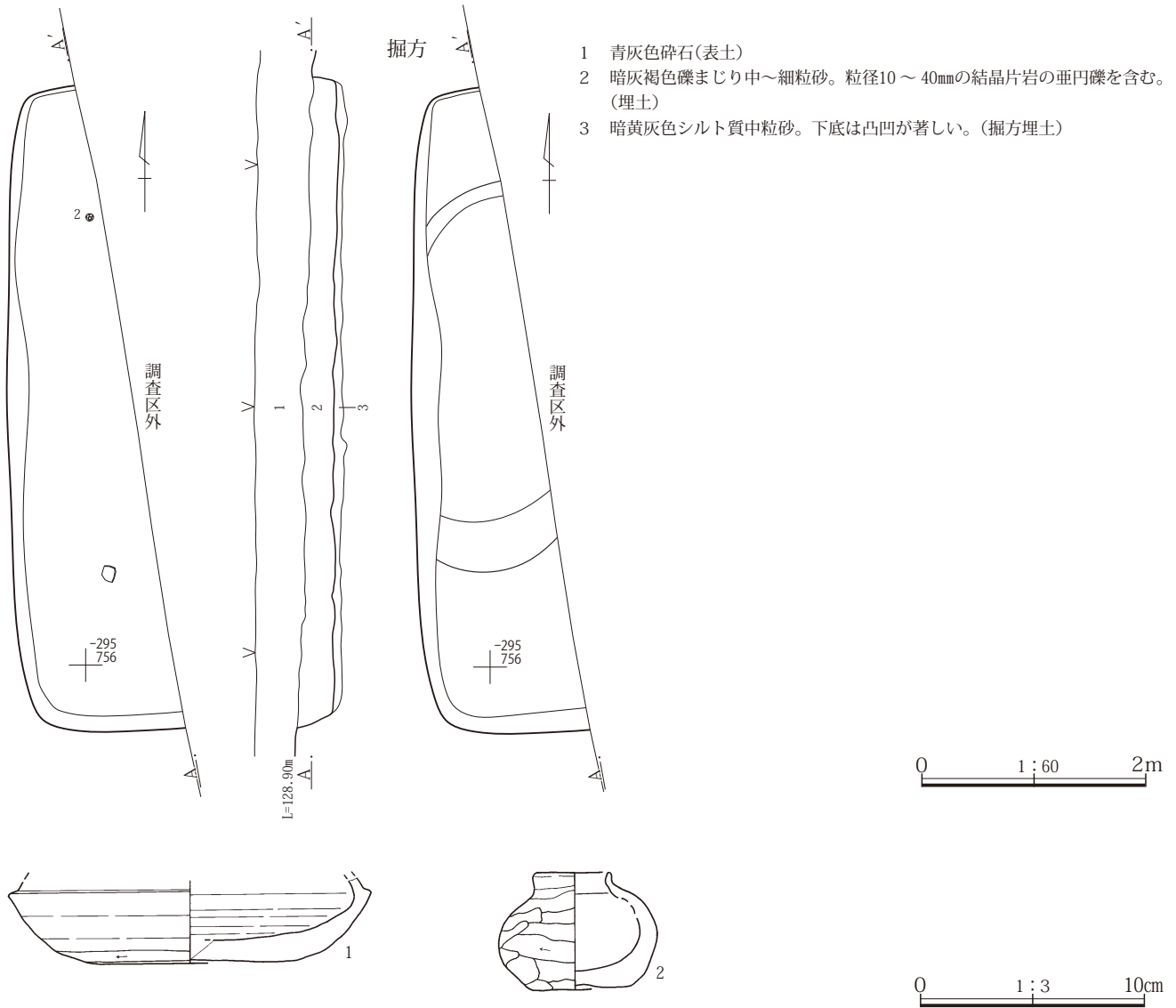
カマド カマドは検出できなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出できなかった。柱穴は調査区外に存在する可能性がある。

特徴 西側壁際のみ検出された浅い竪穴遺構である。床面が平坦で明瞭なことから竪穴住居と考えた。

遺物 埋土から須恵器杯身(1)の破片が、床面から土師器小型壺(2)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。



第77図 32号竪穴住居と出土遺物

33号竪穴住居(第78図、PL.21-6～21-8・60、222・223頁)

位置 北部西壁際。

座標 X=24766～24772 Y=-70303～-70306

主軸方位 不明

重複 1号溝に切られる。

形状と規模 北北西方向に長軸を有し、方形を呈するが竪穴住居の北西側の大部分は調査区外に、南東隅は1号溝により失われている。推定される最大の長径は4.86m、最大の短径4.38m+、床面までの深さ0.46m、掘方までの深さ0.54m、検出された面積は11.14㎡+である。

埋土 西壁際での断面観察では、表土及び1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、竪穴の北部は1層に相当する浅間Bテフラがまじる暗灰色砂質土が堆積している。

床面 暗黄灰色礫まじり砂で構築している。

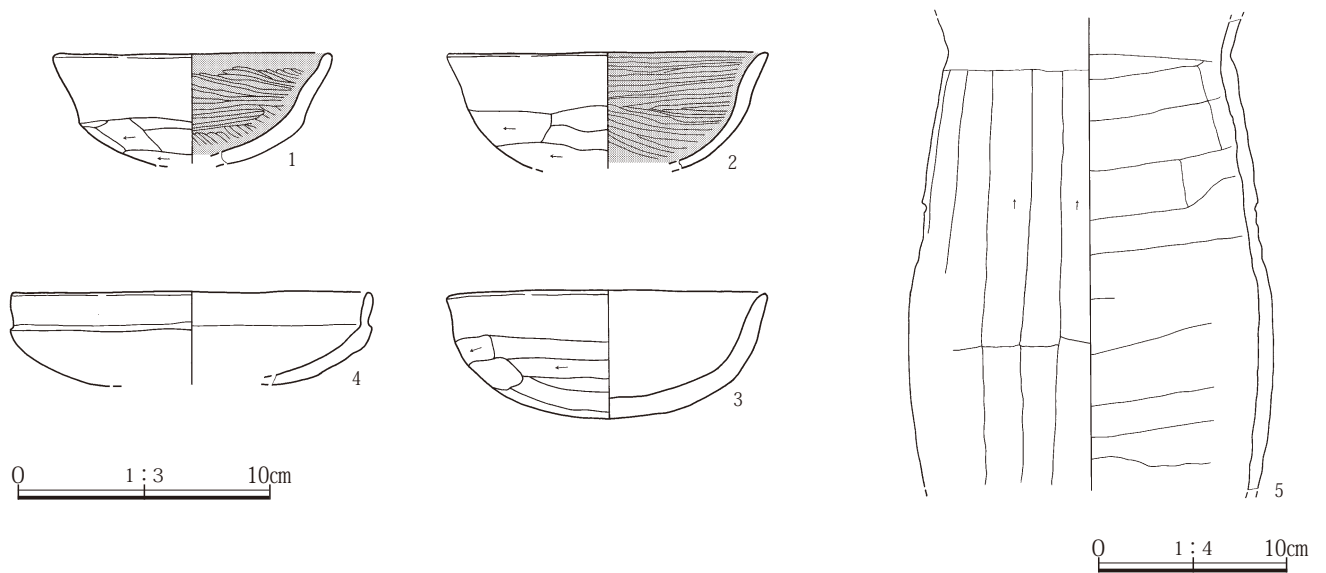
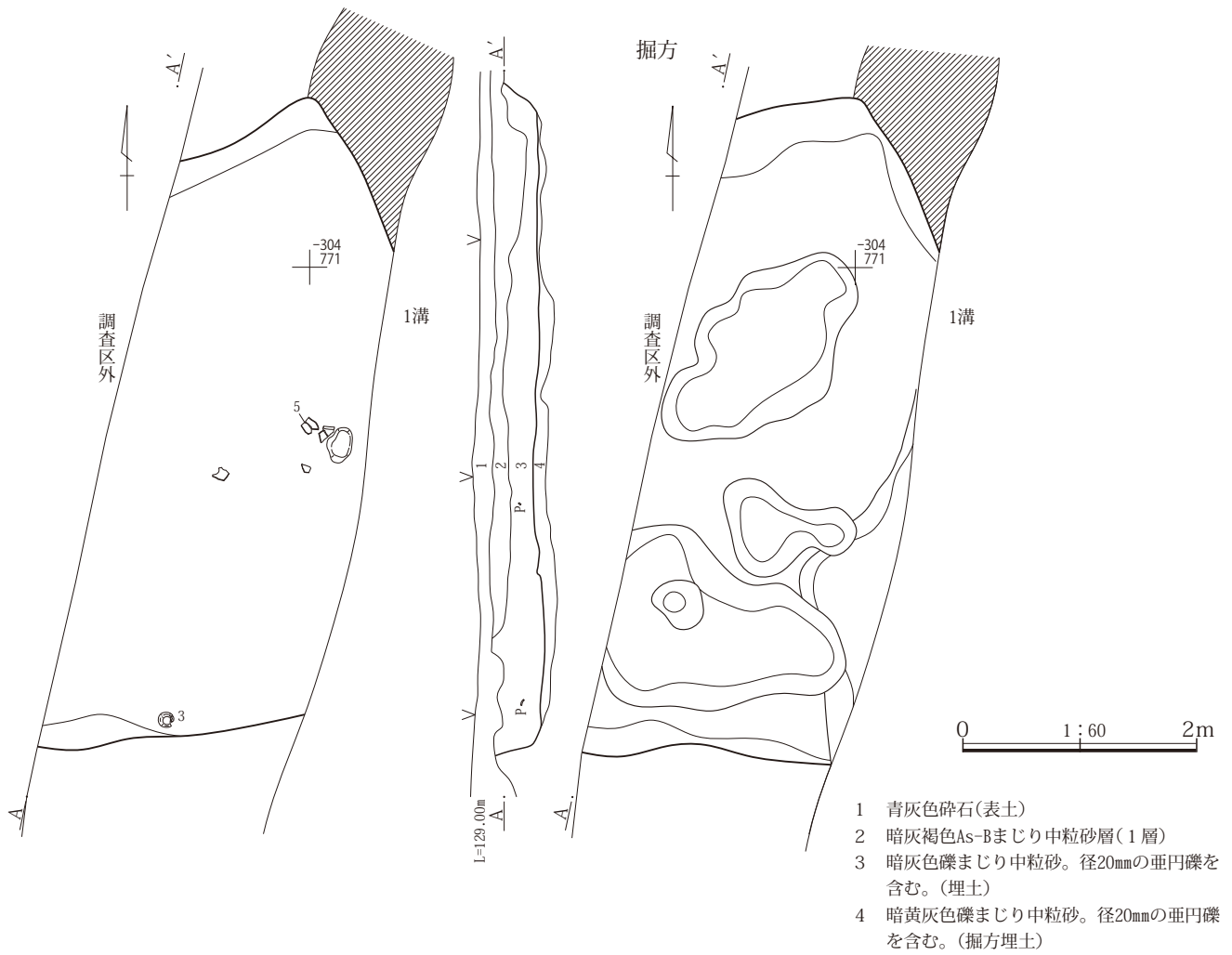
掘方 掘方と床面の間は0.02～0.14mで、浅い窪みが広がり不定形のピット状の窪みがみられる。

カマド 検出面にはみられない。竪穴住居の大部分は調査区外にあり、一部は1号溝で失われている。

柱穴 掘方でピットが検出されたが、形状や位置などから柱穴の可能性は低い。一辺が5mに及ぶ竪穴住居であり、支柱穴は存在したはずだが掘方の調査でも検出できなかった。これは支柱の柱穴底が4層の砂礫層で止められた可能性がある。

遺物 床面付近から土師器杯(3)や甕(5)が出土し、埋土からは杯(1・2・4)が出土した。

時代 古墳時代6世紀中頃。



第78図 33号竪穴住居と出土遺物

34号竪穴住居(第79～82図、PL.22-1～22-4・60、223頁)

位置 中央部南寄り。

座標 X=24676～24684 Y=-70276～-70283

主軸方位 N76° E

重複 40号・47号・64号竪穴住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形に近い台形を呈する。長径は6.68m、短径5.70m、床面までの深さ0.36m、掘方までの深さ0.54m、面積40.97㎡である。

埋土 西壁から暗褐色シルト質～砂質土、黒褐色シルト質～砂質土の順に緩く傾斜しながら成層し、北と南壁際の基底には暗褐色シルト質砂層が断片的に堆積している。

床面 黄灰色砂ブロックを含む暗黄灰色砂質土で構築しており平坦である。床面の東壁際にはピット5が位置し、掘方も東壁よりさらに奥に広がるが、遺構平面図は調査段階のものを示した。

掘方 掘方と床面の間は0.08～0.29mで、全体に浅い窪みで凹凸を呈し南東側がやや高い。北西中央部には不定形の床下土坑がみられ、黄灰色シルト質砂のブロックを含む暗褐色シルト質土で埋められている。

周溝 西壁南西寄りの壁際に位置する。最大の上幅は0.22m、最小の底幅0.10m、深さ約0.06mである。

カマド 西壁中央の南寄りに位置する。直径0.01～0.03m大の焼土のブロックが多くまじる灰褐色シルト質土のブロック土が長径2.64m、短径1.26mの範囲に分布する。これらは破損したカマドの燃焼部や袖のブロックが堆積したものと考えられる。煙道は黄灰色シルト質土を床に貼って構築しており、トンネルの表面は焼土化している。燃焼部との境界付近の天井部分は失われているが、残存状態は良好である。煙道の口は直径0.25m、長さは0.76m+である。

貯蔵穴 貯蔵穴は西壁際南西隅に位置する土坑1及び南東隅の壁際に位置する土坑2である。土坑1は竪穴の壁際に沿った楕円形を呈し、長径は1.09m、短径0.62m、深さ0.28m。土坑1の貯蔵穴上の埋土から土師器杯(13)や須恵器瓶(22)が出土した。これらは貯蔵穴が完全に埋没した後に床面の上位10cmほどに堆積した遺物である。土坑2は楕円形を呈し、長径は0.72m、短径0.54m、深さ0.21mである。

柱穴 床面では柱穴と思われるピット1・2・3を確認

し、掘方ではピット4・5・6を検出した。これらのピットの計測値を第6表に示す。ピットの配置と竪穴住居の規模から推定して、廃絶時における4本の支柱に相当する柱穴はピット1・2・4・5であると思われる。柱間はピット1・5が3.72m、ピット2・4が3.58m、ピット4・5が3.50m、ピット1・2が3.45mである。これらは断面形状が円筒形を呈する柱穴である。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。ピット1は長径0.54m、短径0.49m、深さ0.42m。ピット2は長径0.74m、短径0.60m、深さ0.42m。ピット4は長径0.63m、短径0.61m、深さ0.33m。ピット5は長径0.58m、短径0.46m、深さ0.38m。

第6表 34号竪穴住居で検出されたピットの計測値
単位(m)

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6
長径(直径)	0.54	0.74	0.54	0.63	0.58	0.56
短径	0.49	0.60	0.48	0.61	0.46	0.46
深さ	0.42	0.42	0.47	0.33	0.38	0.38

遺物 カマド周囲の床面及び床面付近から土師器杯(8・10・12)や須恵器杯蓋(18)が、床面から杯(11)、甑(24)の破片が出土し、床面付近からは土師器杯(1・4)、甕(23)が出土した。またカマド煙道の底から敲石(26)が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀第3四半期。

35号竪穴住居(第84図、PL.22-5～22-8、223・224頁)

位置 中央部南東寄り。

座標 X=24670～24673 Y=-70272～-70276

主軸方位 N25° W

重複 36号竪穴住居を切る。

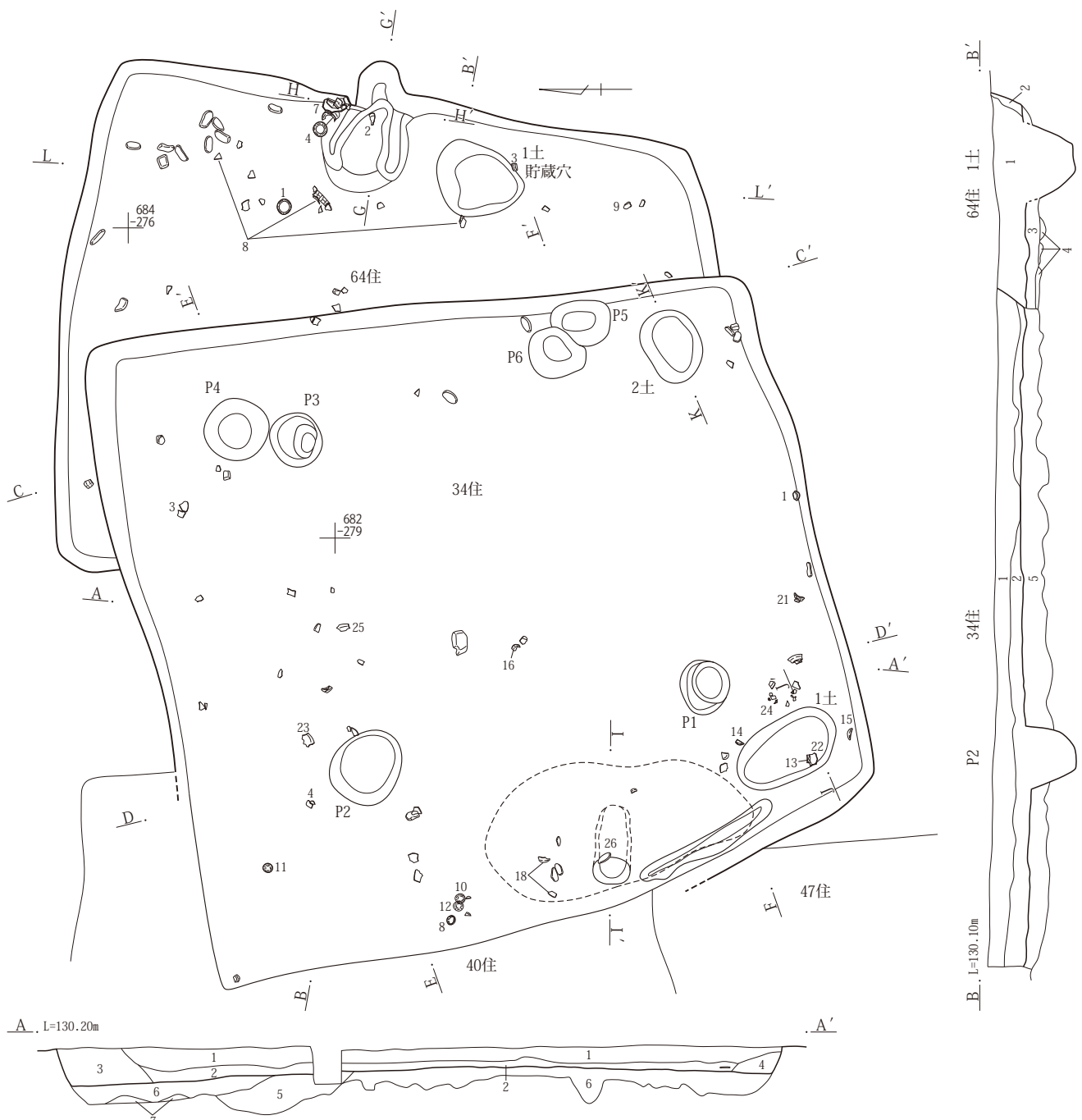
形状と規模 東北東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.40m、短径2.64m、床面までの深さ0.12m、掘方までの深さ0.44m、面積は8.31㎡である。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土からなり均質である。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており、床面は明瞭かつ平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.05～0.30mで、全体に不定形の凹凸を呈する谷状の窪みである。

カマド 南東隅に位置する。カマド燃焼部や袖は不明瞭

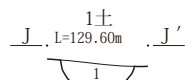


34号竪穴住居(A・B断面)

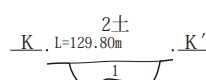
- 1 黒褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。(1～4は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土粒を含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や炭化物を多量に含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土を含む
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロック含むシルト質細～中粒砂優勢。塊状を呈する。(5～7は掘方埋土)
- 6 暗黄灰色中粒砂。径10mmの焼土や粒径5～10mmの黄灰中粒砂ブロックを多く含む。
- 7 暗灰色礫まじり砂。

64号竪穴住居(B断面)

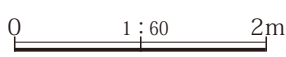
- 1 暗褐色礫まじり中粒砂。径10～20mmの亜円礫を含む。(1～2は埋土)
- 2 黄褐色礫まじり中粒砂。
- 3 暗灰色シルト質～砂質土。(3～4は掘方埋土)
- 4 暗灰色中粒砂。黄灰色砂ブロックまじり。



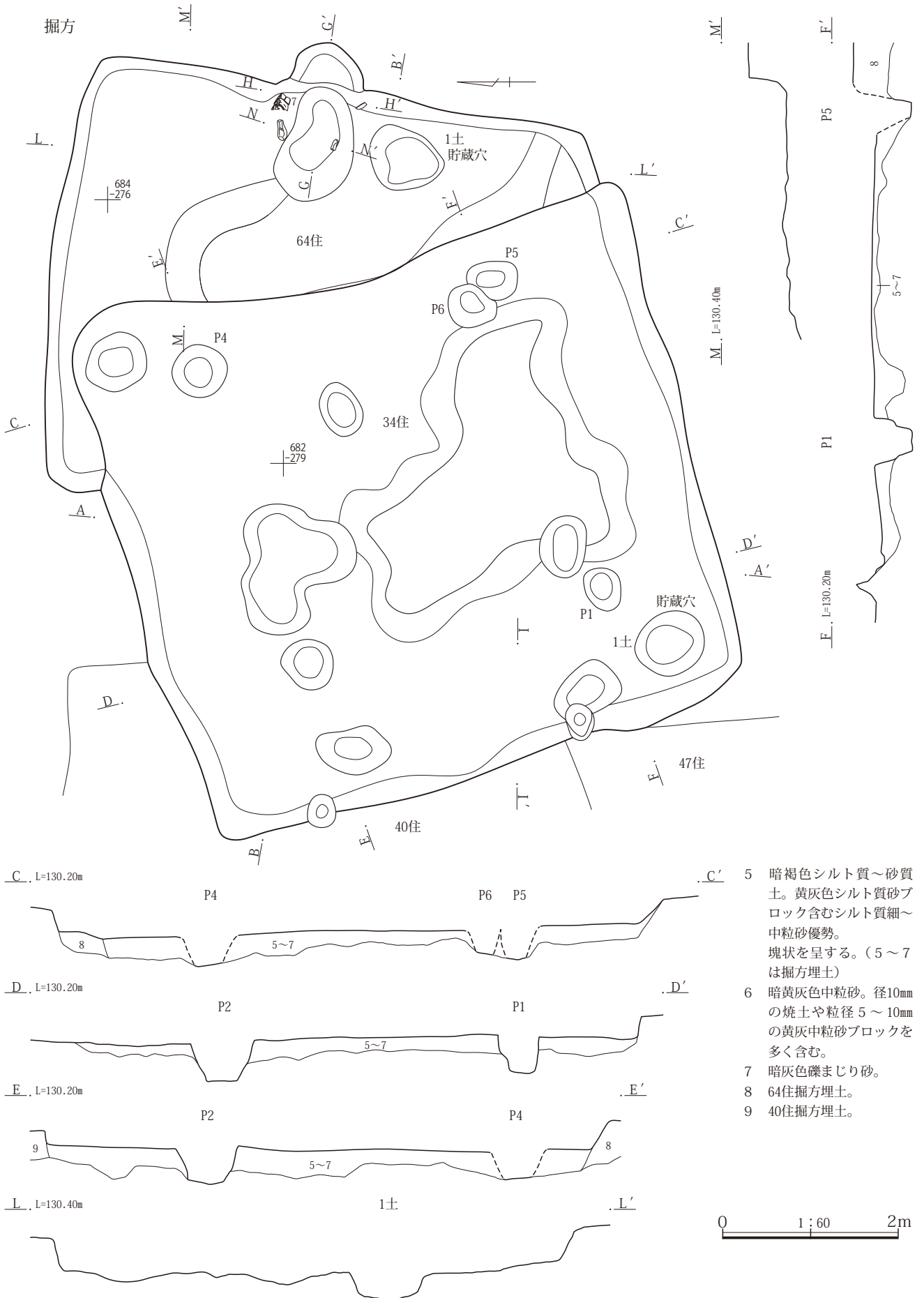
- 1 灰褐色シルト中粒砂。径10mmの焼土ブロックを含む。



- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを多く含む。

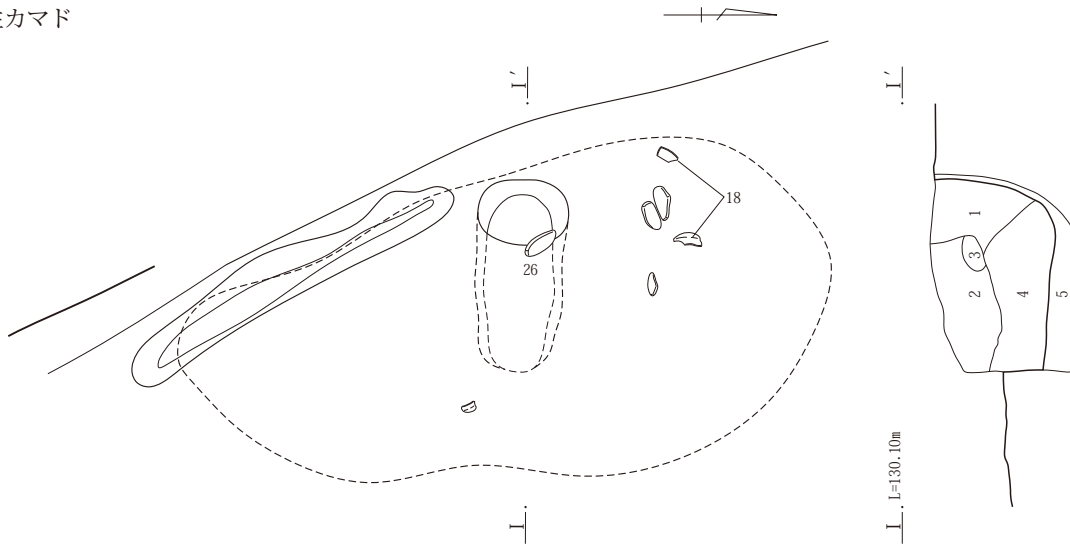


第79図 34・64号竪穴住居(1)



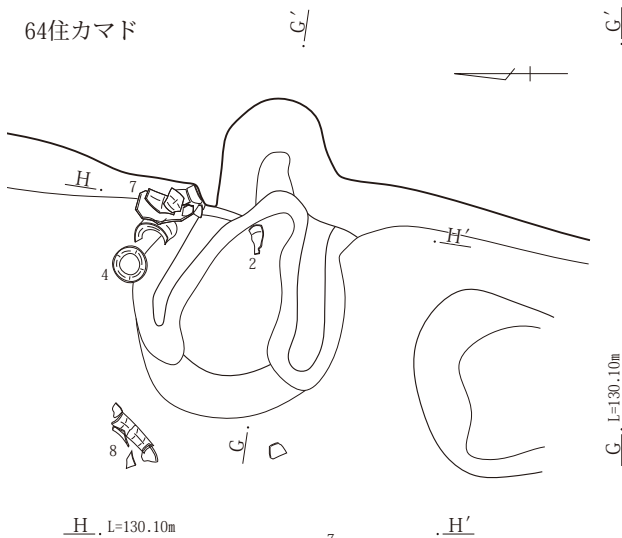
第80図 34・64号竪穴住居(2)

34住カマド

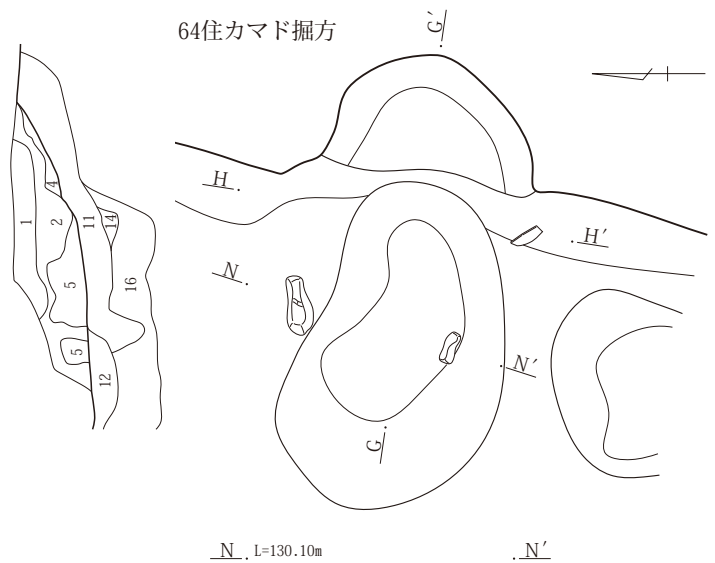


- 1 暗灰色砂質土。焼土粒を少量含む。(埋土)
- 2 灰～灰褐色シルト質粘土ブロック。径10mm大の粘土ブロックの集合体。(煙道天井部の移動ブロック)
- 3 赤褐色シルト質粘土。焼土化が著しい。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土や粘土ブロックを含む。(煙道部分の埋めた埋土)
- 5 黄灰色シルト質砂ブロック。(煙道下部が崩落して破壊されブロック状を呈し軟弱)

64住カマド



64住カマド掘方

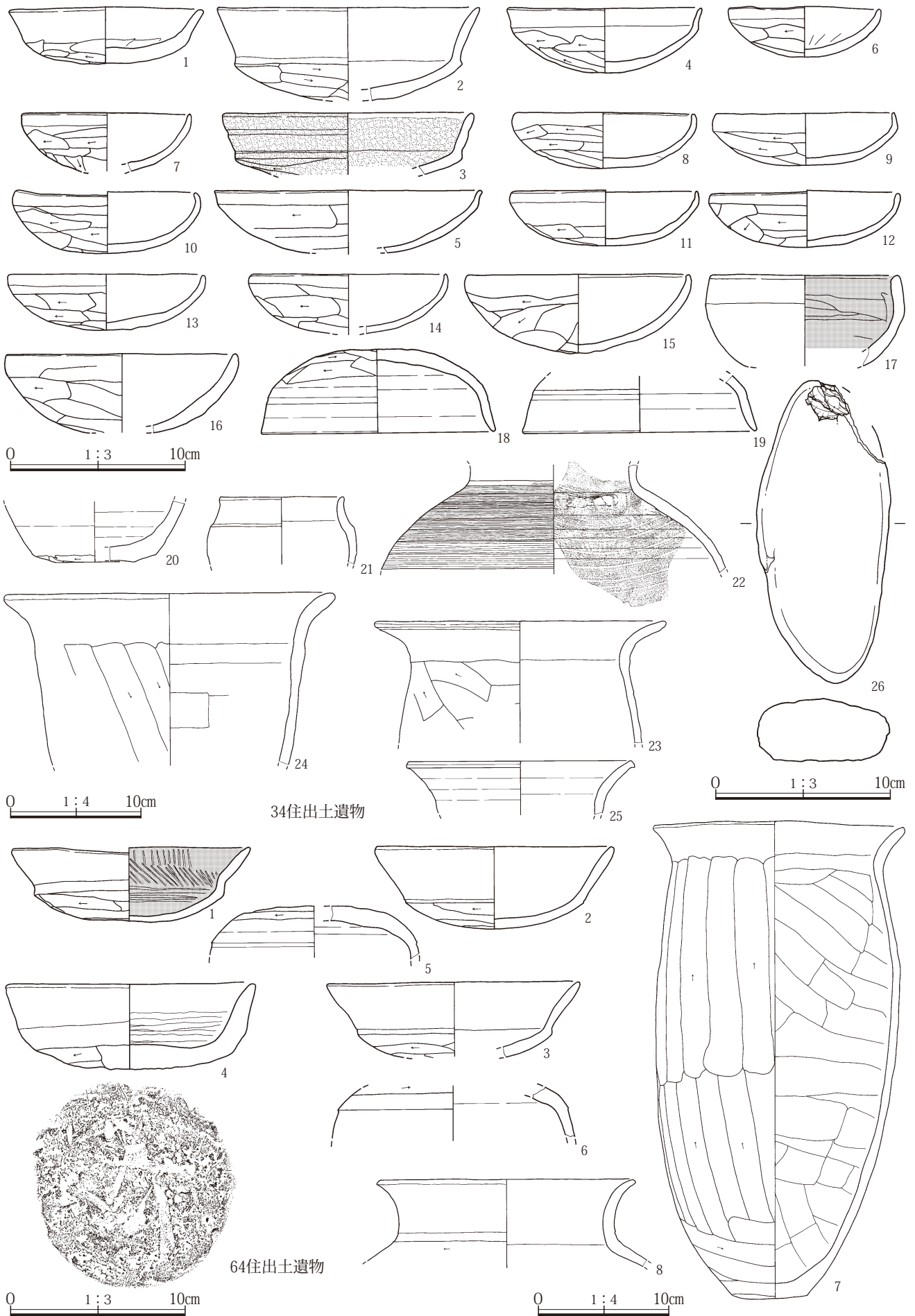


- 1 暗灰色焼土まじり細～中粒砂。粒径5mm大の焼土粒を含む。(1～10は埋土)
- 2 暗黄灰色焼土まじり細粒砂。焼土を多く含む。
- 3 黄灰色焼土まじり中粒砂。
- 4 橙褐色焼土ブロックを多く含む中粒砂。
- 5 黄灰色シルト質細粒砂。ブロック状を呈する。
- 6 暗灰色シルト質中粒砂。(64号竪穴住居埋土)
- 7 黄灰色シルト質細粒砂。焼土まじり。
- 8 暗灰色シルト混じり中粒砂。

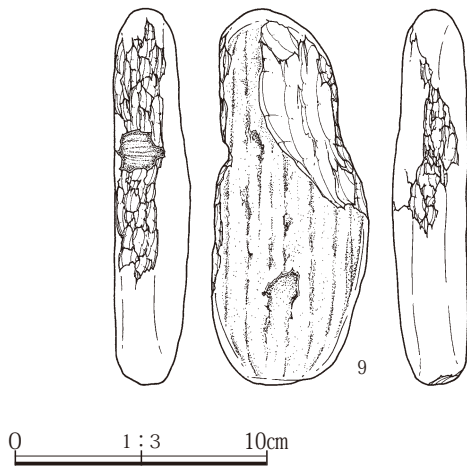
- 9 黄灰色シルト質中粒砂。
- 10 暗灰色シルト質～砂質土。
- 11 橙色焼土～焼土ブロック多く含む中粒砂。焼土粒の粒径は5～10mm。(11～16は掘方埋土)
- 12 黄灰褐色シルト質～砂質土。焼土まじり中粒砂優勢。
- 13 黄灰色シルト質細粒砂。(袖の構築材)
- 14 黒～暗灰色中粒砂。ブロック状を呈する。
- 15 黄灰色シルト質細粒砂。(袖の移動ブロック)
- 16 黒～暗灰色中粒砂。



第81図 34・64号竪穴住居(3)



第82図 34・64号竪穴住居の出土遺物



第83図 64号竪穴住居の出土遺物

で使用面は失われているが、カマドは4層の礫まじり砂層を掘り込んで、暗褐色シルト質土を貼って構築している。埋土から焼土のブロックを多く含む暗褐色シルト質砂がブロック状に認められ、掘方との境界に使用面を推定した。カマドの掘方から右袖部に長径0.24m、短径0.20m、深さ0.12mのピットを検出した。これは構築材の石材を埋め込んだ掘方の可能性がある。

カマドの幅は0.70m、長さ0.60m。

貯蔵穴や柱穴 床面、掘方の調査で貯蔵穴は検出されなかった。掘方からピット1を検出したが、単独のピットであり柱穴とは認定できない。

ピット1は長径0.33m、短径0.28m、深さ0.18m。

特徴 一辺が3m程の小規模な竪穴住居であり、床面で支柱に相当する柱穴が認められない構造を持つ竪穴住居であると想定される。

遺物 床面付近から土師器杯(2)、甕(4)の破片が出土し、埋土から杯(1・3)が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀第3四半期。

36号竪穴住居(第85図、PL.23-1～23-2)

位置 中央部南東寄り。

座標 X=24670～24672 Y=-70270～-70273

主軸方位 N32° W

重複 35号竪穴住居に切られる。

形状と規模 北西隅を35号竪穴住居により失われ、北西方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居である。長径は2.40m、短径2.24m、床面までの深さ0.16m、掘方までの深さ0.38m、残存する面積は4.53㎡

十である。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土からなる。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており、床面は平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.24mで、全体に不定形の凹凸を呈する窪みが認められる。

カマド 南東隅の位置にカマドの痕跡を認めた。カマドはほとんどが失われているが、カマドは4層の礫まじり砂層を掘り込んで、暗褐色礫まじり砂で構築している。埋土から焼土のブロックを含む灰褐色シルト質砂がブロック状に認められカマドと認定した。

カマドの幅や長さは不明である。

貯蔵穴や柱穴 床面、掘方の調査で貯蔵穴やピットは検出されなかった。

特徴 35号竪穴住居と同様に小規模な竪穴住居であり、床面に支柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 なし。

時代 7世紀の35号竪穴住居に切られることから、それ以前である。竪穴住居の規模や形状が35号竪穴住居に似ることから同時代の可能性がある。

37号竪穴住居(第86・87図、PL.23-3～23-6・60、224頁)

位置 北部中央。

座標 X=24751～24756 Y=-70297～-70302

主軸方位 N84° E

重複 6号溝に切られているが、竪穴住居の埋土と溝の埋土の境界は極めて不明瞭である。

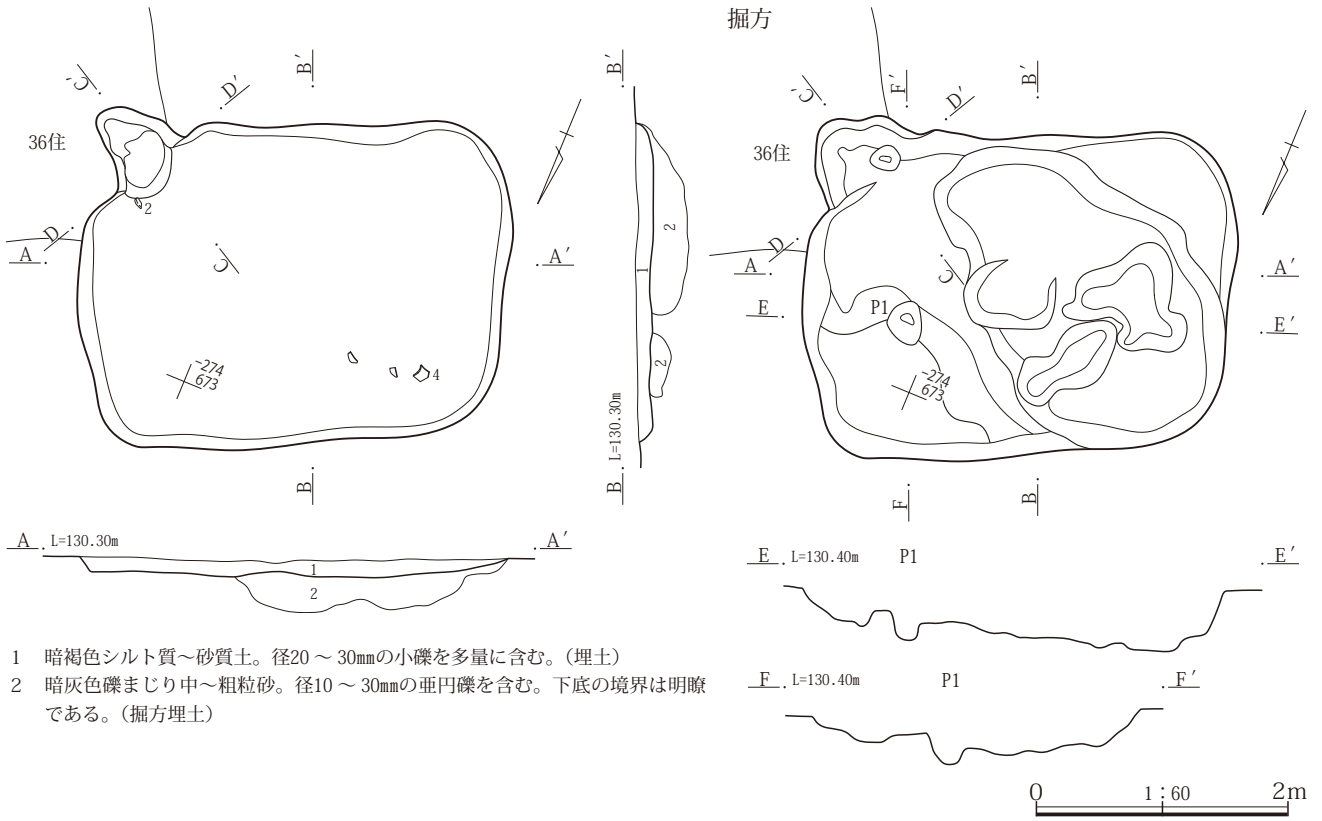
形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する。長径は4.34m、短径4.16m、床面までの深さ0.18m、掘方までの深さ0.26m、面積16.97㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。東壁付近には焼土まじりの砂ブロックが埋土中にみられ、これらはカマドの残骸と考えられる。

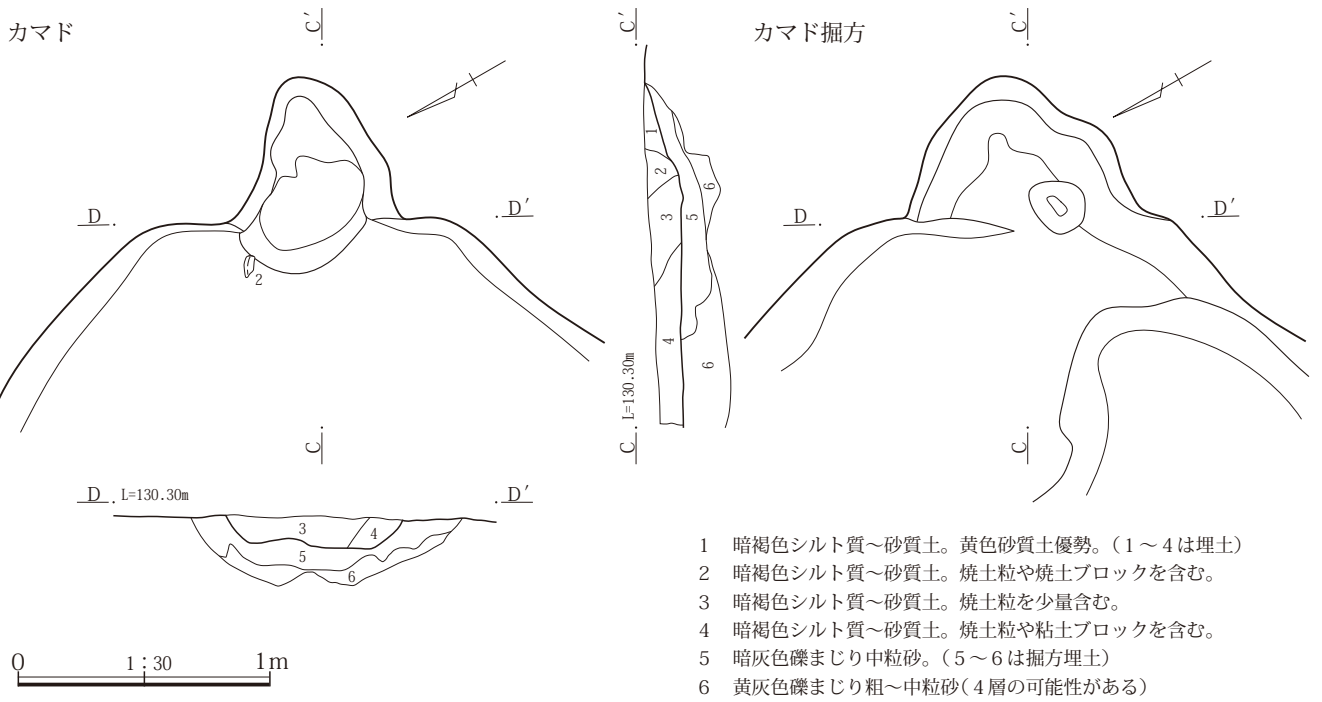
床面 黄灰～黒色砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.10mで、全体に浅い凹凸を呈し、壁際が1m程度の幅で溝状に窪み、相対的に中央部が方形を呈してやや高い。

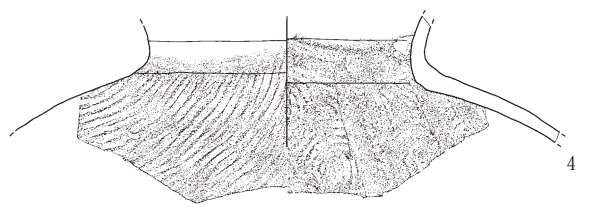
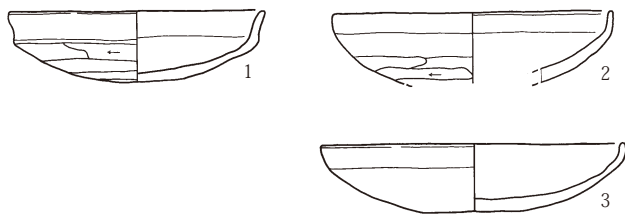
カマド 東壁の中央に位置し、カマドの残骸と思われる長径0.53m、短径0.45mの焼土面を検出した。埋土の断



- 1 暗褐色シルト質～砂質土。径20～30mmの小礫を多量に含む。(埋土)
- 2 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。径10～30mmの亜円礫を含む。下底の境界は明瞭である。(掘方埋土)



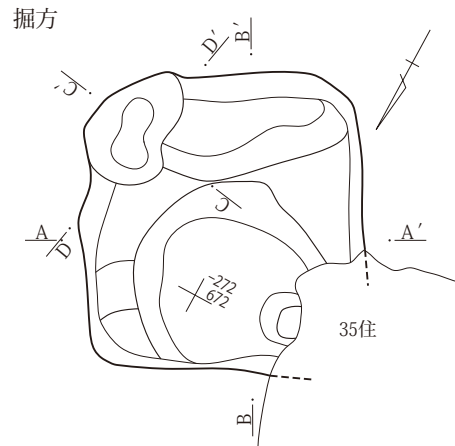
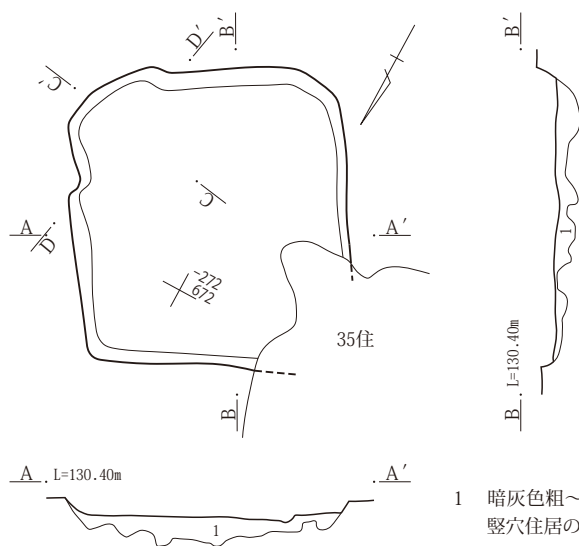
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄色砂質土優勢。(1～4は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や焼土ブロックを含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を少量含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や粘土ブロックを含む。
- 5 暗灰色礫まじり中粒砂。(5～6は掘方埋土)
- 6 黄灰色礫まじり粗～中粒砂(4層の可能性はある)



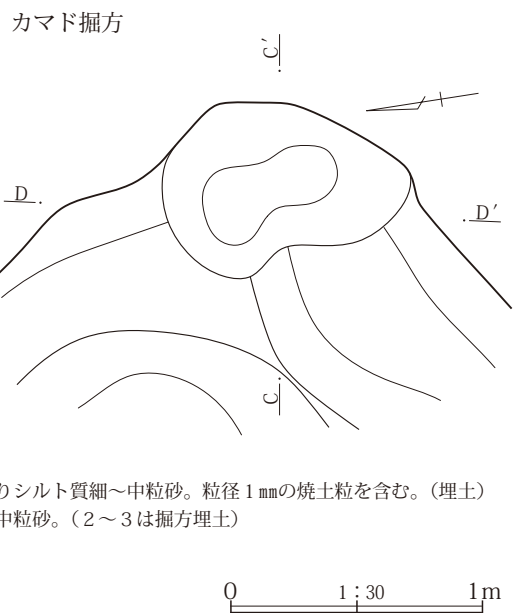
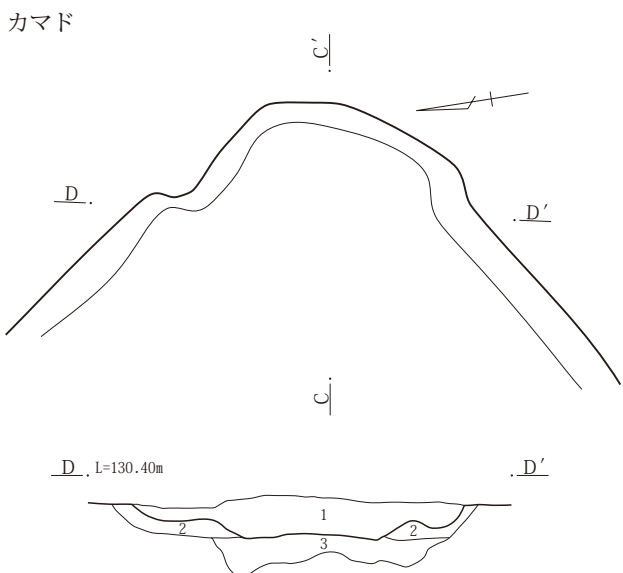
0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

第84図 35号竪穴住居と出土遺物



1 暗灰色粗～中粒砂。径10～30mmの垂円礫を含む。(掘方埋土)
竪穴住居の埋土は暗灰色砂質土で薄く、床面の清掃で消失した。



1 灰褐色焼土まじりシルト質細～中粒砂。粒径1mmの焼土粒を含む。(埋土)
2 暗灰色礫まじり中粒砂。(2～3は掘方埋土)
3 暗灰色粗粒砂。

第85図 36号竪穴住居

面で焼土を多く含む埋土や凝灰岩、泥岩のブロックが検出されており、カマドは東壁よりも手前に4層の灰褐色シルト質砂層を掘り込んで暗灰色砂で構築している可能性が高い。右袖下の掘方からは長径0.14mの凝灰岩質砂岩の垂角礫が立った状態で埋められており、袖部分のカマド構築材と考えられる。

カマドの幅や長さは不明である。

貯蔵穴 貯蔵穴は南東隅の北寄り壁際に位置する土坑1である。円形を呈し、長径は1.06m、短径0.92m、深さ0.46m。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方で柱穴であるピット1～4を検出した。柱間はピット1・2が1.95m、

ピット3・4が1.78m、ピット2・3が1.70m、ピット1・4が1.64mである。これらは断面形状が円筒形を呈する柱穴である。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.39m、短径0.34m、深さ0.50m。

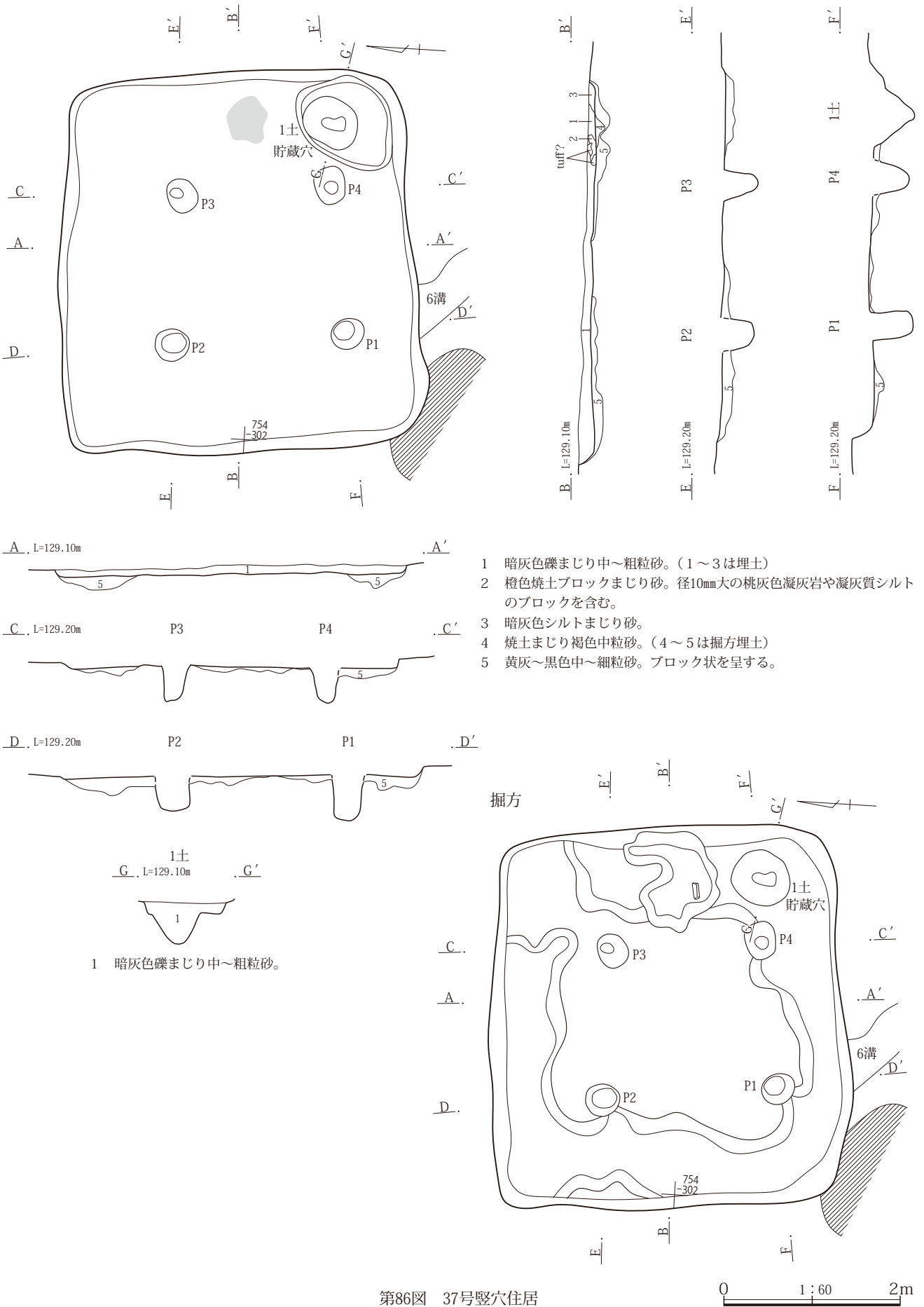
ピット2は長径0.40m、短径0.34m、深さ0.40m。

ピット3は直径0.39m、短径0.32m、深さ0.42m。

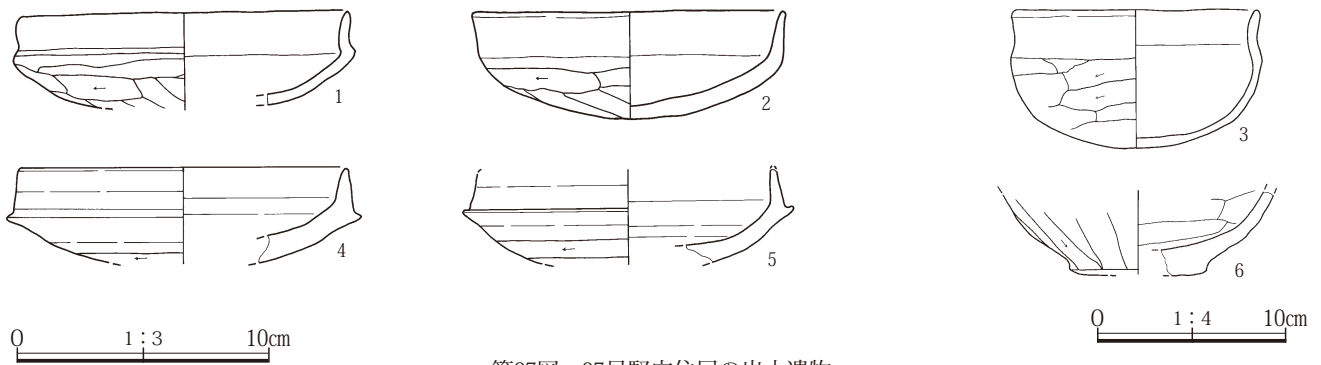
ピット4は長径0.40m、短径0.34m、深さ0.40m。

遺物 埋土から土師器杯(1・2)、鉢(3)や須恵器の杯身(4・5)が出土した。

時代 古墳時代6世紀中葉。



第86図 37号竪穴住居



第87図 37号竪穴住居の出土遺物

38号竪穴住居(第88・89・90図、PL.23-7～24-4・60・61、224頁)

位置 北部東壁際。

座標 X=24744～24749 Y=-70292～-70297

主軸方位 N83° W

重複 56号竪穴住居、6号溝に切られるが、竪穴住居の埋土と6号溝の埋土の境界は極めて不明瞭である。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈するが南西側の隅は調査区外にある。長径は4.30m、短径4.16m、床面までの深さ0.11m、掘方までの深さ0.37m、検出された最大の面積15.16㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。

床面 焼土や炭化物を含む暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.05～0.25mで、東及び南壁側が不定形の溝状に窪み、相対的に北西部がやや高い。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃烧部は東壁よりも手前から奥に4層の黄灰色砂層を掘り込んで灰褐色シルト質砂で構築している。煙道や燃烧部の使用面は大部分が失われているが、燃烧部の右壁の一部と右袖の残存状態は良好である。これとは逆にカマド左側の破損は著しい。このような遺構の保存状況の非対称性は、竪穴住居の廃絶により人為的にカマドを破壊した可能性を示唆する。カマド手前の床面には炭化物や灰が断片的に検出される。右袖は灰褐色シルトまじりの砂で構築され、燃烧部の壁際に長径0.20mの甕(12)が正位の状態で立てられた状態で埋められている。また燃烧部付近には崩落したカマドのブロックとともに須恵器杯蓋(7)土師器小型甕(11)、甕(13)や長径0.14mの垂円礫が出土した。前者は右袖の構築材、後者はカマド構築材が破壊され移動したものと考えられる。燃烧部右側の掘方からは長径が

0.23mの凝灰岩や結晶片岩の垂角礫が6点出土した。これらは左袖の基礎をなす構築材と考えられる。

カマドの幅は1.32m、長さ0.63m、焚口の幅0.60m。

貯蔵穴 貯蔵穴は南東隅の北寄り壁際に位置する土坑1である。歪んだ楕円形を呈し、長径は0.90m、短径0.66m、深さ0.77m。床面のカマド側から貯蔵穴の中央、ピット4にかけて完形の土器群が多く出土した。これらの遺物は床面及び床面付近から出土した土師器杯(1・2・3)、甕(10)、甕(14・15)と、貯蔵穴縁の床面から出土した甕(16)などで、貯蔵穴からは杯(4)、甕(17)が穴底から48cmの高さから出土した。これらの遺物は、穴底から出土した遺物が皆無であることから貯蔵穴が埋まる状況で周辺から移動して堆積したものと考えられる。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方で柱穴であるピット1～4を検出した。柱間はピット3・4が2.16m、ピット1・2が1.86m、ピット1・4が2.15m、ピット2・3が2.12mである。これらは断面形状が円筒～U字形を呈する柱穴である。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.41m、短径0.36m、深さ0.65m。

ピット2は長径0.38m、短径0.32m、深さ0.66m。

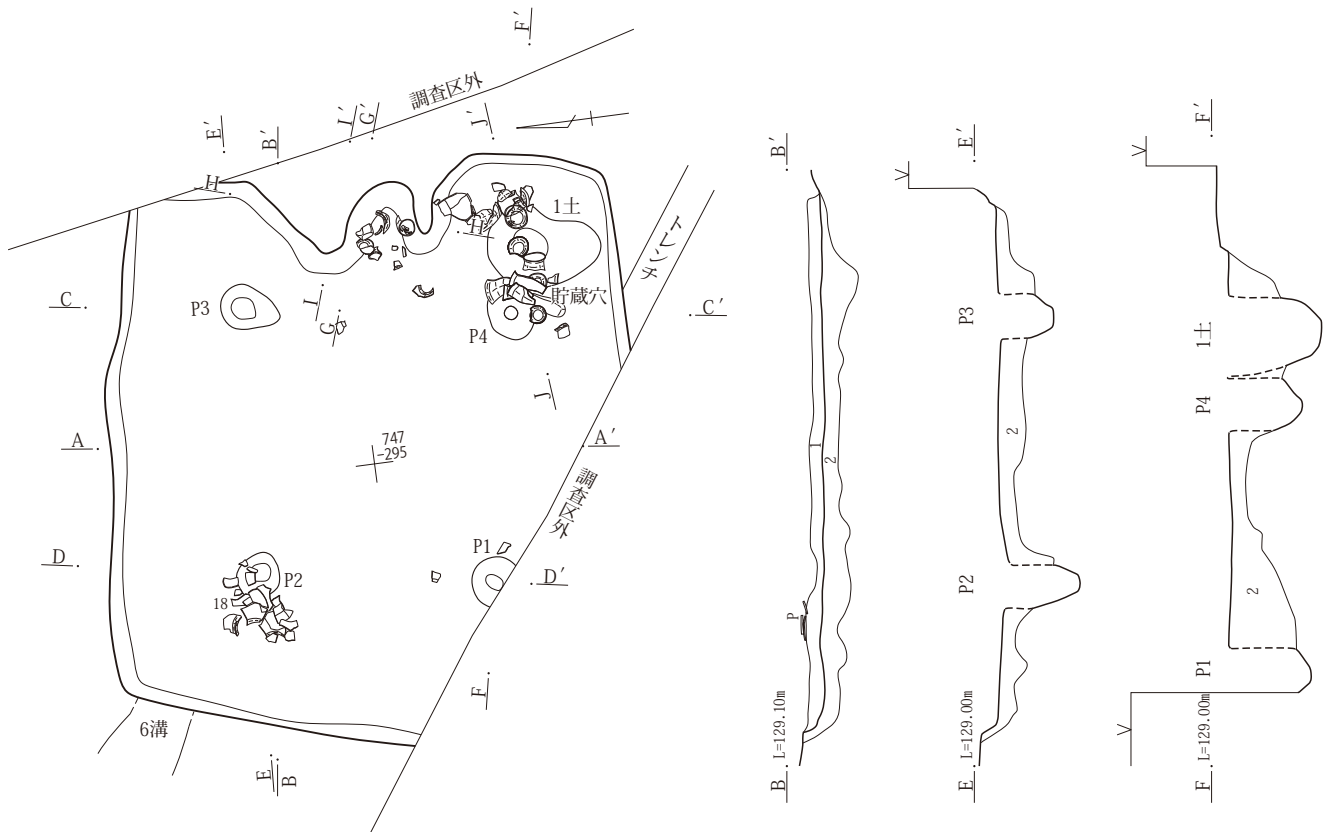
ピット3は直径0.49m、短径0.36m、深さ0.37m。

ピット4は長径0.52m、短径0.39m、深さ0.58m。

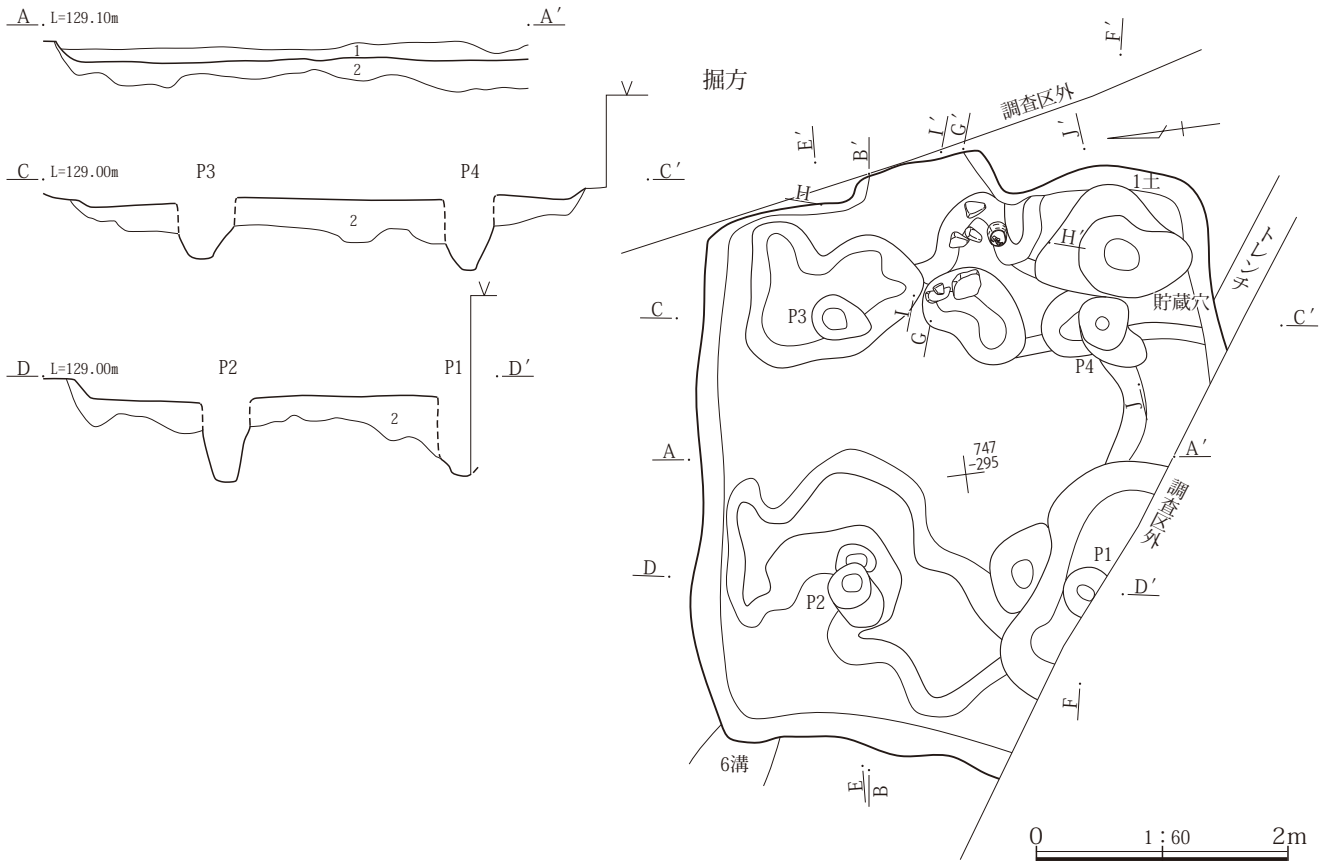
特徴 隣接する37号竪穴住居と規格や規模が近似している。

遺物 遺物はカマドや貯蔵穴周囲に集中して出土したがピット2周辺の床面付近からは土師器甕(18)が出土した。貯蔵穴上部から出土した土師器杯(4)は8世紀前半の年代を示し、混入した遺物である可能性が高い。

時代 古墳時代6世紀後半。

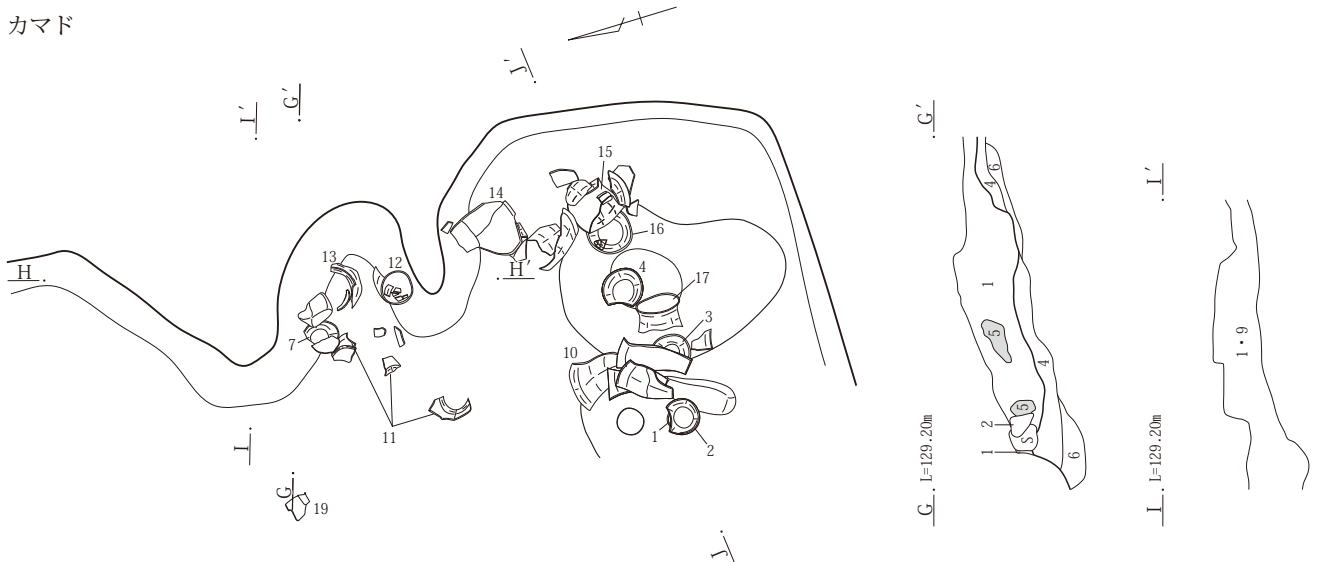


- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。径10～30mmの結晶片岩の垂円礫を含む。下底に径5～10mmの黄灰色中粒砂ブロックを含む。(埋土)
- 2 暗灰色礫まじり中粒砂。炭化物や焼土を含み、径10～30mmの垂円礫を含む。(掘方埋土)

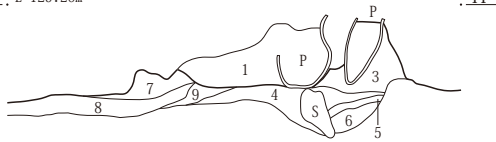


第88図 38号竪穴住居

カマド

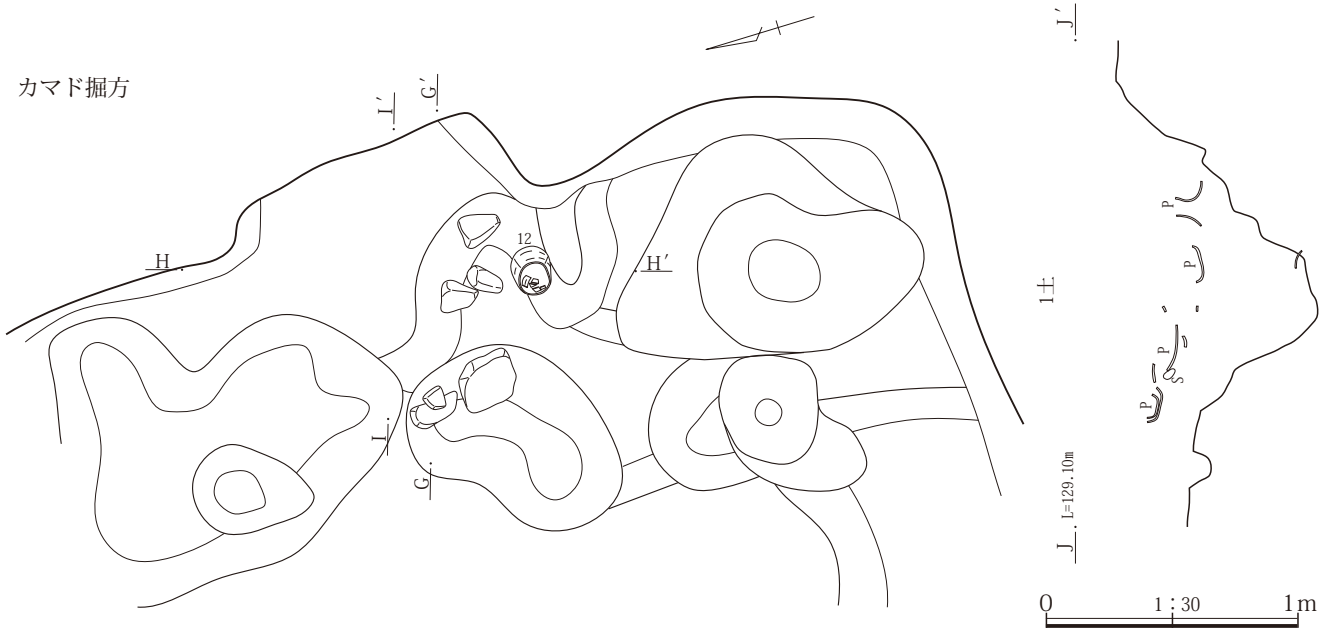


H, L=129.20m

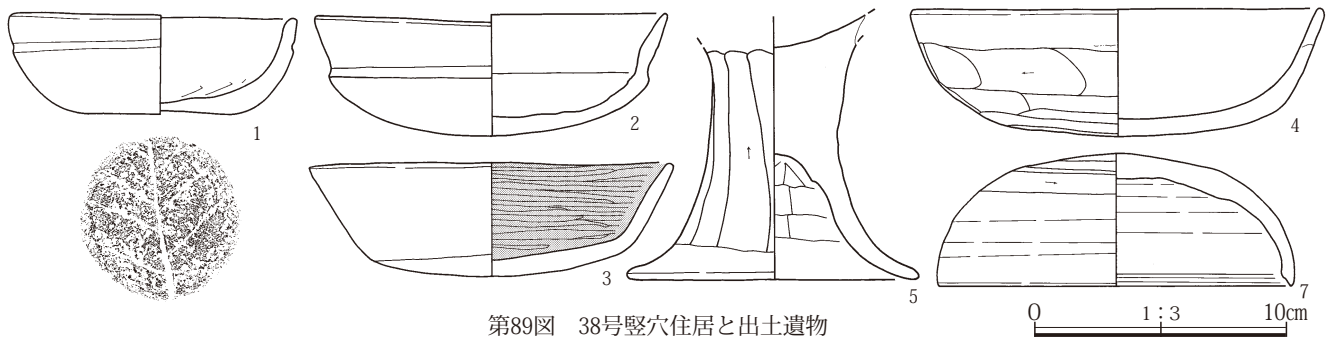


- 1 灰褐色焼土ブロックまじり中粒砂。径10～30mmの焼土ブロック。(1～2は埋土)
- 2 灰色凝灰岩礫。
- 3 灰褐色シルト質細～中粒砂。(3～9は掘方埋土。3は袖構築材)
- 4 灰褐色シルト質細粒砂。塊状無層理を呈する。
- 5 橙色中粒砂。焼土帯を呈する。
- 6 暗灰色中粒砂～細粒砂。塊状無層理を呈する。
- 7 黒色～暗灰色炭化物まじり火山灰土。(灰層?)
- 8 暗灰色中粒砂。炭化物まじり。
- 9 暗灰色中粒砂。

カマド掘方

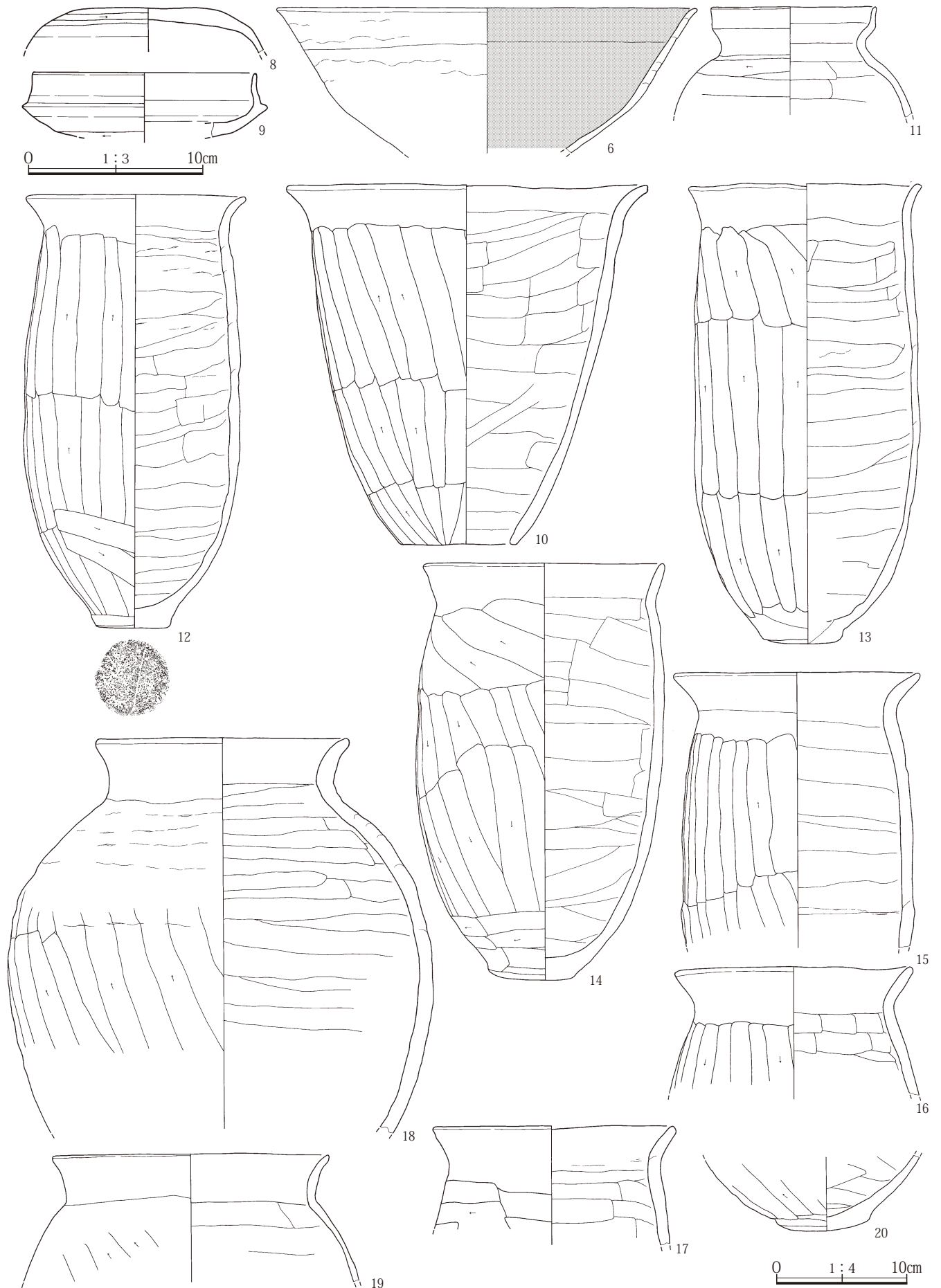


0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第89図 38号竪穴住居と出土遺物



第90図 38号竪穴住居の出土遺物

39号竪穴住居(第91・92図、PL.24-5～24-8・61、225頁)

位置 中央南西壁際。

座標 X=24677～24681 Y=-70283～-70288

主軸方位 N11° W

重複 26号竪穴住居、5号溝に切られる。40号・47号竪穴住居を切る。

形状と規模 東北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈するが南西隅は26号竪穴住居に切られて失われている。長径は4.08m、短径3.82m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.51m、残存する面積14.18㎡±である。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルトブロックを含む。北壁の基底と埋土の上層部は焼土や炭化物を含んでいる。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.03～0.19mで、ほぼ平坦であるが中央及び南壁側がやや高い。

カマド 北壁の北東角に位置する。カマドの燃焼部は北壁よりも手前に40号竪穴住居の埋土を掘り込んで、黄灰色シルト質砂で構築している。煙道は失われており、燃焼部の使用面と両袖が残存している。使用面には土師器甕(4)が出土したが、これらはカマド上部のブロックとともに移動して埋土に堆積した遺物である。

カマドの幅は0.76m、長さ0.86m、焚口の幅0.66m。

貯蔵穴 なし。

柱穴 床面で断面形状が円筒ないし浅い窪み状のピット1～6を検出した。39号竪穴住居の廃絶時における4本の主柱に相当する柱穴は、ピット2～5である。柱間はピット2・3が1.90m、ピット4・5が2.00m、ピット3・4が1.62m、ピット2・5が1.58mである。ピット1はピット5の建て替え前の柱穴である可能性がある。ピット6は浅い窪み状のピットであり、ピット3に切られている。

ピット1は長径0.40m、短径0.39m、深さ0.18m。

ピット2は長径0.49m、短径0.45m、深さ0.10m。

ピット3は直径0.78m、短径0.24m、深さ0.26m。

ピット4は長径0.56m、短径0.58m、深さ0.43m。

ピット5は長径0.58m、短径0.44m、深さ0.25m。

ピット6は長径0.67m、短径0.56m、深さ0.11m。

遺物 埋土から土師器杯(1・2)、鉢(3)が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀前半。

40号竪穴住居(第93・94図、PL.25-1～25-2・61、225頁)

位置 中央南西壁寄り。

座標 X=24678～24684 Y=-70280～-70286

主軸方位 N2° W

重複 34号・39号・47号竪穴住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈するが南西隅は39号竪穴住居に、南東隅から東壁の大部分を34号竪穴住居に切られて失われている。長径は6.67m、短径5.48m、床面までの深さ0.32m、掘方までの深さ0.43m、残存する面積26.79㎡±である。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルトブロックや焼土を含む。

床面 暗黄灰褐色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.05～0.11mで、ほぼ平坦である。

カマド 北壁の中央に位置する。カマドは北壁よりも手前の4層の砂礫層を掘り込んで、暗灰褐色シルト質砂で構築しているが、残存するものは掘方のみである。煙道、燃焼部、両袖部が失われ、埋土に黄褐色シルト質砂のブロックや焼土が検出された。カマドには土師器小型甕(1)や礫が出土したがブロックとともに移動して埋土に堆積した遺物である。

カマドの幅、長さは不明である。

貯蔵穴 掘方で検出したピット1は北壁際の中央東寄りに位置する。浅い楕円形を呈し長径0.95m、短径0.66m、深さ0.40m。カマドの位置から推定して貯蔵穴の可能性が高い。

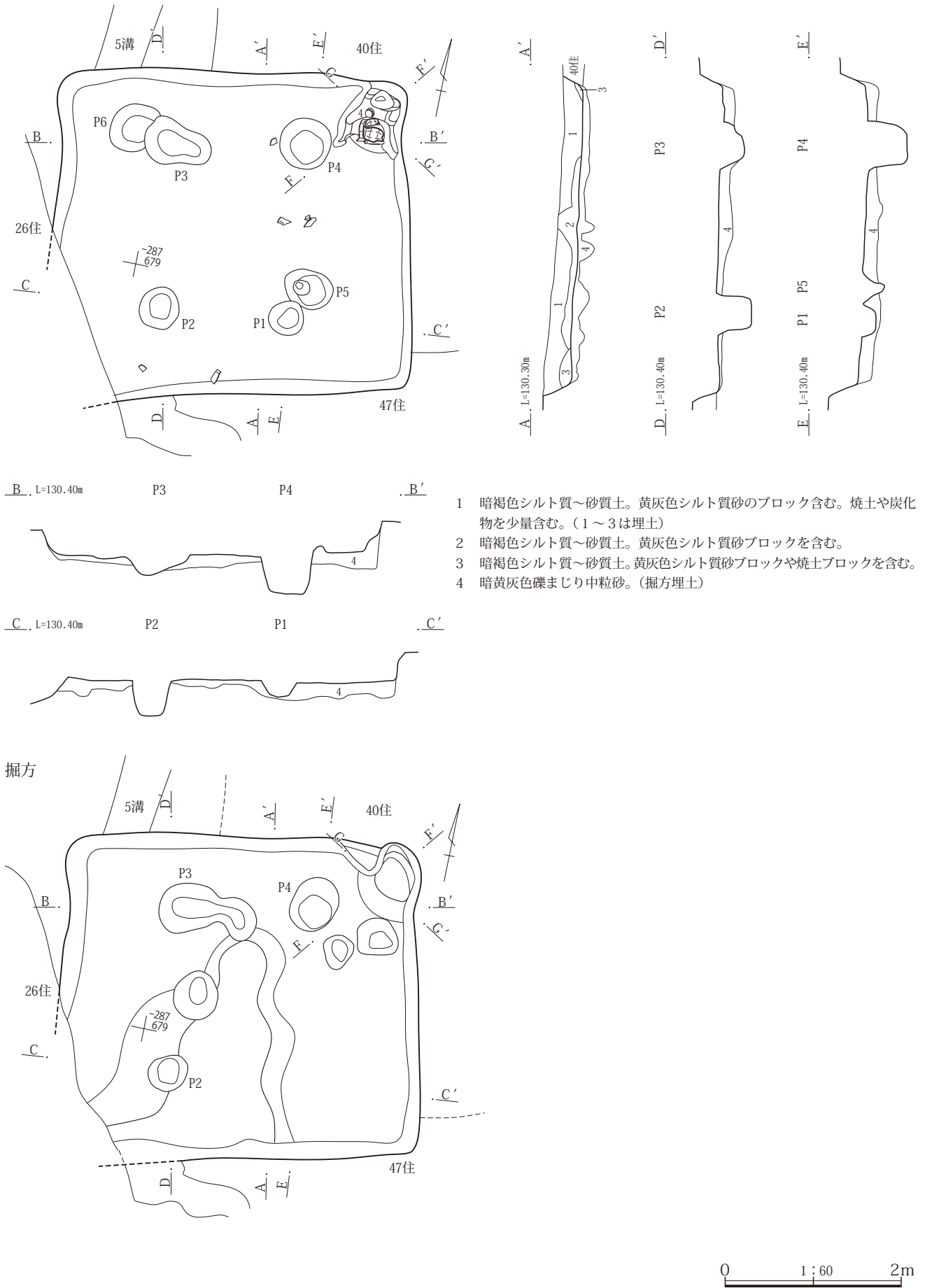
柱穴 床面の精査ではみられず、掘方の調査で断面形状が浅い円筒状のピット2・3を検出した。これらは竪穴住居の規模からみて主柱穴に相当する柱穴とは考えにくい。40号竪穴住居は一辺が5～6mを越える竪穴住居であり、柱穴は存在したはずだが掘方の調査でも検出できなかった。これは柱穴底が4層の砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性がある。

ピット2は長径0.38m、短径0.32m、深さ0.14m。

ピット3は直径0.65m、短径0.62m、深さ0.21m。

遺物 床面から土師器甕(2)が出土した。

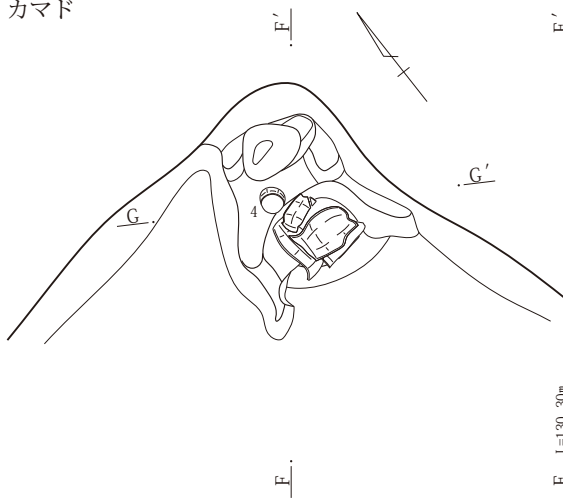
時代 飛鳥時代7世紀。



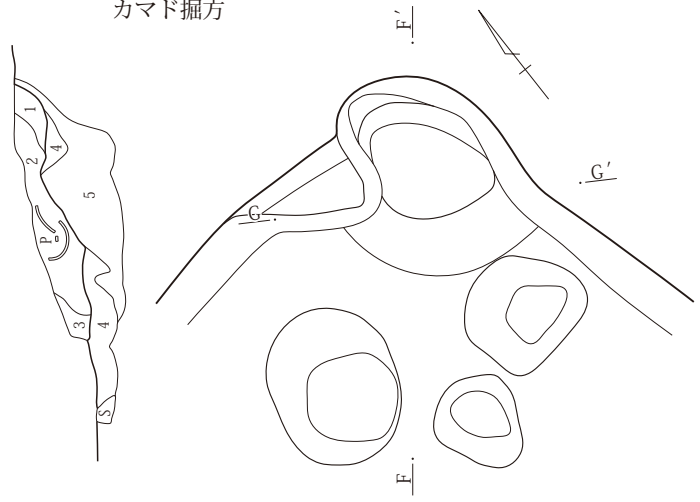
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロック含む。焼土や炭化物を少量含む。(1～3は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックや焼土ブロックを含む。
- 4 暗黄灰色礫まじり中粒砂。(掘方埋土)

第91図 39号竪穴住居

カマド

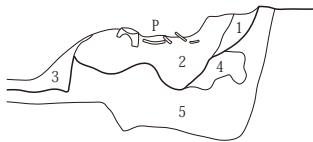


カマド掘方



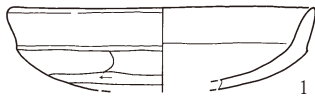
G, L=130.30m

G'

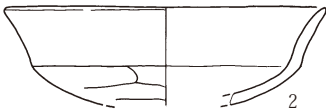


- 1 黒褐色シルト質～砂質土。焼土や粘土を含む。(1～3は埋土)
- 2 黒褐色シルト質～砂質土。焼土ブロックや粘土ブロックを含む
- 3 黒褐色シルト質～砂質土。粘土粒を含む
- 4 黄灰色シルト質中粒砂～細粒砂。径5～10mmの焼土ブロックを含む。(4～5は掘方埋土)
- 5 暗灰色礫まじり中粒砂。黄灰色中粒砂ブロックを含む。

0 1:30 1m

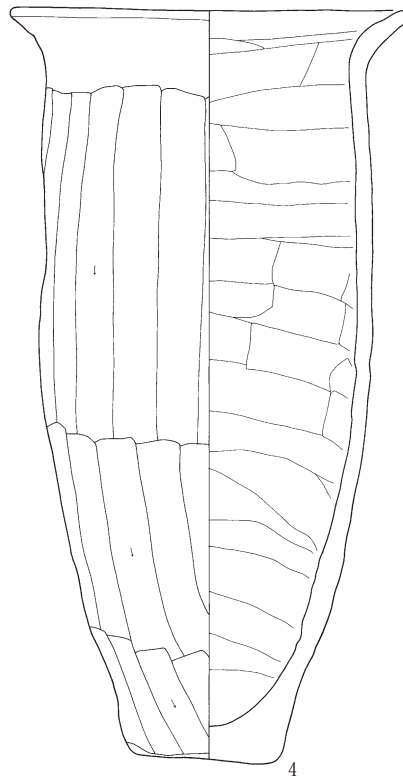


1

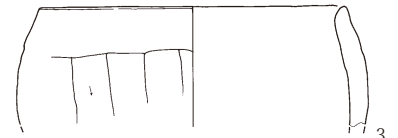


2

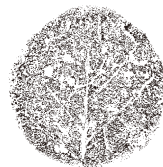
0 1:3 10cm



4

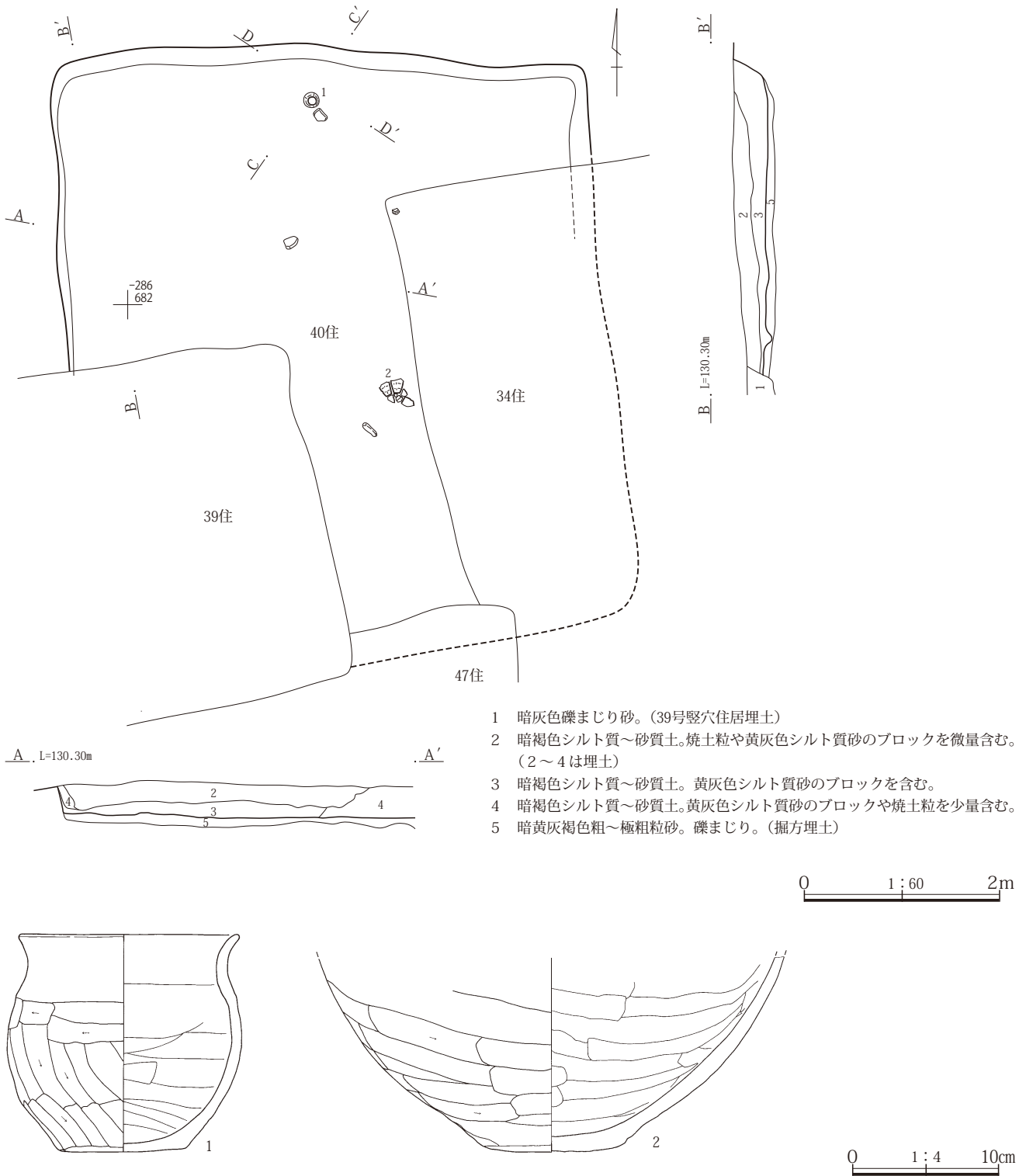


3



0 1:4 10cm

第92図 39号竪穴住居と出土遺物



第93図 40号竈穴住居と出土遺物

41号竈穴住居(第95～98図、PL.25-3～26-3・62・63、225頁)

位置 南東部中央。

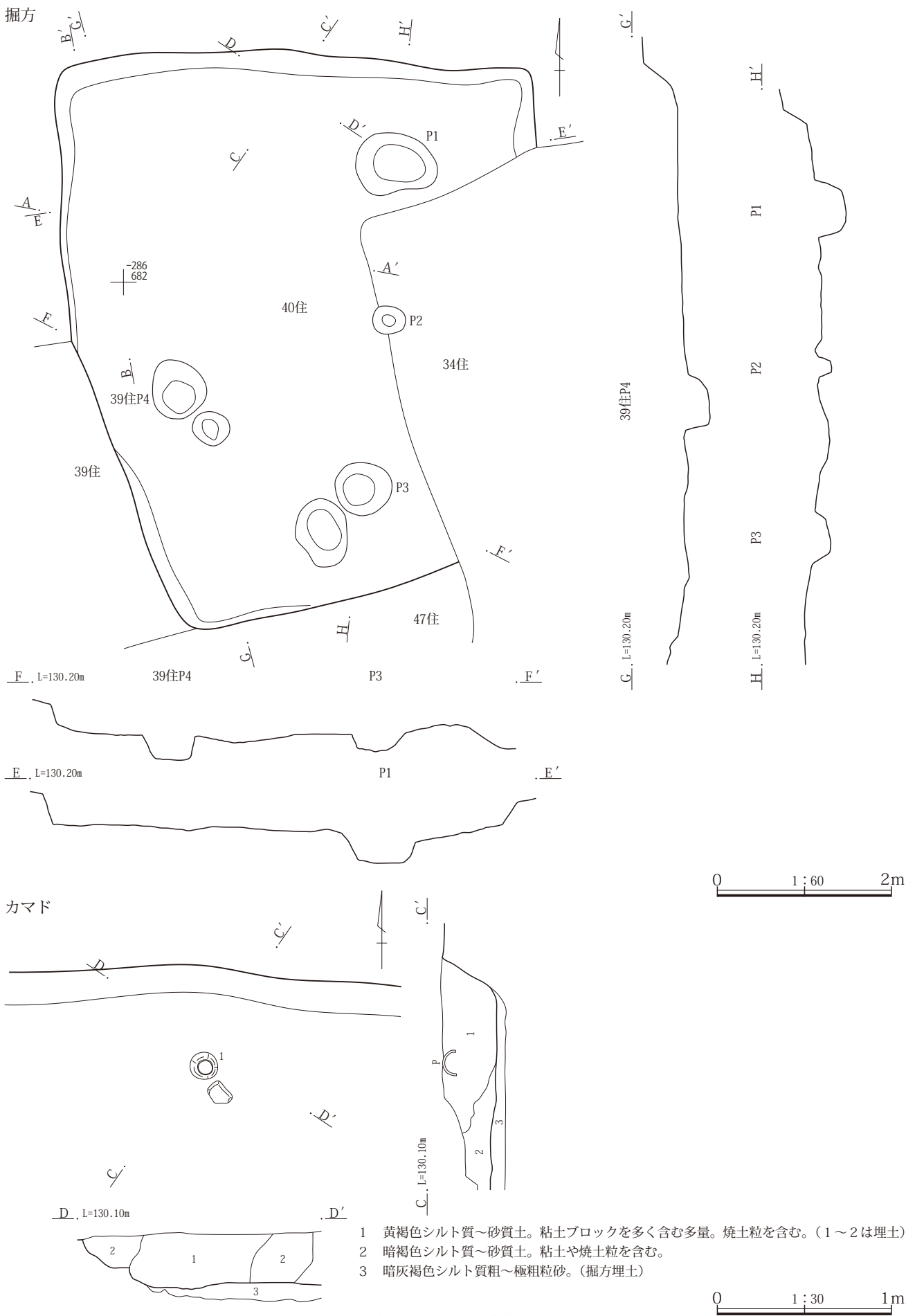
座標 X=24661～24669 Y=-70263～-70270

主軸方位 N70° E

重複 43号竈穴住居に切られる。

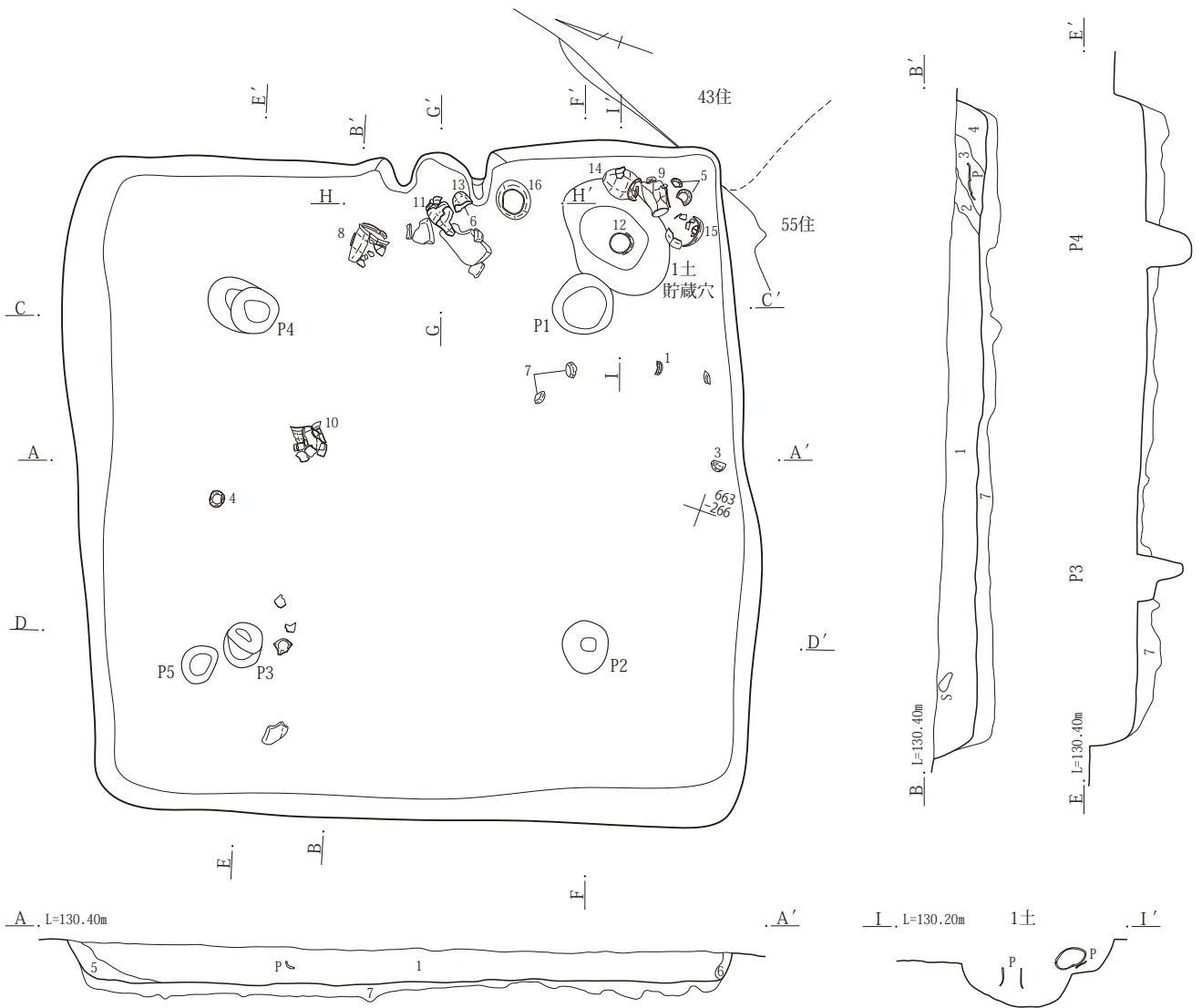
形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する。長径は6.02m、短径5.86m、床面までの深さ0.35m、掘方までの深さ0.53m、面積33.91㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、カマド周辺の北東壁際では暗褐色シルト質砂互層が壁から竈穴中央に向かって成層している。これらはカマドの崩落土であると考え

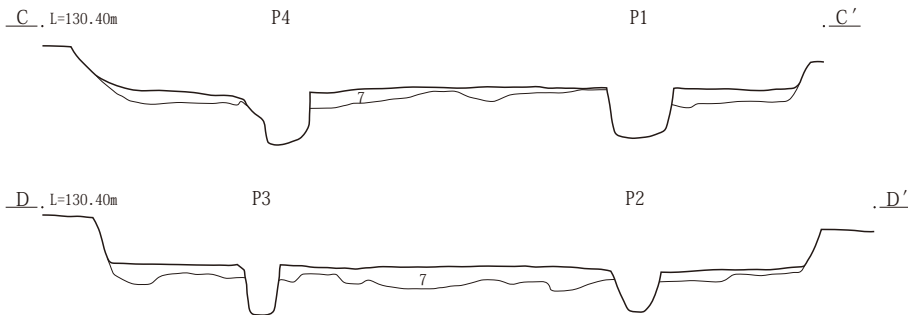


- 1 黄褐色シルト質～砂質土。粘土ブロックを多く含む多量。焼土粒を含む。(1～2は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。粘土や焼土粒を含む。
- 3 暗灰褐色シルト質粗～極粗粒砂。(掘方埋土)

第94図 40号竪穴住居



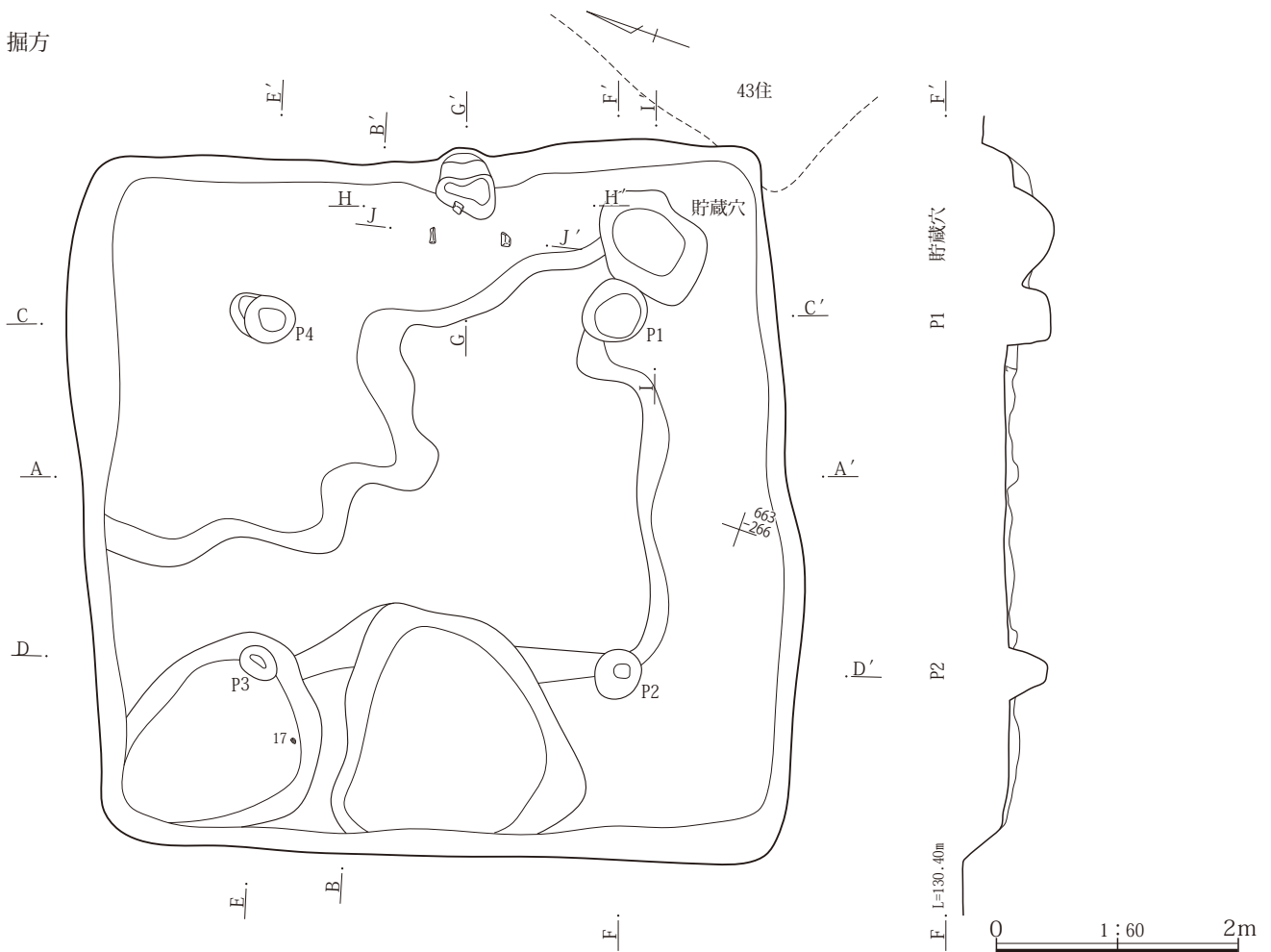
- 1 暗灰色礫まじり粗粒砂。径30～300mmの垂円礫や径10～30mmの黄灰色中粒砂ブロックを含む。(1～6は埋土)
- 2 暗褐色シルト質細～中粒砂。
- 3 明褐色シルト質細～中粒砂。
- 4 暗灰色粗～中粒砂。
- 5 暗灰色礫質中粒砂。径50～400mmの垂円礫を多く含む。
- 6 黄灰色中粒砂。ブロック状を呈する。
- 7 暗黄灰色中粒砂。(掘方埋土)



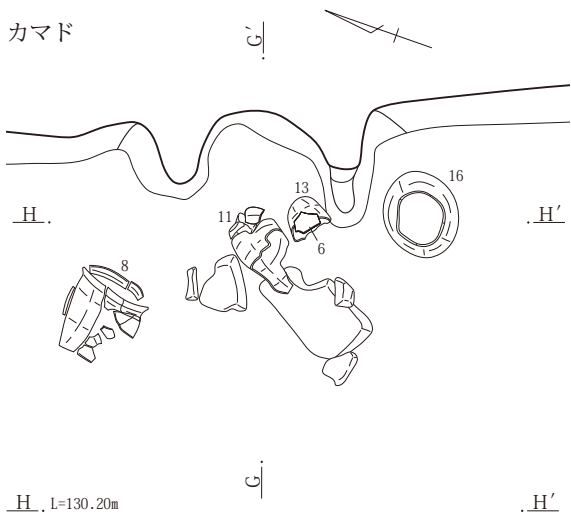
0 1:60 2m

第95図 41号竪穴住居(1)

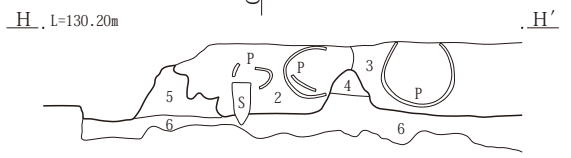
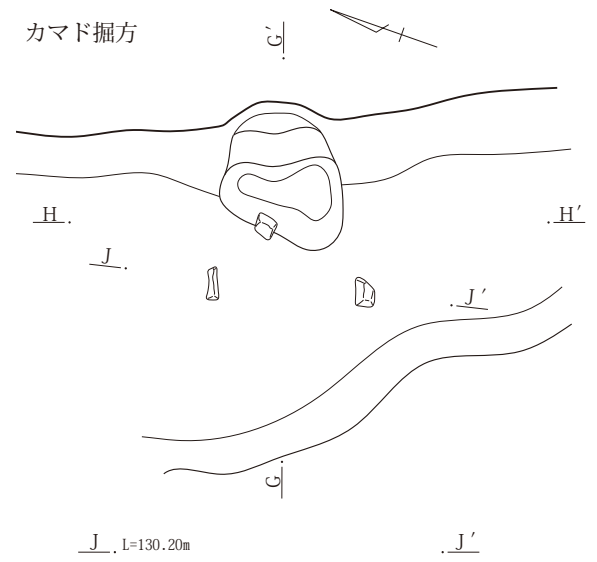
掘方



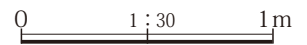
カマド



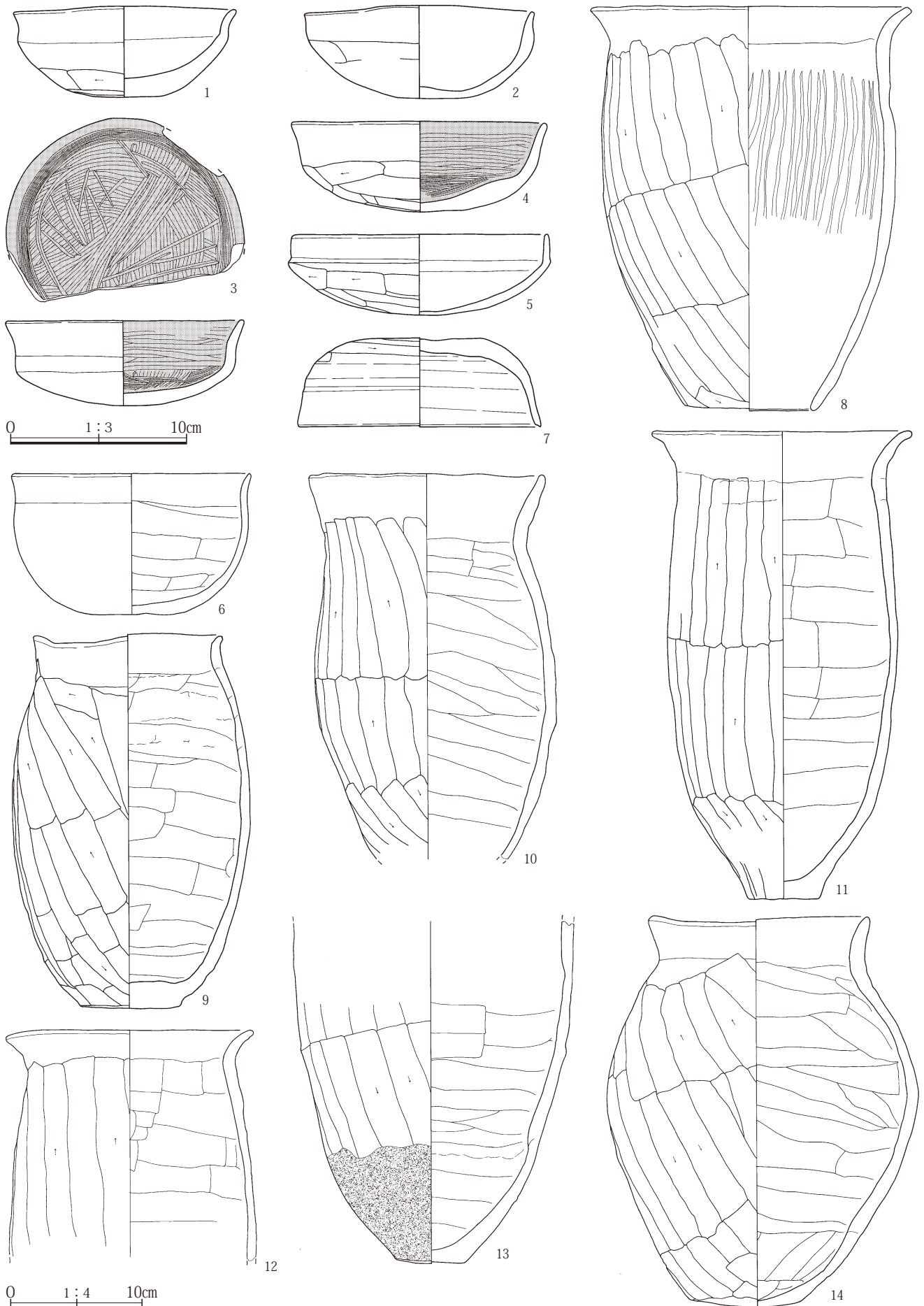
カマド掘方



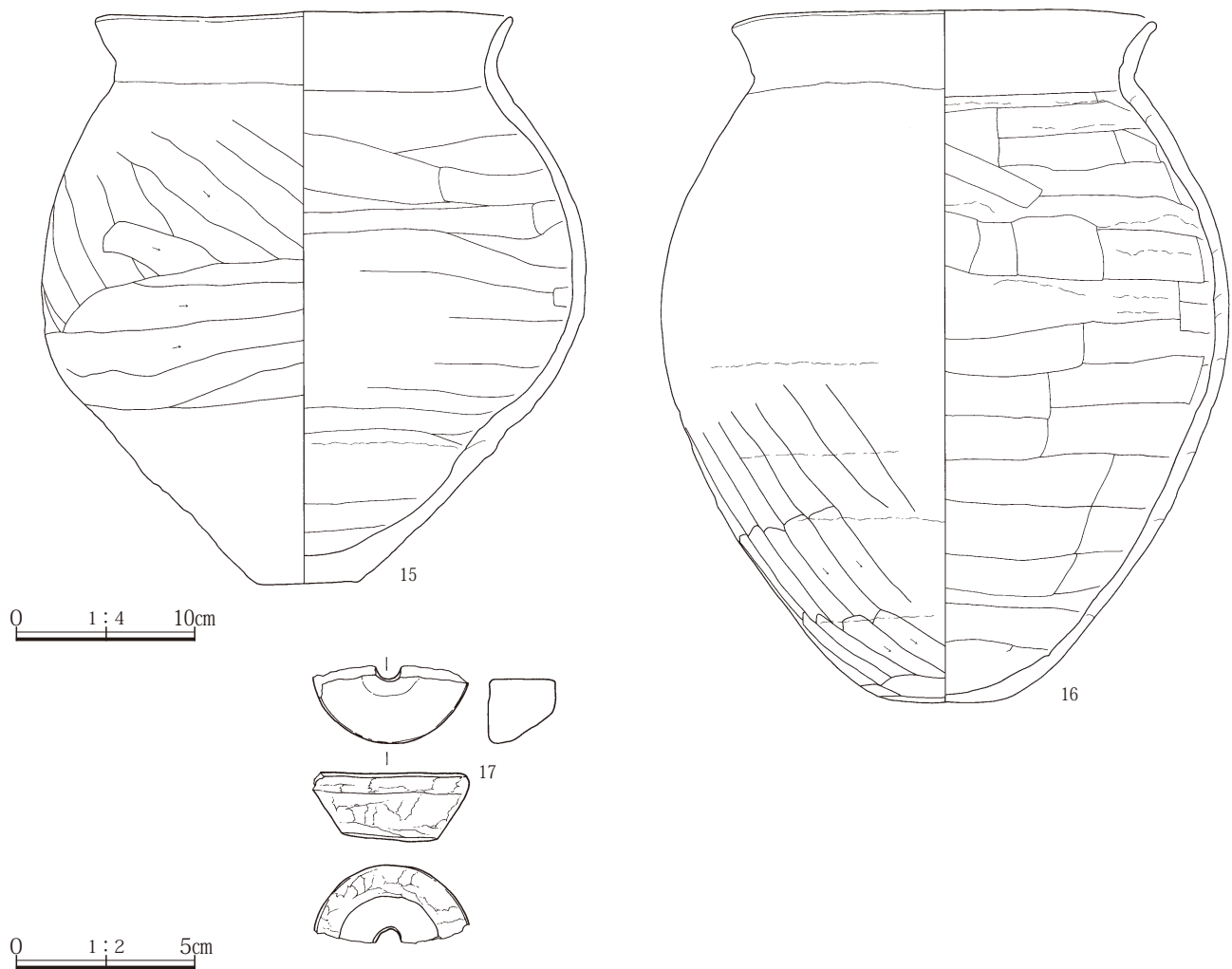
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。粘土粒や焼土ブロックを多量に含む。(1～3は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。
- 3 黒褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。
- 4 灰褐色シルト～粘土ブロック。焼土粒を含む。(4～6は掘方埋土。4は袖の構築材)
- 5 黄灰色粗～中粒砂。(袖構築材下部か?)
- 6 暗灰色焼土ブロック混じり粗粒砂。



第96図 41号竪穴住居(2)



第97図 41号竪穴住居の出土遺物(1)



第98図 41号竪穴住居の出土遺物(2)

られる。北西壁と南東壁際の基底には礫を多く含む暗褐色礫まじり砂が堆積している。

床面 暗黄灰色砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.17mで、ほぼ平坦であるが中央及び北西側がやや高く、相対的に北東壁際から南東壁際が緩い溝状に低くなる。

カマド 北東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は北東壁よりも手前に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、暗褐色シルト質砂で構築している。煙道は失われており、燃焼部との境界は北東壁を掘り込んで暗褐色シルト質砂で構築している。両袖は灰褐色シルト質砂で構築し、長径0.18m大の凝灰質砂岩の角礫が3点、立った状態で埋められている。これらは両袖下から検出したものは袖の構築材、燃焼部の中央に位置するものは支脚の可能性がある。燃焼部の使用面の上位から土師器鉢(6)、甕(11・13)や凝灰岩質砂岩が数点出土した。甕は長径0.36mで水平方向に正位がある破片である。凝灰質砂岩は左袖部

に長径0.25mの垂角礫が出土した。これらは、カマド上部のブロックとともに移動して埋土に堆積したカマド構築材である。また、カマド焚口の使用面上には長径0.48mの板状の凝灰質砂岩が出土し、表面が暗灰褐色ないし暗灰色を呈しており、ひび割れなど被熱の痕跡が著しい。これはカマド燃焼部の焚口天井架構材と考えられる。カマドの袖部の周辺には床面には甕(8)と甕(16)が出土した。これらはカマドの崩落にともなってカマド上部にあったものが移動した可能性がある。カマドの掘方からは燃焼部の両袖下から長径0.17mの垂角礫が、燃焼部の中央奥からは長径0.23mの凝灰質砂岩の垂角礫が立った状態で出土した。これらは前者が袖の構築材、後者が支脚の基礎部分をなす構築材と考えられる。

カマドの幅は1.02m、長さ0.41m、焚口の幅0.60m。

貯蔵穴 北東壁際の南東隅に位置する。南東壁際の角に直交する楕円形を呈し、長径は1.15m、短径0.75m、深さ0.32m。貯蔵穴底部から17cm上に甕(12)の上半部が逆

位で出土した。また南東壁際の床から貯蔵穴の縁には完形の杯(5)や甕(9・14)、ほぼ完形の甕(15)が出土した。これは貯蔵穴の壁側に置かれていた土器類があまり移動しない状態で埋土に堆積した可能性が極めて高く、竪穴住居内の食器や貯蔵具等の出土状況を示す良好な資料と思われる。

柱穴 床面で断面形状が円筒ないしU字形のピット1～5を検出した。4本の支柱に相当するに柱穴は、ピット1～4である。柱間はピット2・3が3.04m、ピット1・4が2.86m、ピット1・2が2.94m、ピット3・4が2.84mである。ピット5はピット3の建て替え前の柱穴である可能性がある。

ピット1は長径0.54m、短径0.52m、深さ0.39m。

ピット2は長径0.45m、短径0.40m、深さ0.32m。

ピット3は直径0.40m、短径0.34m、深さ0.39m。

ピット4は長径0.64m、短径0.44m、深さ0.39m。

ピット5は長径0.36m、短径0.28m、深さ0.19m。

遺物 床面から土師器杯(1・4)が、床面付近から甕(10)が出土し、掘方から石製紡錘車の破片(17)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

42号竪穴住居(第99・100図、PL.26-4～26-6・63、226頁)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24676～24681 Y=-70258～-70261

主軸方位 N37° W

重複 46号竪穴住居を切る。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.30m、短径2.66m、床面までの深さ0.16m、掘方までの深さ0.27m、面積8.66㎡である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり、カマド周辺の南東壁際では基底に黄灰色シルト質砂のブロックを含む暗褐色シルト質～砂質土が堆積している。これはカマドの崩落土であると考えられる。

床面 暗灰色シルト質砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.03～0.20mで、ほぼ平坦であるが中央及び北側が溝状に低い。

カマド 南東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は南東壁よりも奥に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、黒褐色シルト質砂で構築している。煙道や両袖は失われており、燃焼部は黒褐色シルト質砂を貼って構築さ

れている。燃焼部の手前の掘方からは円形を呈する直径0.27m、深さ0.27mのピットが検出された。ピットはカマドの前の焚口にあたる場所に位置しており、その性格は不明である。

カマドの幅は0.98m、長さ0.90m。

貯蔵穴 なし。

柱穴 床面でピット1、掘方でピット2を検出した。これらは竪穴住居の規模やピットの位置から推定して柱穴の可能性はある。

ピット1は長径0.43m、短径0.34m、深さ0.32m。

ピット2は長径0.40m、短径0.26m、深さ0.21m。

遺物 床面及び床面付近から須恵器甕(6・7)の小破片が出土している、それ以外の遺物は床から10cm程度浮いており、検出面から5～6cm程度の深さから出土した。

時代 出土遺物から推定される年代は6世紀後半であるが、下位にある46号竪穴住居の出土遺物の年代と矛盾する。このことから、42号竪穴住居は8世紀の年代を示す46号竪穴住居よりも新しく、床面から浮いた遺物は(1～5)は混入した遺物であると考えられる。竪穴住居の年代は8世紀以降と考えられる。

43号竪穴住居(第101・102図、PL.26-7～27-2・63、226頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24662～24666 Y=-70259～-70263

主軸方位 N60° W

重複 50号土坑に切られる。41号・50号・55号・60号竪穴住居を切る。

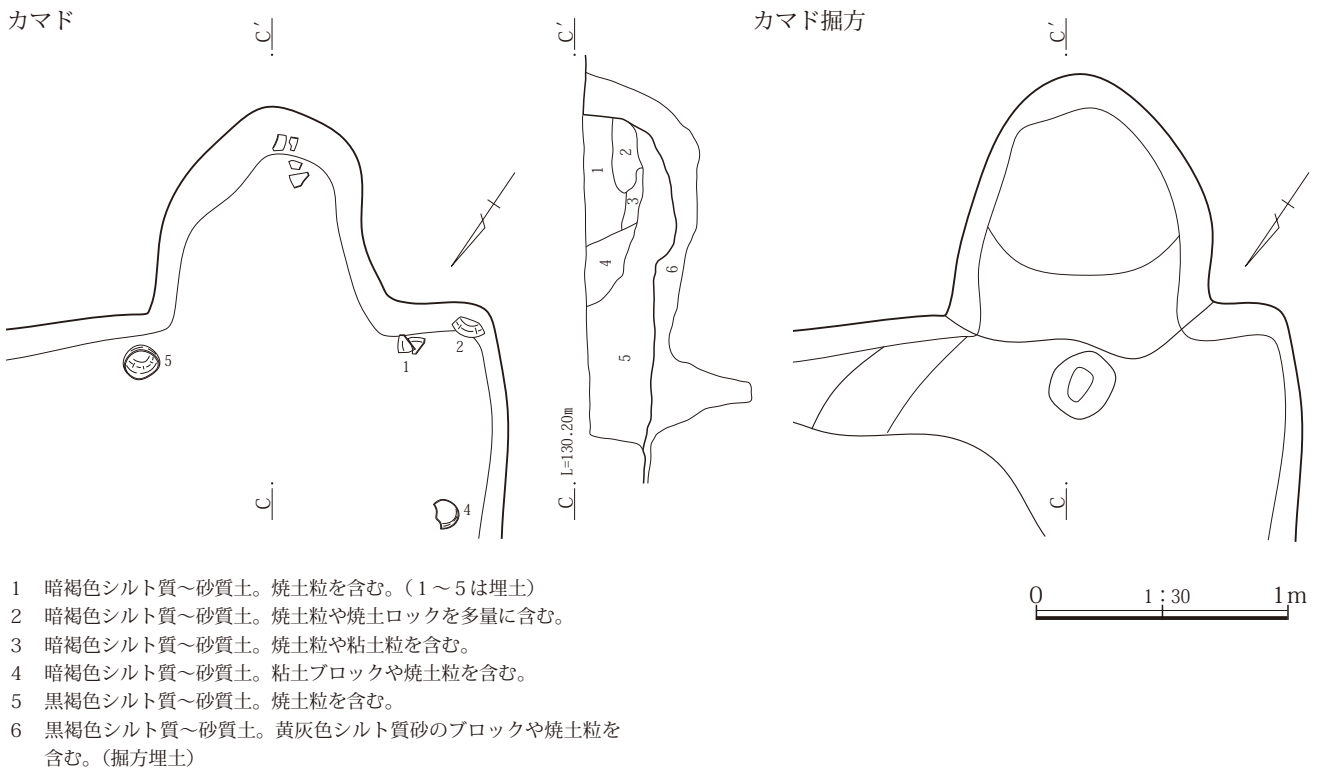
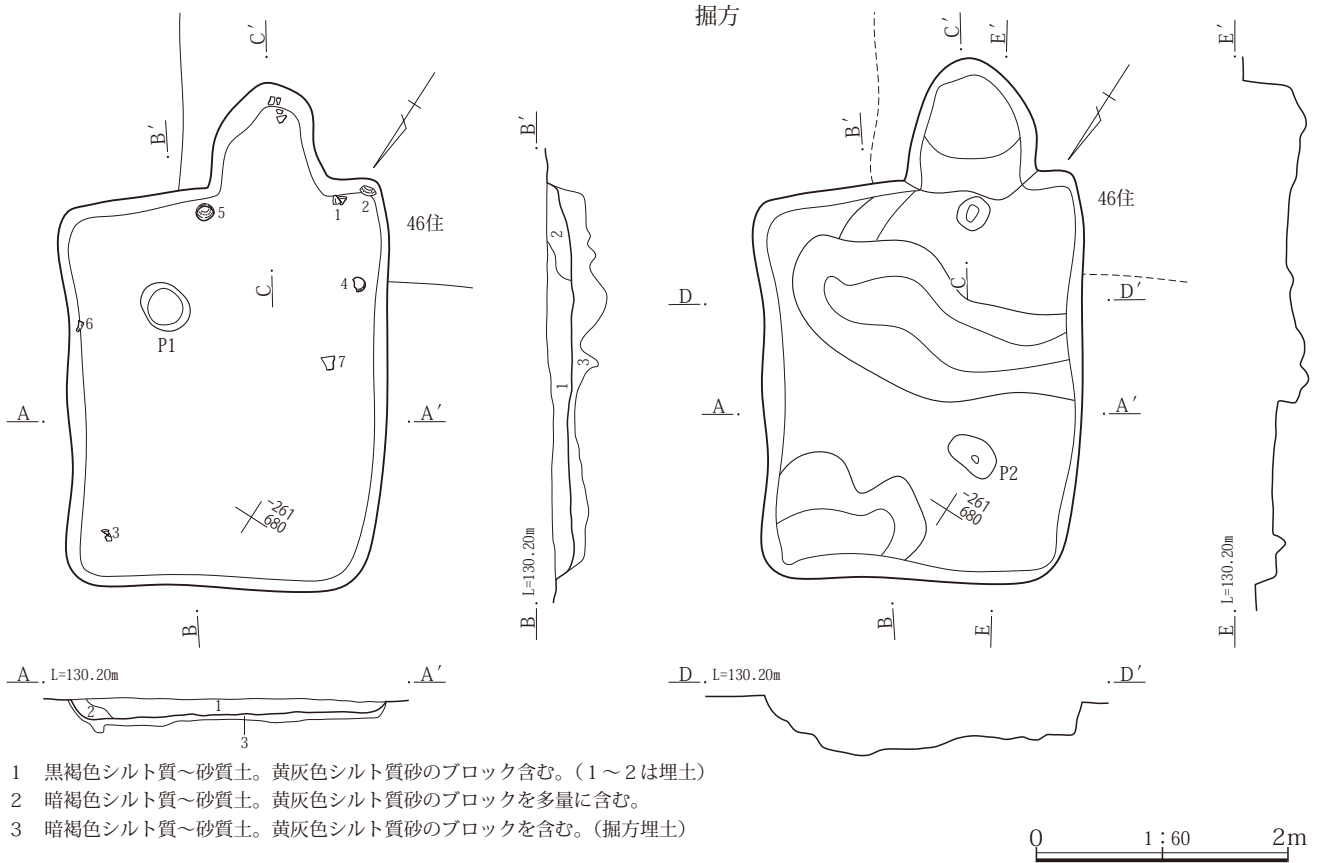
形状と規模 北東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.56m、短径2.86m、床面までの深さ0.23m、掘方までの深さ0.36m、面積10.47㎡である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり、南西壁際では基底に暗褐色シルト質～砂質土が堆積している。

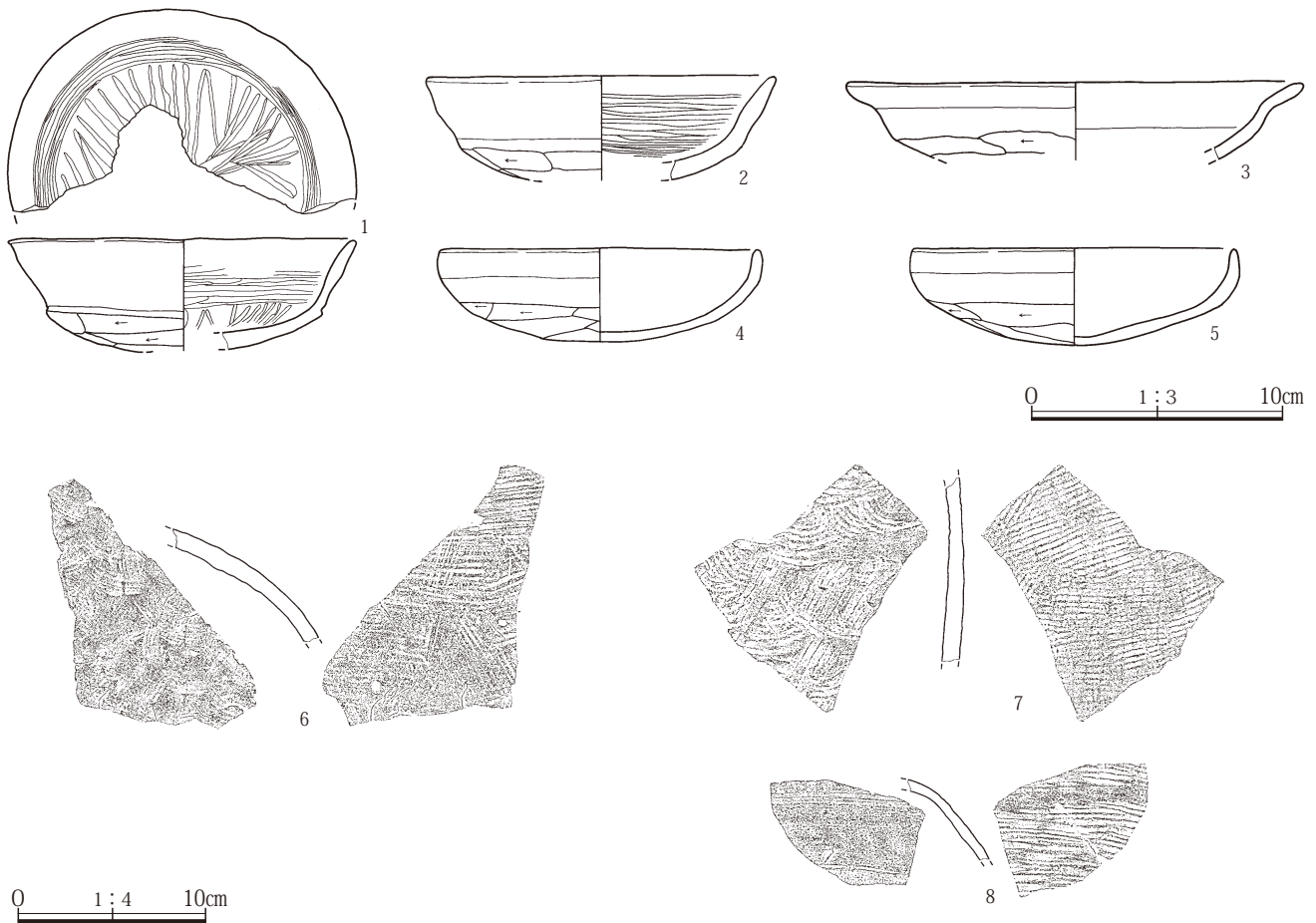
床面 暗灰色シルト質砂と55号竪穴住居の埋土である暗褐色シルト質土で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.03～0.20mで、ほぼ平坦である。南部が方形に低いのは、掘方の下にある55号竪穴住居の埋土を検出したためである。

カマド 南東壁の中央から北寄りに位置する。カマドの燃焼部は南東壁よりも奥に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、焼土まじりの黄灰色シルト質砂で構築している。



第99図 42号竪穴住居



第100図 42号竪穴住居の出土遺物

煙道や両袖は失われており、燃烧部は黄灰色シルト質砂を貼って構築されているが、残存している使用面には焼土が点在する。燃烧部の埋土からは長径0.33mの頁岩や結晶片岩の礫が3点出土した。これらはカマドの構築材と考えられるが、カマドの崩落により移動して堆積したものと考えられる。また、床面からは凝灰質砂岩の板状の扁平礫が数点出土している。これらは解体したカマドから移されたカマド構築材の可能性はあるが、明瞭な被熱の痕跡は認められなかった。

カマドの幅は0.70m、長さ0.75m、焚口の幅0.34m。

貯蔵穴 なし。

柱穴 床面で断面形状がU字形のピット1・2・3を検出した。ピット1・2の柱間は南西壁の走行に平行で、位置から推定して柱穴の可能性はある。柱間は1.35mである。

ピット1は長径0.58m、短径0.54m、深さ0.30m。

ピット2は長径0.54m、短径0.48m、深さ0.35m。

ピット3は長径0.42m、短径0.40m、深さ0.20m。

遺物 床面から須恵器碗(5)、羽釜(6・8・10)が出土し、

カマドの埋土から羽釜(7・11)が出土した。埋土から7世紀末の年代を示す土師器杯(1・3)や北東壁際の床面から須恵器碗(2)が出土したが、混入遺物と考えられる。

時代 平安時代10世紀前半。

44号 竪穴住居(第103・104・105図、PL.27-3～27-6・63・64、226・227頁)

位置 南東部南壁寄り。

座標 X=24649～24655 Y=-70255～-70261

主軸方位 N63° E

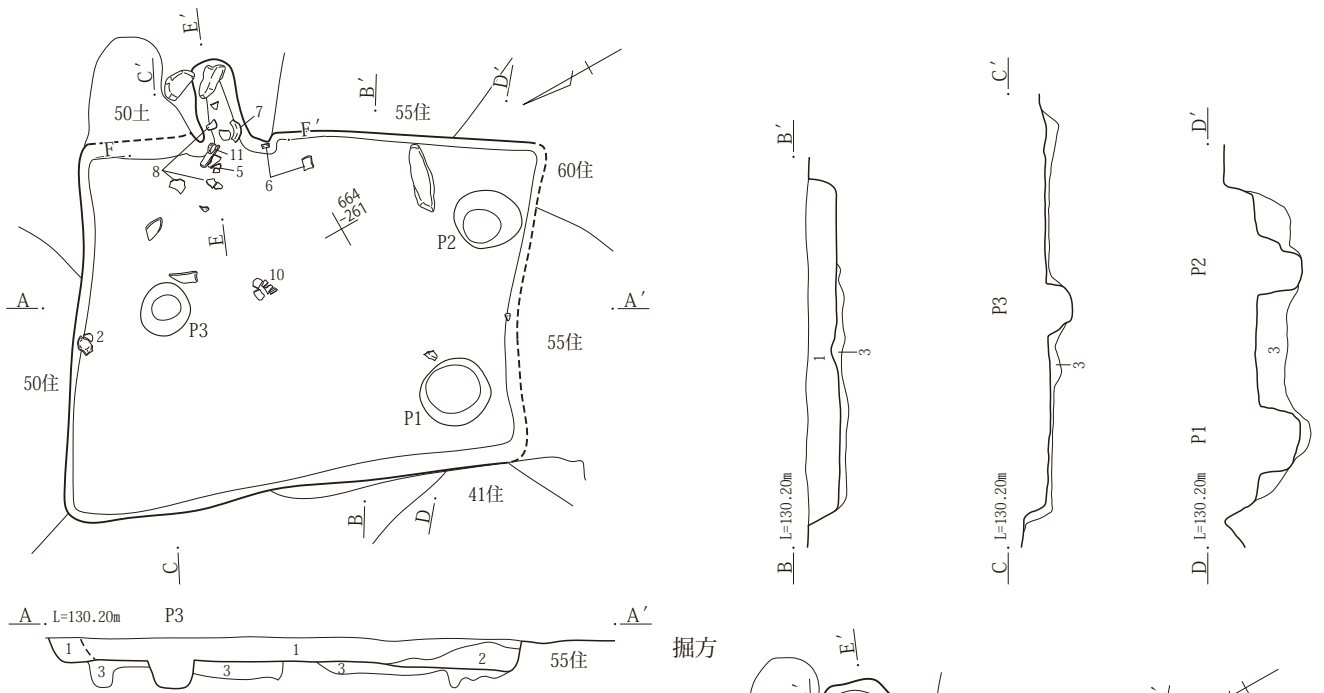
重複 なし。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する小規模な竪穴住居である。長径は4.68m、短径4.25m、床面までの深さ0.28m、掘方までの深さ0.42m、面積19.01㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり中粒砂をブロック状に上位に含む黄灰褐色礫まじり砂からなる。

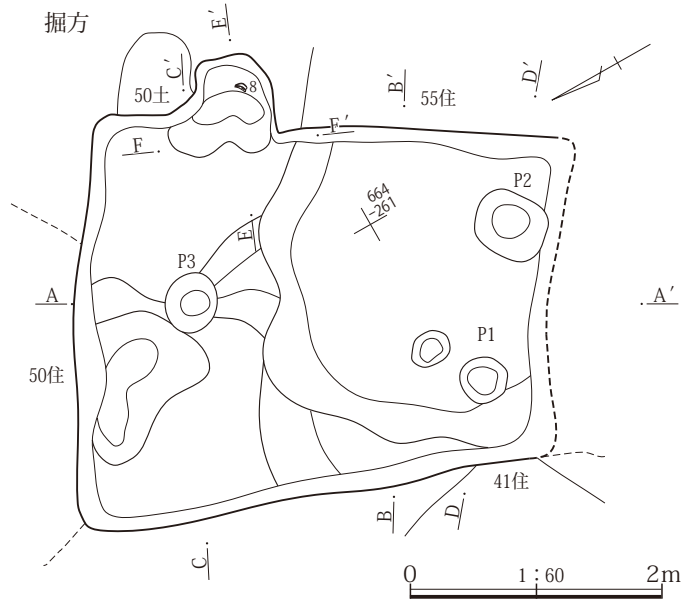
床面 暗灰色シルト質砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.06～0.21mで、ほぼ平坦で

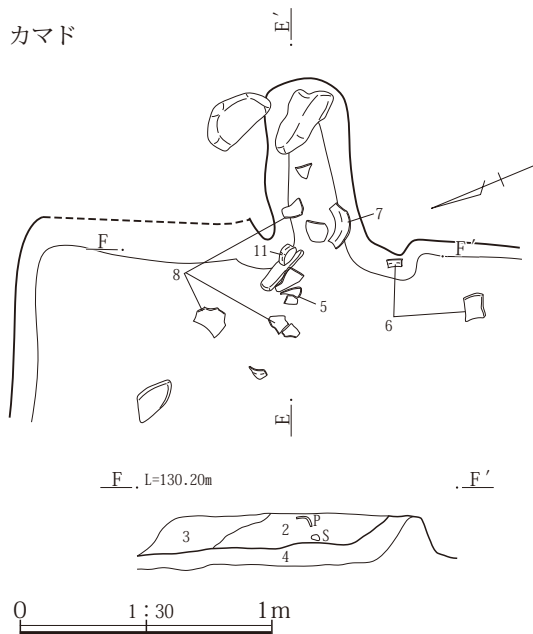


- 1 黒褐色シルト質～砂質土。(1～2は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。
- 3 暗灰色シルト質～砂質土。礫まじり中粒砂優勢。(掘方埋土)

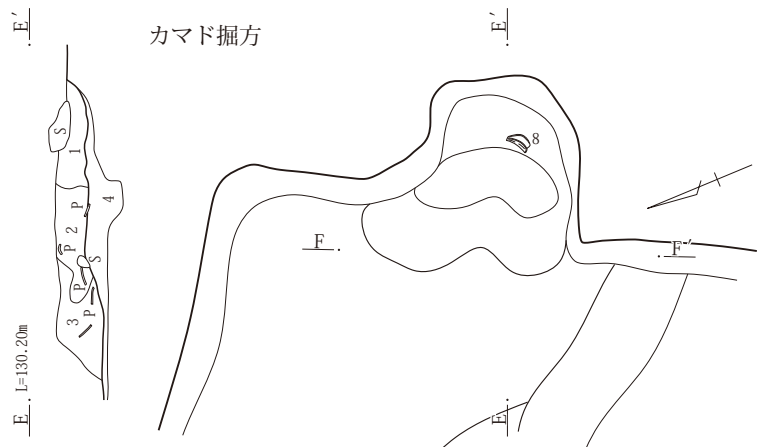
掘方



カマド

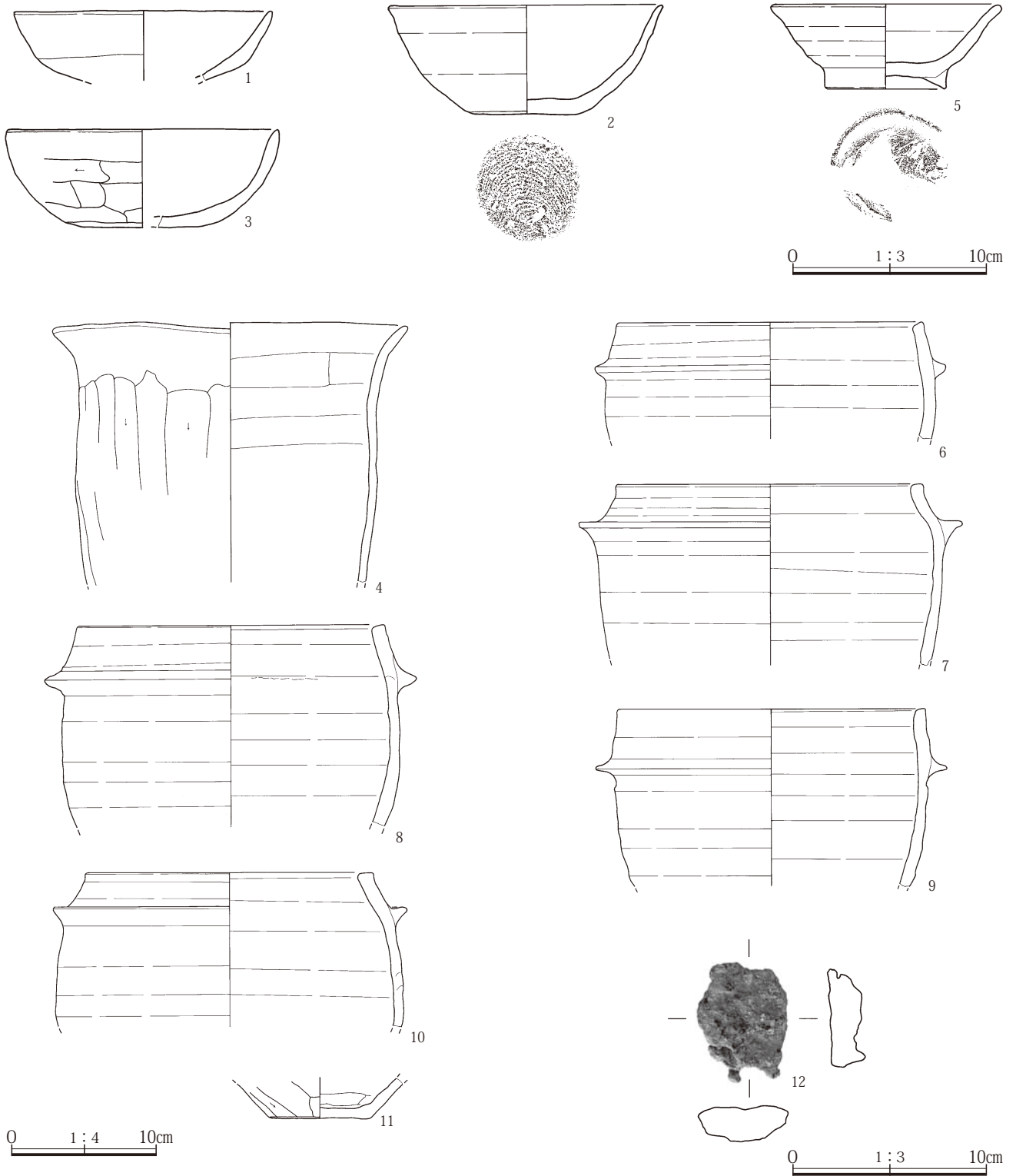


カマド掘方



- 1 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。(1～3は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土や粘土を含む。
- 3 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。
- 4 黄灰色シルト質～砂質土。焼土ブロックまじりシルト質中粒砂。粒径10mm大の焼土粒を含む。(掘方埋土)

第101図 43号竪穴住居



第102図 43号竪穴住居の出土遺物

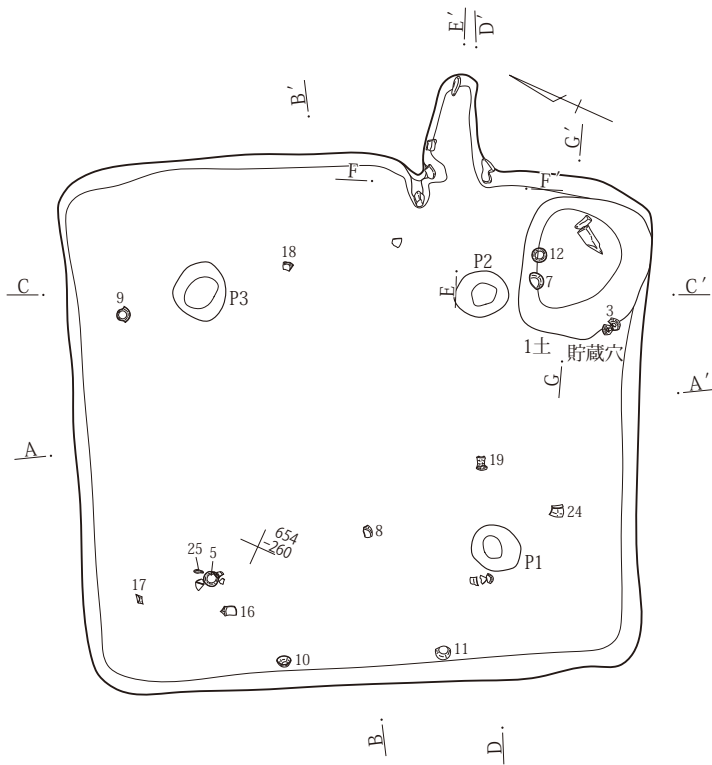
ある。カマドと貯蔵穴周辺が不定形に窪み、南東壁際は溝状に窪んでおり、壁際から中央にかけては相対的に高い。

カマド 北東壁の中央から南寄りに位置する。カマドの燃烧部は北東壁よりも奥に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、焼土まじりの暗褐色シルト質砂で構築している。

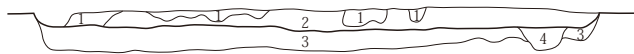
煙道は失われており、袖は一部が残存している。燃烧部は暗褐色シルト質砂を貼って構築されている。燃烧部壁の掘方からは長径0.21mの結晶片岩の垂円礫が立った状態で6点出土した。これらは燃烧部壁の構築材と考えられる。

カマドの幅は0.80m、長さ0.75m、焚口の幅0.52m。

2. 竪穴住居



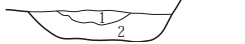
A, L=130.20m



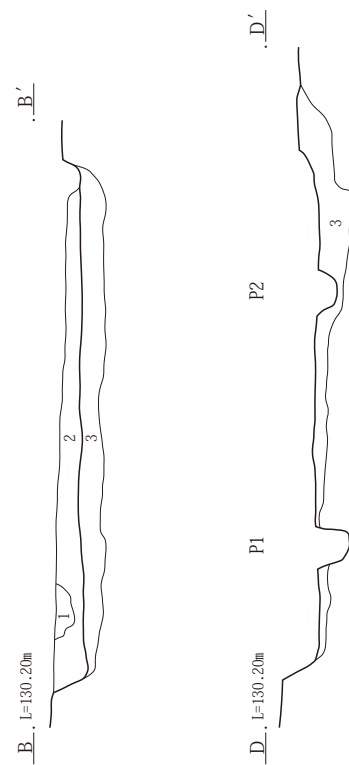
C, L=130.20m



G, L=130.00m 1土



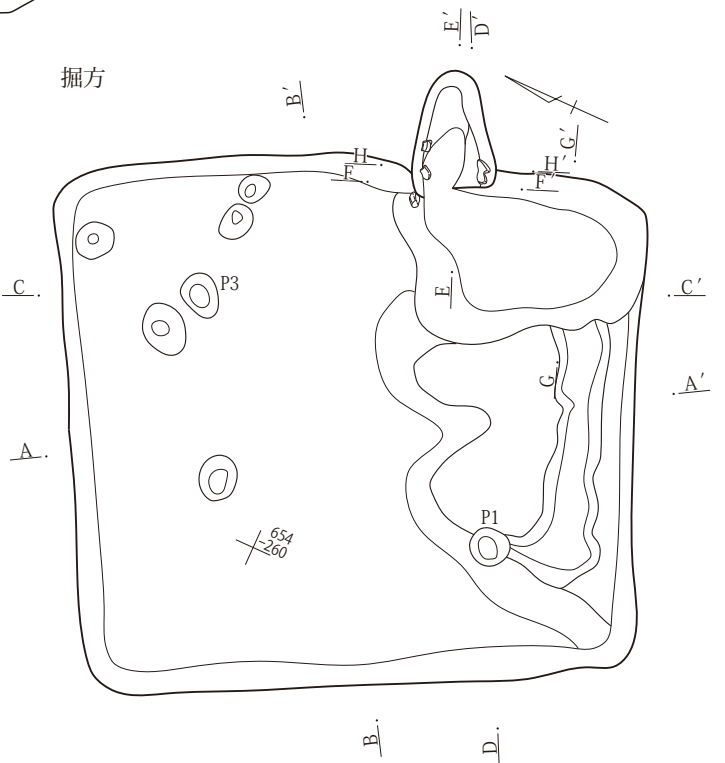
- 1 灰褐色焼土まじりシルト質細～中粒砂。径10mm大の焼土ブロックを含む。
- 2 暗灰褐色礫まじり中～細粒砂。径10～20mmの亜円礫を含む。



A'

- 1 暗褐色礫まじり中粒砂。径10mm大のブロック状を呈す。(1～2は埋土)
- 2 黄灰褐色礫まじり中粒砂。径10～20mmの亜円礫を含む
- 3 暗灰色シルト質～砂質土。砂礫や黄灰色シルト質砂を含む。(3～4は掘方埋土)
- 4 暗灰色シルト質～砂質土。焼土を含む。

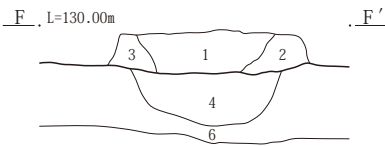
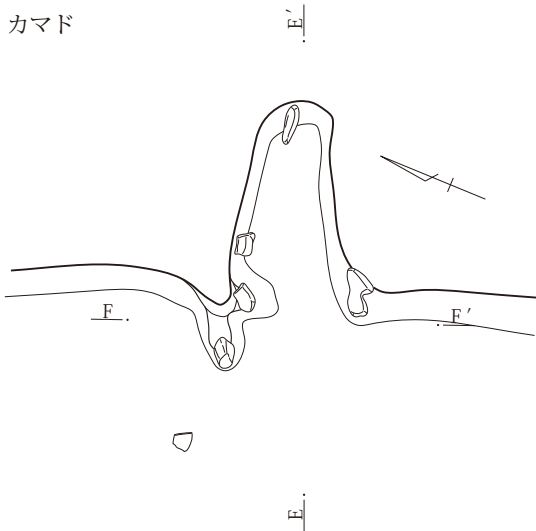
掘方



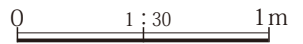
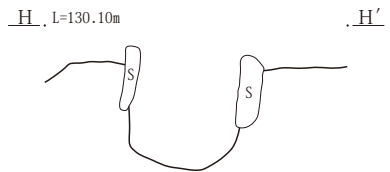
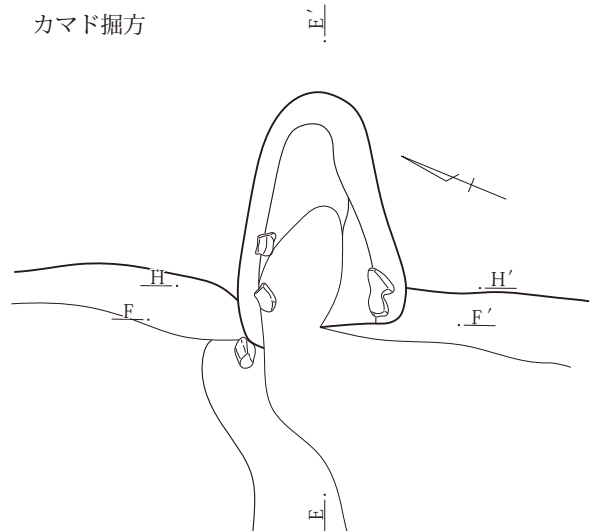
0 1:60 2m

第103図 44号竪穴住居

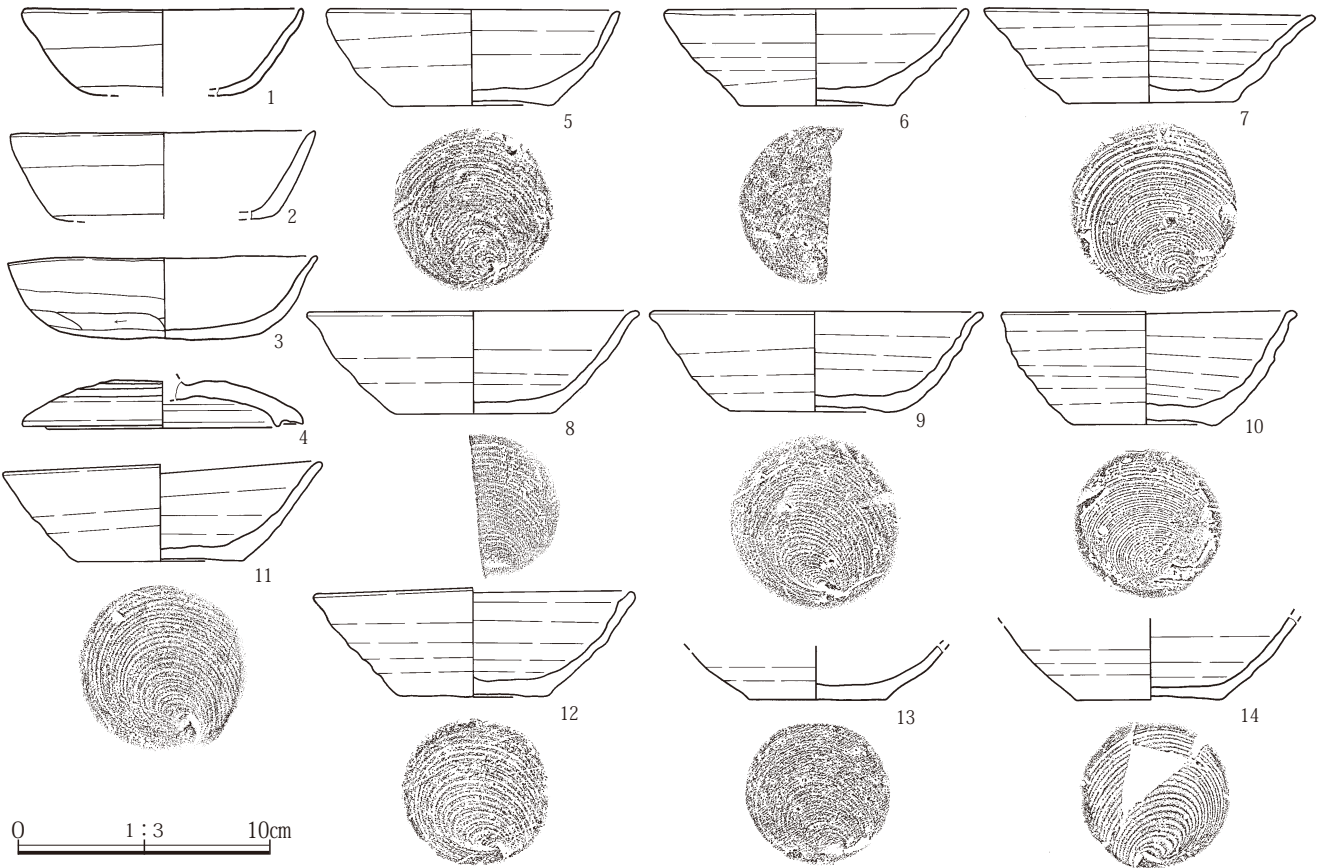
カマド



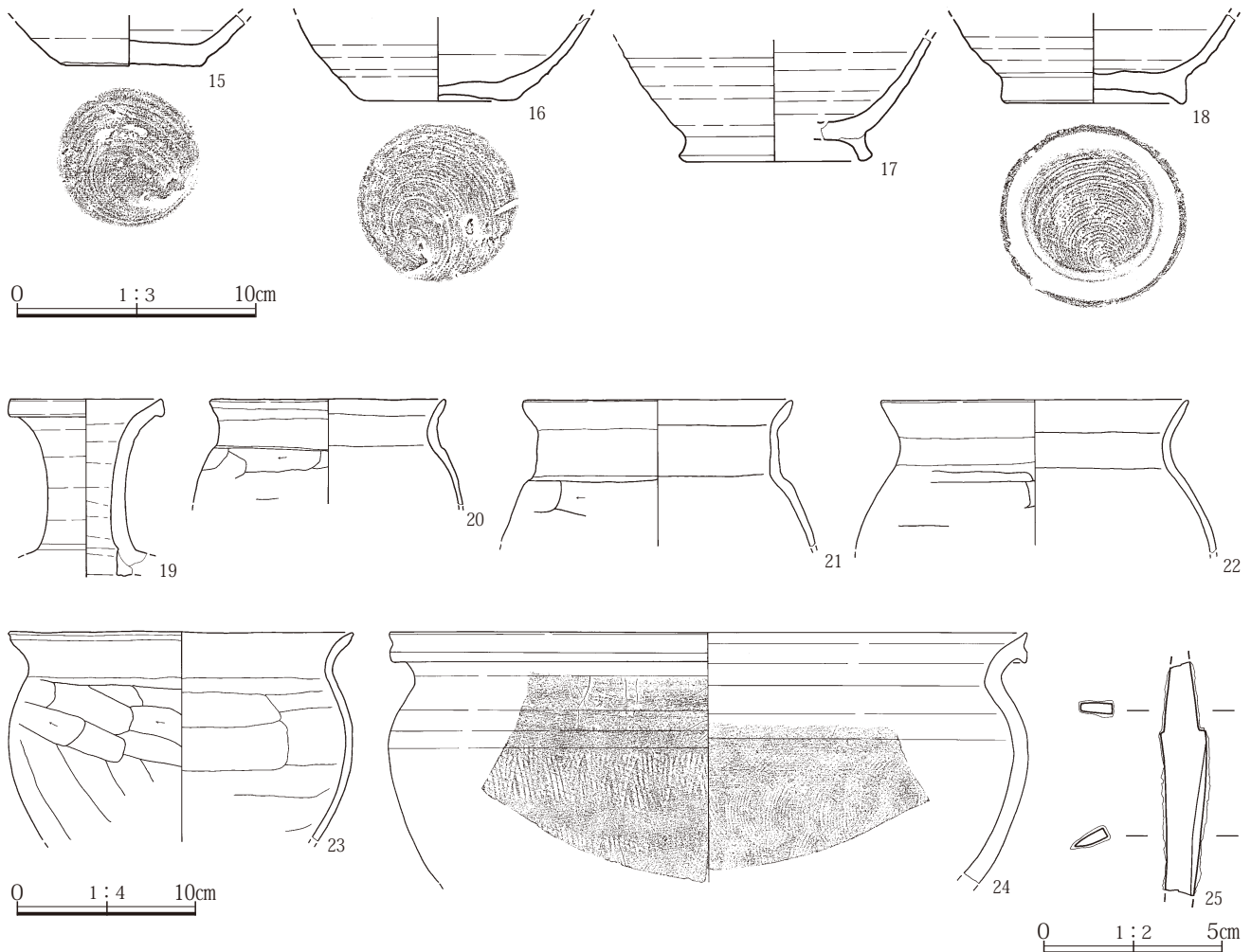
カマド掘方



- 1 灰褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。(1～3は埋土)
- 2 灰褐色シルト質～砂質土。粘土ブロックを多く含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や粘土粒を含む。(4～6は掘方埋土)
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。
- 6 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を多量に含み焼土を含む。



第104図 44号竪穴住居と出土遺物



第105図 44号竪穴住居の出土遺物

貯蔵穴 北東壁際の南東隅に位置する。南東壁際の角に沿った隅の丸い長方形を呈し、長径は1.13m、短径1.00m、深さ0.22m。貯蔵穴縁の床面から土師器杯(3)が、貯蔵穴底から7~9cm上に須恵器の杯(7)や碗(12)が出土した。また、貯蔵穴底からは長径0.28mの結晶片岩の角礫が出土した。

柱穴 床面で断面形状が円筒ないしU字形のピット1・2・3を検出した。ピットは西側の柱穴を欠くが竪穴住居の主柱に相当する柱穴である。柱間はピット2・3が2.25m、ピット1・2が2.04mである。

ピット1は長径0.40m、短径0.37m、深さ0.26m。

ピット2は長径0.43m、短径0.36m、深さ0.15m。

ピット3は長径0.46m、短径0.40m、深さ0.27m。

遺物 床面から須恵器碗(10・11)、長頸壺(19)や甕(24)の破片が出土し、床面付近から須恵器杯(5)や刀子(25)が出土した。埋土から出土した須恵器杯蓋(4)は7世紀後半から8世紀初頭の年代を示し、混入遺物と考えられ

る。

時代 平安時代9世紀第3四半期。

45号竪穴住居(第106・107・108図、PL.27-7~28-2・64、227頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24655~24661 Y=-70258~-70264

主軸方位 N62°E

重複 67号竪穴住居に切られる。57号・60号竪穴住居を切る。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形を呈する。長径は4.85m、短径4.76m、床面までの深さ0.24m、掘方までの深さ0.50m、面積22.56㎡である。

埋土 シルトのブロックがまじる暗黄灰褐色シルト質~砂質土からなる。

床面 黄灰色シルト質砂を含む黒褐色シルト質~砂質土で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.26mで、ほぼ平坦である。北東壁際から中央にかけては高く、カマド周辺及び周囲の壁際が不定形の溝状に窪んでいる。

カマド 南西壁の中央から北寄りに位置する。カマドの燃焼部は南西壁よりも手前に57号竪穴住居の埋土の暗灰色礫まじり砂を掘り込んで、暗褐色シルト質砂で構築している。煙道は失われており、両袖は大部分が残存しており黄灰色のシルト質砂のブロック土で構築している。燃焼部は暗褐色シルト質砂を貼って構築されているが、燃焼部の壁面が焼土化している。燃焼部中央の使用面には長径0.08mの凝灰質砂岩礫が出土した。これは支脚の基礎となった石材の可能性もある。

カマドの幅は1.20m、長さ1.01m、焚口の幅0.50m。

貯蔵穴 南西壁際の西隅とカマドの中間に位置する。南東壁際に沿った隅の丸い長方形を呈し、長径は0.87m、短径0.55m、深さ0.07m。貯蔵穴は浅い窪み状の穴で、貯蔵穴底の10～12cm上から土師器杯(1・2)が出土した。

柱穴 床面で断面形状がU字形ないし浅い皿状のピット1・2・3を検出した。ピットは北側の柱穴を欠くが竪穴住居の支柱に相当する柱穴である。柱間はピット1・3が2.64m、ピット1・2が2.24mである。

ピット1は長径0.50m、短径0.44m、深さ0.12m。

ピット2は長径0.33m、短径0.32m、深さ0.20m。

ピット3は長径0.52m、短径0.34m、深さ0.20m。

特徴 隣接する44号竪穴住居と規模や形状が似ており、竪穴住居の向きは対称である。

遺物 床面付近から須恵器甕(9)の破片が出土し、埋土から須恵器杯(4)、土師器甕(8)が出土した。これらの大部分の遺物は9世紀代の年代を示すが、貯蔵穴の土師器杯とは年代差があり混入遺物と考えられる。

時代 貯蔵穴から出土した遺物から古墳時代6世紀と考えられる。

46号竪穴住居(第111・112・113図、PL.28-3～28-6・65、227・228頁)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24671～24678 Y=-70256～-70263

主軸方位 N58° E

重複 42号竪穴住居に切られる。50号竪穴住居を切る。

53号土坑に掘り込まれ、52号・54号土坑も同様である可能性が高いが重複関係は不明。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈するが、北角が42号竪穴住居により失われている。長径は5.88m、短径5.54m、床面までの深さ0.16m、掘方までの深さ0.36m、残存する面積29.69㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、カマドに近い北東壁よりの上層は暗灰褐色シルトまじり砂からなる。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.14mで、ほぼ平坦である。北東から北西壁際が不定形の溝状に窪んでおり、中央から南側は高い。

カマド 北東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は北東壁よりも手前に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、暗黄灰色礫まじり砂で構築している。煙道は失われているが両袖は大部分が残存し、灰褐色のシルト質砂で構築している。燃焼部は暗黄灰色礫まじり砂を貼って構築されているが、燃焼部の壁面の一部が焼土化している。

カマドの幅は0.98m、長さ0.62m、焚口の幅0.70m。

貯蔵穴 南東壁際の東隅に位置する土坑1が貯蔵穴である。北東壁際の方に沿った隅の丸い長方形を呈し、長径は0.98m、短径0.84m、深さ0.21mである。掘方からはカマド側に1.10mの位置に土坑2が検出され、これは歪んだ楕円形を呈し、長径は0.82m、短径0.70m、深さ0.39mである。土坑2は建て替え前に使用した貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で断面形状が円筒ないしU字形のピット1～4を検出した。また掘方でピット5・6を検出したが、これらのピットは建て替え等により掘られた柱穴である。竪穴住居の廃絶時における4本の支柱に相当する柱穴は、ピット1～4である。柱間はピット3・4が2.58m、ピット1・2が2.54m、ピット1・4が2.54m、ピット2・3が2.48mである。ピット5・6は建て替え前の補助的な柱穴である可能性が高い。なおピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

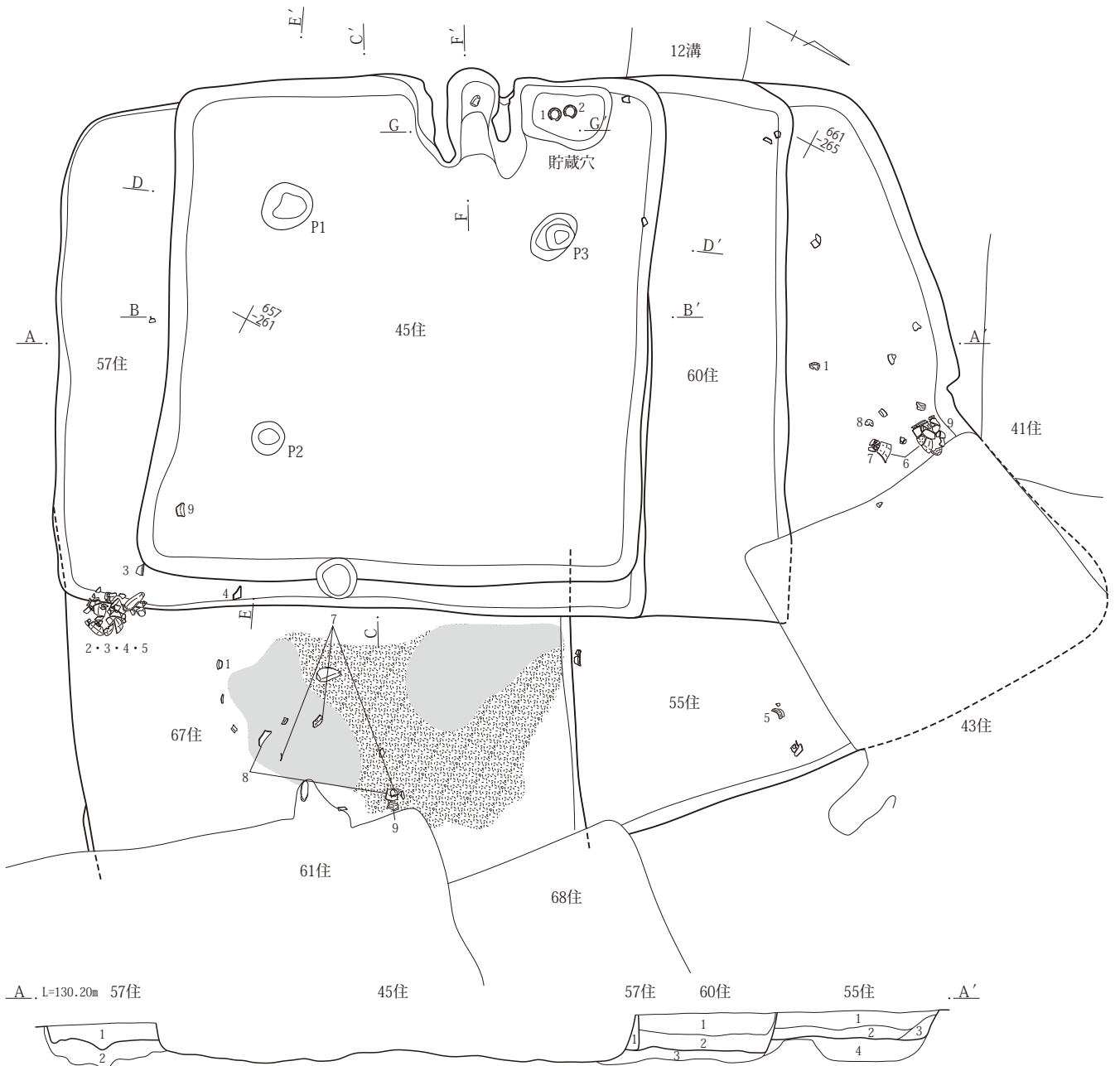
ピット1は長径0.57m、短径0.52m、深さ0.43m。

ピット2は長径0.74m、短径0.52m、深さ0.36m。

ピット3は長径0.69m、短径0.65m、深さ0.34m。

ピット4は長径0.48m、短径0.36m、深さ0.24m。

ピット5は長径0.33m、短径0.32m、深さ0.14m。



55号竪穴住居(A断面)

- 1 黒褐色シルト質～砂質土。焼土粒を少量含む。(1～3は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。
- 4 暗灰色中粒砂。下底は凸凹が著しい。(掘方埋土)

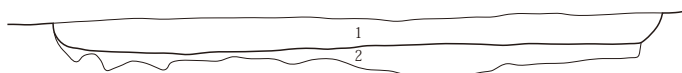
57号竪穴住居(A・B断面)

- 1 黒褐色シルト質～砂質土。焼土粒や炭化物を含む。(埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を多量に含む。(掘方埋土)

B. L=130.20m



C. L=130.20m



60号竪穴住居(A断面)

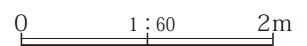
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。(1～2は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や黄灰色シルト質砂のブロック、粘土を含む。
- 3 暗灰色細～中粒砂。(掘方埋土)

45号竪穴住居(B・C断面)

- 1 暗黄灰褐色シルト質～砂質土。シルトブロックまじり中～細粒砂。径5～10mmの橙色焼土ブロックや径10～20mmの黄灰色中粒砂ブロックを含む。(埋土)
- 2 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を含む。(掘方埋土)

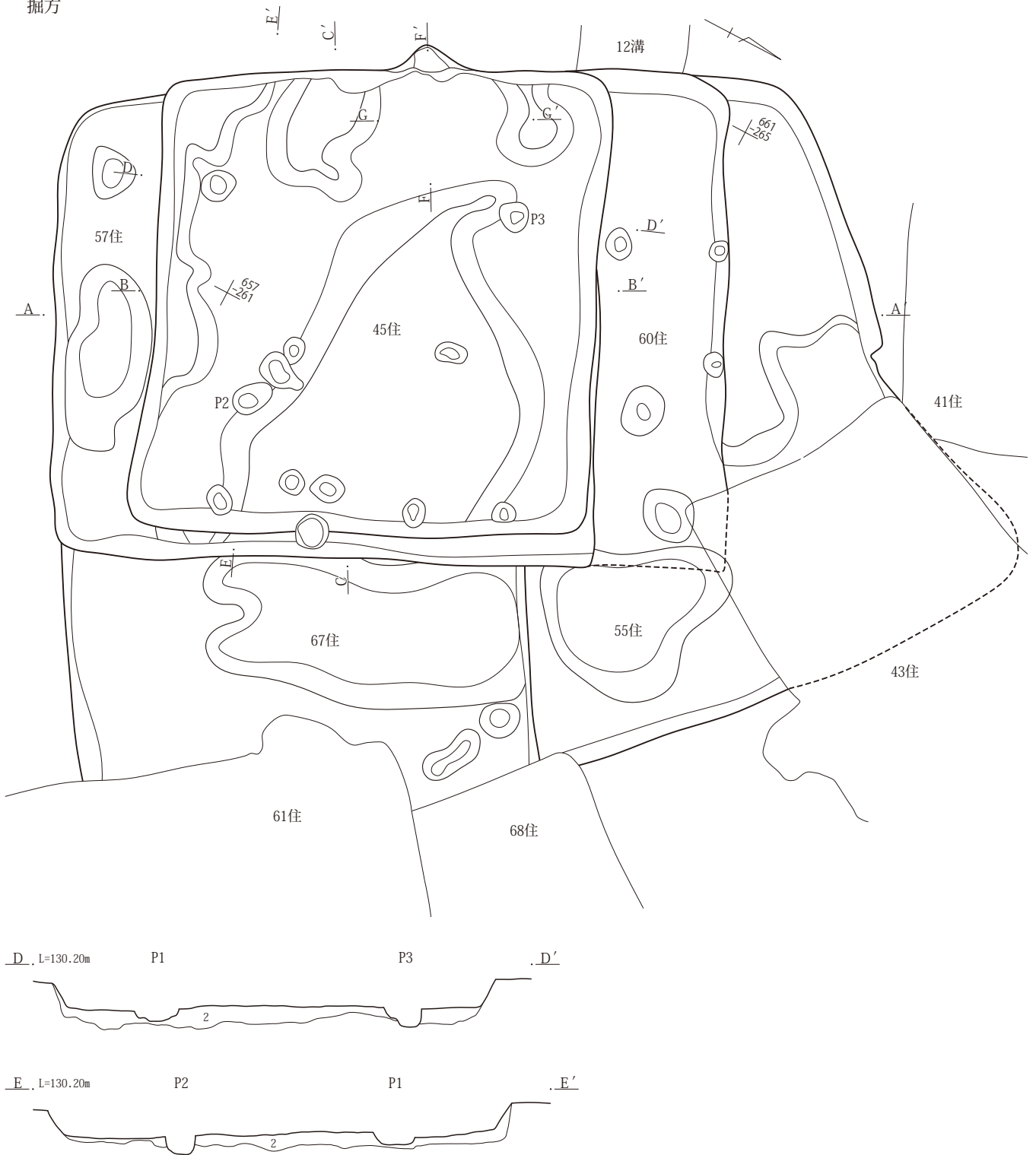
B'

C'



第106図 45・55・57・60・67号竪穴住居(1)

掘方



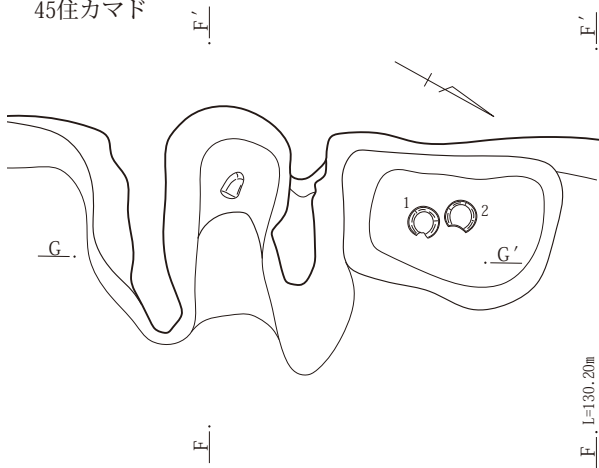
45号竪穴住居(D・E断面)

2 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を含む。(掘方埋土)

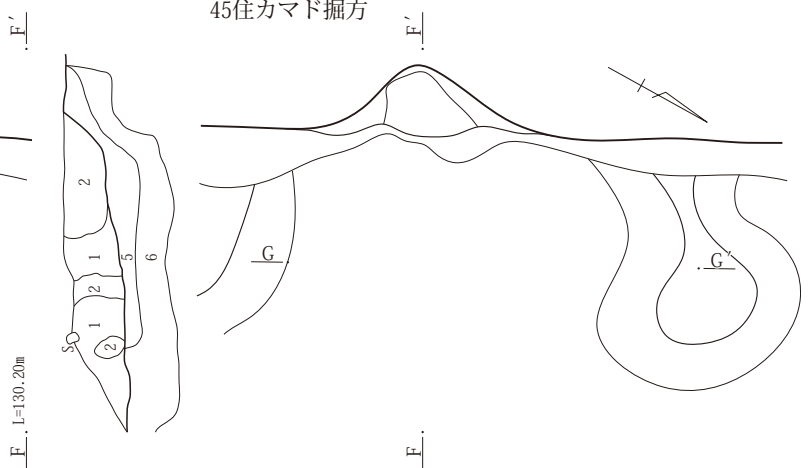
0 1:60 2m

第107図 45・55・57・60・67号竪穴住居(2)

45住カマド

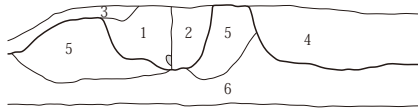


45住カマド掘方



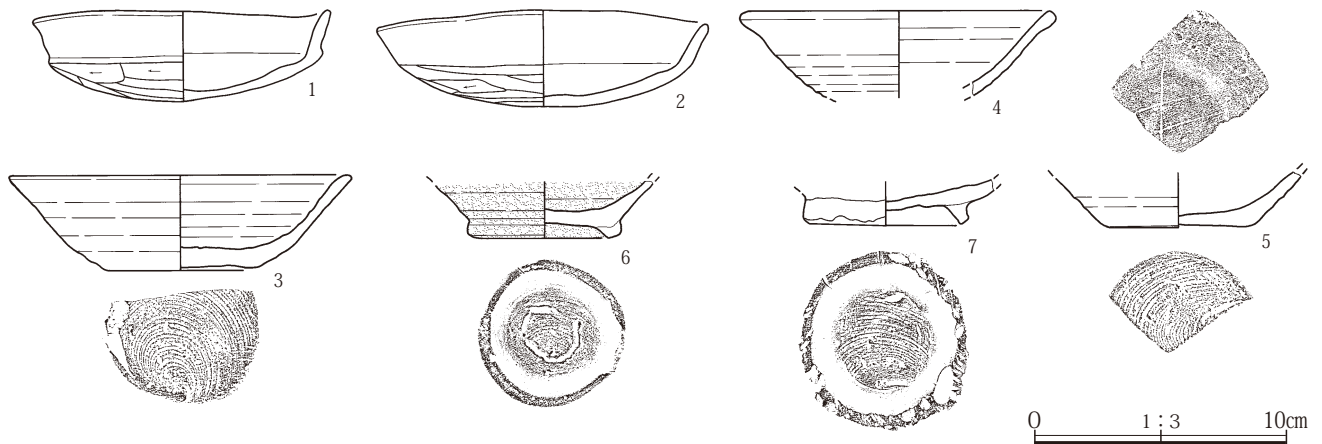
G, L=130.20m

F, L=130.20m



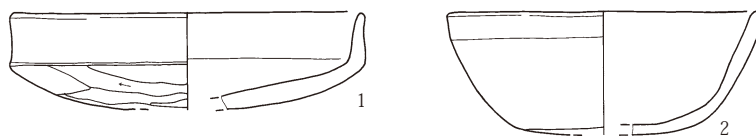
- 1 黄灰色シルト質細粒砂。焼土ブロックを少量含む。(1～3は埋土)
- 2 暗灰色細粒砂～中粒砂。
- 3 暗灰色中粒砂。
- 4 暗灰色礫まじり砂。(45号竪穴住居埋土)
- 5 黒褐色シルト質～砂質土。焼土粒を多量に含む。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。(5～6は掘方埋土)
- 6 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。焼土粒を少量含む。

0 1:30 1m



45住出土遺物

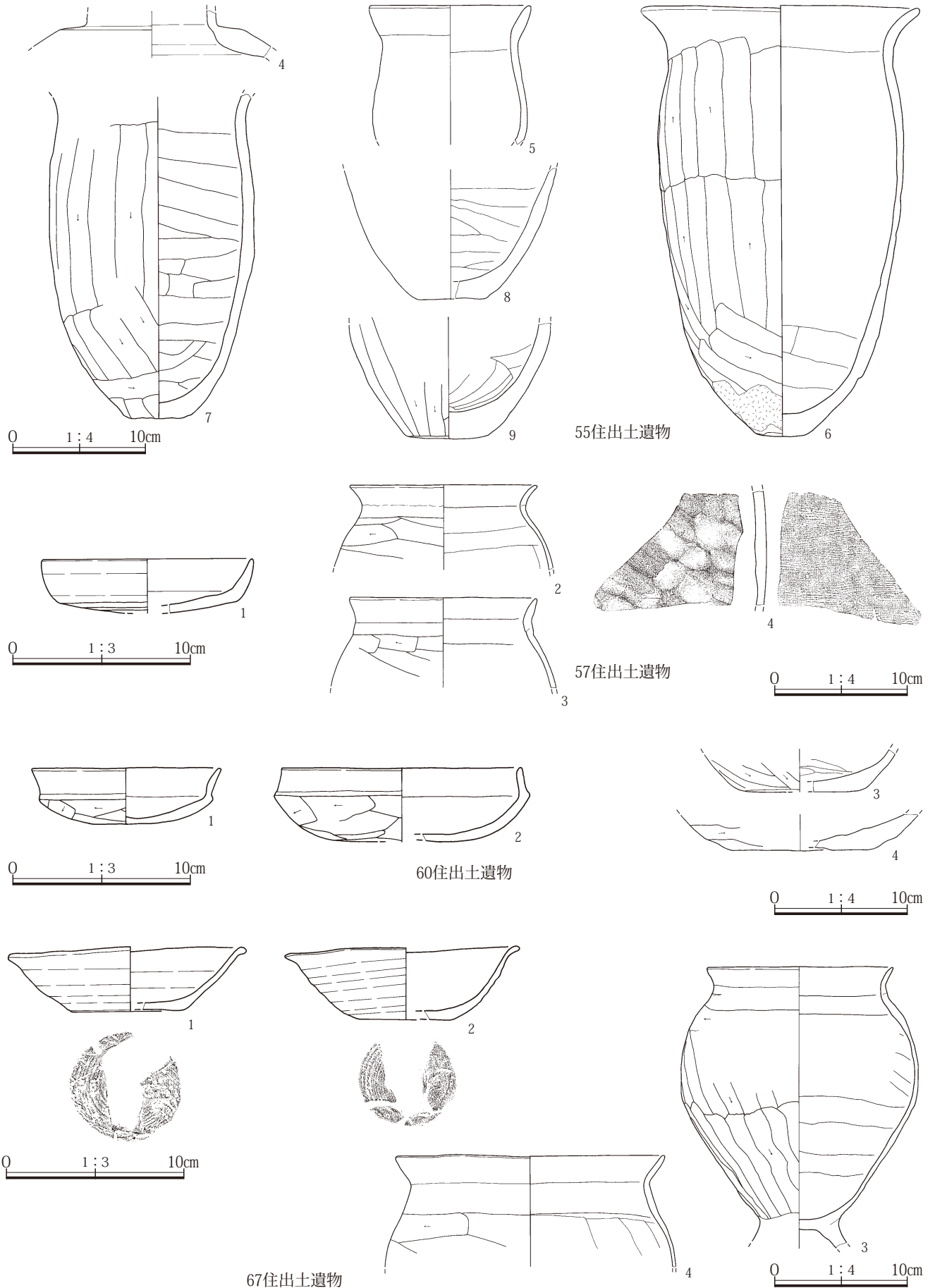
0 1:4 10cm



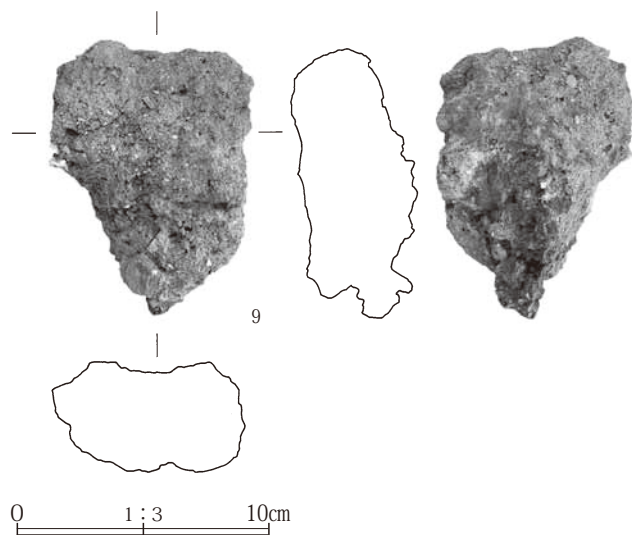
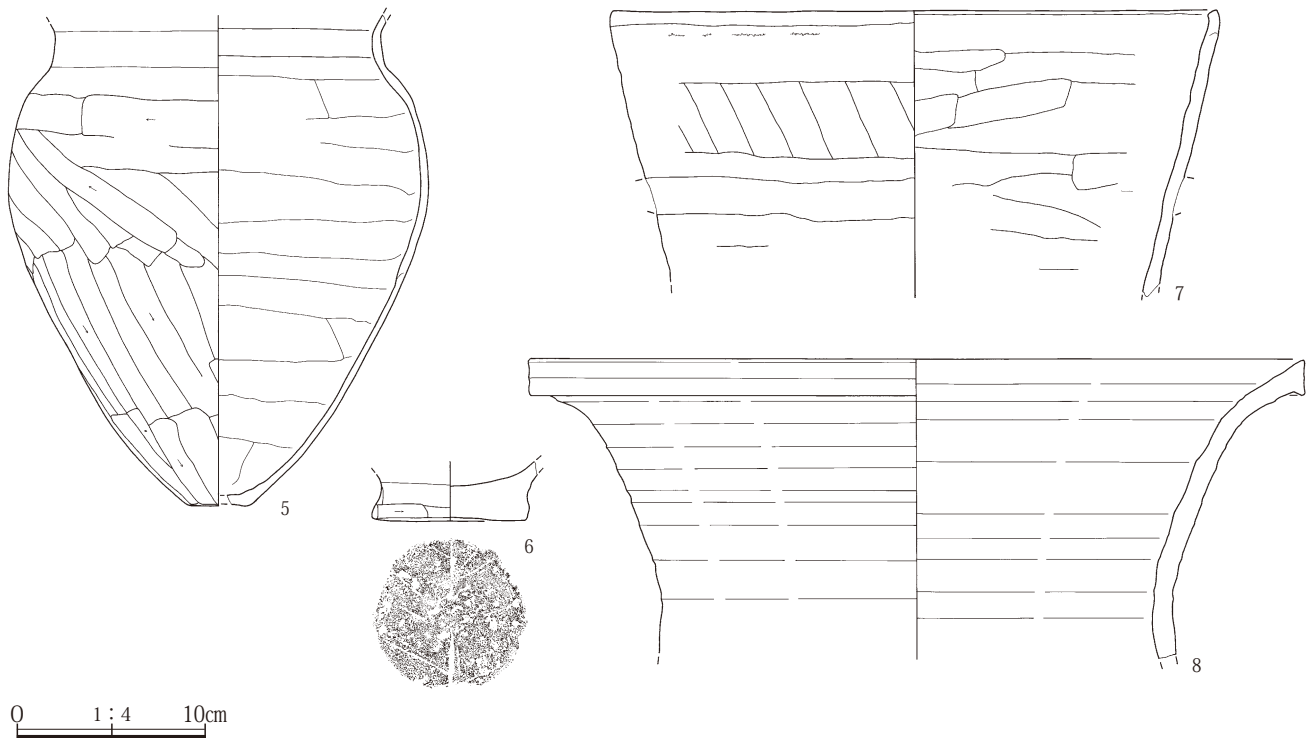
55住出土遺物

0 1:3 10cm

第108図 45号竪穴住居と45・55号竪穴住居の出土遺物



第109図 55・57・60・67号竪穴住居の出土遺物



第110図 67号竪穴住居の出土遺物

ピット6は長径0.57m、短径0.53m、深さ0.34m。

特徴 隣接する41号・50号竪穴住居と規模や形状が似ている。

遺物 カマド左手前の床面から土師器杯(4・8)、鉢(11)が、床面付近から土師器杯(2)や須恵器杯身(12)が出土した。また、床面から土師器杯(3・7)、鉢(10)や須恵器甕(16)の破片が出土した。これらの遺物はカマドが存在する北東壁際に分布する。

時代 奈良時代8世紀第1四半期。

47号竪穴住居(第114・115図、PL.28-7～28-8、228頁)

位置 中央部南西壁際。

座標 X=24674～24678 Y=-70281～-70286

主軸方位 N4° W

重複 26号・34号・39号竪穴住居に切られる。2号掘立柱建物のピット7に掘り込まれ、内区が重なる。40号竪穴住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居であるが、北西壁際を26号・39号竪穴住居によって失われている。長径は4.50m、短径3.96m、床面までの深さ0.24m、掘方までの深さ0.43m、残存する面積は14.11㎡+である。

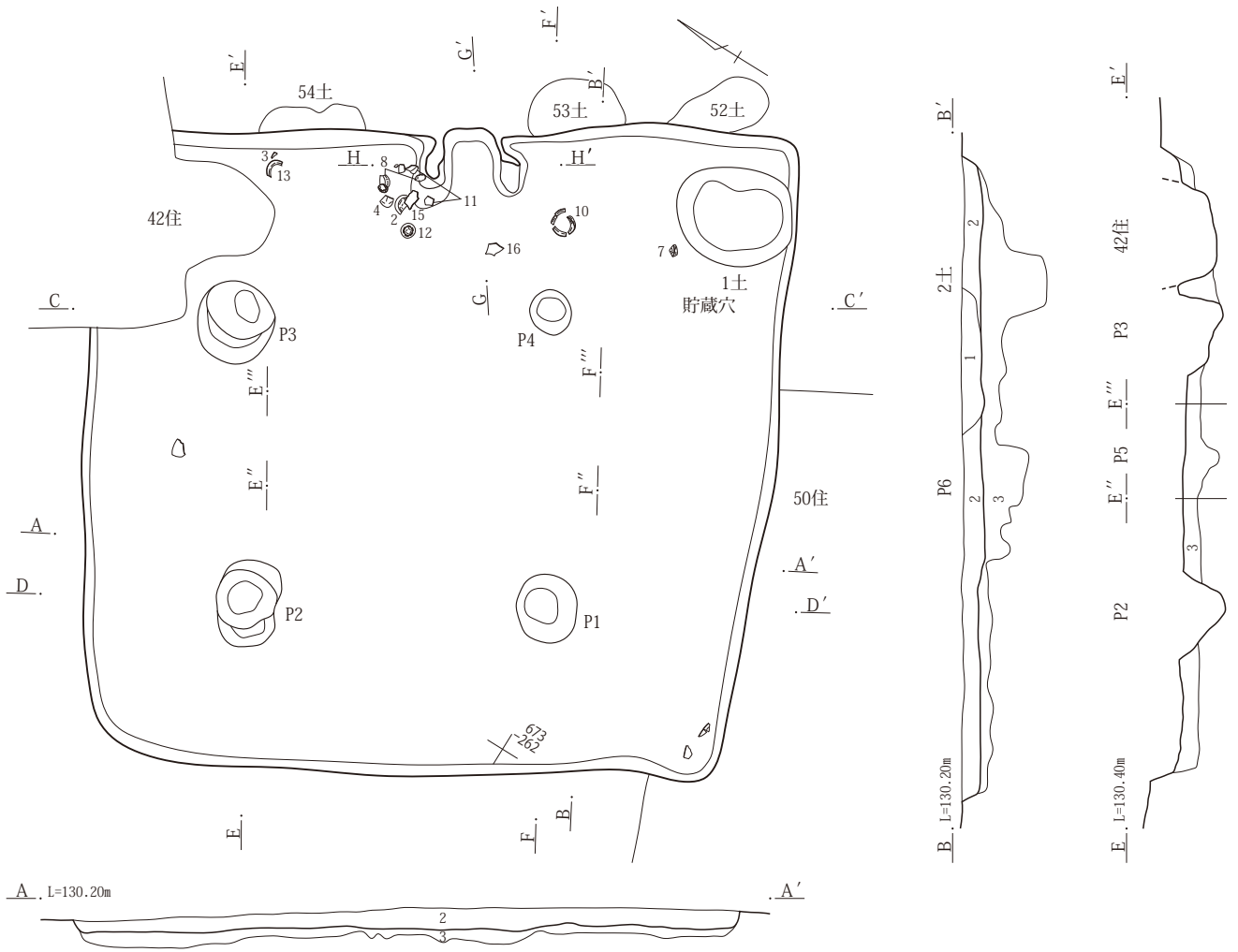
埋土 暗褐色シルト質～砂質土互層からなり、黄灰色シルト質砂や焼土のブロックを含む。東壁から竪穴中央に向かって成層している。

床面 黄灰色シルト質砂のブロックを含む黒褐色シルト質砂で構築しており平坦である。

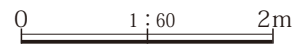
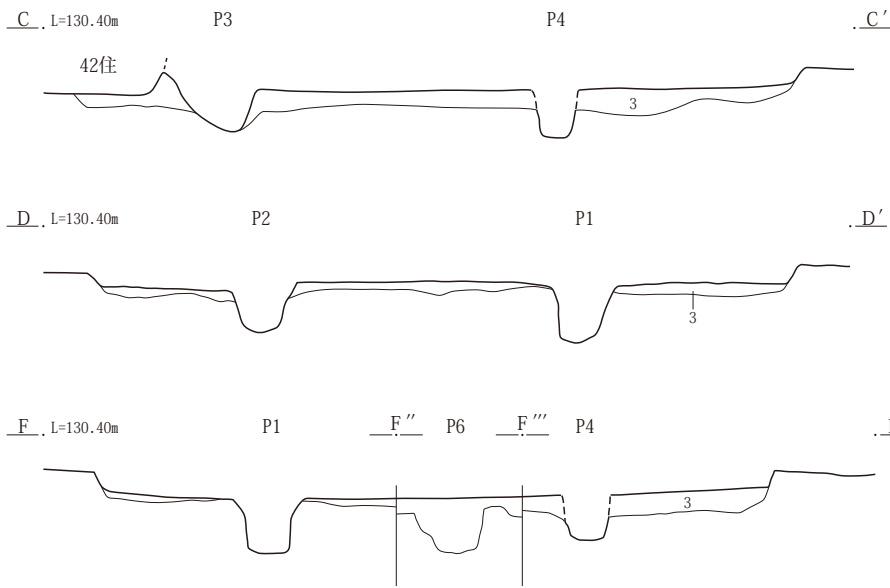
掘方 掘方と床面の間は0.03～0.20mで、ほぼ平坦である。北東壁と南壁際に不定形の溝状の窪みがみられる。

カマド 竪穴住居の北壁北西部、西壁、南壁の南西部が重複で失われており、残存する部分からは検出されなかった。

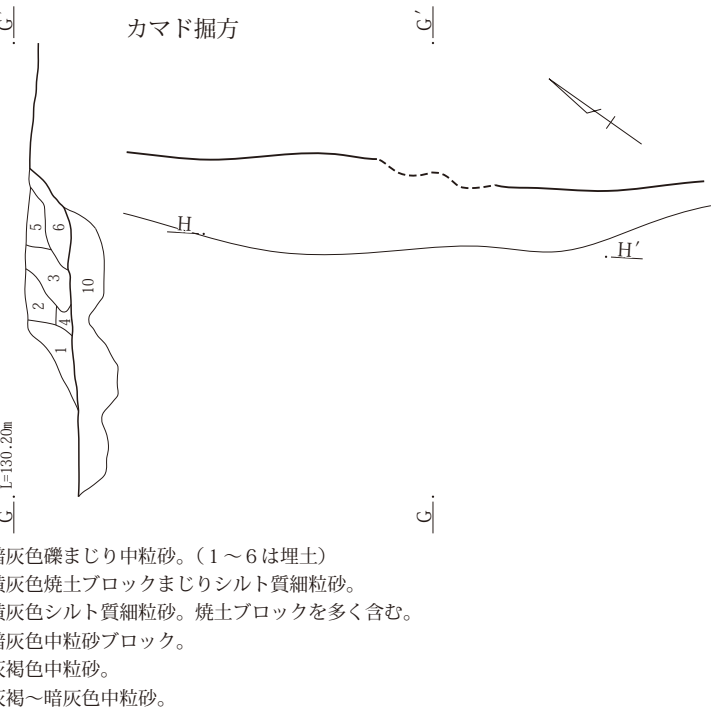
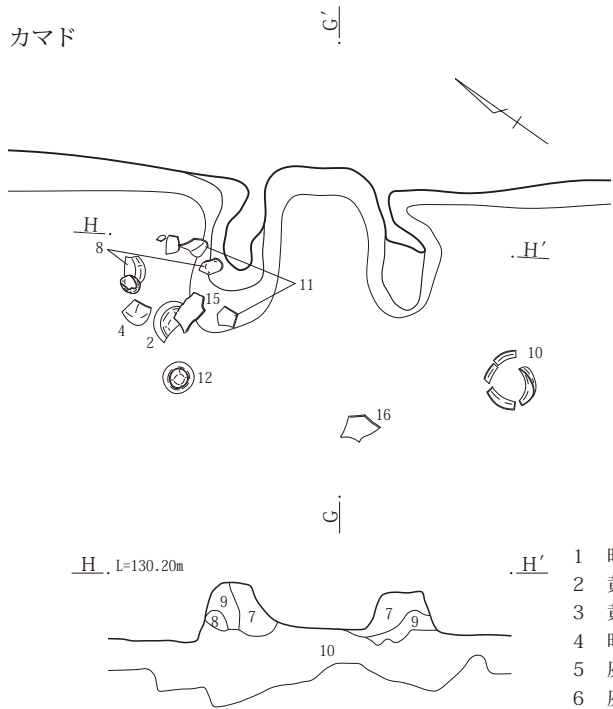
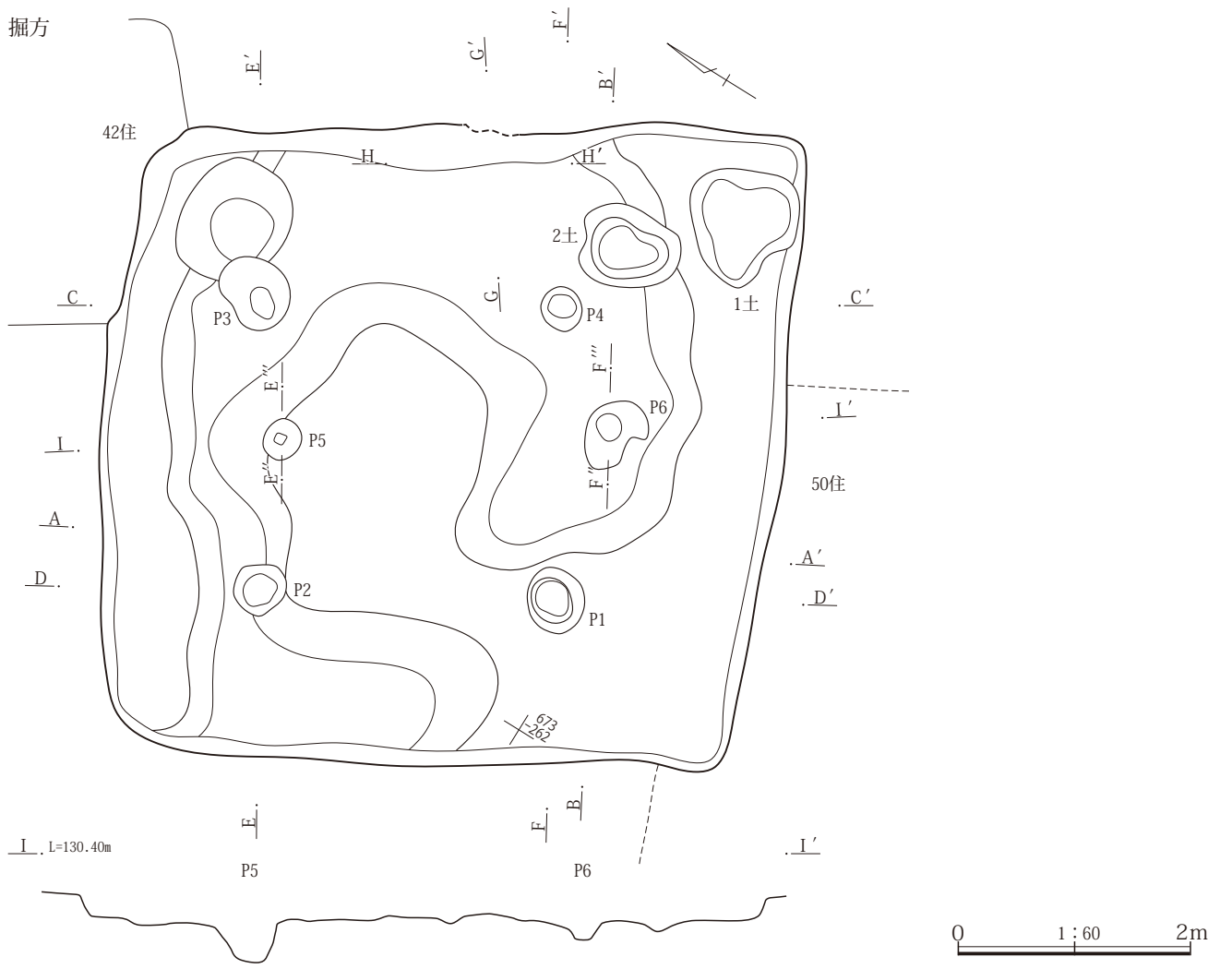
貯蔵穴 貯蔵穴は床面で検出された南東隅の東壁際に位置する土坑1である。土坑1は二重の円形を呈し、長径



- 1 暗灰褐色シルトまじり中～粗粒砂。(1～2は埋土)
- 2 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。径10mmの亜円礫まじり。
- 3 暗灰色礫まじり中～細粒砂。径10～40mmの亜円礫を含む。色調は暗く黒色に近い。(掘方埋土)

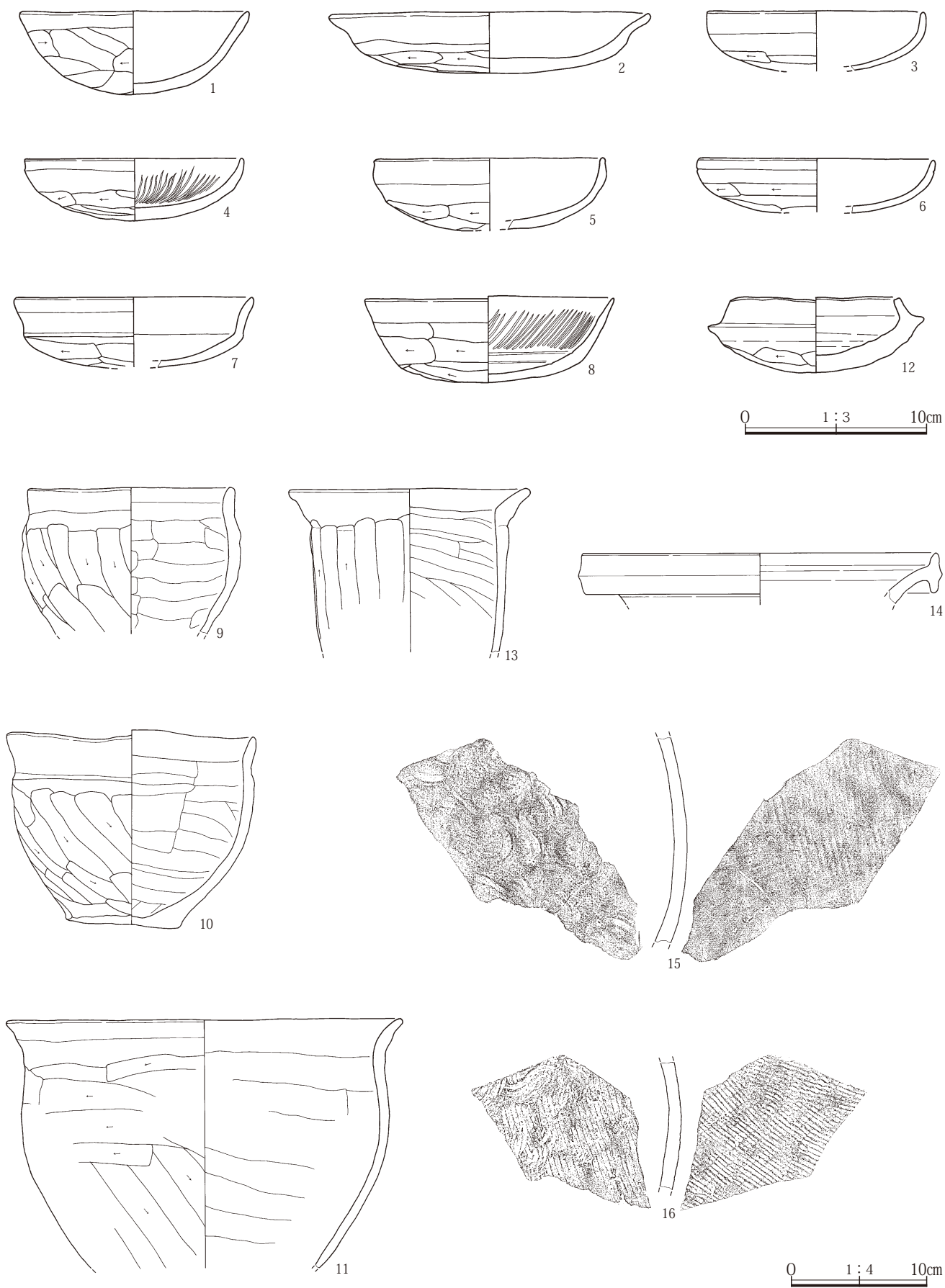


第111図 46号竪穴住居(1)

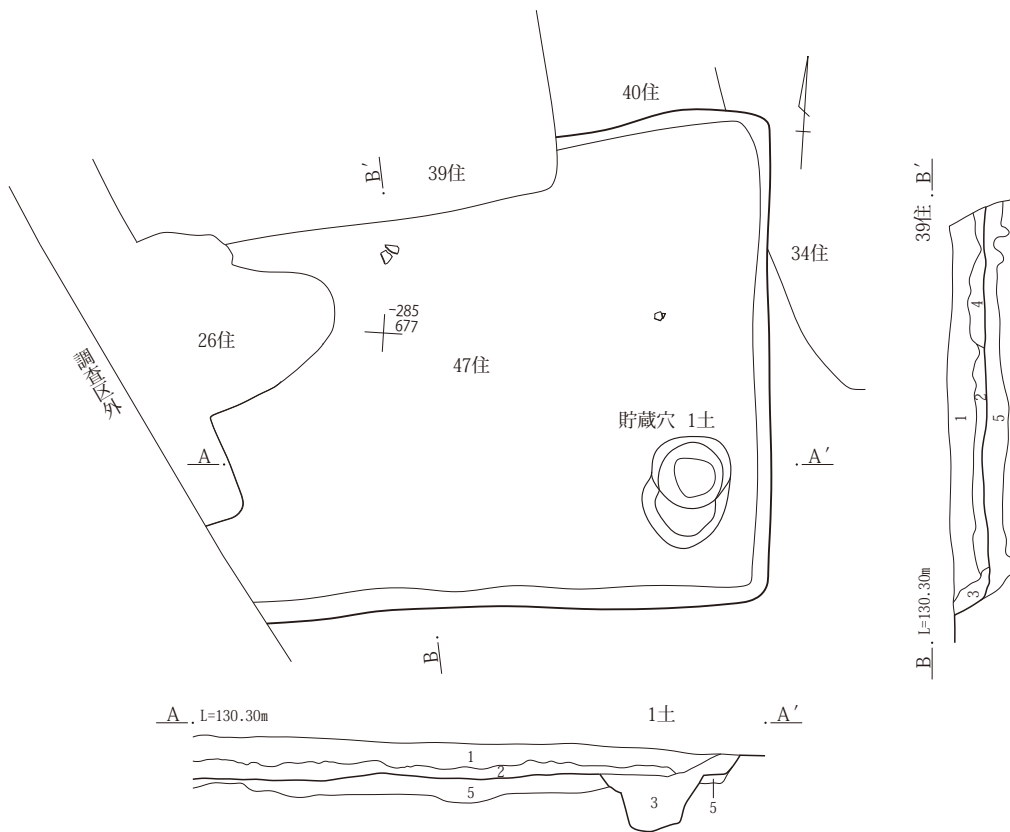


- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。(1～6は埋土)
- 2 黄灰色焼土ブロックまじりシルト質細粒砂。
- 3 黄灰色シルト質細粒砂。焼土ブロックを多く含む。
- 4 暗灰色中粒砂ブロック。
- 5 灰褐色中粒砂。
- 6 灰褐～暗灰色中粒砂。
- 7 橙灰褐色シルト質細粒砂。焼土化している。(7～10は掘方埋土。7～9は袖構築材)
- 8 灰褐色シルト質細粒砂。弱い焼土化を受けブロック状を呈する。
- 9 暗灰色礫混じり中～細粒砂。
- 10 暗黄灰色礫まじり粗～極粗粒砂。径10～20mmの礫が多い。

第112図 46号竪穴住居(2)

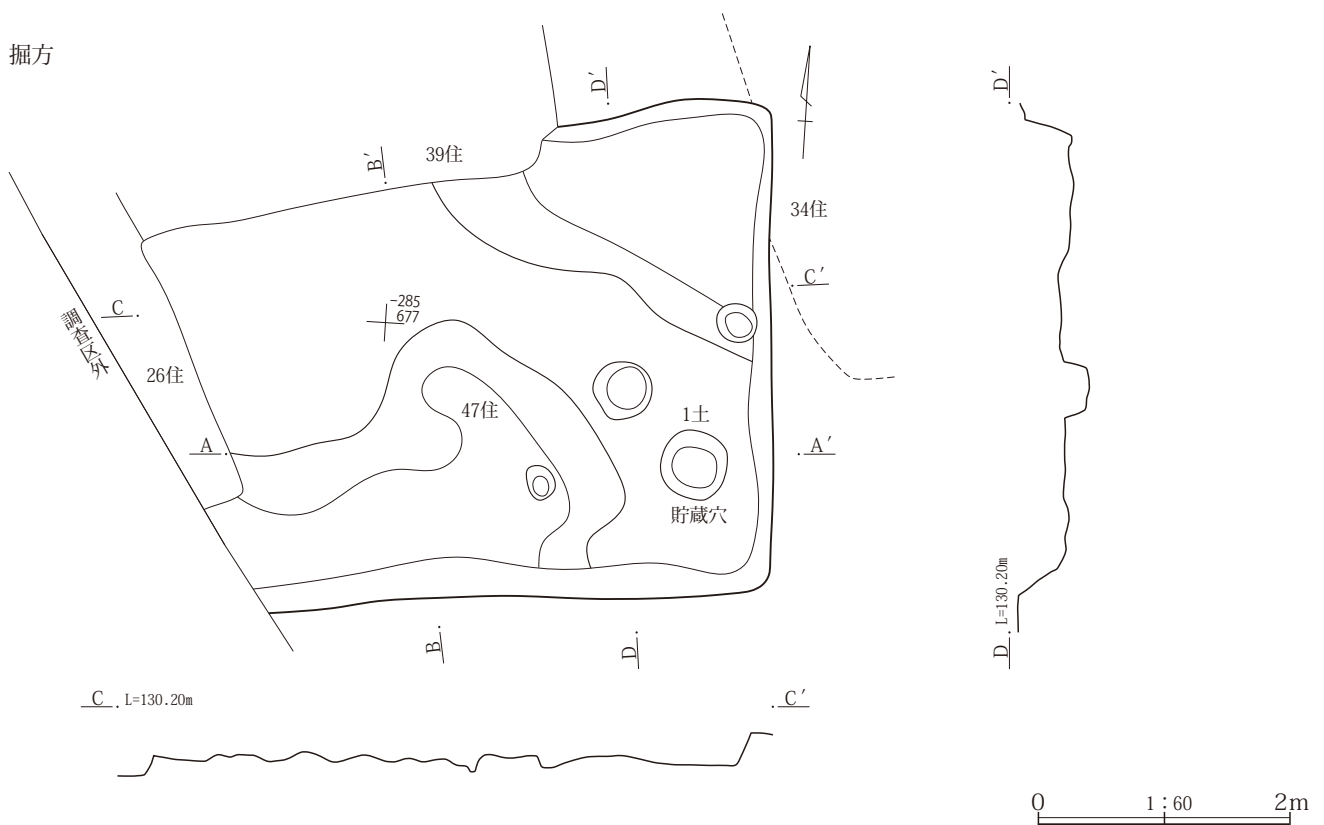


第113図 46号竪穴住居の出土遺物

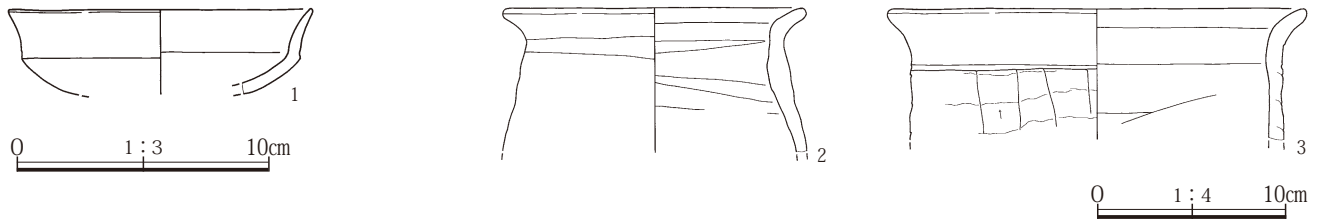


- 1 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や黄灰色シルト質砂のブロック含む。(1～4は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や黄灰色シルト質砂のブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。粘土や焼土ブロックを含む。
- 5 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや細礫を含む。(掘方埋土)

掘方



第114図 47号竪穴住居



第115図 47号竪穴住居の出土遺物

は0.88m、短径0.63m、深さ0.45m。

柱穴 掘方で直径0.48m、深さ0.24mの浅い窪み状のピットを検出したが、柱穴に相当する可能性は低い。長辺が4mを越える竪穴住居であるが、床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 埋土から土師器杯(1)や甕(2・3)の破片が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

48号 竪穴住居(第116・117・118図、PL.29-1～29-2・65、228・229頁)

位置 南東部南西壁際。

座標 X=24654～24663 Y=-70267～-70275

主軸方位 N65° E

重複 12号溝に切られる。断面観察で埋土は69号竪穴住居の埋土に切られる。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈するが南西部の大部分は調査区外にある。長径は9.00m、検出した最大の短径3.24m+、床面までの深さ0.38m、掘方までの深さ0.48m、検出された最大の面積23.11㎡であるが、東壁の一辺が9mに達することから大規模な竪穴住居の可能性が高い。

埋土 南西壁際の断面観察では、耕作土と2層の層理面から掘り込まれた暗黄灰色シルト質砂からなる。

床面 暗灰色シルト質砂を貼って構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.03～0.10mで、全体に平坦であるが長径2.24mの不定形の溝状の窪みが複数みられる。

カマド 床面の精査では検出されなかった。竪穴住居の大部分は調査区外にあり、カマドも調査区外に存在する可能性がある。

貯蔵穴 床面では見つからず、掘方の調査で検出された北西壁際の北角際に位置する土坑1が貯蔵穴と考えられ

る。長径は0.93m、短径0.58m、深さ0.70m。

柱穴 床面で断面形状が円筒形のピット1・2を、また掘方でU字形のピット3を検出した。ピット1と2は建て替え等により掘られた柱穴であると推定されるが新旧関係は不明である。ピット1・2とピット3の柱間は竪穴住居の北東壁の走行に平行しており、これらが柱穴である可能性は極めて高い。柱間は5.10～4.68mである。なおピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.60m、短径0.44m、深さ0.49m。

ピット2は長径0.48m、短径0.36m、深さ0.48m。

ピット3は長径0.62m、短径0.50m、深さ0.48m。

遺物 床面付近から土師器椀(7・9)が出土し、東壁際の床面より20cm上から刀子(25)が出土した。柱穴のピット1の底面から10cm上に土師器杯(6)がピット2の底面から5cm上から甕(18)の破片が出土した。貯蔵穴に近い北東壁際周辺には、長径0.19mの結晶片岩の垂円礫が6点出土した。これらは加工の痕跡が認められないがこも編み石として使用された可能性がある。近くからは床面より12～13cm上の埋土中から完形の土師器杯(4)と椀(8)が出土した。埋土から10世紀代の年代を示す須恵器椀(20・21)、灰釉陶器椀(22)、須恵器羽釜(23・24)が出土したが、これらは48号竪穴住居に重複した69号竪穴住居の遺物であると思われる。

時代 古墳時代6世紀後半。

50号 竪穴住居(第119～122図、PL.29-3～29-6・65・66、229・230頁)

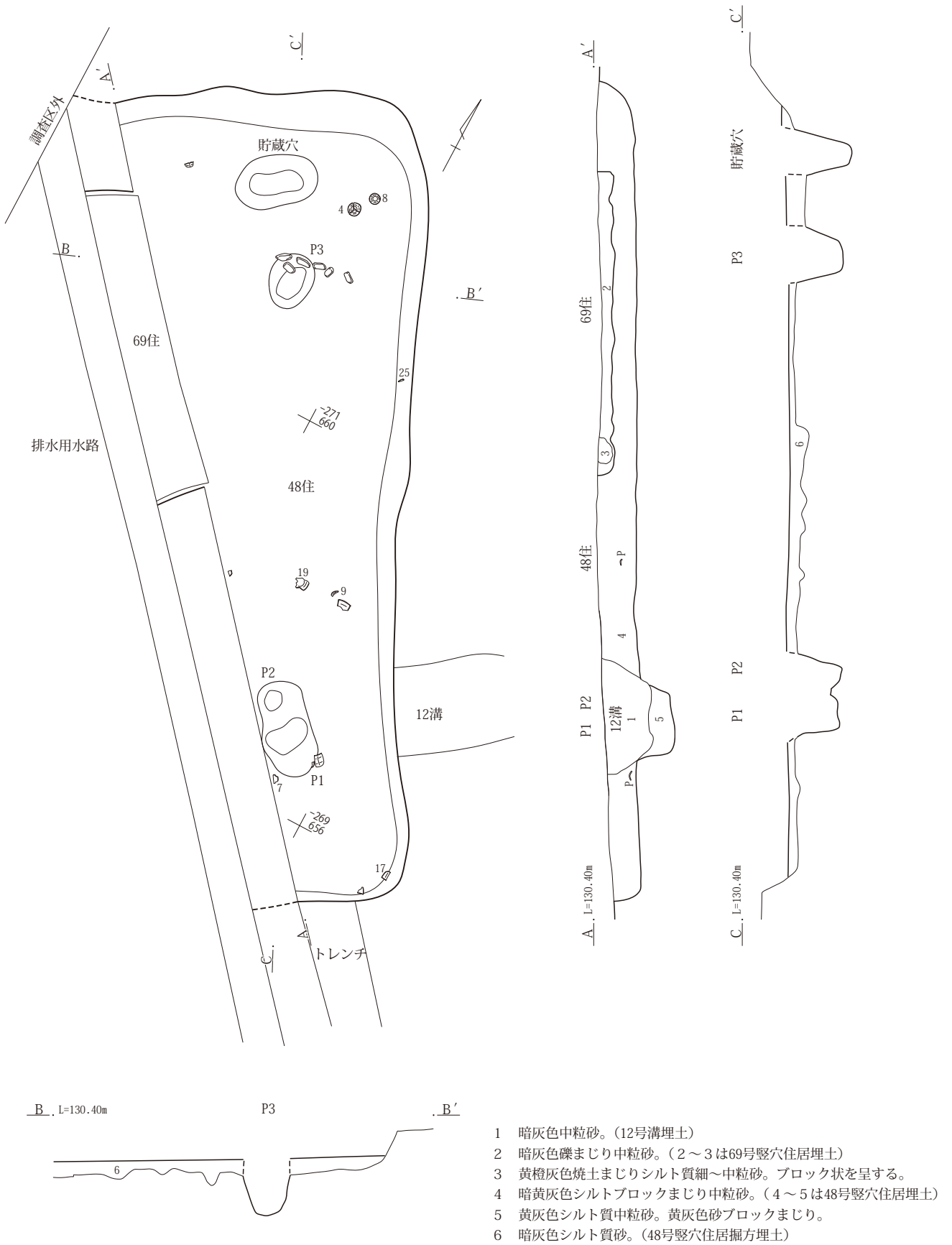
位置 南東部中央。

座標 X=24665～24672 Y=-70255～-70263

主軸方位 N61° E

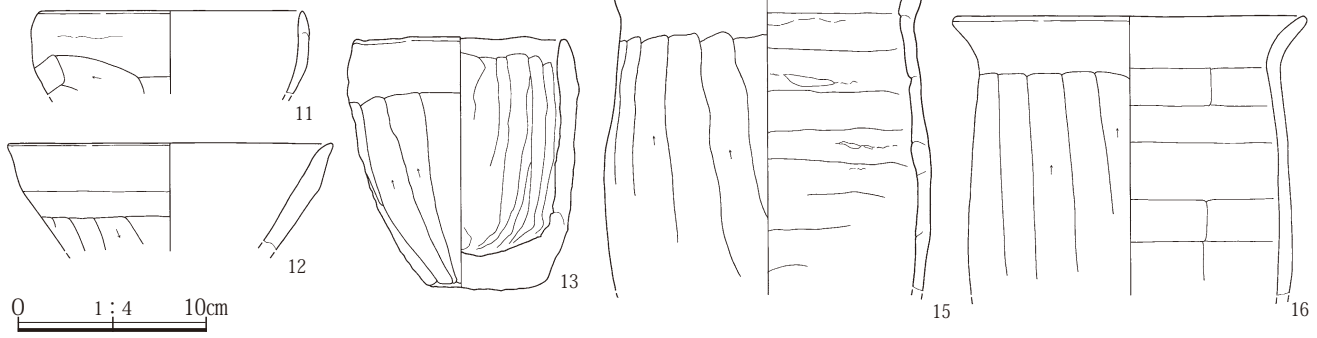
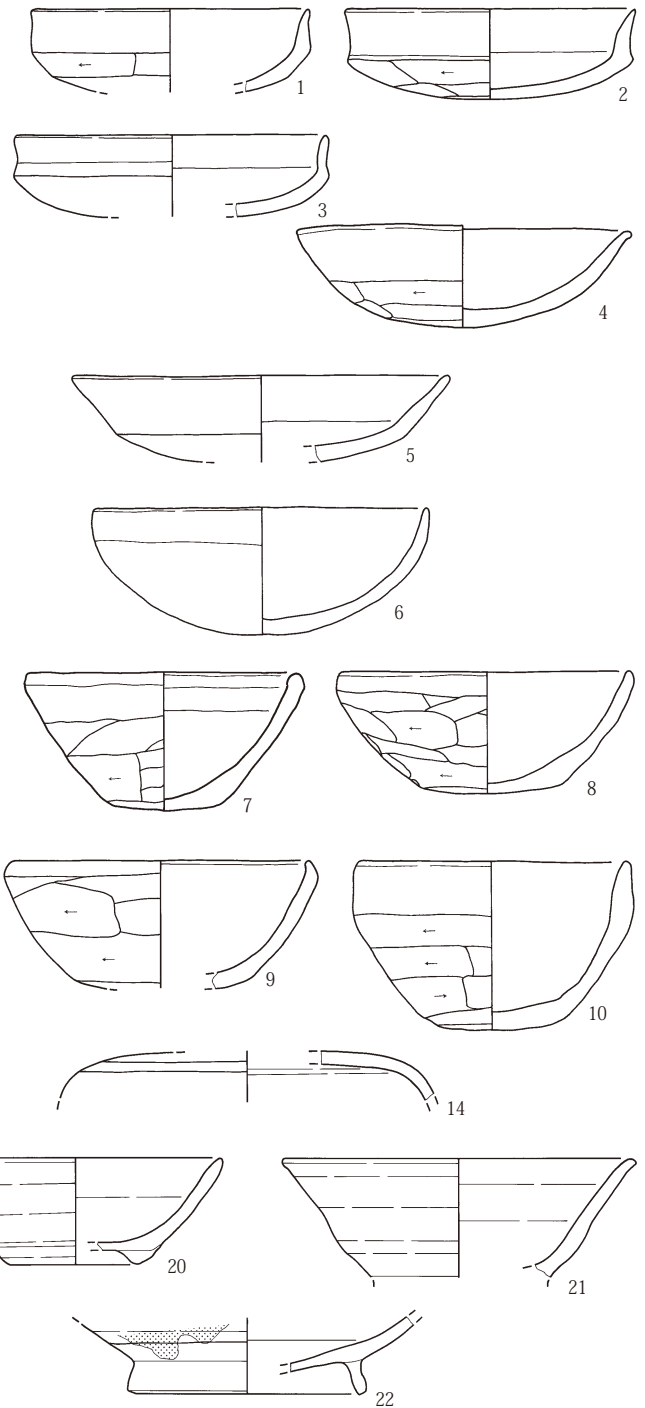
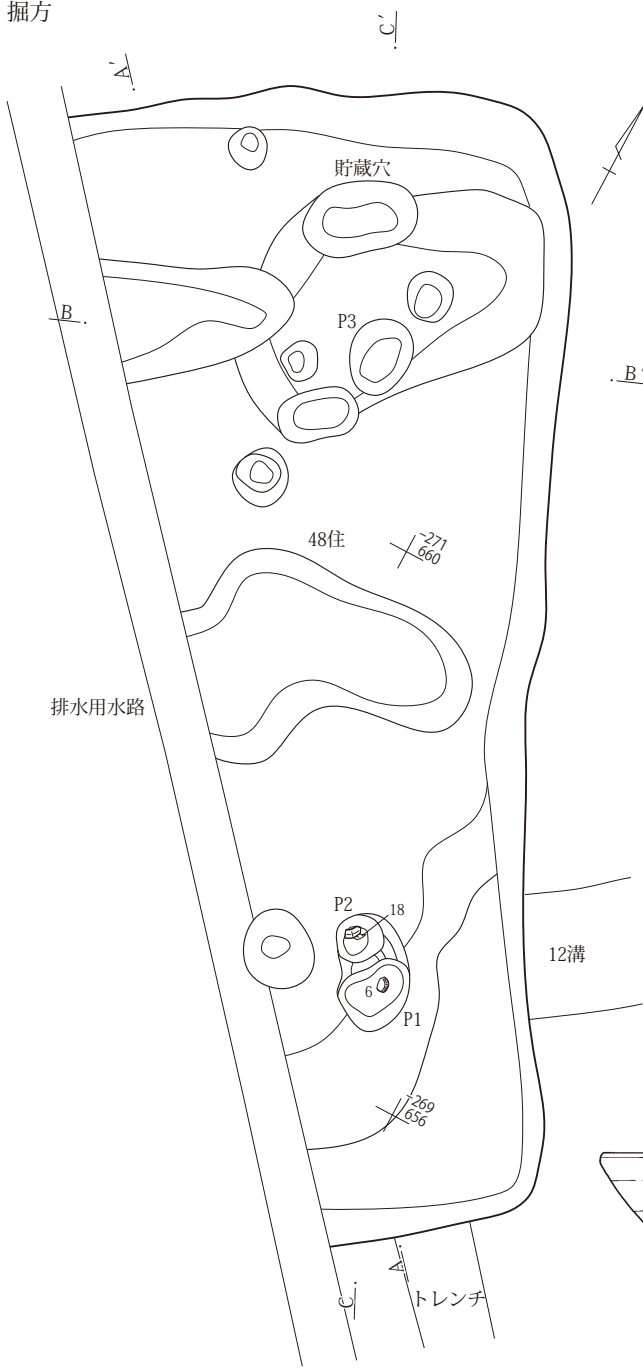
重複 43号・46号竪穴住居に切られる。63号竪穴住居を切る。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方

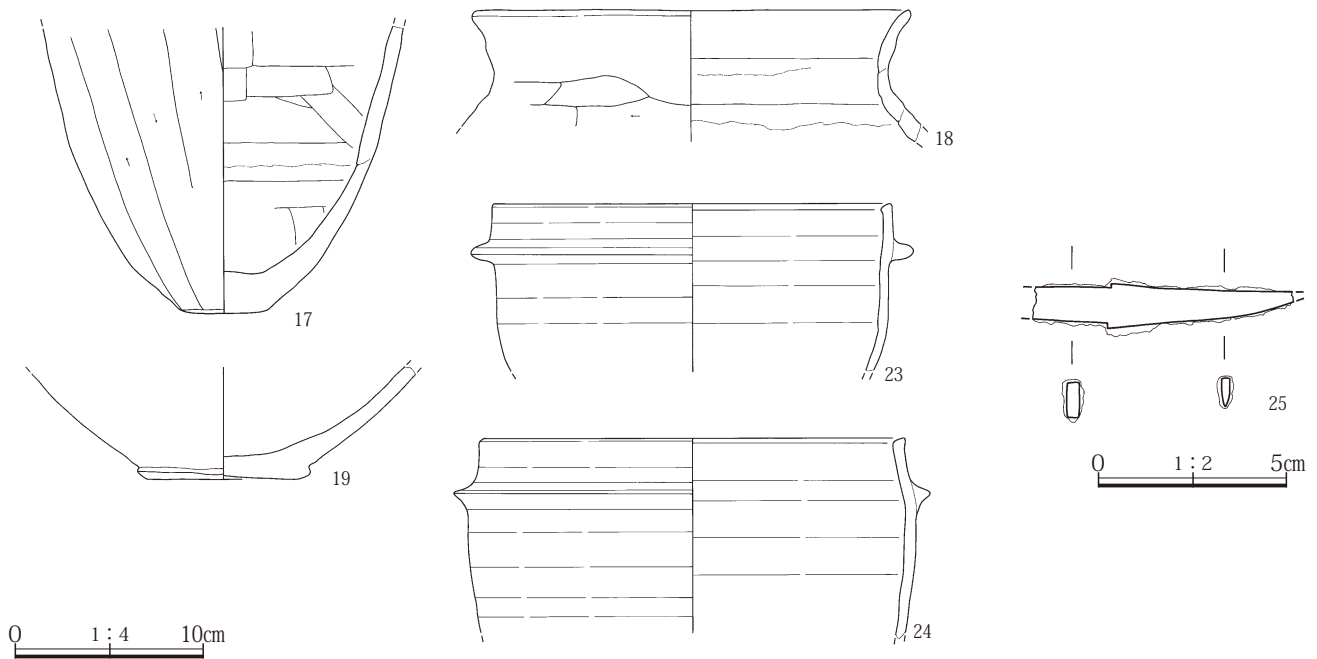


第116図 48・69号竪穴住居

掘方



第117図 48号竪穴住居と出土遺物



第118図 48号竪穴住居の出土遺物

形を呈する竪穴住居である。長径は6.07m、短径5.92m、床面までの深さ0.35m、掘方までの深さ0.55m、面積33.95㎡である。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックや焼土を含む。埋土は黒褐色土の上層と暗褐色土の下層にほぼ水平に成層して竪穴に堆積している。

床面 黄灰色シルト質砂ブロックを多く含む暗灰色砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.24mで、カマド周辺と南西隅が不定形の溝状に窪んでおり、そのほかの場所は平坦である。竪穴の南東部は歪んだ方形の窪み状を呈し、低くなっているが、これは隣接する63号竪穴住居の掘方であると推定される。

カマド 南西壁の中央より南寄りに位置する。カマドの燃烧部は南西壁よりも手前から壁に4層の黄灰色礫まじり中粒砂層を掘り込んで、黒褐色シルト質土を貼って構築している。煙道部は大部分が失われているが燃烧部との境界は長径0.38m、短径0.24mである。両袖は奥の半分が残存し、手前は基礎を残して失われているが灰褐色のシルト～粘土質砂で構築している。燃烧部は袖と同様の灰褐色シルト質砂を貼って構築し、壁の一部が焼土化している。袖と燃烧部は手前に向かって緩やかに開き、燃烧部の使用面は手前に緩く傾斜している。

カマドの幅は1.01m、長さ0.98m、焚口の幅0.66m。

貯蔵穴 南西壁際の南隅に位置する土坑1が貯蔵穴である。北西壁際の方向に沿った楕円形を呈し、長径は1.10m、短径0.79m、深さ0.70mである。貯蔵穴底から30cm上から土師器杯(5)、10cm上から杯(9)、21cm上から甕(24)、甕(27)の破片が出土した。掘方からは北東壁際の南東隅の位置に長径は0.69m、短径0.62m、深さ0.16mの浅い土坑2が検出された。土坑2は作り替えを行い床下に埋められた貯蔵穴の可能性はある。

柱穴 床面で断面形状が円筒形のピット1～4を検出した。柱間はピット3・4が2.88m、ピット1・2が2.80m、ピット1・4が2.92m、ピット2・3が2.64mである。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.56m、短径0.44m、深さ0.30m。

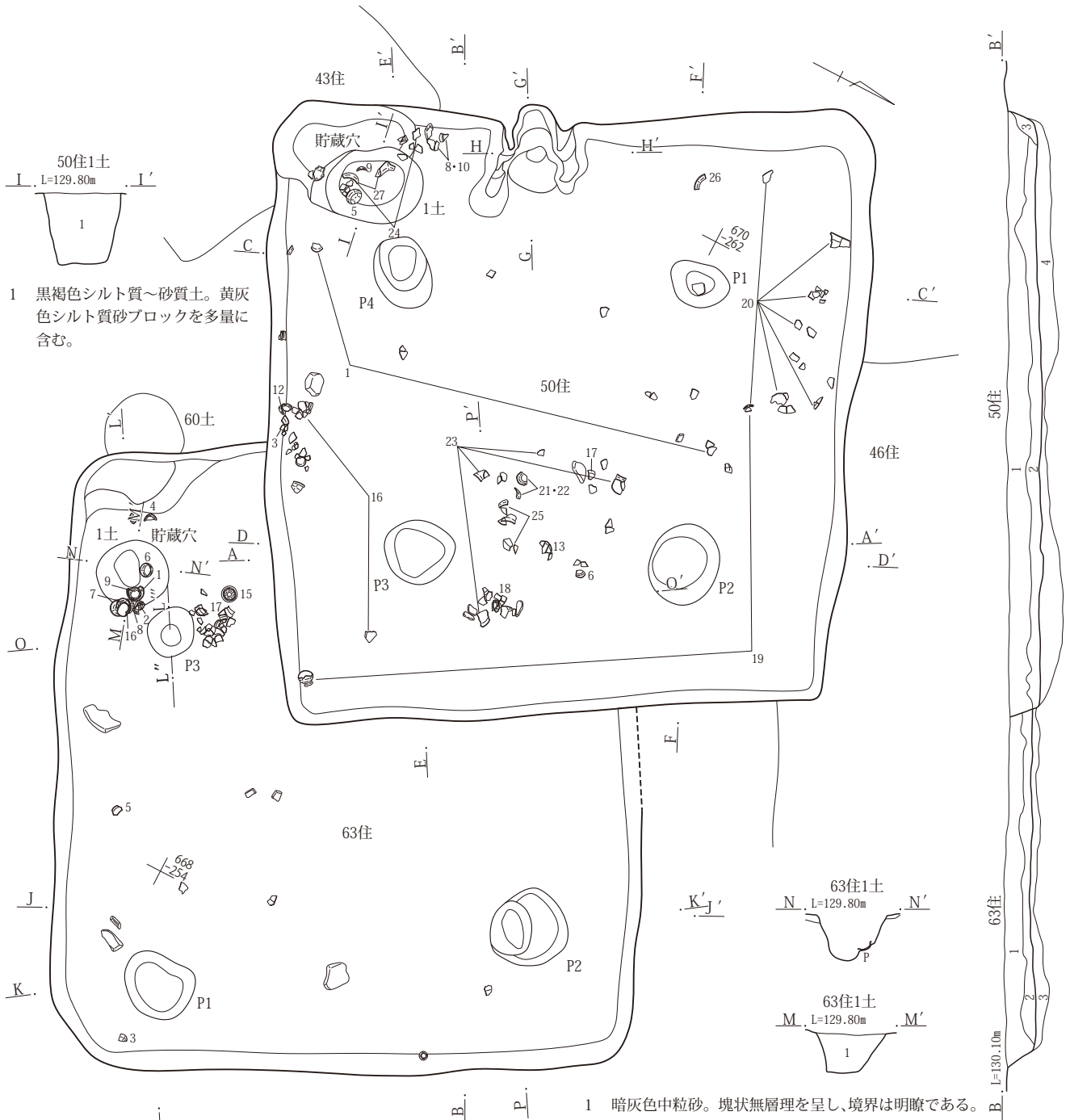
ピット2は長径0.80m、短径0.68m、深さ0.22m。

ピット3は長径0.70m、短径0.64m、深さ0.29m。

ピット4は長径0.72m、短径0.54m、深さ0.32m。

特徴 隣接する41号・46号・63号竪穴住居と規模や形状が似ている。

遺物 床面から土師器杯(1・3・8・10・16)、甕(25)の破片が出土し、その分布はカマドの前を除いて床全体に散在している。また床面付近からは土師器杯(6)、有孔鉢(18)、甕(20)、甕(23)が出土した。また貯蔵穴の埋

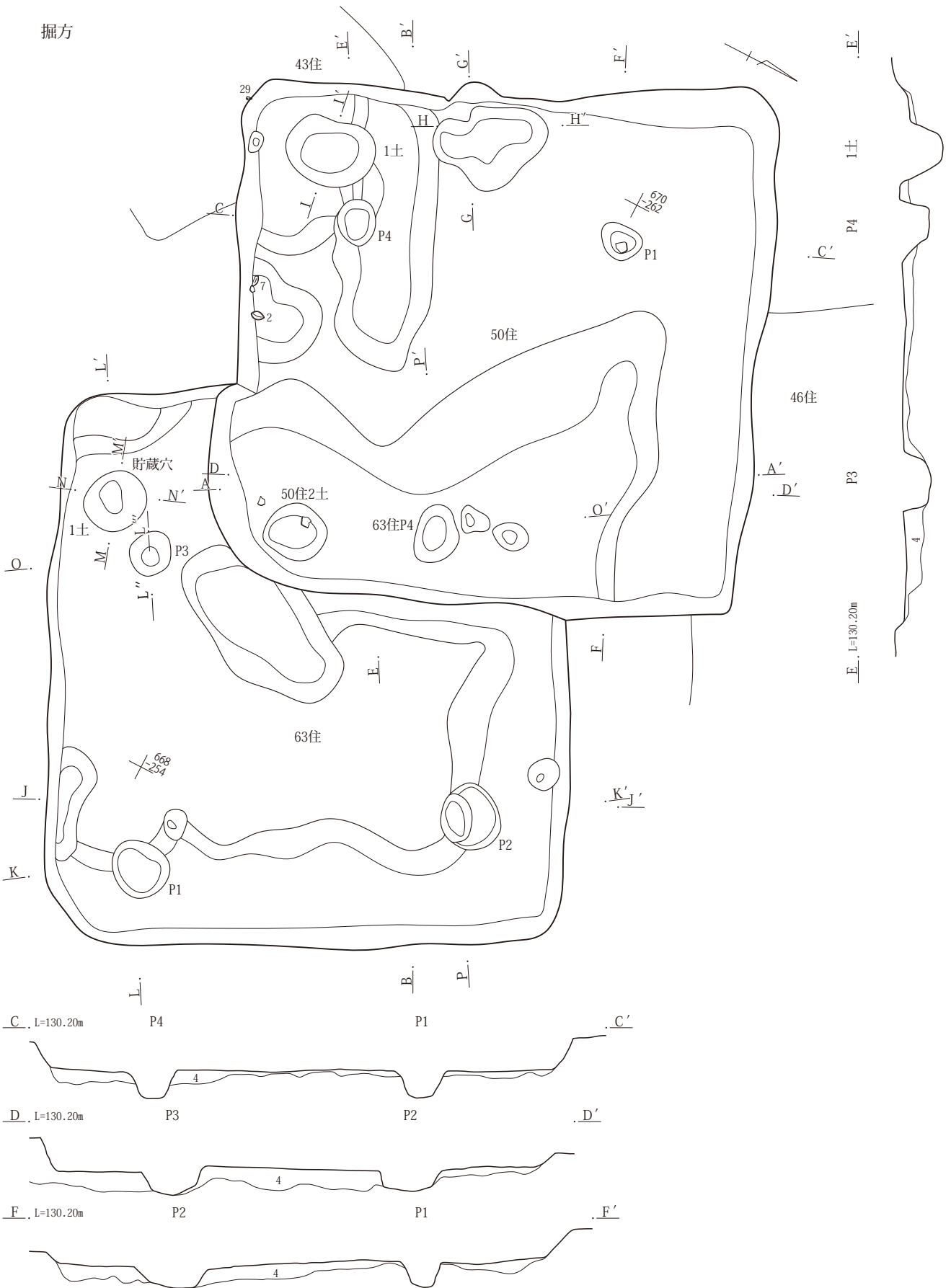


- 1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを多量に含む。
- 1 暗灰色中粒砂。塊状無層理を呈し、境界は明瞭である。
- 50号竪穴住居(A・B断面)
- 1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。(1～3は埋土)
 - 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土、灰を含む。
 - 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。
 - 4 暗灰色礫まじり砂。黄灰色砂のブロックを多く含む。(掘方埋土)
- 63号竪穴住居(B断面)
- 1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を含む。(1～2は埋土)
 - 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂や焼土粒を含む。
 - 3 暗灰色中粒砂。黄色中粒砂ブロックまじり。(掘方埋土)
- 63号竪穴住居(J断面)
- 1 黒褐色シルト質～砂質土。炭化物を含む。(1～2は埋土)
 - 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土を含む。
 - 3 暗灰色中粒砂。黄灰色シルト質砂ブロックを多く含む。(掘方埋土)



第119図 50・63号竪穴住居(1)

掘方



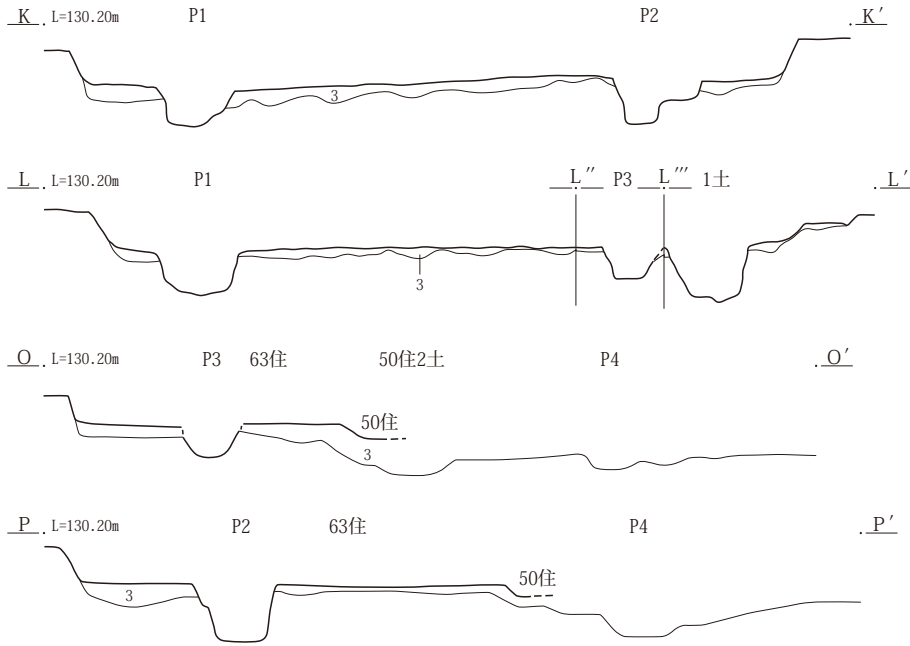
50号竪穴住居(C・D・F断面)

4 暗灰色礫まじり砂。黄灰色砂のブロックを多く含む。(掘方埋土)

0 1:60 2m

第120図 50・63号竪穴住居(2)

第3章 調査された遺構と遺物



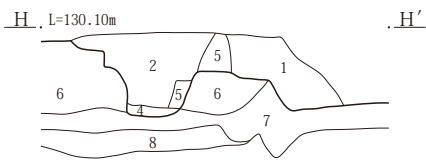
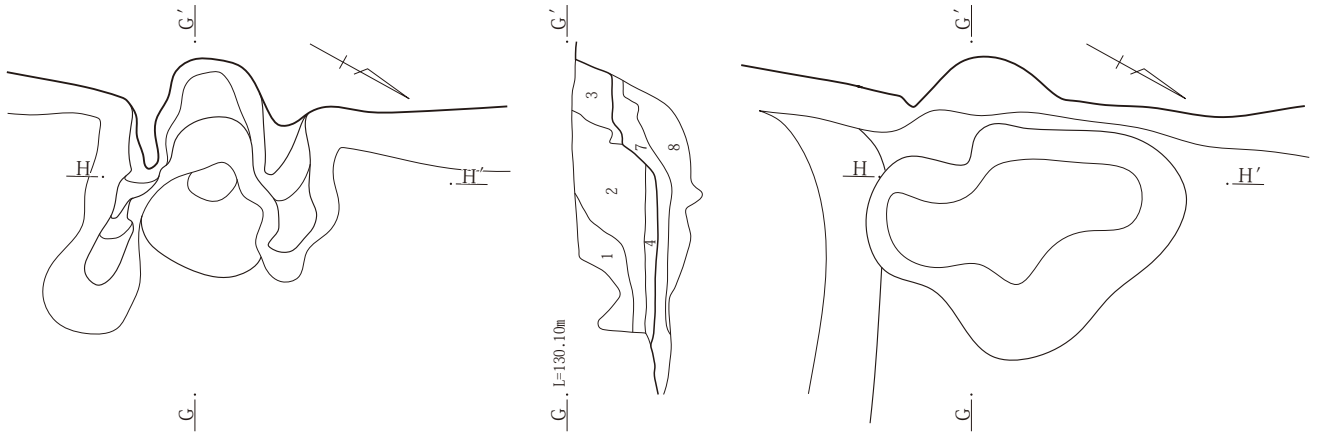
63号竪穴住居(K・L・O・P断面)

3 暗灰色中粒砂。黄灰色シルト質砂ブロックを多く含む。(掘方埋土)

0 1:60 2m

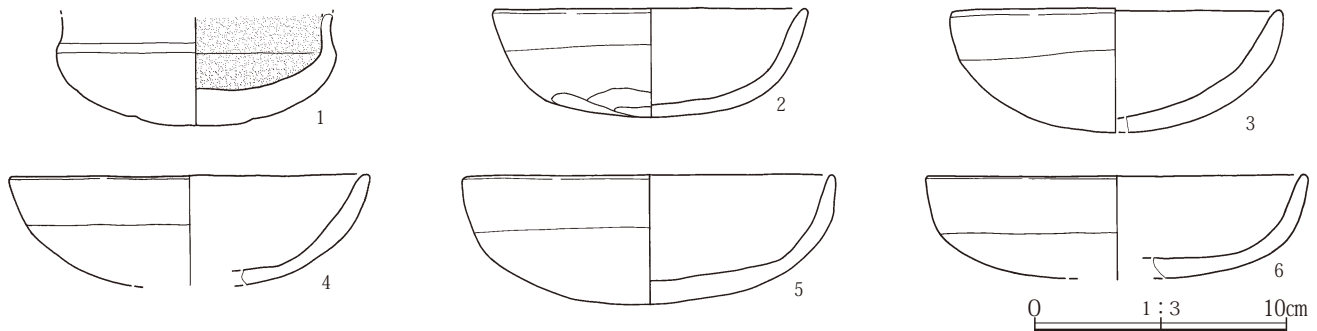
50住カマド

50住カマド掘方



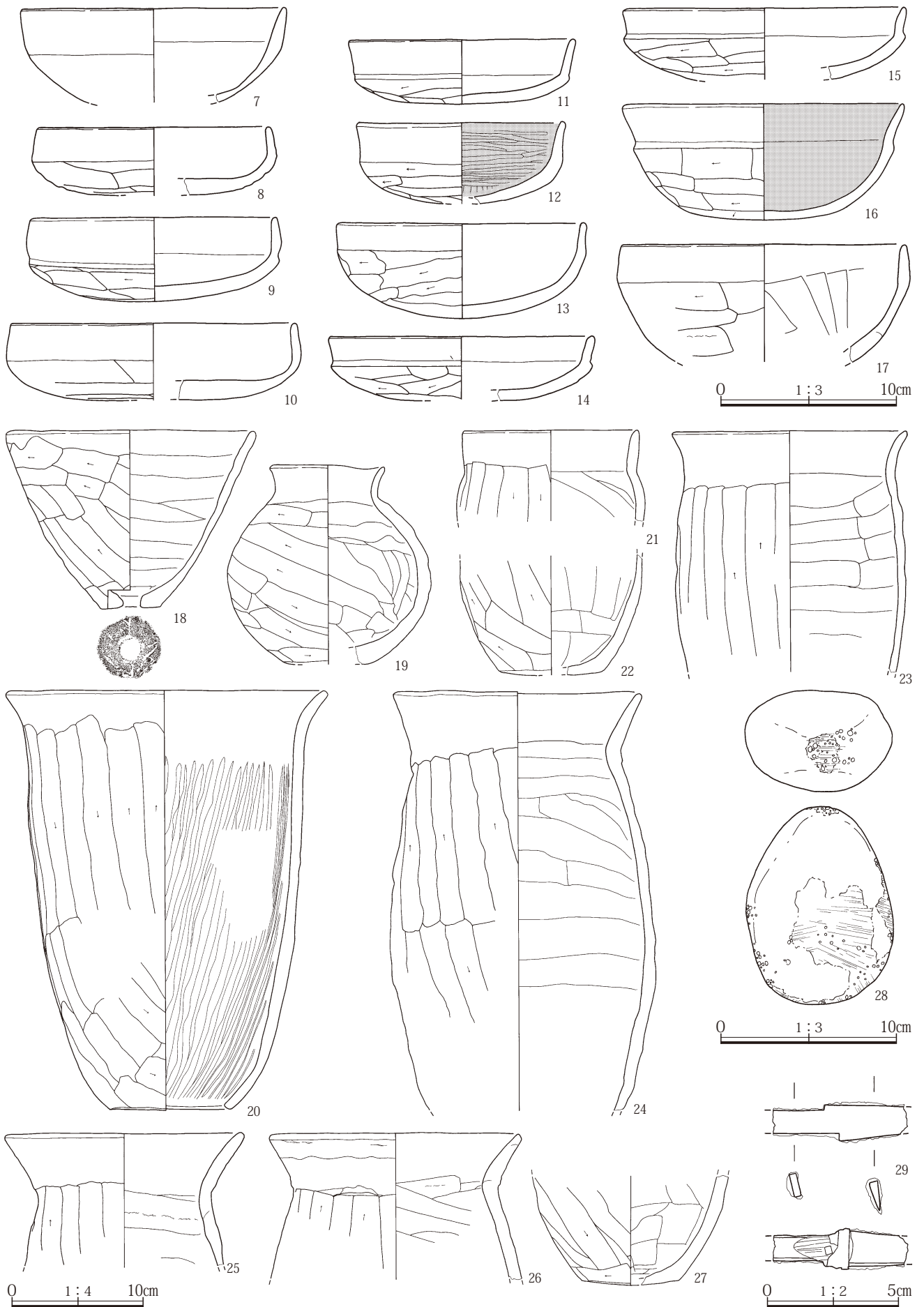
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。炭化物を含む。(1～5は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を少量含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や粘土粒を含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を多量に含む。
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や粘土粒を多量に含む。
- 6 黄灰色シルト質土。(6～8は掘方埋土)
- 7 黒褐色シルト質～砂質土。焼土や灰を含む。
- 8 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを多量に含む。

0 1:30 1m

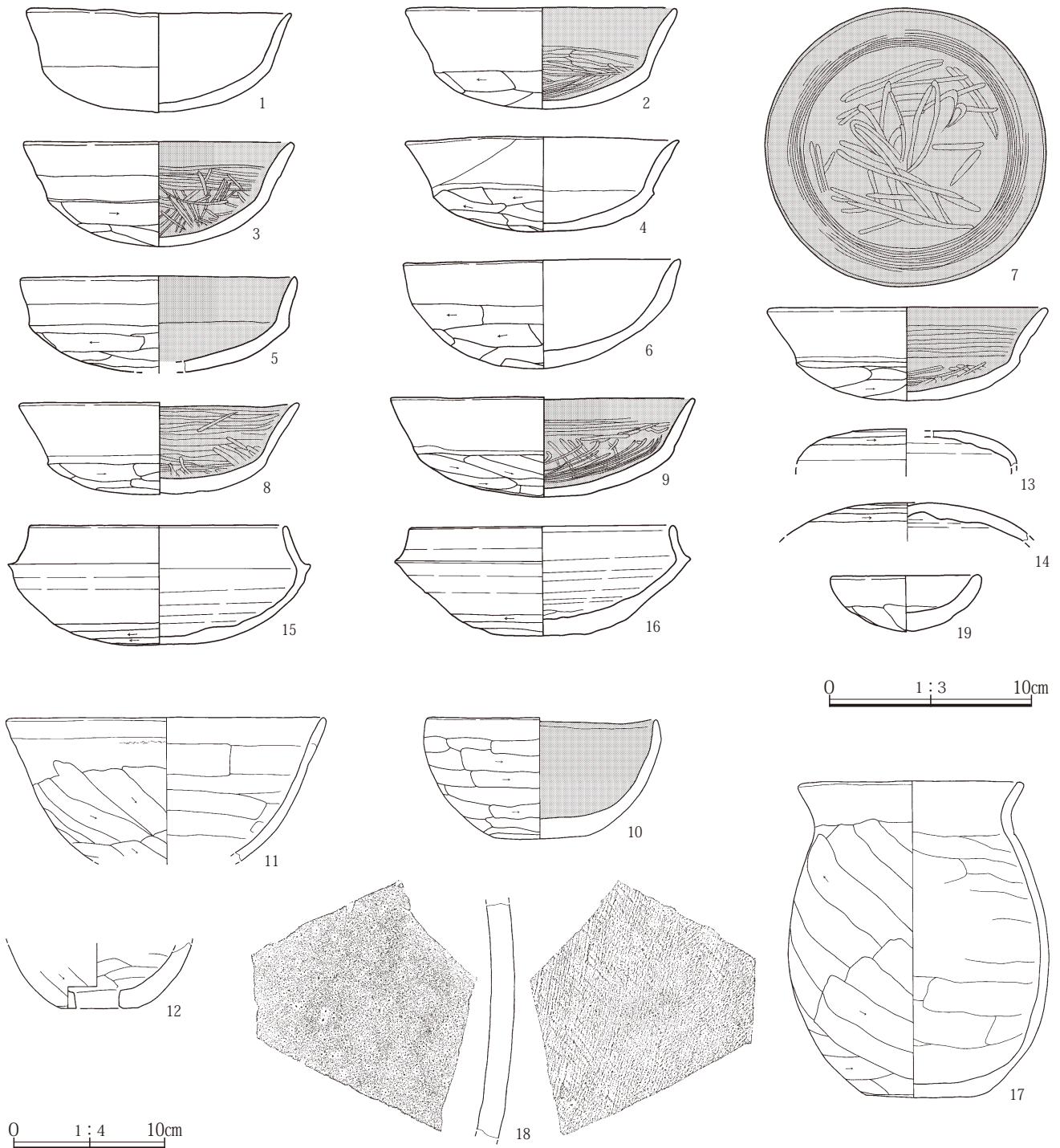


第121図 50・63号竪穴住居と50号竪穴住居の出土遺物

2. 竪穴住居



第122図 50号竪穴住居の出土遺物



第123図 63号竪穴住居の出土遺物

土から敲石(28)が出土している。

時代 古墳時代6世紀中葉。

51号竪穴住居(第124図、PL.29-7～30-2、230頁)

位置 南東部南壁寄り。

座標 X=24652～24656 Y=-70250～-70254

主軸方位 N72° E

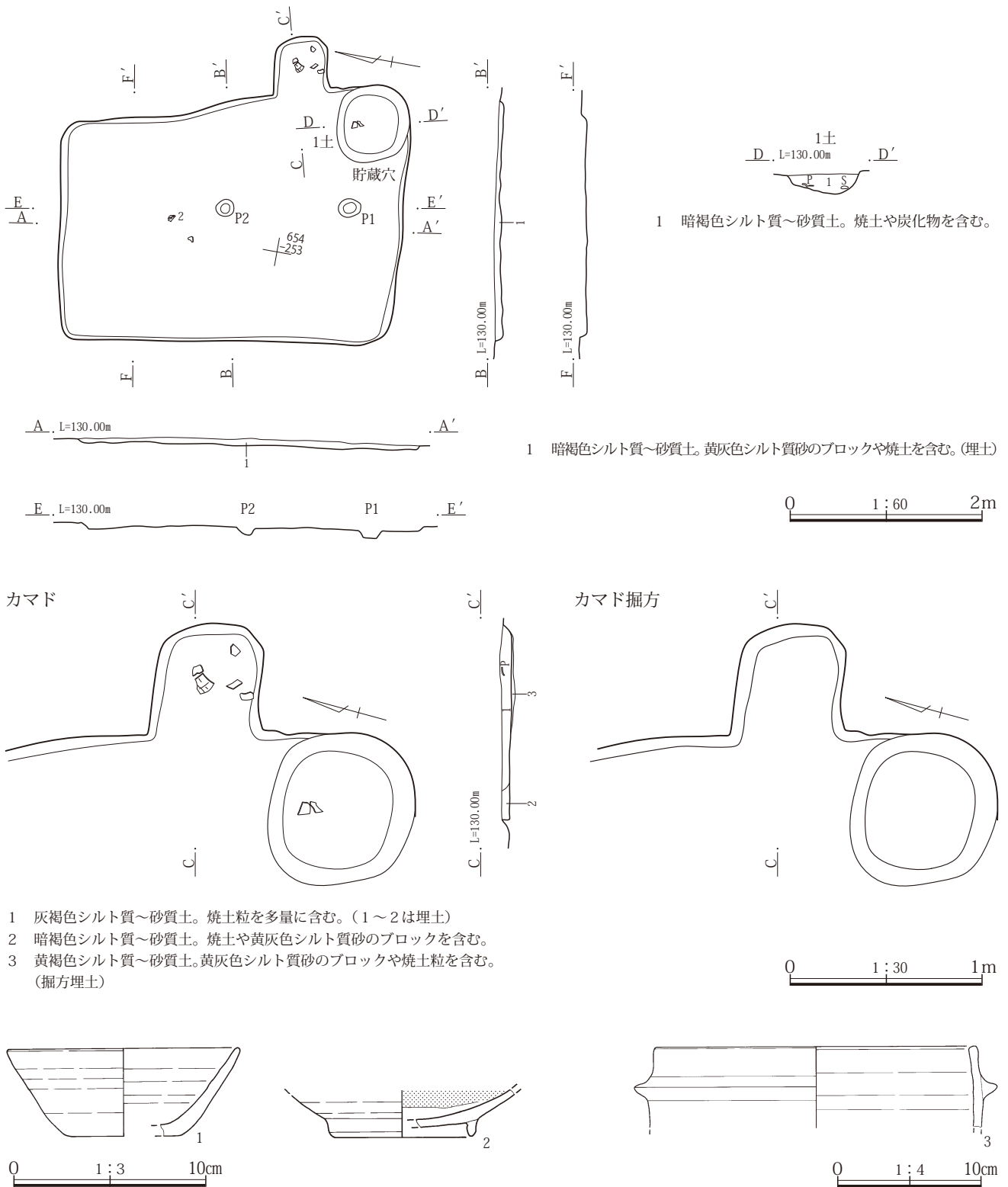
重複 なし。

形状と規模 北北西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長径は3.66m、短径2.71m、床面までの深さ0.10m、掘方までの深さ0.12m、面積9.22㎡である。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土からなり黄灰色シルト質砂や焼土のブロックを含む。

床面 4層の暗灰色シルト質砂層を削って床面を構築し平坦である。

掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等は見られない



第124図 51号竪穴住居と出土遺物

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃烧部は東壁よりも奥に4層の暗灰色シルト質砂層を掘り込んで構築している。煙道や両袖は失われている。燃烧部からは数点の土師器の破片が出土した。カマドの幅は0.61m、長さ0.61m。

貯蔵穴 東壁際の南東隅に位置する土坑1が貯蔵穴である。壁際に沿って歪んだ円形を呈し、長径は0.80m、短径0.76m、深さ0.23mである。

柱穴 床面で断面形状が浅い円筒形のピット1・2を検出した。これらは竪穴住居の規模やピットの位置から推

定して柱穴の可能性は低い。柱間は1.30mである。

ピット1は長径0.24m、短径0.19m、深さ0.09m。

ピット2は長径0.19m、短径0.17m、深さ0.07m。

遺物 床面付近から灰釉陶器椀(2)が出土し、埋土からは須恵器椀(1)や羽釜(3)の破片が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

52号 竪穴住居(第125・126・127図、PL.30-3～30-4・67、230頁)

位置 南東部南西壁際。

座標 X=24645～24647 Y=-70257～-70260

主軸方位 N23° W

重複 9号溝、57号土坑に切られる。65号竪穴住居を切る。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形を呈する竪穴住居であり、北西壁が5号溝と攪乱によって失われている。長径は2.38m、短径2.32m、床面までの深さ0.09m、残存する面積5.24㎡+である。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり黄灰色シルト質砂や焼土のブロック、炭化物を含む。

床面 65号竪穴住居の埋土である黄灰褐色礫まじり砂で構築している。

掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等はみられない。

カマド 東南壁の中央西寄りに位置する。カマドの燃烧部は東南壁に65号竪穴住居の埋土を掘り込んで構築している。煙道や両袖、燃烧部のほとんどが失われており、残存しているのは面的に点在する焼土ブロックのみである。カマドの幅や長さは不明である。

柱穴 床面で検出できなかった。長辺が2mあまりの竪穴住居であり、床面に主柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

特徴 竪穴住居の北半分は、65号竪穴住居の埋土を誤って掘っており、北東壁の一部も掘りすぎている。一辺が2mの竪穴遺構であるが、南半分の床面に遺物が出土し、カマドの痕跡も認められたため竪穴住居に認定した。

遺物 床面及び床面付近から土師器鉢(1)、短頸壺(2・3)や甕(4)の破片が出土した。遺物の大部分は65号竪穴住居の遺物の混入の可能性がある。

時代 飛鳥時代7世紀前半。

54号 竪穴住居(第128図、PL.30-5・68、230頁)

位置 南東部南壁際。

座標 X=24651～24653 Y=-70236～-70240

主軸方位 不明。

重複 7号・8号・10号・11号溝に切られる。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴住居である。大部分が重複により失われ、調査区外にある。長径は2.56m、短径2.36m、床面までの深さ0.10m、残存する面積4.52㎡+である。

埋土 暗褐色～黒褐色シルト質～砂質土で成層し、黄灰色シルト質砂や炭化物を含む。

床面 4層の黄灰色礫まじり砂層を削って床面を構築している。床面には凹凸がみられる。

掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等はみられない。

カマド 柱穴 床面で検出できなかった。大部分が重複により失われ、調査区外にあるため、調査区外に存在する可能性がある。

特徴 竪穴住居の角際のみが検出された竪穴住居であるが、埋土と床の境界及び壁面が明瞭であり竪穴住居に認定した。

遺物 床面から土師器高坏(1)が出土し、床面付近から甕(3)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

55号 竪穴住居(第106～109図、PL.30-6～30-8・64、230・231頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24661～24665 Y=-70258～-70265

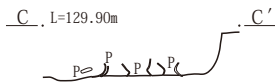
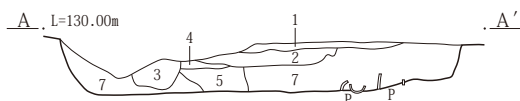
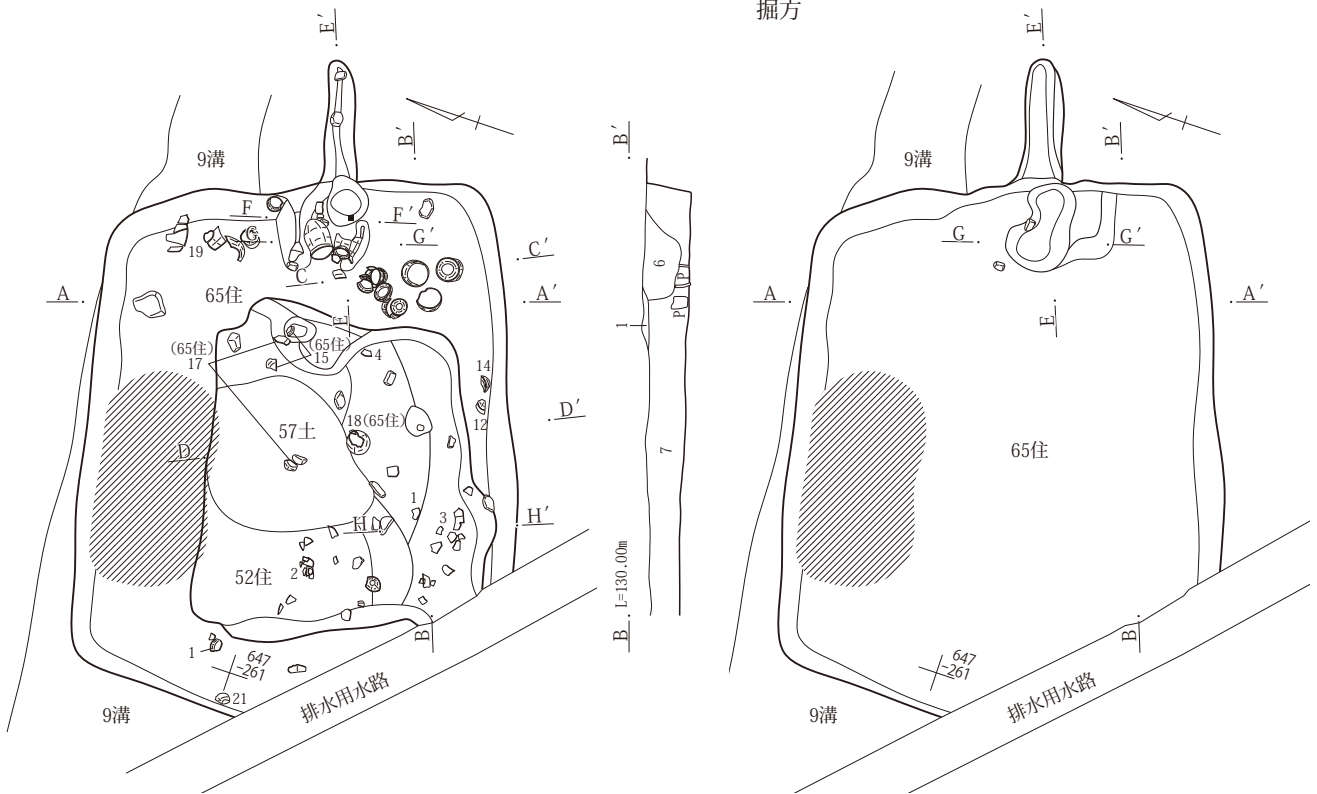
主軸方位 N44° E

重複 43号・57号・60号・67号・68号竪穴住居に切られる。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居であるが大部分が他の竪穴住居に掘り込まれて失われている。長径は5.95m、短径5.05m、床面までの深さ0.26m、掘方までの深さ0.49m、残存する面積は9.53㎡+である。

埋土 黒褐色～暗褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックを含む。南西壁際では基底に黄灰色シルト質砂のブロックを含む暗褐色シルト質～砂質土が堆積している。

掘方

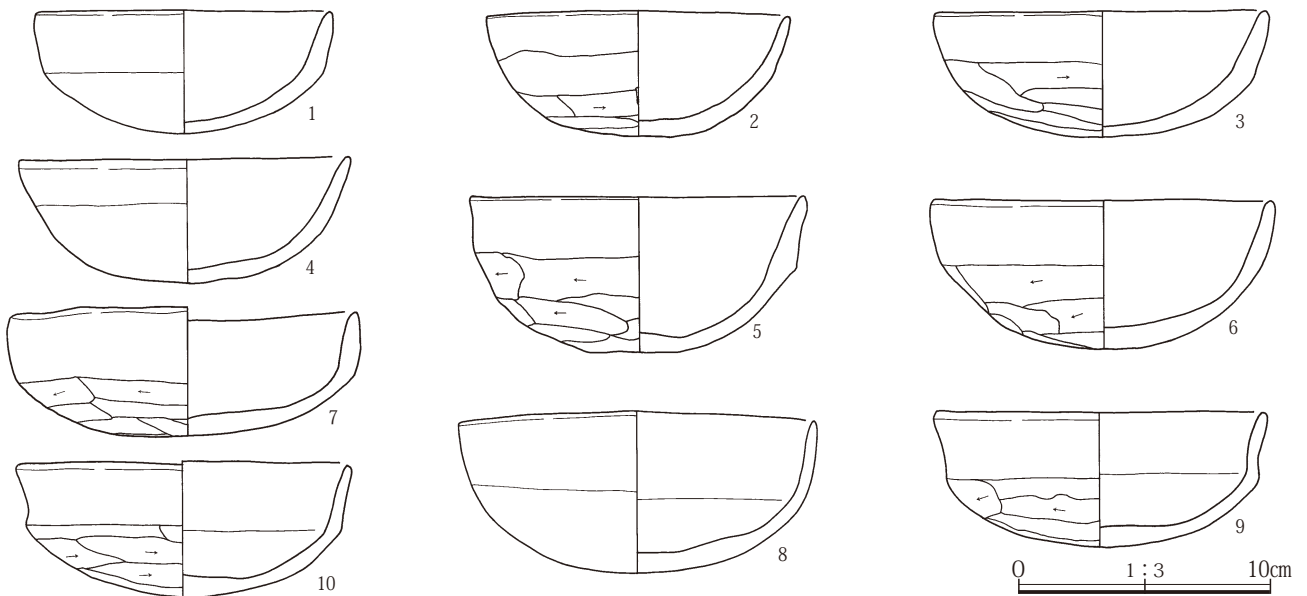


65号竪穴住居

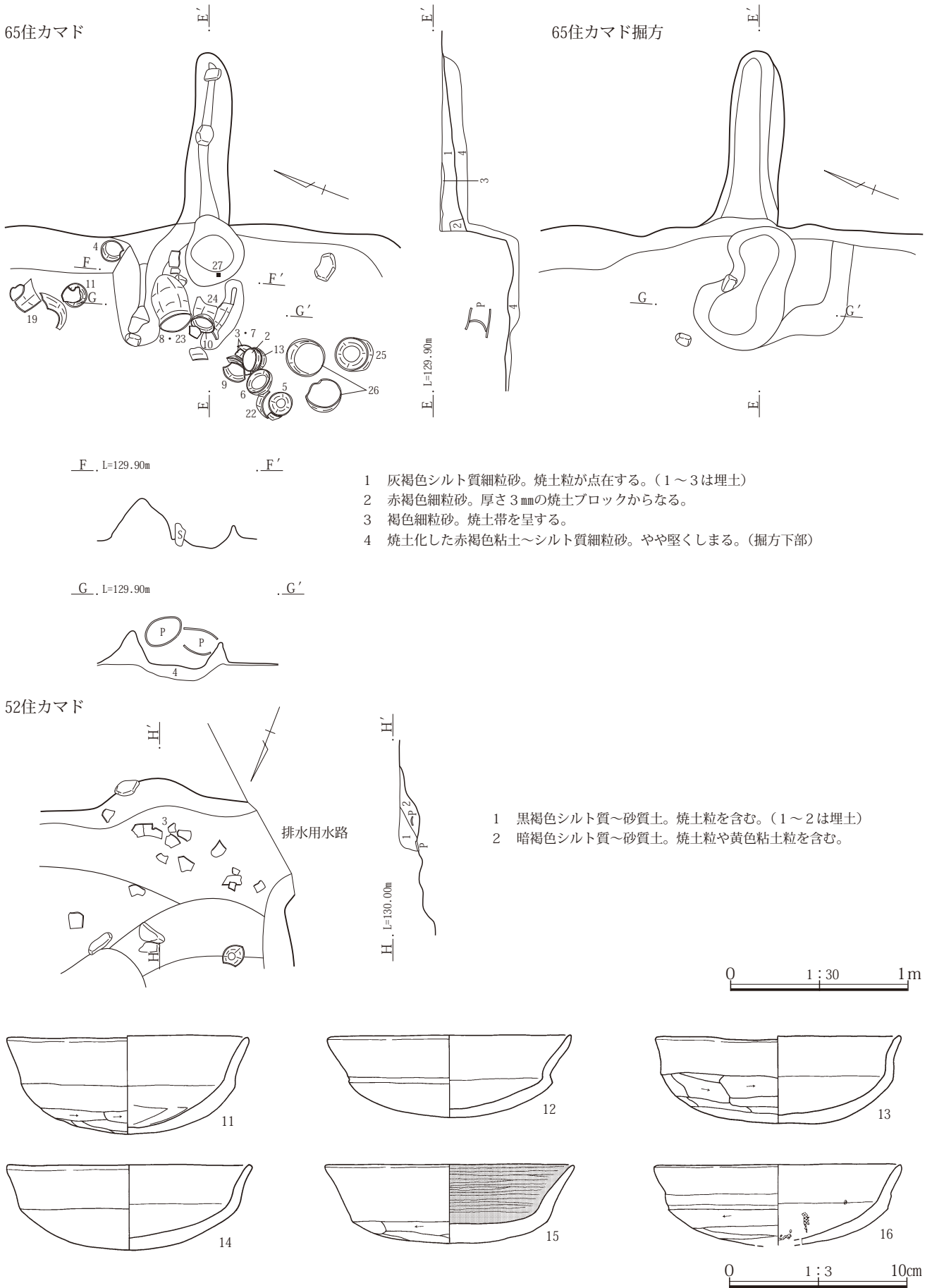
- 1 黄灰色シルト。(1~7は埋土)
- 2 暗灰色シルト質中粒砂。
- 3 暗灰色礫まじり中~細粒砂。ブロック状を呈する。
- 4 黄灰色シルト質細粒砂。
- 5 暗灰色礫まじり中粒砂。
- 6 暗灰褐色礫まじり細~中粒砂。ブロック状を呈する。
- 7 黄灰褐色礫まじり細~中粒砂。

52号竪穴住居

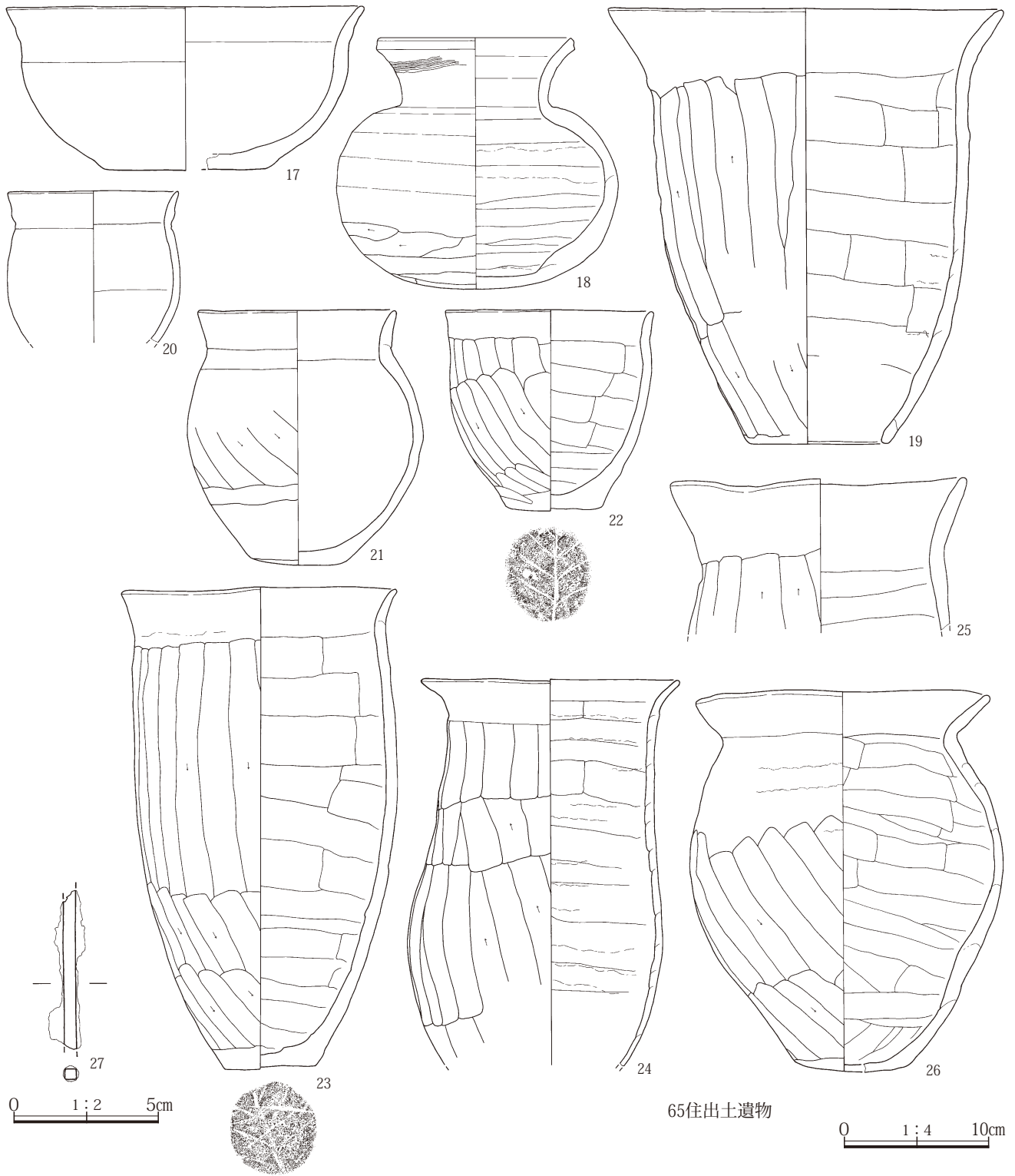
- 1 黒褐色シルト質~砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。(57号土坑埋土)
- 2 暗褐色シルト質砂~砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土、炭化物粒を含む。(52号竪穴住居埋土)
- 3 暗灰褐色礫まじり砂。(65号竪穴住居埋土)



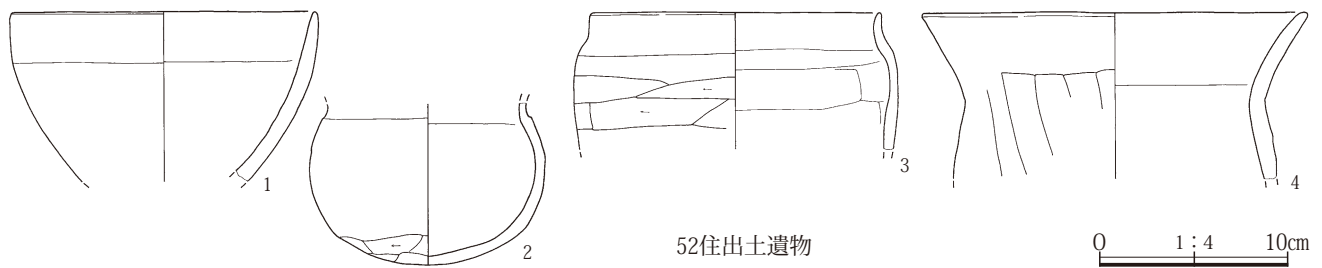
第125図 52・65号竪穴住居と65号竪穴住居の出土遺物(1)



第126図 52・65号竪穴住居と65号竪穴住居の出土遺物(2)

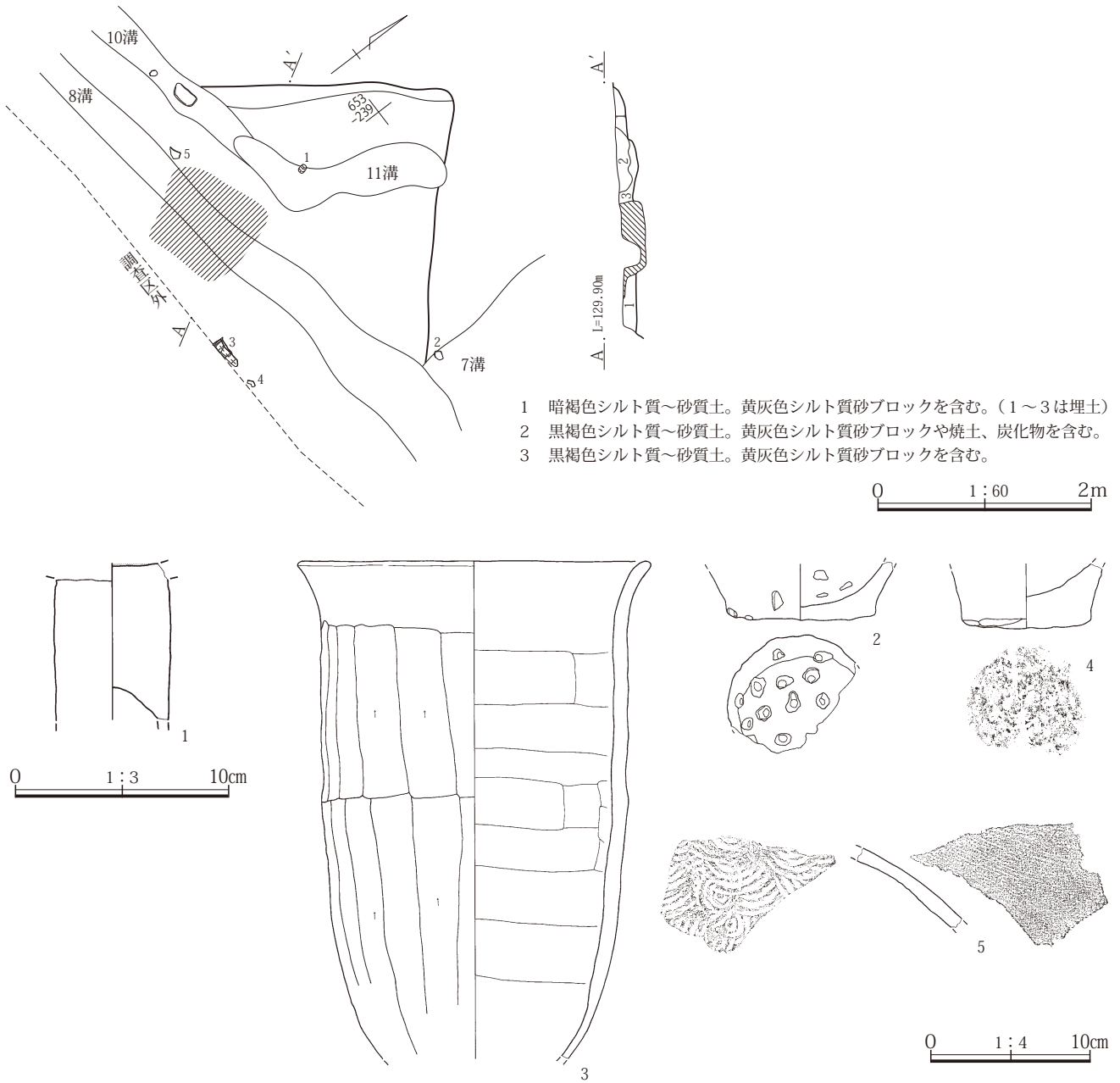


65住出土遺物



52住出土遺物

第127図 52・65号竪穴住居の出土遺物



第128図 54号竪穴住居と出土遺物

床面 暗灰色砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.01～0.23mで、ほぼ平坦である。長径2.00mの不定形の窪みがみられる。

カマド・貯蔵穴 竪穴住居の大部分が重複で失われており、残存する部分からは検出されなかった。

柱穴 竪穴住居の大部分が重複で失われているが隣接する竪穴住居を含めて掘方で検出されたピットを検討したが、住居の規模に相当する柱穴とおぼしきピットはみられない。55号竪穴住居は一辺が5mに及ぶ竪穴住居であり、支柱穴は存在したはずである。柱穴が検出できないのは柱穴底が4層の砂礫層で止められたことにより柱穴

の輪郭が不明瞭である可能性がある。

遺物 床面から土師器甕(6・7・8)、床面付近から小型甕(5)が出土した。

時代 古墳時代6世紀中葉。

56号竪穴住居(第129図、PL.23-7)

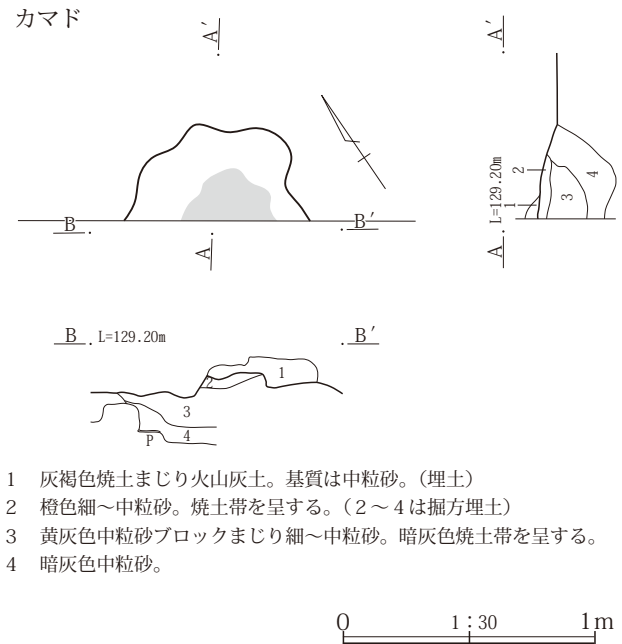
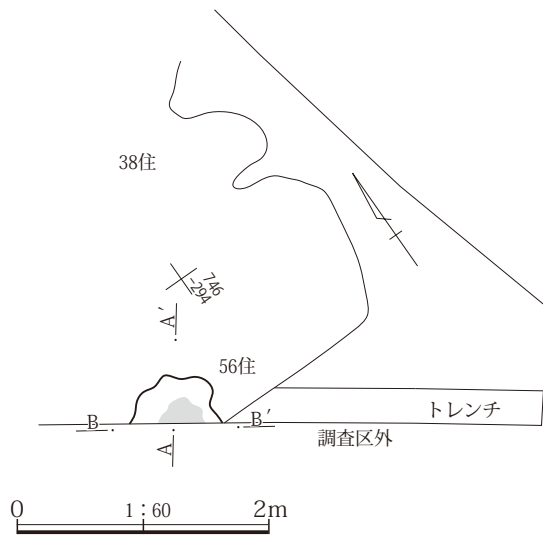
位置 北部南壁際。

座標 X=24744～24745 Y=-70294～-70294

主軸方位 不明。

重複 38号竪穴住居を切る。

形状と規模 竪穴住居のカマドのみが検出され、大部分



第129図 56号竪穴住居

は調査区外にある。カマドを構成する焼土帯と掘方は、長径は0.74m、短径0.39m、検出された最大の面積0.12㎡+である。竪穴住居の南部には2号溝と3号竪穴住居が位置するが、それぞれの遺構の壁面には56号竪穴住居の埋土がみられなかったので、小規模な竪穴住居であると考えられる。

埋土 断面観察では暗灰色礫まじり砂からなり、38号竪穴住居埋土との境界は極めて不明瞭である。

カマド 焼土帯が検出されたカマドの燃焼部は壁よりも奥に38号竪穴住居埋土を掘り込んで暗灰色砂～黄灰色砂ブロックまじり砂で構築している。

カマドの幅や長さは不明である。

特徴 竪穴住居の大部分が調査区外に存在し、隣接する2号溝や3号竪穴住居の掘方で検出されなかったので、これらの遺構により失われた可能性がある。

遺物 なし。

時代 飛鳥時代～平安時代と推定される。6世紀後半の年代を示す38号竪穴住居を切っているのもそれ以降である。

57号竪穴住居(第106・107・109図、PL.31-1～31-2、231頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24654～24661 Y=-70257～-70264

主軸方位 N64° E

重複 45号・67号竪穴住居に切られ、55号・60号竪穴住

居を切る。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居であるが大部分が45号竪穴住居によって失われている。長径は5.74m、短径4.86m、床面までの深さ0.16m、掘方までの深さ0.38m、残存する面積は6.21㎡+である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり炭化物や焼土を含む。

床面 黄灰色シルト質砂のブロックを多く含む暗褐色シルト質～砂質土で構築している。

掘方 掘方と床面の間は0.01～0.12mで平坦である。

カマド 竪穴住居の大部分が重複で失われており、残存する北西壁際からは検出されなかった。

柱穴 長径0.54m、短径0.42m、深さの0.15mの浅い窪み状のピットが検出された。竪穴住居の大部分が重複で失われており、45号竪穴住居を含めて掘方で検出されたピットも含めて検討したが、住居の規模に相当する柱穴とおぼしきピットはみられない。55号竪穴住居は長辺が6mに及ぶ竪穴住居であり、支柱穴は存在したはずである。柱穴が認められないのは柱穴底が4層の砂礫層で止められたため柱穴の輪郭が不明瞭である可能性がある。

遺物 床面から須恵器甕(4)の破片が出土し、床面付近から土師器甕(3)の破片が、埋土から須恵器杯(1)や土師器甕(2)の破片が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

59号竪穴住居(第130・131図、PL.31-3～31-6・68、231頁)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24662～24666 Y=-70251～-70256

主軸方位 N21° W

重複 61号竪穴住居に切られ、68号竪穴住居を切る。

形状と規模 東北東方向に長軸を有し、長方形を呈するが、南西隅が61号竪穴住居により失われている。長径は5.16m、短径3.90m、床面までの深さ0.29m、掘方までの深さ0.31m、残存する面積18.20㎡+である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土の互層からなり、カマドに近い北西～北東壁よりの上層は粘土や焼土粒をブロック状に含む黒褐色土からなる。

床面 暗灰色シルト質～砂質土で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.10mで、ほぼ平坦である。西と東隅は方形の溝状に浅く窪んでいる。

カマド 北西壁の中央北寄りに位置する。カマドの燃烧部は北西壁よりも手前に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、暗灰色シルト質砂で構築している。煙道は失われているが両袖の残存は良好で、暗灰色シルト質砂に土器や加工石材を埋めて構築している。右袖の手前は土師器甕(8)が逆位で袖に埋められており壁には長径0.24mの灰色凝灰質砂岩の割り石が立てられた状態で埋められている。左袖にも同様に甕(9)と石材が検出されるが位置が右に90°回転している。これはカマドの破壊によって反時計回りに回転移動したブロックであると思われる。燃烧部は暗灰色シルト質砂を貼って構築しており使用面と燃烧部の壁に焼土帯がみられる。使用面に接して甕(7)が出土しており、内部に埋土がみられないことから、甕は中空の状態で燃烧部の使用面に置かれて埋土によって埋まった可能性が高い。

カマドの幅は0.98m、長さ0.87m、焚口の幅0.52m。

貯蔵穴 カマドの右横で北東隅に位置する土坑1が貯蔵穴である。壁際の隅に沿った隅の丸い長方形を呈し、長径は1.06m、短径1.00m、深さ0.34mである。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方で断面形状が円筒形のピット1～4を検出した。柱間はピット1・2及びピット3・4が3.14mで、ピット1・4が1.58m、ピット2・3が1.28mである。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.40m、短径0.38m、深さ0.40m。

ピット2は長径0.46m、短径0.40m、深さ0.46m。

ピット3は長径0.70m、短径0.49m、深さ0.42m。

ピット4は長径0.62m、短径0.50m、深さ0.38m。

遺物 カマド周辺からは床面から13cm上に土師器脚付鉢(6)が出土した。また、埋土から杯(1～4)や高坏(5)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半～飛鳥時代7世紀前半。

60号竪穴住居(第106・107・109図、PL.31-1、231頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24659～24662 Y=-70260～-70265

主軸方位 N62° E

重複 43号・45号・57号竪穴住居に切られ、55号竪穴住居を切る。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居であるが大部分が45号・57号竪穴住居によって失われている。長径は5.20m、残存する短径1.35m+、床面までの深さ0.37m、掘方までの深さ0.49m、残存する面積は6.80㎡+である。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり焼土粒を含み、黄灰色シルト質砂のブロックを含む下層とブロックを含まない上層に成層している。

床面 暗灰色砂で構築し平坦である。

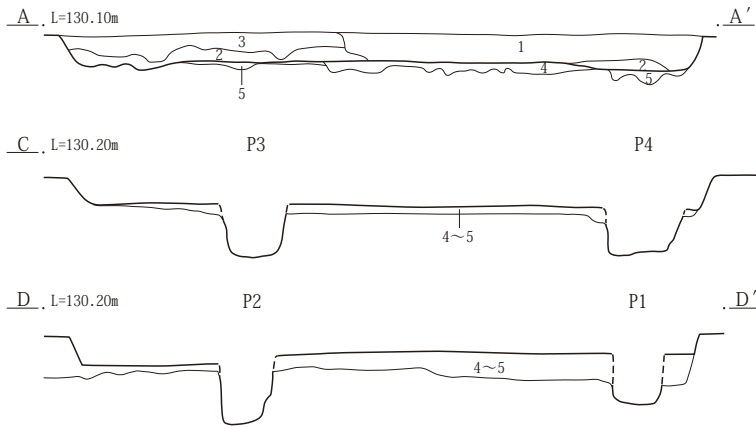
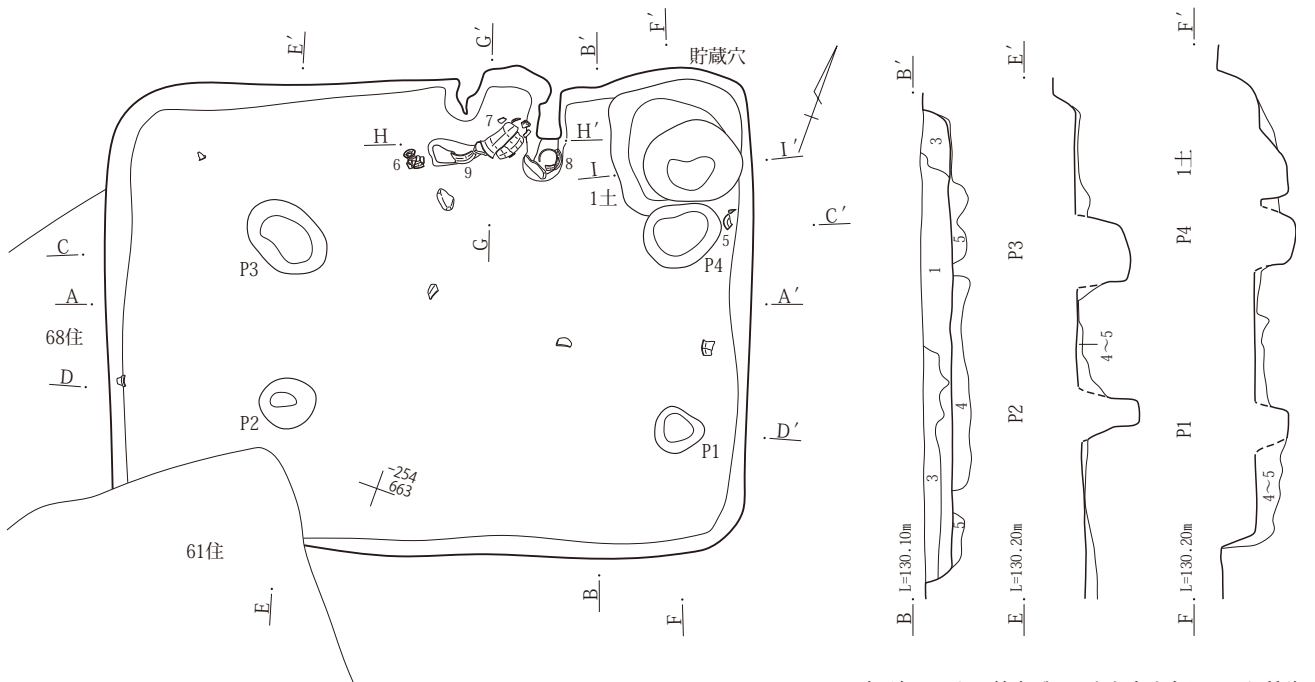
掘方 掘方と床面の間は0.09～0.12mで平坦である。長径1.98mの歪んだ隅の丸い方形の窪みがみられる。

カマド 竪穴住居の大部分が重複で失われており、残存する3面の壁際からは検出されなかった。

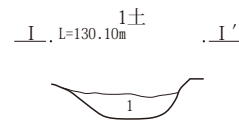
柱穴 竪穴住居の大部分が重複で失われており、45号竪穴住居を含めて掘方で検出されたピットを検討したが、住居の規模に相当する柱穴とおぼしきピットはみられない。長辺が6mに及ぶ竪穴住居であり、主柱穴は存在したはずである。柱穴が認められないのは柱穴底が4層の砂礫層で止められたため柱穴の輪郭が不明瞭である可能性がある。

遺物 埋土から土師器杯(1・2)や甕(3・4)の破片が出土した。

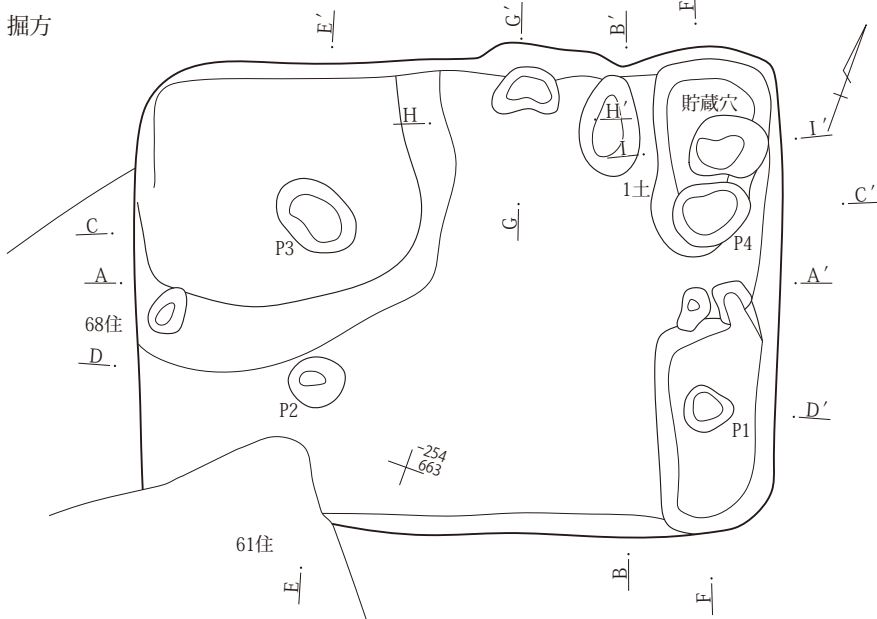
時代 古墳時代6世紀後半。



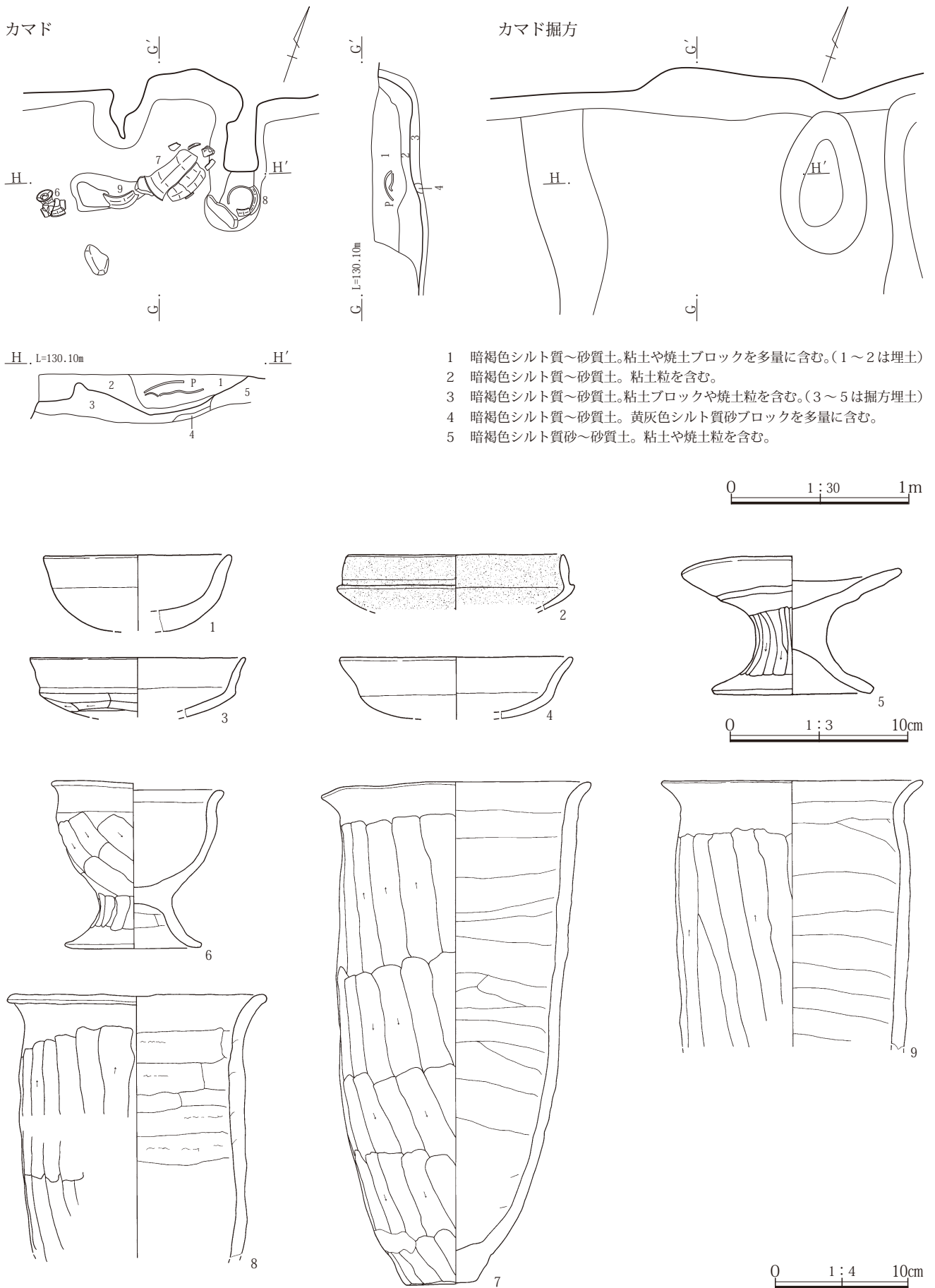
- 1 暗灰色シルト～粘土ブロックを多く含むシルト質砂。焼土粒まじり。(1～3は埋土)
- 2 黒褐色シルト質～砂質土。焼土や黄灰色シルト質砂のブロックを含む。
- 3 黒褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。(4～5は掘方埋土)
- 5 灰褐色焼土まじり中～細粒砂。径10mmの黄灰色中粒砂ブロックを含む。



- 1 暗灰色中粒砂。塊状無層理を呈し、境界は明瞭である。



第130図 59号竪穴住居



- 1 暗褐色シルト質～砂質土。粘土や焼土ブロックを多量に含む。(1～2は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。粘土粒を含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。粘土ブロックや焼土粒を含む。(3～5は掘方埋土)
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色シルト質砂～砂質土。粘土や焼土粒を含む。

第131図 59号竪穴住居と出土遺物

61号 竪穴住居 (第132・133図、PL.31-7～32-4・68、231・232頁)

位置 南東部南寄り。

座標 X=24656～24662 Y=-70251～-70257

主軸方位 N51° E

重複 67号竪穴住居に切られる。59号竪穴住居を切る。断面観察により埋土は68号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、長方形を呈する。長径は5.36m、短径3.96m、床面までの深さ0.26m、掘方までの深さ0.42m、面積20.29㎡である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックを含む。北西壁際の基底には暗褐色土が堆積し、北東壁際から竪穴の中央には暗褐色シルト質～砂質土の互層が傾きながら堆積している。

床面 暗灰色礫まじり砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.01～0.21mで、ほぼ平坦である。中央には長径1.39m、短径0.95m、深さ0.16mの不定形の浅い窪みが検出され、穴の底10cm上から土師器甕(11・13)が出土した。北西壁際は長辺が2.79m、幅1.24mの方形に、南西壁際の北寄りには長辺が3.28m、幅1.71mの方形に高い。これらは前者が68号、後者が67号竪穴住居の掘方であり北西壁際に位置する長径0.95mの浅い窪みは68号竪穴住居に属する掘方の凸凹であると思われる。

カマド 南西壁の西角中央寄りに位置する。カマドの燃烧部は南西壁よりも手前から奥に67号竪穴住居の埋土である黒褐色シルト質～砂質土を掘り込んで、暗褐色シルト質砂で構築している。煙道は失われており両袖の残存も良くない。袖や燃烧部奥壁には結晶片岩を埋めて暗褐色シルト質砂で構築している。右袖や燃烧部の奥壁には長径0.21～0.36mの結晶片岩の円礫が立てられた状態で埋められている。また右袖の掘方境界からも同様に結晶片岩の礫が立った状態で埋められている。これらはカマドの構築材として使用されたものと考えられる。カマドの焚口周囲の床面には長径0.19mの結晶片岩や凝灰質砂岩の礫が6点出土した。これらはカマドの廃絶によって破壊されたカマドの構築材であった可能性がある。

カマドの幅は0.52m、長さ0.46m、焚口の幅0.42m。

柱穴 掘方の調査で断面形状がV字形のピット1を検出した。ピット1は長径0.63m、短径0.52m、深さ0.33m

を呈するが北東壁際の単独のピットであり柱穴とは認定できない。61号竪穴住居は長辺が5mに及び、支柱穴は存在したはずである。柱穴が認められないのは柱穴底が4層の砂礫層で止められたため柱穴の輪郭が不明瞭である可能性がある。

遺物 竪穴住居の中央東寄りの床面から土師器杯(2～7)が、床面付近から土師器甕(14)の破片がまとまって出土した。またカマドに近い床面から高坏(8)、須恵器横瓶(9)の破片、土師器甕(10)の破片が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

62号 竪穴住居 (第135図、PL.32-5～32-6、232頁)

位置 南東部南壁際。

座標 X=24649～24653 Y=-70241～-70245

主軸方位 N6° W

重複 8号・10号溝に切られる。

形状と規模 北北東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居であり、南側の一部は8号・10号溝により失われている。長径は3.98m、短径2.76m、床面までの深さ0.25m、面積10.82㎡である。

埋土 暗灰色シルト質細粒砂からなり上位はやや暗灰色を呈する。

床面 4層の暗灰色礫まじり砂を削って床面を構築しており平坦である。

掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等は見られない。

カマド なし。

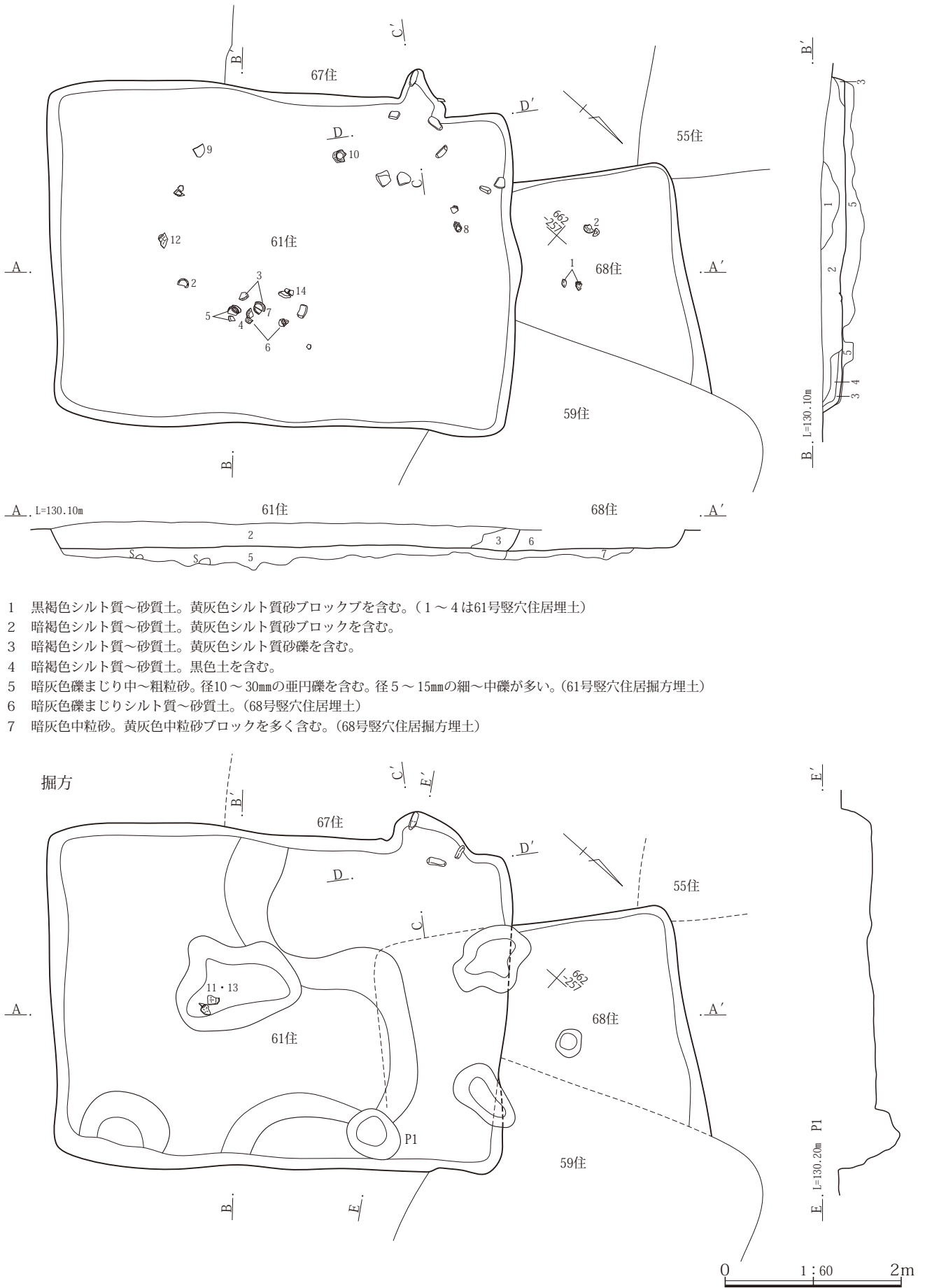
柱穴 なし。

特徴 カマド、貯蔵穴、柱穴が存在せず、床面から遺物は出土していない。しかし、検出面での遺構の輪郭、竪穴の壁、やや硬化した床が明瞭であるため上屋構造を伴う竪穴遺構と認定し竪穴住居の範疇とした。62号竪穴住居は長辺が4mに及ぶが床面に支柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定され、主たる竪穴住居に付設する施設である可能性がある。

遺物 床面付近から土師器鉢(1)の破片が出土し、埋土から須恵器瓶(2)の破片が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀前半。

63号 竪穴住居 (第119・120・121・123図、PL.32-7～33-4・66、232・233頁)

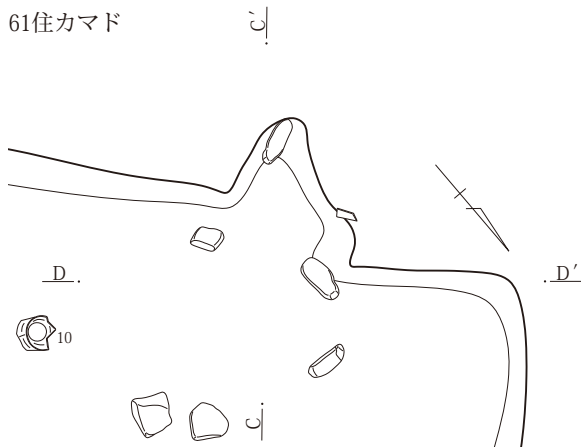


- 1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。(1～4は61号竪穴住居埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂礫を含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。黒色土を含む。
- 5 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。径10～30mmの垂円礫を含む。径5～15mmの細～中礫が多い。(61号竪穴住居掘方埋土)
- 6 暗灰色礫まじりシルト質～砂質土。(68号竪穴住居埋土)
- 7 暗灰色中粒砂。黄灰色中粒砂ブロックを多く含む。(68号竪穴住居掘方埋土)

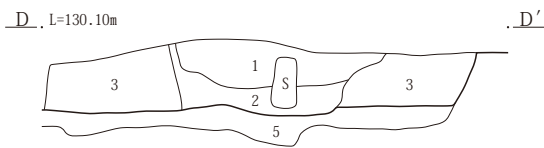
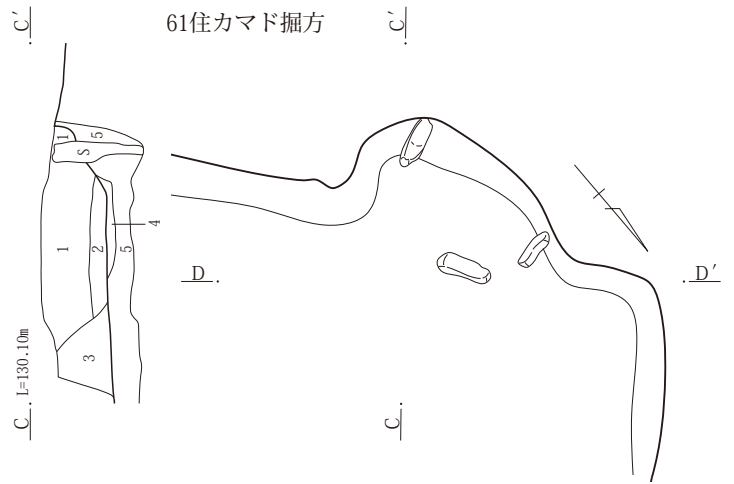
掘方

第132図 61・68号竪穴住居

61住カマド

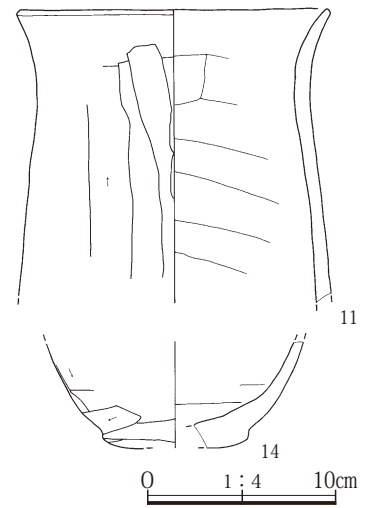
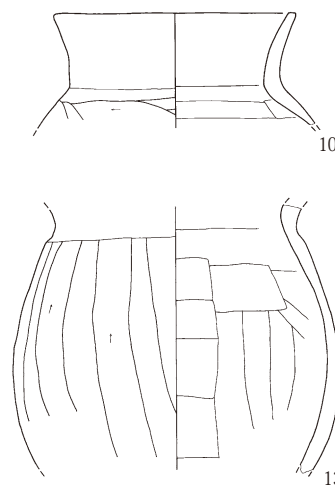
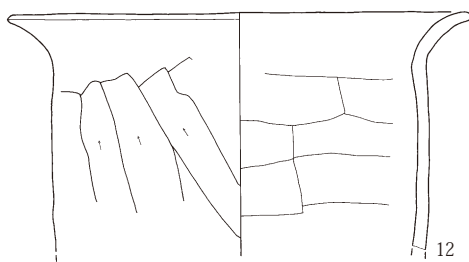
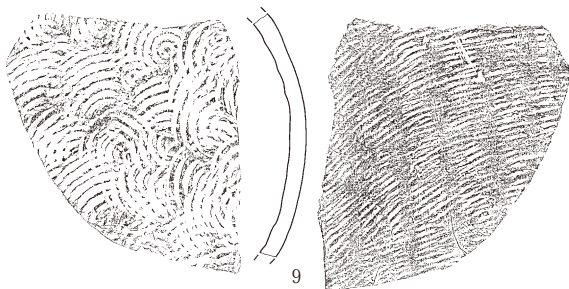
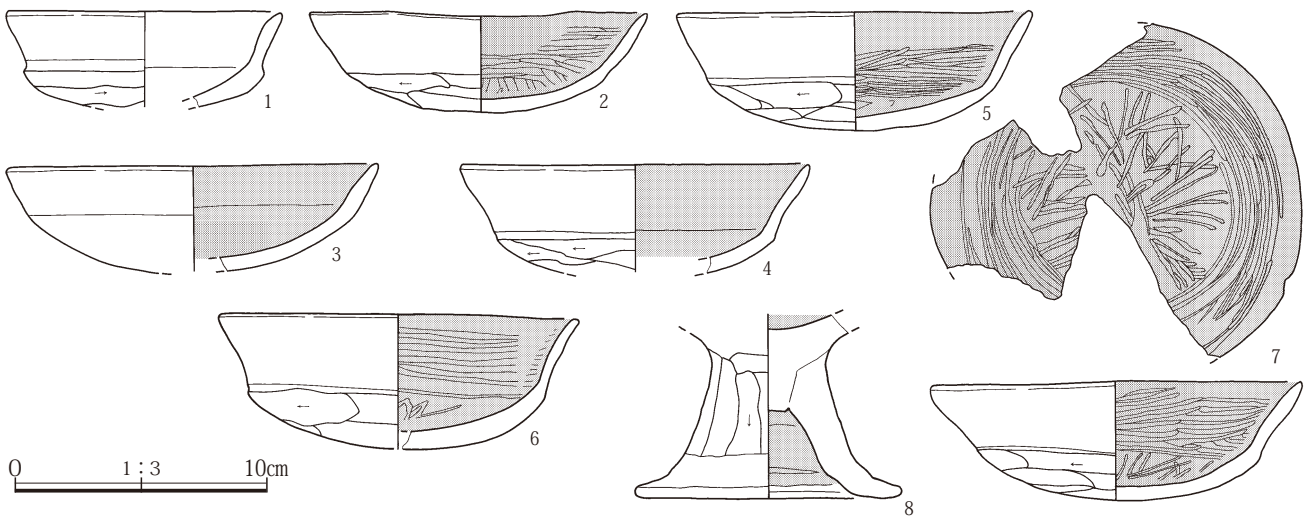


61住カマド掘方

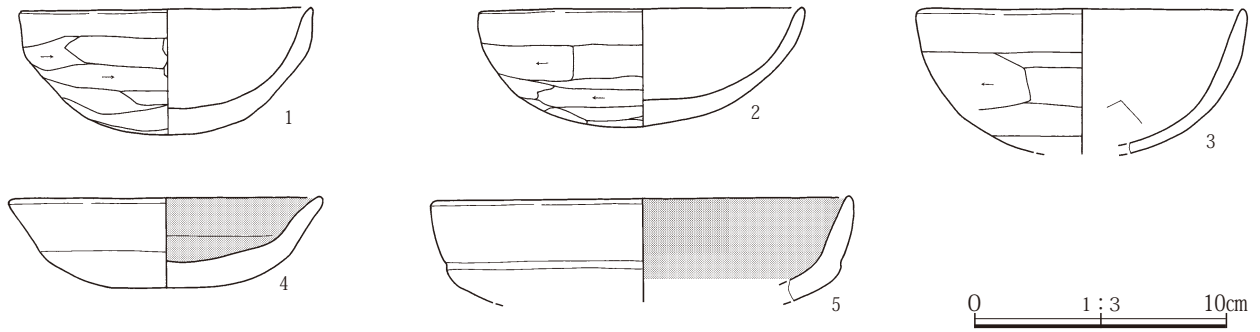


- 1 暗褐色シルト質～砂質土。粘土や焼土ブロックを多量に含む。(1～3は埋土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。粘土粒や焼土粒を多量に含む。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒を含む。
- 4 暗褐色シルト質～砂質土。焼土ブロックを多量に含む。(4～5は掘方埋土)
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や細礫を含む。

0 1:30 1m



第133図 61号竪穴住居と出土遺物



第134図 68号竪穴住居の出土遺物

位置 南東部中央。

座標 X=24665 ~ 24672 Y=-70252 ~ -70258

主軸方位 N63° E

重複 50号竪穴住居に切られ、60号土坑に掘り込まれる。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、正方形に近い長方形を呈する竪穴住居であり、50号竪穴住居によって西側の3割ほどが失われている。長径は6.14m、短径5.76m、床面までの深さ0.30m、掘方までの深さ0.48m、残存する面積25.31㎡+である。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックや焼土を含む。埋土は黒褐色土の上層と暗褐色土の下層にほぼ水平に成層して竪穴に堆積している。

床面 黄灰色シルト質砂のブロックを多く含む暗灰色砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.02～0.13mで、南西から北西壁と北東壁際が浅い溝状に窪んでおり、相対的に中央部が高い。

カマド 床面で検出できなかった。床面の西側は重複で失われており、貯蔵穴の位置から推定して失われた部分にカマドが存在した可能性が高い。

貯蔵穴 南東壁際の南隅の東寄りに位置する土坑1が貯蔵穴である。歪んだ円形を呈し、長径は0.71m、短径0.65m、深さ0.44mである。

柱穴 床面で断面形状が円筒形のピット1・2を検出し、掘方でピット3・4を検出した。柱間はピット1・2が3.55m、ピット3・4が3.15m、ピット1・3が3.50m、ピット2・4が3.20mである。ピットに柱痕は確認できなかったが、掘方はしっかりしている。

ピット1は長径0.71m、短径0.56m、深さ0.29m。

ピット2は長径0.78m、短径0.76m、深さ0.35m。

ピット3は長径0.48m、短径0.46m、深さ0.26m。

ピット4は長径0.67m、短径0.47m、深さ0.17m。

特徴 隣接する41号・46号・50号竪穴住居と規模や形状が似ている。

遺物 貯蔵穴の底面から土師器杯(6)が、貯蔵穴の埋没後、床面から4cmの高さに堆積した土師器杯(1・2・7・8・9)、須恵器杯身(16)が出土した。また、床面付近から完形の杯(4)や埋土から鉢(10)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

64号竪穴住居(第79～83図、PL.33-5～34-2・60、233頁)

位置 中央部南寄り。

座標 X=24678 ~ 24684 Y=-70274 ~ -70279

主軸方位 N81° W

重複 34号竪穴住居に切られる。

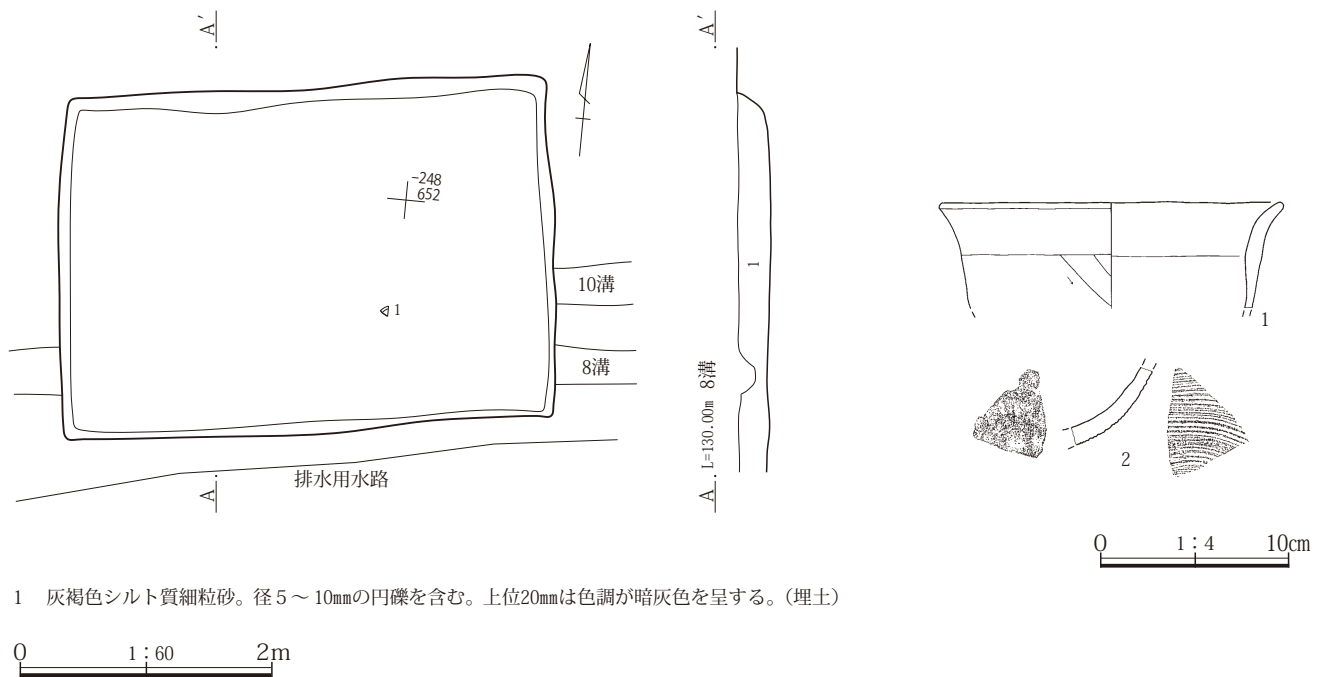
形状と規模 北北東方向に長軸を有し、長方形を呈するが竪穴住居の西側は34号竪穴住居により失われている。検出した長径は6.28m、短径5.06m、床面までの深さ0.28m、掘方までの深さ0.53m、残存する面積は40.97㎡+である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、東壁際の基底には黄褐色礫まじり砂が断片的に堆積している。

床面 暗灰色シルト質～砂質土で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.08～0.12mで、平坦であるがカマド付近には不定形の段状の窪みが認められる。

カマド 東壁中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から手前にかけて4層の砂礫層を掘り込んで黄灰色シルト質砂を貼って構築している。燃焼部から煙道の境界が残り表面はブロック状に焼土化している。燃焼部や両袖の残存状態は良好で、燃焼部はハの字形に開いて緩やかに



1 灰褐色シルト質細粒砂。径5～10mmの円礫を含む。上位20mmは色調が暗灰色を呈する。(埋土)

第135図 62号竪穴住居と出土遺物

手前に傾斜し、焼土化した使用面が残る。両袖は黄灰色シルト質砂で構築し、両袖の先端に長径0.23mの凝灰岩質砂岩の垂角礫が立った状態で埋められている。これらは両袖の構築材と考えられる。左袖部の奥からは完形の土師器杯(4)や甕(7)が出土した。

カマドの幅は0.86m、長さ1.16m、焚口の幅0.50m、煙道の幅0.45m、煙道部の長さ0.36m+

貯蔵穴 貯蔵穴はカマドの手前右に位置する土坑1である。土坑1は掘方の調査で検出し、歪んだ楕円形を呈する。長径は0.84m、短径0.66m、深さ0.40m。

柱穴 床面、掘方の調査でピットは検出されなかった。竪穴住居は4割程度を34号竪穴住居により失われているが、重複する竪穴住居の掘方からも64号竪穴住居の柱穴は確認できなかった。

特徴 一辺が5～6mに及ぶ大型竪穴住居であり、主柱となる柱穴は存在したはずであるが掘方の調査で見つけることはできなかった。床面の北東隅から長径が0.13～0.20mの結晶片岩の扁平な垂円礫が10点出土した。これらの礫には加工痕が認められないが、こも編み石として使用された可能性が高い。

遺物 床面付近から土師器杯(1・3)や甕(8)が、カマドの使用面付近からは杯(2)が出土した。また、こも編み石の可能性のある礫が出土した床面の反対の壁際から

加工痕が認められる石製品(9)が出土した。これも同様にこも編み石であろう。

時代 古墳時代6世紀後半。

65号竪穴住居(第125・126・127図、PL.34-3～34-6・66・67、233・234頁)

位置 南東部南壁寄り。

座標 X=24645～24648 Y=-70256～-70261

主軸方位 N67° E

重複 9号溝、52号竪穴住居、57号土坑に切られる。

形状と規模 北北東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で南西部が調査区外にある。長径は4.18m、短径3.50m、床面までの深さ0.36m、掘方までの深さ0.37m、残存する面積12.64㎡である。

埋土 暗灰～黄灰色シルト質～砂質土互層からなり、竪穴の埋土下層は暗灰～黄灰色シルト質砂がブロック状に堆積している。

床面 4層の暗灰色シルト質砂礫層を削って床面を構築し平坦である。

掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等はみられない

カマド 北東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は北東壁よりも手前に4層の暗灰色シルト質砂礫層を掘り込んで、灰褐色シルト質砂を貼って構築している。

煙道は北東壁よりも奥に延伸し、トンネルの上部は失われているが下半部が検出された。煙道は直径0.27m、長さ0.98mで下底は平坦であり、0.01mの焼土帯や0.06mの焼土化した4層のシルトが検出された。両袖は右の一部が失われているが、左袖の残存状況は良好である。灰褐色シルト質砂を貼って構築し、左袖の手前には長径0.17mの結晶片岩の礫が立った状態で埋められている。これはカマドの構築材と考えられる。燃焼部は使用面と左袖の壁面、煙道の入口部分の焼土化が著しく、一部は硬化している。使用面の左側壁際には長径0.12mの結晶片岩の礫が立った状態で検出された。表面には被熱の痕跡も認められるため、これは支脚の基礎をなしていた石材と考えられる。焚口の左からは土師器杯(4・11)、甕(19)が出土し、燃焼部の使用面やカマド右手前からは多量の完形の土器群が出土した。これらは使用面付近から出土した土師器杯(8・10)、甕(23・24)である。使用面に残された甕は逆位の方向で手前に向いて並べられたように出土した。焚口周辺の杯(2・3・5・6・7・9・13)と小型甕(22)、甕(25・26)は重なった状態で出土した。これらの土器の中で、使用面から出土した甕は、使用面に接していることから、カマドを廃絶した際に置かれたかカマド上部に設置された土器が移動した可能性が高い。また手前の杯や甕の出土状況は、竪穴住居の廃絶時におけるカマド周囲の土器の残存状態を示す可能性がある。

カマドの幅は0.74m、長さ1.66m、焚口の幅0.32。

柱穴 床面で検出できなかった。4mあまりの竪穴住居であり、床面に支柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 カマドの埋土から鉄釘(27)が出土した。カマド周辺以外の床面及び床面付近からは土師器杯(1・12・14)、小型甕(21)が出土した。また土師器鉢(17)や須恵器壺(18)は52号竪穴住居出土遺物と接合し、上位の52号竪穴住居埋土に混入した遺物と考えられる。

時代 古墳時代6世紀後半。

66号竪穴住居(第136・137図、PL.34-7～35-2・68・69、234頁)

位置 南東部南壁際。

座標 X=24648～24653 Y=-70246～-70250

主軸方位 N86° E

重複 8号溝に切られ、16号土坑に掘り込まれる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、方形を呈するが南壁付近は調査区外にある。検出した最大の長径は4.43m、短径3.79m、床面までの深さ0.12m、検出された最大の面積15.33㎡である。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり均質である。

床面 4層の黄灰色礫まじりシルト質砂層を削り込んで床面を構築しており平坦である。

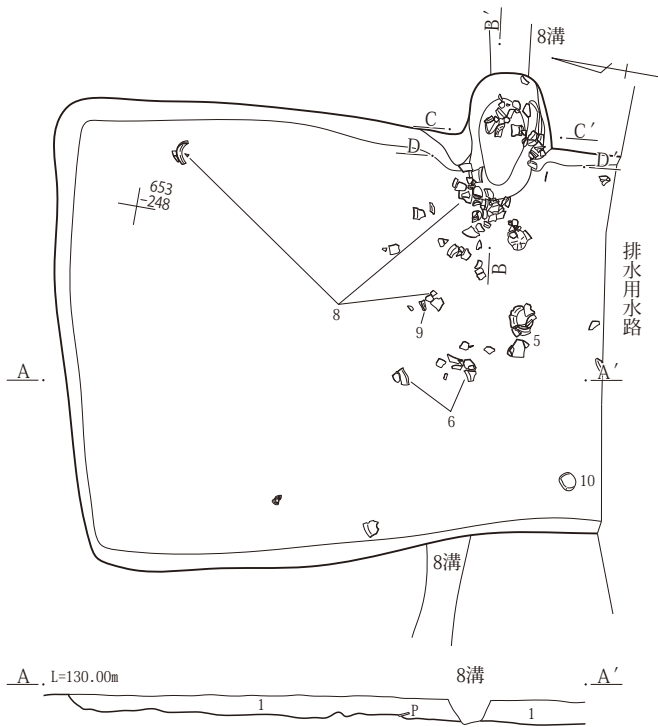
掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等はみられない。

カマド 東壁の中央南よりに位置する。カマドの燃焼部は東壁よりも手前から奥の4層の黄灰色礫まじりシルト質砂層を掘り込んで、黄灰色シルト質砂を貼って構築している。カマドの上半部と煙道は8号溝により失われているが、燃焼部の使用面は残存している。燃焼部は黄灰色シルト質砂を貼って構築し、袖部は破壊されている。燃焼部の右壁や左壁からは長径0.22mの結晶片岩の礫が立てられた状態で2点埋められている。これらは燃焼部壁の構築材として使用された垂円～垂角礫であり、被熱の痕跡が認められる。燃焼部の奥壁部分の使用面上からは須恵器椀(2・3)が出土し、焚口の手前の長径0.80mの範囲からは、床面から須恵器椀(1)、土師器甕(4・7)が出土した。これらはカマド構築材と使用された土器がカマドの破損もしくは破壊に伴って残された可能性がある。カマド掘方では燃焼部の手前に長径0.40m、短径0.24m、深さ0.25mのピットが2カ所検出されている。ピットの埋土は焼土化した粘土や焼土のブロックがまじる黄灰色シルト質砂であり、これらはカマドの位置から推定して支脚の基礎の掘方である可能性がある。カマドの幅は1.05m、長さ0.80m、焚口の幅0.51m。

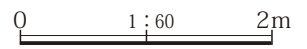
柱穴 床面に柱穴は検出されなかった。4mあまりの小規模な竪穴住居であり、床面に支柱となる柱穴を持たない構造の竪穴住居であると想定される。

遺物 床面から土師器甕(5)が出土し、西壁際の床面付近から磨石(10)が出土した。また、中央の床面25cm上からは羽釜(9)の破片が出土しているが、混入した遺物と考えられる。

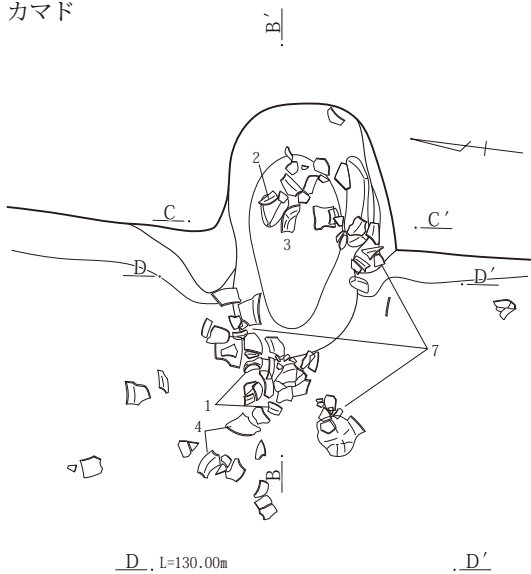
時代 平安時代9世紀第4四半期。



1 暗灰色礫まじり細粒砂。(埋土)

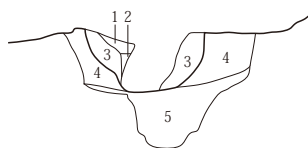


カマド



D, L=130.00m

D'

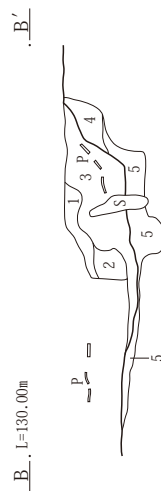


C, L=130.00m

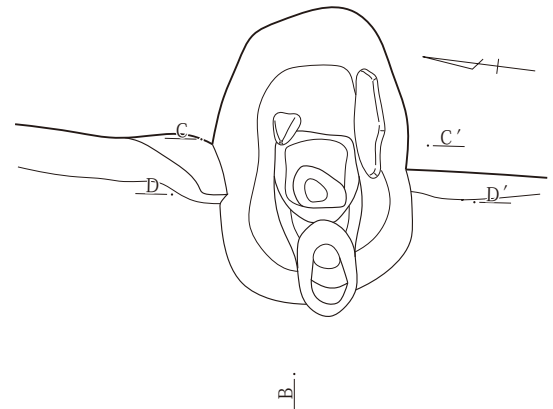
C'



カマド掘方

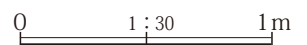


B, L=130.00m

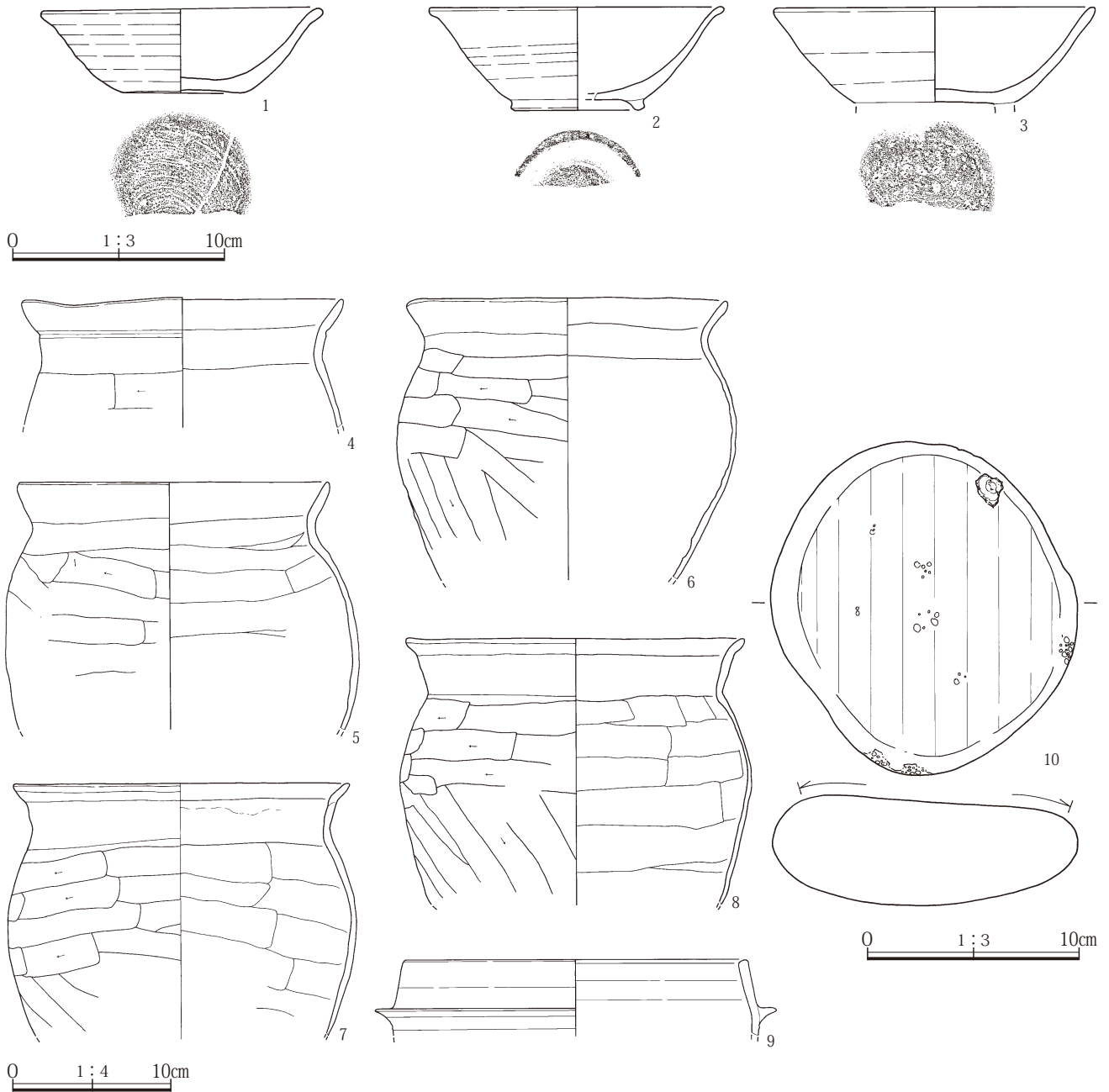


B

- 1 暗灰色極細粒砂～シルト。(1～3は埋土)
- 2 暗灰色細粒砂。礫まじり。
- 3 暗黄灰色細粒砂。
- 4 黄灰色中粒砂。焼土帯を呈する。(4～5は掘方埋土)
- 5 焼土化した橙色粘土～シルト質砂。焼土ブロックを含む。



第136図 66号竪穴住居



第137図 66号竪穴住居の出土遺物

67号竪穴住居(第106・107・109・110図、PL.35-3・64、234・235頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24656～24662 Y=-70255～-70259

主軸方位 N57° E

重複 出土遺物を検討した結果、45号・57号・61号竪穴住居を切ると考えられる。調査では最下層を構成する遺構と考えていた。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居であるが大部分を57号・61号・68号竪穴住居の重複によって失われていると考えたが、竪穴住居は45号竪

穴住居の東半分に及ぶ可能性がある。調査で認めた長径は4.74m、残存する最大の短径2.67m、床面までの深さ0.10m、掘方までの深さ0.23m、残存する面積は10.64㎡である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり焼土を含む。

床面 暗灰色シルト質～砂質土で構築している。

掘方 掘方と床面の間は0.13mで平坦であるが、長径3.28m、短径1.25mの歪んだ長方形の溝状の窪みが検出され、床面の灰や焼土の分布にほぼ一致する。

カマド 床面からは検出されなかった。床面北部からは長径3.18m、短径1.83mの不定形の台形状の範囲に灰や

焼土の薄層が検出された。また、床面上からは長径0.28mの結晶片岩の礫が2点出土した。これらはカマドの残骸もしくはカマド周辺の灰や焼土の可能性はある。

柱穴 掘方の調査でピットは検出されなかった。竪穴住居の大部分は重複で失われており、隣接する複数の竪穴住居の掘方で検出されたピットも含めて検討したが、住居の規模に相当する柱穴とおぼしきピットはみられない。55号竪穴住居は長辺が5mに及ぶ竪穴住居であり、支柱穴は存在したはずで、柱穴が認められないのは支柱の柱穴底が4層の砂礫層で止められた可能性がある。

遺物 床面から須恵器杯(1)、甑(7)、甕(8)、鉄滓(9)が出土し、床面付近から須恵器杯(2)、土師器台付甕(3)、甕(4・5)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

68号竪穴住居(第132・134図、PL.35-4・68、235頁)

位置 南東部中央。

座標 X=24661～24664 Y=-70255～-70258

主軸方位 N38° E

重複 59号・61号・67号竪穴住居に切られる。55号竪穴住居を切る。

形状と規模 北東方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴住居であるが大部分が59号・61号竪穴住居により失われている。長径は2.70m、短径2.02m、床面までの深さ0.20m、掘方までの深さ0.34m、残存する面積は4.11㎡+である。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなる。

床面 黄灰色砂ブロックを含む暗灰色砂で構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.06～0.12mで、ほぼ平坦である。

カマド・貯蔵穴 大部分が重複で失われており、残存する部分からは検出されなかった。

柱穴 掘方で直径0.33m、深さの0.14mのピットが検出された。竪穴住居の大部分が重複で失われているが隣接する竪穴住居を含めて掘方で検出されたピットを検討したが、住居の規模に相当する柱穴とおぼしきピットはみられなかった。柱穴は重複によって失われた可能性がある。

遺物 床面から土師器杯(1・2)が出土し、埋土から杯

(3・4・5)が出土した。

時代 古墳時代6世紀後半。

69号竪穴住居(第116図、PL.35-5)

位置 南東部南西壁際。

座標 X=24658～24661 Y=-70271～-70274

主軸方位 不明

重複 断面観察で埋土は48号竪穴住居の埋土を切る。

形状と規模 48号竪穴住居の掘削で失われ断面とわずかに検出された床面から推定した。竪穴住居の大部分は調査区外にある。長径は3.50m、検出した最大の短径0.56m+、床面までの深さ0.19m、検出された最大の面積1.98㎡+である。

埋土 南西壁際の断面観察では、耕作土と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、黄橙灰色の焼土まじりシルト質砂のブロックを含む。

床面 48号竪穴住居の埋土である暗黄灰色シルトブロックまじり砂を削って構築しており平坦である。

掘方 床面と掘方面は同一面で貼り床等は見られない。

カマドや柱穴 床面では検出されなかった。竪穴住居の大部分は調査区外にあり、カマドや柱穴も調査区外に存在する可能性がある。

遺物 なし。

時代 平安時代10世紀。重複関係のある48号竪穴住居埋土に混入した10世紀前半の年代を示す遺物から推定した。

70号竪穴住居(第46・47図、PL.35-6～35-7、235頁)

位置 中央部南西壁際。

座標 X=24684～24688 Y=-70292～-70294

主軸方位 N82° W

重複 断面観察で埋土は21号竪穴住居の埋土を切るが、出土した遺物は新旧関係が逆転する。

形状と規模 西北西方向に長軸を有し、方形を呈するが大部分は調査区外にある。検出した最大の長径は2.76m+、検出した最大の短径2.68m+、床面までの深さ0.17m、掘方までの深さ0.21m、検出された最大の面積4.11㎡である。

埋土 南西壁際の断面観察では、耕作土と2層の層理面から掘り込まれた暗褐色シルト～砂質土の互層からなり、北西から中央に傾きながら成層する。北西の基底は

黄灰色シルト質砂のブロックを含む暗褐色土が堆積している。

床面 4層の黄灰色礫まじりシルト質砂を削って床面を構築しており平坦である。

掘方 床面と掘方面は同一面で面的な貼り床はみられない。床面では床下土坑を検出し、それらは浅い窪み状の土坑1基としっかりした掘方をもつ土坑1である。

土坑1は長径0.93m、短径0.63m、深さ0.63mの楕円形を呈する。

カマド 検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 床で検出されたピットは1基のみである。柱穴であるか不明であるが、その可能性は否定しない。

ピット1は長径0.57m、短径0.36m、深さ0.58mの楕円形を呈する。

遺物 床面付近から須恵器碗(1)が出土した。断面観察での21号竪穴住居との重複関係と矛盾するが、出土遺物も少量であり今後の課題としたい。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

71号竪穴住居(第138図、PL.35-8～36-4、235頁)

位置 南西部北東壁際。

座標 X=24665～24670 Y=-70245～-70249

主軸方位 N72° E

重複 なし。

形状と規模 北西方向に長軸を有し、方形を呈するが大部分は調査区外にある。長径は4.75m、検出した最大の短径2.70m+、床面までの深さ0.54m、掘方までの深さ0.62m、検出された最大の面積8.08㎡である。

埋土 北東壁際の断面観察では、表土と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり均質である。

床面 黄灰褐色砂を貼って床面を構築しており平坦である。

掘方 掘方と床面の間は0.01～0.14mで、ほぼ平坦であるが南東壁及び南西壁際の南寄りが溝状に窪む。

カマド 南西壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は南西壁よりも手前に4層の黄灰色砂礫層を掘り込んで、灰褐色シルトブロックまじり砂を貼って構築している。煙道は失われているが、燃焼部の使用面と両袖の残存状態は良好である。燃焼部は灰褐色シルトブロックま

じり砂を貼って構築している。使用面には焼土のブロックが点在するのみで灰や焼土帯は認められない。袖部は逆のU字形を呈し手前が開いた楕円形を呈する。両袖の掘方には長径0.23mの結晶片岩の礫が立てられた状態で2点埋められている。これらは袖の構築材として使用された亜円礫であると思われる。焚口の手前の掘方からは長径0.36m、短径0.21m、深さ0.26mのピットが検出されている。ピットの埋土はカマドの構築材と同様の黄灰色シルト質砂である。ピットは位置から見てカマドの支脚の基礎の掘方とは考えにくいので、カマドの焚口に何らかの機能が存在した可能性がある。同様のカマド焚口付近のピットは66号竪穴住居でも検出されている。

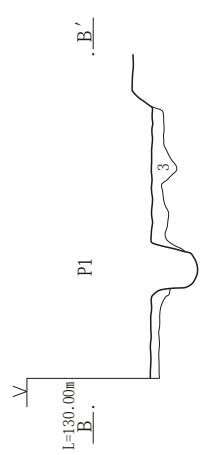
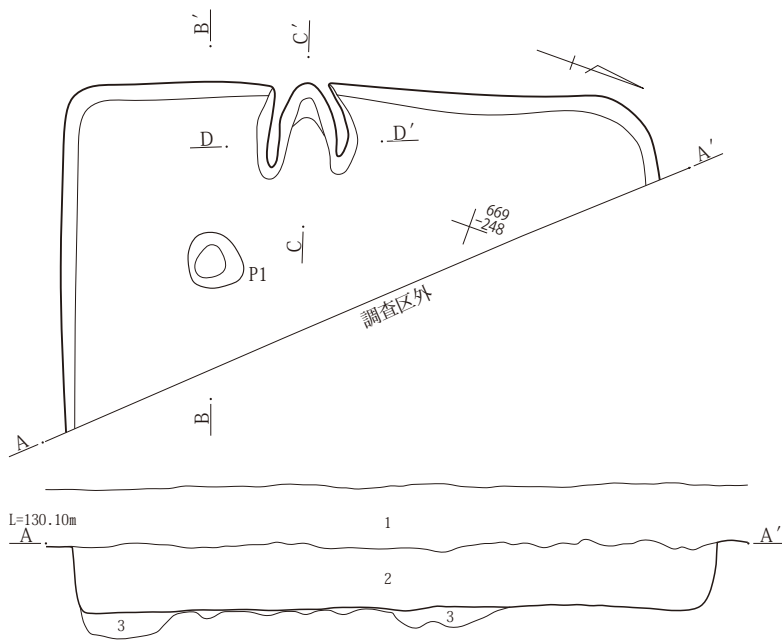
カマドの幅は0.80m、長さ0.75m、焚口の幅0.46m。

柱穴 床面からピット1を検出し南西壁及び南東壁からの位置から推定して柱穴の可能性が極めて高いが、単独のピットであることから柱穴と認定しない。竪穴住居の大部分は調査区外にあり、柱穴は調査区外に存在する可能性がある

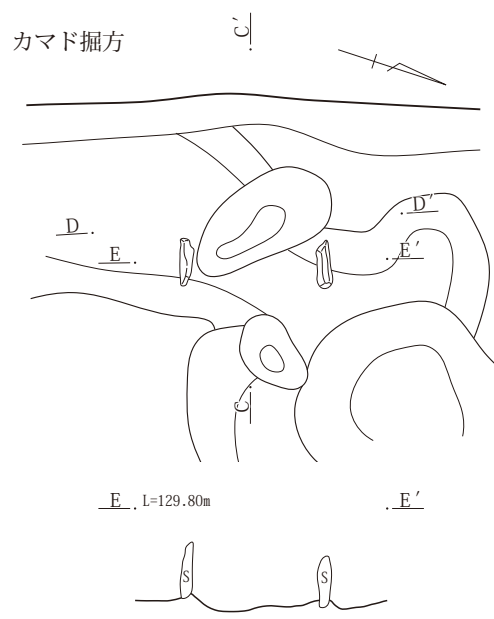
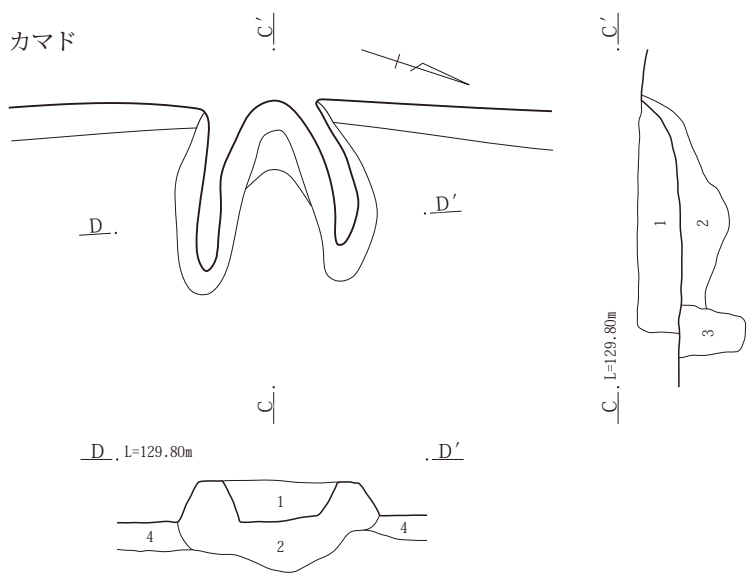
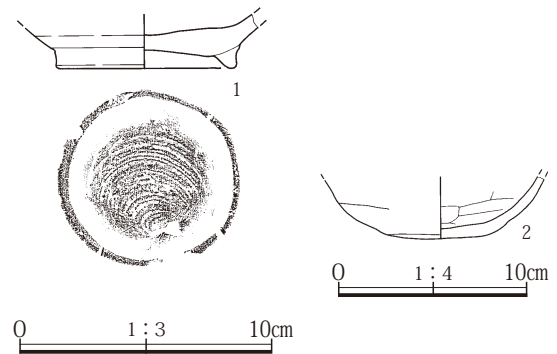
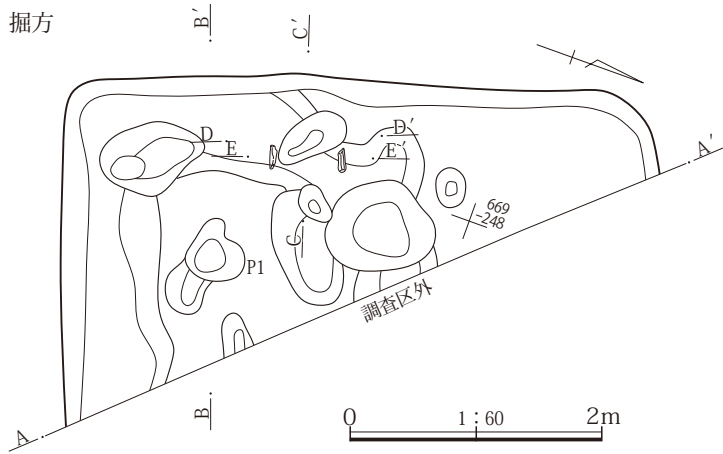
ピット1は長径0.45m、短径0.42m、深さ0.38m。

遺物 埋土から須恵器碗(1)、土師器小型甕(2)の破片が出土した。

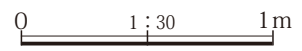
時代 平安時代9世紀後半。



- 1 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。(表土)
- 2 暗灰色礫まじり中粒砂。(埋土)
- 3 黄灰褐色粗～中粒砂。(掘方埋土)



- 1 暗灰色焼土ブロックまじり中粒砂。径5～10mmの円礫を含む。(埋土)
- 2 灰褐色シルトブロックまじり中～細粒砂。(2～4は掘方埋土)
- 3 黄灰褐色中粒砂。
- 4 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。



第138図 71号竪穴住居と出土遺物

3. 掘立柱建物

1号掘立柱建物(第139図、PL.12-6)

位置 中央部北寄り。

座標 X=24708～24713 Y=-70286～-70294

主軸方位 N86° W

重複 ピット4が15号竪穴住居を掘り込む。

形状と規模 桁行3間分、梁間1間の東西に長い側柱建物で、長辺は7.02m、短辺3.18m、柱間は、ピット1とピット2の間が2.14mで、ピット2とピット3の間はその2.3倍の4.84mである。

柱穴 建物を構成する柱穴はピット1からピット5の5基が検出された。そのほか複数のピットが検出されたが建物の柱穴に認定しなかった。ピットは断面形状が円筒からU字形を呈し、規模は小さいがしっかりとした掘方を有する。ピットの底は4層の黄灰色砂礫中に存在し、その高さはピット1・2・3・5とピット4で高低差が認められる。ピット3とピット4の高低差は0.46mに達するが、ピット4は15号竪穴住居埋土に掘られているため、高低差は4層の黄灰色砂礫の深さに起因すると考えられる。

ピット1は長径0.60m、短径0.41m、深さ0.34m。

ピット2は長径0.48m、短径0.42m、深さ0.31m。

ピット3は長径0.48m、短径0.38m、深さ0.13m。

ピット4は長径0.42m、短径0.31m、深さ0.26m。

ピット5は長径0.47m、短径0.40m、深さ0.34m。

柱穴の埋土 暗灰色礫まじり砂からなり2層を起源とする竪穴住居の埋土とよく似ている。これらの識別は極めて困難である。

時代 ピット4と15号竪穴住居の埋土との層序関係は確認できなかった。竪穴住居埋土に掘り込まれたピット4が深いことは、15号竪穴住居の後に1号掘立柱建物が建てられた可能性を示唆する。1号掘立柱建物は古墳時代後期の竪穴住居よりも新しく3号や5号溝の方向と調和的である。これらのことから中世の建物の可能性があるが年代は不明である。

2号掘立柱建物(第140図、PL.36-5)

位置 南東部北寄り。

座標 X=24672～24678 Y=-70271～-70283

主軸方位 N81° E

重複 ピット7が47号竪穴住居を掘り込む。

形状と規模 桁行5間、梁間1間の東西に長い側柱建物で、長辺は11.66m、短辺4.23m、柱間は2.00～2.50m、ピット7とピット8の間はその2～2.5倍の5.00mである。

柱穴 建物を構成する柱穴はピット1からピット11の11基が検出された。そのほか11基のピットが検出されたが建物の柱穴に認定しなかった。ピットは断面形状が浅い半月形を呈し、規模は小さい。ピットは4層の黄灰色砂礫層上面で検出され、その境界は明瞭である。ピット1～11の計測値は第7表に示した。

第7表 2号掘立柱建物で検出されたピットの計測値
単位(m)

ピット	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
長径(直径)	0.49	0.45	0.38	0.35	0.46	0.50	0.46
短径	0.45	0.42	0.32	0.33	0.38	0.42	
深さ	0.26	0.18	0.14	0.14	0.18	0.29	0.23
ピット	P8	P9	P10	P11			
長径(直径)	0.45	0.34	0.45	0.29			
短径	0.35	0.28	0.40	0.26			
深さ	0.12	0.23	0.11	0.26			

柱穴の埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 ピット7と47号竪穴住居の埋土との層序関係は確認できなかった。竪穴住居埋土に掘り込まれたピット7の底が他のピットに比べて若干深いことは、47号竪穴住居の後に2号掘立柱建物が建てられた可能性がある。2号掘立柱建物は古墳時代後期の竪穴住居よりも新しく、1号掘立柱建物の方向や規模が調和的である。これらのことから中世の建物の可能性があるが年代は不明である。

3号掘立柱建物(第141図、PL.36-6)

位置 南東部北寄り。

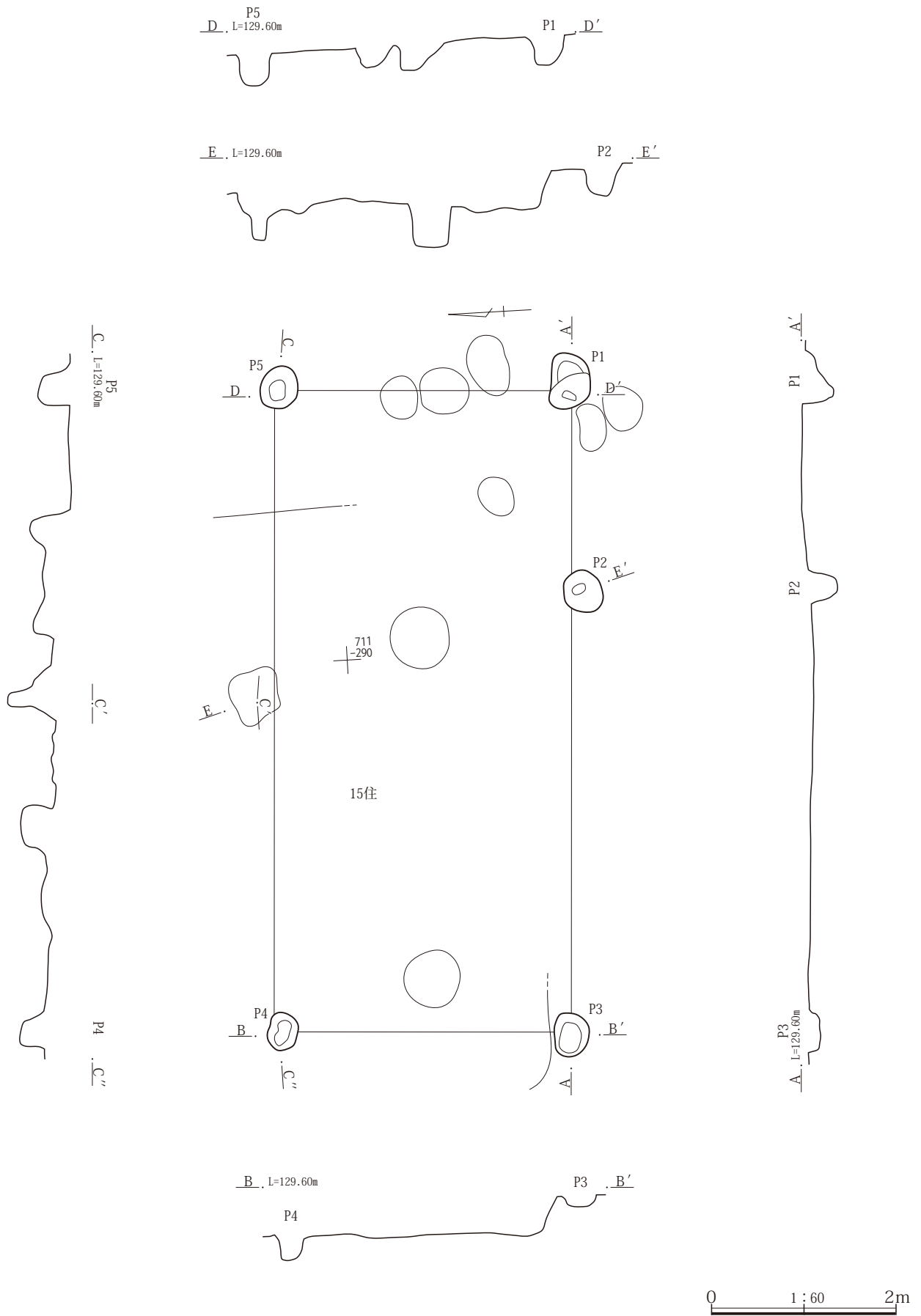
座標 X=24669～24673 Y=-70264～-70270

主軸方位 N82° E

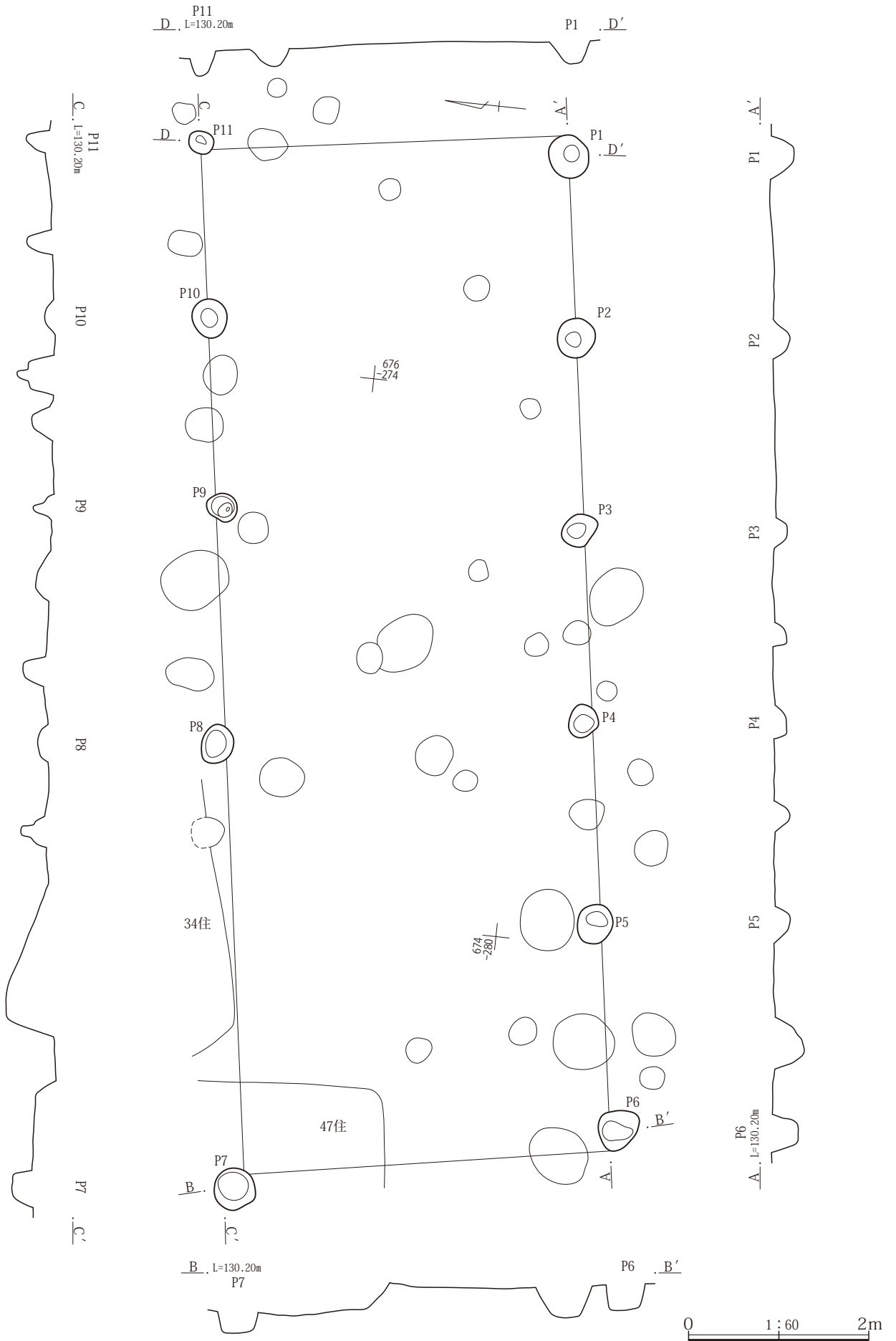
重複 内区が31号竪穴住居と重なる。

形状と規模 桁行3間分、梁間1間の東西に長い側柱建物で、長辺は5.25m、短辺3.15m、柱間は、1.88～2.05m、ピット1とピット2及びピット5とピット6の間は3.05～3.20mである。

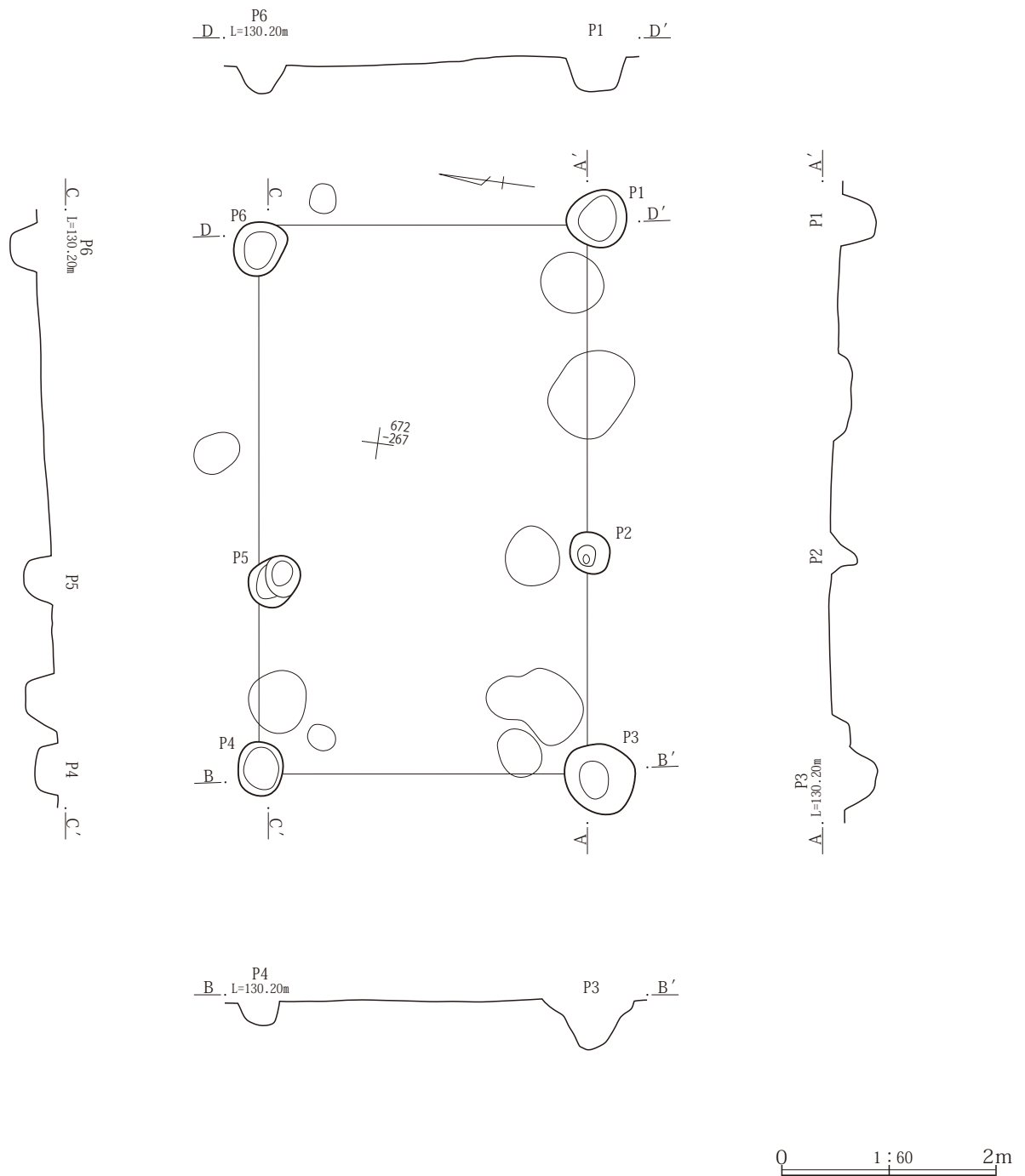
柱穴 建物を構成する柱穴はピット1からピット6の6基が検出された。その他の複数のピットが検出されたが建物の柱穴に認定しなかった。ピットは断面形状が円筒からU字形を呈し、規模は小さいがしっかりとした掘方を有する。



第139图 1号掘立柱建物



第140図 2号掘立柱建物



第141図 3号掘立柱建物

ピット 1 は長径0.56m、短径0.54m、深さ0.33m。
 ピット 2 は直径0.37m、深さ0.24m。
 ピット 3 は長径0.70m、短径0.63m、深さ0.45m。
 ピット 4 は長径0.52m、短径0.42m、深さ0.21m。
 ピット 5 は長径0.52m、短径0.44m、深さ0.27m。
 ピット 6 は長径0.51m、短径0.47m、深さ0.25m。

柱穴の埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 建物の内区が31号竪穴住居に重なるので同時には存在しない。梁間1間の小規模な建物であり、1号掘立柱建物の梁間や柱間に近い。このことから1号掘立柱建物と同様に中世の建物の可能性があるが年代は不明である。

4. 溝

1号溝(第142図、PL.36-7～37-4・38-4・69、235頁)

位置 北部北西壁際。

座標 X=24723～24779 Y=-70298～-70314

主軸方位 N13° E

重複 8号土坑と同時にないし重複関係は不明。2号竪穴住居を切る。

形状と規模 全長は56.00mで南から北に走行し、巨視的には矢場三ツ橋Ⅱ遺跡が立地する矢場扇状地の微高地と西に広がる低地の境界に位置する溝と考えられる。検出された上下幅は0.82～4.15m、深さは0.59～1.06mである。南端と北端の底面比高差は1.79mであり、北に向かって勾配が認められ、底面比高差の勾配は3パーセントである。断面形状は開いたV半月形を呈し、下底には葉研状に狭くなる部分がある。

埋土 暗灰色砂質礫層からなり、断面A-A'付近では東壁側から黄灰色～灰褐色礫まじり火山灰土互層が溝中央に傾きながら成層している。溝底部には水流の痕跡を示す堆積物が認められない、しかし溝は4層の半固結状態の黄灰色～暗灰色砂礫層を開削して構築しており、耐水がなければその壁面は降水によって著しく浸食を受けるものと思われる。検出された溝の壁面には雨水による浸食の痕跡がみられないため、流水もしくは地下水などによって常に帯水することで溝壁面が保護された可能性がある。このことから1号溝は水路として使用され、廃絶後は短期間の間に埋没したものと考えられる。

遺物 埋土から平瓦(1)や中世の在地系土器の片口鉢の破片(2)が出土した。

時代 遺物から中世と考えられる。埋土から14世紀前半～中頃の遺物が出土しており、この遺物よりも溝が埋没した年代は新しいと考えられる。

2号溝(第143図、PL.38-1～38-2・38-4)

位置 北部中央。

座標 X=24743～24746 Y=-70295～-70304

主軸方位 N73° W

重複 なし。

形状と規模 全長は9.65mで西から東に走行する。検出された上下幅は0.70～0.96m、深さは0.03～0.70mで

ある。西端と東端の底面比高差は0.18mであり、西から東へ緩く傾くがほぼ水平である。断面形状は開いた台形を呈する。

埋土 暗灰色礫まじり細粒火山灰土からなる。遺跡では北部にのみ分布する火山灰土の層相を呈する土壌である。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため2号溝は区画を表す水路として使用されたか、1号溝と交差する部分で西に延長しないことから1号溝への排水などを目的とした水路の可能性もある。

遺物 なし。

時代 不明であるが、溝の方向は中世の溝の地割りに調和的であるため、古代から中世の可能性はある。

3号溝(第143図、PL.38-3～39-2)

位置 北部と中央部の境界。

座標 X=24713～24718 Y=-70278～-70309

主軸方位 N81° W

重複 5号溝と同時期ないし重複関係は不明。15号竪穴住居を切る。

形状と規模 全長は31.20mで西から東に走行する。検出された上下幅は0.32～0.80m、深さは0.17～0.64mである。西端と東端の底面比高差は0.41mであり、西から東への勾配がある。断面形状はU字形を呈する。

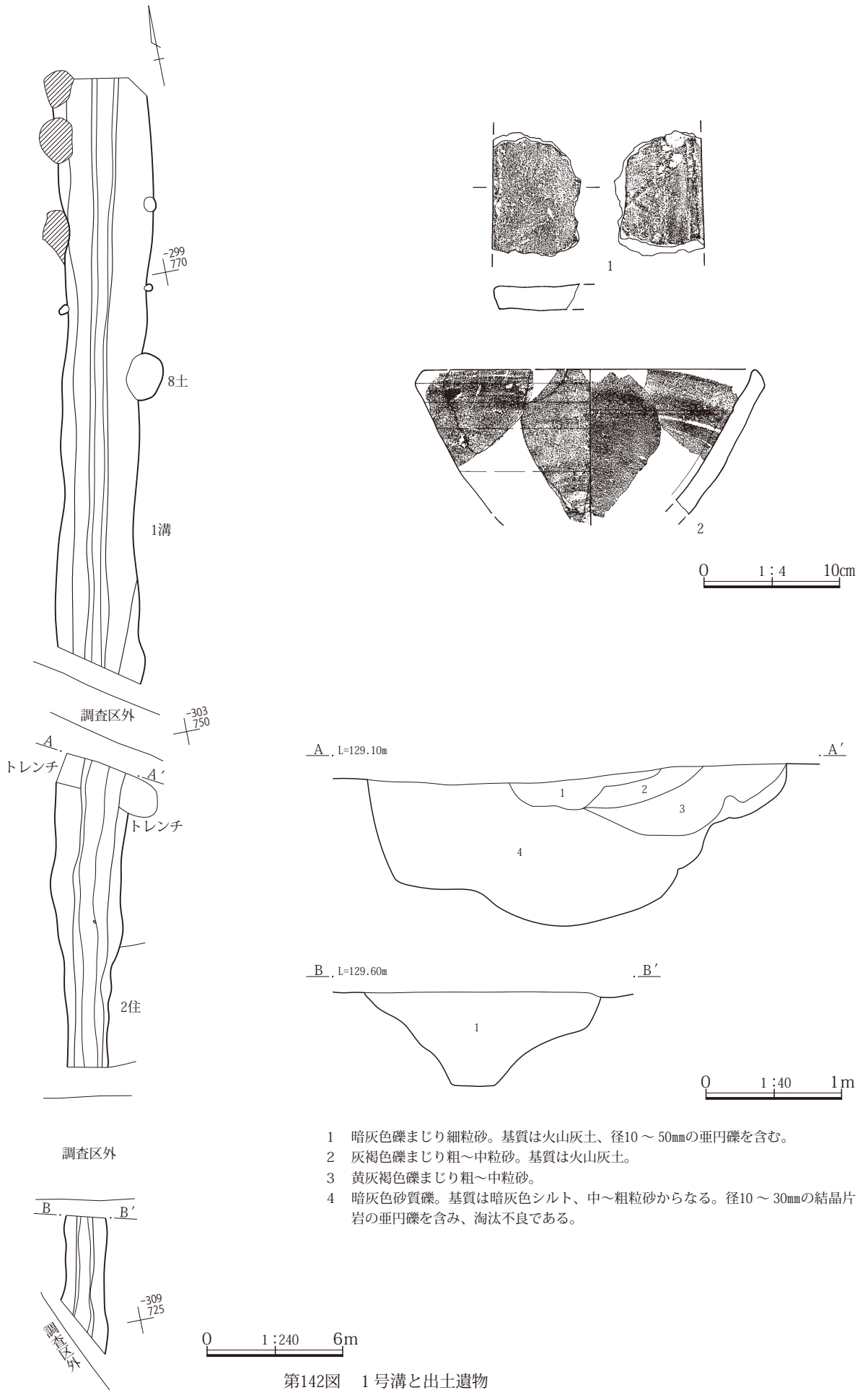
埋土 東壁の断面観察では、耕作土や1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、若干火山灰質で浅間Bテフラ起源の砂まじり堆積物である。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため3号溝は区画を表す水路として使用された可能性がある。

遺物 なし。

特徴 溝の位置、規模や形状から藤岡市教育委員会が平成15年度に発掘調査した道上D遺跡(藤岡市教委2008)の5号溝状遺構に延伸する溝であると考えられる。3号溝と道上D遺跡5号溝の検出された最大の長さは60mに達し、東西方向に直線で走行する区画溝の特徴を示している。

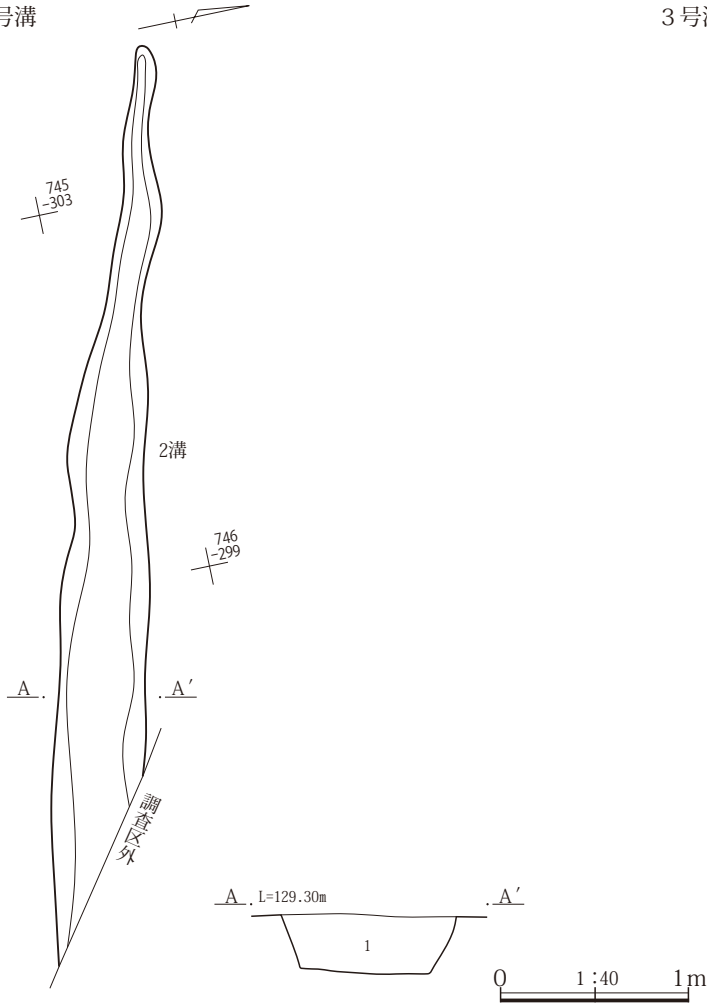
時代 埋土に浅間Bテフラ起源の土壌を含むことから12世紀以降は確実で、中世以降の可能性はあるが年代は不明である。道上D遺跡の5号溝は中世以降と考えられている。

1号溝



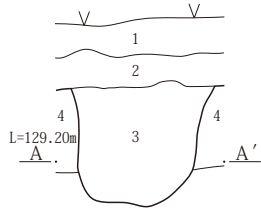
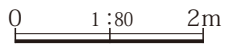
第142図 1号溝と出土遺物

2号溝



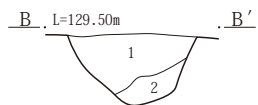
2号溝

1 暗灰色礫まじり細粒火山灰土。径20～40mmの垂円礫を含む。



3号溝

- 1 耕作土(表土)
- 2 灰色As-Bまじり砂質シルト～砂層(1層)
- 3 暗灰色礫まじり砂質土。中粒砂優勢。径20～40mmの垂円礫を含む。
- 4 暗灰色礫まじり中粒砂層。土壌化している。(2～3層)

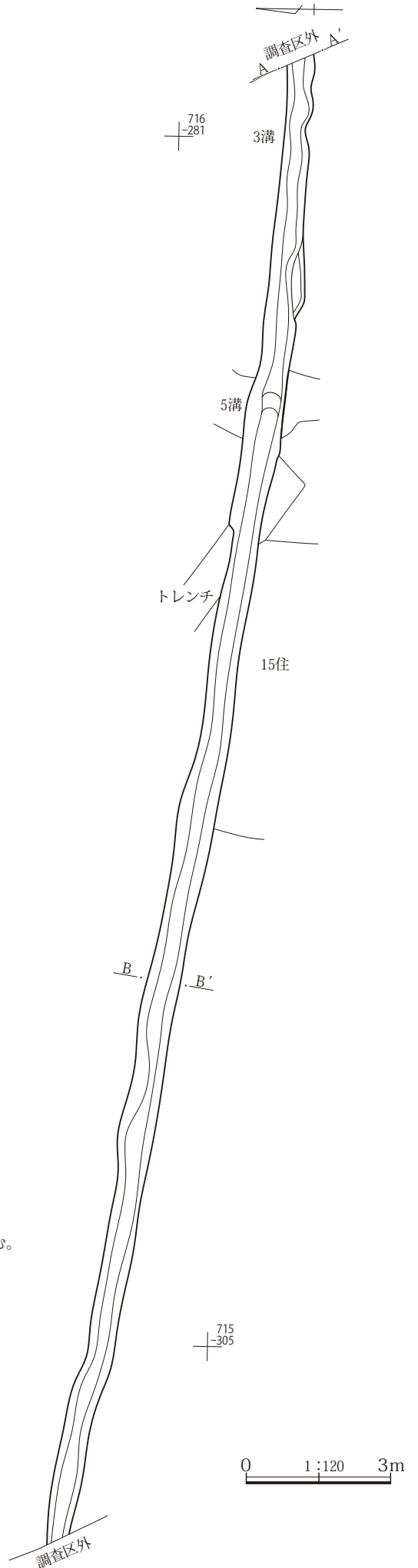


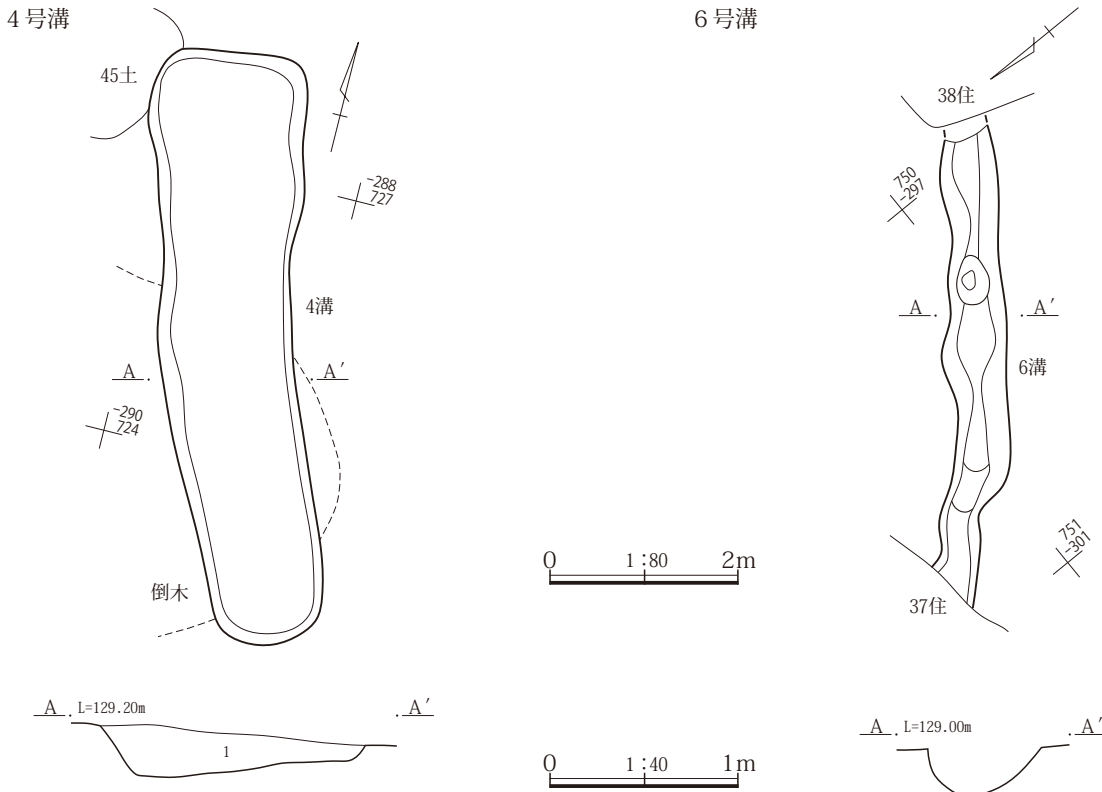
3号溝

- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。塊状無層理を呈する。
- 2 暗灰色火山灰質砂。中～粗粒砂。

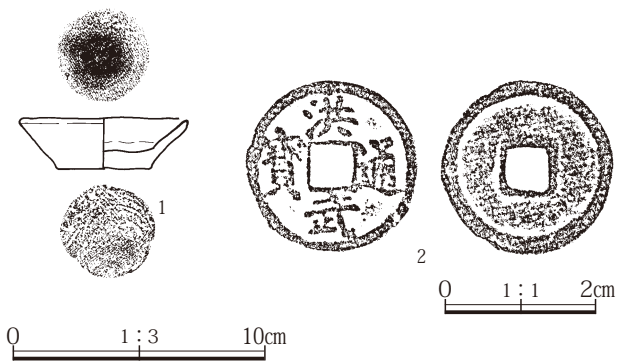


3号溝





1 灰色火山灰質礫まじり中粒砂。径10～30mmの垂円礫を含む。



第144図 4・6号溝と4号溝の出土遺物

4号溝(第144図、PL.39-3～39-4・69、235頁)

位置 北部南東の北西壁寄り。

座標 X=24722～24728 Y=-70287～-70290

主軸方位 N20° W

重複 45号土坑と同時期ないし重複関係は不明。

形状と規模 全長は6.38mで北北西方向に長軸を有する。検出された上下幅は1.40～1.70m、深さは0.08～0.24mである。西端と東端の底面比高差はなく水平で、断面形状は浅い皿状を呈する。方形土坑の可能性がありますが、東壁の形状が不明瞭であり溝状遺構に含めた。

埋土 灰色火山灰質礫まじり砂からなり、浅間Bテフラ

起源の砂まじり堆積物である。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられない。

遺物 埋土から在地系土器の皿(1)や銭貨「洪武通寶」(2)が出土した。

特徴 整理作業の段階で方形の土坑の範疇に区分できる可能性も検討したが、浅い溝状遺構である可能性も残されており、遺構の名称は4号溝をそのまま使用する。

時代 遺物から中世と考えられ、14世紀中頃～後半と考えられる。

5号溝(第145図、PL.39-5～40-5・69、235頁)

位置 中央部の中央を南北に縦断する。

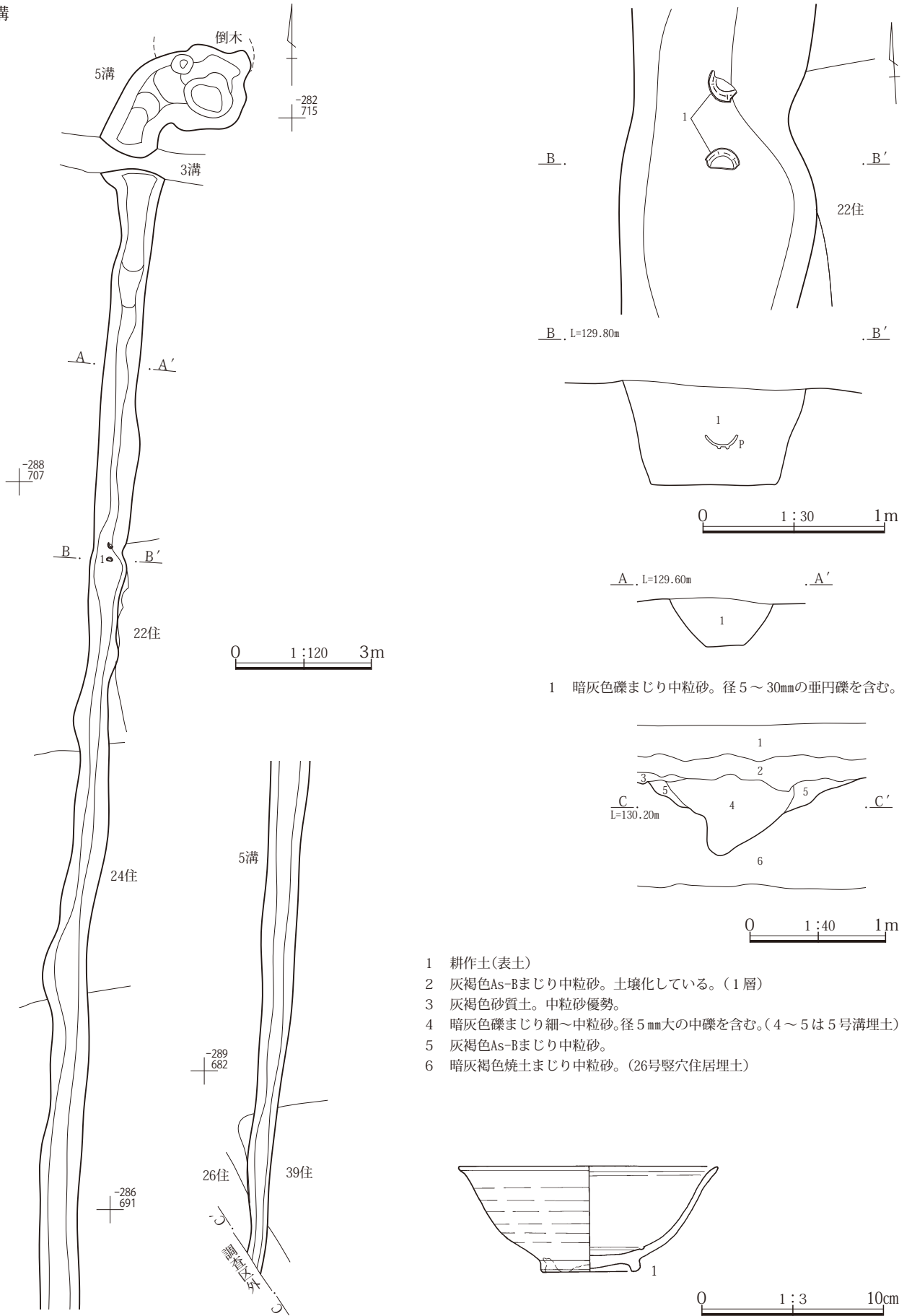
座標 X=24677～24716 Y=-70282～-70288

主軸方位 N5° E

重複 3号溝と同時期ないし重複関係は不明。22号・24号・26号・39号竪穴住居を切る。

形状と規模 全長は36.50mで南から北に走行する。検出された上下幅は0.46～0.90m、深さは0.26～0.41mである。南端と北端の底面比高差は0.73mであり、南か

5号溝



第145図 5号溝と出土遺物

ら北への勾配がある。断面形状は台形～V字形を呈する。溝の北端は3号溝との交差点の北部で不定形の土坑状の窪みを終点に閉じている。窪みは歪んだ円形を呈し、直径が1.98m、深さ0.79mである。窪みは4層の黄灰色円礫層を掘り込み、形状は凸凹して一定しない。このため土坑や井戸とは呼称せず溝の終点と認定した。このような形状から窪みは、排水溝の末端において4層の礫層へ水流を浸透させることを目的に不定形に掘られた開渠のような機能をもった遺構である可能性がある。

埋土 南西壁の断面観察では、耕作土や1層と2層の層埋面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなり、溝埋土の基底に浅間Bテフラまじりの砂質土が堆積する。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため5号溝は区画を表す水路として使用された可能性がある。

遺物 5号溝の中央に位置し、22号竪穴住居と重複関係にある位置から中国製の白磁碗(1)が、溝の底13cm上から2破片が出土して接合している。当時の威信財であった輸入陶磁器が完形に近く割れた状態で出土しており、周辺には他の遺物の出土はみられなかった。このことは遺物が不要品として廃棄されたものではなく何らかの呪いなどの祭祀に関わる行為により廃棄された可能性を指摘する。

特徴 3号溝と同時期の可能性があり、直交することから3号溝と同様に東西南北の方形区画を示す区画溝の可能性もある。5号溝の延伸する南西壁以南の調査区外は、5号溝の延長上に現況の畑の地境が認められ、後述する8号・9号溝の延長上で地境を呈する歩道で留まっている。3号溝との交差部分からの距離は現地での実測で75.00mであり、3号溝や7号・8号・9号溝と共に方形区画を示している可能性がある。

時代 出土遺物から鎌倉時代と考えられ、13世紀中頃から14世紀前半には溝の機能が失われ埋土の堆積がはじまったと推定される。

6号溝(第144図、PL.40-6)

位置 北部中央。

座標 X=24748～24752 Y=-70296～-70300

主軸方位 N51° W

重複 37号・38号竪穴住居を切る。

形状と規模 全長は5.2mで北西から南東に走行する。

検出された上下幅は0.20～0.60m、深さは0.05～0.30mである。北西端と南東端の底面比高差は0.24mであり、北西から南東へ緩く傾くがほぼ水平である。断面形状は半月形を呈する。溝の端部はいずれも掘り込まれた竪穴住居埋土で不明瞭になり竪穴住居外の4層に延長しない。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、隣接する竪穴住居の埋土とよく似ており、埋土の固結状態も同様である。このことから6号溝は竪穴住居の埋没時に近い時期に堆積した可能性がある。また竪穴住居の周囲にのみ分布することから、両住居埋土を堆積させた竪穴に関連して形成された流路や排水などを目的に掘られた溝状遺構の可能性もある。

遺物 なし。

時代 37号・38号竪穴住居を埋土の一部が切っているが、境界が極めて不明瞭であり埋土もよく似ているので2層を母材にした埋土であると考えられる。埋土の特徴から6号溝の時代は古墳時代以降～中世以前の可能性がある。

7号溝(第146図、PL.40-7～41-2・69、236頁)

位置 南東部北東壁際。

座標 X=24651～24658 Y=-70232～-70238

主軸方位 主体はN3° Wであり、8号溝との合流部分はN88° E。

重複 8号溝に切られるが、ほぼ同時期と考えられる。

形状と規模 全長は11.00mで南北方向に走行し90°東に曲がって8号溝に合流する。検出された上下幅は0.27～1.92m、深さは0.05～0.43mで、上幅1.04mと0.38mの並行する大小二条の溝からなる。北端と南端の底面比高差はなく水平で、断面形状は浅い皿状を呈する。

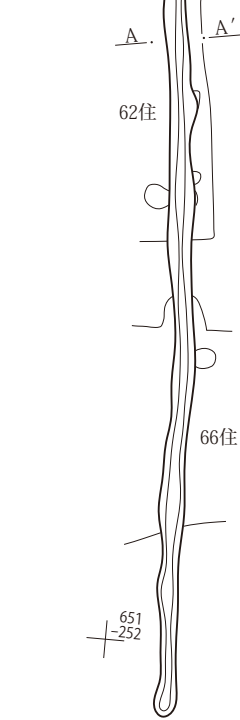
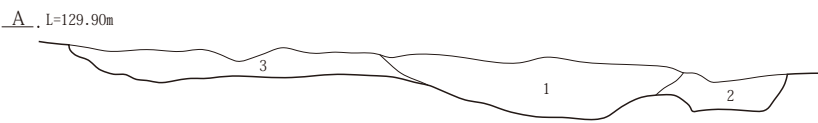
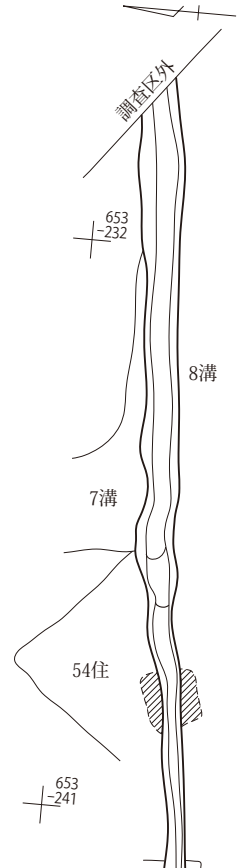
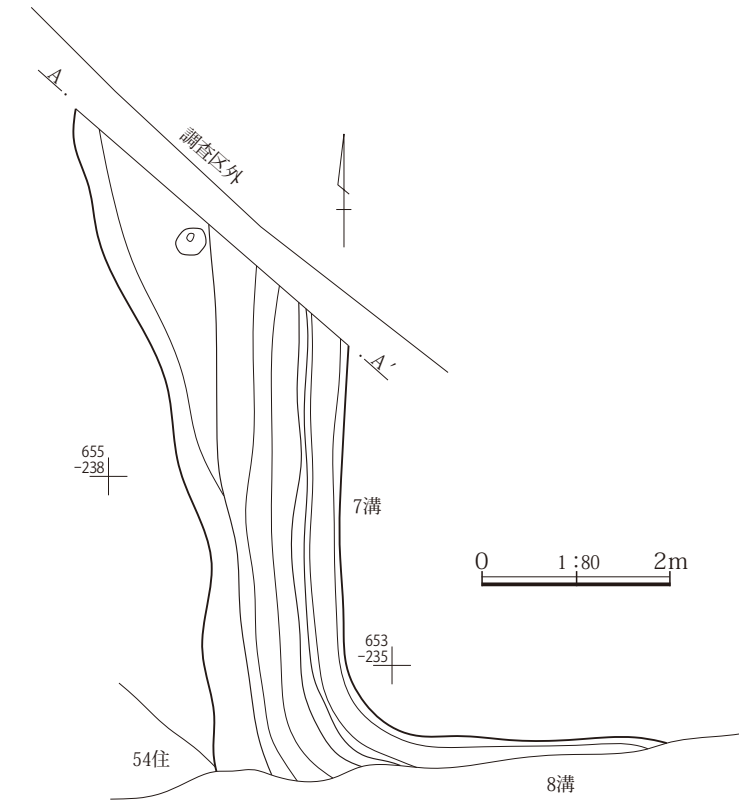
埋土 暗灰色シルト質～砂質土互層からなり、炭化物や焼土、黄灰色シルト質砂のブロックを含む。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため7号溝は東西と南北の交差点の区画を示す溝として使用された可能性がある。

遺物 埋土から常滑陶器甕(1)、馬具轡(2)が出土した。

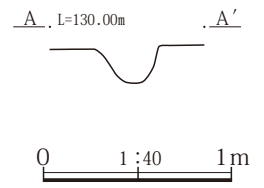
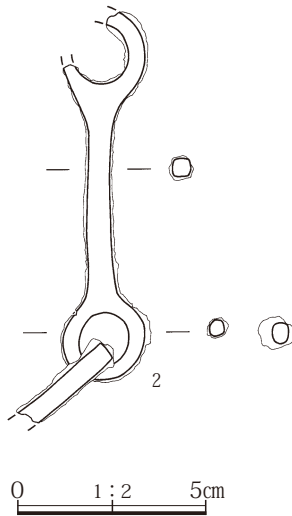
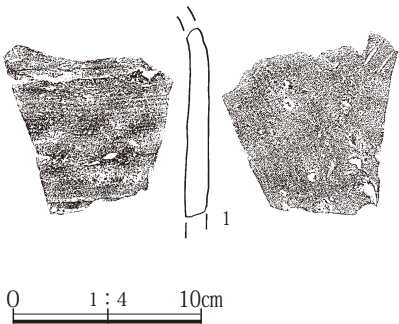
時代 遺物から中世と考えられるが詳細な年代は不明である。

7号溝

8号溝



- 1 暗褐色シルト質～砂質土。炭化物を含むシルト質砂優勢。
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。焼土粒や黄灰色シルト質砂ブロックを含むシルト質砂優勢。
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロック含むシルト質砂。

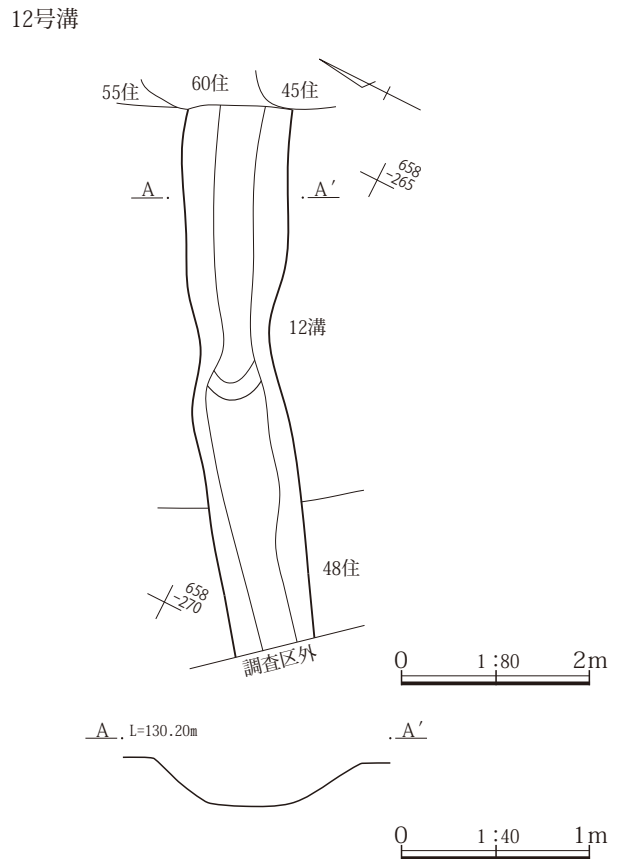
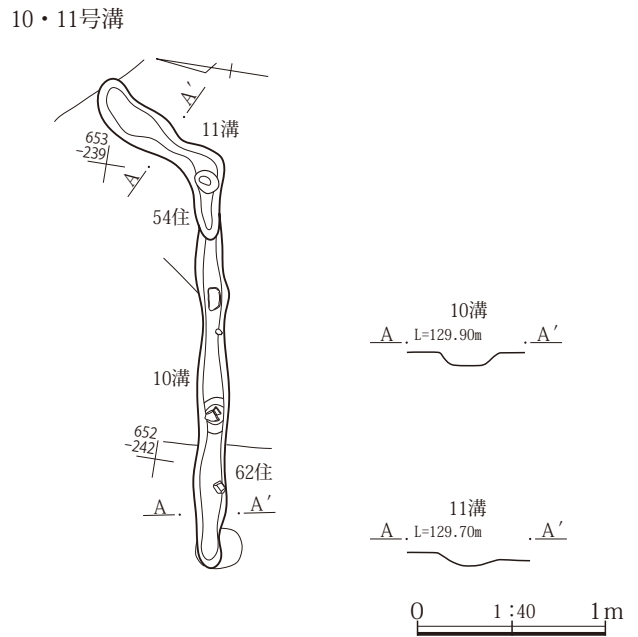
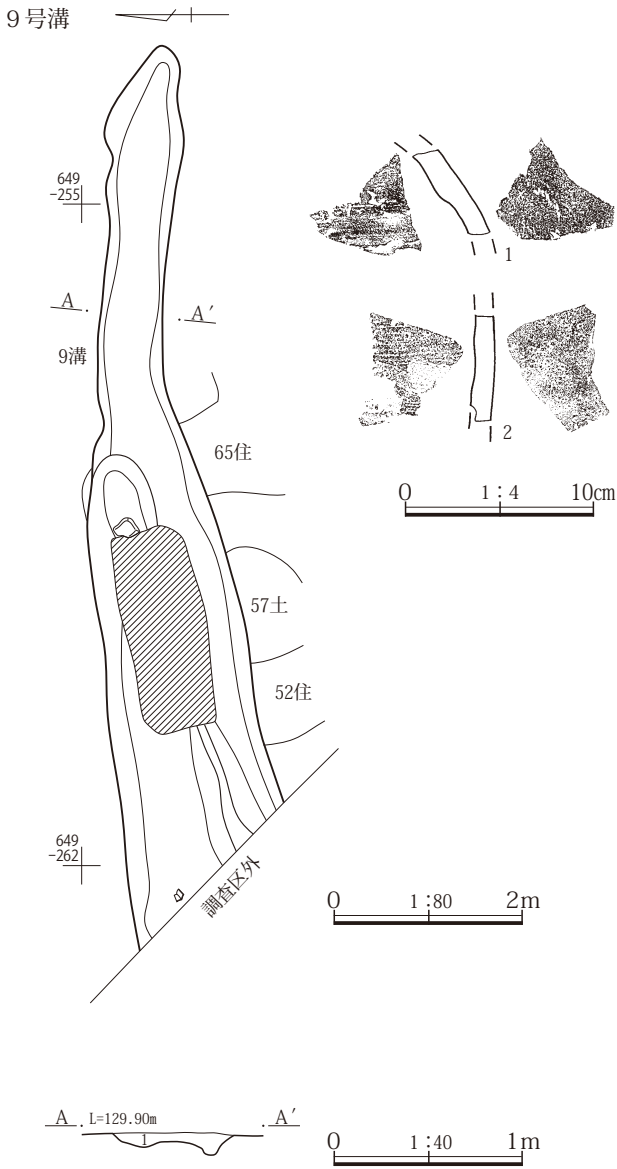


第146図 7・8号溝と7号溝の出土遺物

8号溝(第146図、PL.32-5・41-1～41-2)**位置** 南東部北東壁際。**座標** X=24649～24652 Y=-70229～-70253**主軸方位** N83° E**重複** 7号溝を切るが、ほぼ同時期と考えられる。54号・62号・66号竪穴住居を切る。**形状と規模** 全長は23.90mで西から東に走行する。検出された上下幅は0.35～0.75m、深さは0.02～0.19mである。西端と東端の底面比高差は0.50mで東に向かって勾配が認められる。断面形状は半月形を呈する。8号溝の西端部は、後述する9号溝の東端部にあり、両溝は規模や形状の似た東西方向の溝群であることから、9号溝に延伸していた可能性がある。**埋土** 黄灰色シルト質～砂質土からなり、竪穴住居の周辺では炭化物や焼土、黄灰色シルト質砂のブロックを含む。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため8号溝は東西方向の区画を示す溝として使用された可能性がある。**遺物** なし。**時代** 不明であるが、溝の方向は中世の溝の地割りに調和的であるため、古代から中世の可能性がある。**9号溝**(第147図、PL.41-3、236頁)**位置** 南東部南西壁際。**座標** X=24646～24648 Y=-70253～-70262**主軸方位** N82° E**重複** 57号土坑と同時期か重複関係は不明。52号・65号竪穴住居を切る。**形状と規模** 全長は9.10mで西から東に走行する。検出された上下幅は0.68～1.70m、深さは0.03～0.24mであり、西端から中央で上幅0.71mと0.59mの並行する大小二条の溝が合流している。西端と東端の底面比高差は0.11mで水平を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。**埋土** 灰褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックを含むシルト質砂がみられる。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため9号溝は、8号溝に延伸して東西方向の区画を示す溝として使用された可能性がある。9号溝の延伸する南西壁以南の調査区外は、9号溝の延長上に地境を呈する歩道がみられる。

8号溝と7号溝の交差部分から、9号溝及び5号溝の延長方向と直交する地点は、現地での実測で65.00mである。5号溝や7号・8号溝と共に9号溝は方形区画を示している可能性がある。

遺物 埋土から常滑陶器の甕(1・2)の破片が出土した。**時代** 遺物から中世と考えられるが詳細な年代は不明である。**10号溝・11号溝**(第147図、PL.32-5)**位置** 南東部南壁際。**座標** X=24650～24653 Y=-70238～-70243**主軸方位** 10号溝はN80° E、11号溝はN32° E**重複** 10号溝は62号竪穴住居を切り、11号溝に切られるが溝同士の境界は不明瞭でほぼ同時期であろう。11号溝は54号竪穴住居を切る。**形状と規模** 10号溝の全長は3.50mで西から東に走行する。検出された上下幅は0.22～0.34m、深さは0.02～0.09mである。西端と東端の底面比高差は0.15mで緩く東に勾配がある。断面形状は浅い皿状を呈する。11号溝の全長は2.20mで10号溝と併せて5.70mである。検出された上下幅は0.29～0.43m、深さは0.02～0.07mで規模は10号溝に近い。西端と北東端の底面比高差は水平を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。**埋土** 灰褐色シルト質～砂質土からなり、9号溝埋土に似たシルト質土が優勢な層相である。埋土には水流の痕跡を示す堆積物がみられないため10号・11号溝は、8号溝や7号溝に平行して東西や南北方向の区画を示す溝として使用されたか、8号溝や7号溝の一時的な流路の変更によって形成された溝の可能性がある。**遺物** なし。**時代** 不明であるが、溝の方向は中世の溝の地割りに調和的であるため、古代から中世の可能性がある。**12号溝**(第147図、PL.41-4)**位置** 南東部南西壁際。**座標** X=24656～24660 Y=-70264～-70270**主軸方位** N60° E**重複** 45号・48号・55号・60号竪穴住居を切る。**形状と規模** 全長は5.85mで南西から北東に走行する。検出された上下幅は0.62～1.10m、深さは0.20～0.32



1 灰褐色シルト質～砂質土。黄灰色砂ブロック含むシルト質砂。

mである。南西端と北東端の底面比高差は0.13mであり、西から東へ緩く傾くがほぼ水平である。断面形状は半月形を呈する。溝の端部はいずれも掘り込まれた竪穴住居埋土で不明瞭になる。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、隣接する竪穴住居の埋土とよく似ており、埋土の固結状態も同様である。このことから12号溝は竪穴住居に近い時期に堆積した可能性がある。

遺物 なし。

時代 竪穴住居を埋土の一部が切っているが、境界が極めて不明瞭であり埋土もよく似ているので2層を母材に

した埋土であると考えられる。埋土の特徴から12号溝の時代は古墳時代以降～中世以前の可能性がある。

第147図 9～12号溝と9号溝の出土遺物

5. 井戸

1号井戸(15号土坑) (第148図、PL.42-1～42-5・69、236頁)

位置 中央部と南東部境界北東壁際寄り。

座標 X=24684～24686 Y=-70269～-70270

重複 なし。

形状と規模 検出平面は少し歪んだ円形を呈し、断面形状は円筒形で底が広がるフラスコ形である。長径は1.59m、短径1.50m、深さ1.02mで完掘である。

埋土 灰褐色の浅間Bテフラまじりの火山灰土からなり、直径0.76mの暗灰～黄灰色砂質～シルト質土ブロックが堆積している。ブロックが東側から傾斜して堆積しており、人為的に埋められた可能性がある。埋土には直径0.14mの結晶片岩の垂円礫が含まれる。

遺物 底部付近の灰褐色の浅間Bテフラまじりの火山灰土から中世の在地系土器の皿(1)や搬入系土器の可能性のある皿(2・3)が出土した。在地系土器の皿は、こぶりのかわらけで丸底であるが轆轤を使用していると考えられる。一方、搬入系土器の可能性のある皿2点は、胎土が異なりてづくねで作られたかわらけである。

時代 出土した遺物から鎌倉時代と考えられ、年代は13世紀である。

2号井戸(19号土坑) (第148図、PL.43-1～43-4)

位置 南東部北東壁際北寄り。

座標 X=24684～24687 Y=-70265～-70267

重複 なし。

主軸方位 N61° E

形状と規模 検出平面は少し歪んだ楕円形を呈し、断面形状は円筒形で検出面付近の上部で広がる朝顔形埴輪に似た形である。長径は2.70m、短径2.42m、深さ3.63mで完掘である。

埋土 上位より暗灰色の浅間Bテフラまじりの火山灰土、直径0.1～0.3mの暗灰～黄灰色砂質土がブロック状に堆積している。ブロックは北東側から中央に向かって傾斜して堆積しており、井戸最上部の埋土は人為的に埋められた可能性がある。井戸掘削時の断面観察では、底から2.00～3.00mの堆積物は暗灰色砂質～シルト質土でシルト質土が優勢である。底から2.00mの堆積物は成層した

砂質堆積物で地下水を含み軟弱で、掘削中に崩落した。

遺物 なし

時代 浅間Bテフラを埋土に含む特徴から中世と考えられる。

3号井戸(20号土坑) (第149図、PL.43-5～43-6、236頁)

位置 中央部と南東部境界中央。

座標 X=24682～24684 Y=-70270～-70272

重複 なし。

主軸方位 N62° W (底部)

形状と規模 検出平面は少し歪んだ円形を、底部は歪んだ楕円形を呈する。断面形状は台形状である。長径は1.85m、短径1.83m、深さ0.78mで完掘である。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり埋土に浅間Bテフラは混じらない。基底には黄褐色シルト質～砂質土が部分的に堆積している。

遺物 埋土から6世紀後半の年代を示す須恵器杯蓋(1)が出土したが、混入した遺物である。

時代 年代は不明であるが、規模や形状が1号井戸に類似するため、中世と考えられる。

4号井戸(28号土坑) (第149図、PL.43-7～44-2・69、236頁)

位置 南東部南壁際東寄り。

座標 X=24654～24657 Y=-70240～-70243

重複 なし。

形状と規模 検出平面は少し歪んだ楕円形を呈し、断面形状は円筒形で検出面付近の上部で急激に広がる漏斗形で高坏の上部のような形である。長径は3.80m、短径3.07m、深さ2.96mで完掘である。

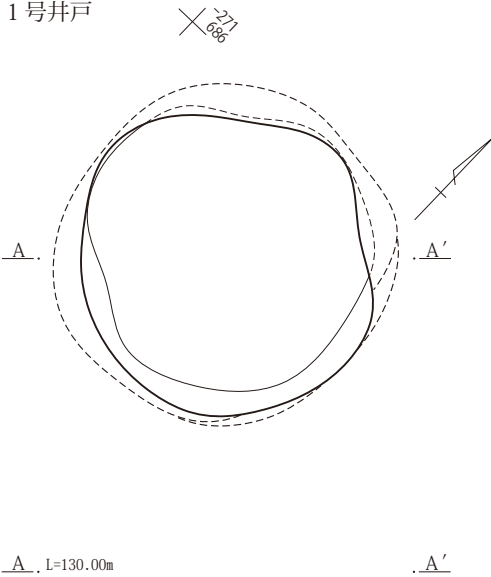
埋土 上位の漏斗形の部分の埋土は壁側から中央に向かって緩く傾きながら成層しており、下位より黄灰褐色砂、灰褐色シルト質砂、暗灰色浅間Bテフラ、礫まじりの砂が堆積している。井戸掘削時の断面観察では、底から上部にかけて暗灰色シルト質砂層が上下に分かれて堆積していた。底から0.85mは4層の砂礫層から湧水が認められ、井戸はこの帯水層で掘止められたと考えられる。

遺物 井戸の底部付近の埋土から中世の在地系土器の片口鉢(1)、常滑陶器の甕(2・3)の破片が出土した。

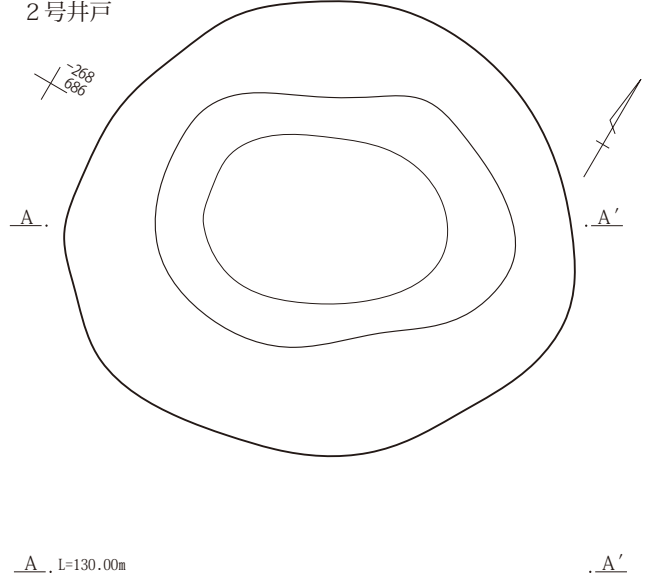
時代 出土した遺物から室町時代と考えられ、年代は14

第3章 調査された遺構と遺物

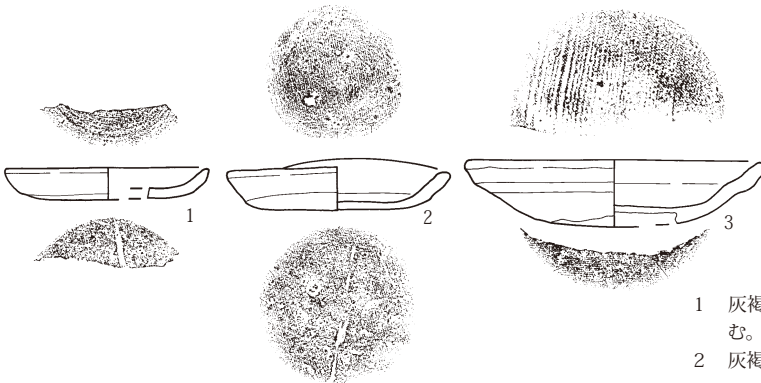
1号井戸



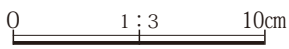
2号井戸



- 1 灰褐色As-Bまじり火山灰土。径20mmの亜円礫を含む。カワラケは本層の下部から出土。
- 2 暗灰～黄灰色中～粗粒砂の互層。黄灰色砂はブロック状を呈し、暗灰色土は腐植が進んだシルト質土。



- 1 灰褐色As-Bまじり砂。焼土や黄灰色シルト質中～細粒砂ブロックを含む。
- 2 灰褐色シルト質砂。下底に径300mmの黒色土ブロックを含む。



第148図 1・2号井戸と1号井戸の出土遺物

世紀である。

5号井戸(29号土坑) (第150図、PL.44-3～44-4・69、236頁)

位置 南東部南西壁寄り。

座標 X=24664～24667 Y=-70271～-70274

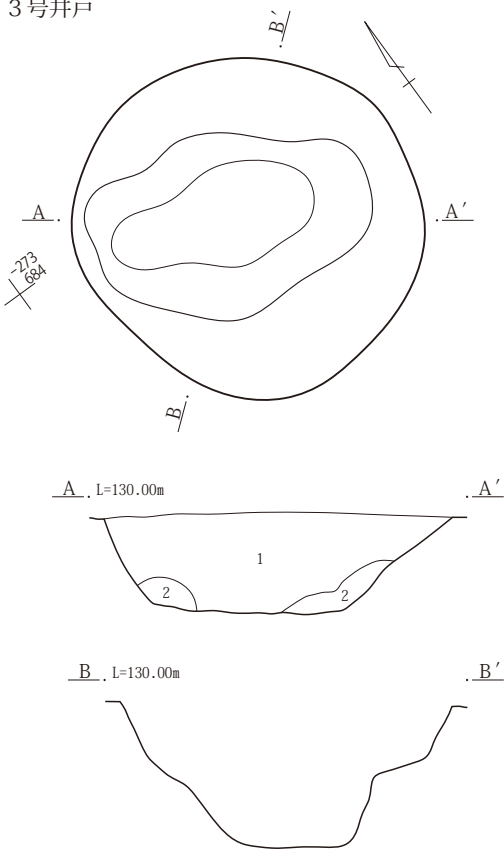
重複 なし。

形状と規模 検出平面は少し歪んだ円形を呈し、断面形

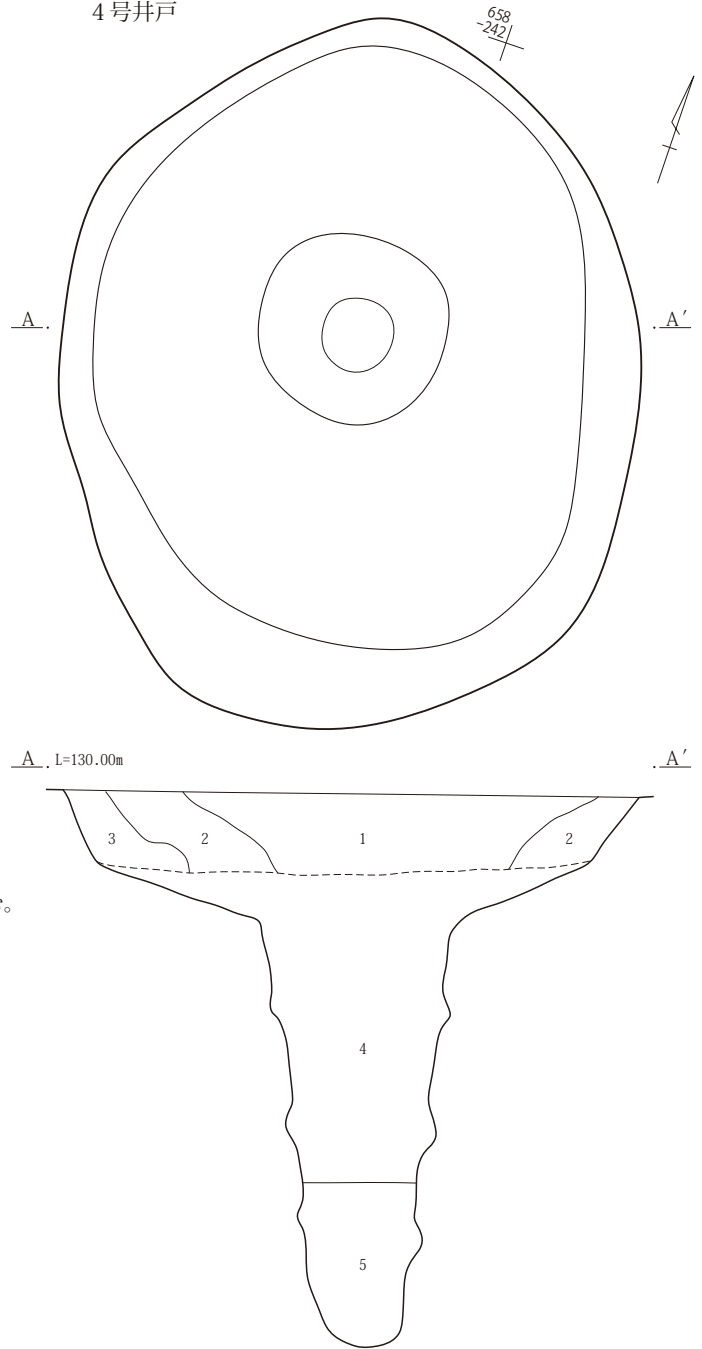
状は円筒形で検出面付近の上部で広がる縄文土器の深鉢形を呈する。長径は3.00m、短径2.87m、深さ2.92mで完掘である。

埋土 上位の埋土は壁側から中央に向かって緩く傾きながら成層しており、壁側基底より黄褐色砂質土、黒褐色砂質土が南西壁付近にのみ検出された。その上位は暗褐色～黄褐色シルト質～砂質土が互層して穴を埋めるよう

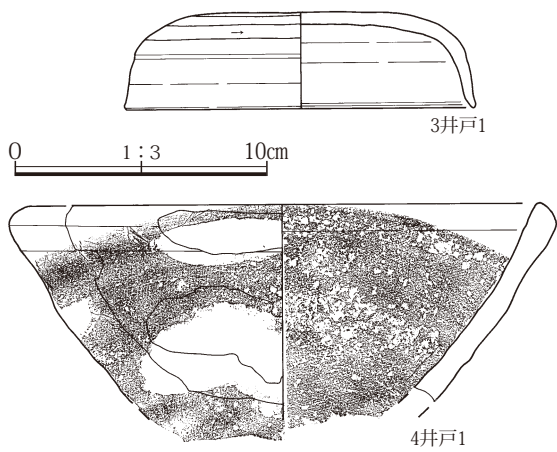
3号井戸



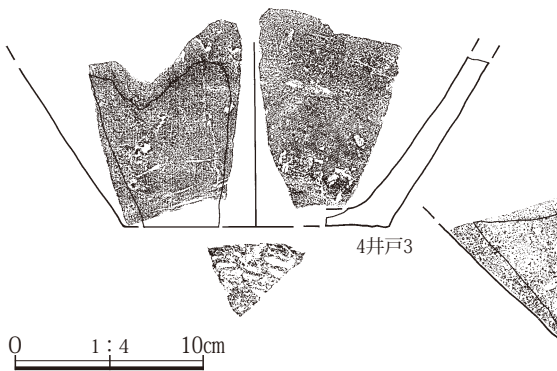
4号井戸



- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを少量含む。
- 2 黄褐色シルト質砂～砂質土。黄灰色シルト質砂を含む。

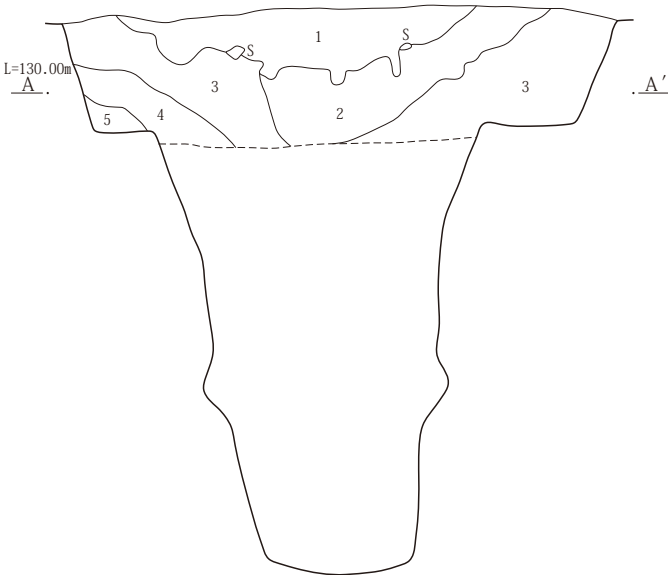
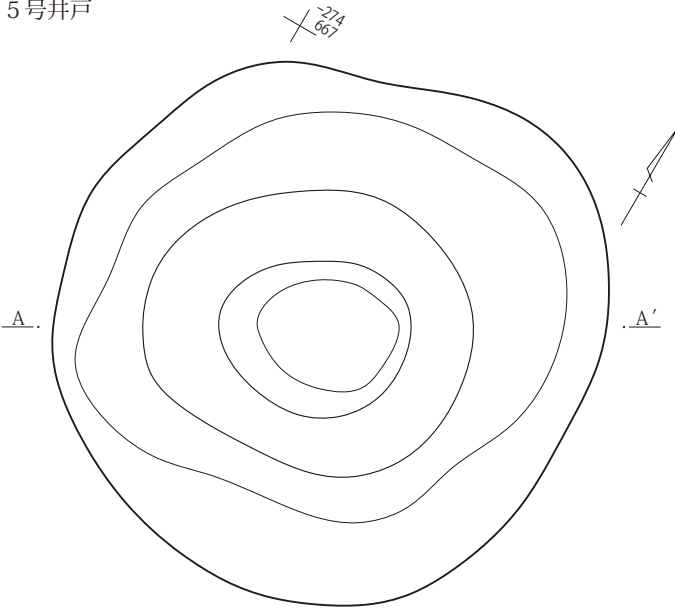


- 1 暗灰色礫まじり中～粗粒砂。As-Bまじり。径10～30mmの亜円礫を含む。
- 2 灰褐色シルト質中粒砂。
- 3 黄灰褐色中～粗粒砂。
- 4 暗灰色シルト質砂。
- 5 暗灰～黒色シルト質砂。

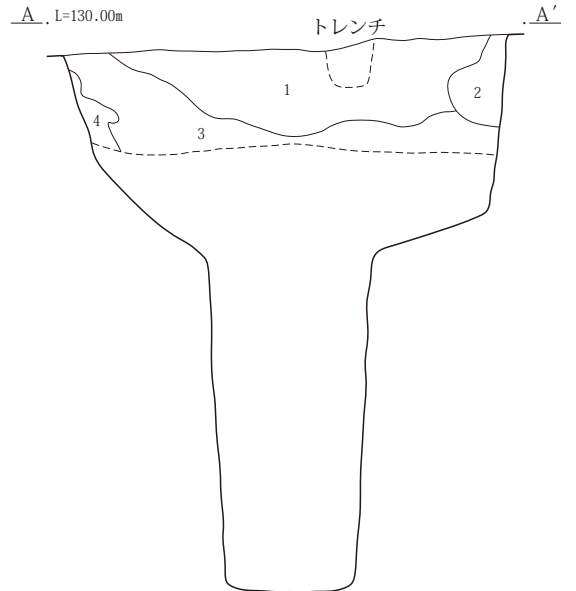
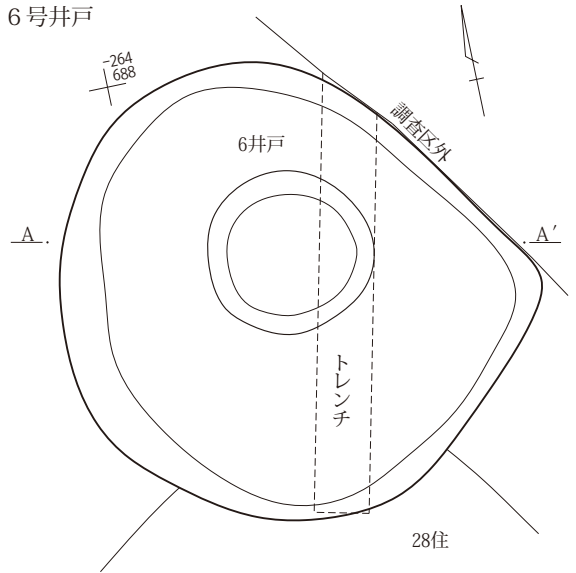


第149図 3・4号井戸と出土遺物

5号井戸



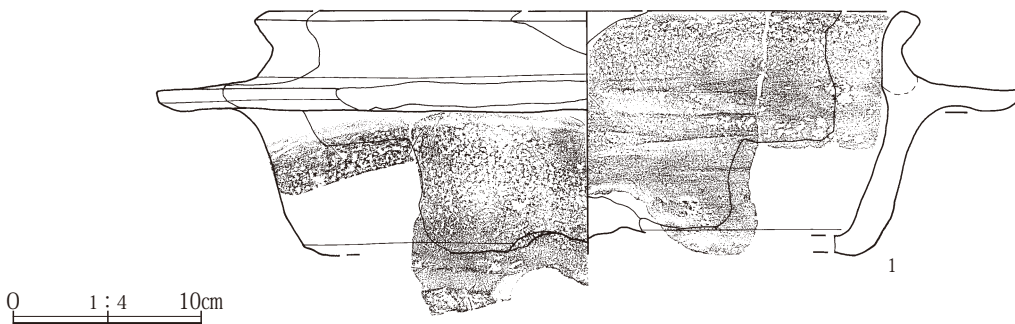
6号井戸



- 1 黄褐色砂質土。
- 2 黄褐色砂質土。黄褐色砂質土ブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色砂質土。灰褐色土粒を多量に含む。
- 4 黒褐色砂質土。黄褐色土粒を少量含む。
- 5 黄褐色砂質土。

- 1 黄灰褐色As-Bまじり中～粗粒砂。
- 2 黒色火山灰土。黄灰色中粒砂ブロックを含む。
- 3 黒～暗灰色礫まじり中粒砂。
- 4 黄灰色中粒砂ブロック。(4層のブロック)

0 1:40 1m



第150図 5・6号井戸と5号井戸の出土遺物

に堆積している。井戸掘削時の断面観察では、底から上部にかけて暗灰色シルト質砂層が堆積していたが、底から1.10mの4層の砂礫層から多量の湧水が認められ、埋土は短時間に崩落した。井戸はこの帯水層付近で掘止められたと考えられる。

遺物 埋土の上部から中世の搬入系土器の可能性のある釜(1)の破片が出土した。

時代 出土した遺物から中世と考えられるが、詳細な年代は不明である。

6号井戸(30号土坑) (第150図、PL.44-5～44-7)

位置 中央部と南東部境界北東壁際。

座標 X=24685～24687 Y=-70262～-70264

重複 28号竪穴住居を切る。

形状や規模 検出平面は少し歪んだ円形を呈し、断面形状は円筒形で検出面付近の上部で広がる縄文土器の深鉢形を呈する。長径は2.46m、短径2.27m、深さ2.85mで完掘である。

埋土 上位の埋土は西壁側から中央に向かって緩く傾きながら成層しており、壁側基底より黄灰色砂、黒～暗灰色礫まじり砂、黄灰褐色浅間Bテフラまじり砂質土が穴を埋めるように堆積している。井戸掘削時の断面観察では、底から上部にかけて暗灰色シルト質砂互層が、基底部の層厚0.50mは塊状無層理の黒色礫まじり砂質シルト層が堆積し、分解されない植物片などが多く出土した。底から湧水が認められ、井戸はこの帯水層で掘止められたと考えられる。

遺物 なし。

時代 埋土に浅間Bテフラを含むといった特徴から中世と考えられる。

6. 土坑・ピット

1号土坑(第151図、PL.45-1)

位置 北部北西壁際。

座標 X=24751 Y=-70308

重複 なし。

形状や規模 北東方向に長い楕円形を呈し、西側は調査区外にある。断面形状は浅いU字形である。検出された最大の長径は0.46m+、短径0.37m+、深さ0.20mである。

埋土 南西壁際での断面観察では、1層と3層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 不明である。

2号土坑(第151図、PL.45-2)

位置 北部中央。

座標 X=24746 Y=-70301～-70302

重複 なし。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形である。長径は0.58m、短径0.52m、深さ0.19mである。

埋土 暗灰色礫まじり細粒火山灰土からなる。

時代 埋土は調査区の北部周辺にのみ分布する2層を母材にした火山灰土で、竪穴住居の時期に近い土壌が埋土として堆積した可能性がある。埋土の特徴から古墳時代以降から中世以前の可能性があるが、年代は不明である。

3号土坑(第151図、PL.45-3)

位置 北部中央。

座標 X=24742～24744 Y=-70298～-70300

重複 なし。

主軸方位 N 7° W

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は半月形である。長径は1.88m、短径1.58m、深さ0.50mである。

埋土 暗灰色礫まじり火山灰土からなり、東壁寄りに黄灰色礫まじり砂が断片的に堆積する。

時代 埋土は調査区の北部周辺にのみ分布する2層を母材にした火山灰土で、2号溝や竪穴住居の時期に近い土壌が埋土として堆積した可能性がある。埋土の特徴から古墳時代以降から中世以前の可能性があるが、年代は不明である。

4号土坑(第151図、PL.45-4)

位置 調査地の中央。

座標 X=24693～24694 Y=-70283～-70284

重複 なし。

形状や規模 円形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。長径は0.97m、短径0.85m、深さ0.21mである。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂のブロックや焼土を含む。

時代 不明である。

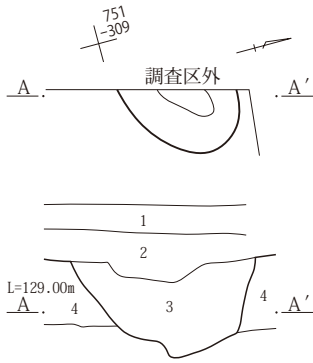
5号土坑(第151図、PL.45-5)

位置 北部中央。

座標 X=24743 Y=-70301

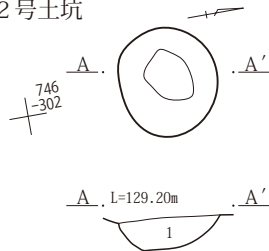
第3章 調査された遺構と遺物

1号土坑



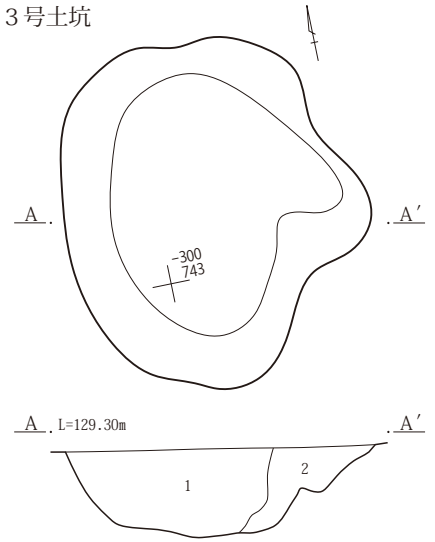
- 1 碎石(表土)
- 2 灰褐色礫まじりシルト質砂層(1層)
- 3 暗灰色礫まじり砂。(埋土)
- 4 黄灰色中粒砂～粗粒砂層(2～3層)

2号土坑



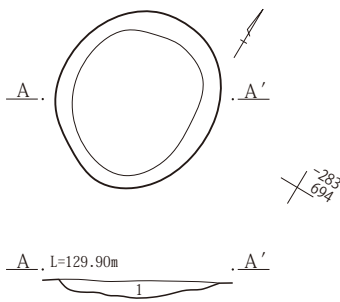
- 1 暗灰色礫まじり細粒火山灰土。径10～30mmの結晶片岩の亜円礫を含む。

3号土坑



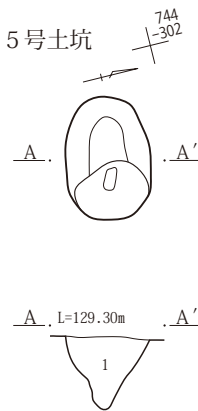
- 1 暗灰色礫まじり火山灰土。径10～30mmの亜円礫を多く含む。
- 2 黄灰色礫まじり中～粗粒砂。

4号土坑



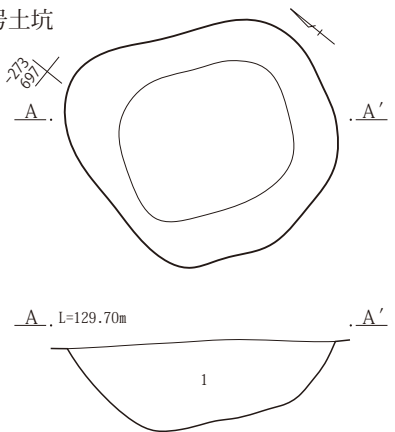
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックや焼土粒を含む。

5号土坑



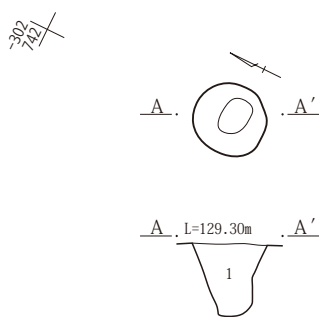
- 1 暗灰色礫まじり細粒火山灰土。

6号土坑



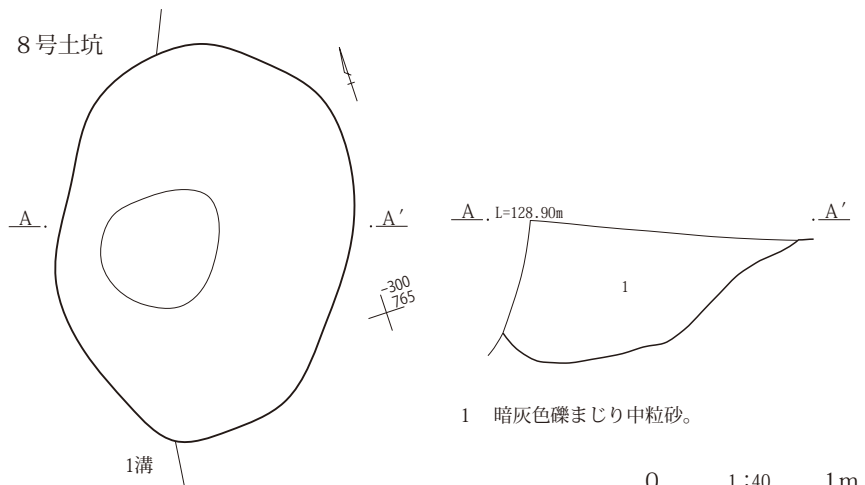
- 1 暗灰色細粒火山灰土。極細粒砂～シルト優勢。径10～30mm最大径50mmの亜円礫を含み、塊状無層理を呈する。

7号土坑



- 1 暗灰色礫まじり砂。径10mmの亜円礫を含む。

8号土坑



- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。



第151図 1～8号土坑

重複 なし。

主軸方位 N80° W

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状はV字形である。長径は0.66m、短径0.44m、深さ0.62mで形状から柱穴と考えられる。

埋土 暗灰色礫まじり細粒火山灰土からなる。

時代 埋土は調査区の北部周辺にのみ分布する2層を母材にした火山灰土で、2号溝や竪穴住居の時期に近い土壌が埋土として堆積した可能性がある。埋土の特徴から古墳時代以降から中世以前の可能性があるが、年代は不明である。

6号土坑(第151図、PL.45-6)

位置 中央部北東壁寄り。

座標 X=24695～24696 Y=-70272～-70273

重複 なし。

形状や規模 歪んだ隅の丸い正方形を呈し、断面形状は歪んだ半月形である。長径は1.35m、短径1.23m、深さ0.48mである。

埋土 暗灰色礫まじりシルト質～砂質土からなり、シルト質優勢で均質である。

時代 埋土は2層を母材にした火山灰土で、竪穴住居の時期に近い土壌が埋土として堆積した可能性がある。埋土の特徴から古墳時代以降から中世以前の可能性があるが、年代は不明である。

7号土坑(第151図、PL.45-7)

位置 北部中央。

座標 X=24740～24741 Y=-70301～-70302

重複 なし。

形状や規模 円形を呈し、断面形状はU字形である。長径は0.39m、短径0.37m、深さ0.39mで形状から柱穴と考えられる。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 年代は不明である。

8号土坑(第151図、PL.37-4)

位置 北部北寄り。

座標 X=24764～24767 Y=-70299～-70301

重複 1号溝と同時期か重複不明。

主軸方位 N19° W

形状や規模 歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は歪んだ半月形であるが西側は1号溝に重なり埋土の境界

は不明瞭で形状は不明である。長径は2.12m、短径1.55m、深さ0.65mである。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、1号溝の埋土に似ている。

時代 1号溝に沿って位置し、埋土も似ているため中世の可能性はあるが年代は不明である。

9号土坑(第152図、PL.45-8)

位置 北部北西壁寄り。

座標 X=24734～24736 Y=-70304～-70305

重複 なし。

主軸方位 N10° W

形状や規模 歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は歪んだ半月形である。長径は1.45m、短径1.00m、深さ0.34mである。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 年代は不明である。

10号土坑(第152図、PL.46-1)

位置 北部中央。

座標 X=24734～24735 Y=-70302～-70303

重複 なし。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形である。長径は0.75m、短径0.58m、深さ0.18mであり、底面に浅く狭い窪みがみられる。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなり、黄灰色砂ブロックを含む。

時代 不明である。

11号土坑(第152図、PL.46-2)

位置 中央部と南東部境界北東壁際。

座標 X=24688～24689 Y=-70263～-70264

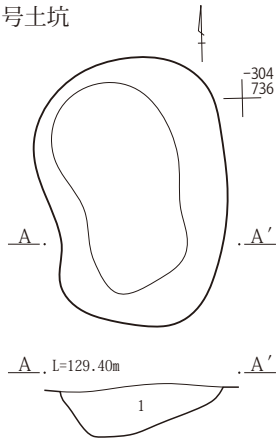
重複 なし。

主軸方位 N35° W

形状や規模 歪んだ隅の丸い長方形を呈する可能性があるが、北東側の大部分が調査区外にある。断面形状は箱形で完掘したが、壁際はさらに下がるので未完掘の可能性が高い。長径は1.95m+、検出された最大の短径0.52m+、深さ0.75mである。

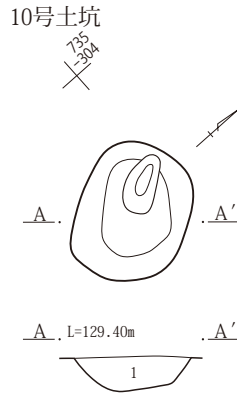
埋土 北東壁際での断面観察で1層と2層の層界面から掘り込まれた埋土は、南東壁側から北西に向かって傾きながら成層しており、下位より黄灰色シルト質砂、黄褐色～暗褐色シルト質～砂質土で黄灰色シルト質砂のブ

9号土坑



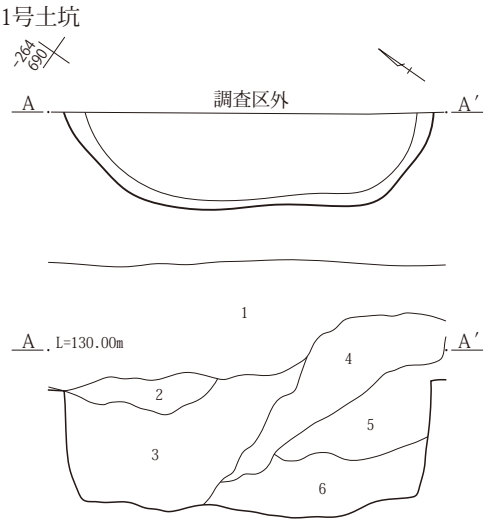
1 暗灰色礫まじり砂。径30～50mmの結晶片岩の亜円礫を多く含む。

10号土坑



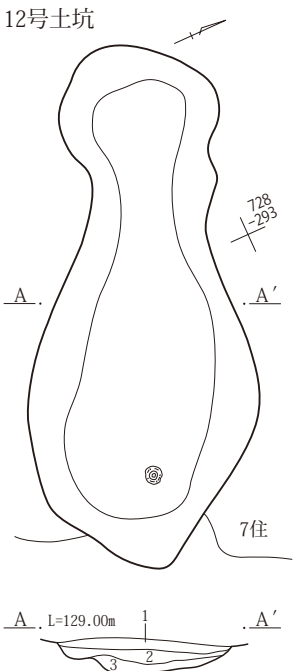
1 暗灰色礫まじり細～中粒砂。径20mmの黄灰色砂ブロックを含む。

11号土坑



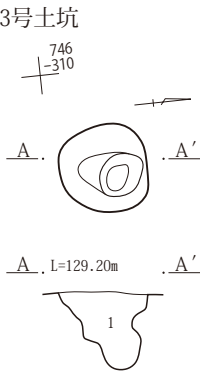
- 1 耕作土。(表土)
- 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。(2～6は埋土)
- 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックを含む。こぶし大の礫を含む。
- 4 黄褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂を少量含む。
- 6 黄灰色シルト質砂。黄灰色シルト質砂ブロックと黒色土を含む。

12号土坑

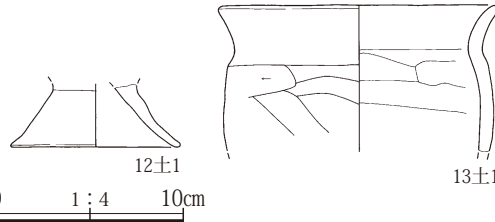


- 1 暗灰～灰褐色シルト質粘土。(1～3は埋土)
- 2 黄灰色シルトまじり中～粗粒砂。
- 3 黄灰色砂礫。(4層の起源の再堆積物)

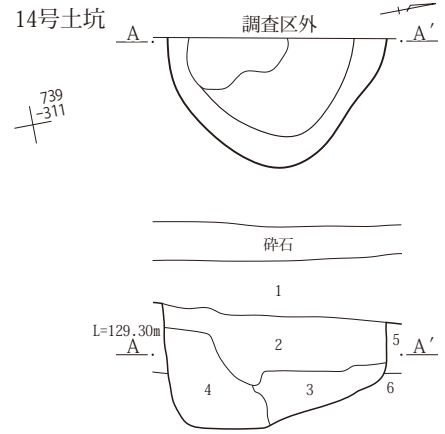
13号土坑



1 暗黄灰色砂質火山灰土。鉱物が多くさらさらした土である。

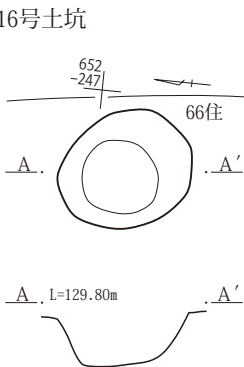


14号土坑

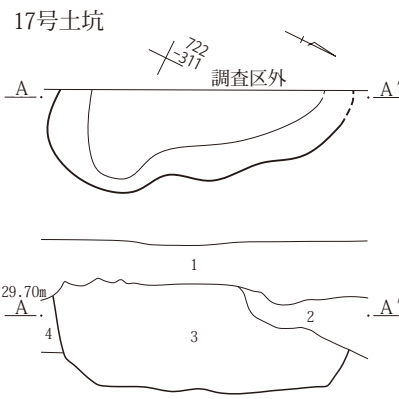


- 1 灰褐色礫まじりシルト質中粒砂(1層)
- 2 暗灰色細粒火山灰土。細粒砂優勢。(2～4は埋土)
- 3 暗灰色細粒火山灰土。径10mmの黄灰色砂ブロックを含む。
- 4 暗灰色細粒火山灰土。径10～20mmの黄灰色砂ブロックを含む。
- 5 暗灰色礫まじり砂質土層。(2～3層)
- 6 黄灰色中～粗粒砂層(4層)

16号土坑



17号土坑



- 1 耕作土(表土)
- 2 暗灰褐色礫まじり砂質火山灰土。(1層?)
- 3 黒～暗灰色礫まじり火山灰土。径10～20mmの亜円礫を多く含む。(埋土)
- 4 黄灰色礫まじり中～粗粒砂層。(4層)



第152図 9～14・16・17号土坑と12・13号土坑の出土遺物

ロックや長径0.20mの結晶片岩の垂円礫を多く含む互層である。これらは人為的に埋められた堆積物の可能性がある。11号土坑は隣接する2号・6号井戸と規模や形状、埋土の特徴がよく似ているため、調査区外に本体が存在する井戸の外郭である可能性が高い。

時代 2号・6号井戸に隣接し、埋土も似ているため中世の可能性はあるが年代は不明である。

12号土坑(第152図、PL.46-3、236頁)

位置 北部北東壁寄り。

座標 X=24726 ~ 24728 Y=-70291 ~ -70294

重複 7号竪穴住居に切られる。

主軸方位 N66° W

形状や規模 歪んだひょうたん形を呈し、断面形状は浅い皿形で溝状の遺構である。長径は2.75m、短径1.23m、深さ0.17mである。

埋土 下位から黄灰色シルトまじり砂層、暗灰～灰褐色シルト質粘土層からなり、堆積物は土坑を掘った後に底面に沿って貼られている。7号竪穴住居掘方の床下土坑の可能性もあるが、土坑の縁が7号竪穴住居のカマド北壁を越えるため、竪穴住居とは別の遺構と考えた。なお、同様の構造を有する竪穴住居の床下土坑は、6号竪穴住居でもカマドの周囲に認められる。

遺物 埋土から土師器台付甕(1)の破片が出土した。

時代 7号竪穴住居に切られるため奈良時代8世紀第4四半期以前である。

13号土坑(第152図、PL.46-4、236頁)

位置 北部北西壁際。

座標 X=24746 Y=-70309

重複 なし。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は変形したU字形である。長径は0.51m、短径0.48m、深さ0.67mで形状から柱穴と考えられる。

埋土 暗黄灰色砂質土からなる。

遺物 埋土から土師器小型甕(1)が出土した。

時代 遺物は古墳時代に帰属すると考えられるが、遺構の年代は不明である。

14号土坑(第152図、PL.46-5)

位置 北部北西壁際。

座標 X=24739 ~ 24740 Y=-70310 ~ -70311

重複 なし。

形状や規模 北西方向に長い隅の丸い方形を呈し、西側は調査区外にある。断面形状は箱形である。検出された最大の長径は1.16m+、短径0.69m+、深さ0.29mである。

埋土 南西壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色細粒火山灰土からなり、黄灰色砂ブロックの含有に差がありブロック化している。

時代 埋土は調査区の北部周辺にのみ分布する2層を母材にした火山灰土で、竪穴住居の時期に近い土壌が埋土として堆積した可能性がある。埋土の特徴から古墳時代以降から中世以前の可能性があるが、年代は不明である。

16号土坑(第152図、PL.34-7)

位置 南東部南壁際。

座標 X=24651 ~ 24652 Y=-70247

重複 66号竪穴住居を掘り込む。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は半月形である。長径は0.73m、短径0.59m、深さ0.28mである。

埋土 暗灰色シルト質～砂質土からなる。

時代 竪穴住居よりも新しいが年代は不明である。

17号土坑(第152図、PL.38-4)

位置 北部北西壁際。

座標 X=24721 ~ 24722 Y=-70310 ~ -70311

重複 1号溝に切られる。

形状や規模 北西方向に長い隅の丸い方形を呈し、北西側は調査区外にある。断面形状は箱形である。検出された最大の長径は1.64m+、短径0.48m+、深さ0.30mである。

埋土 南西壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた黒～暗灰色礫まじり火山灰土からなり、1号溝によって北西部の一部が失われている。

時代 埋土は調査区の北部周辺にのみ分布する2層を母材にした火山灰土で、竪穴住居の時期に近い土壌が埋土として堆積した可能性がある。埋土の特徴から古墳時代以降から中世以前の可能性があり、1号溝より遺構が古いことはこれと矛盾しない。

21号土坑(第153図、PL.46-6)

位置 中央部北東壁寄り。

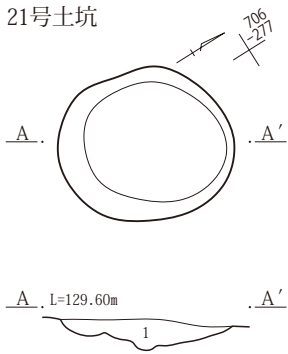
座標 X=24704 ~ 24705 Y=-70276 ~ -70277

重複 なし。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形である。長径は0.94m、短径0.82m、深さ0.17mで

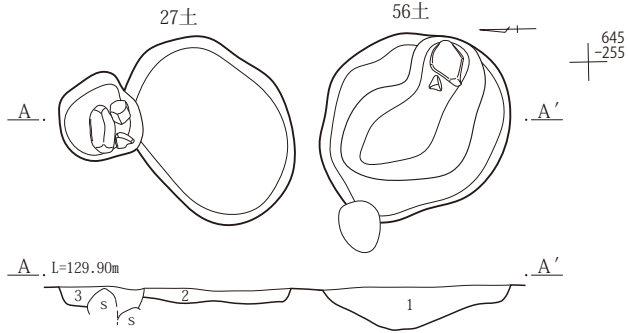
第3章 調査された遺構と遺物

21号土坑



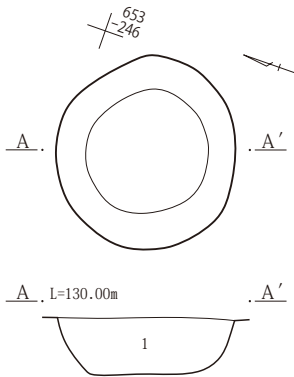
- 1 灰褐色焼土ブロックまじり細～中粒砂。径2～5mmの焼土粒を含む。

27・56号土坑



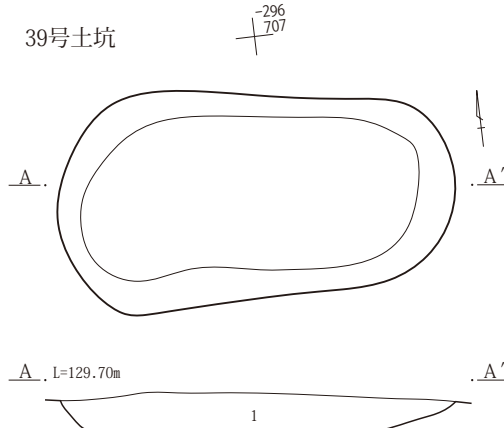
- 1 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土粒を含む。(56号土坑埋土)
 2 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂まじりのシルト質砂。(2～3は27号土坑埋土)
 3 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質ブロックを多量に含むシルト質砂。

36号土坑



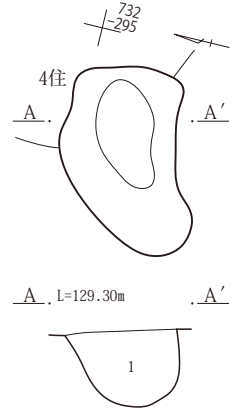
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや軽石粒を少量含む。

39号土坑



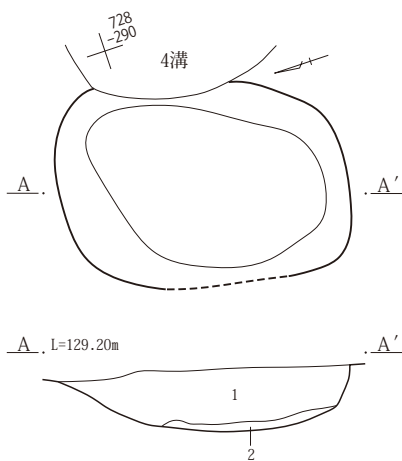
- 1 灰褐色As-Bまじり細粒火山灰土。粒径2mmの軽石が点在。径20mmの黄灰色シルトブロックを含む。

43号土坑



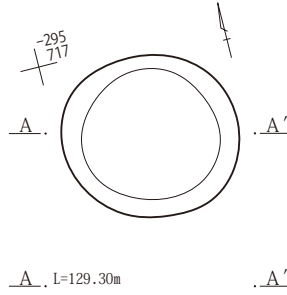
- 1 暗灰色中粒砂。径30mmの垂円礫を多く含み、塊状無層理を呈す。

45号土坑



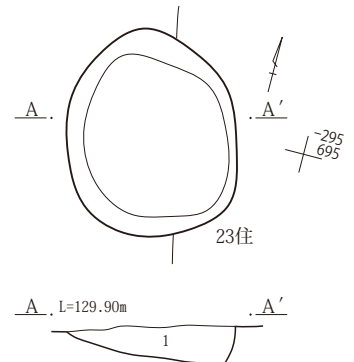
- 1 暗灰色焼土ブロックまじりシルト質中～細粒砂。粒径5～8mmの焼土粒や径10～20mmの垂円礫を含む。
 2 黄灰褐色礫まじり極粗～粗粒砂。

46号土坑



- 1 暗灰色礫まじり中粒砂。径2～10mmの垂円礫を含む。

47号土坑



- 1 灰色火山灰質中粒砂～シルト。径30mmの垂円礫まじり。下底は黄色シルト質砂が優勢。



第153図 21・27・36・39・43・45・46・47・56号土坑

ある。

埋土 灰褐色焼土ブロックまじりシルト質～砂質土で焼土粒は2～5mmである。周囲に比べて明瞭な輪郭で検出された遺構であり、カマドの残骸である可能性がないか調査したが、その痕跡を認めることはできなかった。

時代 年代は不明である。

27号土坑(第153図)

位置 南東部南西壁南隅。

座標 X=24646～24647 Y=-70254～-70255

重複 なし。

形状や規模 楕円形を呈し、断面形状は極めて浅い皿形である。長径は1.06m、短径0.78m、深さ0.08mである。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土で黄灰色シルト質砂まじりである。隣接する56号土坑とカマドの残骸である可能性がないか調査したが、その痕跡を認めることはできなかった。

時代 年代は不明である。

36号土坑(第153図)

位置 南東部南壁際。

座標 X=24652～24653 Y=-70246～-70247

重複 なし。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は半月形である。長径は1.04m、短径0.95m、深さ0.31mである。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土からなり、黄灰色シルト質砂ブロックや軽石粒を少量含み均質である。

時代 年代は不明である。

39号土坑(第153図、PL.46-7)

位置 中央部北西壁寄り。

座標 X=24705～24706 Y=-70295～-70297

重複 なし。

主軸方位 N85° W

形状や規模 東西方向に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は浅い皿形であるが、掘方はしっかりしており埋土の境界は明瞭である。長径は2.12m、短径1.16m、深さ0.20mである。

埋土 灰褐色浅間Bテフラまじりの細粒火山灰土からなり、粒径が2mmの軽石粒が点在する。

時代 浅間Bテフラを含む埋土の状況から12世紀以降は確実であり、中世の可能性があるが年代は不明である。

43号土坑(第153図、PL.46-8)

位置 北部南東寄り。

座標 X=24731～24732 Y=-70295～-70296

重複 4号竪穴住居に切られる。

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状はU字形である。長径は1.04m、短径0.66m、深さ0.37mである。

埋土 暗灰色砂まじり細粒火山灰土からなり均質である。

時代 4号竪穴住居の埋土とは識別が容易で黒みの強い埋土は竪穴住居の壁から検出された。竪穴住居よりも古いことは確実で、埋土は3層を母材にした土壤であると考えられる。埋土の状況から43号土坑の時代は古墳時代以前の可能性がある。

45号土坑(第153図、PL.47-1)

位置 北部部北東壁寄り。

座標 X=24727～24728 Y=-70290～-70291

重複 7号竪穴住居のカマドを切り、4号溝とは同時期か重複関係は不明である。

形状や規模 歪んだ隅の丸い長方形を呈し、断面形状は歪んだ半月形である。長径は1.55m、短径1.04m、深さ0.35mである。

埋土 暗灰色焼土ブロックまじりシルト質～砂質土からなる。竪穴住居のカマドと埋土の境界は不明瞭であるが、カマドの形状が不自然で、土坑の埋土にカマドに含まれる焼土が直径5～8mm大のブロックで含まれることから新旧関係を判断した。

時代 竪穴住居よりも新しいが年代は不明である。

46号土坑(第153図、PL.47-2)

位置 北部中央南寄り。

座標 X=24716 Y=-70294

重複 なし。

形状や規模 円形を呈し、断面形状は浅い皿形である。長径は0.95m、短径0.87m、深さ0.10mである。

埋土 暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 年代は不明である。

47号土坑(第153図、PL.47-3)

位置 北部南東寄り。

座標 X=24731～24732 Y=-70295～-70296

重複 23号竪穴住居を掘り込む。

形状や規模 楕円形を呈し、断面形状は歪んだ箱形である。長径は1.11m、短径0.90m、深さ0.20mである。

埋土 灰色火山灰質砂～シルトからなる。23号竪穴住居の埋土とは識別が容易で灰色の火山灰質な埋土は竪穴住居埋土を掘り込むことが確実である。

時代 埋土は2層を母材にした土壌であると考えられ、出土した遺物の状況からも47号土坑の時代は古墳時代6世紀以降である。

49号土坑(第154図)

位置 北部北西壁際。

座標 X=24765～24766 Y=-70305～-70306

重複 なし。

形状や規模 北西方向に長方形を呈する可能性があるが、西側は調査区外にある。断面形状は歪んだ箱形である。検出された最大の長径は1.53m+、短径0.64m+、深さ0.13mである。

埋土 北西壁際での断面観察では、1層と2層の層理面から掘り込まれた暗灰色礫まじり砂からなる。

時代 不明である。

50号土坑(第154図、PL.47-4)

位置 南東部中央。

座標 X=24664～24665 Y=-70258～-70259

重複 43号竪穴住居カマドを掘り込む。

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、北西部は43号竪穴住居埋土と一緒に掘ったため失われた。断面形状は極めて浅い皿形である。長径は0.88m+、短径0.80m、深さ0.08mである。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり43号竪穴住居の埋土とは識別できなかった。

時代 平安時代10世紀前半の竪穴住居よりも新しいので、中世の可能性はある。

52号土坑(第154図)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24673～24674 Y=-70256

重複 46号竪穴住居の壁際で検出された土坑で竪穴住居を切る可能性が高いが、重複関係は不明である。

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形と円筒形からなる。長径は0.77m+、短径0.44m、深さ0.21mである。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土からなり、46号竪穴住居の埋土との境界は不明瞭である。

時代 53号土坑と同様に竪穴住居を掘り込む可能性が高

く、古墳時代以降の可能性はある。

53号土坑(第154図、PL.47-5、237頁)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24674～24675 Y=-70256～-70257

重複 46号竪穴住居の壁際で検出された土坑でカマドを掘り込んでいる。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は上部が開いた円筒形からなる。長径は0.83m、短径0.65m+、深さ0.58mであり、形状から柱穴と思われる。

埋土 暗褐色砂質土からなり焼土ブロックを含む。埋土中の焼土は46号竪穴住居カマドから取り込まれたものと思われる。

遺物 埋土から常滑陶器の破片(1)が出土した。

時代 遺物から中世と考えられる。

54号土坑(第154図、PL.47-6)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24676～24677 Y=-70258

重複 46号竪穴住居の壁際で検出された土坑で竪穴住居を切る可能性が高いが重複関係は不明である。

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は半月形からなる。長径は0.89m、短径0.40m+、深さ0.58mであり、形状から2基の柱穴の可能性はある。

埋土 暗褐色シルト質土からなり、46号竪穴住居の埋土との境界は不明瞭である。

時代 53号土坑と同様に竪穴住居を掘り込む可能性が高く、古墳時代以降の可能性はある。

56号土坑(第153図)

位置 南東部南壁南隅。

座標 X=24645～24646 Y=-70254～-70255

重複 なし。

規模や形状 歪んだ円形を呈し、断面形状は皿形である。長径は1.05m、短径0.97m、深さ0.23mである。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土で黄灰色シルト質砂ブロック、焼土まじりである。隣接する27号土坑とカマドの残骸である可能性がないか調査したが、その痕跡を認めることはできなかった。

時代 年代は不明である。

57号土坑(第125図)

位置 南東部南西壁際。

座標 X=24646～24647 Y=-70258～-70259

重複 52号・65号竪穴住居を掘り込む。

規模や形状 歪んだ方形を呈し、北西は攪乱により失われている。断面形状は皿状である。残存する最大の長径は1.38m、短径1.17m、深さ0.27mである。

埋土 黒褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂ブロックを含む。

遺物 土器片が出土しているが、下位の52号竪穴住居の遺物が混入した可能性が高い。

時代 52号・65号竪穴住居を掘り込むため古墳時代以降である。

58号土坑(第154図)

位置 南東部南西壁南隅。

座標 X=24656 Y=-70246

重複 なし。

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形である。長径は0.80m、短径0.46m、深さ0.13mである。

埋土 暗褐色シルト質～砂質土で黄灰色シルト質砂ブロック、焼土ブロックまじりである。カマドの残骸である可能性がないか調査したが、その痕跡を認めることはできなかった。

時代 年代は不明である。

60号土坑(第154図、PL.47-7)

位置 南東部中央。

座標 X=24665～24666 Y=-70257～-70258

重複 63号竪穴住居を掘り込む。

形状や規模 歪んだ円形を呈し、断面形状は浅い皿形からなる。長径は0.82m、短径0.77m、深さ0.26mである。

埋土 焼土粒を含む黒褐色砂質土の上層と黄灰色シルト質砂ブロックを多く含む暗褐色砂質土の下層に成層する。埋土中の焼土は63号竪穴住居から取り込まれた可能性がある。

時代 63号竪穴住居を掘り込むため古墳時代6世紀後半以降である。

72号ピット(第154図、PL.47-8・69、237頁)

位置 南東部北東壁寄り。

座標 X=24670～24671 Y=-70253

重複 63号竪穴住居を掘り込む。

形状や規模 歪んだ楕円形を呈し、断面形状は半月形からなる。長径は0.59m、短径0.38m、深さ0.31mである。

埋土 暗灰色砂質土からなる。

遺物 埋土から中世の在地系土器の皿(1)が完形で出土している。柱穴として使用したピットに祭祀などの目的で埋納された遺物の可能性がある。

時代 遺物から中世と考えられ、15世紀後半と考えられる。

7. 遺構以外で出土した遺物

(第155・156図、PL.70、237・238・239頁)

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の表土～黒色土(1・2・3層)から出土した縄文土器は、総て破片からなり(1～25)、遺物の総点数は25点である。主な遺物は縄文時代前期諸磯b式の土器(1～5)、唐草文系(6)、中期の加曽利E4式(7～12)、後期の称名寺式(13～21)、晩期の土器(22～25)である。これらの縄文土器の出土は、遺跡周辺に分布する縄文時代の集落の時期と調和的である。

出土した弥生土器は、総て破片からなり(26～30)点数は5点である。主な遺物は弥生時代前期～中期前半の土器(29)、中期前半の土器(26・27・28・30)である。

遺構以外から出土した古墳時代から平安時代の土器は8点で、須恵器杯蓋(31)、杯(32)、椀(33)、高環(34)、短頸壺(35)、長頸壺(36)、羽釜(37)と土師器杯(38)である。

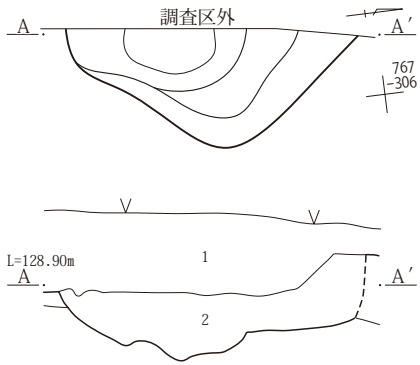
中世の土器や瓦(39～57)は、破片からなり点数は19点である。主な遺物は在地系土器の皿(39)や鉢(40・41)、片口鉢(43)、内耳鍋(44)内耳鍋の甕(45)、火鉢か片口鉢(46)である。遺物の年代は15世紀後半及び15世紀後半から16世紀前半である。遺構外から出土した年代不明の鉄製品(58)は1点である。

竪穴住居の埋土から出土した中世の土器は11点である。これらは在地系土器の内耳鍋やすり鉢であり、14世紀後半から16世紀前半の年代を示す。これらは発掘調査で竪穴住居の埋土と識別ができなかった中世の遺構埋土に含まれていた可能性が高い。

14世紀の遺物が出土した4号溝に近い12号竪穴住居では、在地系土器の内耳鍋の破片(47・48)が出土した。これは25号竪穴住居から出土した破片(55)と同一個体の可能性があり、年代は15世紀代の可能性がある。14号竪穴住居から出土した在地系土器の内耳鍋(49)の年代は15世紀後半から16世紀前半である。22号竪穴住居から出土した内耳鍋(50)は、14世紀後半から15世紀初頭の年代を示す。25号竪穴住居からは4点の在地系土器の内耳鍋の破

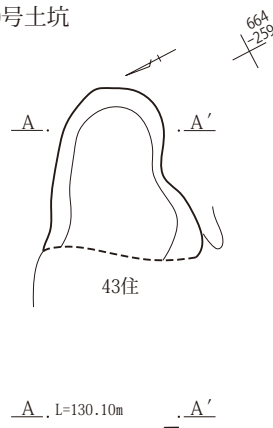
第3章 調査された遺構と遺物

49号土坑

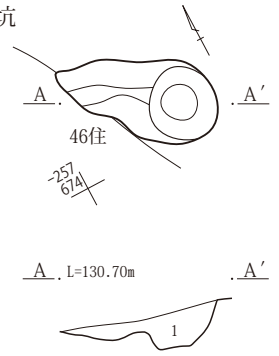


- 1 耕作土(表土)
- 2 暗灰色礫まじり細～中粒砂。径10～30mmの結晶片岩の礫を含む。

50号土坑

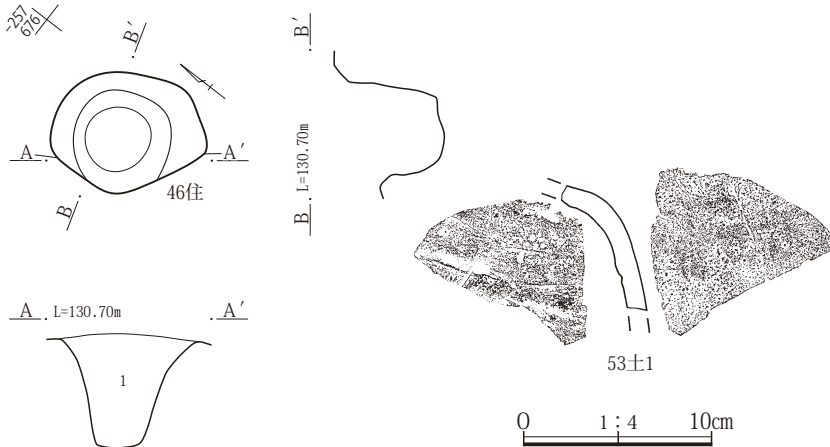


52号土坑



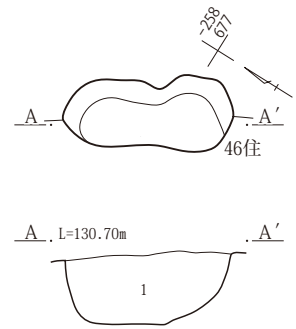
- 1 暗灰色火山灰質細～中粒砂。As-Bを含まない。

53号土坑



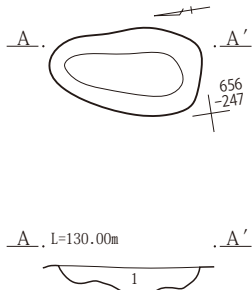
- 1 暗褐色細～中粒砂。焼土ブロック含み、As-Bを含まない。

54号土坑



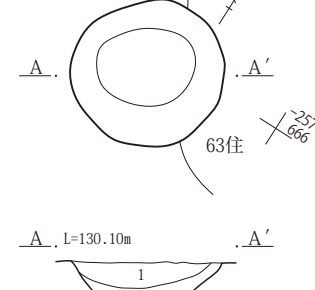
- 1 暗灰色砂質シルト。中粒砂優勢。

58号土坑



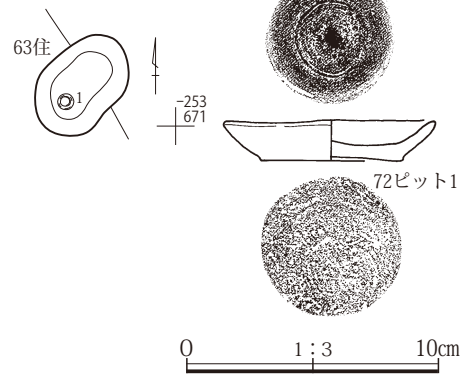
- 1 暗褐色シルト質～砂質土。黄灰色シルト質砂のブロックや焼土粒を含む。

60号土坑



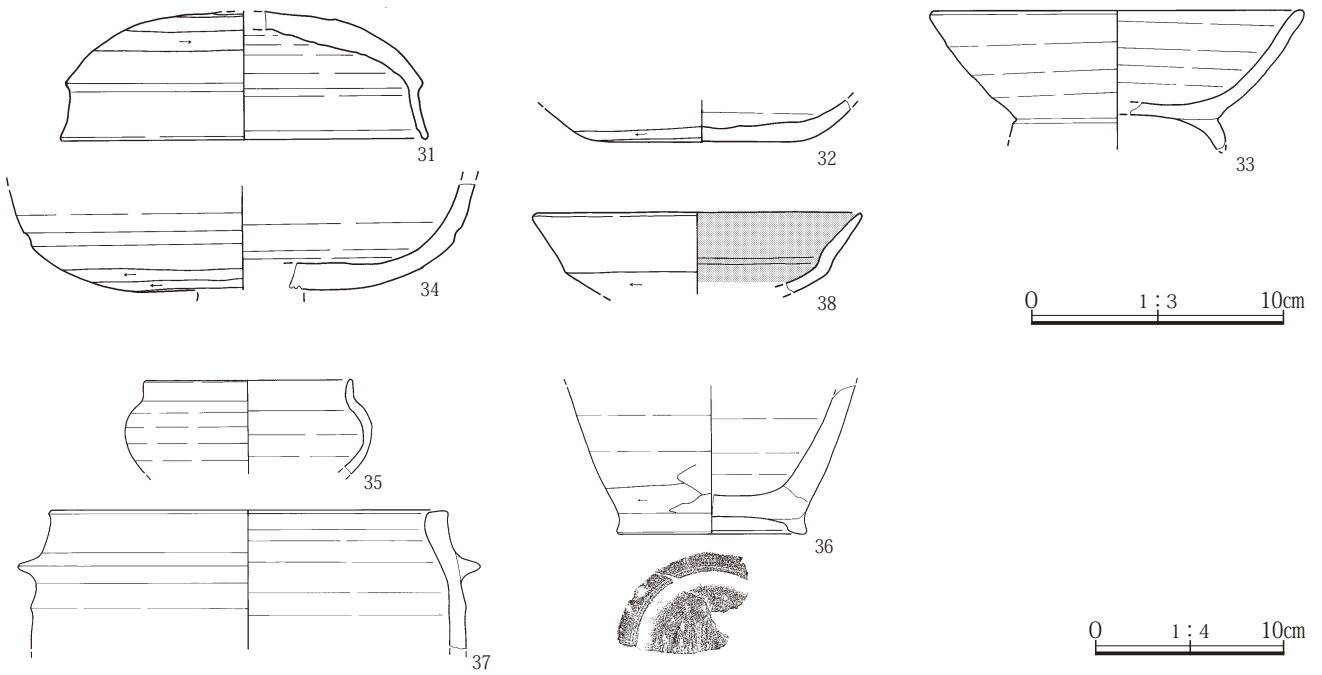
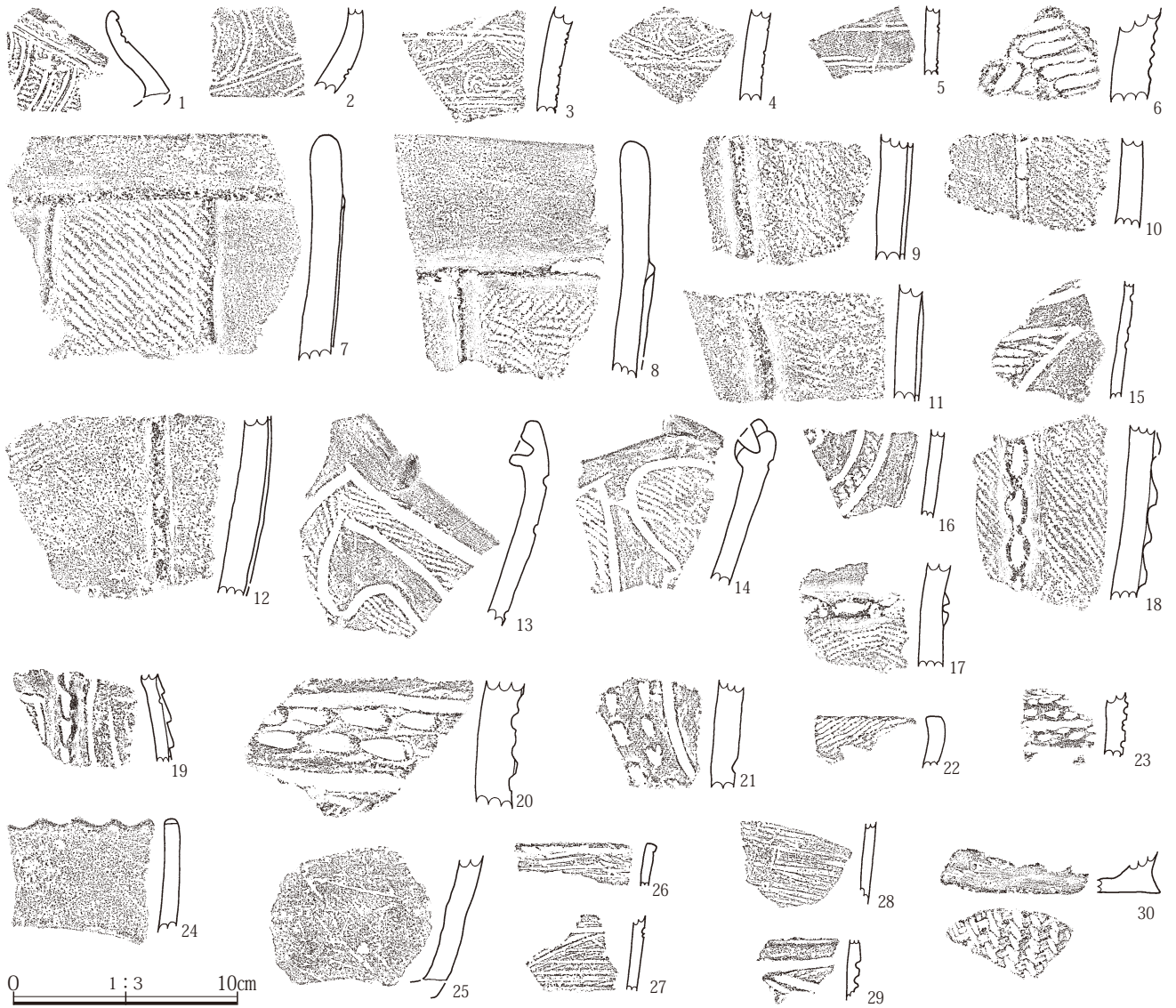
- 1 黒褐色土。焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土。黄色土の粒を多量に含む。

72号ピット

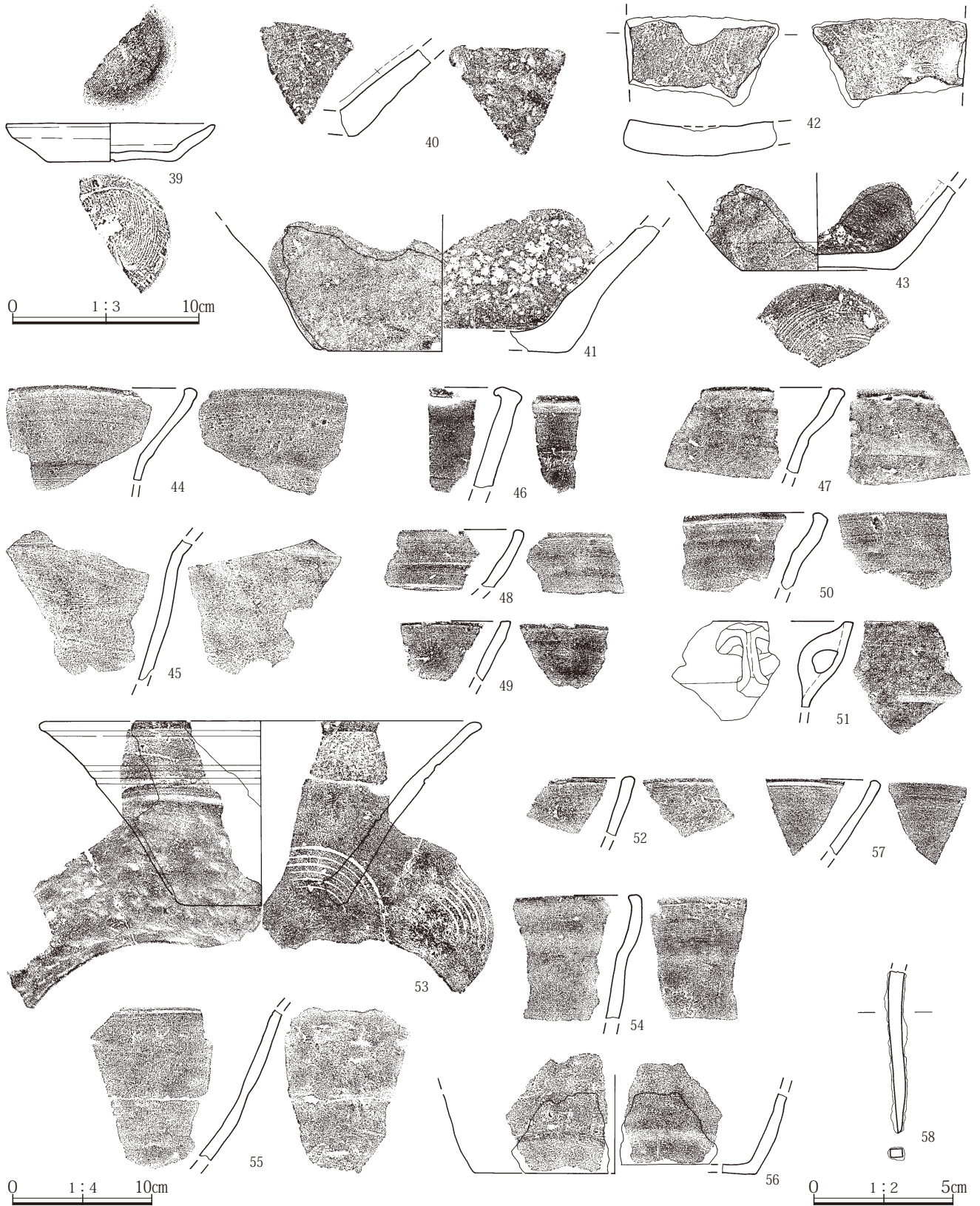


第154図 49・50・52・53・54・58・60号土坑、72号ピットと53号土坑と72号ピットの出土遺物

7. 遺構以外で出土した遺物



第155図 遺構外から出土した遺物(1)



第156図 遺構外から出土した遺物(2)

片(51・52・54・55)とすり鉢の破片(53)が出土しており15世紀から16世紀の年代を示す。2号・3号掘立柱建物に近い31号竪穴住居からは在地系土器の内耳鍋の破片(56・57)が出土し、15世紀後半の年代を示すものを含む。

なお、報告書の本文や図に記載しなかった出土遺物は、遺構別に第8・9表に示した。

7. 遺構以外で出土した遺物

第8表 図や写真を掲載しなかった遺物の数量(1)

単位 Kg 単位 m²

遺構	須恵器		土師器		その他	その他(内訳)	須恵器小計	土師器小計	土器小計	床面積
	大型	小型	大型	小型						
1号 竪穴住居	0.000	0.000	0.930	0.040	0.000		0.000	0.970	0.970	9.090
2号 竪穴住居	0.000	0.016	0.935	0.200	0.000		0.016	1.135	1.151	21.070
3号 竪穴住居	0.000	0.045	0.420	0.070	0.000		0.045	0.490	0.535	9.010
4号 竪穴住居	0.850	1.000	0.708	0.680	1.075	瓦	1.850	1.388	4.313	21.620
5号 竪穴住居	0.280	0.172	1.580	0.120	0.000		0.452	1.700	2.152	13.000
6号 竪穴住居	0.190	0.045	1.950	0.180	0.000		0.235	2.130	2.365	16.340
7号 竪穴住居	0.320	0.220	4.360	0.730	0.000		0.540	5.090	5.630	16.100
8号 竪穴住居	0.045	0.000	4.120	0.006	0.000		0.045	4.126	4.171	19.210
8・9号 竪穴住居	0.000	0.000	0.215	0.068	0.000		0.000	0.283	0.283	1.000
9号 竪穴住居	0.001	0.000	2.070	0.255	0.000		0.001	2.325	2.326	12.830
11号 竪穴住居	0.140	0.040	5.310	0.290	0.000		0.180	5.600	5.780	19.330
12号 竪穴住居	0.000	0.004	1.320	0.100	0.000		0.004	1.420	1.424	24.330
13号 竪穴住居	0.018	0.012	0.820	0.155	0.000		0.030	0.975	1.005	4.890
14号 竪穴住居	0.000	0.000	0.080	0.000	0.000		0.000	0.080	0.080	0.700
15号 竪穴住居	0.015	0.001	5.110	0.250	0.000		0.016	5.360	5.376	36.330
16号 竪穴住居	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	1.550
17号 竪穴住居	0.000	0.000	0.410	0.050	0.000		0.000	0.460	0.460	2.800
18号 竪穴住居	0.000	0.000	0.320	0.040	0.000		0.000	0.360	0.360	6.380
19号 竪穴住居	0.000	0.000	0.138	0.000	0.000		0.000	0.138	0.138	3.310
20号 竪穴住居	0.006	0.002	5.060	0.240	0.000		0.008	5.300	5.308	24.580
21号 竪穴住居	0.200	0.400	0.000	0.009	0.000		0.600	0.009	0.609	8.080
22号 竪穴住居	0.000	0.110	19.120	1.370	0.000		0.110	20.490	20.600	33.720
23号 竪穴住居	0.160	0.130	13.805	1.080	0.000		0.290	14.885	15.175	62.980
24号 竪穴住居	0.000	0.050	2.950	0.160	0.000		0.050	3.110	3.160	22.380
25号 竪穴住居	0.000	0.065	3.850	0.320	0.000		0.065	4.170	4.235	18.560
26号 竪穴住居	0.000	0.085	2.870	0.155	0.000		0.085	3.025	3.110	5.200
27号 竪穴住居	0.160	0.095	4.500	0.520	0.000		0.255	5.020	5.275	58.520
28号 竪穴住居	0.000	0.065	2.650	0.290	0.000		0.065	2.940	3.005	24.350
29号 竪穴住居	0.000	0.000	0.045	0.000	0.000		0.000	0.045	0.045	1.440
30号 竪穴住居	0.000	0.000	1.650	0.105	0.000		0.000	1.755	1.755	2.760
31号 竪穴住居	0.000	0.000	1.200	0.160	0.000		0.000	1.360	1.360	18.120
32号 竪穴住居	0.000	0.000	0.300	0.035	0.000		0.000	0.335	0.335	6.220
33号 竪穴住居	0.035	0.000	0.980	0.015	0.000		0.035	0.995	1.030	11.140
34号 竪穴住居	0.570	0.035	10.610	2.780	0.000		0.605	13.390	13.995	40.970
35号 竪穴住居	0.115	0.035	1.000	0.280	0.000		0.150	1.280	1.430	8.310
36号 竪穴住居	0.000	0.000	0.080	0.015	0.000		0.000	0.095	0.095	4.350
37号 竪穴住居	0.000	0.000	0.811	0.198	0.000		0.000	1.009	1.009	16.970
38号 竪穴住居	0.250	0.118	6.440	1.200	0.110	陶器0.1 不明0.01	0.368	7.640	8.118	15.160
39号 竪穴住居	0.000	0.000	2.320	0.360	0.000		0.000	2.680	2.680	14.180
40号 竪穴住居	0.000	0.002	0.650	0.150	0.000		0.002	0.800	0.802	26.790
41号 竪穴住居	0.005	0.005	5.120	0.580	0.000		0.010	5.700	5.710	33.910
42号 竪穴住居	0.045	0.000	0.530	0.185	0.000		0.045	0.715	0.760	8.660
43号 竪穴住居	1.110	0.095	3.445	0.280	0.020	埴輪	1.205	3.725	4.950	10.470
44号 竪穴住居	0.230	0.520	6.630	0.275	0.000		0.750	6.905	7.655	19.010
45号 竪穴住居	0.280	0.120	3.470	0.480	0.000		0.400	3.950	4.350	22.560
46号 竪穴住居	0.320	0.020	1.400	0.650	0.000		0.340	2.050	2.390	29.690
47号 竪穴住居	0.000	0.005	4.390	0.150	0.000		0.005	4.540	4.545	14.110
48号 竪穴住居	0.430	0.000	8.950	0.780	0.040	不明	0.430	9.730	10.200	23.110
49号 窰み	0.000	0.000	0.180	0.000	0.000		0.000	0.180	0.180	1.000
50号 竪穴住居	0.105	0.003	6.390	1.300	0.065	瓦0.03 不明0.035	0.108	7.690	7.863	33.950
51号 竪穴住居	0.340	0.070	0.080	0.030	0.000		0.410	0.110	0.520	9.220
52号 竪穴住居	0.000	0.000	1.610	0.050	0.000		0.000	1.660	1.660	5.240
53号 窰み	0.055	0.001	0.190	0.020	0.000		0.056	0.210	0.266	1.000
54号 竪穴住居	0.000	0.030	0.570	0.015	0.000		0.030	0.585	0.615	4.520
55号 竪穴住居	0.002	0.040	4.330	0.430	0.000		0.042	4.760	4.802	9.530
56号 竪穴住居	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	0.210
57号 竪穴住居	0.050	0.075	1.100	0.190	0.000		0.125	1.290	1.415	6.210
59号 竪穴住居	0.060	0.020	3.180	0.170	0.000		0.080	3.350	3.430	18.200
60号 竪穴住居	0.000	0.010	0.630	0.090	0.000		0.010	0.720	0.730	6.800
61号 竪穴住居	0.062	0.018	1.980	0.410	0.015	軟質土器	0.080	2.390	2.485	20.290
62号 竪穴住居	0.000	0.015	0.820	0.070	0.000		0.015	0.890	0.905	10.820
63号 竪穴住居	0.000	0.040	2.220	0.420	0.000		0.040	2.640	2.680	25.310
64号 竪穴住居	0.060	0.020	3.630	0.540	0.018	軟質土器0.01 縄文土器0.008	0.080	4.170	4.268	13.490
65号 竪穴住居	0.000	0.000	1.565	0.220	0.000		0.000	1.785	1.785	12.640
66号 竪穴住居	0.240	0.160	3.530	0.290	0.000		0.400	3.820	4.220	15.330
67号 竪穴住居	0.170	0.230	2.900	0.540	0.000		0.400	3.440	3.840	10.640
68号 竪穴住居	0.000	0.000	0.435	0.210	0.000		0.000	0.645	0.645	4.110
69号 竪穴住居	0.000	0.000	0.020	0.000	0.000		0.000	0.020	0.020	1.980
70号 竪穴住居	0.000	0.055	0.500	0.052	0.000		0.055	0.552	0.607	4.110
71号 竪穴住居	0.000	0.000	0.560	0.130	0.000		0.000	0.690	0.690	8.080
1号 溝	1.600	0.090	0.270	0.140	0.000		1.690	0.410	2.100	
2号 溝	0.370	0.080	0.400	0.018	0.000		0.450	0.418	0.868	
3号 溝	0.130	0.100	0.835	0.130	0.000		0.230	0.965	1.195	

第3章 調査された遺構と遺物

第9表 図や写真を掲載しなかった遺物の数量(2)

単位 Kg 単位 m²

遺構	須恵器		土師器		その他	その他(内訳)	須恵器小計	土師器小計	土器小計	床面積
	大型	小型	大型	小型						
4号 溝	0.000	0.038	0.170	0.025	0.000		0.038	0.195	0.233	
5号 溝	0.105	0.030	0.850	0.110	0.000		0.135	0.960	1.095	
6号 溝	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
7号 溝	0.000	0.002	0.150	0.015	0.000		0.002	0.165	0.167	
8号 溝	0.025	0.080	0.300	0.040	0.000		0.105	0.340	0.445	
9号 溝	0.085	0.000	0.580	0.025	0.000		0.085	0.605	0.690	
10号 溝	0.000	0.000	0.040	0.000	0.000		0.000	0.040	0.040	
11号 溝	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
12号 溝	0.000	0.000	0.100	0.000	0.000		0.000	0.100	0.100	
1号 井戸	0.150	0.005	0.220	0.060	0.000		0.155	0.280	0.435	
2号 井戸	0.180	0.022	0.470	0.120	0.000		0.202	0.590	0.792	
3号 井戸	0.000	0.002	0.100	0.000	0.000		0.002	0.100	0.102	
4号 井戸	0.185	0.170	0.670	0.090	0.000		0.355	0.760	1.115	
5号 井戸	0.078	0.020	0.110	0.012	0.000		0.098	0.122	0.220	
6号 井戸	0.000	0.070	0.105	0.005	0.000		0.070	0.110	0.180	
1号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
2号 土坑	0.000	0.000	0.012	0.000	0.000		0.000	0.012	0.012	
3号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
4号 土坑	0.050	0.000	0.025	0.005	0.000		0.050	0.030	0.080	
5号 土坑	0.000	0.045	0.025	0.000	0.000		0.045	0.025	0.070	
6号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
7号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
8号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
9号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
10号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
11号 土坑	0.070	0.000	0.155	0.015	0.000		0.070	0.170	0.240	
12号 土坑	0.000	0.000	0.001	0.000	0.000		0.000	0.001	0.001	
13号 土坑	0.250	0.000	0.480	0.000	0.000		0.250	0.480	0.730	
14号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
16号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
17号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
21号 土坑	0.000	0.000	0.028	0.000	0.000		0.000	0.028	0.028	
27号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
36号 土坑	0.000	0.000	0.012	0.001	0.000		0.000	0.013	0.013	
39号 土坑	0.015	0.001	0.035	0.012	0.000		0.016	0.047	0.063	
43号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
45号 土坑	0.000	0.080	0.038	0.005	0.000		0.080	0.043	0.123	
46号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
47号 土坑	0.115	0.000	0.530	0.022	0.000		0.115	0.552	0.667	
49号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
50号 土坑	0.000	0.010	0.014	0.005	0.000		0.010	0.019	0.029	
52号 土坑	0.000	0.000	0.015	0.000	0.000		0.000	0.015	0.015	
53号 土坑	0.000	0.000	0.035	0.000	0.000		0.000	0.035	0.035	
54号 土坑	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		0.000	0.000	0.000	
56号 土坑	0.000	0.000	0.015	0.010	0.000		0.000	0.025	0.025	
58号 土坑	0.000	0.000	0.020	0.010	0.000		0.000	0.030	0.030	
60号 土坑	0.060	0.035	0.000	0.040	0.000		0.095	0.040	0.135	
41号 ピット	0.000	0.000	0.010	0.000	0.000		0.000	0.010	0.010	
59号 ピット	0.000	0.000	0.015	0.000	0.000		0.000	0.015	0.015	
71号 ピット	0.000	0.000	0.025	0.003	0.000		0.000	0.028	0.028	
99号 ピット	0.000	0.000	0.000	0.002	0.000		0.000	0.002	0.002	
119号 ピット	0.000	0.000	0.006	0.005	0.000		0.000	0.011	0.011	
123号 ピット	0.000	0.000	0.050	0.001	0.000		0.000	0.051	0.051	
133号 ピット	0.000	0.000	0.055	0.030	0.000		0.000	0.085	0.085	
134号 ピット	0.000	0.000	0.000	0.005	0.000		0.000	0.005	0.005	
135号 ピット	0.000	0.000	0.040	0.010	0.000		0.000	0.050	0.050	
139号 ピット	0.000	0.000	0.162	0.000	0.000		0.000	0.162	0.162	
147号 ピット	0.000	0.000	0.015	0.000	0.000		0.000	0.015	0.015	
154号 ピット	0.000	0.000	0.001	0.010	0.000		0.000	0.011	0.011	
187号 ピット	0.000	0.000	0.010	0.000	0.000		0.000	0.010	0.010	
地表面一括		0.006	0.080	0.020	0.000		0.006	0.100	0.106	
調査面一括	3.365	1.265	24.738	3.735	0.000		4.630	28.473	33.103	
合計	13.752	6.449	214.059	25.968	1.343		20.202	240.027	261.571	

遺構別 内訳

竪穴住居	6.919	4.299	182.042	21.233	1.343		11.218	203.275	215.836	1047.870
溝	2.315	0.420	3.695	0.503	0.000		2.735	4.198	6.933	
井戸	0.593	0.289	1.675	0.287	0.000		0.882	1.962	2.844	
土坑	0.560	0.171	1.440	0.125	0.000		0.731	1.565	2.295	
ピット	0.000	0.000	0.389	0.066	0.000		0.000	0.455	0.455	
面一括	3.365	1.271	24.818	3.755	0.000		4.636	28.573	33.209	

第4章 調査成果のまとめ

1. 矢場扇状地の形成と遺跡

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡が位置する矢場扇状地は、関東山地から関東平野に流れていた古三名川が関東山地北西縁丘陵を越えて形成した扇状地であると考えられ、主な形成期は大山倉吉テフラ(DKP)に覆われる三名川沿いのL1a面よりも古いため70.0千年前頃の酸素同位体ステージ4に相当する時期であると考えられる。現在まで扇状地の地表面にこの時期の堆積物は未検出であるため、現在の扇状地はこの時期の堆積物の上位を埋積した後期更新世から完新世の扇状地堆積物に覆われているものと思われる。

今回の発掘調査で矢場三ツ橋Ⅱ遺跡で扇状地堆積物の表層を構成する矢場層を検出面に縄文時代から弥生時代の遺構の検出及び層序の調査と旧石器時代の文化層の有無を調べる深掘りを実施した。

矢場扇状地の扇中央部の微高地に位置する当遺跡では、縄文時代から弥生時代の遺構は検出されなかった。扇状地を構成する矢場層最上部の礫層を覆う黒色土の3～2層からは、縄文土器前期の諸磯B式から中期の加曾利E4式、後期の称名寺式、晩期及び弥生時代前期～中期前半の土器片がごく少量出土した。これらの土器は摩耗しているが破断面はしっかりしており、周辺の扇状地上の微高地から堆積物によって運ばれた遺物であると思われる。

このことから発掘地の周辺の微高地には縄文時代から弥生時代中期前半の遺跡がある程度にわたって存在しているものと推定される。

また、地表下約2mから検出された矢場層の灰褐～暗灰色軽石まじり砂層には、直径2～5mmの複輝石安山岩質軽石が含まれており、岩相や層位から浅間Dテフラに対比される可能性がある。このことから矢場層上部は縄文時代中期以降に形成された可能性が高い。

藤岡台地は近隣の丘陵地や鍋川沿いの河岸段丘に比べて縄文時代の遺跡の密度が低く、台地南部では縄文時代前期前半(6.5千年前)に集落遺跡が出現する。三名川沿いの丘陵には縄文時代早期の沈線文～条痕文系土器(10.5千年前～)が出土しており、この時期から縄文人の

生活の跡が認められる。

矢場三ツ橋遺跡で出土した土器は、縄文時代前期から弥生時代中期前半にいたる時代にわたり、土器片の制作された時期である縄文時代前期後半や中期後半は、藤岡台地近隣の地域、赤城山麓などでも集落遺跡の数が増加する時期に相当する。これらの時期は、縄文時代の集落遺跡が増加する要因となった安定した気候環境の継続とそれによる扇状地形成の安定期と考えられている。

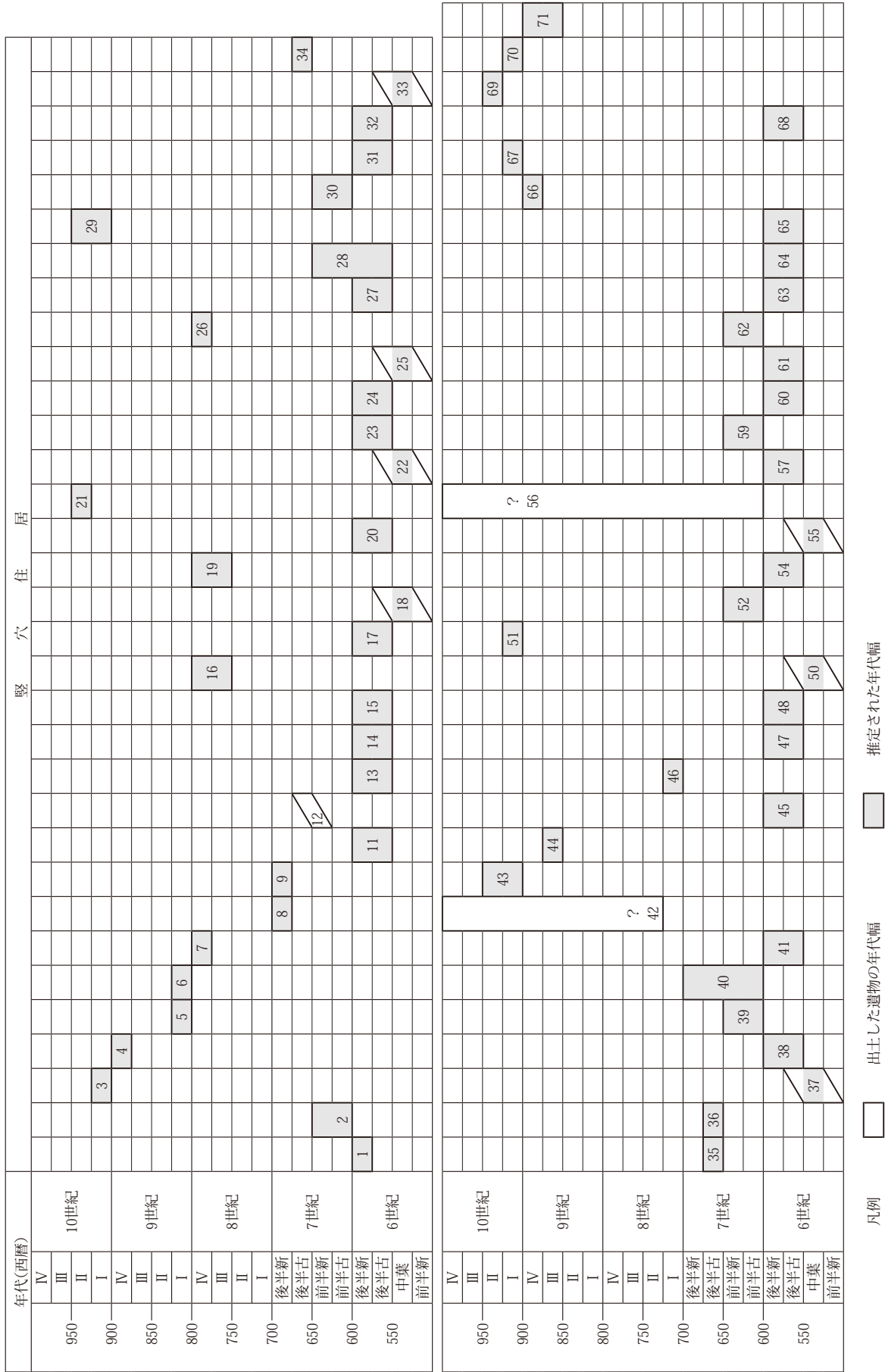
なお、矢場扇状地において縄文時代の遺跡が周辺の藤岡台地と共通して少ない理由は、当時の集落の後背地を形成する周辺の植生環境、特に食糧資源を獲得するための立地条件が他の丘陵地に比べて劣勢だったのだろう。当時の藤岡台地は面的な離水をなさない微高地と後背湿地に砂礫層などからなる扇状地堆積物や後背湿地の粘土やシルト層などの堆積作用が卓越し、乾陸環境下の火山灰土の生成の場である森林や草原が広がらない、疎林と湿地を伴う氾濫原が広がる環境だった可能性が高い。そのため集落の人口を維持するために必要な落葉広葉樹林などの有用植物を採集できる後背地が不安定な場所だったのではないだろうか。

また藤岡台地南部の周辺から旧石器時代の遺跡が発見されていないのは、完新世に形成された扇状地堆積物に上部更新統が埋積されているためであろう。

矢場扇状地の地下には完新統の砂礫層に埋積された堆積物中に浅間板鼻黄色テフラや始良Tnテフラなどの上部更新統の鍵テフラが検出されている。これらの層位は礫層に挟在する粘土質堆積物が広く分布しており、この堆積物は上部ローム層～黒色土層の同時異相と考えられる半水成の陸成堆積物である。扇状地に残された当時の微高地には、これらの堆積物から遺跡が発見される可能性も高く、完新統を抜いた層位までの試掘調査が必要である。

2. 古墳時代から平安時代の集落

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した古墳時代後期から平安時代の遺構は、竪穴住居が67棟である。竪穴住居の時代ごとの内訳は、6世紀が33棟、7世紀が13棟(古



第157図 竪穴住居の年代

墳時代～飛鳥時代は46棟)、8世紀が5棟(可能性があるものを含め6棟)、9世紀が6棟、10世紀は9棟である(第157図)。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡が位置する矢場扇状地の微高地には、古墳時代後期から平安時代の集落遺跡が広い範囲に分布し、丘陵縁の台地上には矢場前原遺跡のように大規模な発掘調査によって古代集落の一部が明らかになった調査例もみられる。道路建設に伴う発掘調査は、一定の幅をもって地域を線状に把握ができるといった特性があり、今後は藤岡市教育委員会が周辺地域で継続した圃場整備事業に伴う発掘調査の資料と合わせることで面的な地域集落史の把握を行うことが可能である。

今後はこうした観点から拠点となる集落遺跡と周辺遺跡の集落動向を捉えた集落遺跡の変遷史を検討することを今後の課題として発掘地内の年代別の竪穴住居の変遷を明らかにする。このような資料の蓄積は、今後この地域の本格的な農耕集落の成立を考える基礎的な資料になるものと考えられる。

今回の矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘では、6世紀中葉から10世紀前半にかけて調査地内で67棟の竪穴住居(以下、竪穴住居の名称を○住と略す)が検出された。出土した遺物と遺構の重複関係を検討し、西暦の四半期ごとの竪穴住居の帰属年代を推定した。また、竪穴住居から出土した遺物の推定年代とから竪穴住居同士の重複関係を示した(第158図)。これらの資料を基にして各時期の年代ごとの竪穴住居の変遷を平面図に示す(第159・160図)。

古墳時代後期にあたる6世紀中葉から後半は、矢場三ツ橋遺Ⅱ遺跡に集落が成立し、発展する時期であると考えられる。この時期の竪穴住居は33棟で重複して竪穴住居が構築されている。

6世紀中葉の竪穴住居の出現期には、調査地の北側で中規模の竪穴住居が一定の間隔で分布している。調査地の南側に1棟確認された68住は、残存状況が悪く時代や規模の想定が困難である。

6世紀後半は竪穴住居が急激に増加する。この時期に形成された竪穴住居の棟数は、今回の発掘調査で検出した住居棟数の4割に相当し、竪穴住居の棟数や規模の上からも他の時代を凌駕している。

6世紀後半代の竪穴住居は調査地全体に分布しているが、前後の2時期にわたって大規模な竪穴住居が構築さ

れている。大規模の竪穴住居やそれに類する規模の竪穴住居は調査地全体に分布し、それらは後半古段階の11住、23住及び後半新段階の15住、27住、48住である。これらの竪穴住居の住人はその規模から考えて、この集落における農耕開発の指導的な立場にある家系なのであろう。調査地の中央には大小の竪穴住居が2時期にわたって組み合わせで移動するようにみえる。これらは23住と小規模の竪穴住居の25住及び27住と小規模の竪穴住居の20住である。これらの竪穴住居は大規模な住居には北側カマドの構築や貯蔵穴、柱間の中間の柱穴等に近似した遺構の特徴を共有する。また、対になるように見える小規模の竪穴住居は、柱穴を持たない竪穴住居である。

調査地南側にみられる63住及び45住、50住、61住は南西カマドを構築する竪穴住居であるといった共通性がみられる。

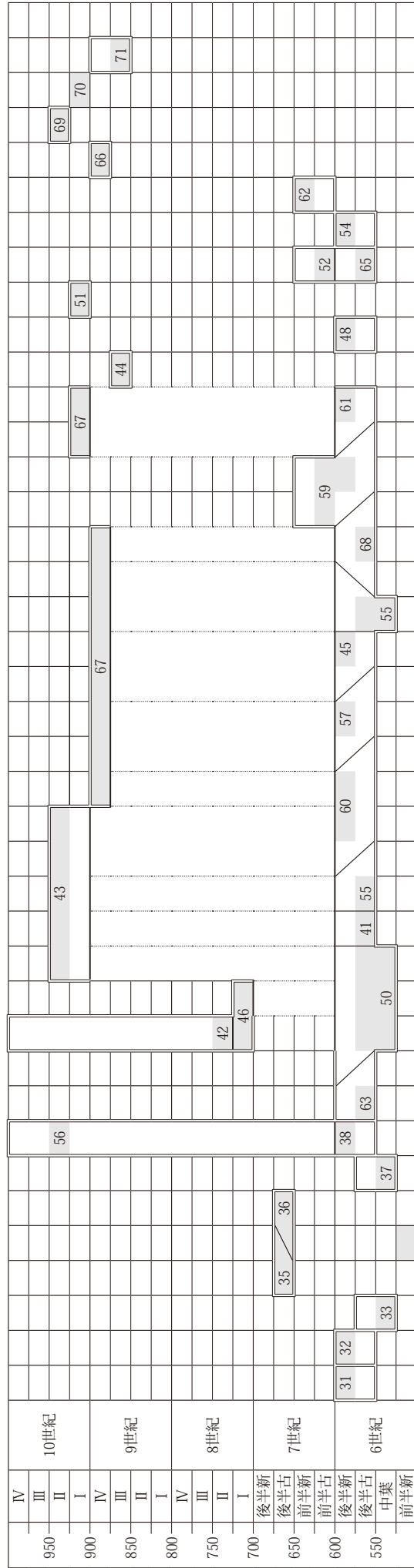
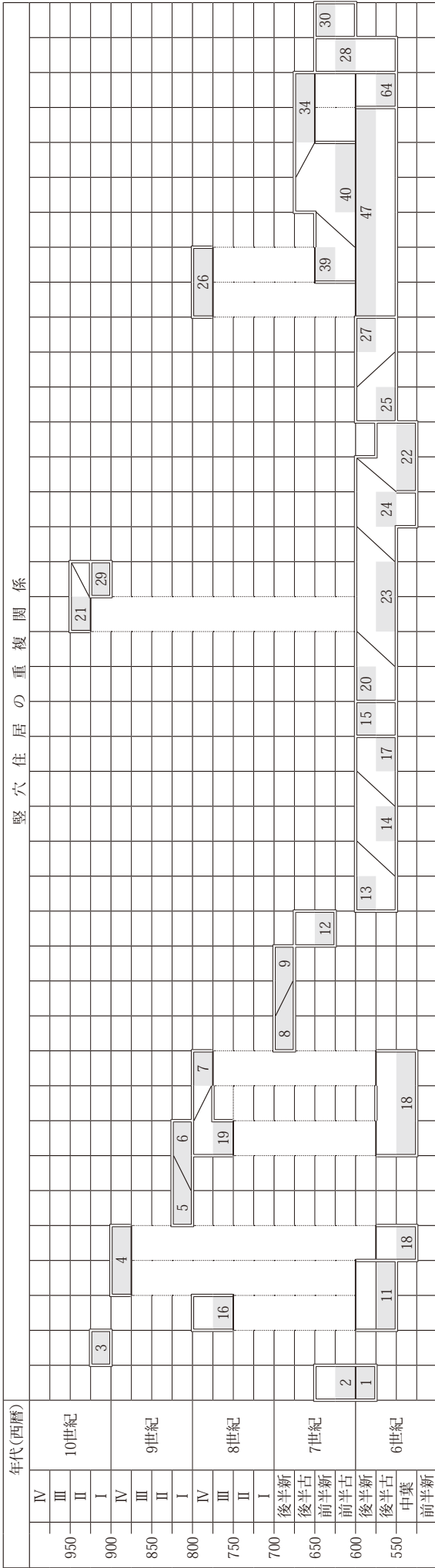
当遺跡における6世紀代の竪穴住居に関して、カマドの構築方向に限って区分すれば、北側カマドを持つ大規模の竪穴住居群、一般的な東側カマドの竪穴住居群及び南西カマドの竪穴住居群の3グループに分けられる。こうしたカマド構築方向による竪穴住居の差は、何が要因であろうか。この地域の時期差によるカマド構築技法の流行なのか、集落内での出自が異なる集団の棲み分けであるか、単に竪穴住居の大きさによる差なのか、興味深い事象として認識される。

飛鳥時代の7世紀の竪穴住居群は13棟で、6世紀に次いで多い。この時期の竪穴住居は6世紀の竪穴住居の分布とは明らかに異なり、数軒の竪穴住居が一定の距離を保ちながら並んで配置しているようにみえる。7世紀の前半代は調査地の北側から中央、後半代は中央から南側に竪穴住居が分布し、四半期ごとでは3棟程度の竪穴住居の棟数である。

当遺跡における7世紀代の竪穴住居に関して、カマドの構築方向に限って区分すれば、北側カマドを持つ前半古段階の竪穴住居(40住)、東側カマドの前半新段階の竪穴住居(12住、30住、39住)、西カマドの後半古段階の竪穴住居(34住)及び東カマドと南カマドの後半新段階の竪穴住居群に分けられる。

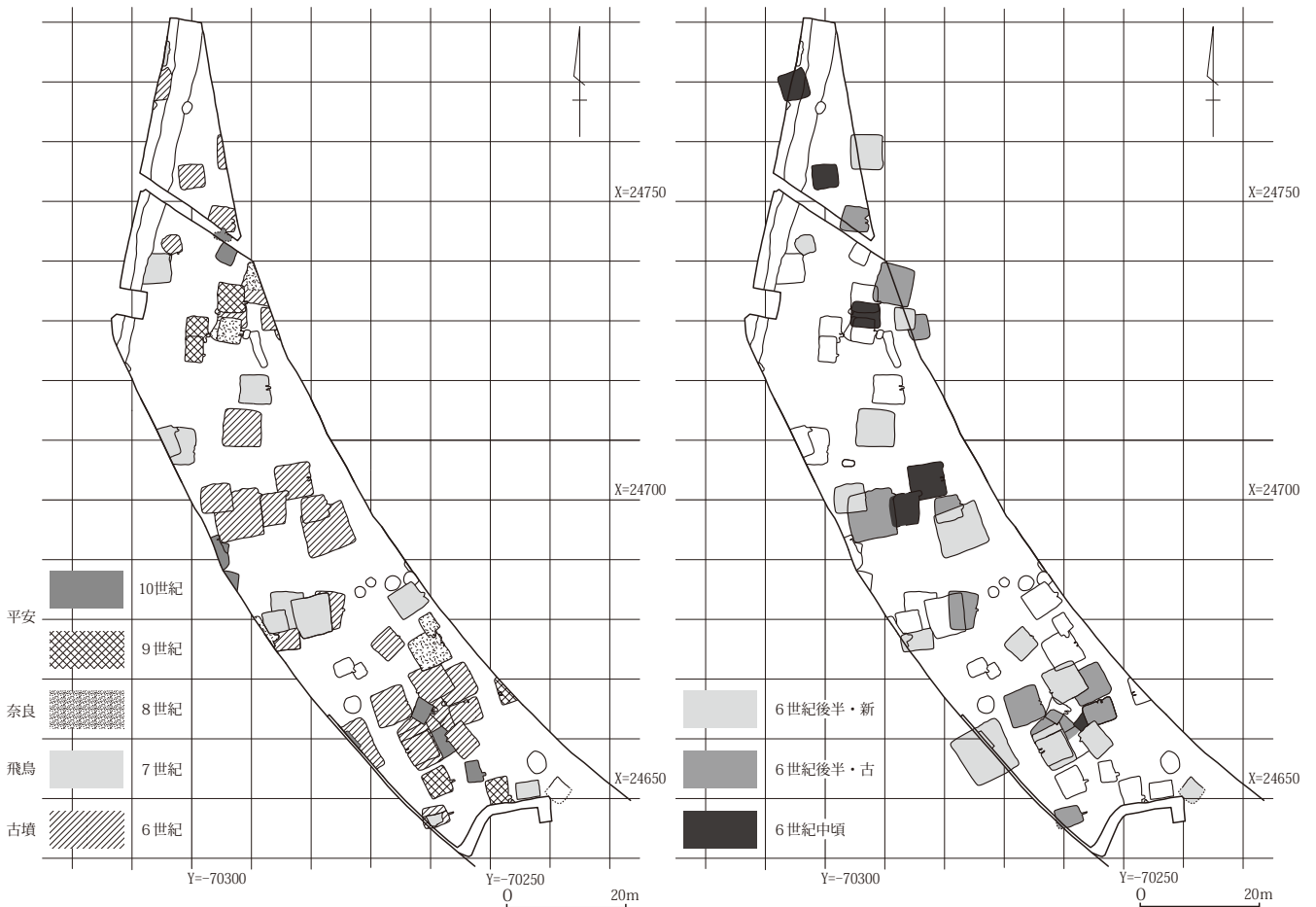
こうしたカマド構築方向による竪穴住居の差は、7世紀代では明らかに時期差によるカマド構築技法の傾向とみることが可能であるが、一方で調査地内での分布は北

竪穴住居の重複関係



- 凡例
-  出土した遺物の年代幅
 -  推定された年代幅
 -  重複の関係(上位が新、下位が旧)
 -  重複の関係(上位が新、下位が旧)

第158図 竪穴住居の重複関係



第159図 竪穴住居の年代別分布と6世紀の分布

側から中央の北カマドの竪穴住居、南よりの場所に位置する西カマドの竪穴住居がみられることから6世紀から踏襲された集落内での棲み分けの可能性も残す。つまりは、未発掘部分に続く竪穴住居の分布に時期的な盛衰があり、調査地内の時期ごとにそれぞれのグループが竪穴住居を構築した可能性もありうる。

こうしたカマド構築方向による竪穴住居の区がどのような要因によるものかは、今後の周辺地域の発掘調査の成果を踏まえて議論がなされることを期待したい。

奈良時代の8世紀の竪穴住居群は5棟(可能性のあるものを加えて6棟)で各時代を通じて最も少ない竪穴住居の棟数である。この時期の竪穴住居は7世紀の竪穴住居の分布と比べて、さらに散漫な分布となる。8世紀の前半は第1四半期に1棟がみられ、第2四半期は竪穴住居の分布がみられない可能性が高い。8世紀の後半は2軒の竪穴住居がやや接近するか一定の距離を持って分布する。

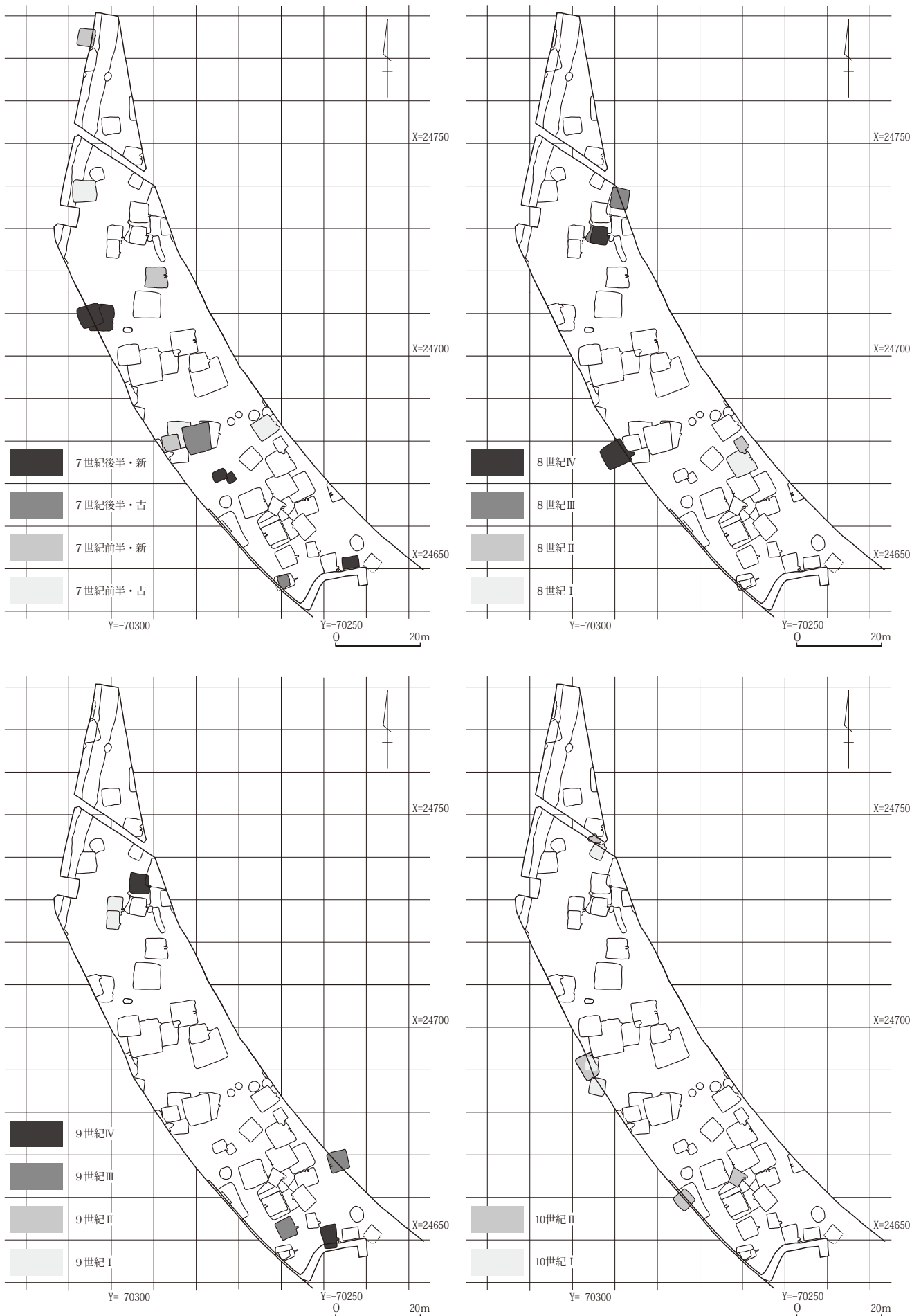
平安時代の9世紀の竪穴住居群は6棟で奈良時代と並んで少ない竪穴住居の棟数である。この時期の竪穴住居

は8世紀の竪穴住居の分布と同様に散漫な分布となる。9世紀の前半は第1四半期に建て替えを行った2棟がみられ、第2四半期は竪穴住居の分布がみられない。9世紀の後半の竪穴住居、8世紀の後半と同様に2軒の竪穴住居がやや接近するか一定の距離を持って分布する。

8から9世紀にかけての竪穴住居の分布は、調査地内の南北を行き来するように竪穴住居が点在することから、古墳時代に比べて相対的に集落内の竪穴住居が減少して、一定の場所に継続して竪穴住居を構築しない特徴があると考えられる。このような特徴に変化した時期は、7世紀と8世紀の境界にあるものと思われる。

平安時代の10世紀前半になると竪穴住居は再び増加し、前半期のみで9棟で、短い期間ではあるが古墳時代に次いで多い竪穴住居の棟数である。この時期の竪穴住居は7世紀の竪穴住居の分布と同様に調査地の北側、中央、南側に竪穴住居が広がる分布となり、数軒の竪穴住居が一定の距離を保ちながら並んで配置しているようにみえる。

このような6世紀中葉から10世紀前半の約400年間に



わたる調査地内の竪穴住居の変遷には、大づかみに4時期として捉えることが可能である。それらは6世紀中葉から後半における集落の発生・発展期、一定の距離を保った竪穴住居の配置がみられる7世紀の集落成長期、竪穴住居が相対的に減少し、時期ごとに移動を繰り返す8から9世紀の停滞期、再び竪穴住居が増加して一定の距離を保った竪穴住居の配置がみられる10世紀の復興期である。

このような古墳時代以降の竪穴住居棟数の傾向は、地域による時期差はみられるが同様な傾向が県内各地の遺跡でも確認されている。こうした現象は地域的な開発の変遷と考えるよりは外的な要因によるものであると考えられ、それは多分に政治的な理由によるものと推定される。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡で検出された竪穴住居棟数の変化は、当地において古墳時代の地域的な豪族支配による農耕開発によって6世紀後半に集落が形成され、それが発展していく過程において7世紀に地域が再編されたことを示唆する。これは律令制といった枠組みがこの地にも及んだことが要因かも知れない。その後8～9世紀の集落の停滞を経て、10世紀になると地域社会の支配体制が再構築されることで集落が再編されたのではないだろうか。

こうした竪穴住居群の変遷から、当地では古墳時代後期に開始した集落が、ほぼ間断なく平安時代まで営続したと考えてよい。このような動向は、遺跡が立地する微

高地を含めた周辺地域の集落群の動向との関係で理解すべきで、今後は矢場扇状地内の拠点的中核集落の盛衰との関連性が注目される。

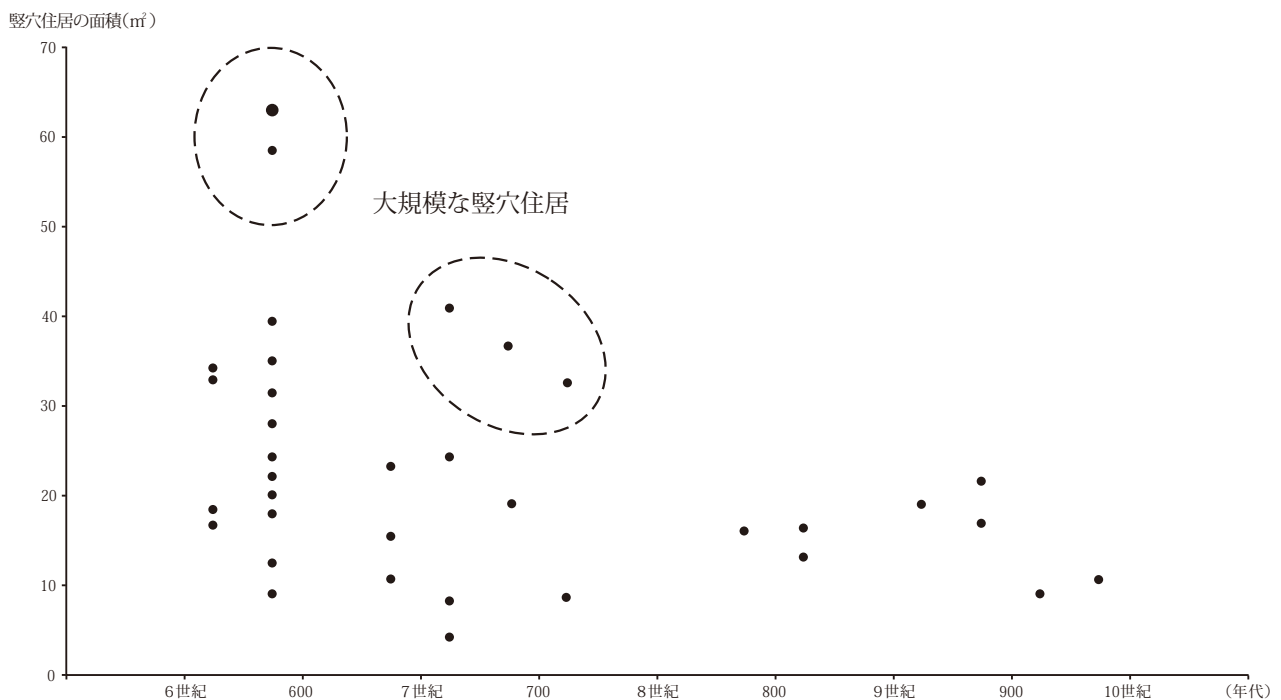
矢場三ツ橋Ⅱ遺跡で竪穴住居の大きさが把握できた遺構は42棟で、これには推定により復元したものも含まれる(第161図)。時代ごとの竪穴住居の大きさは、6世紀から7世紀のものに大規模な竪穴住居がみられる。

6世紀の竪穴住居は、1棟あたり27.7㎡であるが、60㎡前後の竪穴住居2棟を含み、約10～40㎡ほどの竪穴住居がまんべんなく存在している。7世紀から8世紀第1四半期の竪穴住居は、1棟あたり20.4㎡であり、約10～25㎡ほどの竪穴住居からなる。比較的大きな竪穴住居は、32～40㎡の3棟を含む。

8世紀後半から10世紀前半の竪穴住居は、1棟あたり14.6㎡で、約10～20㎡ほどの竪穴住居ならなり、30㎡達する竪穴住居は検出されなかった。

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡では、結晶片岩や凝灰質砂岩を使用したカマドが竪穴住居から検出されており、関東山地の周辺における石材を活用した事例として注目される。

カマドの構築材に結晶片岩や凝灰質砂岩礫を使用した竪穴住居は6世紀の20・22・23・24・25・31・38・41・61号竪穴住居、7世紀の12・28号竪穴住居、8世紀の7・26号竪穴住居、9世紀の4・5・6・44・66号竪穴住居、



第161図 竪穴住居の年代と面積

10世紀の21・43号竪穴住居である。カマドは廃絶時に破壊される場合もあるので比較の対象になるかといった問題もあるが、矢場三ツ橋Ⅱ遺跡では6世紀と9世紀の竪穴住居で積極的に利用されていると考えられる。

カマドの構築材に石材を利用した竪穴住居の面積は、6世紀の竪穴住居は1棟あたり27.8㎡で、7世紀は24.3㎡、8世紀は16.1㎡と20㎡クラス、9世紀は1棟あたり17.1㎡、10世紀では10.5㎡と24.6㎡である。これらの竪穴住居は6世紀代を別にすれば各年代の竪穴住居の中では比較的大きなものに属すると思われる。

竪穴住居から出土した遺物は、土器類では4号竪穴住居の平瓦10点、28号竪穴住居の土師器杯28点、31号竪穴住居の土師器杯12点、34号竪穴住居の土師器杯16点、65号竪穴住居の土師器杯16点などの出土物が特筆される。いずれもカマドや貯蔵穴周辺から出土した遺物であり6世紀から7世紀の竪穴住居内の食膳具の状況として注目される。

3. 中世の遺構群について

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した中世の遺構は、掘立柱建物が3棟、溝が8条、井戸が6基、皿が出土したピットが1基である。

遺構は年代別に、1号井戸(13世紀)、5号溝(13世紀中頃から14世紀前半)、1号溝(14世紀前半)、4号井戸(14世紀中頃)、4号溝(14世紀後半)、72号ピット(15世紀後半)が検出された。また、遺構以外から出土した中世の遺物は14世紀後半から16世紀前半に及び、主に在地系土器の皿や内耳鍋が出土している。

これらのことから、矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した中世の遺構群は竪穴状遺構や時代が特定できた掘立柱建物が未検出であるものの、緩やかに13世紀から16世紀代にかけての遺構群と遺物が散漫に継続していることがわかる。

また調査地内で検出された中世の時期に属すると思われるピットは、埋土が古墳時代の遺構埋土と区別が困難であるため、古墳時代の竪穴住居の床や掘方で4層の砂礫層を検出面として認識できるものが多かった。このため、今後ピット群を解析する資料として付図2に古墳時代から平安時代の竪穴住居の支柱及び貯蔵穴を除いて、遺跡から検出した土坑やピット群を図化した。これらの

検出された古墳時代から中世に及ぶピットと土坑は461基である。

また、中世の遺構群は、ほぼ同時期と考えられる1・3・5・7・8・9・10・11号溝で区画された範囲に分布しており、発掘地全体に広がっていることがわかる。

遺跡周辺の地形を概観すると1号溝は矢場三ツ橋Ⅱ遺跡が立地する扇状地上の微高地とその西側に広がる低地の境界を走行しており、その規模の大きさからも当地の主要水路の一部を構成する大溝と考えられる。それ以外の溝群は、土地の区画を境する性格を持った溝群であると考え、遺跡はおおむね65mや50mの境界で区画された地割りが存在することが推定される(PL.41-5)。この地割りは、発掘地周辺の現況地表面でも溝や畦、道などの地境として確認できるため、このような土地区画が扇状地上の微高地にある程度の範囲で広がりを持っていることが推定される。

今回の発掘調査では、中世の遺構群から中国陶磁器の白磁碗や搬入系土器の可能性が高い皿、搬入系土器の釜の可能性のある土器などが出土している。また、周辺の猿川遺跡では中国陶磁器の青白磁瓶が出土しており、このような当時の威信財と考えられる遺物や在地以外の搬入品の文化要素をもつ土器などの出土は、近隣地域もしくは当遺跡が寺院や城館の一部である可能性を示唆している。

今後の周辺地では、今回出土した遺物に関連する建物や施設に関する遺構群が発見される可能性が極めて高いと考えられる。今回の矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の発掘資料が、この地域に比定されている高山御厨や高山氏との関連でこの地域の中世史を考察する上で重要な資料と位置付けられることを期待し、今後の発掘調査に注目したい。

文献

- 新井房夫1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学』10pp.1-79
磯貝喜一1995「庚申山の地質」『藤岡北山B遺跡』藤岡市教育委員会編pp.383-387
菅原征子・古郡正志・櫻井孝2000a「緑野郡の郷」『藤岡市史通史編原始・古代 中世』藤岡市教育委員会編 p. 212-214
菅原征子・古郡正志・櫻井孝・田之倉武男・丸山治雄・伊藤実・黒沢明美2000b「平安時代の緑野郡」『藤岡市史通史編原始・古代 中世』藤岡市教育委員会編pp. 222-280
群馬県農政部土地改良課編1993『土地分類基本調査 高崎』40P.
関東ローム研究グループ1965『関東ローム-その起源と性状』築地書館378p
古環境研究所1993「寺前遺跡の地質調査」『上栗須寺前遺跡群Ⅰ第3分冊 自然科学分析・写真図版編』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第141集pp.6-9

澤口宏2000「笹川・中川流域 地形・地質」『良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(XXVIII)』群馬県自然環境課pp.87-88
 須貝俊彦2000「関東平野西部の丘陵・台地」『日本の地形4関東・伊豆小笠原』東京大学出版会 pp.194-198
 杉原重夫1988「藤岡市滝前・滝下遺跡とその周辺の自然—特に地形・地質について」『藤岡市滝前・滝下遺跡』発掘報告書pp.241-279
 杉山雄一・新谷加代・宮脇理一郎・宮脇明子2009「平井—櫛挽断層系(関東平野北西縁断層帯)の地形及びボーリング調査による断層分布及び活動性の再検討」『活断層・古地震研究報告』9 pp.79-111
 竹本弘幸・久保誠二1995「テフラと考古学」『群馬の火山灰』みやま文庫140 pp.155-166
 竹本弘幸2008「利根川中-上流域の段丘」『日本地方地質誌3関東地方』日本地質学会編 朝倉書店 pp.352-365
 田中義文・高橋敦・井上勉2007「藤岡市南部の更新世末期の植物化石群集」『徳永重元博士献呈論集』バリノ・サーヴェイ株式会社出版刊行会pp.429-442
 矢口裕之 2011「関東平野北西部、前橋堆積盆地の上部更新統から完新統に関わる諸問題」『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』29 pp.21-40

発掘調査報告書

群馬県藤岡市教育委員会1978『F1竹沼遺跡群』昭和52年発掘調査概報138P
 群馬県藤岡市教育委員会1986『F2緑埜地区遺跡群I』昭和57年度～昭和60年度土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書375P
 群馬県藤岡市教育委員会1994a『F12藤岡平地区遺跡群』平成2年度県営圃場整備事業藤岡平地区に伴う発掘調査報告書288P
 群馬県藤岡市教育委員会1994b『E14保美地区遺跡群』御荷鉢カンントリークラブ増設に伴う発掘調査報告書236P
 群馬県藤岡市教育委員会1995『藤岡北山B遺跡』県有文化施設みかぼみらい館建設に伴う発掘調査報告書389P
 群馬県藤岡市教育委員会1999『八王子遺跡・打越遺跡・倉谷戸遺跡・三本木清水Ⅱ遺跡・八王子下遺跡・赤坂遺跡』県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う発掘調査報告書145P
 群馬県藤岡市教育委員会2001『東平井寺西遺跡』藤岡東平井工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2分冊258P
 群馬県藤岡市教育委員会2006『矢場前原遺跡』平成14・15年度藤岡南部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書426P
 群馬県藤岡市教育委員会2008『矢場神明遺跡・倉谷戸B遺跡・矢場田中遺跡・松ノ木田遺跡・道上D遺跡』平成15・16年度藤岡南部地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書350P
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1991『白石大御堂遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第122集491p
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1997『緑埜遺跡群 緑埜上郷遺跡 竹沼遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第215集189p
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『小野地区水田址(杜宮司B地点)谷地遺跡F地点』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第378集72p
 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『下栗須伊勢塚遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第498集52p

遺物観察表

1号竪穴住居(第9図 PL.48)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯身	埋土	口縁部1/2欠損	口径11.2 器高5.0 稜径13.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ヘラ削り。	6世紀後半 (6C.IV) TK43
2	土師器 小型甕	床面の直上	2/3	口径12.6 器高17.7 底径6.6 胴部最大径14.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。	
3	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 片	口径15.8	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
4	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 下位片	口径13.5 胴部最大径18.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
5	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径17.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
6	土師器 甕	床面の直上	4/5	口径17.6 器高33.9 底径6.4 胴部最大径18.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩・長石 /良好/黄褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
7	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径19.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄褐色	内外面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

2号竪穴住居(第12図 PL.48・49)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 7cm上	口唇部1/4欠損	口径12.0 器高4.8 口縁部最大径13.4	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄褐色	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	7世紀前半 古
2	土師器 杯	床面から 7cm上	3/5	口径12.5 器高3.9	細砂粒・褐色/良好/灰 黄褐色	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部がヘラナデ、口縁部はヘラ磨き。	
3	土師器 杯	床面から 11cm上	3/4	口径12.9 器高4.0 稜径11.7	細砂粒/良好/にぶい黄 褐色	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	
4	土師器 杯	床面の直上	口縁部僅かに 欠損	口径13.2 器高5.1 底径5.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
5	土師器 杯	床面から 10cm上	ほぼ完形	口径13.4 底径4.1	細砂粒・褐色/良好/明 黄褐色	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラ磨き、器面磨滅のため単位不明。	
6	土師器 鉢	床面の直上	2/3	口径11.0 器高12.7 底径8.4 胴部最大径13.5	細砂粒・有色鉱物/良 好/明赤褐色	口縁部は横ナデ、口縁部下にナデ、体部はヘラ削り、底部周囲はナデ、底部はヘラ削り。内面は底部から体部下位にヘラナデ。	
7	土師器 甕	床面の直上 掘方から 4cm上	4/5	口径22.1 器高28.0 底径9.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ 橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
8	土師器 小型甕	カマド 使用面の直 上	口縁部～胴部 下位片	口径13.4 胴部最大径15.6	細砂粒/良好/にぶい黄 褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
9	土師器 甕	床面から 7cm上 掘方から 8cm上	口縁部～胴部 下位片	口径18.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・長石/良好/明赤 褐色	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
10	土師器 甕	カマド 使用面の直 上	4/5	口径19.9 器高33.2 底径5.1 胴部最大径17.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、胴部上位は器面磨滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
11	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径16.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/明赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
12	土師器 甕	カマド使用 面から5cm 上	口縁部～胴部 下位	口径17.8 胴部最大径16.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	内面頸部と胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
13	土師器 甕	カマド 使用面の直 上	口縁部～胴部 上半	口径18.2 胴部最大径16.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい赤褐 色	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
14	土師器 甕	カマド掘方 埋土 掘方から 6cm上	口縁部～胴部 上半	口径19.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙 色	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
15	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位2/3欠	口径17.4 胴部最大径16.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、胴部下位は器面磨滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
16	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位片	底径4.0	細砂粒・粗砂粒・チャ ート/良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
17	土師器 甕	床面の直上	胴部下位片		細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 橙	外面に輪積み痕が残る。胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	

3号竪穴住居(第14図 PL.49)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面から 6cm上	ほぼ完形	口径10.2 器高4.1 底径5.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/酸化焰/浅黄褐色	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	10世紀(10C.I)
2	須恵器 椀	床面から 6cm上	1/5	口径12.2 器高4.6 底径4.8	細砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。	口縁部は歪 がみられる。

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
3	灰釉陶 器 椀	埋土	口縁部小片	口径11.8	緻密、水籤/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転方向不明。体部下位に回転ヘラ削り。 施釉方法不明。	光ヶ丘1号窯 式期
4	灰釉陶 器 椀	埋土	口縁部1/3片	口径12.4 底径7.6	緻密、水籤/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。体部下位半は回転ヘラ削り。 施釉方法は漬け掛けか。	大原2号窯式 期
5	灰釉陶 器 皿	埋土	口縁部片	口径16.8	緻密、水籤/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。体部下位半は回転ヘラ削り。 施釉方法は漬け掛けか。	大原2号窯式 期
6	須恵器 羽釜	床面の直上	口縁部～鏝片	口径20.6 鏝径24.4	細砂粒/還元焰きみ/灰 黄褐	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	

3号竪穴住居(第14図 PL.49)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
7	鉄器 鏃	床面から 5cm上	茎部欠損	長さ(9.4) 幅2.5 厚さ0.4 重さ(11.8)	短頸腸袂三角形鏃、錆化が進んでいる。	
8	鉄器 鏃	床面から 5cm上	頸部・茎部欠 損	長さ(5.1) 幅1.6 厚さ0.2 重さ(5.7)	腸袂三角形鏃、錆化が進んでいる。	
9	鉄器 斧	埋土	完形	長さ9.7 幅3.9 厚さ0.6 重さ125.7	錆化が激しいが、残存状態は良好。	
10	鉄器 鏃	床面の直上	刃部	長さ(16.2) 幅3.4 厚さ0.4 重さ100.0	錆化が進んでいる。	
11	鉄器 鏃	床面の直上	刃部	長さ(14.1) 幅3.6 厚さ0.2 重さ(50.0)	刃部先端側の幅が広い。	
12	鉄器 不明	床面の直上	片側半分を欠 損か	長さ(7.8) 幅1.1 厚さ0.6 重さ(14.1)	錆化が進んでいる。	
13	鉄器 楔	床面の直上	完形	長さ16.3 幅0.8 厚さ0.3 重さ30.0	錆化が激しい。上端部の状態不鮮明。	

4号竪穴住居(第17・18図 PL.49・50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 26cm上	1/5	口径11.8 器高2.9 底径7.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	口縁部に歪 がみられる。
2	土師器 杯(盤 状)	床面の直上	2/5	口径13.8 器高2.5 底径9.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	9世紀(9C. IV)
3	須恵器 杯蓋	埋土	口縁部～天井 部片	口径17.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘ ラ削り。	
4	須恵器 皿	埋土	3/4	口径12.8 器高2.5 底径7.4 高台径6.8	細砂粒・小礫・長石/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
5	須恵器 椀	床面の直上	底部～体部片	底径6.6	細砂粒・長石/酸化焰/ 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
6	須恵器 椀	掘方の直上	3/5	口径14.4 器高4.7 底径5.4	細砂粒・結晶片岩・長 石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
7	須恵器 椀	床面の直上	3/4	口径14.4 器高5.6 底径6.6 高台径6.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。底部は回転ナデ。	
8	須恵器 椀	埋土	口縁部片	口径15.6	細砂粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。	
9	須恵器 椀	埋土	底部～体部	底径7.0 高台径6.4	細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
10	須恵器 椀	床面の直上	底部片	底径7.0 高台径6.5	細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
11	須恵器 椀	床面の直上	底部～体部片	底径7.4 高台径7.2	細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
12	灰釉陶 器 椀	埋土	口縁部片	口径16.0	微砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。施釉は内面のみ。	黒笹14号窯 式期か。
13	土師器 甕か	床面の直上	口縁部～胴部 片	口径24.0	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、横ナデ下にヘラナデ、胴部はヘラ削 り。内面胴部はヘラナデ。	
14	土師器 台付甕	貯蔵穴 底面から 22cm上	脚部	脚部径8.2	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	脚部は胴部に貼付、胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ、 内面胴部はヘラナデ。	
15	土師器 甕	床面の直上 掘方から 9cm上	口縁部～胴部 中位片	口径18.0 胴部最大径22.0	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
16	土師器 甕	貯蔵穴 底面から28cm 上	口縁部～胴部 上位片	口径21.0	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
17	土師器 甕	カマド使用 面から4cm上 掘方から 25cm上	口縁部～胴部 下位	口径21.5 胴部最大径21.9	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい橙	内面胴部中位に下半と上半の接合痕が残る。口縁部か ら頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
18	土師器 甕	3号土坑 底面の直上	胴部下位片	底径4.0	細砂粒/良好/橙	胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデ。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
19	須恵器 甕	床面の直上 掘方から 8cm上	底部～胴部上 位	底径15.5 胴部最大径29.2	細砂粒・有色鉱物/還元焰/灰	底部はへら削り後ナデ、胴部は下位に2段のへら削り、その上位はナデ。内面はへらナデ、アテ具痕がかすかに残る。	
20	瓦 丸瓦	床面から 9cm上	中ほど片	厚さ1.2～1.4	細砂粒・結晶片岩・長石/還元焰/灰	一枚造り、表面に叩き痕、裏面に布目が残る。	
21	瓦 平瓦	床面の直上	上端部片	幅(推定17.4) 厚さ1.4～1.6	細砂粒・結晶片岩・長石/還元焰/灰	一枚造り、表面に叩き痕、裏面に布目が残る。	
22	瓦 平瓦	掘方から 4cm上	下端部片	厚さ1.3～1.7	細砂粒・結晶片岩・長石/還元焰/灰	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
23	瓦 平瓦	床面から 5cm上	下端部片	厚さ0.7～1.4	細砂粒・結晶片岩/酸化焰/橙	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
24	瓦 平瓦	床面の直上	下端部片	幅(推定28.0) 厚さ1.0～2.0	細砂粒・粗砂粒・結晶片岩・有色鉱物/還元焰/灰	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
25	瓦 平瓦	床面の直上	下端部片	厚さ1.7～2.2	細砂粒・粗砂粒・結晶片岩/還元焰/灰	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
26	瓦 平瓦	床面から 11cm上	中位端部片	厚さ1.5～1.7	細砂粒・結晶片岩・褐粒/酸化焰/にぶい赤褐	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
27	瓦 平瓦	床面の直上	下端部片	厚さ1.3～1.6	細砂粒・結晶片岩・長石/酸化焰/にぶい赤褐	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
28	瓦 平瓦	床面から 7cm上	中位端部片	厚さ1.3～2.0	細砂粒・結晶片岩・長石/還元焰/灰	一枚造り、表面に布目、裏面に叩き痕が残る。	
29	瓦 平瓦	埋土	上端部編	厚さ1.5～1.8	細砂粒・結晶片岩・長石/還元焰/灰	一枚造り、表面に叩き痕、裏面に布目が残る。内外面とも器面磨滅。	

4号竪穴住居(第18図 PL.49)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
30	鉄滓	埋土		長さ4.1 幅3.0 厚さ2.6 重さ25.4		

5号竪穴住居(第23図 PL.50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面の直上	2/3	口径12.2 器高4.2 底径5.8	細砂粒・結晶片岩・有色鉱物/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	9世紀(9C. I)
2	須恵器 杯	埋土	底部～体部片	底径6.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
3	須恵器 椀	埋土	口縁部片	口径12.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。	混入か。
4	須恵器 杯	床面の直上	底部～体部片	底径12.0 高台径10.6	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ、体部は回転へら削り。	
5	土師器 小型甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径11.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
6	土師器 甕	床面から 7cm上	口縁部～胴部 上位片	口径17.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
7	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上半片	口径19.8 胴部最大径21.9	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ、器面磨滅のため単位不明。	
8	須恵器 甌	床面の直上	口縁部～胴部 片		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。把手が貼付、把手の周囲はナデ。	
9	須恵器 甌	床面の直上	底部～胴部下 位片	底径17.0	細砂粒・結晶片岩/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。胴部下位に1段のへら削り、その上位はナデ。内面は下位にへらナデ。	
10	瓦 平瓦	カマド 掘方から 17cm上	上位部	幅27.3 厚さ1.6～2.0	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/還元焰/灰	一枚造り、表面に布目が残る、裏面はナデ、側面はへら削り。	

5号竪穴住居(第23図 PL.50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
11	石製品 砥石	床面の直上	砥沢石	長さ13.7 幅5.6 厚さ4.2 重さ422.3	切り砥石	四面使用。上端小口部・裏面上端側に折り取り面がある。小口部の折り取り面は製作時のものだろうが、裏面上端側の折り取り面は糸巻状を呈する砥石裏面を安定させるための所作かもしれない。下端側破損面の稜は弱く摩耗。	

6号竪穴住居(第23・24図 PL.50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.8	細砂粒・礫・有色鉱物/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	9世紀(9C. I)
2	須恵器 杯蓋	床面の直上	口縁部1/2欠損	口径13.6 器高3.2 摘み径4.0	細砂粒・粗砂粒・長石/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転へら削り。	
3	須恵器 杯	床面の直上	3/4	口径13.0 器高4.4 底径8.0	細砂粒・褐粒・軽石/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面は酸化焰焼成のためにぶい黄橙を呈す。
4	須恵器 杯	床面の直上	底部片	底径7.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
5	須恵器 椀	床面から 7cm上	底部～体部下 位	底径6.8 高台径7.0	細砂粒・有色鉱物/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸切り。	
6	土師器 台付甕	床面の直上	脚部～胴部下 位		細砂粒/良好/橙	胴部はへら削り、脚部は横ナデ。内面胴部はへら削りか。	
7	土師器 甕	埋土 5住床面の 直上	口縁部～胴部 中位	口径12.8 胴部最大径16.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデか、器面磨滅のため単位不明。	5住へは混入
8	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径13.8	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
9	土師器 甕	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径23.2 胴部最大径23.4	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
10	土師器 甕	土坑1 掘方から 17cm上	底部～胴部下 半	底径3.8	細砂粒/良好/にぶい橙	内面に胴部下半と上半の接合痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	外面の一部に煤が付着。
11	須恵器 甕	床面の直上	胴部上位片		細砂粒・有色鉱物・結晶片岩/還元焰/灰	胴部は外面が平行叩き後カキ目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	外面に降灰が付着。
12	須恵器 甕	埋土	胴部上位片		細砂粒/還元焰/灰	胴部は外面が平行叩き後カキ目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	外面に降灰が付着。

7号竪穴住居(第26・27図 PL.50・51)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	3/4	口径12.0 器高3.4 底径10.3	細砂粒・褐粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	8世紀(8C. IV)
2	土師器 杯	床面の直上	1/3	口径12.4 器高3.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
3	土師器 杯	床面から 11cm上	底部の一部欠 損	口径12.8 器高3.6 底径10.7	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
4	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.0 底径9.6	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
5	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.4 底径11.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
6	土師器 杯	埋土	1/3	口径13.0 器高4.5 底径8.4	細砂粒・長石・褐粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
7	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 片	口径12.0 口径部最大径14.2	細砂粒・結晶片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちへら削り。内面体部はへらナデ。	混入か。
8	須恵器 杯蓋	埋土	2/3	口径13.7 器高2.9 摘み径4.0	細砂粒・粗砂粒・結晶片岩・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部は中ほどまで回転へら削り。	
9	須恵器 杯	埋土	2/3	口径12.5 器高3.4 底径6.5	細砂粒・粗砂粒・長石・褐粒/還元焰/褐灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後周囲を回転へら削り。	
10	須恵器 杯	掘方から 12cm上	1/4	口径13.8 器高4.1 底径8.8	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
11	須恵器 杯	埋土	1/5	口径13.0 器高4.4 底径7.4	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
12	須恵器 杯	埋土	1/3	口径13.2 器高3.7 底径8.2	細砂粒・結晶片岩・有色鉱物/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転へら削り。	
13	須恵器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径13.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部から体部下位は回転へら削り。	
14	須恵器 杯	掘方から 6cm上	口縁部～底部 片	口径15.4	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。体部下位に回転へら削り。	
15	須恵器 椀	床面の直上	2/3	口径19.4 器高7.5 底径11.1 高台径10.8	細砂粒・有色鉱物/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転へら削り、胴部下位に1段の回転へら削り。	
16	須恵器 椀	埋土	口縁部～底部 片	口径18.2	細砂粒・有色鉱物/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。体部下位に回転へら削り。	
17	須恵器 椀	埋土	底部	底径7.4 高台径7.4	細砂粒・有色鉱物/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転へら削り。	
18	土師器 小型甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径11.8	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
19	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 下位片	口径19.7 胴部最大径18.4	細砂粒・褐粒/良好/明赤褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
20	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径19.6	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
21	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径20.8	細砂粒・有色鉱物/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
22	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径23.6	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
23	土師器 甕	床面から 5cm上	底部～胴部下 位	底径6.6	細砂粒・有色鉱物/良好/にぶい赤褐	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
24	須恵器 甕	埋土	口縁部小片		細砂粒・有色鉱物/還元焰/灰	ロクロ整形。口唇部下に凸帯が巡る、凸帯下に波状文が巡る。	

8号竪穴住居(第30図 PL.51)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径10.0 器高4.1 口径部最大径10.5	細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、口縁部下にわずかにナデが残る、体部から底部は手持ちへら削り。	7世紀(7C. IV)

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
2	土師器 杯	床面から 11cm上	口縁部～体部 片	口径10.7 器高3.8 口縁部最大径11.2	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は 手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径11.2 器高3.8 口縁部最大径11.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は 手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	床面から 8cm上	口縁部1/3欠損	口径12.5 器高4.5 口縁部最大径12.9	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
5	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径10.6 口縁部最大径10.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径10.4 口縁部最大径11.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
7	須恵器 壺	埋土	口縁部片	口径13.8	細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰白	口縁部はロクロ整形、内面胴部に同心円状アテ具痕が 残る。	
8	土師器 甗	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径17.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ、内外面とも器面磨滅のため不鮮明。	
9	土師器 甗	床面から 5cm上	口縁部～胴部 中位	口径18.1 胴部最大径26.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、器面磨滅のため 単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
10	土師器 甗	床面から 8cm上	底部～胴部下 位	底径3.0	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

9号竪穴住居(第31図 PL.51)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径12.0	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	7世紀(7C. IV)
2	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径11.5 器高3.3 口縁部最大径11.8	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
3	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径11.6 口縁部最大径12.0	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
4	土師器 杯	カマド 使用面の直 上	口縁部～体部 片	口径14.4 口縁部最大径14.8	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は 手持ちヘラ削り。	
5	土師器 甗	カマド 使用面の直 上	2/3	口径20.3 器高36.6 底径6.5	細砂粒・有色鉱物/良 好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ、器面磨滅のため単位 不明。	
6	土師器 甗	カマド 使用面から 8cm上	4/5	口径18.8 器高30.2 底径4.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部 から胴部にヘラナデ。	
7	土師器 甗	カマド 使用面から 9cm上	ほぼ完形	口径21.0 器高33.5 底径4.9	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と 底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
8	土師器 甗	カマド 使用面から 5cm上	3/4	口径21.2 器高34.2 底径3.7 胴部最大径17.3	細砂粒・有色鉱物/良 好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
9	土師器 甗	カマド 使用面から 9cm上	2/3	口径20.7 器高37.9 底径5.3	細砂粒・有色鉱物・褐 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部 から胴部にヘラナデ。	胴部の一部 に粘土附着 あり。
10	土師器 甗	カマド 使用面から 21cm上	口縁部～胴部 上半片	口径21.6	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
11	須恵器 甗	床面から 4cm上	胴部片		細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰	胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が 残るが、ナデで部分的に消されている。	

11号竪穴住居(第33・34図 PL.51・52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 16cm上	2/5	口径13.1 器高5.0 稜径11.1	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、口縁部は器面磨滅 のため単位不明。	6世紀後半
2	土師器 杯	埋土	2/5	口径13.4 稜径11.6	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、口縁部は器面磨滅 のため不明。	
3	土師器 杯	埋土	4/5	口径13.1 器高4.5 稜径10.3	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	
4	土師器 杯	床面の直上	2/5	口径15.6 稜径13.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、口縁部は器面磨滅 のため単位不明。	
5	須恵器 杯	床面から 5cm上	1/2	口径13.8 器高3.3 稜径10.0	細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部はヘラ起し後ヘラ削り か、器面磨滅のため単位不明。	16住の混入 か。(8世紀 前半)
6	土師器 鉢	床面から 13cm上	口縁部～胴部 片	口径18.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
7	土師器 有孔鉢	床面から 5cm上	1/2	口径16.2 器高15.0 孔4.2×3.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/灰褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
8	土師器 甗	埋土	底部～胴部下 位片	底径9.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	胴部は外面がヘラ削り、内面はヘラナデか、器面磨滅 のため単位不明。	
9	土師器 甗	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径17.4	細砂粒・小礫・長石/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部上位はナデ。内面胴部 はヘラナデ。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
10	土師器 甕	床面から 16cm上	口縁部～頸部 1/2欠	口径17.2 器高33.3 底径7.8 胴部最大径18.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はへら削り、底部は木葉痕が残るが、周囲はへら 削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
11	土師器 甕	埋土	胴部片		細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	内面に輪積み痕が残る。胴部は外面がへら削り、内面 はへらナデ。	
12	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位片	底径5.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナ デ。	
13	土師器 甕	床面から 14cm上	口縁部～胴部 上位片	口径16.0 胴部最大径29.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は へら削り。内面胴部はへらナデ。	
14	土師器 甕	床面から 10cm上	底部～胴部下 位片	底径8.0	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 橙	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
15	須恵器 甕	床面から 12cm上	胴部片		細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が 残るが、外面は間隔をあけて線状のナデ。	

12号竪穴住居(第37図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 16cm上	口縁部～底部	口径10.7 口縁部最大径11.3	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち へら削り。	7世紀中頃 か。
2	土師器 鉢	床面の直上	完形	口径16.6 器高11.8	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・長石/良好/ にぶい黄橙	内面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナ デ、体部から底部はへら削り。内面は底部から体部に へらナデ。	
3	土師器 小型甕	床面の直上	ほぼ完形	口径13.9 器高14.5 底径6.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。 内面は底部から胴部にへらナデ。	
4	土師器 甕	床面の直上	1/4	口径23.3 器高21.2 底径9.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ 灰黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナ デ。	
5	土師器 小型甕	床面の直上	ほぼ完形	口径14.2 器高15.4 底径6.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。 内面は底部から胴部にへらナデ。	
6	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位	底径7.5	細砂粒・長石/良好/に ぶい橙	底部は木葉痕が残る、胴部はナデ。内面は底部から胴 部にへらナデ。	
7	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径8.4	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	底部と胴部はへら削り、胴部は器面磨滅のため単位不 明。内面は底部から胴部にへらナデ。	
8	須恵器 甕	埋土	口縁部片	口径20.2	細砂粒/還元焰/灰白	口縁部はロクロ整形。外面は凹線によって4段に区画、 上位3段には波状文が巡る。	口縁部は歪 大。内面 には降灰が 付着。

13号竪穴住居(第39図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	口縁部～底部 片	口径13.9 稜径4.0	細砂粒・褐粒/良好/明 赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、下半から底 部は手持ちへら削り。	6世紀中葉
2	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径15.2 稜径14.0	細砂粒・褐粒/良好/明 赤褐	口縁部横ナデ、底部(稜下)手持ちへら削り。	
3	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位片	底径6.9	細砂粒/良好/明赤褐	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナ デ。	やや新しい 年代。
4	須恵器 甕	埋土	胴部小片		細砂粒/還元焰/灰白	外面はカキ目、内面は同心円状アテ具痕が残る。	

14号竪穴住居(第39図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	埋土	底部片	底径6.8	細砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	10世紀代後 半か。 混入か？。

15号竪穴住居(第42図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 4cm上	口縁部一部欠 損	口径12.9 器高4.3 稜径10.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちへら削り、器面磨滅のため単位不明。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面から 8cm上	口唇部一部欠 損	口径13.4 器高4.5 稜径9.5	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちへら削り、器面磨滅のため単位不明。内面は 口唇部以外にへら磨き。	
3	土師器 杯	床面から 9cm上	口縁部一部欠 損	口径13.6 器高4.9 稜径11.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、 器面磨滅のため単位不明。	
4	土師器 杯	床面から 10cm上	口縁部～体部 1/5欠	口径13.6 器高6.4 稜径12.2	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。 内面は底部から体部に放射状へら磨き。	
5	土師器 杯	床面から 5cm上	1/3	口径13.6 器高3.5 稜径11.0	細砂粒/良好/灰黄褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちへら削り。内面は全面へら磨き。	
6	土師器 杯	床面から 13cm上	ほぼ完形	口径14.8 器高4.7 稜径12.4	細砂粒・褐粒/良好/明 黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
7	土師器 椀	P5 底面から 8cm上 床面の直上	4/5	口径13.6 器高5.4 稜径13.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
8	土師器 高坏	床面の直上			細砂粒/良好/にぶい黄 橙	杯身内部は黒色処理。脚部は外面がへら削り、内面はへらナデ。	
9	土師器 高坏	床面の直上			細砂粒・褐粒/良好/橙	内面に粘土紐巻き上げ痕が残る。外面はへら削り、内面はナデ。	
10	須恵器 短頸壺	床面から 4cm上	1/2	口径7.6 胴部最大径13.7	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部から胴部下位は回転へら削り。内面底部はナデ。	
11	土師器 甌	床面から 10cm上	1/4	口径22.0 器高26.8 底径8.4	細砂粒・小礫・結晶片 岩・有色鉱物/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
12	土師器 小型甕	床面から 17cm上		口径16.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
13	土師器 小型甕	床面の直上		底径5.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
14	土師器 甕	床面から 13cm上		口径17.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
15	土師器 甕	床面から 11cm上		底径5.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/灰黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
16	土製品 輪羽口	埋土	2/5	径5.8	細砂粒・礫・結晶片岩 /良好/にぶい黄橙	外面は側面・基面ともへら削り、内面はナデ。	未使用品か。

15号竪穴住居(第42図 PL.52)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
17	石製品 砥石	床面の直上	砥沢石	長さ(18.6) 幅10.0 厚さ7.4 重さ1879.5	切り砥石	四面使用。右側面を除く各面に、縦位の粗い刃ならし傷があるほか、左側面に幅7ミリの深く研ぎ減る箇所がある。裏面は浅く研ぎ減る一方、右側面は糸巻状に研ぎ減る。	
18	石製品 砥石?	床面から 6cm上	軽石質火山礫 二ツ岳軽石	長さ9.1 幅7.8 厚さ6.5 重さ233.8	礫砥石?	背面側が浅く溝状(幅2cm前後)に窪む。裏面側は平坦に整形されているが、摩耗が著しい。上端側小口部に縦位の刃ならし傷があり、砥石として捉えた。	
19	石製品 紡錘車	床面から 7cm上	滑石	径4.1 高さ2.0 軸孔穴0.6 重さ45.2	台形状	側縁は刀子等で縦位整形されているが、粗い斜位線条痕を伴う整形面を大きく残す。軸孔径は6ミリを測る。	

16号竪穴住居(第34図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	埋土	1/4	口径13.9 器高4.7 底径8.0	細砂粒・長石/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後周囲と体部下半に回転へら削り。	8世紀後半

17号竪穴住居(第39図 PL.53)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	1/4	口径13.3 器高4.6 稜径12.0	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面の直上	1/5	口径13.9 稜径12.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)上半はナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	
3	土師器 杯	床面の直上	1/2	口径13.0 器高3.8 稜径15.0	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
4	土師器 甕	床面の直上		口径19.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	

18号竪穴住居(第19図 PL.50)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 5cm上		口径13.9 稜径13.2	細砂粒/良好/にぶい黄 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	6世紀中葉
2	土師器 杯	床面から 6cm上	1/2	口径14.8 稜径14.0	細砂粒/良好/赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、下半から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部に放射状へら磨き。	
3	須恵器 杯	埋土		底径7.3	細砂粒・礫・結晶片岩 /還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へら削り。	

19号竪穴住居(第27図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 26cm上		口径13.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	8世紀後半

20号竪穴住居(第44・45図 PL.53・54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 11cm上		口径14.8 器高4.7	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄褐	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部に不規則なへら磨き。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面の直上	3/4	口径15.8 器高4.9	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
3	土師器 杯	カマド 掘方から 6cm上		口径12.3 器高4.6 稜径10.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
4	土師器 杯	床面から 8cm上	口縁部1/5欠損	口径13.6 器高4.6 底径11.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい赤褐	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、底部はへら削りか、 内外面とも器面磨滅のため不鮮明。内面は底部から口 縁部に放射状へら磨き。	
5	土師器 杯	カマド 使用面から 8cm上	口縁部1/3欠損	口径15.0 器高5.2 底径10.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鈹物/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内 面は全面へら磨きか、一部内外面とも器面磨滅のため 不鮮明。	
6	土師器 杯	埋土	3/4	口径15.2 器高5.2 底径10.0	細砂粒・有色鈹物/良 好/灰黄褐	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持 ちへら削り。内面は口唇部以外にへら磨き。	
7	土師器 杯	床面から 19cm上	口縁部1/2欠損	口径15.6 器高5.1 底径9.5	細砂粒・粗砂粒・褐粒 /良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内 面は全面へら磨き。	
8	土師器 椀	床面から 13cm上	完形	口径11.9 器高6.5 稜径13.9	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持 ちへら削り。内面は底部から体部に斜放射状に近いへ ら磨き。	
9	土師器 鉢	床面から 8cm上	4/5	口径12.5 胴部最大径13.1	細砂粒・有色鈹物・結 晶片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内 面は底部から体部にへらナデ。	
10	須恵器 杯身	埋土	底部～体部下 位片		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部から体部下位は回転へ ら削り。内面底部はへらナデ。	
11	土師器 甕	床面から 12cm上	口縁部～胴部 上位片	口径13.1	細砂粒・有色鈹物/良 好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部 はへらナデ。	
12	土師器 甕	カマド 使用面の直 上	完形	口径15.2 器高24.1 底径8.9 胴部最大径20.0	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・有色鈹物/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへら削り、胴部最下位 にナデ。内面は底部から胴部にへらナデ。	
13	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 下位	口径17.1 胴部最大 径14.9	細砂粒・粗砂粒・有色 鈹物・結晶片岩/良好/ にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナ デ。	
14	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 下位	口径19.4 胴部最大径17.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鈹物・結晶片岩/良好/ 橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
15	土師器 甕	床面から 11cm上	底部～胴部下 位	底径5.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明赤 褐	底部に木葉痕が残る、胴部はへら削り。内面はへらナ デ。	
16	土師器 甕	床面から 4cm上	口縁部～胴部 下位1/3	口径19.6 胴部最大径29.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鈹物/良好/橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はへら削り。内面は胴部から頸部にへらナデ。	
17	土師器 甕	床面から 4cm上	口縁部～胴部 上位	口径21.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・褐粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部 はへらナデ。	
18	土師器 甕	床面から 6cm上	底部～胴部下 位	底径8.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明赤 褐	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナ デ。	
19	土師器 円筒状 土器	床面の直上	ほぼ完形	口径13.4×9.2 器高51.6 底径5.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鈹物/良好/橙	内面に輪積み痕が残る。口唇部と底部端部は横ナデ、 胴部はへら削り。内面はへらナデ。	胴部上位～下 位は断面楕円 形を呈す。

20号竪穴住居(第45図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
20	石製品 石製模 造品	カマド 使用面の直 上	滑石	長さ4.8 幅(1.9) 厚さ1.3 重さ12.5	勾玉	表裏面とも孔周辺を浅く溝状に面取り整形したのち、孔 を穿つ。孔は両側穿孔されているが、孔が重複している ように見える。両側縁の切断面は表裏面の整形面を切る。	
21	石製品 砥石	床面から 5cm上	黒色結晶片岩	長さ21.6 幅8.0 厚さ7.5 重さ1935.5	礫砥石?	片状組織を呈する柱状礫(河床礫)の側縁に機能部を有 する。研磨面は中央より上端側で研ぎ減る。	

21号竪穴住居(第47図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	カマド 使用面から 13cm上	1/2	口径11.8 器高5.5 底径7.0 高台径5.6	細砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	10世紀(10C. II)
2	須恵器 椀	カマド 使用面から 11cm上	口縁部片	口径13.0	細砂粒/酸化焰きみ/灰 黄	ロクロ整形、回転右回りか。	
3	土師器 甕	床面から 13cm上	底部～胴部下 位	底径5.0	細砂粒・有色鈹物/良 好/にぶい赤褐	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナ デ。	
4	須恵器 羽釜	カマド 使用面から 20cm上	口縁部～胴部 上位片	口径28.0 罎径32.8	細砂粒・有色鈹物/酸 化焰/明黄褐	ロクロ整形、回転右回りか。罎は貼付。	

22号竪穴住居(第50・51図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	4/5	口径12.8 器高4.6 稜径14.7	細砂粒/良好/灰褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。 内外面とも 内面底部にへら磨き。	内外面とも 漆塗り。
2	土師器 杯	埋土	1/2	口径14.0 器高4.3 稜径12.6	細砂粒/良好/赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	内外面とも 漆塗り。
3	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径14.2 稜径10.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、底部(稜下)は手持ちへら削り。	6世紀中葉
4	土師器 杯	床面から 9cm上	1/3	口径14.4 稜径13.0	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、 稜下にナデ部分が残る。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
5	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径15.7 稜径11.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、底部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 杯	床面から 5cm上	1/5	口径16.0 器高3.9 底径8.0	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/にぶい橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、器面磨滅のため一 部単位不明。	
7	土師器 高杯	埋土	杯身部片	口径17.9 稜径11.6	細砂粒・褐粒/良好/橙	杯身口縁部横ナデ、底部(稜下)手持ちヘラ削り。	
8	土師器 高杯	床面の直上	脚部	脚部径13.2	細砂粒・褐粒/やや軟 質/橙	内面に輪積み痕が残る。脚部はヘラ削り、裾部は横ナ デ、内面脚部はヘラナデ。	
9	土師器 高杯	床面から 18cm上	脚部下半	脚部径14.0	細砂粒・夾雑物少/良 好/橙	内面に輪積み痕が残る。脚部はヘラ磨き、裾部は横ナ デ、内面脚部はヘラナデ。	
10	須恵器 杯蓋	埋土	1/4	口径13.9 器高3.9	細砂粒・礫・結晶片岩 /還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回りか。天井部は回転ヘラ削り。	内面口唇部 に凹線が1条 巡る。
11	須恵器 杯蓋	床面から 4cm上	2/5	口径15.0 器高4.4	細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は周囲まで回転ヘ ラ削り。	
12	須恵器 杯蓋	床面から 9cm上	口縁部1/2欠損	口径15.1 器高4.5	細砂粒・粗砂粒・長石・ 有色鉱物/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。天井部は中ほどまで回転ヘ ラ削り。	内面口唇部 に凹線が1条 巡る。
13	須恵器 杯蓋	床面から 9cm上	2/3	口径15.2 器高4.1	細砂粒・粗砂粒/還元 焰/灰オリーブ	ロクロ整形、回転左回り。天井部は周囲まで回転ヘラ 削り。	
14	須恵器 杯身	床面から 11cm上	口唇部大半欠 損	口径11.4 稜径13.7	細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。底部から体部下半は回転ヘ ラ削り。	
15	須恵器 杯身	埋土	1/3	口径11.8 器高3.9 稜径13.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
16	須恵器 杯身	床面の直上	2/5	口径13.6 稜径16.2	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	須恵器杯身・ 蓋はTK10～ MT85か。
17	須恵器 杯身	埋土	底部～稜片	稜径14.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部から体部下位は回転ヘ ラ削り。	
18	須恵器 高杯	埋土	脚部片		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。杯身部とは接合、接合面 に同心円状の凹凸を設けている。	脚部に透孔 が3カ所。
19	須恵器 高杯	埋土	脚部小片	脚部径11.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。	
20	土師器 小型丸 底壺	埋土	底部～胴部	胴部最大径12.2	細砂粒・褐粒/良好/橙	底部から胴部はヘラ磨き、底部は器面磨滅のため単位 不明、頸部下は横ナデ。内面はヘラナデか。	
21	須恵器 短頸壺	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径9.9	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
22	土師器 甌	床面の直上	ほぼ完形	口径25.6 器高29.3 底径8.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
23	土師器 甌	床面から 9cm上	底部～胴部下 位片	底径8.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄褐	胴部下位はヘラ削り。内面はヘラナデ後部分的にヘラ 磨き。	
24	土師器 小型甕	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径12.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
25	土師器 小型甕	貯蔵穴 底面から 48cm上 床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径12.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
26	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径18.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
27	土師器 甕	P2 底面から 34cm上	底部～胴部下 位片	底径9.4	細砂粒・粗砂粒/良好/ にぶい黄橙	底部は木葉痕が残る、胴部はハケ目(7本)、内面は底 部にナデ、胴部はヘラナデ。	
28	土師器 甕	床面から 6cm上	底部～胴部下 位	底径5.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄褐	底部は木葉痕が残る、胴部はヘラ削り。内面は底部か ら胴部にヘラナデ。	
29	土師器 甕	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上半	口径16.4 胴部最大径17.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は ヘラ削り。内面は胴部から頸部にヘラナデ。	

22号竪穴住居(第51図 PL.54)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
30	鉄器 鎌	埋土	先端部を欠損	長さ(3.7) 幅1.9 厚さ0.1 重さ(3.9)	無頸鎌、錆化が激しい。	

23号竪穴住居(第55・56図 PL.54・55)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 8cm上	2/3	口径12.5 器高5.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面は底部から体部にヘラナデ。	6世紀後半

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
2	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径16.7 稜径15.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちへら削り。内面体 部はへらナデ、一部にハケ目が残る。	
3	土師器 高坏	埋土	杯身部片	口径17.7 稜径9.8	細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部横ナデ、底部(稜下)は手持ちへら削り。内面は へら磨き。	
4	土師器 高坏	埋土	杯身部片	口径18.8 稜径10.9	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、底部(稜下)は手持ちへら削り。内面は へら磨き。	
5	土師器 鉢	1号カマド 掘方から 21cm上	胴部一部欠損	口径23.0 器高17.8 底径8.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内 面は底部から体部にへらナデ。	
6	土師器 鉢	床面の直上	ほぼ完形	口径19.4 器高5.8 底径9.1	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄褐	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部から体部はナデ、 底部はへら削り、器面磨滅のため単位不明。内面は底 部から体部・口縁部までへらナデ。	甕を製作途 中で止めて 鉢に転用。
7	土師器 台付鉢	埋土	底部～脚部上 半片		細砂粒・粗砂粒・礫・結 晶片岩/良好/にぶい橙	脚部は貼付、底部から脚部上位はへら削り、脚部は横 ナデ。	
8	須恵器 杯蓋	埋土	口縁部～天井 部片	口径12.1 器高4.1	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転へ ら削り。	外面に降灰 付着、内面 口唇部に凹 線が1条巡る。
9	須恵器 杯蓋	埋土	口縁部～天井 部片	口径14.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	内面口唇部 に凹線が2条 巡る。
10	須恵器 杯身	埋土	底部～口縁部 小片	稜径14.4	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回りか。底部から体部下半は回転 へら削り。	
11	須恵器 短頸壺	床面の直上	口縁部～胴部 上半片	口径8.8 胴部の最大径13.6	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。口縁部から胴部はカキ目。	
12	須恵器 短頸壺	床面から 9cm上	3/4	口径10.6 器高7.4 胴部の最大径13.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。底部から胴部下半は回転へ ら削り。	
13	須恵器 短頸壺	2号カマド 床面の直上	2/3	口径10.9 器高9.0 胴部の最大径13.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。口縁部から胴部中位はカキ 目、底部から胴部下位は手持ちへら削り。	
14	土師器 甌	P7 底面から 16cm上	一部欠損	口径24.6 器高31.1 底径8.6	細砂粒・有色鉱物・褐 粒/良好/橙	内面黒色処理。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら 削り。内面胴部はへらナデ。	
15	土師器 小型甕	2号カマド 床面の直上	底部1/2欠損	口径13.5 器高17.8 底径7.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへら削り、胴部下位底 部周囲はナデ。内面は底部から胴部にへらナデ。	
16	土師器 小型甕	床面から 6cm上	3/4	口径14.2 器高13.4 底径6.9	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩・長石/良好/ にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面は底部 から胴部にへらナデ。	
17	土師器 小型甕	1号カマド 床面から 8cm上	1/2	口径16.4 器高14.6 底径7.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。 内面は底部から胴部にへらナデ。	
18	土師器 甕	1号カマド 床面から 4cm上	底部～胴部下 位	底径7.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナ デ。	外面胴部に 粘土付着。
19	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径8.0	細砂粒・粗砂粒・長石/ 良好/にぶい赤褐	底部は木葉痕が残る、胴部はへら削り。内面は底部か ら胴部にへらナデ。	外面胴部に 粘土付着。
20	土師器 甕	1号カマド 掘方から 20cm上	底部～胴部下 位	底径6.4	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい橙	内面に輪積み痕が残る。底部と胴部はへら削り。内面 は底部から胴部にへらナデ。	外面胴部の 大部分に粘 土付着。
21	土師器 甕	1号カマド 床面から 7cm上	ほぼ完形	口径18.7 器高33.2 底径6.5 胴部の最大径16.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り、底部は木 葉痕が残る。内面は底部から胴部にへらナデ。	
22	土師器 甕	P8 底面の直上	完形	口径22.8 器高36.6 底径3.2	細砂粒・褐粒/良好/橙	内外面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と底 部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
23	土師器 甕	2号カマド 床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径16.9	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り、内面胴部はへらナ デか、内外面とも器面磨滅のため不鮮明。	
24	土師器 甕	床面から 9cm上	口縁部～胴部 上位片	口径19.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶい橙	内面頸部下に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナ デ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
25	須恵器 甕	床面の直上	胴部片		細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰	胴部は外面が平行叩き痕後間隔をあけた線状のナデ、 内面は同心円状アテ具痕が残る。	
26	須恵器 甕	床面の直上	胴部片		細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰	胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が 残る。	

23号竪穴住居(第56図 PL.55)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
27	鉄器 不明	埋土	完形か	長さ8.1 幅0.5 厚さ0.4 重さ7.8	用途不明、残存状態は良好。	

24号竪穴住居(第58図 PL.55)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径14.7 稜径10.4	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちへら削り。内面はやや雑なへら磨き。	6世紀後半
2	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径19.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナ デ。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
3	土師器 甕	P1 底面から 27cm上	口縁部～胴部 上位片	口径20.2	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	外面胴部に 粘土付着。
4	土師器 甕	床面から 8cm上	底部～胴部下 位	底径9.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/に ぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デか。	

25号竪穴住居(第60・61図 PL.55・56)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	2/3	口径13.4 器高4.6 稜径13.6	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀中葉
2	土師器 杯	掘方の直上	1/3	口径12.7 器高4.6 稜径10.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/黒褐	内外面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部 は手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	
3	土師器 杯	床面の直上	1/3	口径13.3 稜径10.0	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面は全面ヘラ磨き。	
4	土師器 杯	床面の直上	4/5	口径12.6 器高4.7 稜径11.2	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不明。内面はヘラ磨き。	内面黒色処 理か、被熱 で酸化か。
5	土師器 杯	床面の直上	1/2	口径13.3 器高4.4 稜径11.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不明。	
6	土師器 杯	床面の直上	2/5	口径18.7 器高4.9 稜径15.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/に ぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
7	土師器 椀	床面の直上	ほぼ完形	口径10.2 器高6.0 底径9.0 口縁部の最大径11.4	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩・長石/良好/ にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は 手持ちヘラ削り。内面底部から体部下位にヘラナデ。	
8	土師器 高杯	カマド堀方 埋土 使用面から 12cm下	脚部	脚部径15.7	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	脚部は縦位のヘラ削り、裾部は横ナデ。内面は脚部上 半がヘラ削り、下半はヘラナデ、裾部は横ナデ。	
9	須恵器 高杯	床面の直上	杯身部片	口径17.9	細砂粒/還元焰/灰白	ロク口整形、回転右回り。底部から部(稜下)は回転ヘ ラ削り。	
10	土師器 甕	床面の直上	1/3	口径14.9 器高35.3 底径6.2 胴部の最大径17.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と 底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
11	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径18.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
12	土師器 甕	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径18.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/に ぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
13	土師器 甕	床面から 5cm下	口縁部～胴部 上位	口径19.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
14	土師器 甕	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位	口径21.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	

25号竪穴住居(第61図 PL.56)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
15	石製品 石製模 造品	床面の直上 (カマド)	滑石	長さ5.5 幅1.9 厚さ0.7 重さ8.1	勾玉	左辺が直線的であるのに対して、右辺中央が突出する。 全体として三角形状を呈する形状は本遺跡出土の滑石 製勾玉に共通する。径4ミリの孔は両側穿孔されるよ うに見えるが、刀子等で内面整形されている。	

26号竪穴住居(第63図 PL.56)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 18cm上	口縁部～底部 片	口径12.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	8世紀(8C. IV)
2	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
3	須恵器 椀	床面から 4cm下	口唇部大半欠 損	口径15.7 器高7.7 底径9.2 高台径9.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 明赤褐	ロク口整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
4	土師器 甕	床面から 18cm上	1/3	口径19.7 器高26.4 底径4.6 胴部の最大径20.4	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	内面胴部中位に下半と上半の接合痕が残る。口縁部か ら頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底 部から胴部にヘラナデ。	
5	土師器 甕	床面から 18cm上	口縁部～胴部 上位片	口径18.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	

27号竪穴住居(第66図 PL.56)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	1/3	口径12.6 稜径10.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は放射状ヘラ磨き、器面磨滅の ため単位不明。	6世紀後半 新
2	土師器 杯	床面から 8cm上	口唇部1/4欠損	口径13.6 器高4.5 稜径10.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は口唇部以外ヘラ磨き。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
3	土師器 杯	床面から 11cm上	口縁部1/5欠損	口径13.8 器高4.9 稜径11.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/灰黄褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	
4	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径14.1 器高4.7 稜径11.9	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 黄褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は口唇部以外ヘラ磨き。	
5	土師器 杯	床面の直上	1/2	口径15.4 器高5.8 稜径13.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径13.8 稜径12.3	細砂粒/良好・燻/灰黄 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	有段口縁部 杯。
7	土師器 杯	埋土	1/3	口径15.2 器高4.4 底径8.2	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部に放射状、体部は横位のヘラ磨き。	内面黒色処 理か、二次 被熱で酸化 か。
8	土師器 高坏	床面の直上	脚部上半		細砂粒/良好/にぶい赤 褐	脚部と杯身は接合、内面に輪積み痕が残る。脚部は外面がヘラ削り、内面はナデ。	
9	須恵器 杯蓋	床面から 5cm上	2/5	口径13.7 器高4.7 稜径12.6	細砂粒・結晶片岩/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転左回りか。天井部は中ほどまで手持ちヘラ削り。内面天井部はナデ。	
10	土師器 鉢	埋土	底部～体部片	底径5.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/橙	底部と体部はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラ磨き。	
11	土師器 小型甕	床面の直上	口縁部・底部 1/4欠	口径13.5 器高14.3 底径6.1 胴部の最大径13.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
12	土師器 甕	床面から 9cm上	底部～胴部下 位	底径5.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/明黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
13	土師器 甕	床面から 10cm上	口縁部～胴部 上位片	口径22.4	細砂粒・有色鉱物/良 好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
14	土師器 甕	床面から 6cm上	口縁部～胴部 上位片	口径22.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
15	土師器 甕	P5 底面から 24cm上	口縁部～胴部 上位		細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・長石/還元 焰/灰	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
16	土師器 甕	床面から 7cm上	底部～胴部下 半	底径6.0 胴部の最大径21.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
17	須恵器 甕	埋土	胴部片		細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/還元焰/灰	胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が残る。	
18	土製品 紡錘車	埋土	完形	径4.4 孔径2.9 厚さ4.5 重さ55.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	表裏、側面ともヘラ磨き、一部器面磨滅のため不鮮明。	

27号竪穴住居(第66図 PL.56)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
19	石製品 石製模 造品	埋土	滑石	長さ4.4 幅(3.0) 厚さ1.0 重さ14.5	勾玉	背面側中央に弱い摩耗面がある。両側縁とも折断されているが、右側縁の切断面のみ摩耗。孔は回転穿孔されたであろうが、途中穿孔位置を変え、最終的には刀子等で整形されたようで、孔径は明らかでない。	

28号竪穴住居(第69・70・71図 PL.56・57・58)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 14cm上	ほぼ完形	口径12.1 器高4.4 稜径11.4	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	6世紀後半 ～7世紀前 半
2	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 18cm上	ほぼ完形	口径12.5 器高4.2 稜径11.5	細砂粒・粗砂粒・長石 /良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	床面の直上	口縁部1/5欠損	口径12.5 器高4.3 稜径11.6	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)上半はナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 14cm上	ほぼ完形	口径12.7 器高4.5 稜径11.5	細砂粒・粗砂粒・褐粒 /良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
5	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 17cm上	ほぼ完形	口径13.0 器高4.8 稜径12.5	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
6	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 19cm上 床面から 11cm上	口縁部1/5欠損	口径13.2 器高5.0 稜径12.5	細砂粒・粗砂粒・褐粒 /軟質/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	口縁部の歪 が大きい。
7	土師器 杯	貯蔵穴 底面の直上	口縁部を僅かに 欠損	口径13.2 器高4.5	細砂粒・長石・褐粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
8	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 16cm上	完形	口径13.4 器高4.2 稜径11.8	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
9	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 9cm上	完形	口径13.8 器高4.7 稜径13.1	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
10	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 16cm上	ほぼ完形	口径13.8 器高5.1 稜径12.3	細砂粒・長石・有色鉱 物・褐粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
11	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径13.8 器高5.3 稜径12.5	細砂粒・褐粒/良好/灰 黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面は底部から体部にヘラナデ後ナデ。	
12	土師器 杯	貯蔵穴 底面の直上	ほぼ完形	口径14.0 器高4.4 稜径12.5	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
13	土師器 杯(杓 状)	貯蔵穴 底面から 14cm上	ほぼ完形	口径14.4×13.0 器高4.2 稜径12.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不鮮明。	
14	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径14.8 器高4.8 稜径13.6	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
15	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径14.7 器高5.1 稜径13.2	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半ナデ、下半から底部 は手持ちヘラ削り。	
16	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径16.8 器高7.6 稜径15.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面は口縁部から体部にヘラ磨き。	
17	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径17.2 器高5.4 稜径15.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
18	土師器 杯	床面から 10cm上	2/5	口径12.8 器高4.2 稜径9.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄 橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、底部(稜下)は手持ちヘ ラ削り。内面は口縁部下半にヘラ磨き。	
19	土師器 杯	床面から 13cm上	3/4	口径14.1 器高4.5 稜径11.8	細砂粒・粗砂粒・褐粒 /良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半ナデ、下半から底部 は手持ちヘラ削り。	
20	土師器 杯	埋土	1/2	口径14.5 器高4.5 稜径10.8	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 有色鉱物・結晶片岩/ 良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削 り。内面はヘラ磨き、口縁部は器面磨滅のため単位不 明。	
21	土師器 杯	床面の直上	完形	口径14.7 器高4.8 稜径13.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・褐粒/良好/にぶ い橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
22	土師器 杯	床面の直上	完形	口径10.5 器高3.1 口縁部の最大径11.1	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
23	土師器 杯	貯蔵穴 底面の直上	4/5	口径10.5 器高3.0 底径約9.0	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
24	土師器 椀	床面の直上	ほぼ完形	口径10.8 器高5.2 底径5.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。内面は底部から体部下半にヘラナデ。	
25	土師器 椀	床面から 6cm上	1/2	口径11.2 器高5.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
26	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 22cm上	口縁部1/5欠損	口径12.6 器高4.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面に斜放射状ヘラ磨き、器面磨滅のため不鮮明。	
27	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 18cm上	ほぼ完形	口径13.3 器高4.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
28	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 16cm上	口縁部を僅かに欠損	口径13.4 器高4.5 稜径11.8	細砂粒・小礫・有色鉱 物/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
29	土師器 高坏	床面から 11cm上	杯身部片	口径19.3 稜径12.6	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	杯身部は口縁部横ナデ、底部(稜下)手持ちヘラ削り。	
30	土師器 高坏	貯蔵穴 底面から 15cm上	脚部	脚部径16.0	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄褐	脚部は縦位のヘラ削り、裾部は横ナデ。内面は脚部に 横位のヘラ削り。	
31	土師器 高坏	床面の直上	脚部片		細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	脚部は縦位のヘラ削り、裾部は横ナデ。内面は脚部に ヘラナデ。	
32	土師器 鉢	貯蔵穴 底面から 9cm上	5/6	口径15.2 器高12.8 底径6.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面は底部から体部にヘラナデ。	
33	土師器 鉢	床面から 20cm下	1/3	口径15.5 器高12.9 底径6.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り、底部は木葉 痕が残る。内面は底部から体部にヘラナデ。	
34	土師器 鉢	貯蔵穴 底面の直上	完形	口径19.8 器高14.0 底径6.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩・褐粒 /良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り。 内面は底部から体部にヘラナデ。	
35	土師器 有孔鉢	床面から 20cm上	2/3	口径16.9 器高13.3 底径5.4 孔径2.6	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面は底部から体部にヘラナデ。	
36	須恵器 杯身	床面から 4cm上	1/2	口径13.0 器高3.1 稜径15.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。底部から体部下半は回転ヘ ラ削り。	
37	須恵器 壺蓋	床面から 6cm上	口縁部1/4欠損	口径11.9 器高8.7 摘み径4.2 稜径10.7	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。摘みは貼付、天井部は中ほ どまで回転ヘラ削り。	内面口唇端 部に凹線が1 条巡る。
38	土師器 小型壺	床面の直上	口縁部1/5欠損	口径9.2 器高9.3 底径3.6 胴部の最大径10.1	細砂粒・褐粒/良好/明 赤褐	口縁部から頸部、頸部下までは横ナデ、胴部から底部 はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデか。器面 磨滅のため単位不明。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
39	土師器 小型丸 底壺	埋土	1/2	口径11.0 器高11.7 胴部の最大径13.3	細砂粒/やや軟質/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上半がナデ、下半から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
40	土師器 甌	貯蔵穴 底面から 25cm上 床面から 6cm上	口縁部1/3欠損	口径24.4 器高30.6 底径8.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
41	土師器 甌	床面から 7cm上	4/5	口径23.4 器高33.5 底径9.3	細砂粒・有色鉱物・褐 粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ後上位から中位は縦位、下位は不規則なヘラ磨き、下位は器面磨滅のため単位不明。	
42	土師器 甌	床面から 4cm上	ほぼ完形	口径24.5 器高30.7 底径9.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
43	土師器 小型甕	床面の直上	ほぼ完形	口径13.0 器高13.5 底径7.1 胴部の最大径14.5	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
44	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 22cm上 床面から 13cm上	口縁部・胴部 一部欠	口径16.3 器高19.2 底径6.0 胴部の最大径14.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・褐粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
45	土師器 小型甕	床面から 13cm下	底部～胴部下 半	底径7.6 胴部の最大径13.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
46	土師器 甕	床面から 20cm下	口縁部1/2欠損	口径17.2 器高33.3 底径5.3 胴部の最大径16.4	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩・長石 /良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
47	土師器 甕	床面から 13cm下	4/5	口径18.2 器高35.2 底径5.6 胴部の最大径16.9	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
48	土師器 甕	床面から 6cm上	4/5	口径18.5 器高33.2 底径5.5 胴部の最大径19.7	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	外面胴部の一部に粘土付着。
49	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径7.3	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	外面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り後胴部の一部にナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
50	土師器 甕	床面から 8cm上	口縁部～胴部 上位片	口径22.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ 橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

29号竪穴住居(第47図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	埋土	底部～体部下 位片	底径6.5 高台径5.6	細砂粒・有色鉱物/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転系切り。	10世紀前半

30号竪穴住居(第72・73図 PL.58・59)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 7cm上	口縁部1/5欠損	口径10.1 器高4.7 底径8.3 口縁部の最大径11.3	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/良好/明黄褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	7世紀前半
2	土師器 杯	床面の直上	完形	口径12.1 器高4.9	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	
3	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径12.3 器高5.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径12.2 稜径11.0	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
5	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径14.6 稜径12.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 鉢	床面の直上	一部欠損	口径16.2 器高7.1 底径6.5 口縁部の最大径16.7	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
7	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 片	口径24.5	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
8	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 片	口径17.7 口縁部の最大径19.1	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部上位ナデ、中位から底部は手持ちヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
9	土師器 甌	床面の直上	口縁部1/3欠損	口径19.8 器高23.8 底径7.9	細砂粒・有色鉱物/良 好/黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部は縦位のヘラ磨き。	
10	土師器 甌	床面の直上	ほぼ完形	口径22.4 器高28.2 底径9.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい橙	内面胴部に輪積み痕がかすかに残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
11	土師器 小型甕	床面の直上	口縁部1/2欠損	口径12.3 器高16.0 底径6.8 胴部の最大径15.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、胴部は器面剥離のため単位などは不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
12	土師器 甕	床面から 14cm上	口縁部～胴部 上位片	口径18.1	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
13	土師器 甕	床面から 7cm上	口縁部～胴部 下位	口径19.9	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土・焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
14	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 下位	口径18.4 胴部の最大径17.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
15	土師器 甕	床面から 6cm上	口縁部～胴部 下位片	口径21.0 胴部の最大径19.5	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デか、器面磨滅のため単位不明。	
16	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位	底径5.0	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 橙	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	

31号竪穴住居(第75・76図 PL.59)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土・焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径12.9 器高4.4 稜径9.8	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面から 4cm上	4/5	口径13.2 器高4.6 稜径10.7	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面は口縁部から底部が横ナデ、底部はナデ。	
3	土師器 杯	床面から 6cm下	口縁部1/5欠損	口径13.4 器高4.6 稜径11.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	床面の直上	一部欠損	口径13.7 器高4.8 稜径10.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は全面ヘラ磨き。	
5	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径13.5 器高4.7 稜径11.0	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径13.5 器高4.9	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明黄 褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
7	土師器 杯	床面の直上	4/5	口径13.7 器高4.7 稜径10.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は磨きか、器面磨滅のため単位 不明。	
8	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径13.0	細砂粒・結晶片岩・有 色鉱物/良好/褐灰	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
9	土師器 杯	床面から 5cm下	完形	口径13.6 器高5.1 稜径13.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明黄 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、下半から底 部は手持ちヘラ削り。内面底部にヘラナデ。	
10	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径15.1 器高6.4 稜径13.8	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
11	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径15.3 器高6.0 稜径13.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
12	土師器 鉢	床面の直上	体部・底部一 部欠損	口径11.8 器高12.4 底径6.1	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 褐灰	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面は底部から体部にヘラナデ。	
13	土師器 鉢	床面の直上	4/5	口径14.6 器高11.2 底径6.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半か ら底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラ ナデ。	
14	土師器 鉢	床面の直上	2/3	口径18.7 器高11.7 底径8.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面は底部から体部にヘラナデか、器面磨滅のため単位 不明。	
15	土師器 有孔鉢	床面の直上	完形	口径16.1 器高14.6 底径7.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部に木葉痕が残 る。内面は底部から胴部にヘラナデ。	底部孔径2.3 ×2.0cmの楕 円形。
16	須恵器 杯蓋	床面から 4cm下	1/2	口径14.4 器高4.7	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/酸化焰/赤 褐	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。	
17	土師器 甌	貯蔵穴 底面から 27cm上	胴部一部欠損	口径23.4 器高29.9 底径9.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。内面は2段のヘラ磨き。	
18	土師器 小型甕	貯蔵穴 底面から 26cm上	胴部・底部一 部欠損	口径12.2 器高14.6 底径5.7 胴部の最大径6.9	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・長石/良好/ にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
19	須恵器 椀	埋土	1/3	口径12.8 器高4.2 底径6.1	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り、器面磨 滅のため不鮮明。	混入か。

32号竪穴住居(第77図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土・焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯身	埋土	底部～稜片	稜径16.0	細砂粒・長石/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部から体部下位は回転ヘ ラ削り。	6世紀後半
2	土師器 小型壺	床面の直上	口縁部大部分 欠損	口径3.3 器高5.1 底径4.6 胴部の最大径6.9	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、頸部下にナデ部分が残る、 胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がナデ。	

33号竪穴住居(第78図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土・焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	1/5	口径10.6 稜径8.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、口唇部は器面磨滅 のため単位不明。	6世紀中頃 か。
2	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.3 稜径11.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
3	土師器 杯	床面から 4cm上	口縁部一部欠 損	口径12.3 器高5.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。 内面底部はへらナデ。	
4	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径14.0 稜径14.3	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、 器面磨滅のため単位不明。	
5	土師器 甕	床面から 4cm上	頸部～胴部上 半片		細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部 はへらナデ。	

34号竪穴住居(第82図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 5cm上	1/2	口径10.8 稜径9.3	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。 内面底部はへらナデ。	7世紀(7C. III)
2	土師器 杯	埋土	1/3	口径14.8 稜径13.0	細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
3	土師器 杯	床面から 10cm上	口縁部～体部 片	口径14.0 稜径12.8	細砂粒/良好・内外燻/ にぶい赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部 杯。
4	土師器 杯	床面から 4cm上	1/3	口径11.0 器高3.6 稜径10.6	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、 稜下にナデ部分が残る。	
5	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径15.0 稜径14.7	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
6	土師器 杯	埋土	1/2	口径8.4 器高2.8	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。内 面底部はへらナデ。	
7	土師器 杯	埋土	1/4	口径9.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。口 縁部下にナデ部分が残る。	
8	土師器 杯	床面から 7cm上	ほぼ完形	口径9.9 器高3.2 口縁部の最大径10.4	細砂粒/良好/橙	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部か ら底部は手持ちへら削り。	
9	土師器 杯	埋土	1/2	口径10.0 器高2.9 口縁部の最大径10.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
10	土師器 杯	床面の直上	完形	口径10.0 器高3.4 口縁部の最大径10.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
11	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径10.4 器高3.1 口縁部の最大径10.7	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち へら削り。	
12	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径10.4 器高3.1 口縁部の最大径10.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	外面体部に 粘土粒付着。
13	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 37cm上	1/3	口径11.0 器高3.1	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部は上半が横ナデ、下半がナデ、体部から底部は 手持ちへら削り。	
14	土師器 杯	床面から 10cm下	1/5	口径11.0 口縁部の最大径11.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
15	土師器 杯	床面から 10cm下	1/3	口径12.4 器高4.4 口縁部の最大径12.8	細砂粒・褐粒/良好に ぶい黄/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
16	土師器 杯	床面から 14cm上	1/4	口径13.0	細砂粒・結晶片岩・長 石・褐粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、口縁部はナデ、体部から底部は手持 ちへら削り。	
17	土師器 椀	埋土	口縁部～体部 片	口径10.4 器高3.1 口縁部の最大径10.9	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部上位から中位はナ デ、下位はへら削り。内面体部はへらナデ。	
18	須恵器 杯蓋	床面から 6cm下	1/3	口径10.4 器高3.1 口縁部の最大径10.10	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は手持ちへら削り。	
19	須恵器 杯蓋	埋土	口縁部～天井 部片	口径13.0	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。天井部は回転へら削り。	
20	須恵器 鉢	埋土	底部～体部下 位片	底径6.2	細砂粒・長石/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部と周囲は手持ちへら 削り。	
21	土師器 短頸壺	床面から 7cm上	口縁部～胴部 上半片	口径9.2 胴部の最大径11.2	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部 はへらナデか。内外面とも器面磨滅のため単位不明。	
22	須恵器 瓶	貯蔵穴 底面から 40cm上	頸部～胴部上 位片		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。胴部はカキ目。内面は胴部 にアテ具痕がかすかに、頸部下に指頭痕が残る、	
23	土師器 甕	床面から 4cm上	口縁部～胴部 上位片	口径21.8	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナ デ。	
24	土師器 甕か	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径24.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部 はへらナデ。	
25	須恵器 甕	床面から 10cm上	口縁部片	口径16.6	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	

34号竪穴住居(第82図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
26	石器 敲石	床面の直上 (カマド)	黒色結晶片岩	長さ17.2 幅7.6 厚さ3.3 重さ674.8	扁平礫	上端小口部に敲打痕、敲打に伴う衝撃剝離痕。	

35号竪穴住居(第84図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	1/4	口径9.9 稜径9.6	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	7世紀(7C. III)
2	土師器 杯	床面から 5cm上	口縁部～体部 片	口径10.9	細砂粒/良好/褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち へら削り。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
3	土師器 杯	埋土	1/4	口径11.8 器高2.7	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内外面とも器面磨滅のため不鮮明。	
4	須恵器 甕	床面から 4cm上	頸部～胴部上 位片		細砂粒/還元焰/灰白	口縁部はロクロ整形。胴部から頸部は平行叩き、頸部はナデ消されている。内面胴部は同心円状アテ具痕が残るが、大半はナデ消されている。	

37号竪穴住居(第87図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径13.0 稜径13.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀中葉
2	土師器 杯	埋土	口縁部1/4欠損	口径12.2 器高4.3 稜径12.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 鉢	埋土	1/3	口径12.6 器高7.2 口縁部の最大径13.0	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
4	須恵器 杯身	埋土	口縁部～底部 片	口径12.8 稜径14.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
5	須恵器 杯身	埋土	口縁部～底部 片	稜径13.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
6	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径7.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/暗赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

38号竪穴住居(第89・90図 PL.60・61)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	3/4	口径11.0 器高3.9 底径6.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/褐灰	口縁部横ナデ、体部はナデ、底部は木葉痕が残る。内面は底部がヘラナデ。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面の直上	口縁部1/4欠損	口径13.6 器高4.7 稜径12.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
3	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径14.1 器高4.5 底径10.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい赤褐	内面黒色処理。外面は器面磨滅のため整形不明。内面は全面ヘラ磨き。	
4	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 48cm上	口縁部一部欠 損	口径16.0 器高5.0 底径11.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明黄褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	混入か？。 遺物は8世 紀前半。
5	土師器 高坏	埋土	脚部	脚部径11.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。内面は脚部上半がナデ、下半がヘラナデ、裾部は横ナデ。	
6	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 片	口径31.6	細砂粒/良好/橙	外面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部はナデ。内面体部はヘラナデ、器面磨滅のため単位不明。	
7	須恵器 杯蓋	カマド 使用面の直 上	3/5	口径13.8 器高5.2	細砂粒・有色鉱物・軽 石/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。天井部中ほどまでは回転ヘラ削り。	内面口唇部 に凹線が1条 巡る。
8	須恵器 杯蓋	埋土	天井部		細砂粒・粗砂粒/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。天井部は回転ヘラ削り。	
9	須恵器 杯身	埋土	口縁部～底部 片	口径12.6 稜径14.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
10	土師器 甕	床面の直上	ほぼ完形	口径26.9 器高27.4 底径8.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
11	土師器 小型甕	カマド 使用面の直 上	口縁部～胴部 上位片	口径12.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
12	土師器 甕	掘方から 20cm上	口縁部1/2欠損	口径16.2 器高32.9 底径5.6 胴部の最大径16.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄橙	内面胴部上位に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部は木葉痕が残る。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
13	土師器 甕	カマド 使用面の直 上	一部を僅かに 欠損	口径17.3 器高34.9 底径5.6 胴部の最大径16.9	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 有色鉱物・結晶片岩/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部は器面磨滅のため不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
14	土師器 甕	床面の直上	口縁部・胴部 一部欠	口径17.7 器高31.6 底径6.5 胴部の最大径18.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部もヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
15	土師器 甕	床面から 9cm下	口縁部～胴部 上半片	口径18.4 胴部の最大径17.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	内面胴部中位に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
16	土師器 甕	貯蔵穴縁 底面から 49cm上	口縁部～胴部 上位	口径17.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
17	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 48cm上	口縁部～胴部 上位	口径17.9	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 橙	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
18	土師器 甕	床面から 9cm上	口縁部～胴部 下位	口径18.7 胴部の最大径32.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後上位にナデ。内面胴部はヘラナデ。	
19	土師器 甕	床面から 14cm上	口縁部～胴部 上位片	口径20.8	細砂粒・褐粒/やや軟 質/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、器面磨滅のため単位不鮮明。内面胴部はヘラナデ。	
20	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径7.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

39号竪穴住居(第92図 PL.61)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部片	口径12.0 稜径11.4	細砂粒・粗砂粒・長石/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	7世紀前半
2	土師器 杯	埋土	口縁部～底部片	口径12.4 稜径11.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 鉢	埋土	口縁部～胴部上位片	口径 15.8	細砂粒・粗砂粒・結晶片岩・有色鉱物/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
4	土師器 甕	床面から6cm上	3/4	口径20.5 器高39.7 底径7.6 胴部の最大径17.2	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部は木葉痕が残る。内面は底部から胴部、頸部にかけてヘラナデ。	

40号竪穴住居(第93図 PL.61)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 小型甕	カマドか？ 床面から11cm上	口縁部大部分欠損	口径14.7 器高14.8 底径8.6 胴部の最大径15.8	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	7世紀代か。
2	土師器 甕	床面の直上	胴部下位片	底径9.4	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

41号竪穴住居(第97・98図 PL.62・63)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径12.4 器高5.3 底径6.3 稜径11.9	細砂粒・礫・結晶片岩/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)が上半がナデ、下半と底部は手持ちヘラ削り。	6世紀後半新
2	土師器 杯	埋土	4/5	口径12.8 器高5.2 稜径12.5	細砂粒・有色鉱物/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不鮮明。	
3	土師器 杯	床面から9cm上	2/3	口径13.2 器高4.8 稜径12.3	細砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面は口唇部以外をヘラ磨き。	
4	土師器 杯	床面の直上	口唇部1/2欠損	口径14.1 器高5.1 稜径13.0	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は口唇部以外をヘラ磨き。	
5	土師器 杯	床面から7cm上	口縁部を僅かに欠損	口径14.2 器高4.5 稜径14.7	細砂粒・褐粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 鉢	カマド 使用面から9cm上	2/5	口径17.8 器高10.6 底径7.0	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り後ナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
7	須恵器 杯蓋	床面から7cm上	4/5	口径13.6 器高5.0	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	内面口唇端部に凹線が1条巡る。
8	土師器 甕	床面の直上	2/3	口径23.6 器高30.5 底径9.6	細砂粒・粗砂粒・小礫・結晶片岩・長石/良好/黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。内面胴部は縦位のヘラ磨き、胴部下半は器面磨滅のため単位不明。	
9	土師器 甕	床面から5cm上	ほぼ完形	口径14.0 器高28.2 底径7.3 胴部の最大径17.8	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩・長石/良好/黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
10	土師器 甕	床面から6cm上	口縁部～胴部下位	口径17.2 胴部の最大径17.6	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩・長石/良好/黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
11	土師器 甕	カマド 使用面から5cm上	3/4	口径18.9 器高35.2 底径5.3 胴部の最大径17.3	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
12	土師器 甕	貯蔵穴 底面から17cm上	口縁部～胴部上位	口径18.2	細砂粒・粗砂粒・小礫・結晶片岩・有色鉱物/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
13	土師器 甕	カマド 使用面から6cm上	底部～胴部下位	底径5.3 胴部の最大径20.9	細砂粒・粗砂粒・小礫・結晶片岩/良好/にぶい黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り、胴部下位は器面磨滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
14	土師器 甕	床面の直上	ほぼ完形	口径16.2 器高29.5 底径8.3 胴部の最大径23.4	細砂粒・粗砂粒・有色鉱物・結晶片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
15	土師器 甕	床面の直上	3/4	口径23.0 器高31.7 底径5.7 胴部の最大径30.4	細砂粒・粗砂粒・小礫・結晶片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、頸部下と胴部下位は器面磨滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
16	土師器 甕	床面の直上	4/5	口径23.2 器高38.3 底径7.4 胴部の最大径31.4	細砂粒・粗砂粒・小礫・結晶片岩・有色鉱物・長石/良好/にぶい橙	内外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り後胴部上半はナデ。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

41号竪穴住居(第98図 PL.63)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
17	石製品 紡錘車	掘方から18cm上	滑石	径(4.3) 高さ1.9 軸孔穴0.5 重さ23.0	台形状	軸孔径は上端側で推定径7mm、下端側は5mm程度か。孔内面には縦位の線条痕が目立つ。上面側軸孔周辺が浅く窪む。	

遺物観察表

42号竪穴住居(第100図 PL.63)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 8cm上	1/2	口径13.5 稜径10.8	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。 内面は底部から体部は放射状、口縁部は横位のへら磨 き。	6世紀後半 混入遺物
2	土師器 杯	床面から 11cm上	口縁部～底部 片	口径13.5 稜径11.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。 内面はへら磨き、口縁部は器面磨滅のため不明。	
3	土師器 杯	床面から 7cm上	口縁部～体部 片	口径17.7 稜径14.2	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
4	土師器 杯	床面から 11cm上	3/4	口径12.4 器高3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち へら削り。	
5	土師器 杯	床面から 13cm上	完形	口径12.6 器高3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち へら削り。	
6	須恵器 甕	床面から 4cm上	胴部片		細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰白	胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が 残る。	
7	須恵器 甕	床面の直上	胴部片		細砂粒/還元焰/褐灰	胴部は外面に格子目状叩き痕、内面に同心円状アテ具 痕が残る。	
8	須恵器 甕	埋土	胴部片		細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰白	胴部は外面に平行叩き痕が残る、内面はナデ。	

43号竪穴住居(第102図 PL.63)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径13.1 稜径10.8	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/良好/にぶい黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、 器面磨滅のため単位不明。	1～3は7 世紀末。
2	須恵器 椀	床面の直上	1/3	口径13.8 器高5.6 底径6.0	細砂粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	混入か。
3	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径13.8 器高5.0 底径6.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
4	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上半片	口径23.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部 はへらナデ。	10世紀前半
5	須恵器 椀	床面の直上	1/3	口径11.4 器高4.3 底径6.4 高台径6.0	細砂粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
6	須恵器 羽釜	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径20.6 罎径24.0	細砂粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形、回転右回りか。罎は貼付。	
7	須恵器 羽釜	床面から 4cm上	口縁部～胴部 上半片	口径20.6 罎径26.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・長石/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。罎は貼付。	
8	須恵器 羽釜	床面の直上 掘方の直上	口縁部～胴部 中位片	口径20.8 罎径25.4	細砂粒・結晶片岩/酸 化焰/にぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。ロクロ整形、回転右回 りか、罎は貼付。	
9	須恵器 羽釜	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径21.0 罎径24.0	細砂粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。罎は貼付。	
10	須恵器 羽釜	床面の直上	口縁部～胴部 上半片	口径19.4 罎径24.2	細砂粒・長石/酸化焰/ 浅黄橙	外面胴部に輪積み痕が残る。ロクロ整形、回転右回 りか、罎は貼付。	
11	須恵器 羽釜	床面から 10cm上	底部～胴部下 位片	底径6.8	細砂粒/良好/灰黄褐	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナ デ。	

43号竪穴住居(第102図 PL.63)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
12	鉄滓	埋土		長さ6.3 幅4.5 厚さ1.7 重さ63.2		

44号竪穴住居(第104・105図 PL.63・64)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径10.8 底径7.0	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	9世紀(9C. III)
2	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径11.8 底径8.6	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
3	土師器 杯	貯蔵穴縁 床面の直上	口縁部1/4欠損	口径12.0 器高3.2 底径9.5	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち へら削り。	
4	須恵器 杯蓋	埋土	口縁部～天井 部片	口径10.8	細砂粒/還元焰・黒班/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転へ ら削り。	7世紀後半か 8世紀初頭 混入か。
5	須恵器 杯	床面から 9cm上	完形	口径11.5 器高3.9 底径6.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
6	須恵器 杯	埋土	1/4	口径11.6 器高3.8 底径6.0	細砂粒・褐粒/酸化焰/ 灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後周囲を ナデ。	
7	須恵器 杯	貯蔵穴 底面から 9cm上	4/5	口径12.7 器高3.8 底径6.5	細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
8	須恵器 杯	床面から 6cm上	1/4	口径12.8 器高4.0 底径6.2	細砂粒・結晶片岩・褐 粒/酸化焰/にぶい黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
9	須恵器 杯	床面から 12cm上	3/5	口径12.8 器高3.9 底径6.4	細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
10	須恵器 椀	床面の直上	完形	口径11.3 器高4.5 底径5.3	細砂粒・礫・結晶片岩 /還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
11	須恵器 碗	床面の直上	4/5	口径12.4 器高3.8 底径6.4	細砂粒・長石/還元焰 燻/黒	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
12	須恵器 碗	貯蔵穴 底面から 7cm上	完形	口径12.3 器高4.3 底径5.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
13	須恵器 碗	埋土	底部～体部	底径5.4	細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
14	須恵器 碗	埋土	底部～体部	底径5.8	細砂粒/酸化焰/にぶい 黄褐	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転糸切り無調整。	
15	須恵器 碗	埋土	底部～体部	底径6.1	細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
16	須恵器 碗	床面から 13cm上	底部～体部	底径6.7	細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
17	須恵器 碗	床面から 16cm上	底部～体部片	底径7.4 高台径7.0	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
18	須恵器 碗	床面から 11cm上	底部～体部	底径7.6 高台径7.2	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
19	須恵器 長頸壺	床面の直上	口縁部～頸部	口径8.2	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部とは頸部にて接合。	内外面に降 灰が付着。
20	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径12.7	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
21	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径14.8	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
22	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径16.9	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
23	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上半片	口径18.8 胴部の最大径19.0	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
24	須恵器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上半片	口径35.0	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	胴部上位から口縁部はロクロ整形。胴部は外面に平行 叩き痕、内面に同心円状アテ具痕が残る。	

44号竪穴住居(第105図 PL.64)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
25	鉄器 刀子	床面から 13cm上	両端を欠損	長さ(6.5) 幅1.3 厚さ0.3 重さ(7.1)	歪を称している。錆化が進んでいる。	

45号竪穴住居(第108図 PL.64)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 12cm上	5/6	口径11.5 器高3.5 稜径10.8	細砂粒・粗砂粒・褐粒/ 良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀
2	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 10cm上	口縁部1/6欠損	口径12.8 器高3.7 稜径11.7	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	須恵器 杯	埋土	1/3	口径13.2 器高3.7 底径6.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	3～9は9 世紀(9C. IV)を示し混 入か。
4	須恵器 杯	埋土	口縁部片	口径12.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。	
5	須恵器 杯	埋土	底部～体部片	底径5.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	内面底部に 「×」のヘラ 描き。
6	須恵器 碗	埋土	底部～体部下 位	底径6.0 高台径5.0	細砂粒/還元焰・燻/黒 褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
7	須恵器 碗	埋土	底部～体部下 位	底径6.5 高台径5.6	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	
8	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 下位	口径18.6 胴部の最大径21.7	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	9C. I
9	須恵器 甕	床面から 11cm上	口縁部～頸部 片	口径26.6	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰	口縁部はロクロ整形、内面頸部はヘラナデ。	

46号竪穴住居(第113図 PL.65)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	3/5	口径12.4 器高4.5	細砂粒・粗砂粒結晶片 岩・長石/良好/にぶい 黄褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	8世紀(8C. I)
2	土師器 杯	床面から 4cm上	1/2	口径17.2 器高3.3 稜径15.0	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、下半から底 部は手持ちヘラ削り。	8C.前
3	土師器 杯	床面の直上	口縁部～底部 片	口径11.7	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
4	土師器 杯	床面の直上	1/2	口径11.8 器高3.4	細砂粒・有色鉱物/良 好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。内面は体部から口縁部に放射状暗文。	
5	土師器 杯	埋土	2/5	口径12.4	細砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。	8C. II

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
6	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
7	土師器 杯	床面の直上	1/5	口径12.9 稜径12.0	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
8	土師器 杯	床面の直上	口縁部1/5欠損	口径13.5 器高4.7 底径10.1	細砂粒・有色鉱物/や や軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 面は体部から口縁部に斜放射状暗文。	
9	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 片	口径14.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部と底部は手持ちヘラ削り。内面 は底部から体部にヘラナデ。	
10	土師器 鉢	床面の直上	胴部一部欠損	口径17.7 器高14.5 底径8.3	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 黄褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面体部は ヘラナデ。	
11	土師器 鉢	床面から 4cm上	口縁部～体部 片	口径28.5	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面体部は ヘラナデ。	
12	須恵器 杯身	床面から 4cm上	完形	口径9.2 器高4.0 稜径11.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。体部下半から底部は手持ち ヘラ削り。	
13	土師器 甕	床面から 7cm下	口縁部～胴部 上位片	口径17.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
14	須恵器 甕	埋土	口縁部片	口径25.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。	
15	須恵器 甕	床面から 7cm上	胴部片		細砂粒・結晶片岩・長 石/還元焰/褐灰	外面は平行叩き痕、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
16	須恵器 甕	床面の直上	胴部片		細砂粒/還元焰/灰白	外面は格子目状叩き痕が残る、内面は同心円状アテ具 痕の上に平行叩き。	

47号竪穴住居(第115図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径11.8 稜径11.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	6世紀後半
2	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径15.6	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、器面磨 滅のため単位不明。内面は頸部から胴部にヘラナデ。	
3	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径21.7	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

48号竪穴住居(第117・118図 PL.65)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径10.7 稜径10.9	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀後半 (1～19のみ)
2	土師器 杯	埋土	1/4	口径11.3 器高3.5 稜径11.2	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.2 稜径12.3	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不明。	
4	土師器 杯	床面から 13cm上	ほぼ完形	口径12.8 器高4.0	細砂粒/良好/にぶい黄 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
5	土師器 杯	埋土	1/4	口径14.8 稜径11.6	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不明。	
6	土師器 杯	P1 底面から 10cm上	1/3	口径12.8 器高4.9	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器 面磨滅のため単位不明。	
7	土師器 椀	床面から 8cm上	2/5	口径10.2 器高5.4 底径4.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
8	土師器 椀	床面から 12cm上	ほぼ完形	口径11.3 器高4.8 底径5.4	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
9	土師器 椀	床面から 9cm上	1/4	口径11.6 底径3.8	細砂粒・粗砂粒結晶片 岩/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
10	土師器 椀	埋土	1/3	口径10.7 器高6.7 底径4.2	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	歪が大きい。
11	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 上位片	口径13.7 口縁部の最大径14.6	細砂粒/良好/橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部 は手持ちヘラ削り。	
12	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 上位片	口径16.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。	
13	土師器 鉢	埋土	2/3	口径10.9 器高13.3 稜径5.6	粗砂粒・小礫・有色鉱 物・結晶片岩/良好/に ぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部 から胴部にヘラナデ。	
14	須恵器 杯蓋	埋土	天井部片		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は回転ヘラ削り。	
15	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上半	口径17.2 胴部の最大径16.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
16	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上半片	口径18.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
17	土師器 甕	床面から 9cm上	底部～胴部下 位	底径4.8	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	内面胴部に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
18	土師器 甕	P2 底面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径22.6	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	内面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
19	土師器 甕	床面から 27cm上	底部～胴部下 位	底径8.0	細砂粒・褐粒/良好/ にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ、器面磨滅の ため単位不明。	
20	須恵器 椀	埋土	1/3	口径11.3 器高4.2 底径6.5 高台径4.8	細砂粒・有色鉱物/酸 化焰/褐灰	ロクロ整形、回転右回りか。高台は貼付、底部切り離 し技法は不明。	48号竪穴住 居には7C.前 半と10C.前 半が混在。
21	須恵器 椀	埋土	口縁部～体部 片	口径13.6	細砂粒・褐粒/酸化焰/ 浅黄橙	ロクロ整形、回転右回り。	
22	灰釉陶 器 椀	埋土	底部～体部下 位片	底径8.9 高台径8.8	微砂粒・水箨/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナ デ、体部下位に回転ヘラ削り。	大原2号窯式 期。
23	須恵器 羽釜	埋土	口縁部～胴部 中位片	口径20.7 罎径23.2	細砂粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。罎は貼付。	
24	須恵器 羽釜	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径22.0 罎径25.0	細砂粒・褐粒/酸化焰/ 浅黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。罎は貼付。	

48号竪穴住居(第50図 PL.65)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
25	鉄器 刀子	床面から 20cm上	柄端部を欠損	長さ(6.8) 幅1.2 厚さ0.3 重さ(7.5)	錆化が進んでいる。	

50号竪穴住居(第121・122図 PL.65・66)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	底部～口縁部 片	稜径11.0	細砂粒・有色鉱物/良 好・内面燻/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不明。	6世紀中葉
2	土師器 杯	掘方から 4cm下	1/3	口径12.2 器高4.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	床面の直上	1/2	口径12.8 器高4.8	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器 面磨滅のため単位不明。	
4	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径14.0	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り、器面磨滅の ため単位不明。	
5	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 32cm上	ほぼ完形	口径14.3 器高5.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。器 面磨滅のため単位不明。	
6	土師器 杯	床面から 4cm上	口縁部～底部 片	口径14.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器 面磨滅のため単位不明。	
7	土師器 杯	掘方の直上	口縁部～体部 片	口径14.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り、器面磨滅の ため単位不明。	
8	土師器 杯	床面の直上	1/5	口径13.0 器高3.8 口縁部の最大径13.8	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
9	土師器 杯	貯蔵穴 底面から 10cm上	5/6	口径13.6 器高4.7 稜径14.1	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物他/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
10	土師器 杯	床面の直上	1/4	口径16.0 器高3.3 口縁部の最大径16.6	細砂粒・有色鉱物・褐 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
11	土師器 杯	埋土	1/4	口径12.6 稜径12.0	細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
12	土師器 杯	床面から 14cm上	1/2	口径11.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・褐粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半か ら底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
13	土師器 杯	床面から 8cm上	2/3	口径13.7 器高5.3 稜径14.0	細砂粒・褐粒/良好/ にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
14	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径14.8 稜径14.7	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
15	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径15.6 稜径15.9	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
16	土師器 杯	床面の直上	2/3	口径15.6 器高6.5 稜径14.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・長石/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
17	土師器 椀	床面から 19cm上	口縁部～体部 片	口径15.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面体部は ヘラナデ。	
18	土師器 有孔鉢	床面から 4cm上	口縁部・胴部 一部欠	口径18.4 器高13.4 底径4.4 孔径1.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 浅黄橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り、底部は木葉痕が残 る。内面は底部から体部にヘラナデ。	
19	土師器 壺	床面から 9cm上	底部～胴部下 半1/4欠	口径16.3 器高15.0 底径6.0 胴部の最大径15.2	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
20	土師器 甌	床面から 6cm上	4/5	口径23.7 器高31.7 底径9.0	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
21	土師器 小型甕	床面から 9cm上	口縁部～胴部 上位片	口径13.0	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩・長石/良好/ 橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ。	
22	土師器 小型甕	床面から 9cm上	底部～胴部下 位片	底径8.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
23	土師器 甕	床面から 6cm上	口縁部～胴部 上半片	口径17.4 胴部の最大径17.1	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
24	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 21cm上 床面から 5cm上	口縁部～胴部 下位	口径18.1 胴部の最大径19.7	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
25	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径17.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/黄褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
26	土師器 甕	床面から 18cm上	口縁部～胴部 上位片	口径18.6	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩・長石/良好/ 橙	内外面に輪積み痕が残る。口縁部は上半が横ナデ、下半はナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
27	土師器 甕	貯蔵穴 底面から 21cm上	底部～胴部下 位片	底径7.4	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 有色鉱物・結晶片岩/ 良好/にぶい黄橙	底部と胴部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	

50号竪穴住居(第122図 PL.65)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
28	石器 敲石	埋土	変玄武岩	長さ11.2 幅8.3 厚さ5.7 重さ862.1	楕円礫	上端小口部に敲打・摩耗痕。背面側・右側面に線条痕を伴う研磨痕。	

50号竪穴住居(第122図 PL.65)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
29	鉄器 刀子	掘方から 9cm上	両端を欠損	長さ(5.0) 幅1.3 厚さ0.3 重さ(7.9)	裏面に鏝留めと木質部が残る。	

51号竪穴住居(第124図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	埋土	口縁部～底部 片	口径10.8 器高4.5 底径6.0	細砂粒・有色鉱物/還元 焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へら削りか。	10世紀(10C. I)
2	灰釉陶 器 椀	床面から 4cm上	底部～体部片	底径8.0 高台径7.0	微砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。施釉方法は漬け掛けか。	大原2号窯式期。
3	須恵器 羽釜	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径22.0 罎径25.0	細砂粒・結晶片岩/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。罎は貼付。	

52号竪穴住居(第127図 PL.67)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 鉢	床面の直上	口縁部～体部 片	口径15.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちへら削り。内面体部はへらナデか。内外面とも器面磨滅のため不鮮明。	7世紀前半か。
2	土師器 短頸壺	床面から 10cm上	底部～頸部片	頸径10.8 胴部の最大径12.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/明黄褐	内外面黒色処理。頸部は横ナデ、胴部はナデ、底部は手持ちへら削り。内面は器面磨滅のため不明。	
3	土師器 短頸壺	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径15.0 胴部の最大径16.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ 明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
4	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径20.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。器面磨滅のため不鮮明。	

54号竪穴住居(第128図 PL.68)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 高坏	床面の直上	脚部上位		細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/明赤褐	杯身内面は黒色処理。脚部はへら削り、器面磨滅のため単位不明。	6世紀後半か。
2	土師器 甕	床面から 5cm下	底部～胴部下 位片	底径9.2	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	底部に径5～8mmの小孔が穿孔されている。底部と胴部はへら削りか、器面磨滅のため単位不明。内面は底部から胴部にへらナデ。	
3	土師器 甕	床面から 9cm下	口縁部～胴部 下位片	口径21.4	粗砂粒・小礫・結晶片 岩/良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
4	土師器 甕	床面から 8cm下	底部	底径8.0	細砂粒・粗砂粒・長石 /良好/にぶい黄橙	底部に刺突痕が残る。内面はへらナデか、器面磨滅のため単位不明。	
5	須恵器 甕	床面から 10cm上	胴部片		細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰オリープ	胴部は外面の叩き痕をナデ消している。内面は同心円状アテ具痕が残る。	

55号竪穴住居(第108・109図 PL.64)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 12cm上	1/5	口径13.8 稜径14.0	細砂粒・褐粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	6世紀中葉
2	土師器 杯	埋土	1/4	口径12.2 底径7.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り、器面磨滅のため単位不明。	
3	須恵器 杯蓋	埋土	天井部片		細砂粒・有色鉱物/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は中ほどまで回転へら削り。	
4	須恵器 瓶	埋土	頸部～胴部上 位片	頸径9.9	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部外面はナデ。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
5	土師器 小型甕	床面から 6cm上	口縁部～胴部 下位片	口径11.9 胴部の最大径11.5	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、内面胴部はヘラ ナデか、内外面とも器面磨滅のため不鮮明。	
6	土師器 甕	床面の直上	4/5	口径20.4 器高32.3 底径4.0 胴部の最大径18.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナ デ、中位から上位は器面磨滅のため単位不明。	
7	土師器 甕	床面の直上	頸部～底部	底径5.0 胴部の最大径15.1	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
8	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位片	底径5.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	底部と胴部はヘラ削りか、器面剥離のため単位不明。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
9	土師器 甕	床面の直上	底部～胴部下 位片	底径6.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	

57号竪穴住居(第109図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	埋土	2/5	口径11.6 底径10.0	細砂粒・有色鉱物/選 元煖/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	6世紀後半
2	土師器 甕	埋土	口縁部～胴部 上位片	口径13.8	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
3	土師器 甕	床面から 9cm上	口縁部～胴部 上位片	口径13.8	細砂粒/良好/橙	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
4	須恵器 甕	床面の直上	胴部片		細砂粒・有色鉱物/選 元煖/灰	胴部は外面に平行叩き痕がかすかに、内面は無文アテ 具痕が残る。	

59号竪穴住居(第131図 PL.68)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径10.2 稜径9.5	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 器面磨滅のため単位不明。	6世紀後半～ 7世紀前半 遺物混在。
2	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径11.9 稜径13.2	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面小孔状の剥離が多く単位不明。	内外面とも 漆塗り。
3	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径11.9 稜径10.9	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径12.8 稜径10.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 器面磨滅のため単位不明。	
5	土師器 高坏	床面から 18cm上	4/5	口径12.2 器高7.6 脚部径8.7	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄橙	杯身口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後ナデ、脚部 はヘラ削り、裾部は横ナデ。	
6	土師器 脚付鉢	床面から 13cm上	3/4	口径12.4 器高12.4 脚部径10.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	脚部は貼付か。口縁部は横ナデ、体部から脚部は手持 ちヘラ削り、裾部は横ナデ。内面は底部から体部と脚 部はヘラナデ。	
7	土師器 甕	カマド 使用面の直 上	口縁部・胴部 一部欠	口径19.8 器高37.4 底径5.3 胴部の最大径16.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部 から胴部にヘラナデ。	
8	土師器 甕	カマド堀方	口縁部～胴部 中位	口径18.7 胴部の最大径16.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
9	土師器 甕	カマド 使用面から 10cm上	口縁部～胴部 上半片	口径19.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	

60号竪穴住居(第109図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	1/3	口径10.4 器高3.1 稜径9.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀後半
2	土師器 杯	埋土	1/3	口径13.2 器高4.1 稜径14.2	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径9.0	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/明黄褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	
4	土師器 甕	埋土	底部片	底径11.8	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デか、器面磨滅のため単位不明。	

61号竪穴住居(第133図 PL.68)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	埋土	口縁部～底部 片	口径13.6 稜径11.1	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)上位はナデ、中位から底部 は手持ちヘラ削り。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面の直上	1/2	口径13.0 器高3.9 稜径10.0	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい黄褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、一部器面磨滅のため 不明。	
3	土師器 杯	床面の直上	1/3	口径14.4 稜径13.0	細砂粒・有色鉱物・長 石/良好/浅黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不明。	
4	土師器 杯	床面の直上	口縁部～底部 片	口径13.6 稜径11.0	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
5	土師器 高坏	床面の直上	口縁部一部欠 損	口径13.8 器高4.6 稜径11.3	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は底部ヘラナデ、体部から口縁 部はヘラ磨き、口縁部上半は器面磨滅のため単位不明。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
6	土師器 杯	床面の直上	3/4	口径14.0 器高5.2 稜径11.5	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄褐	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は底部から体部に花卉状、口縁 部に横位のヘラ磨き。	
7	土師器 杯	床面の直上	2/3	口径14.4 器高4.7 稜径11.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は底部が放射状、口縁部が横位 のヘラ磨き。	
8	土師器 高坏	床面の直上	脚部	脚部径10.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	内面は裾部を除き黒色処理。杯身部ホゾ状差し込みで 脚部に接合、脚部はヘラ削り、裾部は横ナデ。内面脚 部はヘラナデ。	
9	須恵器 横瓶	床面の直上	胴部片		細砂粒/還元焰/灰	胴部は外面が平行叩き後間隔をあけて線状のナデ、内 面は同心円状アテ具痕が残る。	
10	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径12.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	口唇端部に 平坦面をつ くる。
11	土師器 甕	掘方から 10cm上	口縁部～胴部 上位片	口径16.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
12	土師器 甕	床面から 22cm上	口縁部～胴部 上位片	口径23.9	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
13	土師器 甕	掘方から 10cm上	頸部～胴部片	頸径13.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 明赤褐	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
14	土師器 甕	床面から 6cm上	底部～胴部下 位片	底径7.5	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	

62号竪穴住居(第135図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 鉢	床面から 11cm上	口縁部～体部 上位片	口径17.6	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部は横ナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面体部は ヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。	7世紀前半 か。
2	須恵器 瓶	埋土	胴部下位片		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転方向不明。外面はカキ目。	

63号竪穴住居(第123図 PL.66)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 4cm上	3/4	口径12.8 器高4.8 稜径11.3	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面磨滅のため単位不鮮明。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面から 4cm上	4/5	口径13.0 器高4.9 稜径10.6	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、口縁部は器面磨滅 のため単位不明。	
3	土師器 杯	床面から 10cm上	1/4	口径13.0 器高5.2 稜径10.7	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、口縁部は器面磨滅 のため単位不明。	
4	土師器 杯	床面から 7cm上	ほぼ完形	口径13.1 器高4.6 稜径10.8	細砂粒・有色鉱物/良 好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
5	土師器 杯	床面から 10cm上	1/4	口径13.3 稜径12.7	細砂粒/良好/灰黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 杯	貯蔵穴 底面の直上	完形	口径13.4 器高5.3 稜径13.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
7	土師器 杯	床面から 4cm上	ほぼ完形	口径13.5 器高4.7 稜径11.0	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面は底部から体部に不規則な、口縁部は横位のヘラ 磨き、一部器面磨滅のため単位不鮮明。	内面は黒色 処理、二次 被熱のため 酸化。
8	土師器 杯	床面から 4cm上	完形	口径13.6 器高4.5 稜径10.7	細砂粒・有色鉱物/良 好/にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
9	土師器 杯	床面から 4cm上	ほぼ完形	口径14.7 器高4.8 稜径12.6	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面は底部から体部に不規則な斜格 子状、口縁部は横位のヘラ磨き、口縁部は器面磨滅の ため単位不明。	
10	土師器 鉢	埋土	ほぼ完形	口径14.9 器高7.9 底径6.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄褐	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持 ちヘラ削り。内面はヘラナデ後横位のヘラ磨き、単位 不鮮明。	
11	土師器 鉢	埋土	口縁部～体部 片	口径20.5	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口唇部は横ナデ、口縁部 はナデ、体部は手持ちヘラ削り。内面は体部にヘラナデ。	
12	土師器 有孔鉢	埋土	底部	底径5.0 孔径2.8	細砂粒・褐粒/良好/に ぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	
13	須恵器 杯蓋	埋土	天井部片		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は中ほどまで回転 ヘラ削り。	
14	須恵器 杯蓋	埋土	天井部片		細砂粒・粗砂粒・長石 /還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。天井部は回転ヘラ削り。	
15	須恵器 杯身	床面から 8cm上	ほぼ完形	口径12.5 器高5.8 稜径14.8	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・有色鉱物/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転ヘラ削り。	
16	須恵器 杯身	床面から 4cm上	3/4	口径12.8 器高5.3 稜径14.5	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・有色鉱物・ 長石/還元焰/灰	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転ヘラ削り。内面 底部はナデ。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
17	土師器 甕	床面から 11cm上	胴部一部欠損	口径14.4 器高20.6 底径8.2 胴部の最大径16.8	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 有色鉱物・結晶片岩/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
18	須恵器 甕	埋土	胴部片		細砂粒/還元焰・黒灰/ 灰	胴部は外面が平行叩き後ヘラ削りか。内面はアテ具痕をナデ消している。	
19	手捏ね 土器 杯形	埋土	1/4	口径7.1 器高2.8	細砂粒・結晶片岩/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部はナデ。内面は底部から口縁部にナデ。	

64号竪穴住居(第82図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 4cm下	完形	口径13.2 器高4.2 稜径10.8	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部に2段の放射状ヘラ磨き、体部は横位ヘラ磨き。	6世紀後半
2	土師器 杯	カマド 使用面から 5cm上	1/3	口径13.3 稜径10.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	床面から 8cm下	1/4	口径14.2 稜径11.0	細砂粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	床面の直上	完形	口径13.5 器高4.9 底径10.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り、粗い網代痕が残る。内面は底部から体部に細かいヘラナデ。	
5	須恵器 杯蓋	埋土	天井部～口縁 部片		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
6	須恵器 杯蓋	埋土	天井部～口縁 部片		細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。	
7	土師器 甕	床面の直上	胴部1/4欠損	口径18.8 器高36.2 底径5.9 胴部の最大径18.3	細砂粒・有色鉱物・結 晶片岩/良好/黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
8	土師器 甕	床面から 8cm下	口縁部～胴部 上位片	口径19.0	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物・結晶片岩/良好/ 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

64号竪穴住居(第83図 PL.60)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
9	石器 敲石	床面から 9cm上	黒色結晶片岩	長さ14.7 幅6.2 厚さ3.0 重さ370.6	扁平礫	両側縁に敲打痕、敲打に伴う衝撃剥離痕、下端小口に敲打痕。左側縁はノッチ状に深く窪み、内面は比較的平滑で、意図的に整形されているように見える。	

65号竪穴住居(第125・126・127図 PL.66・67)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面から 4cm上	1/3	口径11.4 器高4.8	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径11.6 器高4.9	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物/良好/橙	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径12.9 器高4.9	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	床面から 4cm上	ほぼ完形	口径12.9 器高4.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
5	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径13.0 器高6.1 稜径12.7	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
6	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径13.2 器高5.8 稜径12.6	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 黄橙	口縁部横ナデ、体部(ごく弱い稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
7	土師器 杯	床面の直上	口縁部1/5欠損	口径13.3 器高5.0	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩・長石/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
8	土師器 杯(杓 使用面から 8cm上)	カマド 使用面から 8cm上	4/5	口径13.9×(12.2) 器高6.1	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
9	土師器 杯	床面の直上	口縁部1/6欠損	口径12.9 器高5.2 稜径12.2	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
10	土師器 杯	カマド 使用面から 10cm上	ほぼ完形	口径12.9 器高5.3 稜径12.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明赤 褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
11	土師器 杯	床面の直上	完形	口径13.2 器高5.5 稜径11.9	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩・有色鉱物/ 良好/橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)上半はナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。内面底部はヘラナデ。	
12	土師器 杯	床面から 5cm下	口縁部1/5欠損	口径13.3 器高4.5 稜径11.3	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・褐粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。	
13	土師器 杯	床面の直上	ほぼ完形	口径13.4 器高4.8 稜径13.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
14	土師器 杯	床面の直上	4/5	口径13.4 器高4.7 稜径12.0	細砂粒・粗砂粒・礫・ 結晶片岩・有色鉱物・ 長石/良好/にぶい黄 橙	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。	

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
15	土師器 杯	床面から 5cm上	2/5	口径13.8 器高4.3 稜径11.0	細砂粒・結晶片岩/良 好/橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面口縁部はヘラ磨き。	
16	土師器 杯	埋土	1/2	口径13.6 器高12.3	細砂粒・有色鉱物/良 好/明黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	内面の一部 に煤が付着。
17	土師器 鉢	床面の直上	1/5	口径24.1 器高11.1 底径11.1	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・褐粒/良好/褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内 外面とも器面磨滅のため不鮮明。	
18	須恵器 壺	床面の直上	口縁部1/2欠損	口径13.0 器高17.1 胴部の最大径19.3	細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転左回りか。内面胴部に輪積み痕が残 る。口縁部上位に1段の波状文が巡る、胴部下位から 底部は手持ちヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
19	土師器 甌	床面の直上	一部欠損	口径26.7 器高29.8 底径9.5	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/にぶい 黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
20	土師器 小型甕	埋土	口縁部～胴部 下位片	口径11.3 胴部の最大径11.8	細砂粒・結晶片岩/良 好/明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。内外面とも器面磨滅のため不鮮明。	
21	土師器 小型甕	床面から 8cm上	3/5	口径13.4 器高17.3 底径6.6 胴部の最大径16.0	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 結晶片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。内外面とも器面磨滅 のため不鮮明。	
22	土師器 小型甕	床面の直上	口縁部1/4欠損	口径13.9 器高13.7 底径6.5	細砂粒・粗砂粒・有色 鉱物結晶片岩/良好/に ぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部は木葉痕が残 る。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
23	土師器 甕	カマド 使用面から 8cm上	完形	口径18.8 器高33.0 底径6.3	細砂流・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/明黄 褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は ヘラ削り、底部は木葉痕が残る。内面は底部から胴部 にヘラナデ。	
24	土師器 甕	カマド 使用面から 4cm上	口縁部～胴部 下位	口径17.4 胴部の最大径17.3	細砂流・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
25	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 上位	口径19.7	粗砂粒・礫・結晶片岩・ 長石/良好/明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
26	土師器 甕	床面の直上	ほぼ完形	口径19.7 器高26.1 底径8.5 胴部の最大径21.3	細砂粒・粗砂粒・小礫・ 有色鉱物・結晶片岩/ 良好/橙	外面胴部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と 底部はヘラ削り後胴部上位はナデ。内面は底部から胴 部にヘラナデ。	

65号竪穴住居(第127図 PL.67)

番号	種類 器種	出土層位(位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
27	鉄器 釘	床面から28cm上 (カマド)	中位片	長さ(5.4) 幅0.4 厚さ0.3 重さ(5.4)	錆化が激しい。	

66号竪穴住居(第137図 PL.68・69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面の直上	3/5	口径13.0 器高4.0 底径6.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	9世紀(9C. IV)
2	須恵器 椀	床面の直上	1/4	口径13.6 器高4.8 底径6.2 高台径5.5	細砂粒・結晶片岩・長 石/酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。	
3	須恵器 椀	床面の直上	1/3	口径14.8 底径7.4	細砂粒・結晶片岩・長 石/酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。高台が貼付されていたが剥 落、底部は回転糸切り。	口縁部に歪 がみられる。
4	土師器 甕	床面から 11cm上	口縁部～胴部 上位片	口径19.8	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
5	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 中位片	口径19.3 胴部の最大径22.0	細砂粒・有色鉱物・褐 粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	コの字状口 縁変形。
6	土師器 甕	床面から 11cm上	口縁部～胴部 中位	口径19.7 胴部の最大径21.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
7	土師器 甕	床面の直上	口縁部～胴部 中位片	口径20.7 胴部の最大径21.8	細砂粒・褐粒/良好/橙	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	9C.
8	土師器 甕	床面から 8cm上	口縁部～胴部 中位	口径20.8 胴部の最大径21.8	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
9	須恵器 羽釜	床面から 25cm上	口縁部～頸部 片	口径21.0 胴部の最大径25.0	細砂粒・有色鉱物/酸 化焰/灰黄褐	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	混入か。

66号竪穴住居(第137図 PL.68)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
10	石器 磨石?	床面から 5cm上	粗粒輝石安山 岩	長さ15.6 幅14.3 厚さ5.2 重さ1716.4	扁平礫	背面側は平坦で、中央付近に敲打痕がある。摩耗面は 不明瞭だが、ランダムに粗い線条痕が見える。	

67号竪穴住居(第109・110図 PL.64)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯	床面の直上	4/5	口径13.0 器高3.6 底径6.3	細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	9世紀(9C. IV)
2	須恵器 杯	床面から 5cm上	底部1/3欠損	口径12.6 器高4.1 底径5.2	細砂粒・粗砂粒・長石・ 結晶片岩/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
3	土師器 台付甕	床面から 5cm上	口縁部～脚部 上位片	口径13.6 胴部の最大径17.4	細砂粒/良好/にぶい赤 褐	外面頸部に輪積み痕が残る。脚部は貼付、口縁部から 頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面 胴部はヘラナデ。	

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
4	土師器 甕	床面から 5cm上	口縁部～胴部 上位片	口径19.8	細砂粒・結晶片岩・長 石/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部 はヘラナデ。	
5	土師器 甕	床面から 5cm上	頸部～底部	底径3.0 胴部の最大径21.9	細砂粒・褐粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	9C.IV 器高は26cm 強。
6	土師器 甕	埋土	底部	底径8.0	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/橙	底部に木葉痕が残る。	混入か。
7	須恵器 甌	床面の直上	口縁部～胴部 上位片	口径31.6	細砂粒/酸化焰/にぶい 黄橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。鏝が貼付されていたが 剥落、口縁部は横ナデ、頸胴部はヘラナデ。内面胴部 はヘラナデ。	
8	須恵器 甕	床面の直上	口縁部片	口径40.5	細砂粒・白色粒/還元 焰/灰白	ロクロ整形、回転右回りか。	

67号竪穴住居(第110図 PL.64)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
9	鉄滓	床面の直上		長さ11.1 幅7.7 厚さ4.5 重さ480.5		

68号竪穴住居(第134図 PL.68)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 杯	床面の直上	2/3	口径11.4 器高4.9	細砂粒・結晶片岩・有 色鉱物/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	6世紀後半
2	土師器 杯	床面の直上	3/4	口径12.6 器高4.6	細砂粒・長石・有色鉱 物/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
3	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径12.6	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
4	土師器 杯	埋土	1/4	口径12.0 器高3.5 稜径10.0	細砂粒・褐粒/良好/橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
5	土師器 杯	埋土	口縁部～体部 片	口径16.2 稜径15.4	細砂粒・結晶片岩/良 好/灰黄褐	口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り、器面磨 滅のため単位不明。	

70号竪穴住居(第47図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	床面から 7cm上	1/4	口径15.2 器高5.2 底径7.4 高台径6.8	細砂粒・結晶片岩/還 元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	10世紀(10C. I)

71号竪穴住居(第138図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 椀	埋土	底部	底径7.1 高台径6.8	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・有色鉱物/還元 焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転糸 切り。	9世紀後半 切り。
2	土師器 小型甕	埋土	底部～胴部下 位片	底径5.4	細砂粒・粗砂粒・結晶 片岩・長石/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	

1号溝(第142図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	瓦 平瓦	埋土	破片	厚さ1.8	にぶい黄	表裏面に砂多く付着。胎土中に礫多く含む。裏面に叩き 目。	中世
2	在地系土 器 片口鉢	埋土	1/8		灰黄褐・にぶい黄 褐	酸化炎であるが、やや硬質に焼きあがる。口縁部は玉縁 状を呈し、断面は三角形状を呈する。口縁端部の横撫で はやや強い。内面の口縁部下は使用により平滑となる。	14世紀前半 ～中頃

4号溝(第144図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	在地系土 器 皿	埋土	口縁部2/3欠	(口径6.5) 器高2.0 底径3.6	オリーブ黒	全体に油が付着したように黒味を帯び、割れ口も黒色を 呈する。体部は外反して立ち上がり、口縁部は内湾気味。 内面から外面に油煙付着。底部左回転糸切無調整。	14世紀中頃 ～後半

4号溝(第144図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
2	銅製品 銭貨	埋土	完形	長さ2.3 幅0.1 厚さ0.6 重さ2.5		「洪武通寶」

5号溝(第145図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	中国白磁 碗	底から13cm 上	口縁一部欠	口径14.1 器高5.7 底径5.1	白	口禿と呼ばれる白磁碗。胎土は精良で白色。口縁部は外 反し、端部は、施釉後の内外面からの削りにより尖る。 底部内面周縁は1重の沈線。高台脇ないし高台外面から 高台内は無釉。高台外面端部は小さく面取りする。不規 則な粗い貫入が入る。口縁部内面の釉が厚い部分と底部 内面の釉には顕著な擦れが認められる。	森田分類A 群 13世紀中頃 ～14世紀前 半

遺物観察表

7号溝(第146図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	常滑陶器 甕	埋土	破片		黄灰・灰黄褐・褐	内面に指頭圧痕状の窪みがある。肩部片か。	中世

7号溝(第146図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
2	馬具 轡	埋土	一部片	長さ(9.7) 幅2.1 厚さ0.5 重さ(22.0)	錆化が進んでいるが、残存状態は良好。	

9号溝(第147図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	常滑陶器 甕	埋土	破片		灰	内面は強い撫で。外面に自然釉かかる。	中世
2	常滑陶器 甕	埋土	破片		灰黄褐・灰白・灰黄	内面に指頭厚痕状の窪みがある。内面は撫で。	中世

1号井戸(15号土坑) (第148図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	在地系土 器か 皿	埋土1・下 層	1/3	(口径8.0)	にぶい黄橙	底部外面は撫でか削りで丸底。内面は底部から口縁部まで丁寧な回転横撫で。丸底であるが、轆轤を使用していると考えられる。胎土は2や3とは明らかに異なる。	13世紀
2	搬入系土 器か 皿	埋土1・下 層	完形	口径8.0～8.4 器高1.3～1.8	浅黄橙	底部外面は凹凸が多く、不定方向の撫で。内面は一方の幅広の撫での後、口縁部を横撫で。器形の歪みは大きい。	13世紀 手づくね。 轆轤使用皿 とは胎土が 異なる。
3	搬入系土 器か 皿	埋土1・下 層	1/2	口径11.6	にぶい橙	底部外面は凹凸が多く、不定方向の撫で。外面の口縁部下に皺状亀裂残る。内面は一方の幅広の撫での後、口縁部を横撫で。器形の歪みは大きい。口縁部は内湾。底部外面の器壁は大きく剥離する。	13世紀 手づくね。 轆轤使用皿 とは胎土が 異なる。

3号井戸(20号土坑) (第149図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯蓋	埋土	1/4	口径13.6 器高3.8	細砂粒・有色鉱物/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は回転ヘラ削り。内面天井部はナデ。	6世紀後半

4号井戸(28号土坑) (第149図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	在地系土 器 片口鉢	埋土・最下 層	1/5	(口径27.0)	灰・にぶい黄橙	断面中央は黄灰色、器表付近はにぶい黄橙色、器表は灰色。内面から口縁部外面は丁寧な横撫で。口縁部は玉縁状をなし、端部は丸みを持つ。体部内面下端は使用により器表が摩滅する。	14世中頃
2	常滑陶器 甕	埋土・最下 層	1/8	(底径14.0)	にぶい黄褐・灰白	外面は篋状工具による縦位撫で。内面は自然釉が斑状にかかる。	中世
3	常滑陶器 甕か	埋土・最下 層	1/8	(底径14.0)	褐・灰白・灰オー プ	外面の器表は褐色。外面は縦方向の撫で。内面は横方向の撫で、内面調整は丁寧。体部内面下端付近以下は自然釉がかかり、それ以上は斑状にかかる。	中世

4号井戸(28号土坑) (第149図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	石材	計測値 (単位cm・重さはg)	形態・素材	製作・使用状態	摘要
4	石器 石鏃	埋土	チャート	長さ(1.5) 幅1.2 厚さ0.4 重さ0.4	有茎鏃	完成状態。石器基部を深く抉り込み、返し部は鋭い。先端部・茎を欠損する。	
5	石器 石鏃	埋土	黒色安山岩	長さ(2.3) 幅1.5 厚さ0.3 重さ0.7	凹基無茎鏃	未製品。加工は周辺部に限られ、長く細い先端部が作出されている。返し部の両端を欠損。	

5号井戸(29号土坑) (第150図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	搬入系土 器か 釜か	埋土・上層	1/7	(口径33.0)	黄灰	断面は黄灰色、器表は灰色。鏝を大きく外反させ、口縁部を上部に貼り付けか。内面の撫ではやや雑。外面の器表は剥離が多い。内面器表の遺存は良いが、鏝より高い位置の内面器表はすべて剥離する。底部は浅く、残存部に脚を挿入したと考えられる穴が1箇所残る。穴周囲の内面には貼り付け時の撫で痕が認められる。	中世か。

12号土坑(第152図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 台付甕	埋土	脚部	脚部径8.6	細砂粒/良好/明赤 褐	脚部は胴部に貼付、脚部は内外面とも横ナデ。	

13号土坑(第152図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	土師器 小型甕	埋土	口縁部～胴 部上位片	口径14.3 胴部の最大径14.2	細砂粒・結晶片岩/ 良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

53号土坑(第154図)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	常滑陶器 甕か壺	埋土	破片		灰オリーブ・灰	肩屈曲部片。外面に自然釉かかる。	中世

72号ピット(第154図 PL.69)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
1	在地系土 器 皿	底から23cm 上	完形	口径8.4 器高1.6 底径5.6	にぶい黄褐	左回転轆轤調整。底部の回転糸切痕は摩滅により不明瞭。	15世紀後半

遺構以外から出土した縄文土器と弥生土器(第155図 PL.70)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	61号竪穴住 居埋土	口縁部破片	粗砂・チャート細礫 ／普通／橙	波状口縁で口縁が内折する。口縁に沿って1条の平行沈線をめぐらし、弧状の平行沈線を充填施文する。地文に無節R1を横位施文。	諸磯b式
2	縄文土器 深鉢	34号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・チャート／普通 ／橙	口縁下の部位で内湾する。斜位、弧状の連点沈線を施す。	諸磯b式
3	縄文土器 深鉢	35号竪穴住 居埋土	胴部破片		2と同一個体。横帯間に連弧状、ワラビ手状のモチーフを配す。	諸磯b式
4	縄文土器 深鉢	64号竪穴住 居埋土	胴部破片		2と同一個体。	諸磯b式
5	縄文土器 深鉢	64号竪穴住 居埋土	胴部破片	細砂・チャート・黒色 粒／普通／にぶい 橙	平行沈線による横帯構成。	諸磯b式
6	縄文土器 深鉢	20号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・黒色粒／良好 ／明赤褐	矢羽根状の沈線を施す。	唐草文系
7	縄文土器 深鉢	7号竪穴住 居埋土	口縁部破片	粗砂・チャート細礫 ／良好／橙	隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯を垂下させ、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
8	縄文土器 深鉢	11号竪穴住 居埋土	口縁部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／普通／に ぶい橙	隆帯をめぐらして口縁部無文帯を区画、隆帯を垂下させ、LRを充填施文する。	加曾利E4式
9	縄文土器 深鉢	13号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／良好／明 赤褐	隆帯による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
10	縄文土器 深鉢	7号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・チャート・結 晶片岩／良好／明赤 褐	間隔の空いた押し引き沈線による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
11	縄文土器 深鉢	調査面	胴部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／良好／赤 褐	隆帯による懸垂文を施し、LRを縦位充填施文する。	加曾利E4式
12	縄文土器 深鉢	13号竪穴住 居埋土	胴部破片		9と同一個体。	加曾利E4式
13	縄文土器 深鉢	7号竪穴住 居埋土	口縁部破片	粗砂・チャート細礫・ 黒色粒・結晶片岩／ 良好／にぶい橙	波状口縁。帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。口縁内面を肥厚させ、波頂部内面に円形刺突を施す。波頂部脇に副突起状の貼付を付す。	称名寺式
14	縄文土器 深鉢	33号竪穴住 居埋土	口縁部破片	粗砂・チャート細礫 ／普通／にぶい橙	波状口縁。帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。口縁内面肥厚。波頂部内面に貼付を付し、円形刺突を施す。	称名寺式
15	縄文土器 深鉢	18号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・チャート・結 晶片岩／良好／明赤 褐	帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
16	縄文土器 深鉢	調査面	胴部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／良好／暗 赤褐	帯状沈線による弧状モチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
17	縄文土器 深鉢	6号竪穴住 居埋土 (カマド)	胴部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／良好／明 赤褐	列点を施した隆帯をめぐらし、隆帯下にLRを充填施文する。	称名寺式
18	縄文土器 深鉢	調査面	胴部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／良好／橙	列点を施した隆帯を垂下させ、LRを縦位充填施文する。	称名寺式
19	縄文土器 深鉢	18号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・チャート・結 晶片岩／良好／橙	列点を施した隆帯を垂下させ、帯状沈線によるモチーフを描き、LRを充填施文する。	称名寺式
20	縄文土器 深鉢	23号竪穴住 居埋土 (ピット4)	胴部破片	粗砂・チャート・黒 色粒・結晶片岩／良 好／橙	横位2条の隆帯をめぐらし、隆帯間に1条の沈線、2条の列点を充填施文する。隆帯下にも同様のモチーフが続くようだ。	称名寺式
21	縄文土器 深鉢	調査面	胴部破片	粗砂・チャート細礫・ 結晶片岩／良好／赤 褐	帯状沈線による弧状モチーフを描き、2条の列点を充填施文する。	称名寺式
22	縄文土器 深鉢	38号竪穴住 居埋土 (カマド)	口縁部破片	細砂・黒色粒／普通 ／にぶい橙	口縁が緩く内湾。口縁下に無節LRを横位施文する。縄文帯を画すのか、わずかに沈線が見られる。	晩期
23	縄文土器 深鉢	23号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・結晶片岩／良 好／明赤褐	横位多段に沈線をめぐらし、沈線間に刺突を充填施文する。	晩期

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	胎土/焼成/色調		成形・整形の特徴	摘要
24	縄文土器 深鉢	68号竪穴住 居埋土	口縁部破片	細砂/普通/にぶい 橙		無文。口唇部に押捺状の刻みを付す。	晩期
25	縄文土器 深鉢	7号竪穴住 居埋土	胴部破片	粗砂・チャート細礫 /普通/にぶい橙		底部際の部位。無文。内外面不規則な擦痕顕著。	晩期
26	弥生土器 深鉢	15号竪穴住 居埋土	口縁部破片	細砂/普通/明赤褐		横位の条痕文を施す。内面ナデ。	中期前半
27	弥生土器 深鉢	15号竪穴住 居埋土	胴部破片			26と同一個体。	中期前半
28	弥生土器 深鉢	15号竪穴住 居埋土	胴部破片			26と同一個体。	中期前半
29	弥生土器 鉢	15号竪穴住 居埋土	胴部破片	細砂/普通/明赤褐		横位、斜位の沈線を施す。内面ナデ。	前期～中期 前半
30	弥生土器 深鉢	15号竪穴住 居埋土	底部破片			26と同一個体。底面に網代痕。	中期前半

遺構外から出土した遺物(第155図 PL.70)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm)	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
31	須恵器 杯蓋	調査面	口縁部～天 井部小片	口径14.3 稜径14.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。天井部は中ほどまで回転へ ら削り。	口唇部に凹 線が1条巡 る。
32	須恵器 杯	調査面	底部～体部 下位	底径8.2	細砂粒・結晶片岩/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へら削り、体部下 位にも1段の回転へら削り。	周囲は円形 に丁寧な打 ち欠き。
33	須恵器 椀	調査面	1/3	口径14.4 底径8.0	細砂粒・粗砂粒・ 結晶片岩・長石/酸 化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。	
34	須恵器 高杯	調査面	杯身部片		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。杯身底部は回転へら削り、 脚部との接合面にへら描き。	
35	須恵器 短頸壺	調査面	口縁部～胴 部片	口径10.6 胴部の最大径13.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
36	須恵器 長頸壺	調査面	底部～体部 下位片	底径9.8 高台径9.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付、底部は回転ナデ。 底部はへらナデ後周囲を回転ナデ、胴部下位にへら削り。	
37	須恵器 羽釜	調査面	口縁部～胴 部上位片	口径20.6 鏝径24.2	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	
38	土師器 杯	埋土	口縁部～体 部片	口径12.8 稜径10.4	細砂粒・褐粒/良好 /にぶい橙	内面黒色処理。口縁部横ナデ、体部(稜下)は手持ちへら 削り。	

遺構外から出土した遺物(第156図 PL.70)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
39	在地系土 器 皿	調査面	1/2	(口径11.0) 器高2.0 (底径6.8)	褐	底部内面周縁は凹線状に窪む。体部はゆるく外反し、口 縁部はゆるく内湾する。口縁端部は外面の横撫でにより 器壁を減じ、尖り気味。底部左回転糸切無調整。	15世紀後半
40	在地系土 器 鉢	調査面	体部下位片		橙	下部の断面中央と内面の器表のみ灰白色、他は橙色。全 体に器表はやや摩滅。内面下部の器表は使用により器表 が摩滅している可能性高い。	中世 41と同一個 体の可能性 がある。
41	在地系土 器 鉢	調査面	1/4	(底径18.0)	にぶい黄褐	全体に器表摩滅。内面体部下位から底部周縁は使用によ る摩滅で窪む。酸化炎焼成で軟質。	中世
42	瓦	調査面	破片	厚さ2.0	オリーブ褐	表裏、特に裏面に砂の付着が多い。	中世
43	在地系土 器 片口鉢	調査面	1/4	(底径11.0)	灰	断面は灰色、器表は暗灰色。底部回転糸切無調整。底部 内面と体部下端境を除く、底部内面周縁と体部内面下端 の器表は使用により摩滅。	中世
44	在地系土 器 内耳鍋	調査面	口縁部片		黒褐・褐・灰	断面は褐色、器表は黒褐色。口縁部は長く、端部内面は 三角形状に小さく突き出る。内面口縁部下に段はないが 稜をなして屈曲する。	15世紀後半 ～16世紀前 半頃
45	在地系土 器 内耳鍋 裏	調査面	体部片		黄灰・灰	断面は黄灰色、器表は灰色。体部は内湾し、口縁部は内 面に稜をなして外反する。	中世
46	在地系土 器 火鉢か片 口鉢	調査面	口縁部片		にぶい黄橙	口縁端部外面は小さく丸く突き出る。端部内面は下方に 曲がるように大きく突き出る。	中世
47	在地系土 器 内耳鍋	12号竪穴住 居埋土	口縁部片		オリーブ黒・灰オ リーブ	断面は灰オリーブ色、器表はオリーブ黒色。口縁部はゆ るく外反し、上半は肥厚して内湾。口縁端部内外面は丸 く肥厚。口縁部内面下端は丸みを帯びる。	15世紀か。
48	在地系土 器 内耳鍋	12号竪穴住 居埋土	口縁部片		オリーブ黒・灰オ リーブ	断面は灰オリーブ色、器表はオリーブ黒色。口縁部はゆ るく内湾し、端部は丸みを帯びる。口縁部内面下端は僅 かに段差を有する。浅い沈線状の窪み2条で僅かな段差 を作る特徴が55と同じ。	15世紀後半 55と同一個 体か。
49	在地系土 器 内耳鍋	14号竪穴住 居埋土	口縁部片		橙	断面は浅黄色、器表は褐色。口縁部下半は僅かに外湾し、 上半は僅かに内湾。口縁端部は平坦で内傾し、内面側は 三角形状に小さく突き出る。	15世紀末～ 16世紀前半 頃

遺物観察表

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位はcm)	色調	成形・整形の特徴	摘要
50	在地系土器 内耳鍋	22号竪穴住居埋土	口縁部片		オリーブ黒・灰	断面から内面器表は灰色、外面器表はオリーブ黒色。口縁部は短く、下半はゆるく外反し、後半は内湾する。口縁部は肥厚し、端部内面は三角形に突き出る。口縁端部上面は、幅広で平坦。	14世紀後半～15世紀初頭頃
51	在地系土器 内耳鍋	25号竪穴住居埋土	口縁部片		橙	断面は浅黄色、器表は橙色。紐状の内耳を貼り付ける。口縁部内面下端に段差はなく、稜をなして外反する。口縁端部は内湾し、内面側は三角形に小さく突き出る。	15世紀
52	在地系土器 内耳鍋	25号竪穴住居埋土	口縁部片		にぶい黄橙	口縁端部は、やや肥厚して丸みを帯びる。	中世
53	在地系土器 すり鉢	25号竪穴住居埋土	1/4	(口径31.0) 器高13.0 (底径12.0)	灰・灰黄	底部付近の器壁は厚いが、口縁部付近は薄い。口縁端部は内側に突き出るようであるが、使用による摩滅で消失する。体部内面下半に6条一単位のすり目を弧状に施す。すり目は4単位か。内面の器表は摩滅により使用痕は不明瞭。底部外面の摩滅は使用による床面との擦れによるものと推測される。	15後半～16世紀
54	在地系土器 内耳鍋	25号竪穴住居埋土	口縁部片		灰	断面から器表灰色。体部外面に煤付着。器壁はやや厚く、口縁部はやや短い。口縁部内面下部は緩い稜をなして屈曲し、距離の長い段をなす。口縁端部付近は内湾し、端部上面はやや窪む。	15世紀
55	在地系土器 内耳鍋	25号竪穴住居埋土	体部片		黒褐・にぶい黄褐・黄灰	断面はにぶい黄褐色、外面器表は黒褐色、内面器表は黄灰色。口縁部は内面に緩い稜をなして外反する。	中世
56	在地系土器 内耳鍋	31号竪穴住居埋土	体部片	(底径20.0)	オリーブ黒・黄灰	断面はにぶい黄灰色、器表はオリーブ黒色。平底。	中世
57	在地系土器 内耳鍋	31号竪穴住居埋土	口縁部片		灰	口縁部上半はゆるく内湾し、端部は丸い。	15世紀後半

遺構外から出土した遺物(第156図 PL.70)

番号	種類 器種	出土層位 (位置)	残存率	計測値(単位cm・g)	特徴・状態	摘要
58	鉄器 釘	調査面	先端側1/2	長さ(5.7) 幅0.5 厚さ0.3 重さ(3.9)	錆化が進んでいる。	

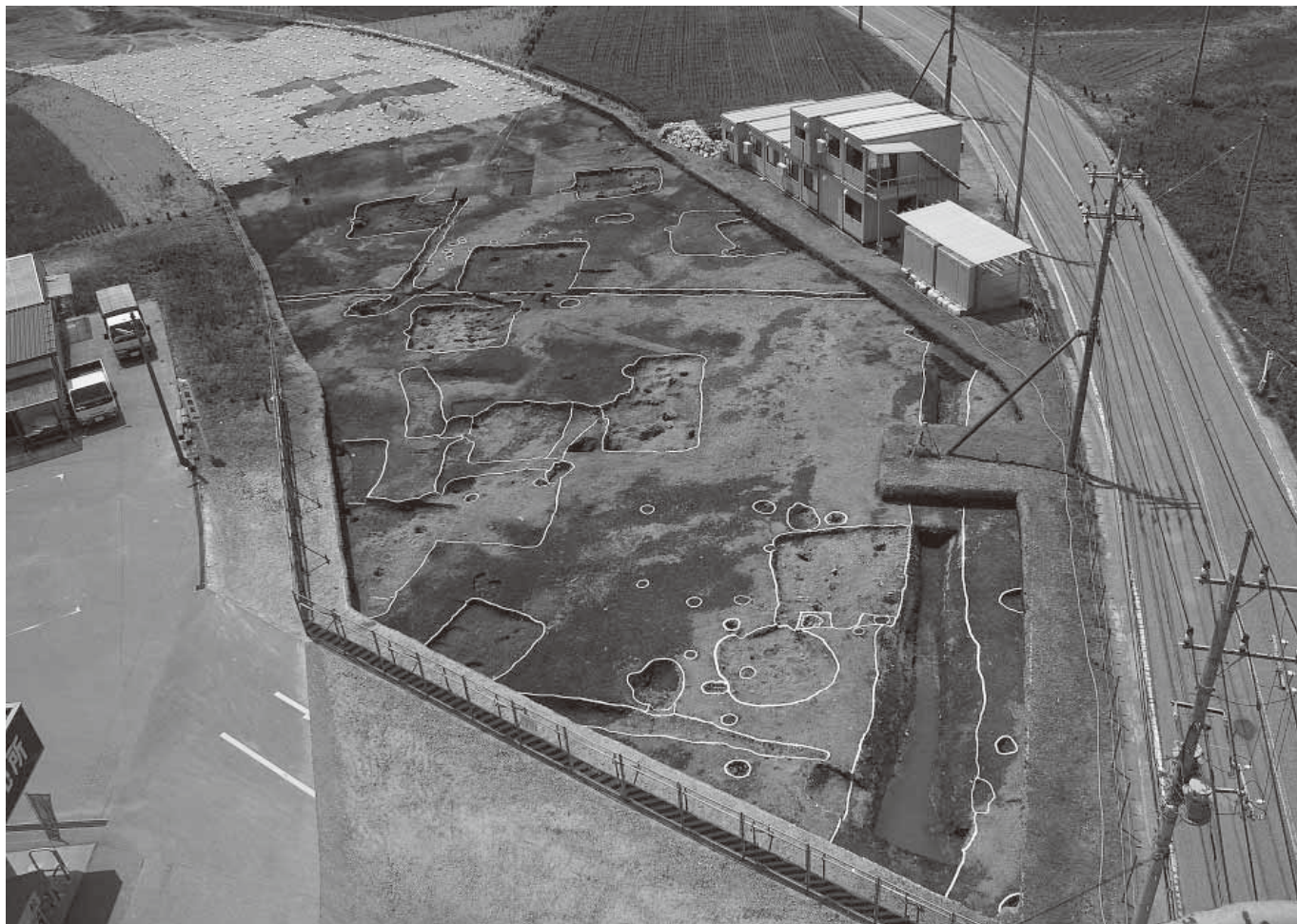
写真図版



1 上空から見た矢場三ツ橋Ⅱ遺跡(東から)



2 調査地の遺構全景(北部、南・上から)



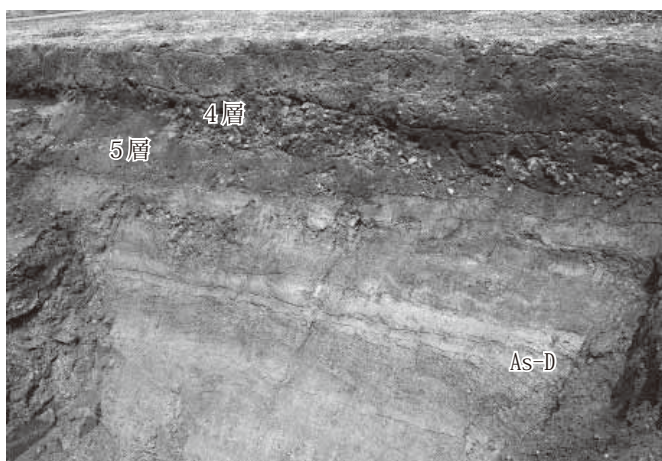
1 調査地の遺構全景(中央部、北・上から)



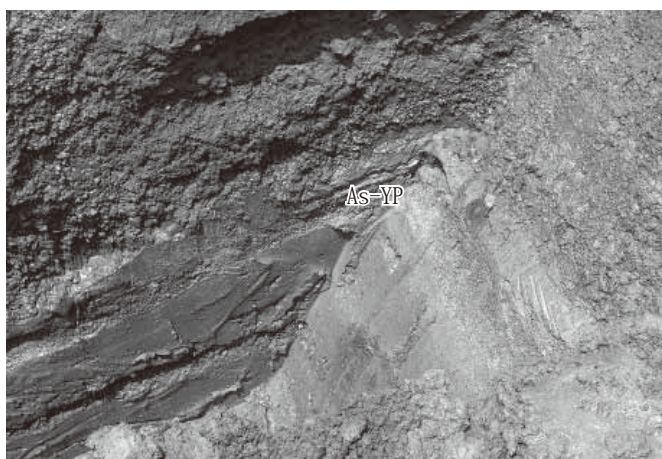
2 調査地の遺構全景(南部、東・上から)



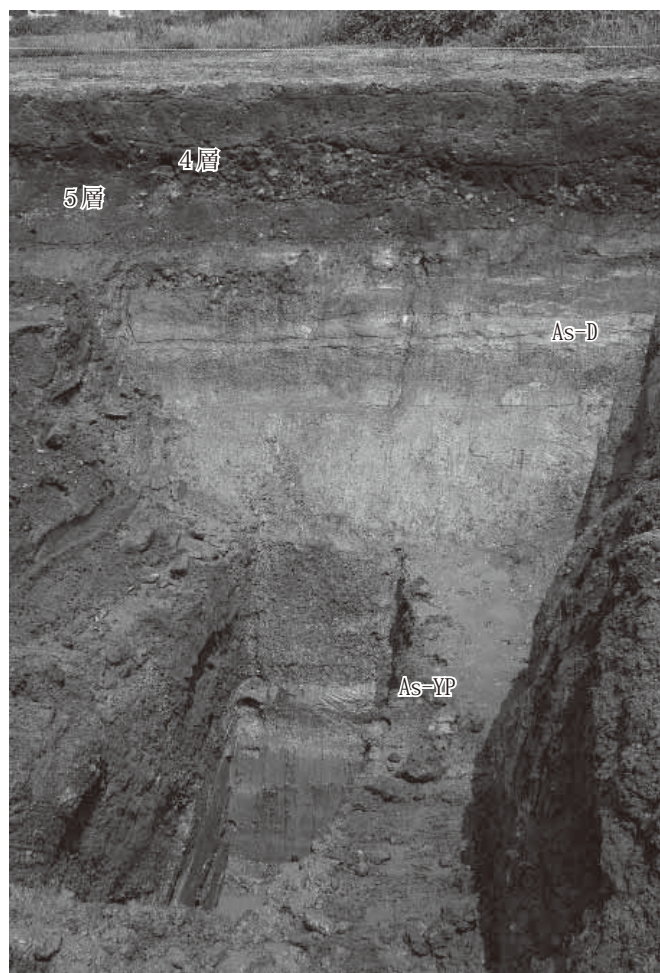
1 上空から見た矢場三ツ橋Ⅱ遺跡(南・真上から)



2 調査地の地層断面(地表付近)



3 調査地の地層断面



4 調査地の地層断面(試掘溝最下部)

PL.4



1 発掘前の調査地



2 重機による表土の掘削



3 通行路に安全フェンスを設置



4 発掘調査の作業



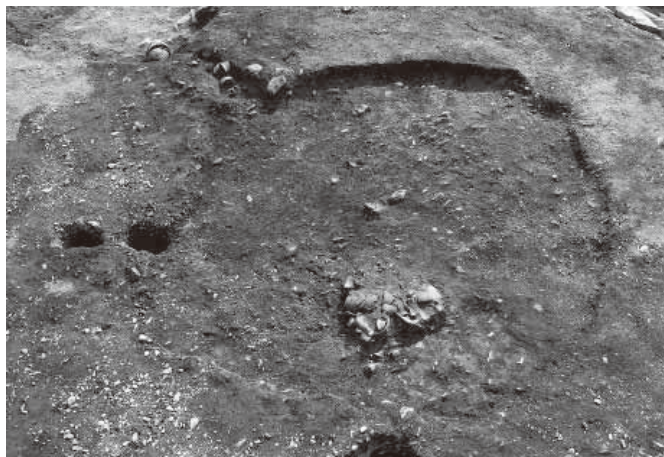
5 遺構測量の作業



6 道路建設が進む調査地



7 上空から見た矢場三ツ橋II遺跡(北・上から)



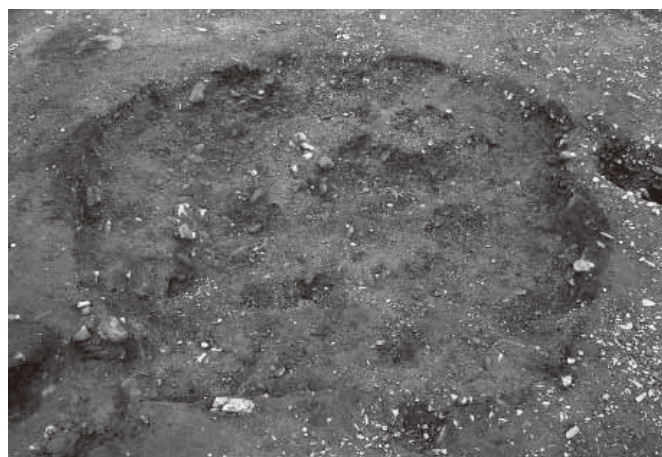
1 1号竪穴住居の全景(北から)



2 1号竪穴住居の地層断面A(南から)



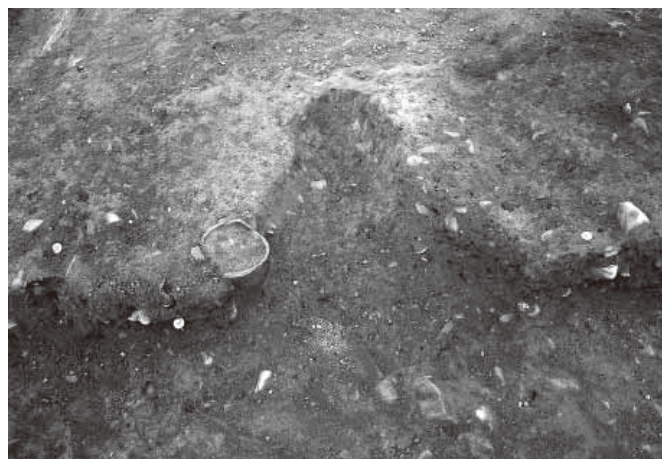
3 1号竪穴住居遺物の出土状況(東から)



4 1号竪穴住居掘方の全景(東から)



5 2号竪穴住居の全景(南から)



6 2号竪穴住居1号カマドの全景(南から)

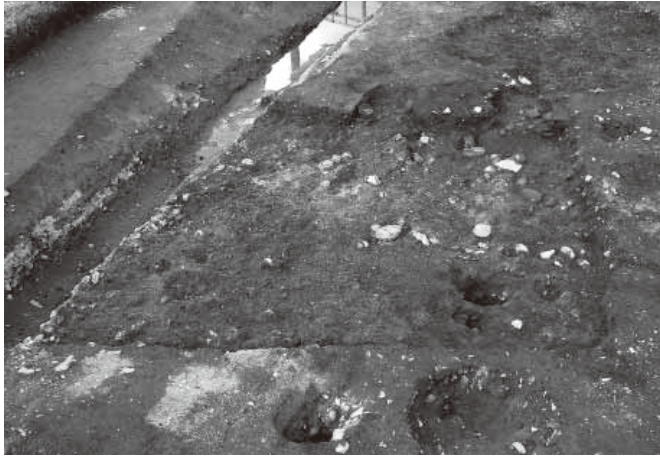


7 2号竪穴住居2号カマド遺物の出土状況(南から)



8 2号竪穴住居2号カマドの全景(南から)

PL.6



1 2号竪穴住居掘方の全景(南から)



2 2号竪穴住居1号カマド掘方の全景(東から)



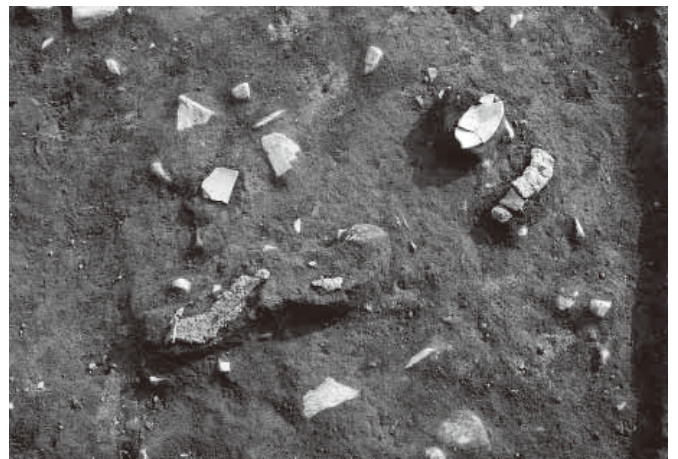
3 2号竪穴住居の北壁掘方の全景(東から)



4 2号竪穴住居2号カマド掘方から出土した遺物(東から)



5 3号竪穴住居の全景(南から)



6 3号竪穴住居鉄製品の出土状況(北から)



7 3号竪穴住居掘方の全景(南から)



8 3号竪穴住居の地層断面A(南から・北側壁面)



1 4号竪穴住居の全景(西から)



2 4号竪穴住居カマドの全景(西から)



3 4号竪穴住居掘方の全景(西から)



4 4号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



5 5号竪穴住居の全景(西から)



6 5号竪穴住居カマドの全景(北から)



7 5号竪穴住居掘方の全景(西から)



8 5号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



1 6号竪穴住居の全景(西から)



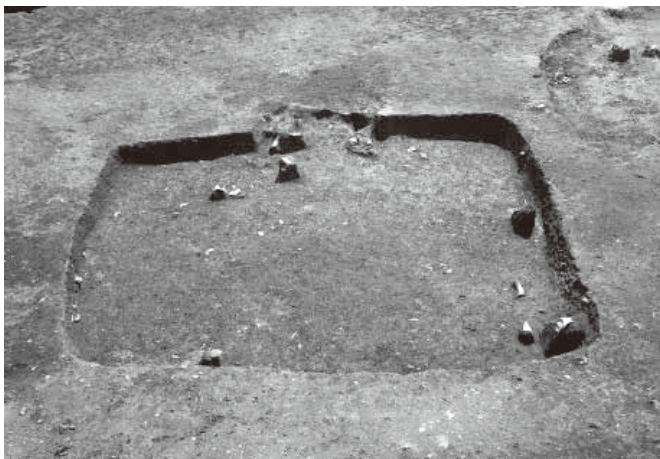
2 6号竪穴住居カマドの全景(西から)



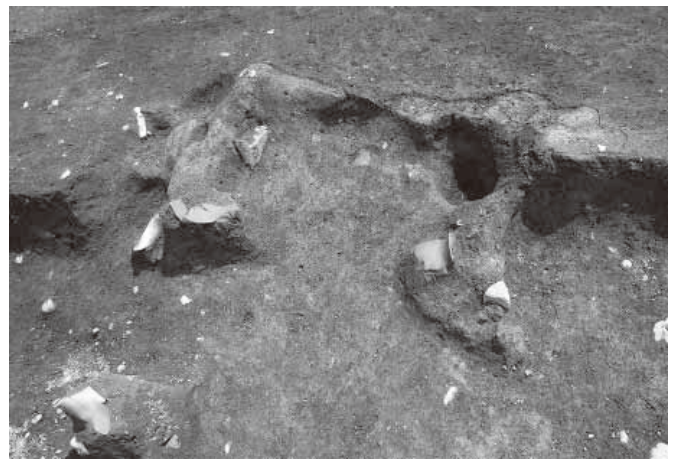
3 6号竪穴住居カマドの全景(東から)



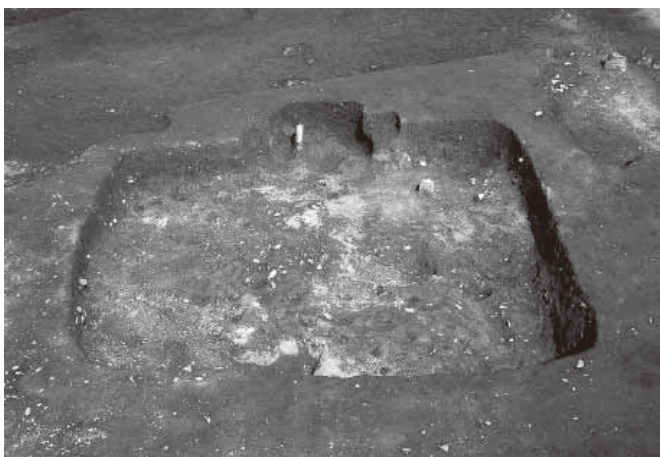
4 6号竪穴住居掘方の全景(西から)



5 7号竪穴住居の全景(西から)



6 7号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 7号竪穴住居掘方の全景(西から)



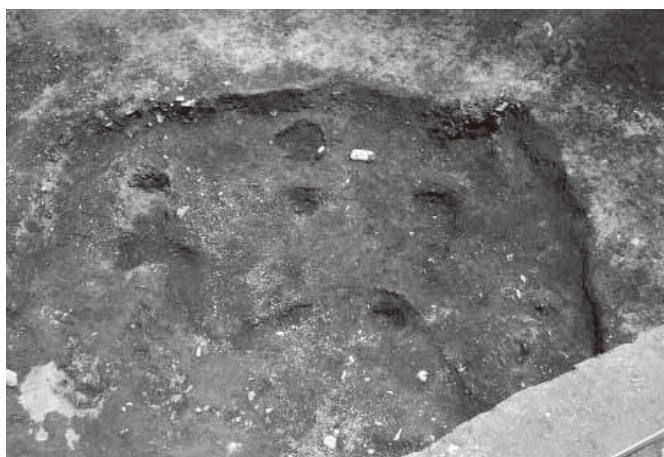
8 7号竪穴住居カマド掘方の地層断面F(西から)



1 8号竪穴住居の全景(西から)



2 8号竪穴住居カマドの地層断面G(南から)



3 8号竪穴住居掘方の全景(西から)



4 8号竪穴住居カマド掘方の地層断面G(南から)



5 9号竪穴住居の全景(西から)



6 9号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 9号竪穴住居カマドの全景(南から)



8 9号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 11号竪穴住居の全景(西から)



2 11号竪穴住居埋土の礫の出土状況(北から)



3 11号竪穴住居の地層断面C(北から・東側壁面)



4 11号竪穴住居掘方の全景(南から)



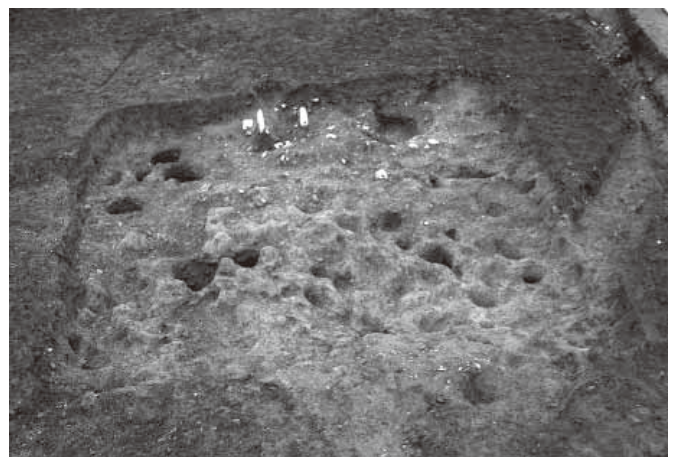
5 12号竪穴住居の全景(西から)



6 12号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 12号竪穴住居カマドの全景(北から)



8 12号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 13号竪穴住居の全景(西から)



2 13号竪穴住居の地層断面A(西から・東側壁面)



3 14号竪穴住居の全景(南から)



4 14号竪穴住居の地層断面A(西から・東側壁面)



5 15号竪穴住居の全景(西から)



1 15号竪穴住居の地層断面A(南から)



2 15号竪穴住居の地層断面B(西から)



3 15号竪穴住居遺物の出土状況(西から)



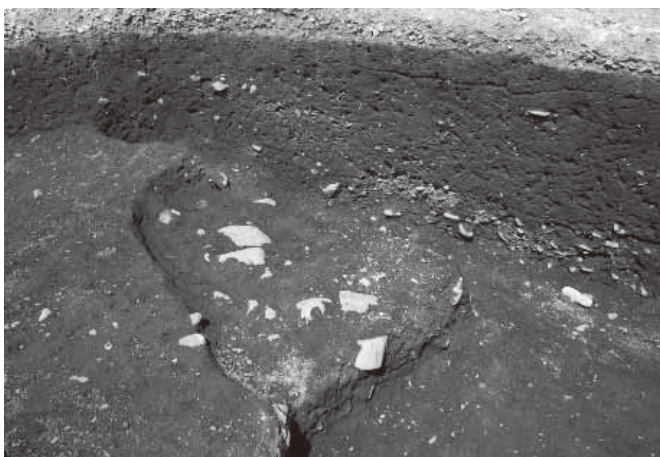
4 15号竪穴住居遺物の出土状況(北から)



5 15号竪穴住居ピット5・6遺物の出土状況(北から)



6 15号竪穴住居掘方、1号掘立柱建物の全景(西から)



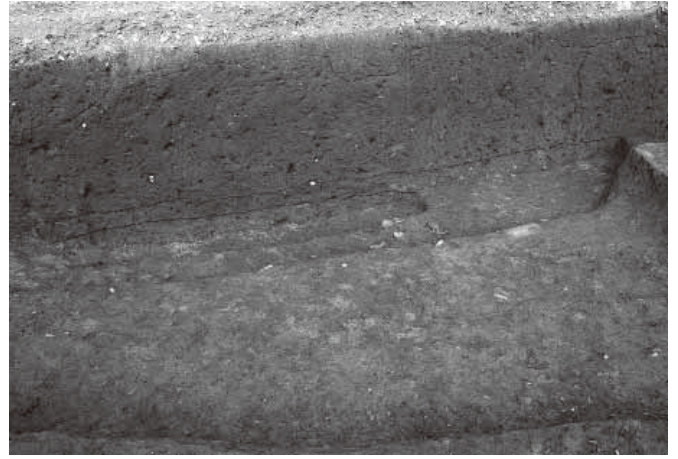
7 16号竪穴住居の全景と地層断面C(西から・東側壁面)



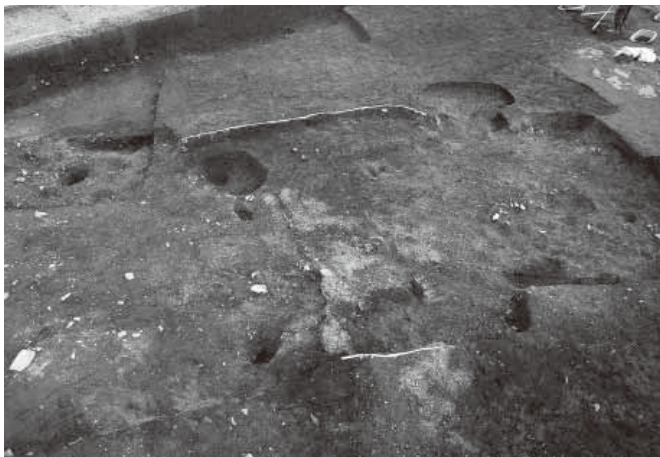
8 16号・11号竪穴住居の地層断面C(西から・東側壁面)



1 17号竪穴住居の全景(西から)



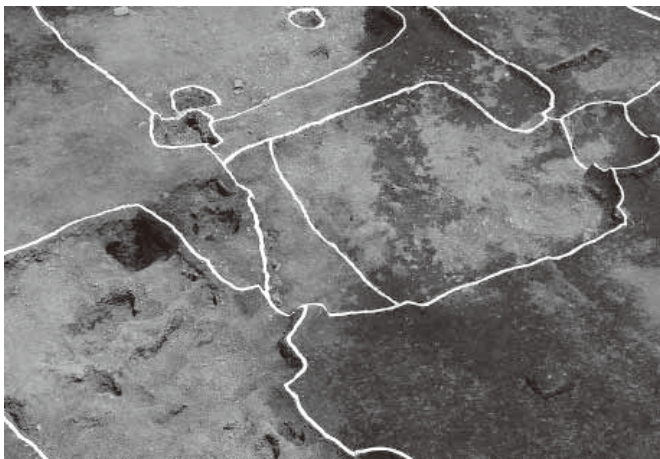
2 17号竪穴住居の地層断面A(西から・東側壁面)



3 18号竪穴住居の全景(西から)



4 18号竪穴住居の地層断面C(東から)



5 19号竪穴住居の全景(南から)



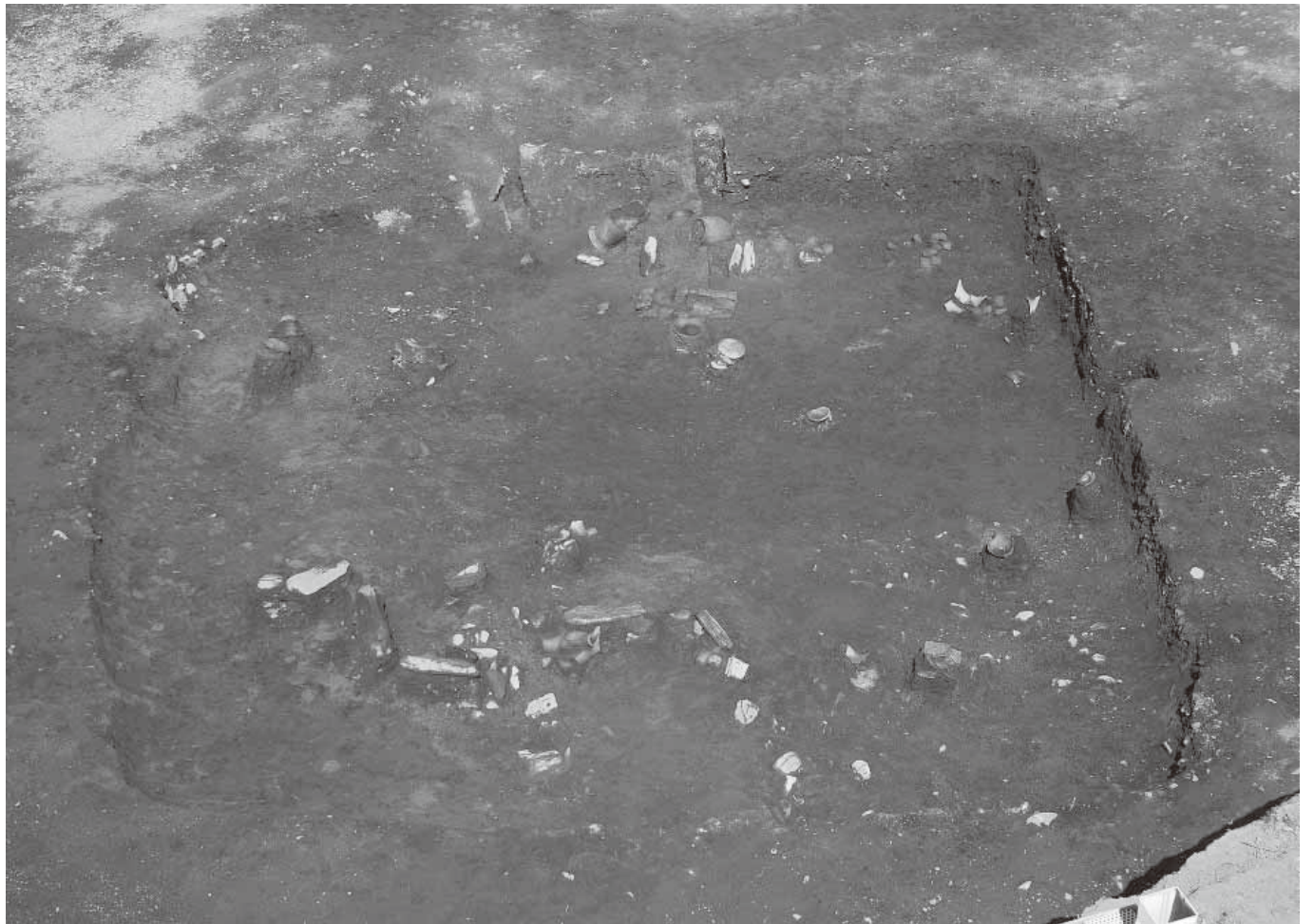
6 19号竪穴住居の地層断面C(南から)



7 20号竪穴住居カマド遺物の出土状況(西から)



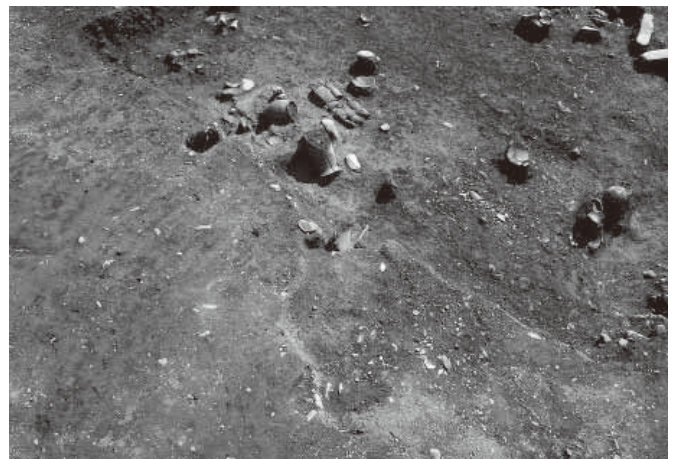
8 20号竪穴住居カマド遺物の出土状況(南から)



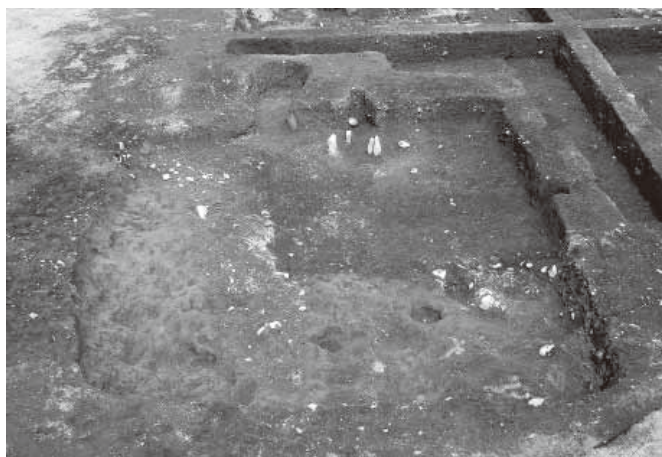
1 20号竪穴住居の全景(西から)



2 20号竪穴住居石材出土状況全景(東から)



3 20号竪穴住居カマド全景(東から)



4 20号竪穴住居掘方の全景(西から)



5 20号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



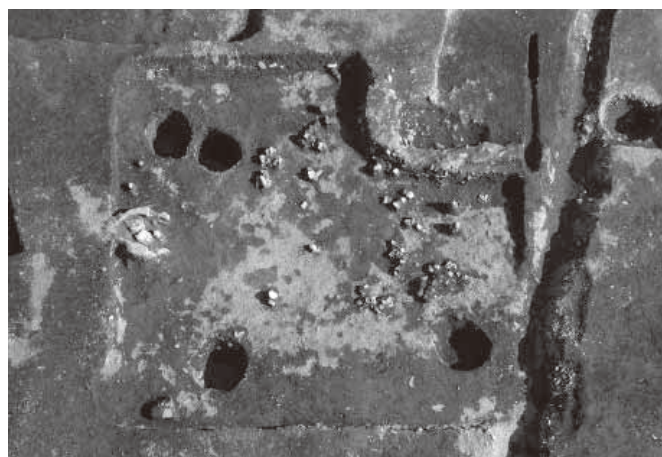
1 21号・29号竪穴住居掘方の全景(南から)



2 21号竪穴住居カマド全景(西から)



3 22号竪穴住居の全景(西から)



4 22号竪穴住居の全景(北から)



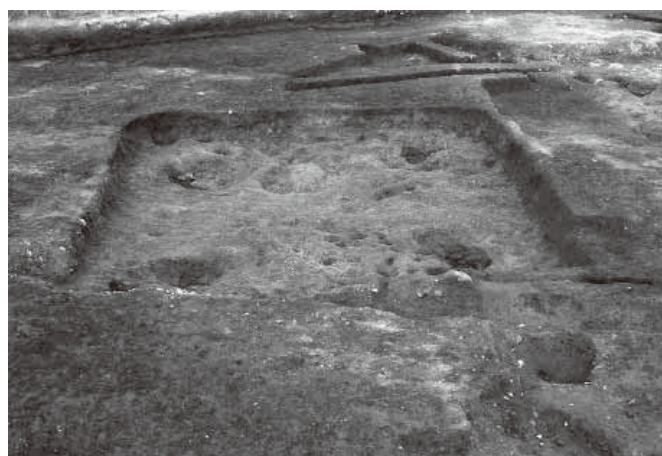
5 22号竪穴住居の地層断面A(西から)



6 22号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 22号竪穴住居カマドの地層断面G(南から)



8 22号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 23号竪穴住居の全景(西から)



2 23号竪穴住居の地層断面B(南から)



3 23号竪穴住居1号カマドの全景(西から)



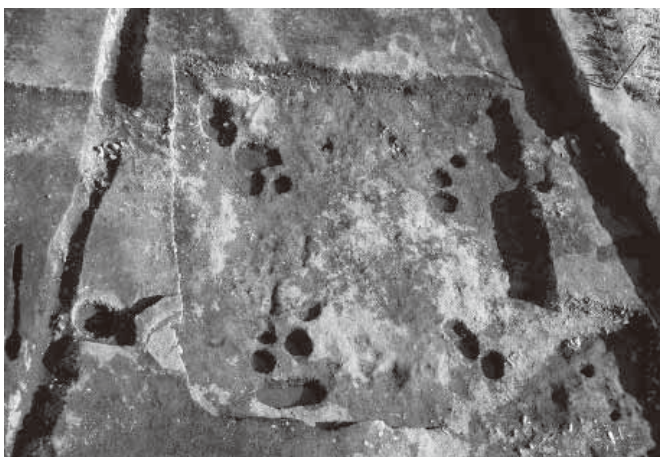
4 23号竪穴住居2号カマド周辺の状況(西から)



5 23号竪穴住居遺物の出土状況(北から)



6 23号竪穴住居遺物の出土状況(北から)



7 23号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)



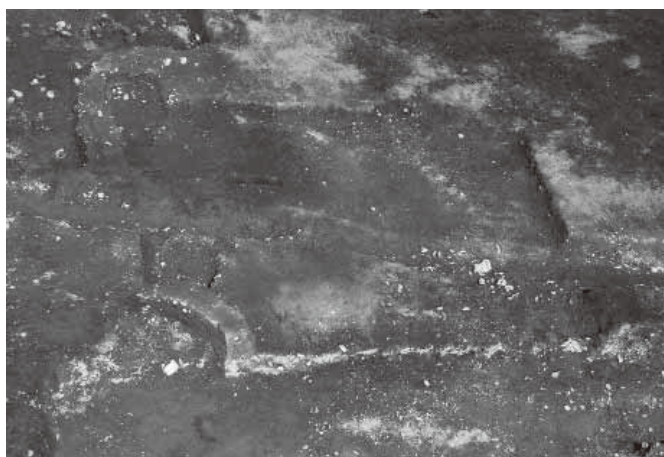
8 22号・23号・27号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)



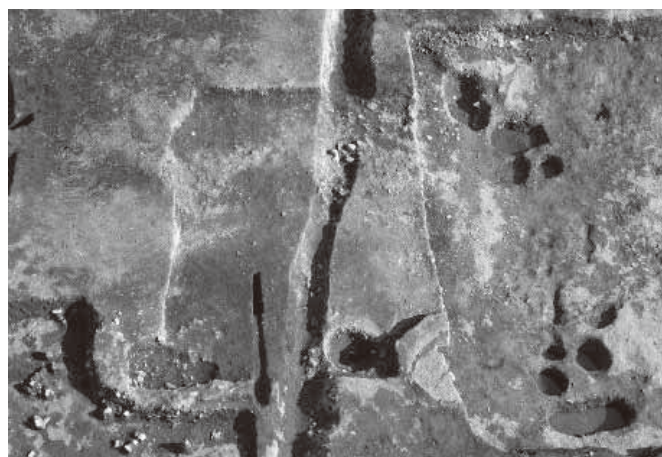
1 24号竪穴住居の全景(西から)



2 24号竪穴住居ピット1(貯蔵穴)の全景(南から)



3 24号竪穴住居掘方の全景(西から)



4 24号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)



5 25号竪穴住居の全景(西から)



6 25号竪穴住居カマドの全景(西から)



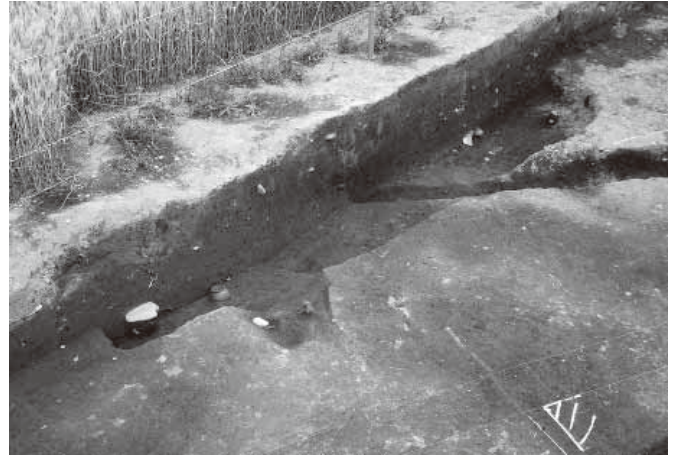
7 25号竪穴住居カマドの全景(北から)



8 25号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



1 25号竪穴住居掘方の全景(西から)



2 26号竪穴住居の全景(南から)



3 26号竪穴住居1号カマドの全景(西から)



4 26号竪穴住居掘方の全景(南から)



5 26号竪穴住居2号カマド掘方の全景(南から)



6 27号竪穴住居の全景(南から)



7 27号竪穴住居カマド掘方の全景(南から)



8 27号竪穴住居掘方の全景(北・真上から)



1 28号竪穴住居の全景(南西から)



2 28号竪穴住居の地層断面A(南西から)



3 28号竪穴住居カマドの全景(南西から)



4 28号竪穴住居貯蔵穴上部の全景(北西から)



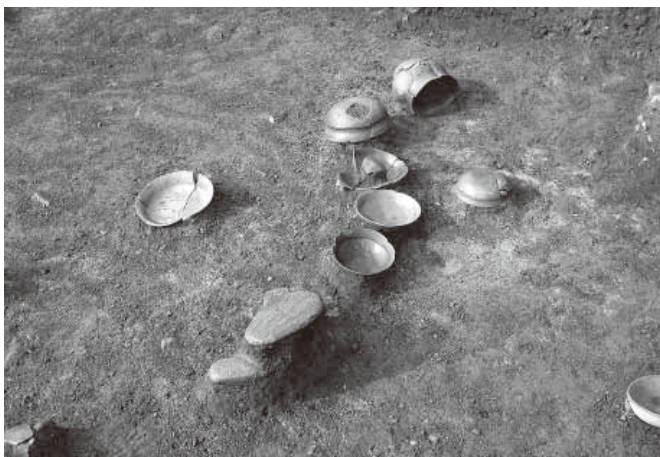
5 28号竪穴住居貯蔵穴の全景(南西から)



1 28号竪穴住居遺物の出土状況(西から)



2 28号竪穴住居貯蔵穴周辺遺物の出土状況(南から)



3 28号竪穴住居遺物の出土状況(南から)



4 28号竪穴住居掘方の全景(南西から)



5 30号竪穴住居の全景(北から)



6 30号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 31号竪穴住居の全景(南西から)



8 31号竪穴住居カマドの全景(南西から)



1 31号竪穴住居貯蔵穴の全景(南東から)



2 31号竪穴住居掘方の全景(南西から)



3 32号竪穴住居の全景(南から)



4 32号竪穴住居の地層断面A(西から)



5 32号竪穴住居掘方の全景(南から)



6 33号竪穴住居の全景(南から)



7 33号竪穴住居の地層断面(東から・西側壁面)



8 33号竪穴住居掘方の全景(南から)



1 34号竪穴住居の全景(東から)



2 34号竪穴住居カマドの全景(南西から)



3 34号竪穴住居カマドの全景(南から)



4 34号竪穴住居掘方の全景(東から)



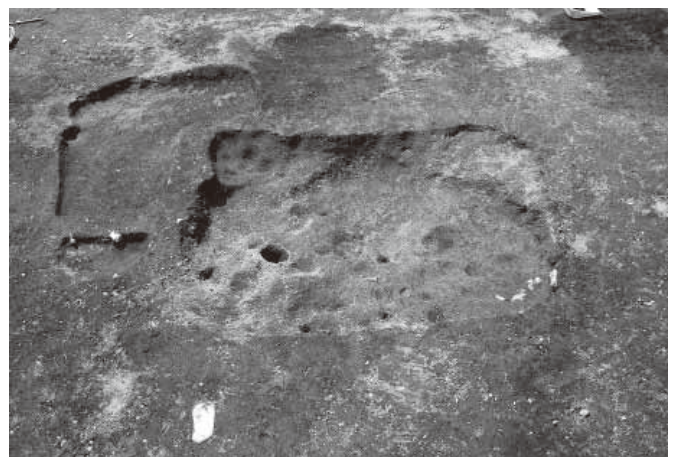
5 35号竪穴住居の全景(北から)



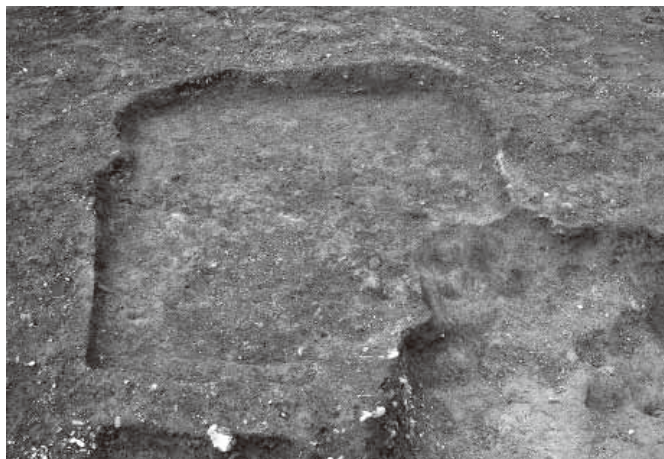
6 35号竪穴住居カマドの全景(北から)



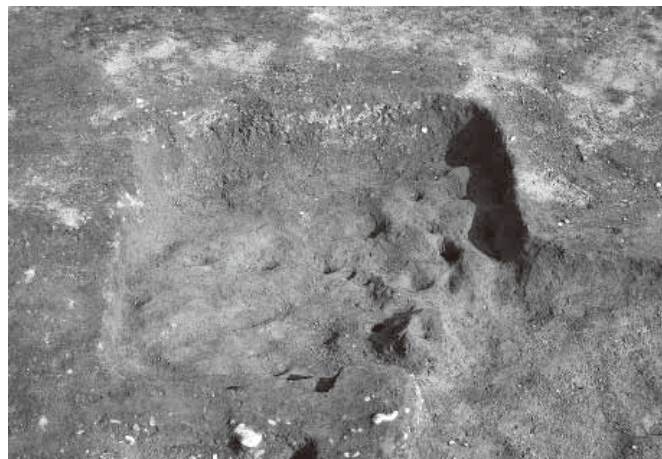
7 35号竪穴住居掘方の全景(北から)



8 35号竪穴住居掘方と36号竪穴住居の全景(北から)



1 36号竪穴住居の全景(北から)



2 36号竪穴住居掘方の全景(北から)



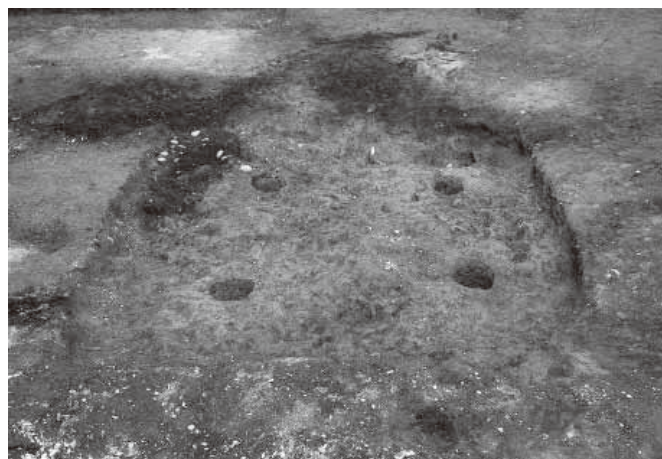
3 37号竪穴住居の全景(西から)



4 37号竪穴住居の地層断面A(西から)



5 37号竪穴住居貯蔵穴の地層断面と遺物(北から)



6 37号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 38号竪穴住居、56号竪穴住居カマドの全景(西から)



8 38号竪穴住居カマドの全景(西から)



1 38号竪穴住居カマドの全景(北から)



2 38号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



3 38号竪穴住居掘方の全景(西から)



4 38号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



5 39号竪穴住居の全景(西から)



6 39号竪穴住居カマドの全景(東から)



7 39号竪穴住居カマドの地層断面G(西から)



8 39号竪穴住居掘方の全景(西から)



1 40号竪穴住居の全景(西から)



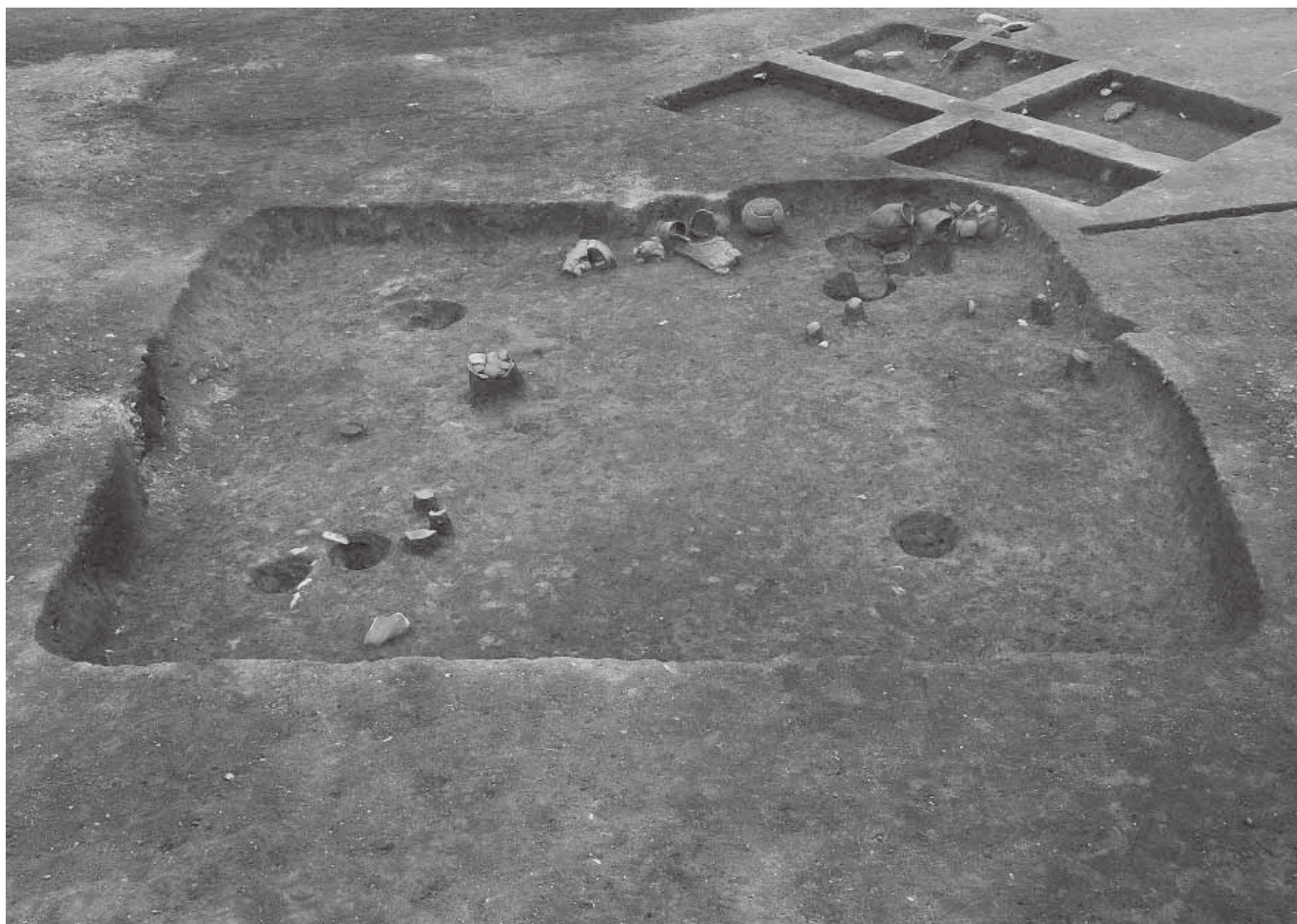
2 40号竪穴住居カマドの全景(北から)



3 41号竪穴住居カマドの地層断面H(西から)



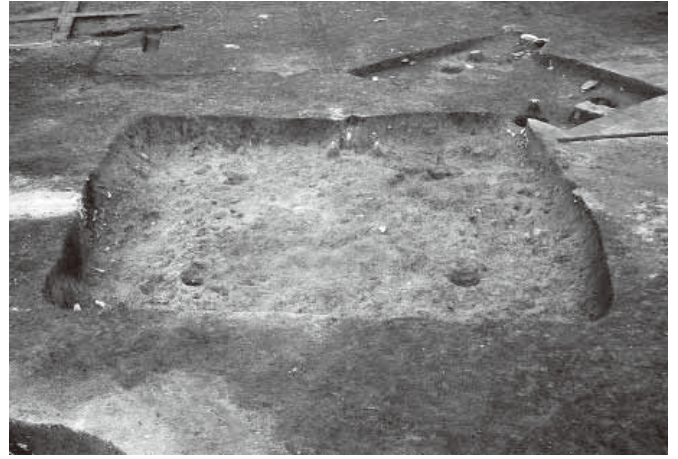
4 41号竪穴住居カマドの全景(西から)



5 41号竪穴住居の全景(西から)



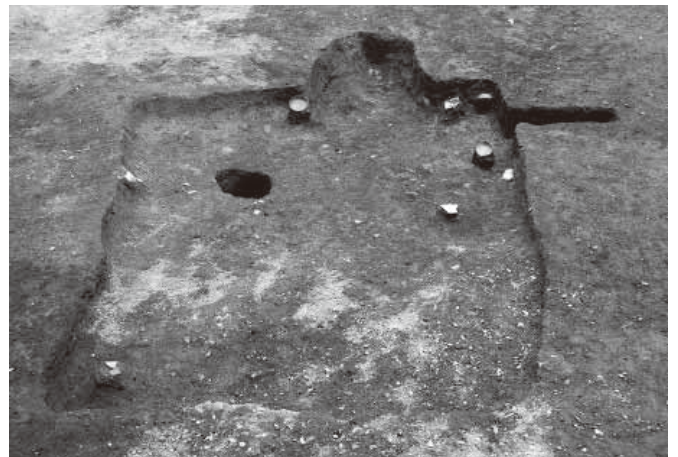
1 41号竪穴住居貯蔵穴の全景(北から)



2 41号竪穴住居掘方の全景(西から)



3 41号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



4 42号竪穴住居の全景(北から)



5 42号竪穴住居掘方の全景(北から)



6 42号竪穴住居カマドの地層断面C(西から)



7 43号竪穴住居の全景(北から)



8 43号竪穴住居カマドの全景(北から)



1 43号竪穴住居カマドの全景(西から)



2 43号竪穴住居掘方の全景(北から)



3 44号竪穴住居の全景(西から)



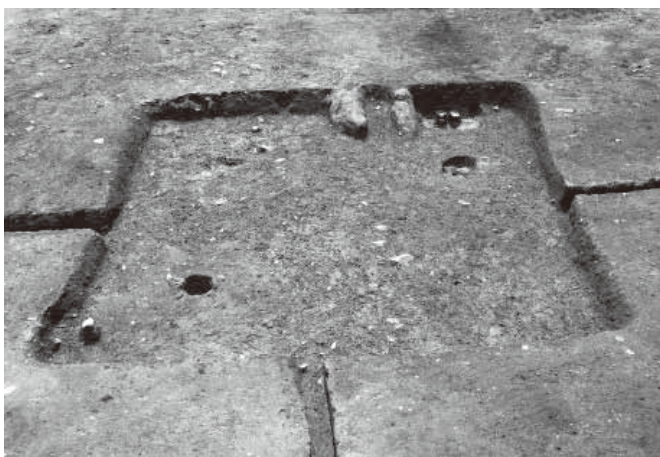
4 44号竪穴住居カマドの全景(東から)



5 44号竪穴住居貯蔵穴の全景(東から)



6 44号竪穴住居掘方の全景(西から)



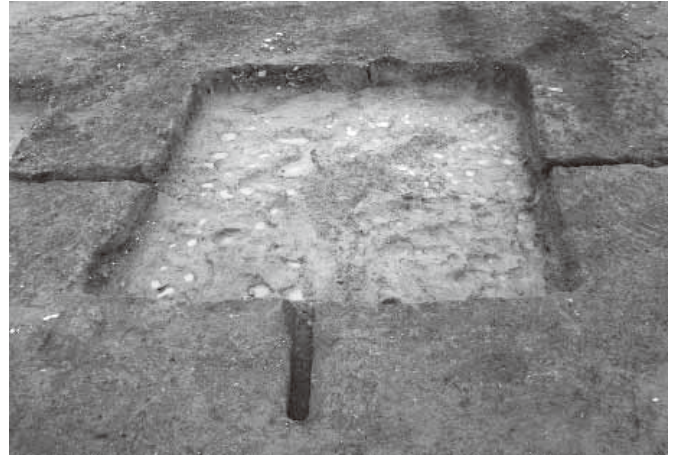
7 45号竪穴住居の全景(東から)



8 45号竪穴住居カマドの全景(東から)



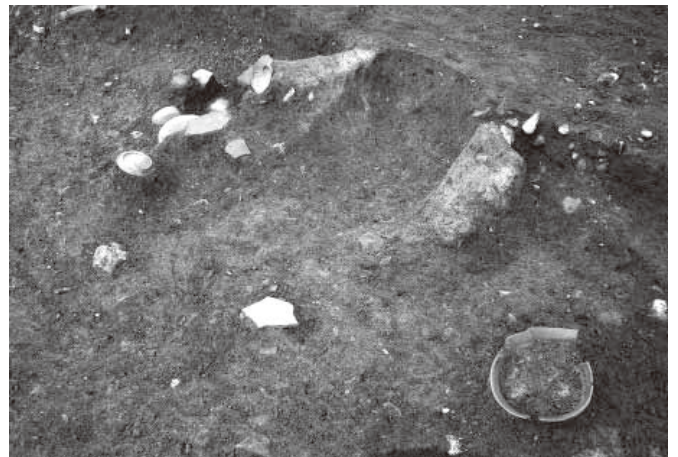
1 45号竪穴住居貯蔵穴の全景(北から)



2 45号竪穴住居掘方の全景(東から)



3 46号竪穴住居の全景(西から)



4 46号竪穴住居カマドの全景(西から)



5 46号竪穴住居カマドの全景(東から)



6 46号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 47号竪穴住居の全景(東から)



8 47号竪穴住居掘方の全景(東から)



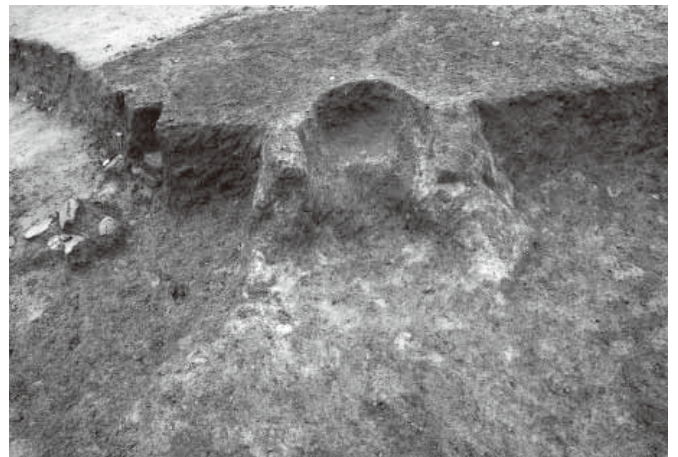
1 48号竪穴住居の全景(南から)



2 48号竪穴住居掘方の全景(南から)



3 50号竪穴住居の全景(北から)



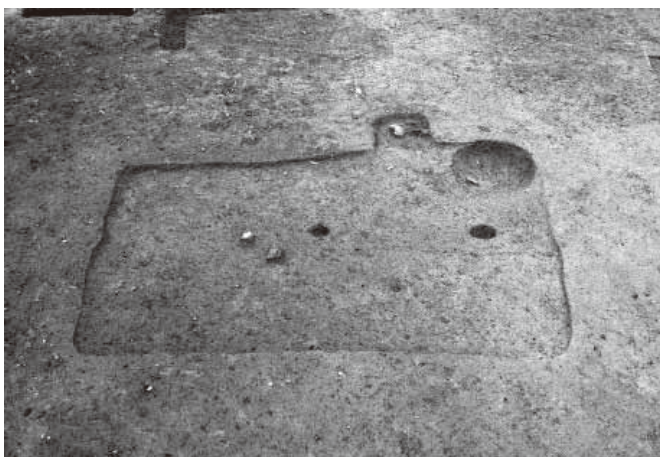
4 50号竪穴住居カマドの全景(東から)



5 50号竪穴住居貯蔵穴の全景(南から)



6 50号竪穴住居掘方の全景(西から)



7 51号竪穴住居の全景(西から)



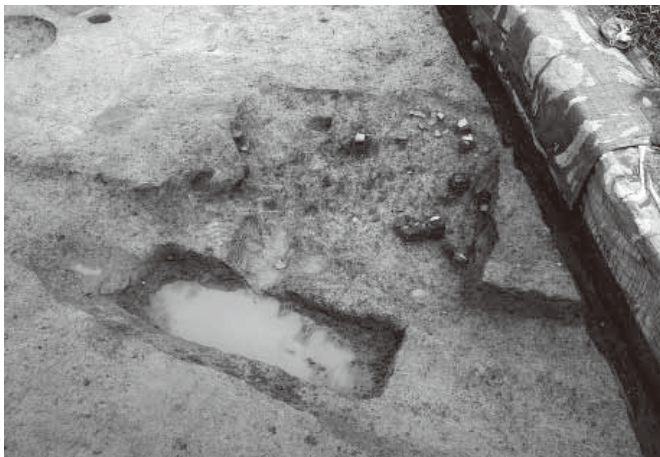
8 51号竪穴住居の地層断面A(西から)



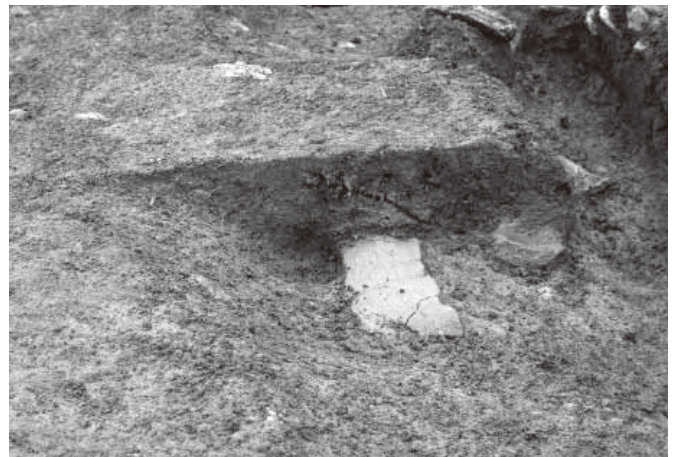
1 51号竪穴住居カマドの全景(西から)



2 51号竪穴住居貯蔵穴の全景(西から)



3 52号竪穴住居の全景(北から)



4 52号竪穴住居カマドの検出状況(東から)



5 54号竪穴住居の全景(東から)



6 55号竪穴住居の床面東部(西から)



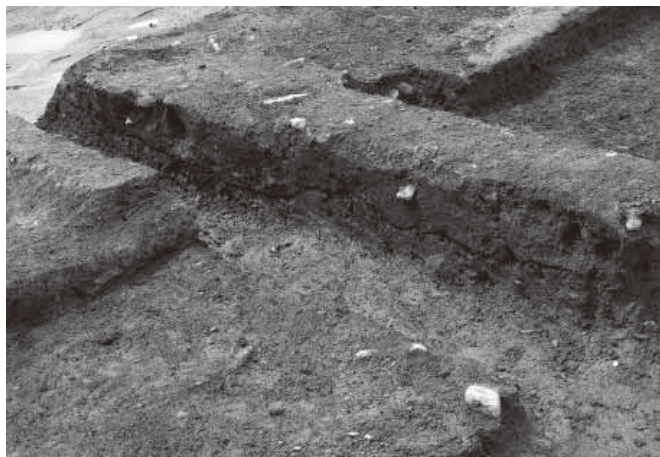
7 55号竪穴住居の地層断面A(北から)



8 55号竪穴住居遺物の出土状況(東から)



1 57号・60号竪穴住居の全景(南から)



2 57号竪穴住居の地層断面A(北から)



3 59号竪穴住居の全景(南から)



4 59号竪穴住居カマドの全景(南から)



5 59号竪穴住居カマドの全景(東から)



6 59号竪穴住居掘方の全景(南から)



7 61号竪穴住居の全景(東から)



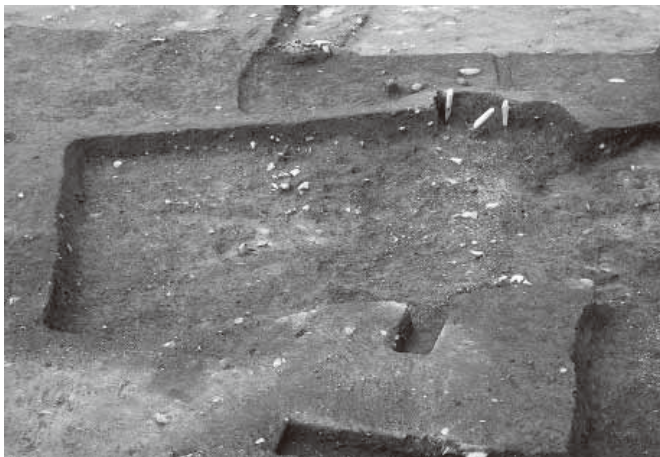
8 61号竪穴住居カマドの全景(東から)



1 61号竪穴住居カマドの全景(西から)



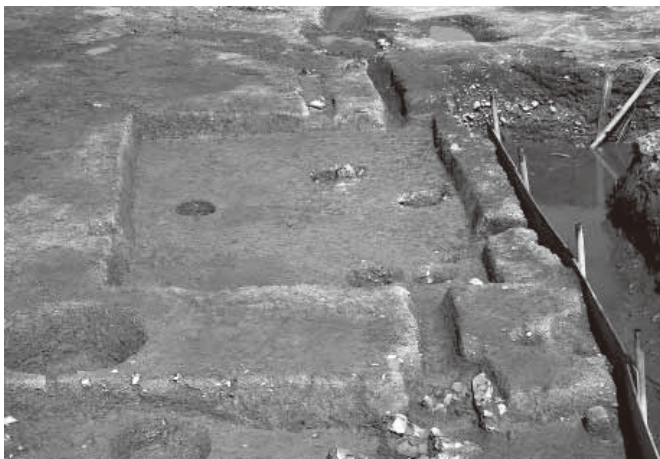
2 61号竪穴住居遺物の出土状況(南から)



3 61号竪穴住居掘方の全景(東から)



4 61号竪穴住居カマド掘方の全景(東から)



5 62号竪穴住居、8号・10号・11号溝の全景(西から)



6 62号竪穴住居の地層断面A(西から)



7 63号竪穴住居の全景(南から)



8 63号竪穴住居1号土坑の全景(南から)



1 63号竪穴住居遺物の出土状況(東から)



2 63号竪穴住居遺物の出土状況(東から)



3 63号竪穴住居遺物の出土状況(東から)



4 63号竪穴住居掘方の全景(西から)



5 64号竪穴住居の全景(西から)



6 64号竪穴住居カマドの全景(西から)



7 64号竪穴住居カマドの全景(南から)



8 64号竪穴住居の礫の出土状況(北から)



1 64号竪穴住居掘方の全景(東から)



2 64号竪穴住居カマド掘方の全景(南から)



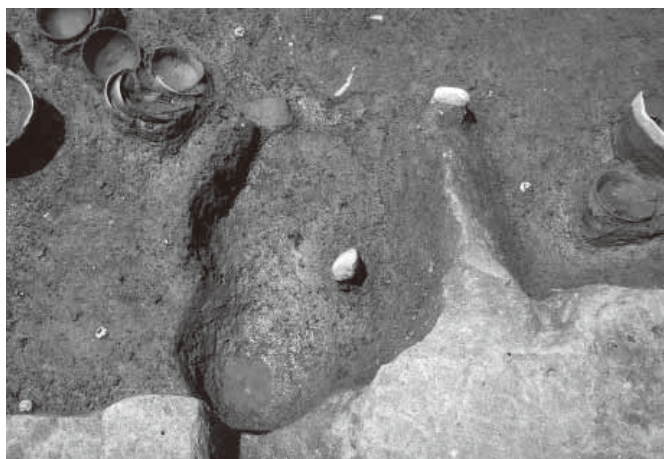
3 65号竪穴住居の全景(東から)



4 65号竪穴住居カマドの全景(西から)



5 65号竪穴住居カマドの全景(南から)



6 65号竪穴住居カマドの全景(東から)



7 66号竪穴住居、16号土坑の全景(西から)



8 66号竪穴住居の地層断面A(西から)



1 66号竪穴住居カマドの全景(西から)



2 66号竪穴住居カマド掘方の全景(西から)



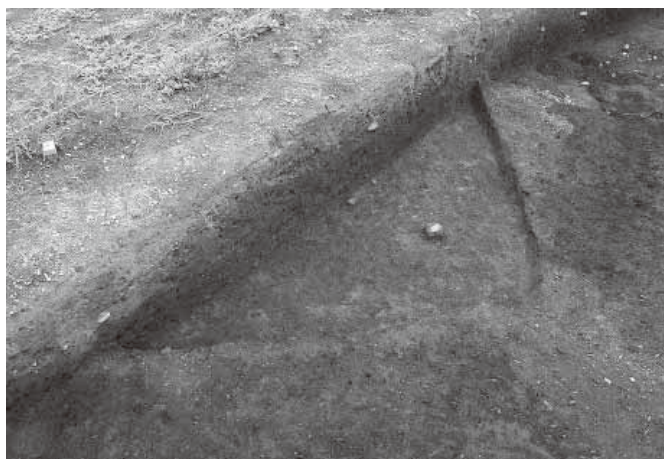
3 67号竪穴住居の全景(西から)



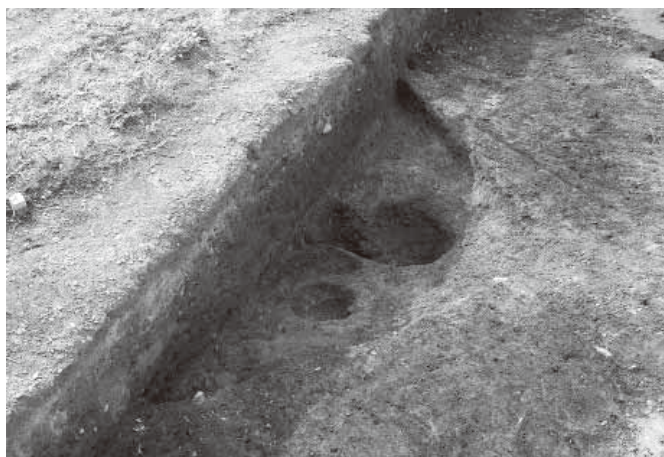
4 68号竪穴住居の全景(南から)



5 69号竪穴住居の検出状況(東から・西側壁面)



6 70号竪穴住居の全景(南から)



7 70号竪穴住居掘方の全景(南から)



8 71号竪穴住居の全景(南から)



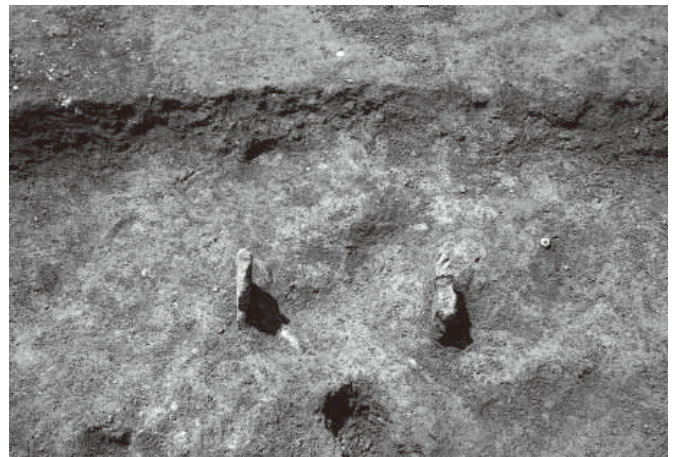
1 71号竪穴住居カマドの全景(北から)



2 71号竪穴住居掘方の全景(南から)



3 71号竪穴住居の地層断面A(西から・東側壁面)



4 71号竪穴住居カマド掘方の全景(東から)



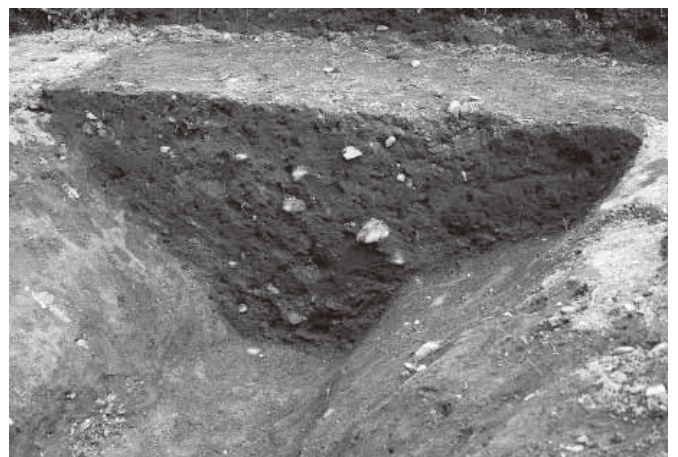
5 2号掘立柱建物の全景(東から)



6 3号掘立柱建物の全景(東から)



7 1号溝の地層断面A(南から・北側壁面)



8 1号溝の地層断面B(南から・北側壁面)



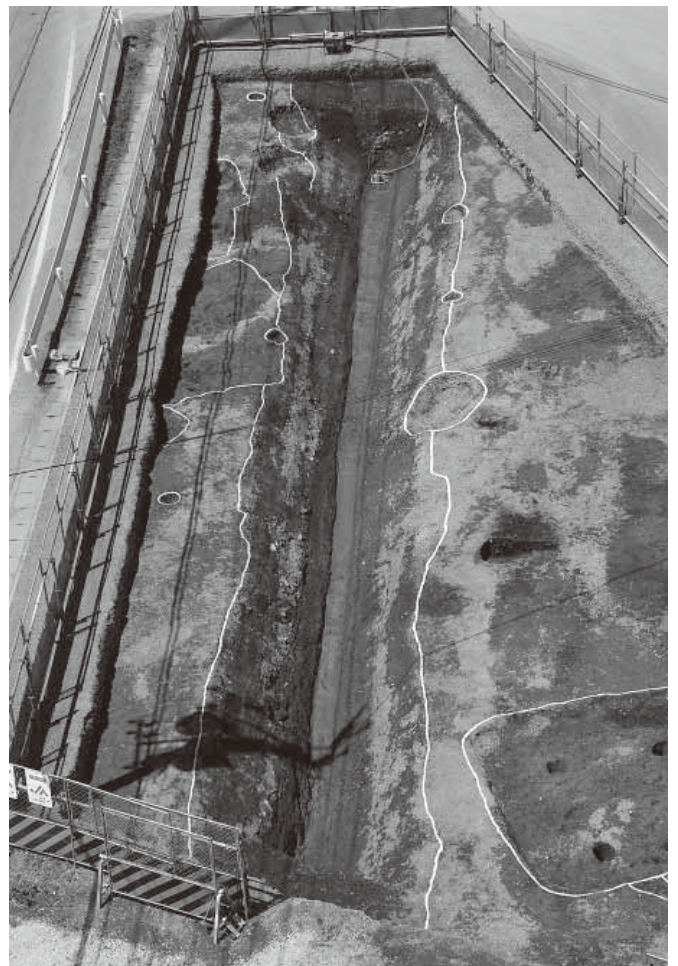
1 1号溝と周辺の遺構群(北・真上から)



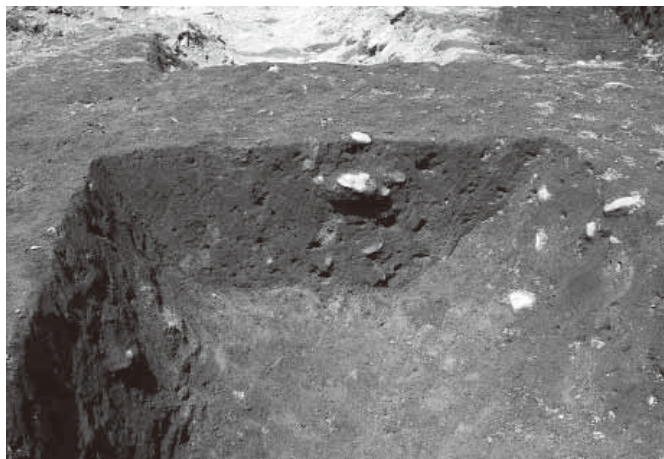
2 1号溝の全景(調査地北部・南から)



3 1号溝の全景(調査地北部・南・真上から)



4 1号溝、8号土坑の全景(調査地中央部・南から)



1 2号溝の地層断面A(東から)



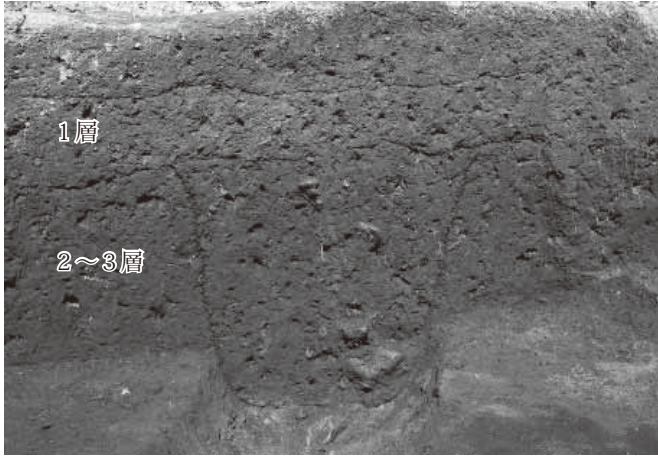
3 3号溝の全景(東から)



2 2号溝の全景(東から)



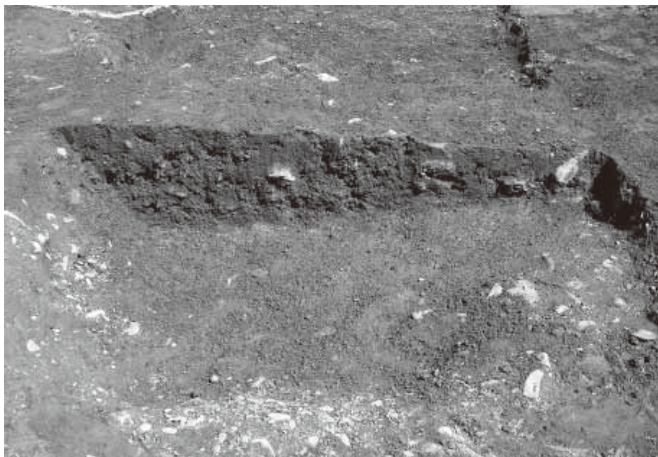
4 1号・2号・3号溝と周辺の遺構群(調査地中央部・南・真上から)



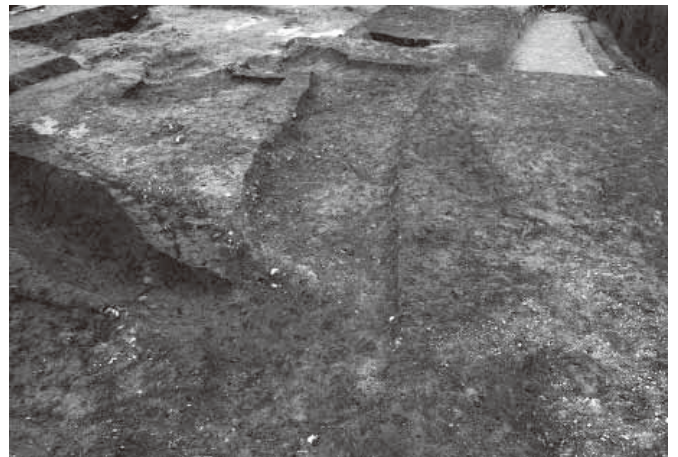
1 3号溝の地層断面A(西から・東側壁面)



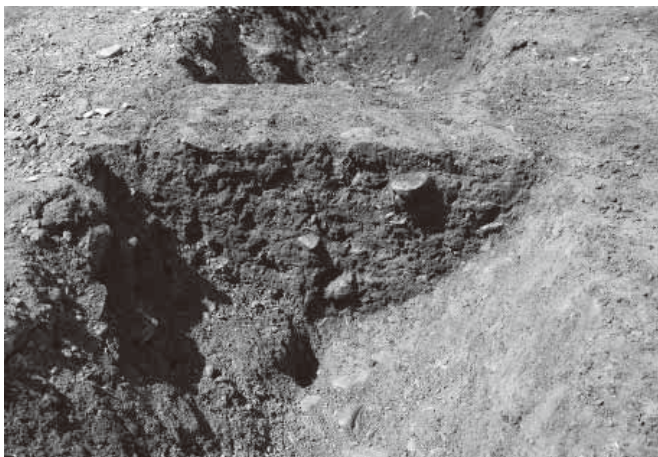
2 3号溝の全景(東から)



3 4号溝の地層断面(南から)



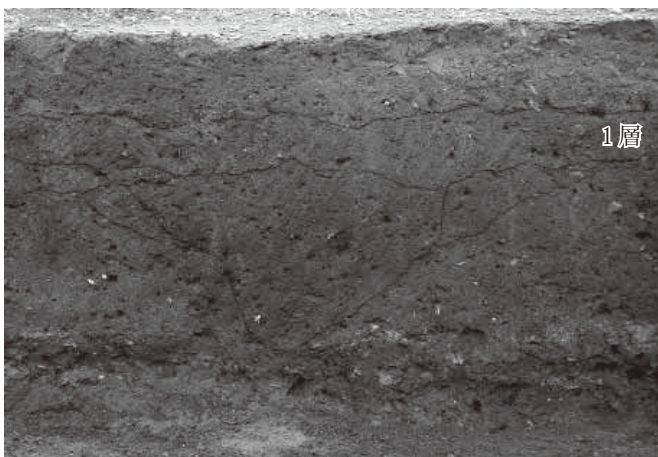
4 4号溝の全景(南から)



5 5号溝の地層断面A(南から)



7 5号溝の全景(南から)



6 5号溝の地層断面C(東から・西側壁面)



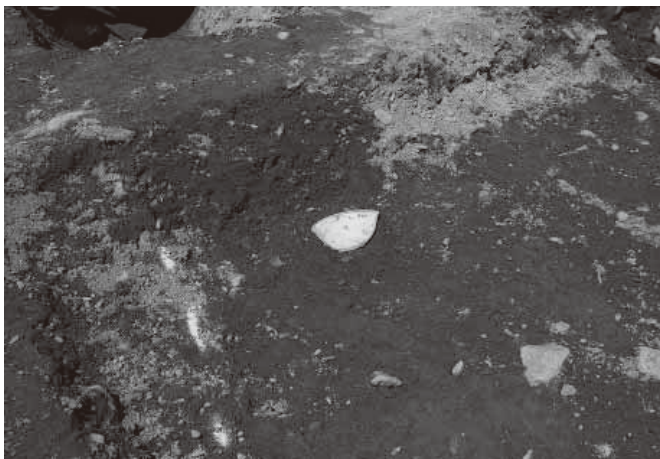
1 5号溝の全景(南から)



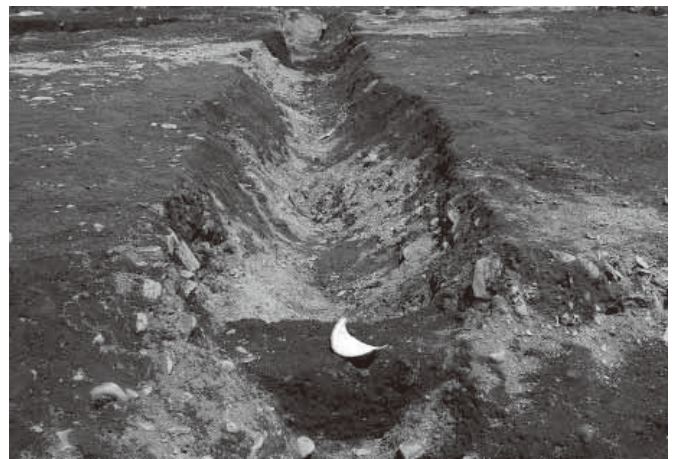
3 5号溝及び出土遺物(白磁碗)と3号溝の全景(南から)



2 5号溝の全景(北から)



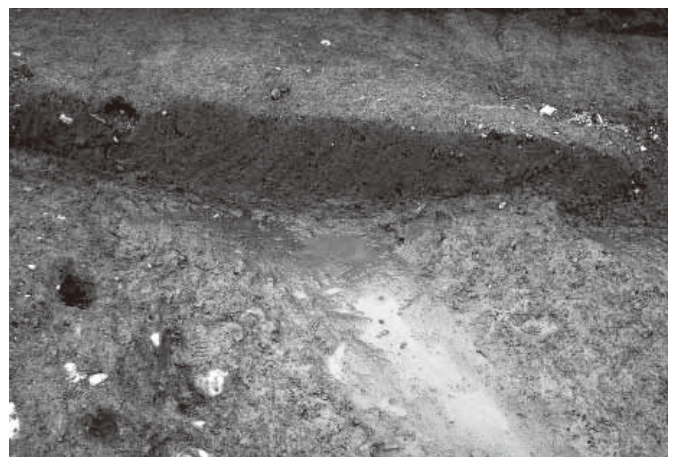
4 5号溝B断面及び遺物(白磁碗)の検出状況(南から)



5 5号溝遺物(白磁碗)の出土状況(南から)



6 6号溝の全景(西から)



7 7号溝の地層断面A(西から・東側壁面)



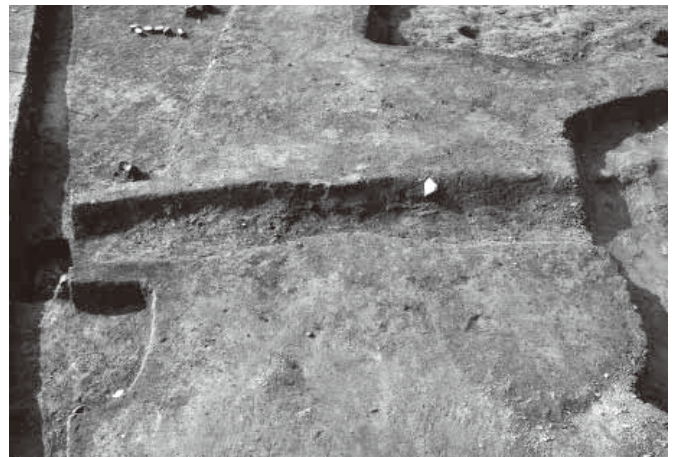
1 7号・8号溝の全景(西から)



2 7号・8号溝の全景(南から)



3 9号溝の全景(東から)



4 12号溝の全景(南から)



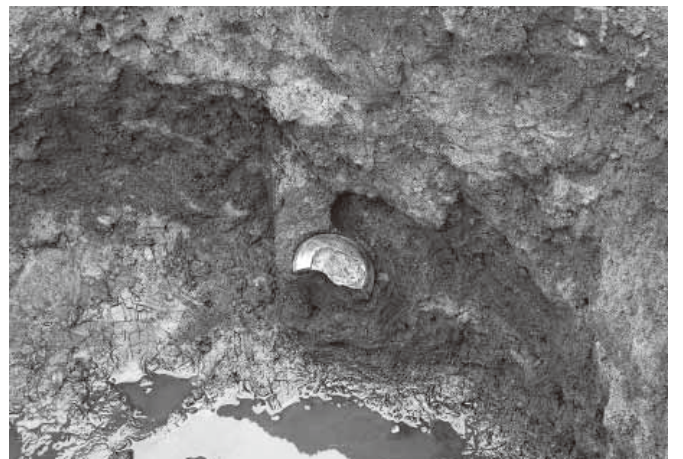
5 調査地の溝群と周辺の地割り



1 1号・2号・3号・5号・6号井戸の全景



2 1号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)



3 1号井戸遺物(3)の出土状況(南から)



4 1号井戸の全景(掘り下げ段階、南から)



5 1号井戸の全景(断ち割り、南から)



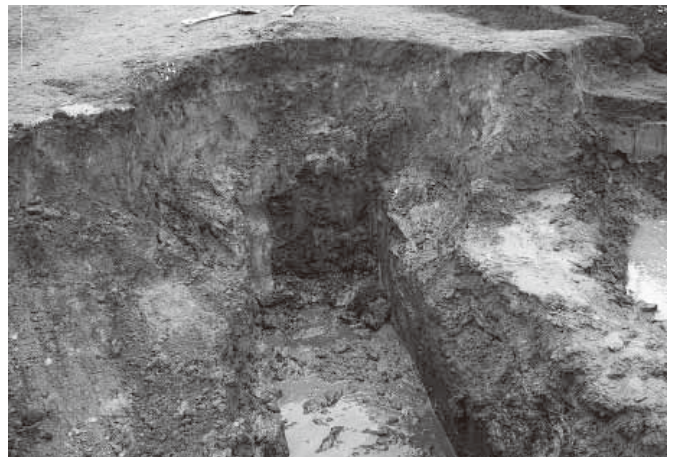
1 2号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)



2 2号井戸の全景(掘り下げ段階、西から)



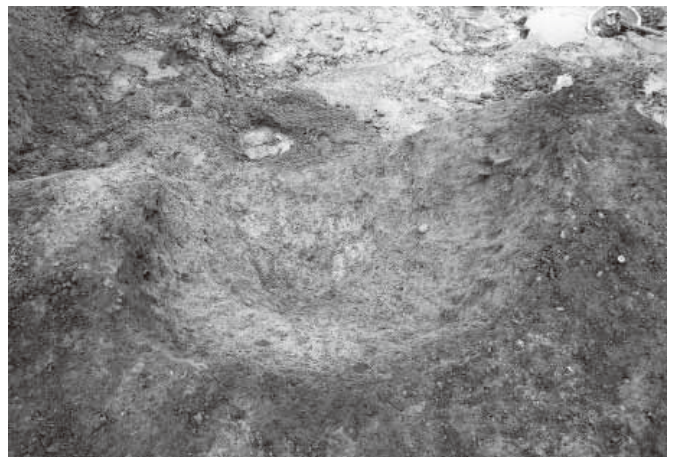
3 2号井戸の測量風景(断ち割り、南から)



4 2号井戸の全景(断ち割り、南から)



5 3号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)



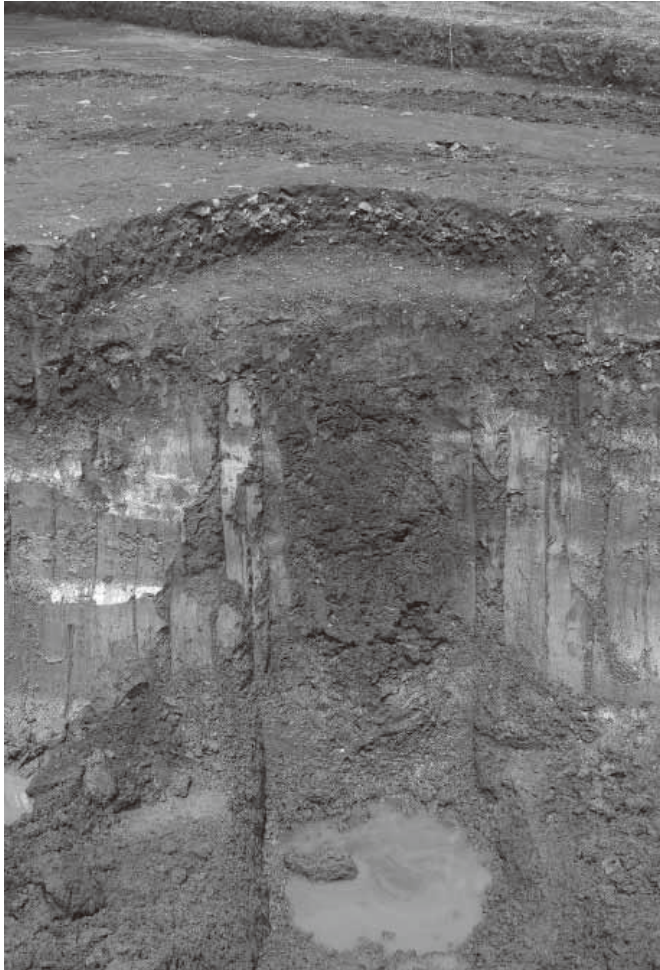
6 3号井戸の全景(断ち割り、北から)



7 4号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)



8 4号井戸の全景(掘り下げ段階、南から)



1 4号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)



2 4号井戸の全景(断ち割り、南から)



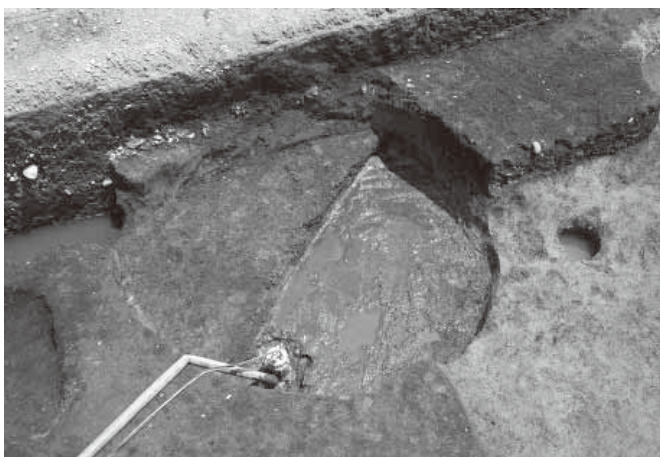
3 5号井戸の地層断面(掘り下げ段階、南から)



4 5号井戸の全景(断ち割り、南から)



5 6号井戸の地層断面(掘り下げ段階、西から)



6 6号井戸の全景(掘り下げ段階、西から)



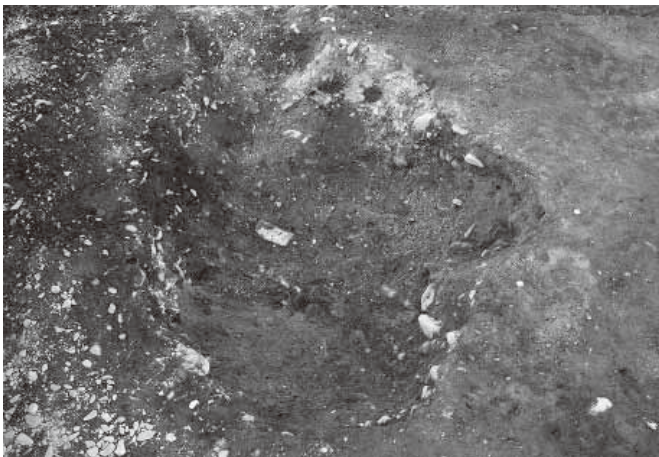
7 6号井戸の全景(断ち割り、南から)



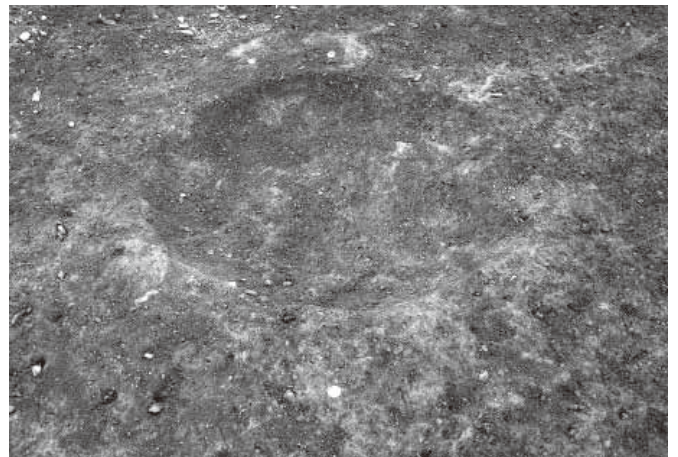
1 1号土坑の全景(東から)



2 2号土坑の全景(南から)



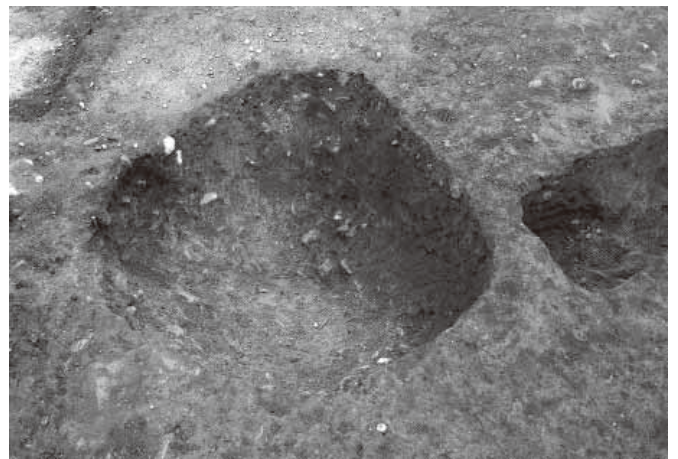
3 3号土坑の全景(南から)



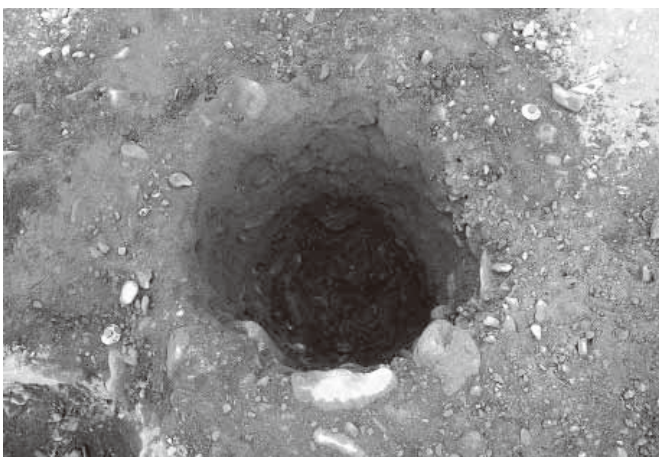
4 4号土坑の全景(東から)



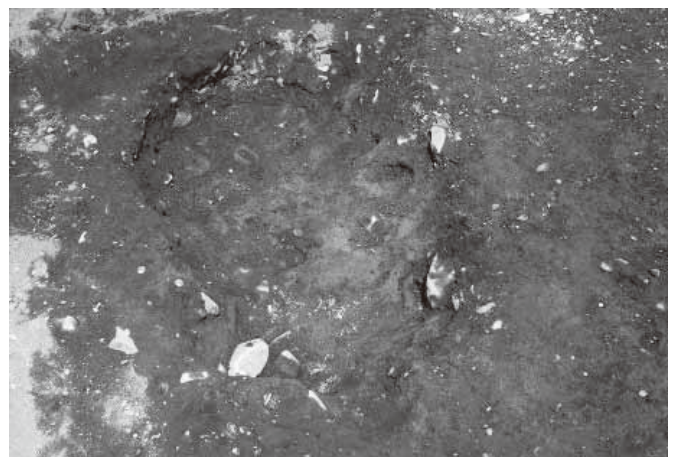
5 5号土坑の全景(南から)



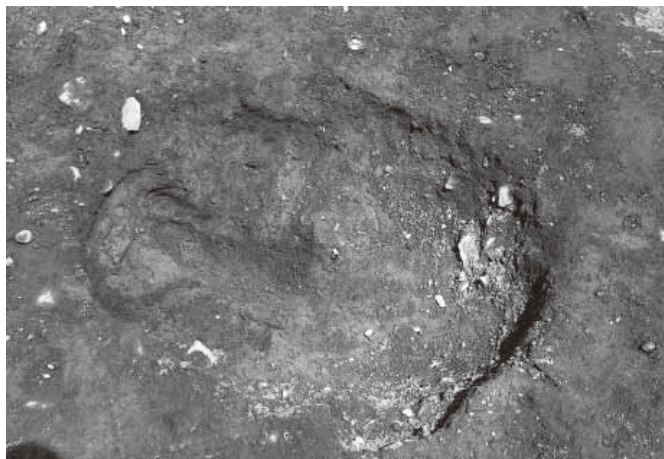
6 6号土坑の全景(西から)



7 7号土坑の全景(南から)



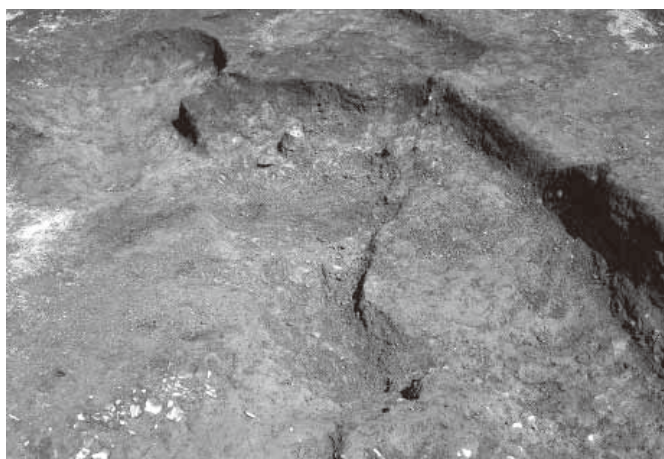
8 9号土坑の全景(南西から)



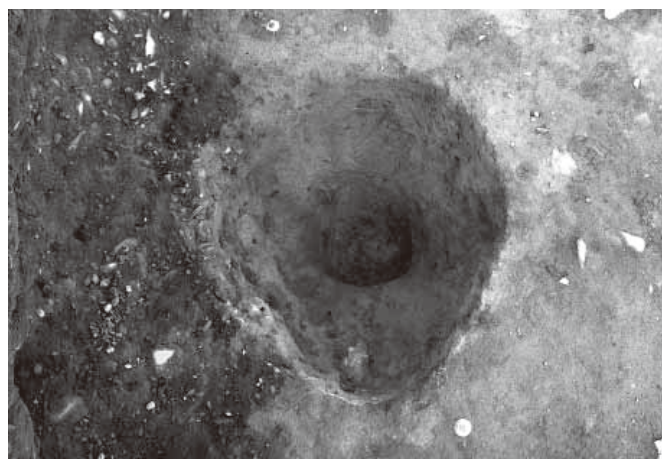
1 10号土坑の全景(南西から)



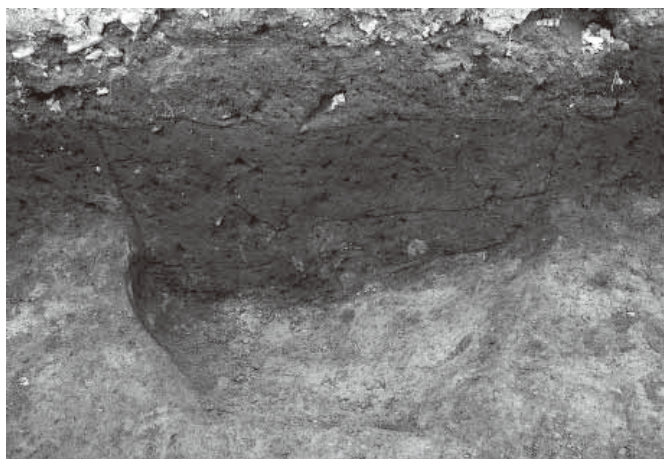
2 11号土坑の全景(北西から)



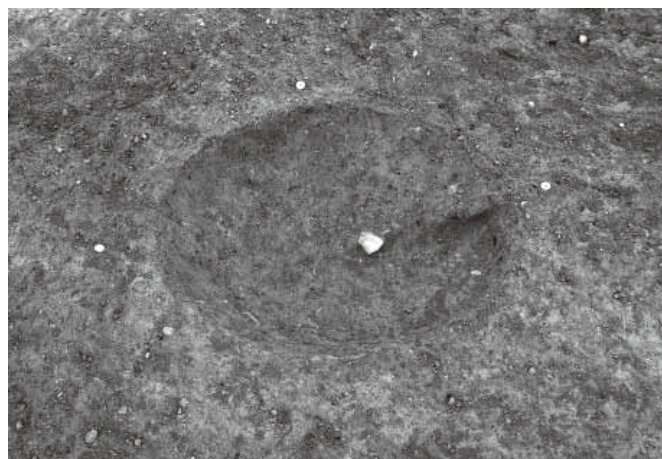
3 12号土坑の全景(北西から)



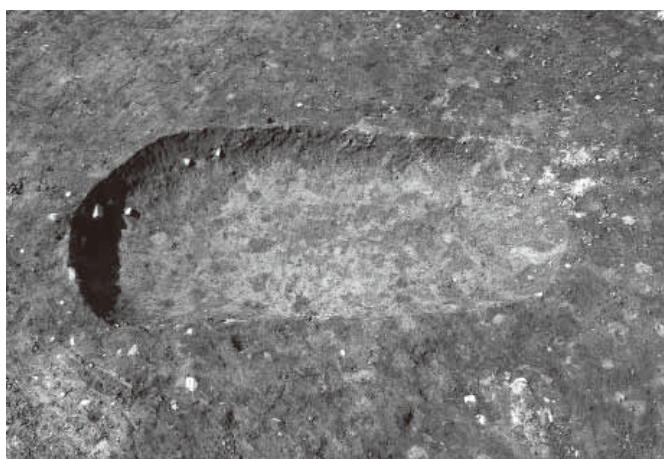
4 13号土坑の全景(南から)



5 14号土坑の全景(東から)



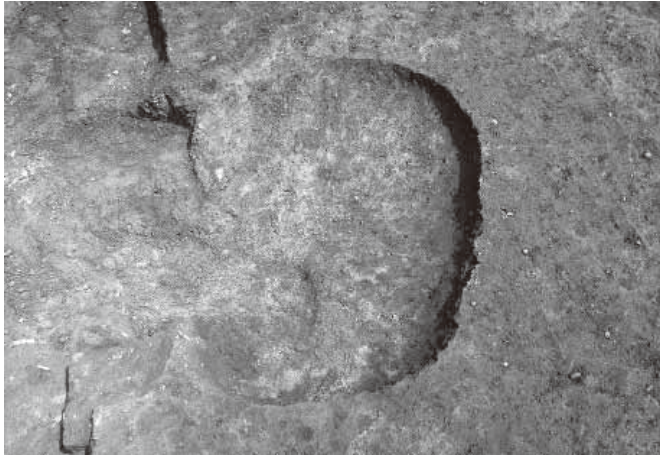
6 21号土坑の全景(北西から)



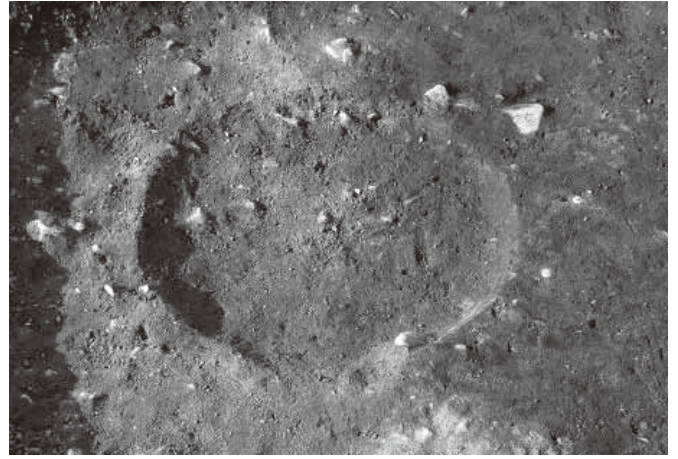
7 39号土坑の全景(南から)



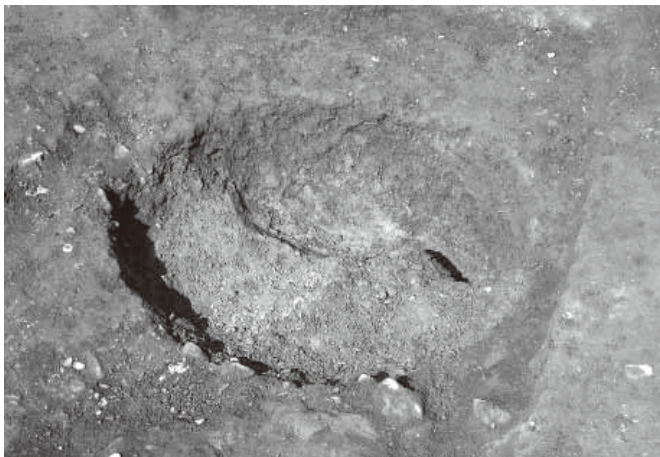
8 43号土坑の全景(西から)



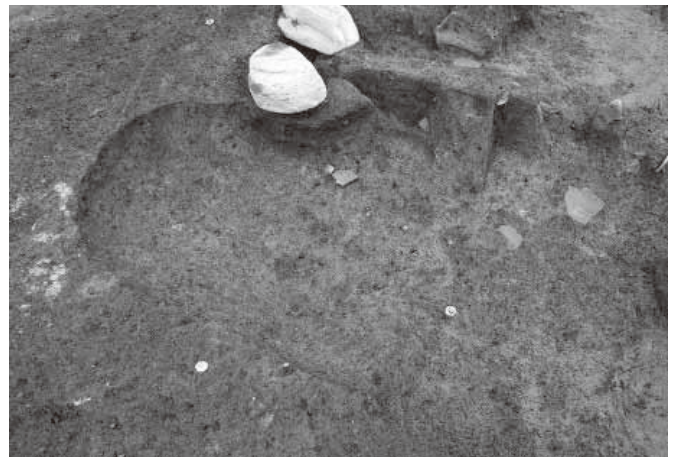
1 45号土坑の全景(北から)



2 46号土坑の全景(南から)



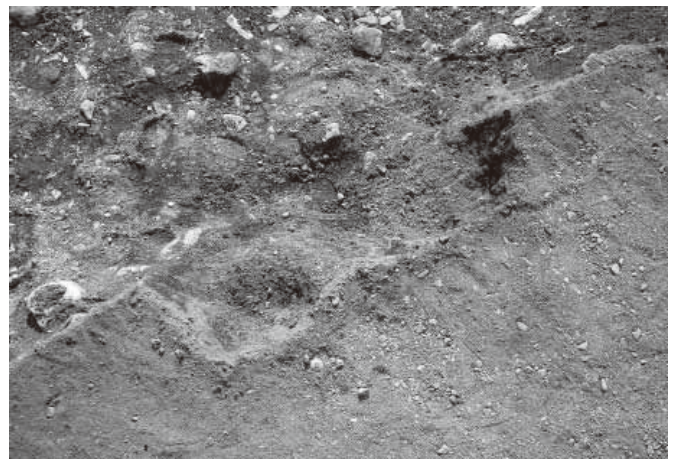
3 47号土坑の全景(西から)



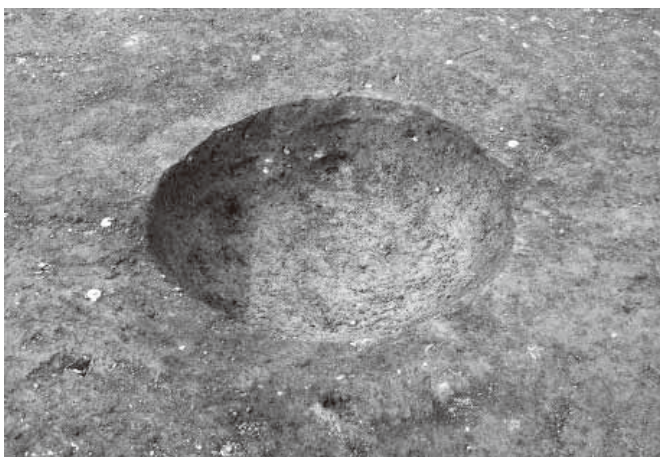
4 50号土坑の全景(北東から)



5 53号土坑の全景(南から)



6 54号土坑の全景(北東から)



7 60号土坑の全景(南から)



8 72号ピットの遺物出土状況(北東から)

1号竪穴住居



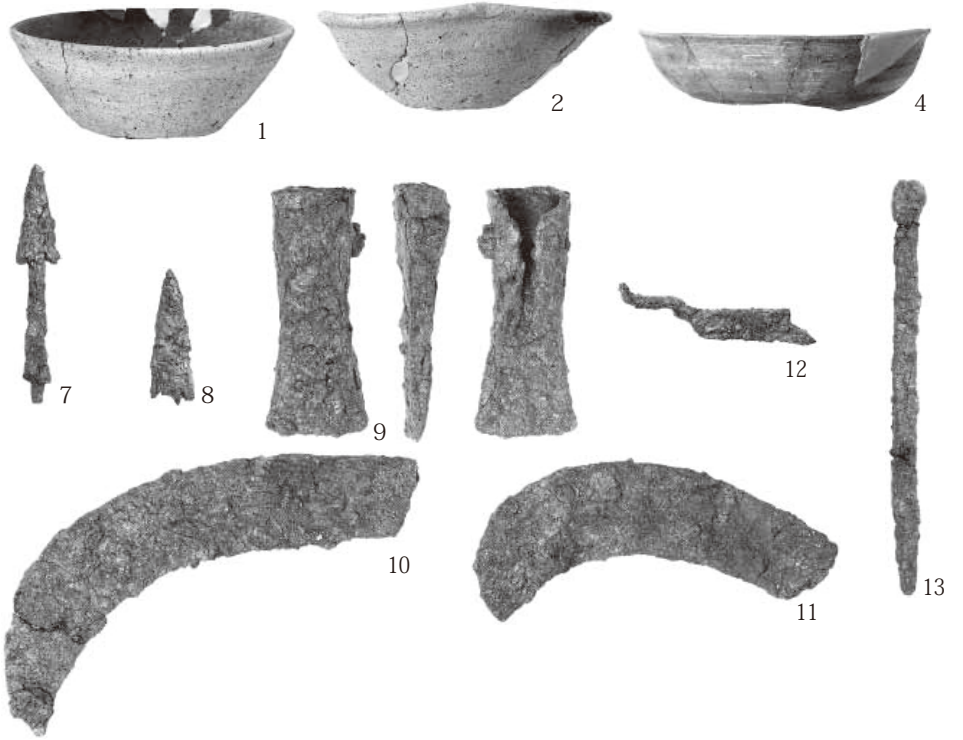
2号竪穴住居



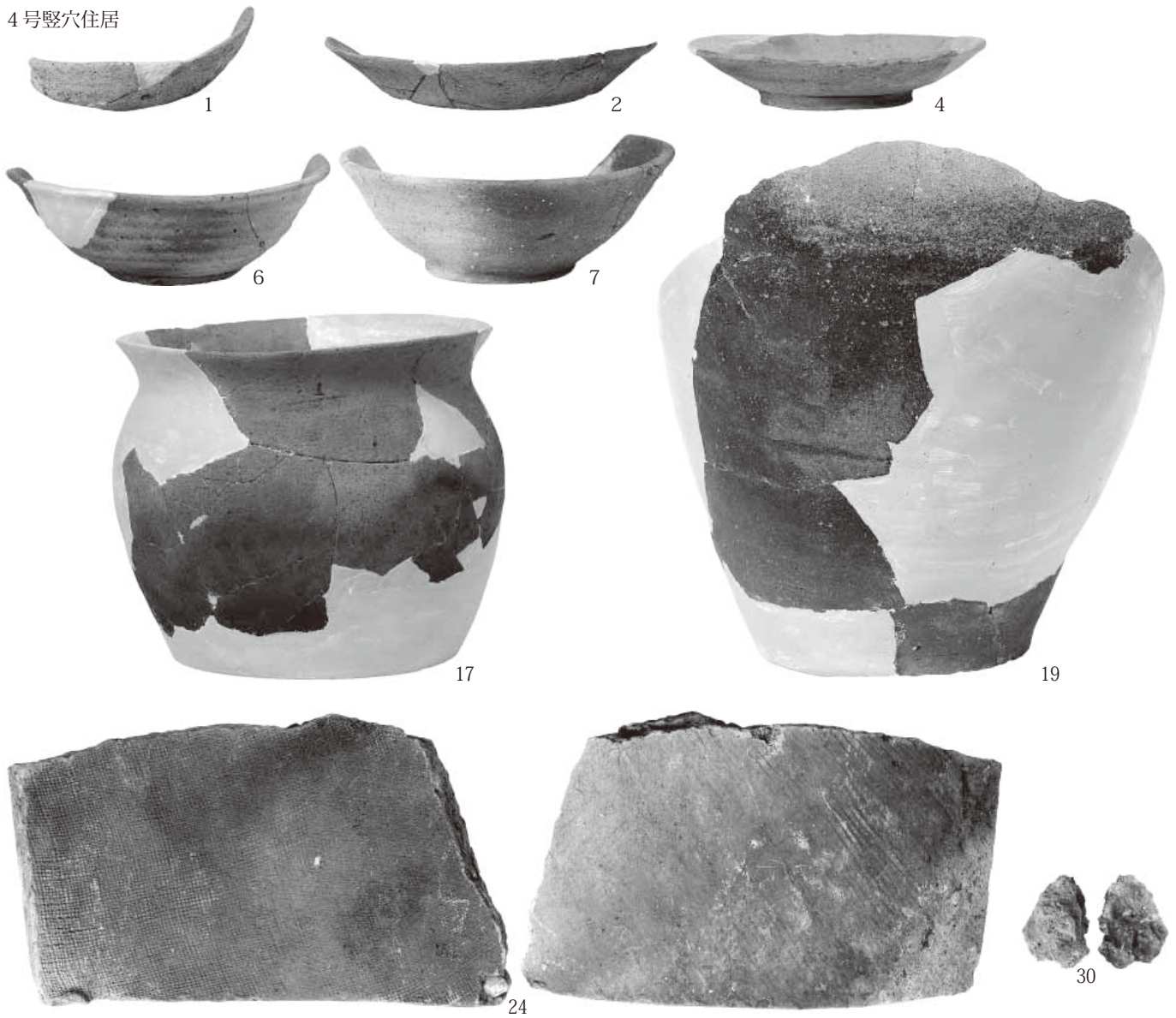
2号竪穴住居



3号竪穴住居



4号竪穴住居



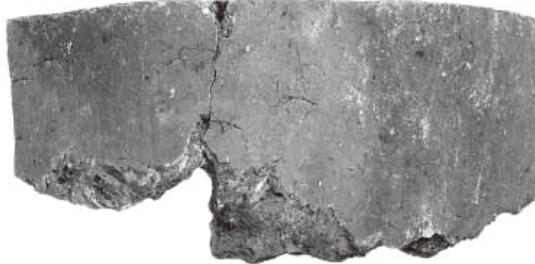
4号竪穴住居



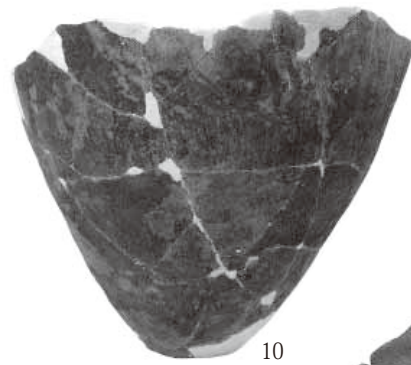
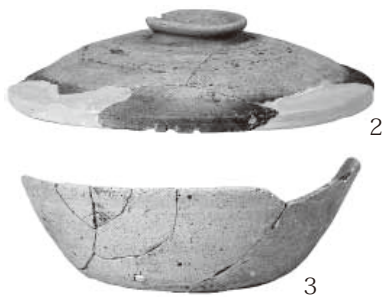
18号竪穴住居



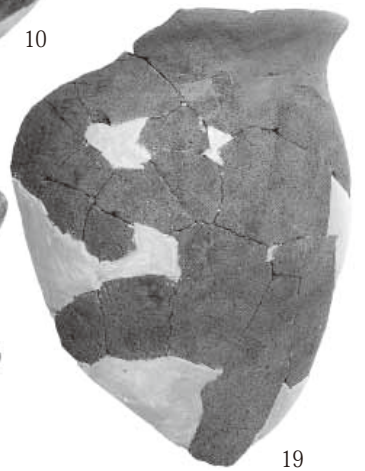
5号竪穴住居



6号竪穴住居



7号竪穴住居



7号竪穴住居

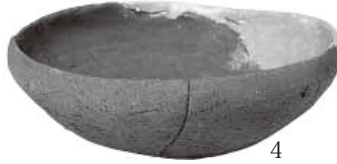


15

8号竪穴住居



2



4



9

9号竪穴住居



2



5



6



7



8



9

11号竪穴住居



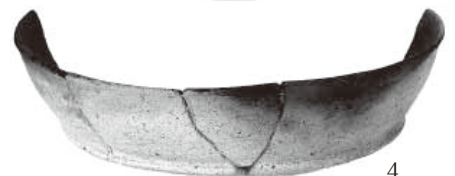
1



2



3



4

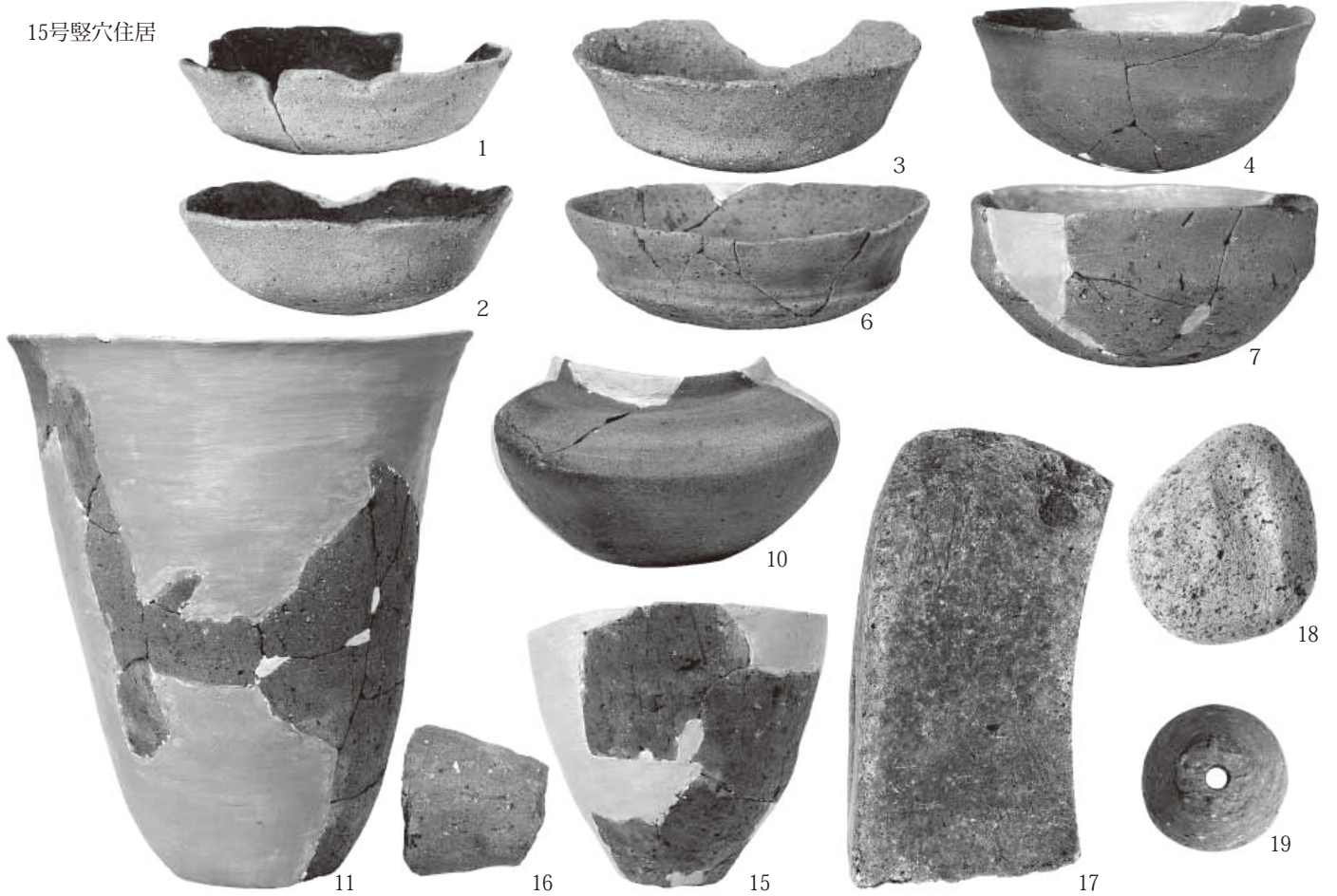
11号竪穴住居



12号竪穴住居



15号竪穴住居



16号竪穴住居



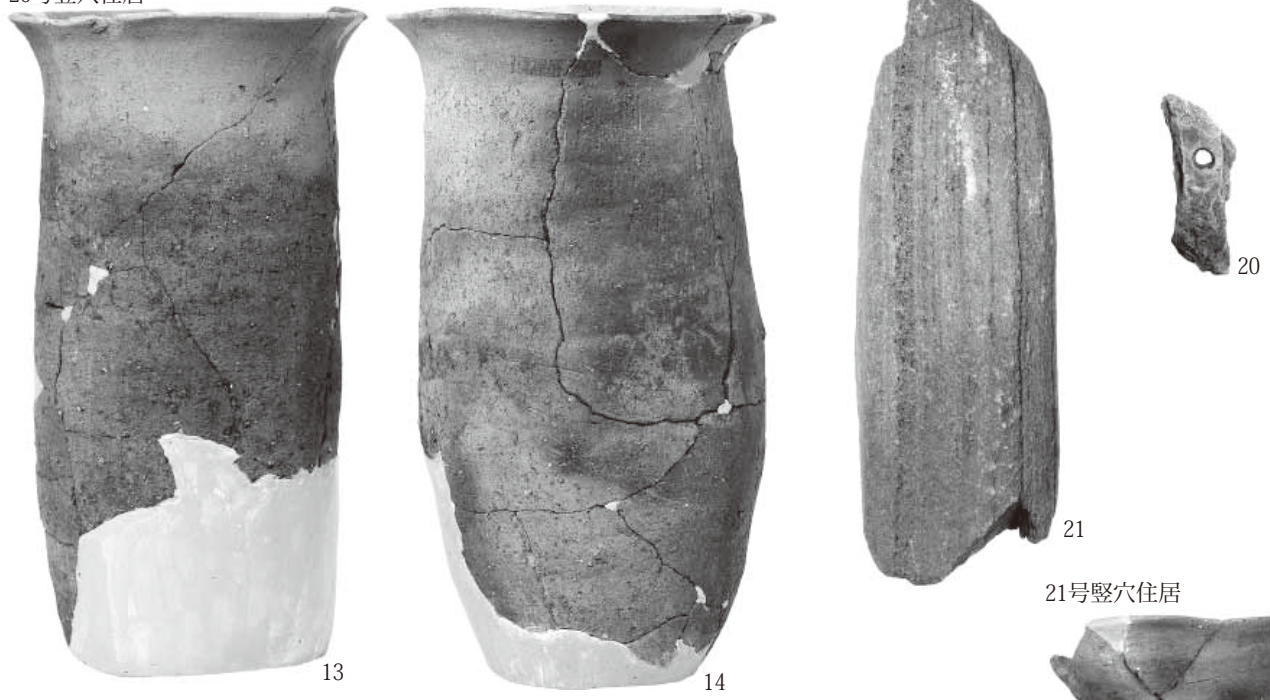
17号竪穴住居



20号竪穴住居



20号竪穴住居



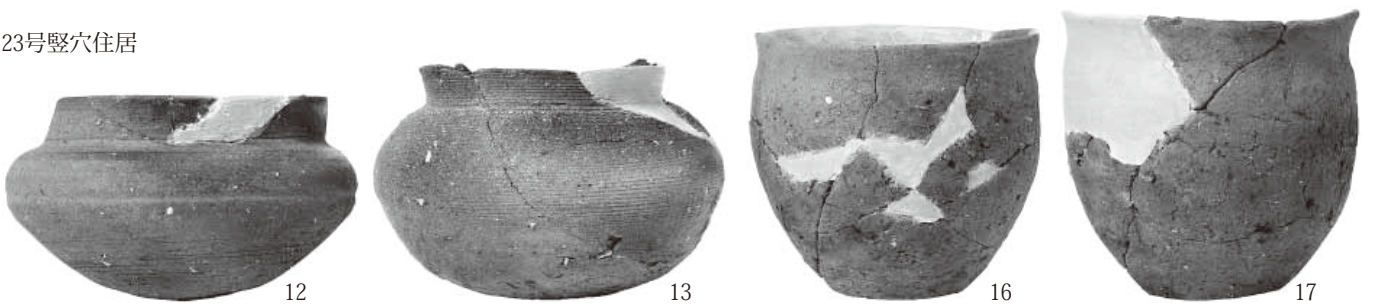
21号竪穴住居



22号竪穴住居



23号竪穴住居



23号竪穴住居



24号竪穴住居



25号竪穴住居



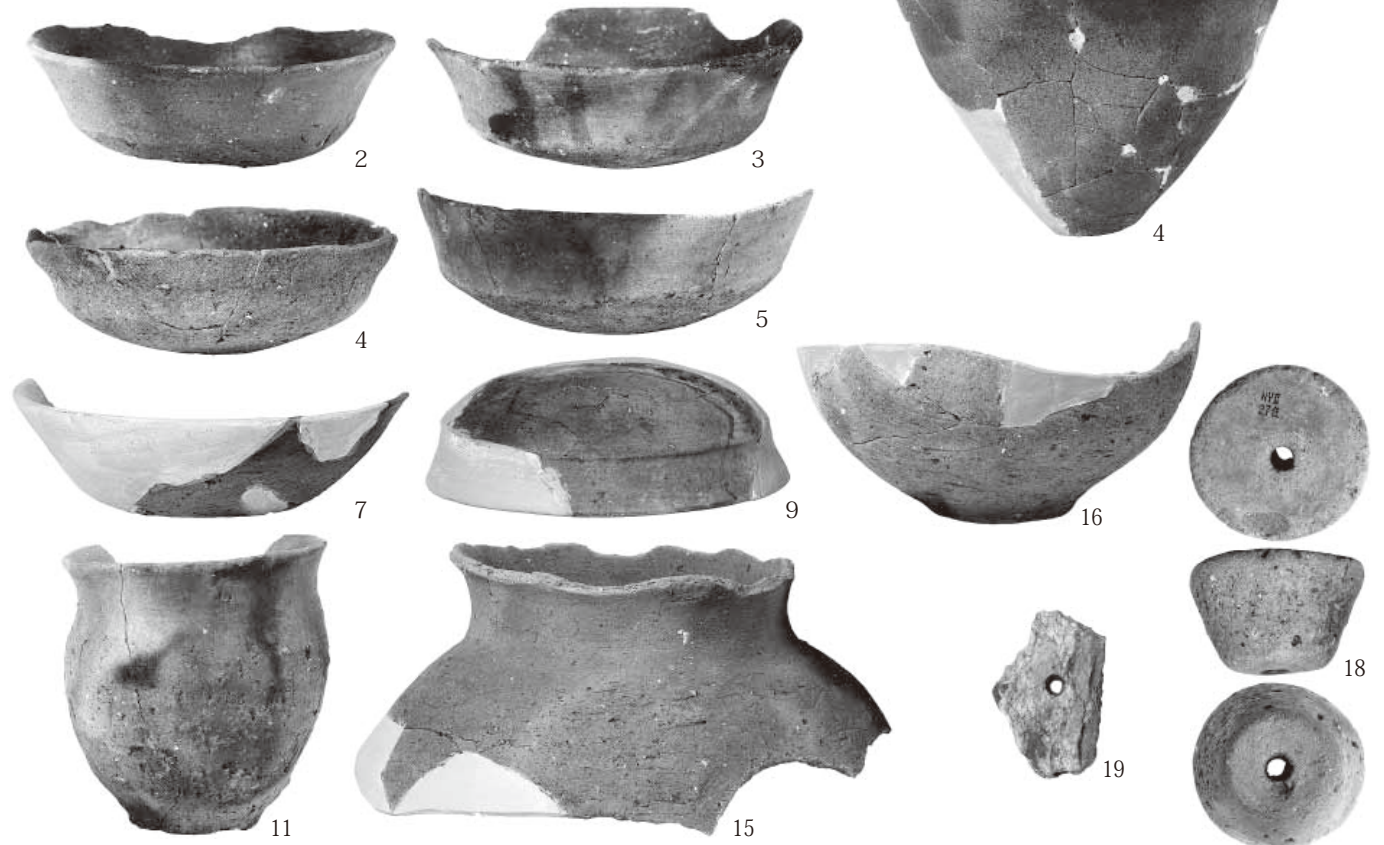
25号竪穴住居



26号竪穴住居



27号竪穴住居



28号竪穴住居



28号竪穴住居



28号竪穴住居



30号竪穴住居



30号竪穴住居



10



14



11



15

31号竪穴住居



1



2



3



4



5



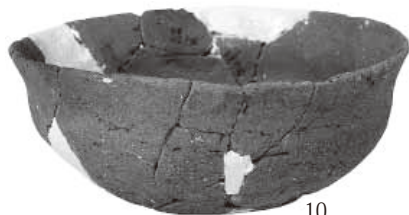
6



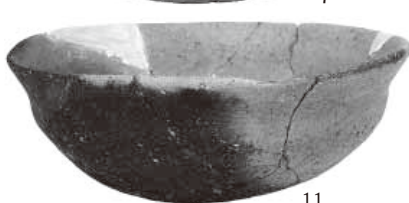
7



9



10



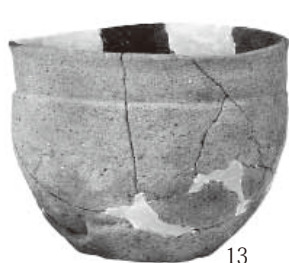
11



16



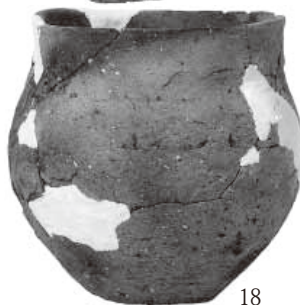
12



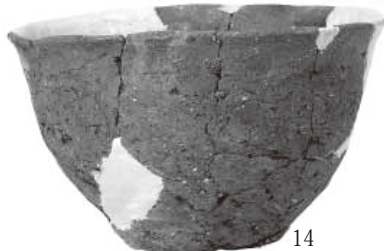
13



15



18



14



17

32号竪穴住居



64号竪穴住居



33号竪穴住居



34号竪穴住居



37号竪穴住居



38号竪穴住居



38号竪穴住居



12



14



13

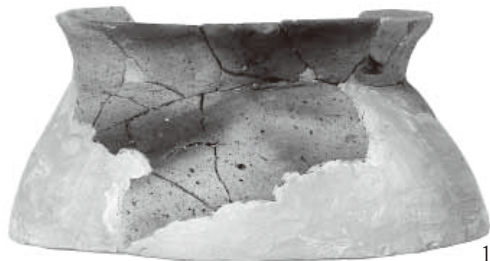


18



15

39号竪穴住居



19

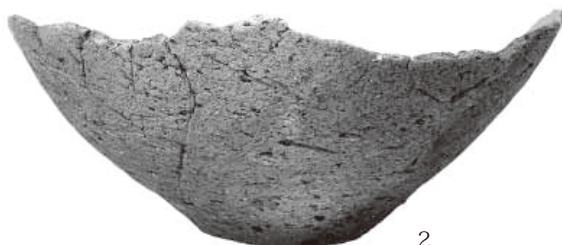


4

40号竪穴住居



1



2

41号竪穴住居



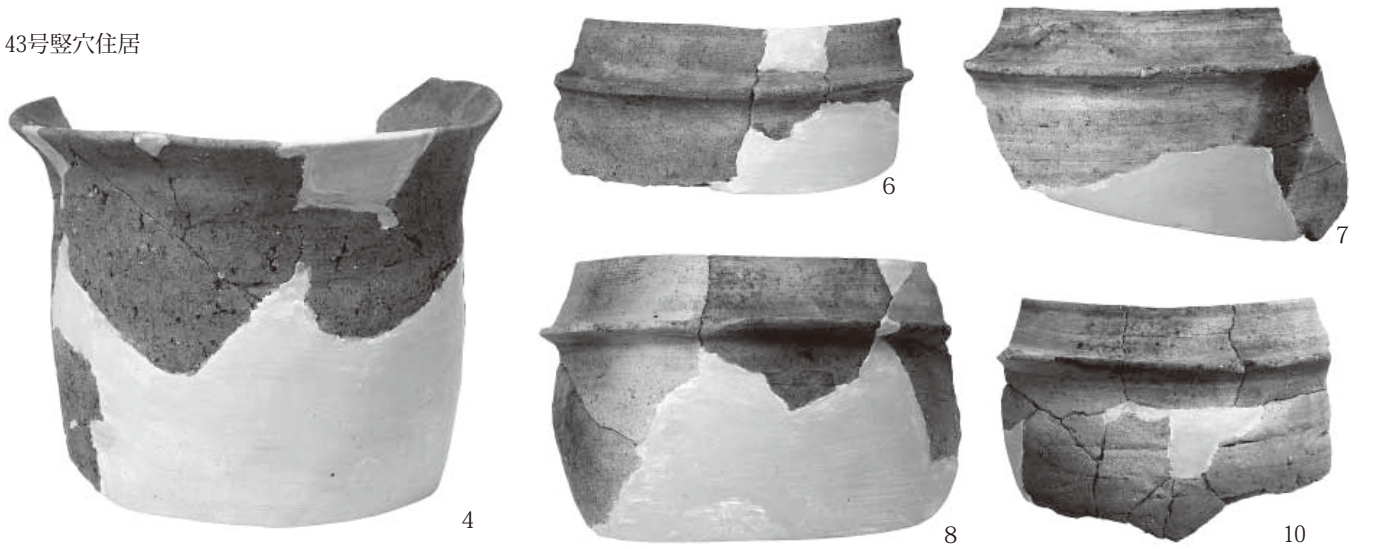
41号竪穴住居



42号竪穴住居



43号竪穴住居



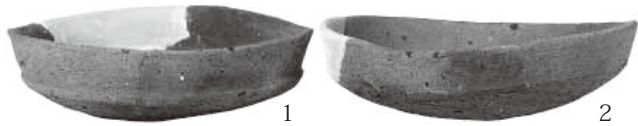
44号竪穴住居



44号竪穴住居



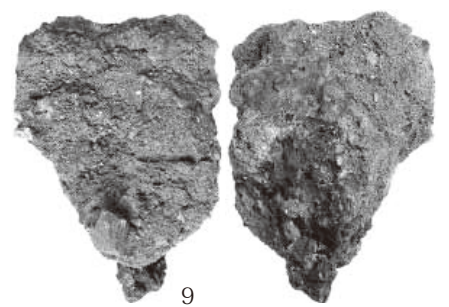
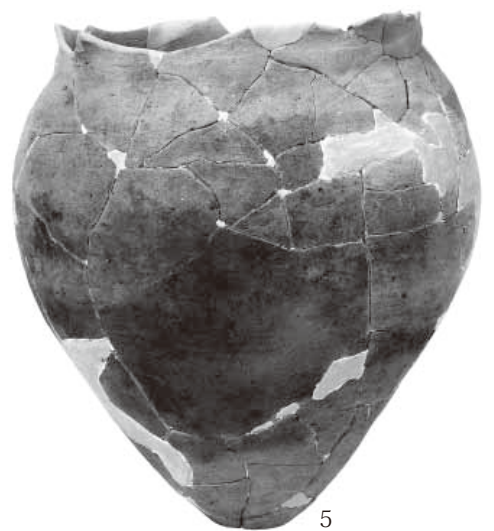
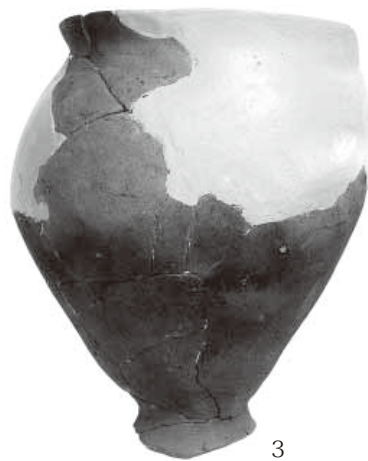
45号竪穴住居



55号竪穴住居



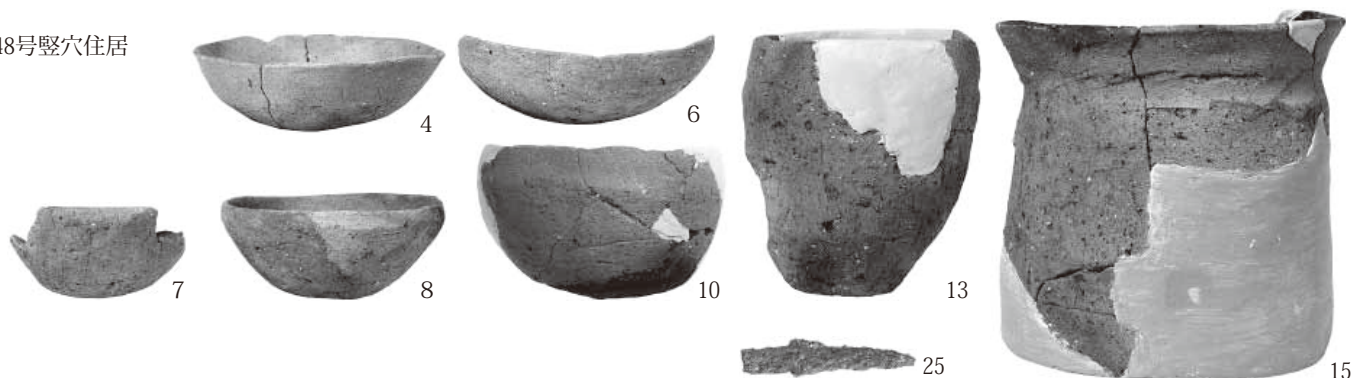
67号竪穴住居



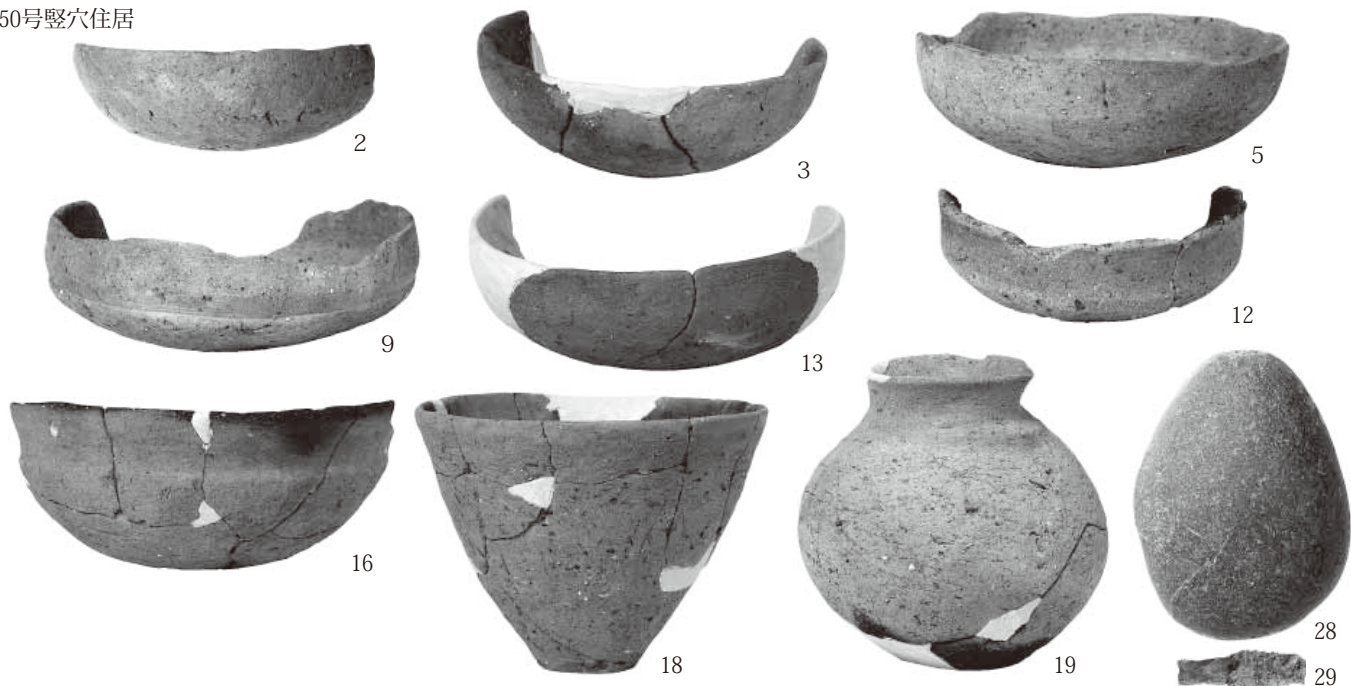
46号竪穴住居



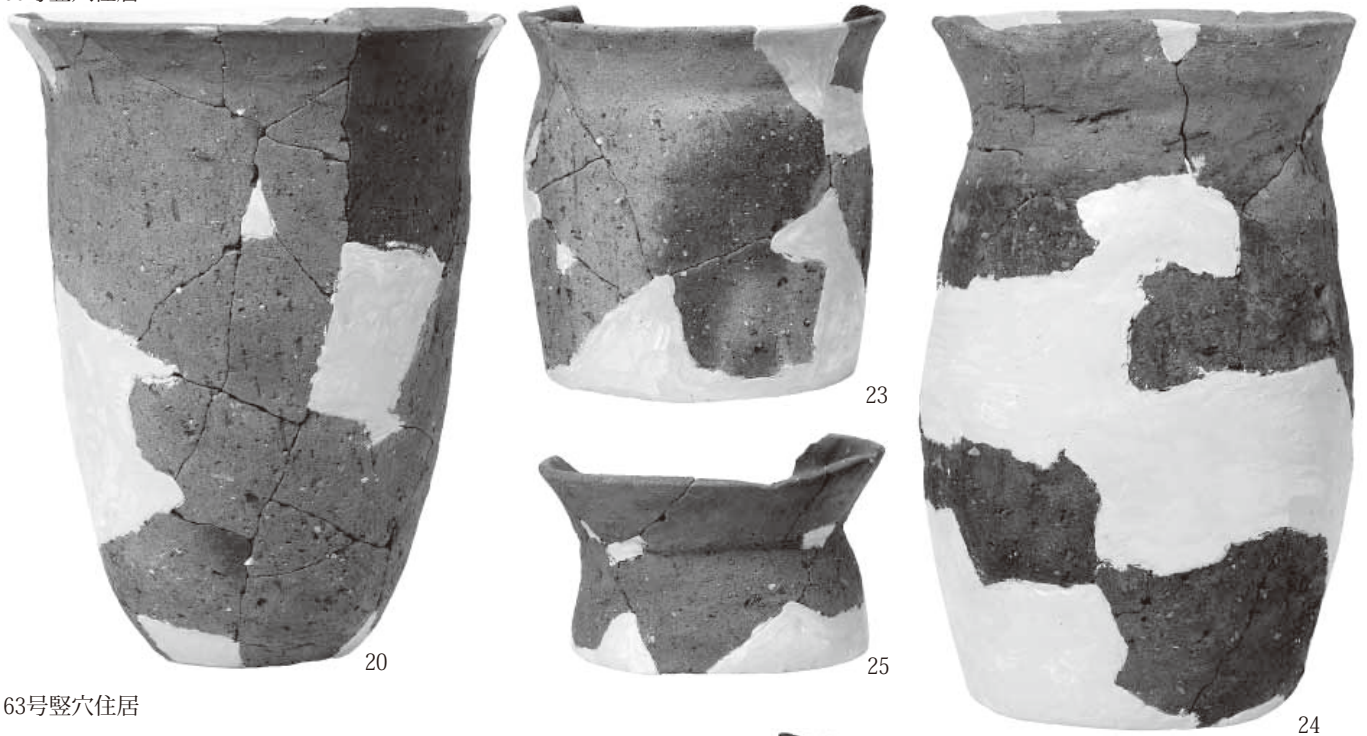
48号竪穴住居



50号竪穴住居



50号竪穴住居



63号竪穴住居



65号竪穴住居



65号竪穴住居



9



10



11



12



13



14



18



21



19



22



25



27



24



26



23

52号竪穴住居



2



3

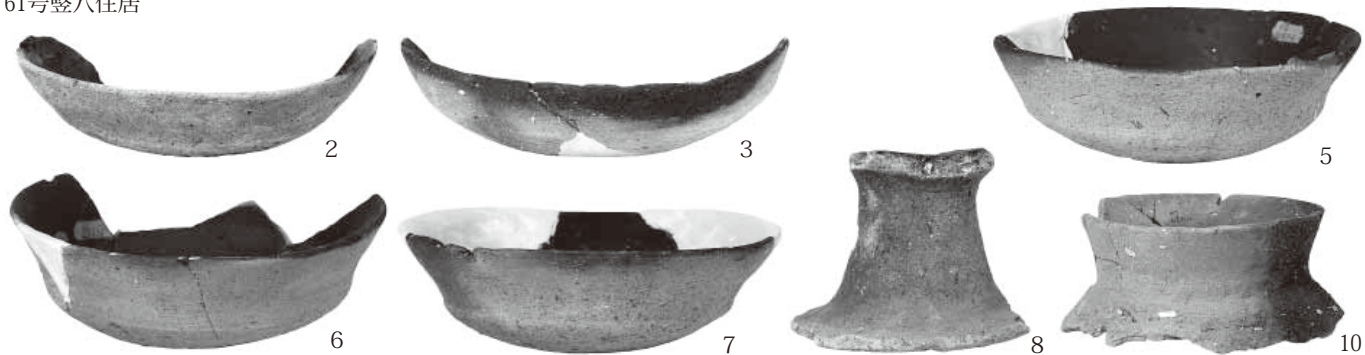
54号竪穴住居



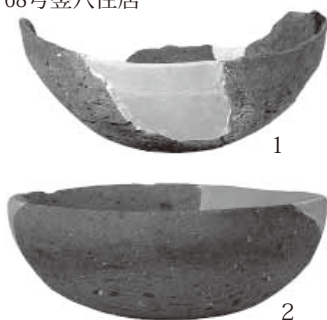
59号竪穴住居



61号竪穴住居



68号竪穴住居



66号竪穴住居



66号竪穴住居



1号溝



4号溝



5号溝



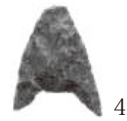
1号井戸



7号溝



4号井戸



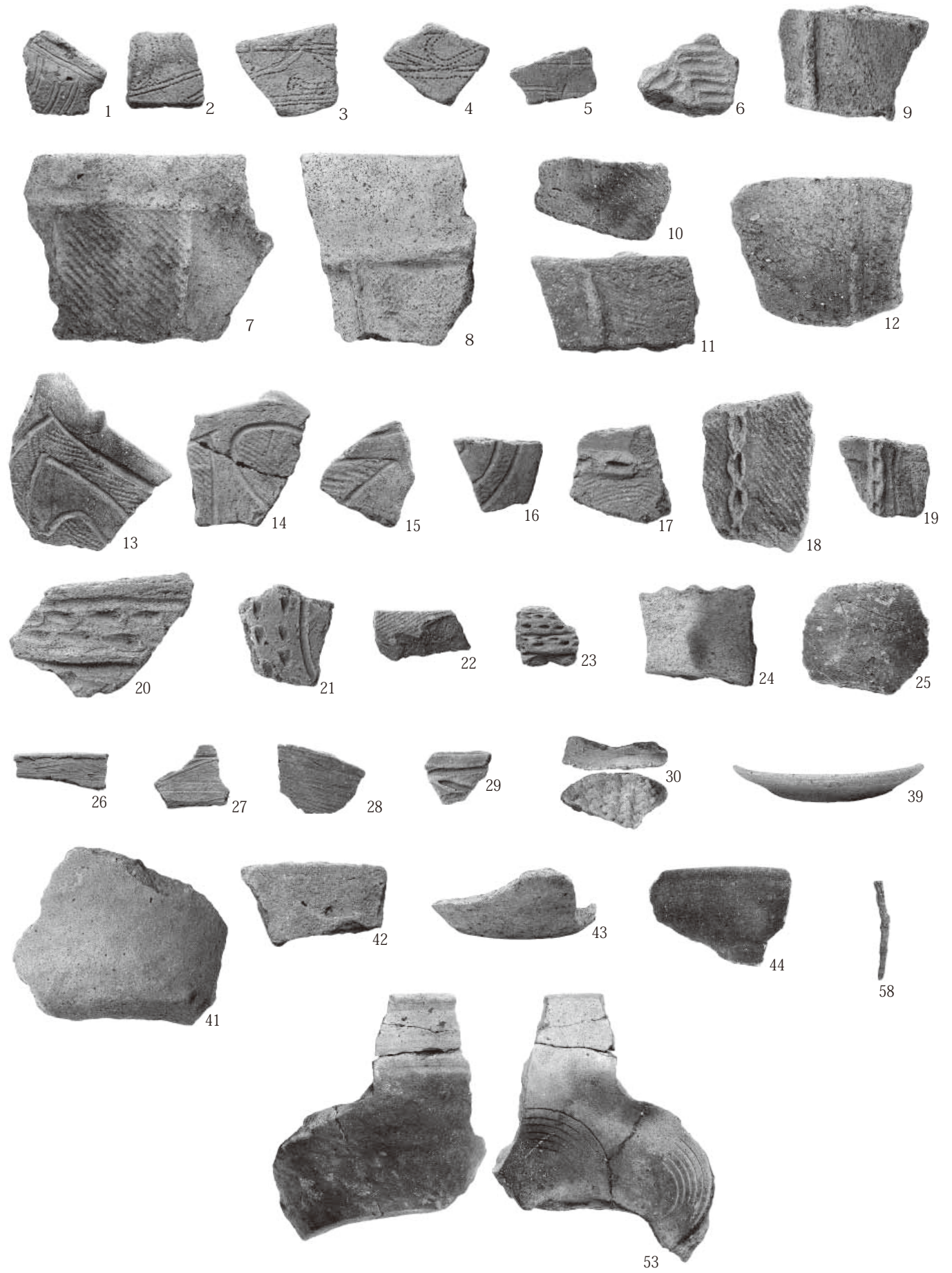
5号井戸



72号ピット



遺構外



報告書抄録

書名ふりがな	やばみつはしに
書名	矢場三ツ橋Ⅱ遺跡
副書名	主要地方道前橋長瀬線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	540
編著者名	矢口裕之/神谷佳明
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20120316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	やばみつはしに
遺跡名	矢場三ツ橋Ⅱ遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんふじおかしやば
遺跡所在地	群馬県藤岡市矢場
市町村コード	10209
遺跡番号	包091
北緯(日本測地系)	361300
東経(日本測地系)	1390316
北緯(世界測地系)	361311
東経(世界測地系)	1390304
調査期間	20100401-20100831
調査面積	4,330.00
調査原因	道路建設
種別	集落
主な時代	古墳/飛鳥/奈良/平安/中世
遺跡概要	集落-古墳-竪穴住居-土器/集落-飛鳥-竪穴住居-土器/集落-奈良-竪穴住居-土器/集落-平安-竪穴住居-土器+鉄製品/その他-中近世-掘立柱建物+井戸+土坑+溝-土器+陶磁器
特記事項	古墳時代後期から平安時代の集落、竪穴住居67棟。13世紀から16世紀の遺構群。
要約	本報告書は前橋長瀬線道路建設に伴い、平成22年度に発掘調査を行った矢場三ツ橋Ⅱ遺跡の報告書である。遺跡からは6世紀中葉から10世紀前半にかけての集落や13世紀から16世紀の掘立柱建物、溝、井戸などの遺構群が検出され、中国陶磁器の白磁碗や搬入系土器の皿が出土した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第540集

矢場三ツ橋Ⅱ遺跡

主要地方道前橋長澗線地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24(2012)年3月9日 印刷

平成24(2012)年3月16日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社



付図1 矢場三ツ橋II遺跡の遺構全体図



付図2 矢場三ツ橋II遺跡の中世遺構及び古墳時代～中世の土坑・ピット遺構全体図